２０１２年　愛と光へ

余田史子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
２０１２年　愛と光へ

【Ｎコード】
Ｎ７６６０Ｊ

【作者名】
余田史子

【あらすじ】
ある日、駅の階段から落ちて頭をうち、幽体離脱をしたひかり。
ひかりの魂は宇宙船に行き、そこで光の人型に会う。
そこでひかりは、地球に来たミッションを思い出すのだが・・・。

２０１２年　地球を愛と光の星へと次元上昇させるのが、ひかりのミッション。そのミッションを宇宙船で会った光の人型である魂の片割れとともに、遂行する物語です。どんなミッションがあり、どうそれをクリアーしていくのか、お楽しみに＾＾

第1部　プロローグ

突然……目の前が真っ暗になった。

あれ…？私、もしかして死ぬ…？

ふわ…。体がものすごく軽くなった。いや、軽いなんてもんじゃない。そして下を見ると、私が横たわっていた。私がぐったりと、倒れていたのだ…。

あれ…？もしかして、私、死んだの？！

「大丈夫ですか？！」
「誰か、救急車！」

人が私の周りに、集まってきていた。

ああ、そうだ。私、転落したんだ。駅の階段の上から下まで、ごろごろと…。上まで登りきったとき、誰かに肩を掴まれたような気がした。え？って振り返っても誰もいなくて、バランスを崩し、そのまま落下した。

死んじゃったの…？あの体に戻れば、生き返るのかな？

必死で下に行こうとした。でも、私はどんどん意志とは逆に浮上している。

私を取り囲んでいる人から、少し離れたところに、じっと空に浮かんでいる私の方を見て、たたずんでいる男の人が見えた。黒のジ

ヤケット。黒のサングラス。黒の帽子、黒のパンツ。黒ずくめの男の人。でも、私、その人のことを知ってる気がする…。

その人は、どんどん浮上していく私のことをじっと見ていた。

人が、ありんこに見えるくらいまで上昇すると、いきなり、すごいスピードで私は、どこかに吸い込まれるように上昇していった。あまりの速さで、周りも見えない。そのうちすごい光に包まれて、目がくらむほどだ。

光、光、光…。すべてが、光…。無限の光……。

私の意識も消えていった。消えて光と同化する。自分が無限の光になっていた。

気持ちが良かった。これほどまでの開放感を味わえるなんて…。人間の体の中に閉じこもっていたときが、ものすごく窮屈に感じられた。

そのうちに光が薄れてきて、自分という意識が戻ってきた。それから、まず自分の体を見た。体はない。だけど、人型の光になっている。

周りを見た。あたり1面が、クリスタルのようにきらきらと光っている。そして前方には、大きなスクリーンのようなものがあり、地球が映し出されていた。

「ここ、どこ?」

口を開いたと同時に、声がした。

「宇宙船の中」
「え？」
横を見ると、さっきまでいなかったと思うけど、私と同じ、光の人型が立っていた。
「だ、誰？」
「僕は、君だよ」
「え？」
何がなんだか、さっぱり？？？
「私、死んだんじゃないの？天国に行くんじゃないの？」
「天国…？ないよ。そんなものは存在しない。それに、君は死んでもいない」
「え？」
「ここに、戻ってきてるだけ…。魂がね」
「戻ってきてる…？」
「思い出せない？地球に行く前、君はここにいた」
「……」
そういえば、見覚えがある。なんでだろう…。ここを知っていると、どっかで思っている。
光の人型が近づいてきた。そして、私にそっと触れた。そのとたん、エネルギーが流れ込んできた。あったかい懐かしい、優しいエネルギー。そのエネルギーと、私のエネルギーが混ざり合い同化した。
「あれ？」
さっき言ってた、僕は君だよっていうのが、わかった気がした。
もう、どこからが私で、どこからが相手なのかわからない。

それから、一気に記憶がよみがえった。

「私…、あなたとここにいて、そして、あの地球に一緒に旅立った」
「思い出した？」
光の人型は、いつの間にか私から離れていた。

「でも、一緒に行ったのに、なんであなたはここにいるの？」
「思い出したからさ。君より一足先に」
「何を？」
「使命を」
「使命…？」

「思い出せない？」
「地球に行った使命？」
「そう…」
「……」
使命…。ミッション…。地球を救う。愛と光で包んで、地球を愛の星へと導くこと。

「そう、思い出した？」
「うん。地球でいったら１万年も前に、ここから旅立った」
「うん」
「２０１２年に向けてのミッションを果たすために」
「そうだよ。そうして、２０１２年は、もう３年後だ」

「…でも、どうやって、愛で包んだらいいの？」
「それは、君はもう知ってる」
「…知ってる？」

「僕は、今地球にいる。体から魂だけ抜けて、ここに来ることが出来る。君も、もう出来るようになる。だけど、ミッションは地球で人間として行う。じゃないと意味が無い。なぜなら、地球の外側からは、地球に関与してはならないことになっているからだ。だから、君と地球に行き、人間に生まれ変わった。何をこれから僕らがするかも、僕らのＤＮＡに刻まれている。宇宙はすべて完璧に動いている。だから、僕らは人間として、ただ、宇宙の流れに任せ、やってくることをしていったらいいんだ」

「やってくること？」
「それがミッション」
「…？」
「自分から何かしようとしなくても、ちゃんとやってくるんだよ。今回だって、いきなりここに来るように自分からはしむけてないでしょう？」

「も、もちろん。だって、誰かに肩を掴まれて…」
「あ、それは僕だ。その場にいた。いや、今もその場にいる」
「ええ？！あなたがやったの？私、死んでたかもしれないじゃない。そしたら人殺しに…」
「死なないよ。ここに来ることが目的。そうとうなショックがないと、君の魂は君の体から離れられなかった」
「……」

「君はまた、体に戻る。大丈夫。かすり傷一つもしていない。ちゃんと落ちるとき、僕のエネルギーを送って守っていた。ちょっと頭痛と、たんこぶはできてるかもしれないけど」
「その場にいる…？じゃ、目が覚めたら、人間のあなたと会える？」
「そうだね。僕のことが僕だとわかればね」
「わからないの？私…。あなたは私をわかっているのに？！」

「僕が君を知ったのも、数ヶ月前のことだ」
「…それで、なんで私だってわかったの？」
「この宇宙船のスクリーンで見たんだ。それから君に何度かコンタクトをした」
「コンタクト？」

「うん。夢の中で。というか、君が寝ているときに。普段は、君の思考が邪魔をして、なかなか君とコンタクトが取れない。寝ているときが1番、邪魔されないですむ」
「…寝てるとき？」
「きっと、君は夢で僕に会ってるよ」

「ええ？！じゃ、覚えてないだけ？」
「どうかな。覚えているかも…。君は僕のことをもう、知ってるよ」
「し、知ってる人ってこと？」

「さあ、もう、君の体に戻る時だ」
「ま、待って！私の回りの誰かなの？」
いきなり私はまた、光の中にいた。そうして、ものすごいスピードで、今度は落ちていった。

そして、ムギュ！いきなり、窮屈になり目が覚めた。
「いった～～！」
頭がずきずきした。

「目を覚ましたぞ！」
周りにいる人が、いっせいに声をあげた。
「大丈夫？怪我はない？」
心配そうに、知らないおじさんが声をかけてきた。私はどうにか

起き上がり、
「はい」
と、答えた。

知らないおばさんが、私の鞄を拾って持ってきてくれた。
そして、そのうち周りの他の人は、徐々に離れていき、私が立ち上がって、
「もう、大丈夫です」
と言うと、みんなその場を立ち去っていった。

「あ！」
私は、この場に、あの人がいるってことを思い出した。あわてて周りを見回したけど、もうわからなかった。

誰なんだろう…。そして、私のミッションって、これからどういうことが起きるんだろう？

体は本当に、かすり傷一つできていなかった。でも、頭には大きなたんこぶができていて、私はずきずきする頭で、家に帰った。

そして…。その日から、いろんなことが起き出した。でも、まずは、それまでの私のことを説明した方が、いいかもしれない。

ミッションゼロ　苦しみを知る

私には夫がいた。２５歳のときに４歳上の彼と、半年付き合ってすぐに結婚をした。社内恋愛だった。ちょうど、友達が何人か結婚し始めて、結婚式に行くたび羨ましくなっていたときだ。

彼の方も、３０歳になるまでにと、焦っていたみたいだった。親からも早くに結婚しろと言われ、子どもも早くに作れと、口うるさく言われていたようだ。

私と結婚し、彼も、彼のご両親も安心した。そうして、子どもができるのをみんなが心待ちにした。

私は結婚して、２年子どもができないでいた。彼の親から、一回病院で調べてもらったらどうだと言われ、調べに行くことになった。結果は不妊症。卵子の数が少ないと言われた。

そして、不妊症の治療を受けて１年後、ようやく私は妊娠した。夫も夫のご両親も、もちろん私の両親も、大喜びだった。

だけど８ヶ月で破水…。ものすごい痛みの中病院に駆けつけたときには、遅かった。赤ちゃんはもう、息をしていなかった。

夫は落胆した。夫のご両親から私は、

「体を大事にしなかったせいだ。」

とののしられた。

そうだ。私はぎりぎりまで、働いていた。でも、まさかそんなことが起きるなんて思ってもみなかった。

私の両親は、夫や夫のご両親に謝っていた。

なんで…？私が、1番ショックを受けているのに…。

退院するときにも、夫は来てくれなかったし、それから夫は、家に飲んで帰るか、帰らない日も増えていった。

そしていきなり、それから半年して、離婚してくれと言われた。

夫は不倫をしていた。その相手に赤ちゃんができたと言うのだ。夫のご両親も、頭をさげて、離婚して欲しいと言ってきた。どうしても、孫が欲しいと言う。夫の代で、血を絶やしたくない。跡取りが欲しいと言われた。

釈然としなかった。いくら、赤ちゃんを流産したとはいえ、なんで、不倫相手と夫が結婚して、私が離婚しなくちゃならないのか…。

私の両親は、しかたのないことだと言った。それだけだった。

私は、実家に戻った。

実家には、兄がいる。まだ、結婚もしていない。兄も、私の両親も冷たかった。

親は、

「バツ一になるなんてみっともない。親戚やご近所になんて言われ

るか…。」

と言い、兄は私に、何も言ってくれなかった。

私の、悲しみや、苦しみをわかってくれる人なんていなかった。

私は、毎日のようにおなかの子に話しかけていた。生まれてくることを楽しみにして、産着を揃えたり、絵本を読んで聞かせたり…。それなのに、消えてしまったんだ。大事な私の赤ちゃん…。

ショックで、私は立ち直ることができなかった。

会社は、流産してすぐに辞めた。離婚して家に帰ってからは、３ヶ月間家の中にこもった。

バツ一の友人の薫が、そんな私を心配して私をどんどん外に連れ出してくれた。そして、薫の家に遊びに行ったり、外食をしに行くまで私は、回復していった。

薫が、飲み会にも誘ってくれた。その場には何人かの独身男性も来ていた。そのうちの二人と、私と薫が仲良くなり、また、４人で飲みに行ったりもした。薫はそのうちの一人と、お付き合いを始めた。

もう一人の人は、たまに私を誘ってくれたが、私はまだ男の人と付き合う気がしなくて、二人だけで会うのは避けていた。

あ…。ふと、今思った。もしかして、あの宇宙船で会った人って、あの人?彼の名前は、緒方文也。もしかして、そうかな?会って確かめてみるかな…。

その頃、学生時代の独身の友人の美里が、久しぶりに会おうと連絡をくれた。美里に会うと、お付き合いをしている人もいるんだけど、まだまだ遊ぶんだ、と言った。

「ね。ひかりも一緒に楽しもうよ」

ひかりというのは、私の名前。

「でも美里、私たちもう２９だよ。美里は結婚考えないの？」

「あと１年は遊ぶの。あ、彼氏はキープしておいて…。海外旅行にも行くし、コンサートや舞台も行くし。そうだ！私が好きな舞台が、６月にあるんだよ。毎年してるのに、去年はなかったんだ。だから、今年楽しみで…。ね、一緒に行かない？笑いあり、涙ありの面白い舞台だよ」

「舞台？」

興味がなかった。でも、美里の話の続きを聞いた。

「３月にチケットは発売予定。私の好きな役者さんが出るんだ。あ、主人公は、まだ、１９歳の若手。初めての舞台だって。イケメンだよ～～～。それも楽しみ」

「誰？」

「天宮昴。知ってる？今、ドラマにも出てて、活躍してる…。」

「…知らない。」

「知らないの？テレビ観ないの？」

「うん…。あまり。ここのところ、テレビは観てなかったんだ。本は読んでたけど」

「そうなの？ま、いいや。行こうよ。反戦のお芝居なんだよ」

「ふうん。いいよ」

「じゃ、チケット発売したら、取るからね」

「うん」

あまり興味はなかったけど、でも、いろんなものを見たり、いろんなところに行っていたら、気も晴れて早くに立ち直れるかもしれないと、私はその時思っていた。

それから、時々美里とは、ランチをしたり映画を観に行ったりした。温泉旅行にも行った。そのたびに、自分が好きな俳優の話や、舞台の話を聞かされた。

美里が好きなのは、今２４歳になる、イケメン俳優の結城悟。今度の舞台にも出るようだ。

「年下じゃん。あまり興味ないな～～」

「年下って言っても、５歳下なだけだし・・・。やっぱり、かっこいいのよね～～。今の彼は３０になるけど、３０ってもうお腹出てくるし、おっさんだと思うわ」

「ええ?そう?私は絶対に年上がいいな」

「あ、飲み会で会った、緒方さん、年上だったっけ?」

「うん。３２歳だったかな」

「どうなの?進展あったの?」

「ないよ」

「なんで?」

「なんか、いまいち会う気がしなくて」

「もったいないな～。とりあえずキープしておけばいいのに」

そんな話をしながら、温泉に入っていた。

部屋に戻り、テレビをつけると、

「あ!ほら、ちょうど天宮昴が出てるドラマ、やってるよ!」

と美里が教えてくれた。

１９歳でしょ?興味ない。１０歳も下なんてって思いながらそのドラマを観た。だけど私は、すごく綺麗な顔立ちに、どんどん惹かれていった。まだ、１９歳とは思えないほどの色気もあるし、時々、かわいらしい表情もする。

「ね？かっこいいでしょ？」

私がテレビを観て、くぎづけになってるのを知り、美里がそう言った。

「う…うん」

「年下もありよ。なんだか自分の年齢があがっていくと、年下の男の子が可愛く見えていくものなのよね」

「え？」

「もう、おばさん化してるかな～」

そう言って、美里は笑って、

「でも、いいよね。こういう楽しみも。６月にやる舞台、楽しみだよね」

と言った。

「…うん」

「でも、その前に、映画に昴くん出るよ。４月から公開の映画。観にいけば？」

「うん。行こうかな…」

「舞台挨拶も行けば？」

「いい、いい…」

まさか、そんなおっかけみたいなことはしたくない。みっともないし。私が１０代ならまだしも…。

旅行から帰り、天宮昴の出ている映画や、ドラマのＤＶＤを借りまくって観た。そんなに何本もまだ、映画にもドラマにも出ていないし、主役になったこともない。でも、いろんな役をこなしている。

映画にも、私一人で観に行った。大きなスクリーンに映し出された彼の顔、すんごい綺麗だった。

「は～～～」

やばいことにはまった。まさか１０歳も年下に…。ま、いいか。今は、彼氏が欲しいとも思わないし、芸能人にうつつをぬかしている方が楽だって私は思っていた。

家にいても、親とも兄ともほとんど話をしなかった。

そろそろ、社会復帰をしようと、アルバイトを始めた。会社に勤める気はしなかったので、本屋でアルバイトをすることにした。

そこは大きな本屋で、首都圏にあり、たくさんのサラリーマンやＯＬが毎日来ていた。時々、芸能人がサイン会も開いていて、その手伝いもさせられた。

美里の好きな俳優の結城悟も写真集を出し、うちの店でサイン会をした。もちろん美里は駆けつけた。

私は、並んだ人たちに整理券を配ったり、並べたり、けっこう大変だった。だけど、結城悟を間近で見ることが出来た。さすが、今１番売れてる俳優、オーラが違う…。なんか、いるだけで光輝いて見えた。

サイン会が終わり、私が片づけをしていると、美里がやってきて、

「悟と握手できた～～。嬉しい、もう、手洗えない！」

とさわいだ。

「え～～？手は洗ってよ。きたないじゃん」

「何言ってんの？ひかりだって、昴くんと握手できたら、手洗えなくなるから！」

「う、う～～ん。そうかも」

「昴くんも去年、写真集出して、ここでサイン会したのよね。また、写真集出したらいいのに」

「え？！ここで？いつ？」

「知らないの？去年の１０月頃。写真集持ってないの？」

「持ってるって言うか、買ったけど…。え～～～！！！」

なんだ～～。もう少し、早くにファンになってて、ここでバイトをしていたら…。

とはいえ、去年の１０月といえば、まだ、離婚してショックで家に閉じこもっていた頃だ。そりゃ、無理な話だな…。

ああ…。また、写真集を出してくれるのを、待つしかないか～～。

すっかりはまりにはまった私は、６月の舞台を楽しみにしていた。その頃、薫から電話が来て、４人で飲みに行くことになった。

その帰り、緒方さんが家まで送ってくれた。そして、

「もし、良かったら、お付き合いしてもらえないかな。実は、離婚して間もないっていう話を薫さんから聞いてたから、今まで、誘うのも控えていたんだけど…」

といきなり、言い出した。

え…？そうだったの？

私は驚いていた。もう、この人とは、なんの接点もなくなり、そのまま、会うこともなくなるだろうって思っていたから。

「あの…。私、まだ…」

「じゃ、ご飯を食べに行ったりするくらいは、どうかな？」

「…はい」

乗り気はまったくしなかったが、はいと言ってしまった。それからは、週に一回連絡が来て、バイトの帰りに会い、ご飯を食べた。でも、本当にご飯を食べるだけだった。

結婚も男の人も、なんだか怖かった。また、去っていかれたらとか、また、苦しい思いをしないといけないのかとか、それが怖くて、付き合う気にはやっぱりなれなかった。

どうやって、今度連絡があったら断ろうか…。そんなことを考えるんだけど、また誘われると、ご飯を食べに行っていた。

美里に言うと、いやになったらすぐ別れたらいいんだからって言われた。そりゃ、そうなんだけど…。

はあ…。やっぱり、芸能人を見て、わくわくドキドキしているほうが楽だ。

私は雑誌に昴くんが載っていると、買ってきては眺めていた。１０代の子が読むような雑誌で、買うのが恥ずかしいけど、でも、なるべく自分のことを知ってる人がいないような、そんな本屋に行き、買っていた。自分がバイトをしている店では、とてもじゃないけどさすがに買えない。

そして、家に帰って、わくわくしながら、昴くんの記事を読む…。

携帯の待ち受けにもしていたし、パソコンのトップの画面も昴くんだった。そんなに毎日、昴くんのことを見ていたからか、何日も立て続けに夢に出てきて、朝起きるたびに私は、

「やった〜〜！」

って喜んだ。ああ、情けない。私は中坊か…。

夢は、いつも昴くんが、ただこっちを見て笑ってるだけ。そして、すって姿を消していた。

そんな日々を送っていた。離婚のショックもかなり消え、赤ちゃんのことも忘れかけ、美里にランチを誘われ、電車に乗ろうと駅の階段を登った時だ。転落したのは…。

離婚のことで、私は夫だった彼を憎んだ。不倫相手も憎んだ。どうせなら、その子も死産になればいいのになんて、すごく怖いことも思った。

赤ちゃん連れの人を見ると、むしょうに腹が立った。羨ましいのを通り越し、妬みそうにもなった。夫の親も恨んだ。自分の家族も恨んだ。

1番傷ついているのは、私なのに！

世界全部を恨んで、3ヶ月、引きこもった。

でも、同じように離婚をして、自分の子供を相手に取られ、ずっと泣いて暮らしていた薫が、救い出してくれた。

薫が離婚して、私、そういえば、ちょくちょく薫の家にいってたっけ。私になかなか子どもが出来なくて、精神的に追い詰められてた時だった。薫の辛さがなんだかわかる気がして、一緒に泣いたこともあったっけ。

「あれで、私は救われた。だから、今度は私がひかりを、助ける番だって思ったんだよ」

って、薫は言った。そして、

「お付き合いもすることにした。ずっと、ふさぎこんでもしかたがないし、子どものことを思っててもしかたがない。また、新しい彼と、そのうち家族をもてたらって思ってるんだ。」

とも…。

強いな…、怖くないのかな…？

私は…、私は……？まだ、やっぱり、新しい恋をするのすら怖い…。

今は、夢の中で、昴くんに会って、喜んでるだけでいいよ。数ヶ月前まで、世界全部を恨んでいたときに比べたら、私は毎日、楽しく過ごせてるんだもん。薫や美里や、昴くんのおかげでね…。やっぱり、友情、友達が1番かな…。

そして、昴くんはなんだろう？不思議な人だ。画面や写真でしか観たことがないけど、彼の笑顔は私を癒してくれる。すごくあったかくて可愛くて、優しい笑顔だ。

きっと、私以外にも彼の笑顔で、救われた人はたくさんいるんじゃないだろうか…。

ズキズキする頭のまま、家に帰り、私は美里に電話をして、今日はランチができそうもないことを告げた。階段を転げ落ちた話をしたら、絶対、病院で診てもらいなと念を押された。

私は、すぐ近くにある病院に行き、診てもらったが、どこにも異常

はなかった。ただ、大きなたんこぶができていただけで…。あの光の彼が言っていたとおりだ。

そして、いったい彼は、誰なんだろうか…。

気になりながら、その日、たんこぶを冷やして、ずっと私は横になっていた。

1週間してようやく、たんこぶは消えた。

夢の中で、時々あの光の人型が現れて、私の頭に光を当てていた。手当てをしてくれていたのだろうか？

そのたびに、どんどん過去生の記憶がよみがえった。

あるときは、自分がアトランティスにいたときの記憶。あるときは、古代エジプト。こんなことを書くと、さぞ、すごいことを過去していたのかと思うかもしれないが、全然たいしたことのない人生ばかりを送っていた。

確か、すごいミッションを携えて、この地球に来たはずだ。でも、アトランティス時代も、なんでもない普通の人だったし、古代エジプトの時代も、王に仕える給仕係か何かって感じで、ぱっとしない人生を送っているようだったし。

また、あるときは、江戸時代の農民だった。ひもじくて、百姓一揆っていうのに参加していた様子だし。また、あるときは、戦争に行き、敵に打たれて死んだ。またあるときは、飢えで死に、またあるときは、病気で幼い子供の頃に、死んでいた。すごいことをするどころか、かなり悲惨な人生ばかりだ。

あるときは、兵隊で、たくさんの人を殺していたし、あるときは、マフィアになり、銃撃戦で死んでいた。また、あるときは、宗教戦争に巻き込まれ、あるときは、孤児になり一生涯、寂しい人生を送っていた。

なんだ…。幸せな人生っていうのは、なかったのか…？

徐々に、何かがつながっていくのがわかった。そう、大勢を殺した次の生では、殺されていた。子どもをさっさと捨てるような酷い親の人生の次の生では、捨てられていた。富豪になって、贅沢三昧した次の生では、ひもじい貧しい生活を。いろんな人を騙し、お金をふんだくって、暮らしていた次の生では、飢えで幼いうちに死んでいた。

そんなたくさんの人生を思い出し、私は、因果応報、輪廻転生…。そんな言葉が頭を、ぐるぐるかけめぐった。

そして、ある日、私は昼間だというのに夢を見た。どうも、夢というより、幽体離脱をしていたようだ。

体はぐったりしてて、その上を私は飛んでいた。あの、階段から落ちたときと同じ状態だ。ただ、自分の部屋でぼ〜〜ってしていたら、私は体から離れたようだ。

光の彼のことを思い出し、その彼のエネルギーに集中した。と、その瞬間、ビュンって光が飛んできた。

「え？」

驚いた。彼が光になり、横にいた。

「呼んだ？」

「今、体から離れてるの？」

「君もでしょ？」

「大丈夫なの？私は家で、寝てるような状態だからいいけど」

「僕は車の中で、寝てる状態だから平気」

「車？運転してる最中？」

「なわけ、ないでしょ。後部座席で寝てるよ」

だ、だよね。ああ、びっくりした。

「夢にしょっちゅう現れてたよね？私の頭に光を当てて…」

「すごいたんこぶだったからね」

「知ってたの？」

「宇宙船で同化したとき、君の体の方まで、感じることが出来て」

「そんなことが出来るの？」

「うん。いろいろと出来るよ」

「じゃ、その逆も?今、同化したらあなたの、体で起きてることがわかるの?」

「わかると思うけど、僕は今、寝ているだけだよ。たいして面白くないよ」

「…あ、そう…」

ちょっと、今思った。もしかするとこの人は、子供かもしれない。5~6歳の子どもで、親が運転してる車に乗っているとか…。なんだか、話し方が子どもっぽい気がする。

「夢で、いろんな過去生を見るようになったの。そりゃ、もういろいろと悲惨な人生ばかりを思い出してる」

「輪廻転生」

「え?」

「人は、死ぬときに後悔したりする。もしくは、誰かを恨んだり、恨まれたり…。そうして、次の生で、その恨みをはらそうとして、そんな人生を送るようになる。または、罪悪感を感じて死ぬと、次の人生で償おうとする」

「あ、そんな感じだった」

「僕の過去生も同じようなものだ」

「あなたは、私の過去生で現れてこなかった」

「うん。別々にいろんな人生を、演じてきたから」

「演じた？」

「そう。そして、いろんな感情を知った。大事なことだ」

「なんで？」

「地球人を知るためだよ。地球人が何を怖がり、怯え、苦しみ、悲しむのか…。魂の自分では、とうてい理解不能だ」

「え？そうなの？」

「魂には、感情はない。判断もない、いい悪いもない」

「……」

「宇宙はすべてがあり、すべてを許している。認めている。何が起きようと、判断しない。裁いたりもしない。ただ、そこにあるものを包み込んでいるだけだ」

「すべて？」

「無償の愛だよ。」

「……」

「でも、人間は違う。だけど、人間にならないとそれはわからない。だから、いろんな体験をした。知るために」

「……」

「でも、もともと人間も、愛そのものの魂だ。忘れちゃってるけどね。だけど、そろそろそれを思い出していく頃だ」

「自分が、愛だってこと？」

「うん。光だってことを」

「……」

「そのお手伝いを僕たちがする。いろんな感情を知り、そのうえで、喜びや平和、幸せ、愛、自由っていうものを、まず自分たちが思い出す」

「それから？」

「それから？そうだね。まずは、第1段階を知らないと、その先には進めない。だから、その時にならないと君は、理解できないだろう」

「あなたはもう、その先を知ってるの？」

「知らないよ。僕は君だ。確かに少しだけ早くに、幽体離脱はしたけど、それは、君がものすごい苦しみを負ったからだ」

「え？」

「その苦しみを、なぜか僕が感知して、いろんなことを思い出すことになった。君という存在も」

「じゃあ、これからのことは、二人で、いろいろと思い出していくの？」

「そうだね。第1段階をきっと、二人で乗り越えるのかな」

「いろんな感情を知ったうえで、喜びや愛を知る…？」

「うん、そうだ」

「私の、離婚のことや、赤ちゃんが死んだことも、悲しみという感情を知るためだった？」

「うん。そして、とても大事な重要な出来事だったんだよ、起きるべくして起きた…」

「あ…あんなに苦しいことが？」

「それを体験したうえで、愛を知ることになるからね」

「……」

「これからも、まだ、いろんな感情を味わうことになるかもしれない。でもすべてが、その先に起きることのためだ。だから、感情に流されたりしないで、ただ、感じて。そして、流れに身をまかせるんだよ。いい？いろんなことを考えすぎたりしないで。自分のうちにこもらないで。そうすると、僕は君とコンタクトが取れなくなる」

「思考が邪魔をするの？」

「そうだよ。いいね？きっと、これから先僕に会う。思考が邪魔をしていたらそれすら、気づけない。でも、そろそろ君と地球上で会って、第1段階を乗り越える時期なんだ」

「……」

「いいね？今、僕が言ったことは忘れないで」

「あなたに会って、あなただってわかるのね？」

「あれこれ考えていなければ。この人がそうかとか、僕にどうにかして会いたいとか、そんなことも考えないで。流れに任せていたら、必ず会うし、会って僕だってわかるから」

「わかった…。何も考えないようにする」

「そのコツ、わかる？」

「え？」

「今に生きることだよ」

「今に？」

「今だけを感じて、生きて…。そうしたら、思考に邪魔されない」

「わかった…。今に生きる」

「うん。あ、車が目的地についたみたい。僕、起こされてるから起きるね。じゃあ」

「うん…。じゃあね」

そう言ったとたんに、私も自分の体に戻り目を開けた。しばらく窮屈な感じがした。でも、だんだんと人間の体に慣れていった。

「そうか…。誰が彼なのかって詮索したり、会いたいって望んだりしないでもいいってことか…」

誰だろうってものすごく気になっていたが、それすら、忘れることにした。

そして翌日、またバイトに行き、帰りに昨日メールでご飯を食べに行こうって誘われてたので、緒方さんとご飯を食べ、家に帰った。

もしかして、緒方さんって可能性もある。今、気が付かないだけで…。ある日、この人だったか！って気が付くことがあるかもしれない。そう思うと、食事に誘われて断ることもできなくなってた。

ああ…。でも、詮索しないでもいいんだよね？

だけど、今、他に回りに男の人っていないんだよね。あ、バイト先にも何人かいるか。だけど、そんなに会話もしないし…。

あ！また詮索している。忘れよう。忘れちゃえ…。

翌日、バイトの帰りに、美里に誘われ飲みに行った。

「あさってじゃん。舞台。もう、楽しみ～～。悟くんに会えるよ～～」

「私も、生昴くんに会える！」

「昴くんもかっこいいだろうね」

「うん！」

私は、実は、昴くんがあの光の人だったりして…って思ったりもした。でも、それは妄想の世界だ。

ただ、

「夢で会いに行った。君は僕を知っている」

って言ってたのや、

「これから先僕に会う」

って、この舞台のことかしら…なんて思ったりしてたんだ。

あ。だけど、これも思考だ。あれこれ考えてる。妄想だとしても、立派な思考だ。やめよう。もう、何も考えないで、舞台は舞台で楽しもう。

舞台を観にいく当日を迎えた。バイト先から直接、劇場に駆けつけた。そこで美里と落ち合い、軽く劇場の近くにあるカフェでパンを食べて、それから劇場に入った。

席に着く前に、パンフレットを購入して、席でじっくりと二人で無言で眺めていた。

昴くんのサムライ姿。かっこいい…。

そうして、開演のブザーが鳴りお芝居が始まった。

ドキドキしていると、いきなり昴くんが舞台に登場した。ちょっとのシーンですぐに消えたが、それだけで感動。めちゃくちゃかっこよかった。

しばらくお芝居が進んで、ようやく悟くんが登場。隣で美里が小声で、

「かっこいい～」

と言っていた。

私はオペラグラスを持ち、ずっと昴くんを観ていた。申し訳ないが、他の役者さんは見ていなかった。昴くんの美しさ、かもし出すオーラにくぎづけになっていた。

ふと…。そのオーラに身に覚えがあるって思って、もっと昴くんを感じようと、頭を真っ白にした。深く呼吸をして、昴くんに焦点を合わせる。ああ、そう幽体離脱したとき、光の彼のエネルギーに集中するみたいに…。

昴くんっていう存在だけを感じようと、心を穏やかにして、そうして、目を閉じてみた。

グワ～～～

ものすごいエネルギーが、昴くんからこっちに向かって、飛んでくるのがわかった。そのエネルギーを感じるがままにしていたら、あの光の人と同じエネルギーだというのがわかった。

そして、しばらくして私と昴くんが同化した。

私は、どうやら魂が抜け、昴くんと同化して、お芝居をしているようだった。客席が見え、その先に美里が見えた。

昴くんの息遣い、体温、そして、ステージ上での温度、スポットライトの光、音、すべてを感じ取れた。あ、今、私ステージにいる…。そう思った瞬間、私の魂は自分の体に戻っていた。

は…って目を開けた。ステージで演技をしている、昴くんが目に入った。昴くんの姿を見てるだけでも、昴くんがあの光の彼と同一人物だというのが、はっきりとわかった。なぜわかったかが、わからない。でも、はっきりと昴くんから感じるのだ。

ああ…。昴くんだった……！

お芝居が架橋に入った。それまでは笑いあり、歌あり、ダンスあり…。でも、架橋に入ると、ただただ、感動して泣くばかり…。

昴くんは、舞台で泣いていた。役になりきっていた。

最後には、愛と平和をかなでる歌を歌っていた。ものすごかった。会場全体が光で、包み込まれた。その光は昴くんから発せられているのがわかった。

ハートにそのまま、その光が飛び込み、優しさや温かさに包まれ涙

が溢れた。隣にいる美里も、逆側に座っていた女性も、前の席に座っていた男性も、泣いているようだった。昴くんの歌声は愛が溢れ、誰しもが感動で泣いているようだった。

舞台が終わった。アンコールでまた、幕が上がった。主役の昴くんが挨拶をした。昴くんが発する言葉からも光がくるくると螺旋状に出て、会場全体に広がり辺り1面を包んでいた。

気持ちが良かった。いつもの、あの優しい光…。

私は目を閉じた。そして、昴くんのエネルギーを体全体で感じていた。ふと、声がした。耳元じゃない。頭の中というか、体の中から聞こえた。

『僕を見つけたね?』

私も心の中で、うんって答えた。

それから幕が降り、会場に明かりが灯った。

「は〜〜。感動した。泣いちゃったよ。昴くんの歌声、素敵だったね」

「うん」

「歌も歌えるって知らなかったな」

「…うん」

「何?ひかり、呆けちゃってるよ?生昴くん観て、腰でも抜かした

？」

「うん」

「え～～？大丈夫？」

「あ？何？」

「聞いてなかったの？」

「ごめん。ぼお～ってしちゃって」

「いいけどさ～～。昴くんかっこよかったもん。呆けるのも無理ないわ」

「…うん」

ゆっくりと席で、アンケート用紙に感想を書き込んだ。私は、感動してラストの歌では泣いてしまった、素晴らしかったと書いた。それから私は席を立ち、出口に向かって歩き出した。すると、

「ね？ステージの前で写真撮らない？記念に」

と美里が言いだし、二人で、携帯で写真を撮りあった。

周りを見ると、すでに客席からすべてのお客さんが、いなくなっていた。

「すみません。そろそろ閉めますので、出ていただけますか？」

と、会場係の人が言ってきた。

「すみません、今、出ます」

ステージの横のドアを残して、他のドアは閉められていた。ドアから出ようかとした瞬間に、いきなり、美里が小さな悲鳴をあげた。

「ひゃ〜〜〜〜〜！」

声にならない悲鳴だった。

「どうした？幽霊でも出た？」

美里は、舞台の袖の奥を指差していた。

「す、昴くん…」

美里が、私の腕をがしって思い切り掴んだ。

「え？！」

私も驚いて、袖のところを覗いた。すると、着替えを済ませた昴くんがすぐそこにいた。

「もう、他にお客さんいないですか？」

昴くんが聞いてきた。

「え？うん」

私が答えると、ステージの横の階段から、客席に降りてきた。

「ひゃ～～～～～～～～！」

また、美里は声にならない悲鳴をあげた。

「今日は舞台観に来てくれて、ありがとうございます」

ものすごく丁寧に、昴くんは頭を下げた。

「い、いえいえ…」

恐縮して、私と美里も頭を深々と下げた。そして、頭を上げてから、昴くんの顔を間近で見た。

か、か、か、かっこいい！綺麗！美しい！でも、にっこり微笑むと可愛い。そのうえ、たまに光を発射する。

『ま、まぶしい！』

心の中でそういい、目を思い切り閉じると、昴くんにくすって笑われた。

「どうでしたか？俺の芝居」

俺…？僕じゃなくて…？

「あ。僕の芝居」

と、言いなおした。え？もしかして、私の思ってること、聞こえてたりする？

「すごい感動した。良かった！泣いちゃった！」

と、美里が興奮して話した。

「あの…」

会場係の女性が、困ったように声をかけてきた。

「あ、僕の知り合いなんです。すみません。そこ、扉閉めていってください」

「はい、わかりました。じゃあ、カギも閉めますので、舞台裏から出てもらえますか？」

「あ、はい。わかりました」

そして、その係りの女性は会場を出て、扉を閉めた。

「し、知り合い？！」

美里が、目を丸くした。

「うん、ちょっとした…」

昴くんがそう言った。

「誰と？え？！ひかりと？」

「ひかり？っていうんですか？」

「え?!」

私のほうが驚いた。名前知らないでいたの?

「名前も知らないで、知り合い?」

美里も驚いていた。

「あ…はい。名前はわからなかった。そういえば、聞かなかったし…。なに、ひかりさんですか?」

「星野ひかり」

「わ。すげぇ名前。星の光?」

「そう…」

「やっぱり、名前にも現れるんですね。俺の名前も、天宮昴って本名だけど、すごい名前でしょ?じいちゃんは神社の宮司さんで、こんな苗字なんだけど…」

「……」

美里はなんのことかわからなくて、ぽかんと口を開けていて、私は言葉使いが、光の彼と違うものだから、ぽかんと口を開けていた。本当に、彼と同一人物?

「そろそろ行かないとやばいかな…俺。今日は、本当に観に来てくれて、ありがとうございました。まさか、ここで会えるとは思って

もみなかった」

「え?!そうなの?わかってなかったの?」

私が驚くと、美里も何がなんだかわからないって表情をした。

「わかってなかったですよ。詮索もしないし、なんも考えてなかったし。すべて成るように成るって任せてたけど、まさか、舞台観に来てくれるとは、思ってもみませんでした」

「でも、私が昴くんを知ってるのを、知ってたよね?」

「ああ。それはなんとなく、わかってました」

「え?」

「ひかりさんが僕のことを知ってるって、それは気がついてましたよ」

「そうなの?」

「じゃ、本当にこれでもう、楽屋に戻ります。あ、こっちに登ってください。ドア閉めちゃったから、そこから出られないですよ」

「うん」

私たちは、舞台の袖から、ぐるりと回り廊下に出た。

「じゃ、また」

昴くんが、そう言って去って行った。

また…？またって言っても、いつ会えるの？！

『大丈夫です。任せていたら、会えるようになってますから』

体の中から、声がした。わ！昴くんの声だ。これ、テレパシーってやつ？

『違います。僕はひかりさんなので、本当はいつでも、こうやって、会話ができます』

え？

『ひかりさんの思ってること、いつでも聞こうと思えば聞けますよ』

今までも、盗み聞きしてた？

『してません。こんなにはっきりとつながったことないですから。今日が初めてです』

じゃ、これからは？

『ちゃんと、つながるようにしたら、心で会話が出来ますよ』

どうやったら、つながるの？

『僕のエネルギーに、集中してください。幽体離脱したときに、したでしょ？』

ああ…。それを体にいるときもすれば、いいの？

『そうです。あ、そろそろ、すみません。荷物整頓して、楽屋でないと…。いったん、切りますよ』

…うん。

そうか。他のことに集中し出すと、つながれないのか…。

隣で美里が、なにやら話しているのに、そのとき気が付いた。

「どうして知り合いなの？なんで今まで、教えてくれなかったの？っていうか、なんか不思議なことばかり、言ってなかった？わけわかんなかったよ」

「うん…。私も、あまり把握できてないかも」

「え？」

「美里に言っても、私ですら、把握できていないんだもん、わからないよ」

「ええ？」

「そのうち話すね。でも、一つだけ聞いていい？」

「何？」

「目に見えない世界、信じる？」

「スピリチュアルってこと?信じるよ。大好き!過去生とか、オーラとか。オーラの泉毎回見てたもん」

「じゃ、大丈夫かな…。今は私がこんがらがってるから、私の頭が整理できたら、話すね」

「わかった…」

しばらく、私が黙っていると、

「過去生で、恋人だったとか、そんな感じ?!まさか!」

と、美里が叫んだ。

「違うよ。まったく違う」

「そう…。な〜んだ。だったら、面白かったのに。」

ほんと、だったらロマンチックだったのに。残念ながら地球上に来て、出逢うのが今回が初めてのようだからさ…。

まさか、宇宙船で一緒にいたのと…か、昴くんは私なの…とかそんなこと言っても、理解不能だろうな〜。やっぱり、話すのはやめようか…ってそんなことを考え、あ、そうだ。これも、流れにまかせてみるとするかっていきなり、お気楽なことを思いつき、ほっておくことにした。

家に帰って、お風呂に入った。ものすごくリラックスしてて、ぼ〜〜ってしていると、

『ひかりさん、聞こえてますか?』

って声がした。昴くんだ。

『聞こえてるよ』

『今日は、本当にありがとうございます。で、どうでした?芝居』

『すごく良かった。感動した。昴くん、めちゃかっこよかったよ』

『ほんとに?』

『そういえば、私一回、昴くんと同化してた。ステージから客席が見えたし、スポットライトが当たってるのもわかったよ』

『そうか。だからか』

『え?何が?』

『体中で、ひかりさんのエネルギー感じ取ったんです』

『そうなんだ』

『同化すると、相手と同じことを感じられるんですよね。あ、今も同化すれば、ひかりさんのこと感じられる…』

『駄目!!!!!今は駄目!!!』

『なんで?』

『お風呂はいってるから、絶対に駄目』

『え？僕も入ってますよ。１番リラックスしてるから、つながりやすいかなって思って、声かけたんです』

『そうだったの？』

『あはは、奇遇。いや、これもなるようになってたのかな？じゃ、今同化して、ひかりさんのとこに行っても、結局あったかいお風呂につかってるってだけですね』

『そうそう。だから、別にねえ…』

『じゃ、やめときます』

もし同化すると、私が客席が見えたように、昴くんはうちのお風呂見える…とか？

『見えますね。多分』

『あ、今のも聞こえてた？』

『はい』

『聞かないでよ～～』

『なんでですか？僕はひかりさんなんだから、何を思っていようといいんですよ』

え～～～？恥ずかしいじゃん…。あれ？お風呂場が見えたら、例え

ば、私が私の体を洗うと、私の体も見えたり…。

『見えますね』

『だから、聞いてないでってば！』

『いいじゃないですか。恥ずかしいことないですよ。だって、ひかりさんはいつも自分で思ってることを、自分が知って恥ずかしいですか？』

『ううん』

『それと同じです。だから、体が見えても、僕の体みたいなものだから、大丈夫です』

『え？！？！！！！！！！』

『今のは、冗談ですけど』

『え？！！！！？？？』

もう、わけわかんない～～～。

『さすがに、この地球上では、男と女の別々の体をまとってるんだから、一緒くたにしちゃ、駄目ですよね』

一緒くた…って？

『でも、恥ずかしいことはないですよ。魂では、一緒ですから』

魂ではね…。じゃ、恥ずかしがってるのは、誰だ?ってことになるよね。

『ああ、それです。そこが人間です。思考なんです。』

『え?』

『例えば、僕らが3歳だったとする。多分、相手に自分の裸みられても、恥ずかしくないですよね。だけど、だんだんといろんな常識とかが入ってくる。恥ずかしいという概念も…。そうすると、魂の部分では、恥ずかしがることなんていっこもないのに、思考は恥ずかしいと思う。国が変われば、裸で過ごしている部族もいる。その人たちは裸を恥ずかしいとは思わない。やっぱり、生まれてから植えつけられた、考え方、観念、思考なんです。』

『植えつけられた?』

『そう、それが本来の自分じゃないのに、まるで、自分だと勘違いして、みんな生きてる。』

『え?どういうこと?』

『本来の自分は、愛と光です。判断もない。恥ずかしいもない。自由で、広い』

『うん…。裸も恥ずかしくない…?』

『この体はもともと、地球上での乗り物のようなものです。いわば、車ですね。車がカバーかけてなくて、露骨にあらわになってたとし

ても、別に恥ずかしくないでしょ？』

『じゃあ、昴くんは、恥ずかしくないの？』

『恥ずかしいですよ』

『え？！』

『だって、僕にも、そういう常識や観念、思い切りありますから』

『そっか…』

『でも、僕、ひかりさんだったら、恥ずかしくないかも』

『なんで？！』

『なんでって、ひかりさんは僕だから』

ああ、その変になると、まだ、私には理解不能だ。私はめっちゃくちゃ、恥ずかしいよ…いや、この年で、バツ一で、恥ずかしがるのも変かな。いや、年齢なんて関係ないよね？あ、やば…。頭くらくらする。

『もう、切ります。これ以上、お風呂につかってたら、のぼせますよね？っていうか、もうのぼせてませんか？』

『のぼせた…』

『じゃ、僕ももう出ますから、それじゃ』

『うん、明日も頑張ってね』

『はい。おやすみなさい』

『おやすみ』

お風呂から出て、しばらく扇風機の風に当たった。

昴くんは、なぜだか、敬語になっていた。光のときは、ため口だったし、ちょっと幼い感じもしたんだけどな。

それにしても、恥ずかしいっていうのも思考。本来の私じゃない。なんだか、理解不能だ。こう考えてる私はなんなんだろう?私は私でしょ?でも、魂の私とは違うのかな?

ああ。こんがらがる。こんなときには、何も考えないことだ。

扇風機の風に当たりながらただ、ひたすら、ぼ〜〜〜ってした。ついでに、扇風機に向かって、

「あ〜〜〜」

って言ってみた。それを、キッチンの片づけをしていた母親にみられ、変な顔をされた。私は、リビングの扇風機を止めて、自分の部屋に行った。

家族とは、いまだに口をあまりきかない。時々、母が何かを言いたそうにしているが、それを私が無視して、部屋に閉じこもってしまう。親とは、口をききたくなかった。まだ、親を恨んでいるところがあるのだ。

は〜〜〜。もやもやした。こんなときには、集中が出来ないから、

昴くんを呼び出せないだろう。いや、もう、寝なくちゃいけない時間だ。呼び出して迷惑はかけられない。

ベッドに横になり、枕に顔をうずめた。苦しい…。まだまだ、傷は癒えてないのだ。でも昴くんは、言ってた。起きたことは、起きるべくして起きたこと。いろんな感情を味わうためだって。そして、それから喜びや愛を感じていくんだって…。

喜びや、愛を感じるのを、一緒にしていくって言ってたな。どういうことかな?

また、あれこれ、考えそうになり、やめた。やめて、髪を乾かし、とっとと寝ることにした。

昴くんといつ会えるのか…。それも、流れに任せてみることにした。それより何より、昴くんとは、心で会話が出来るのだ。いつ会うか約束だってできるじゃないか…。メールもいらないし、電話もいらない。すごいことかも…。そう思うと、気持ちがだんだん上がり、わくわくした気分で眠りにつくことができた。

ミッション1　感情を共有する

本屋でアルバイトをしていると、いろんな本に出あえる。私は最近、スピリチュアルの本を、何冊も購入し読んでいる。もしかしたら、私と似たような体験をしている人はいないのか。そんな本はないのか…。

「神との対話」これも、とても興味深い本だった。でも、幽体離脱や、光と同化した、宇宙船に行っちゃったなんて本はなかなか、なかった。

インターネットでもあれこれ、調べてみた。

いろんなブログも読んだ中、「小さな宇宙人アミ」という本を知り、それもすぐに購入して読んでみた。これは、宇宙船に乗ってやってきた宇宙人との遭遇を書いた本で、私の体験とは、ずれているものの、興味深いものだった。

そんなスピリチュアル系ばかりを買っていたので、一緒にバイトをしている女の子が、話しかけてきた。今までは、ほとんど話をしたことのない子だったが…。

その日は、そのバイトの子、神野葉月ちゃんと仕事があがる時間が一緒で、更衣室で話しかけられた。

「星野さんは、スピリチュアルに興味あるんですか？」

一瞬、びくってした。何？興味持っちゃいけない？みたいな…。

「私も大好きなんです。でも、そういうのを話せる相手がいなくて…」

「え？」

「ちょっと話したら、ドン引きされて…。あ、オーラの泉とか、霊の話とか、守護霊とか、そういうのは、みんな好きなんですよね。でも、宇宙とか、そんな話をしだすと、宗教じゃないかって引かれちゃうんです。」

「宇宙？」

「バシャールって知ってます？宇宙人の…」

「う、宇宙人？」

「あれ？興味ないですか？」

「ううん。けっこう興味ある」

「このあと、時間ありますか？もし良かったら夕飯一緒に…」

「いいよ」

二人で本屋を出て、そのビルの地下にあるレストラン街に行った。

ご飯を食べながら、葉月ちゃんは、話し出した。葉月ちゃんは、まだ１９歳。あ、昴くんと同じ年か…。とてもまじめそうな、女の子だ。

「なかなか、こういう話が出来る人、いなかったんですよ。友達でもいなくって」

「じゃ、なんで、スピリチュアルが好きになったの？」

「実は変な体験をしちゃって…」

「変な？どんな体験？」

「ＵＦＯを見たことがあって…」

「ＵＦＯを？」

「その時、すごい光がそのＵＦＯから出てて、それに包まれて…」

「それで？」

「怖くて、走って逃げました」

「…」

「それから、ちょっとずつ変なことが起き出して」

「どんな？」

「声が聞こえたり…」

「声？どんな？」

「なんか自分の中から。それで、いろんなスピリチュアルのセッシ

ョンを受けたりし始めて」

「うん。それで？」

「それは、チャネリングだって…」

「チャ…？」

「多分、宇宙人とチャネリングできてるんだって…」

「？？？？ご、ごめん。葉月ちゃん、ちょっと理解不能。う、宇宙人と？宇宙人って？だれ？」

「バシャールとチャネリングしている人は、バシャールの過去生なんだって。だから、私にアクセスしてきた宇宙人は、私の未来からなんじゃないかって、そんなことをこの前言われました」

「……」

「やっぱり、星野さんもこんな話、受け入れられないですか？」

「ううん。そんなことない」

いやいや、受け入れられないどころか、思い切り興味がある。

「ところで…、そういうチャネリングをできる人が、他にもいるの？」

「はい。私のことを見てくれた人も、宇宙人とチャネリングできる人です」

「その、宇宙人もその人の、未来の…？」

「いえ、未来じゃなくて、過去生って言ってました。プレアデス人で、地球を助けるために来てるとか…」

「ええ？地球を？」

「はい。２０１２年のアセンションのために」

「アセンションって？」

「次元上昇です」

「次元上昇って？」

「つまり…、３次元から４次元、５次元に地球が変わる…」

「…！それか！」

「え？」

「あ、なんでもない。その…、もとプレアデス人だったって人に会ってみたいな」

「はい。いつでも連絡取れますよ。星野さんもリーディングしてもらいますか？過去生だったり、これから先のことだったり、見てもらえますよ」

「う～ん…、見てもらうより、話がしたいな」

「じゃ、来週の水曜の夜、バイト終わってからどうですか?私がリーディングしてもらう日です。一緒に来ませんか?」

「ほんと?じゃ、一緒に行こうかな」

「はい」

ご飯を食べ終わり、コーヒーをゆっくりと飲んでいると、メールが入った。

私が、ぱっと携帯を開けると、

「あ!待ちうけ、彼氏さんですか?」

と葉月ちゃんが、聞いてきた。

「え?ううん。違う違う」

「でも、男の人っぽかった」

「これは…。私が好きな俳優さんだよ」

「ええ?誰ですか?」

昴くんだとは恥ずかしくて、見せるかどうかちょっと悩んだけど、まあ、いいかって見せてみた。

「昴くんだ~~。私も好きです!かっこいいですよね。今、舞台してるの知ってますか?私、今度観に行くんです」

「私も観にいったよ。この前」

「本当ですか?どうでしたか?」

「うん。すごく良かったよ」

「昴くんはかっこよかったですか?」

「うん、かっこよかった」

「楽しみです。でも、星野さんが、昴くんのファンだってびっくりですよ~~」

「う~~ん、この年でなんだか恥ずかしいよね。友達が悟くんのファンで、影響されちゃって」

「私、悟くんも好きです。かっこいいですよね。二人が出てるお芝居だから絶対に行かなくちゃって、友達とチケット取って。すごくいい席取れたんです」

「どこどこ?」

「前から4番目です」

「わあ。すごい。私は、ほとんど後ろから数えた方が、早いくらい後ろだったから。オペラグラスで見てたんだ」

「そうなんですか?前から4番目なら、オペラグラスいらないですよね」

「うん。いらないよ～～。わあ、いいな。もう一回見に行きたいな」

もう一回、昴くんの美しい歌声も聞きたいし、かっこいいサムライ姿も見たい。

「当日券もあるの知ってました？」

私が目を輝かせてたのか、葉月ちゃんはそう教えてくれた。

「え？そうなの？」

「行きませんか？開演の1時間前に、整理券が配られるそうですよ」

「いいな～～。いつなの？」

「あさってです」

「あ～～！私バイト休みの日だ。行こうかな～～」

「行きましょうよ。もしかしたらいい席が取れるかもしれないし」

「そうなの？うん、じゃ、行っちゃおうかな」

私たちは、二日後、劇場の前で会う約束をして、その日は別れた。

最近は昴くんと話をしていなかった。いつ、話しかけていいかがわからなかった。

ただ、夢では毎日のように会っていた。会っていたっていう言い方

は変かな。ただ、昴くんが、いる。昴くんのエネルギーを感じる…そんな感じだった。

二日後、葉月ちゃんと劇場の前で会った。葉月ちゃんのお友達も、葉月ちゃんのようにまじめそうな女の子だった。

私のことを紹介してくれて、私たちはそのまま、当日券の売り場に行き、だいぶ早い時間に行ったので、1番目に並ぶことが出来、整理番号1番だった。

整理番号をもらうまでも、葉月ちゃんとそのお友達の、真知子ちゃんは一緒にいてくれて、あれこれ昴くんの話で盛り上がっていた。

映画も二人は観に行ったらしい。葉月ちゃんは昨年のサイン会で、昴くんに会ってから、こんなに綺麗でかっこいい人が、この世にいるのかって感激して、それ以来のファンだって言ってた。

それも、その時の昴くんは、一人一人に声をかけ、優しくて、手伝った本屋の店員やバイトの子にまで、お礼を言っていたらしく、それにも感動したらしい。

そうか〜〜〜。聞いていて、私まで嬉しくなった。その時、真知子ちゃんも、サイン会に来て、ますますファンになったとか…。

いいな〜〜。サイン会…って、そうか。別にサイン会がなくても、会おうと思えば会えるのか。ん?本当に会おうと思えば、会えるのかな?

いや、今日会えるじゃないか。そばで会えなくても、しっかりと昴くんのエネルギーは感じられる。それが嬉しい。

整理番号をもらい、３人で、劇場の近くにあるカフェでお茶をした。すっかり昴くんトークで、私たちは仲良くなっていた。

真知子ちゃんは、スピリチュアルでも、オーラの泉のような、守護霊の話は大好きなようで、そんな話でも盛り上がった。でも、葉月ちゃんは、宇宙人の話はいっさいしなかった。

私は、自分の体験を葉月ちゃんにも、美里にもしていなかった。どう話していいか、まだ、自分の中で整理がついていないのもあるが、なんだか話したくないっていうのもあった。

開演前、１５分となり私たちは移動した。整理番号とチケットを交換すると、なんと前から５列目。それも、葉月ちゃんの真後ろの席だった。

「すごいですね～～」

と、葉月ちゃんも喜んでくれて、私も大喜びした。

昴くんには、今日くることを話していない。でも、どこかで感づいているかもしれない。なんて思いながら、席に着いた。

葉月ちゃんと真知子ちゃんは、二人とも始まるまでパンフレットをじっくりと見ているようだった。

私は、目を閉じた。そして、昴くんのエネルギーを感じてみた。それはすぐに感じ取れた。一瞬、同化した。緊張が走り心臓がどきどきしている。あ、昴くん、緊張してるんだと思った瞬間、自分の体に帰ってきた。

開演のブザーが鳴り、幕が開き、昴くんが登場した。ほんの数分ですぐにはける。そしてまた、登場して、その時には、ステージの前の方まで来て演技をした。

前に座っている葉月ちゃんが、身を乗り出して見ていた。きっと、うっとりとしながら、見ているんだろうな。

私も、今日はオペラグラスなしに見ても、昴くんの顔も表情もすべてがわかるくらい間近で、ドキドキしながら見ていた。

なんて、綺麗なんだろう。動作も、踊りも、すべてが…。

前半を終了して、１５分の休憩に入った。葉月ちゃんがくるりと後ろを向き、

「かっこよかったですね～～。こんなに前で、昴くんがはっきりと見えて、感動です」

と、目をとろんとさせて言った。

「うん。そうだね～～」

ってにこやかに答えた次の瞬間、声が聞こえた。

『ひかりさん、来てたんですか?客席見たらいるから、驚きました』

『うん。当日券で観に来た』

『来るなら来るって、言ってくれたら良かったのに』

『来るってわからなかった？』

『そこまでは、わからないですよ。あ、本番前に同化してましたか？』

『うん、ほんの数秒。すごい緊張してたね』

『やっぱり、ひかりさんのエネルギーに包まれたから、そうかなって。あれで、一気に気持ちが落ち着きました』

『そうだったの？』

『ひかりさんが、遠くから俺にエネルギーを送ってくれたかと思ったら、こんなに近くにいたからびっくりしましたよ～～』

『後半も、頑張ってね』

『はい！ありがとうございます』

それから、昴くんの声がしなくなった。

前を見ると、二人ともいなくて、どうやらトイレに行ってるらしかった。二人が戻ってきてすぐに、開演のブザーがなり、後半が始まった。

後半は、涙、涙。昴くんも舞台の上で、泣いていた。そしてラストの、昴くんの歌。また、光に会場が包まれていた。

一瞬、私はまた、昴くんと同化した。昴くんの体中が愛で満たされていて、感動の渦がそこにはあった。あまりにものすごい感動で、

私は昴くんと一緒に泣いていた。

心の奥からどんどん愛が、溢れ出てくるのを感じた。それが体からどんどん広がり、会場を超え、空に、天に、宇宙へと流れ出していくのを感じた。

地球が見えた。地球がその光で覆われているのも見えた。感動だった。昴くんと同化して、そんな感動をしばし味わった。

自分の体に戻ったときには、もう、アンコールの声がまわりから聞こえていた。

幕があがり、役者さんが並んでお辞儀をして、昴くんが話し出した。昴くんは、感極まって泣き出してしまい、隣の役者さんが、昴くんの背中をぽんぽんってしていた。

昴くんは、私の方を見て目を細め、

『ありがとう、ひかりさん』

と、心で話しかけてきた。そして、会場全体に手を振り、また深くお辞儀をし幕が下りた。

感動して、しばらく呆然としていた。それは、前に座っていた真知子ちゃんや、葉月ちゃんも同じだった。

人が減っていく中、葉月ちゃんと真知子ちゃんは、アンケートを必死で書いていた。感想を書く欄に二人ともぎっしりと書き込み、夢中になっていた。

私は後ろで、その二人を見ながら、ぼ〜〜ってした。昴くんのエネルギーがそこら中にあり、それをずっと感じ取っていた。

歌のときの、あのすごい光…。昴くんから発せられていたあのエネルギー、すごかったな…。それに、どうして、地球が見えちゃったんだろうか。一瞬、あの宇宙船に魂が行ってたのかな。そうかもしれないな…。

ぼ〜ってしていると、また係りの人に、追い出されるはめになった。

「廊下に椅子があったから、そこで、続きを書けば?」

そう言うと、二人はアンケート用紙を持ち、廊下に移動した。すごいな…。用紙の裏まで、書いている。

廊下で3人で座っていると、辺りに人がまったくいなくなった。

だいぶたってから、

「すみません。書き終わったから、行きますか?」

と葉月ちゃんが言った。

「うん」

3人で、アンケート用紙を出そうと、出口付近に行くと、そこから少し離れたところに、スタッフらしき人と一緒にいる悟くんがいた。

「あ!」

それを、目ざとく葉月ちゃんが、見つけた。

「握手してもらいに行きますか？」

「え？でも、大丈夫かな？」

「行きましょうよ～～」

葉月ちゃんと、真知子ちゃんに連れられ、悟くんのすぐそばまで行った。すると、スタッフの人に、声をかけられてしまった。

「君たち、出口は向こうだよ」

でも、葉月ちゃんは、

「アンケート書いたんです。悟くんのこともたくさん。ぜひ読んで欲しくて」

と言って、悟くんに手渡していた。

「ああ。ありがとう。」

悟くんがそう言って、アンケート用紙を受け取った。でも、ちょっと愛想がない感じ。その時、

「悟さん！早く来ないと、差し入れ全部食べちゃいますよ～～！」

と、昴くんが、こっちに走ってきた。

「昴くんだ！」

葉月ちゃんが喜んだ。そして、すかさず、

「あの！アンケートたくさん書いたので、読んでくださいね」

と昴くんにも、言った。

「え？あれ？」

昴くんはそこで私を見て、私がいるのに驚いている様子。

「アンケート、私のも読んでください」

後ろから、おずおずと真知子ちゃんが、昴くんに手渡した。

「はい。読みます。ありがとう！」

昴くんは、にこって微笑み受け取った。それから、私の方も見て、

「アンケートは？」

と聞いてきた。

「え？ごめん、書いてない」

と言うと、

「ええ？そうなんですか～～？」

とわざとらしく、がっかりした表情を見せた。

「この前来たときに、ちゃんと書いて出したよ」

と言うと、

「ああ、そうだったんですか。ありがとうございます」

と、昴くんは、ぺこりとお辞儀をした。

「昴、何?差し入れって」

悟くんが、昴くんに聞いた。

「あ、カツサンドですよ。すげえ美味しいの!」

「もう食ったの?お前」

「はい。3個一気に食べました。みんなもがっついてるから、残ってるかどうか…」

「まじで?」

「うそうそ。悟さんの分は、残してありますよ」

「なんだよ。5個くらい、残してある?」

「そこまでは、どうかな〜〜」

私たちは、そこにずっと立ちすくんだまま、二人を交互に眺めていた。

「さ、用がないなら、もう出てください。劇場閉めますから」

とスタッフの人に言われ、しかたなく、私たちは出口の方に向かおうとした。

すると、

「観に来てくださって、ありがとうございました！」

と、昴くんがぺこって、こっちに向かってお辞儀をした。葉月ちゃんと、真知子ちゃんは、そんな昴くんに感動してて、私は小さく二人に見えないよう、昴くんに手をふった。

昴くんからは、ものすごい光のエネルギーがまた出ていて、それを感じて、私は幸せな気持ちになった。

その光は、私だけでなく、葉月ちゃんも、真知子ちゃんも包んでいて、多分、彼女たちには見えなかったとしても、何かを感じただろう。

そうして、その光の中で愛を感じ、自分の中からもそれと同じエネルギーがあふれていることに気がつき、それをそのまま感じていると、私からも光が飛び出し、昴くんの光と混ざり合い、空高くへと放射されるのが見えた。そこから、四方八方へと光が飛んでいく。

そのうちに、辺り1面その光で包まれていくのも見えた。

不思議だ。なんだろう、これ…。

帰り道も、葉月ちゃんと真知子ちゃんが二人で、きゃっきゃって話

している横で、ぼ〜〜ってしていると、

『不思議ですよね。でも、きっと俺らのエネルギーが、地球を覆ってたんじゃないですか？』

と、声が体から聞こえた。昴くんが私がぼけっと考えてることを、察知したようだ。

『昴くんも感じてた？昴くんが歌ってたときにも、すごい光があふれてたよ。すごかった。私もそのとき同化したけど、地球が見えた。そして、光で包まれていた』

『俺も、見えました。すごかったですね』

『俺…？』

『ああ、僕…。もうどっちでもいいじゃないっすか。ちょっと、昴で話してもいいですか？昴だと、こんなですよ、いつも』

『いいよ。全然ＯＫ』

『歌ってたときに、同化してたのわかってました。それで、すんごい光をひかりさんと放っているのも気づいてたし…。自分の内側から、どんどん愛が溢れてるのも感じて、感動しちゃって、泣いちゃって…。』

『私も、一緒に泣いてたよ』

『うん。それも、わかってました。まだ、俺も自分のミッションってわかってないけど、もしかして、もう遂行してるんじゃないすか

ね？』

『ミッション？』

『あの光、すごかったですよ。これが俺たちのすることなんじゃないかって』

『……』

私にはぴんとこなくって、黙っていた。

『いつも、あの唄を歌うと、自分から光が放射されるのわかってました。でも、今日は特別すごくて、地球全体を覆ったのは初めてです。これ、絶対にひかりさんと同化したからできたことです』

『そうなのかな？じゃ、二人で、任務を遂行しないとならないってことかな？』

『きっと、そうですよ。っていうか、もうすでにしてるんですよ』

『そうか…』

「星野さん？星野さん、どうしたんですか？」

葉月ちゃんが、どうやら、私に話しかけていたようだ。

『ごめん、葉月ちゃんが話しかけてる。またね！』

『はい。またあとで』

昴くんとの会話は終わりにして、葉月ちゃんの方を見た。

「ごめん、ぼ～ってしてた。何？」

「星野さんの家って、私の家の近くですよね」

「そうなの？」

「はい、隣駅です。だから、一緒に帰りましょう」

「うん。あれ？真知子ちゃんは？」

「え？今さっき別れて…。電車が違うんです」

「あ、そうなの？悪かったな。挨拶もしなかったや…」

「星野さん、話しかけても、ぼ～ってしてましたもんね」

「ごめんね。どっか魂行っちゃってたみたい」

「わかりますよ～～。真知子とも話してたんです。やっぱり昴くん、最高だよねって。最後にあんなに丁寧にお辞儀をしてくれたり、アンケートもきちんと受け取ってくれたり…。悟くんは、ちょっと、無愛想だったけど」

「うん…。昴くんは、ファン大事にしてそうだしね。あ、ファンじゃなくても、人を大事にするのかな」

「そんな感じですよね。私ますますファンになっちゃった～～。また、観に行きたいな。私も当日券で、観に来ようかな～～。一緒に来ますか？」

「観たいけど、もう、金欠…」

「そうですよね。チケット代、馬鹿にならないですよね」

「うん…」

これは、本当の話。私はかなりの貯金を今してる。一人暮らしを始めるためだ。だから、バイトでなく、正社員になりたいなとも思っている。

葉月ちゃんと、今日の舞台のことをあれこれ話していて、あっという間に葉月ちゃんの降りる駅になり、葉月ちゃんと別れた。

それから私は家に帰ると、すぐにお風呂に入った。昴くんに心の中で話しかけてみたが、応答がなかった。何か別のことをしてて、こっちの声が聞こえなかったのかもしれない。

お風呂から出て、自分の部屋にいき、前に買ったパンフレットを見ながら、昴くんのことを思った。優しい、あったかいエネルギー…。

その時、携帯が鳴った。緒方さんからのメールだった。

＞明日、夜食事に行きませんか。

＞すみませんが、明日は夕方からバイトです。

＞わかりました。では、次の日曜日、映画を観に行きませんか？

…そう来たか。私は日曜はシフトをいつも空けている。そのことを

緒方さんは知っている。どう返信するか悩んでしまった。

そのまま、バタンとベッドに転がった。緒方さんのことは、あまり考えたくない。今は、昴くんのエネルギーに包まれていたい。目を閉じて、昴くんのエネルギーに集中した。

すると、

『呼びましたか？』

と、昴くんの声がした。

『うん。呼んだ』

そう心で答えると、昴くんのエネルギーがもっと私から溢れ出た。

『今、何してるの？』

『風呂はいってますよ。ひかりさんは？』

『ベッドに横になってる。さっき、お風呂に入ってたとき声かけたんだよ』

『しゃ、多分、みんなとご飯食べてたときだ』

『そうなんだ』

『すみません、聞こえなかった』

『いいよ。いいよ』

『明日休演日だから、みんなで美味しいもん食べに行ってたんです』

『カツサンドを3個も食べたのに？』

『あはは…。あれだけじゃお腹いっぱいにならないですよ』

『明日、休演日なんだ。何してるの？』

『夕方から、雑誌の取材、夜は、テレビの収録が入ってます』

『忙しいね』

『でも、昼は暇っすよ。会いますか？ひかりさん、仕事は？』

『明日は夕方から…。え？！会うって、夢で？白昼夢で？』

『あはは。実際に、生で』

『生昴くん？』

『そう、生昴と生ひかりさんとで』

『ど、どこで？』

『じゃ、１２時ころ、ひかりさんちの最寄の駅で、待ち合わせはどうですか？』

『え？わかるの？』

『行ったことありますから』

『いつ？』

『ひかりさんが、階段ころげ落ちたとき』

『あ…そっか～』

『どこか、食べるとこ近くにありますか？』

『ちょっと、しゃれたイタリアンの店が、駅の近くにあるよ』

『じゃ、そこでランチしましょう』

『うん。じゃ、１２時にね』

私は、うきうきわくわく、ドキドキした。昴くんに会えるのがすごく嬉しい。

その反面、緒方さんはどうなのかな…。メールの返信もまだ、していなかった。とりあえず、

＞日曜の件は、また返事します。

と返信した。すると、わかりましたという、短い返事が来た。

はあ…。ため息が出る。

寝ようかと思った頃、今度は薫からメールが来た。

＞緒方さんと映画、行くことになった？

＞ええ？なんで知ってるの？

＞行くんだ？！

＞まだ、決めてない。

＞なんで？行けばいいじゃん。いっつも食事だけだったんでしょ？

＞そうだけど。

＞緒方さん、誠二にいろいろと相談しに来たらしくて、ひかりとこれからどうしたらいいかって。緒方さんは、かなり真剣みたいだよ？それで、誠二が、デートに誘ったらって。食事だけじゃなくて、もっと進展させろって言ったらしく、映画誘ってみるって、緒方さんが言ってたって聞いたからさ。どうしたかな～～って思って。

誠二さんっていうのは、薫の彼氏だ。

＞もう～～。ほっておいてくれてもいいのに。

＞何言ってんの？これはチャンスなんだよ？もう、昔の旦那なんか忘れて、さっさと新しい恋したら？

＞いいよ。まだ、そんな気分じゃないよ。

＞だからってね、芸能人、それもまだ、１９歳の若いのをおっかけてる場合じゃないでしょ？

う…。昴くんのことか～～。

舞台を観に行った話をして、昴くんに感動した話をしたら、呆れられたんだよね～～。その昴くんと明日は、ランチするんですなんて、とても言えないし、その昴くんに会うのはドキドキなんですなんて、これも言えない。

＞もう、デートしてみな？いやなら、途中で、断ればいいんだし。とにかく、私も前進して、ようやく昔のこと忘れられたんだから。

＞わかった。ちょっと、前向きに検討してみる。

＞検討じゃなくって、進むの！

＞わかった。でも、もう少し考えてみる。じゃ、もう、寝るから、おやすみ。

携帯を充電器において、私は寝た。

新しい恋に踏み込む勇気は、いまだにない。誰かと付き合うことを考えただけで、胸が痛い。もう、苦しみたくない。

夢の中でまた、昴くんと会った。優しいエネルギーに包まれ、私は夢の中で泣いていた。起きると、ほっぺに涙の跡があり、ああ、本当に泣いてたんだって、気が付いた。私の傷はまだまだ、癒えてないんだな…。

翌日、改札口で昴くんを待っていた。１２時を１０分過ぎたくらいに、

『今、着きました！』

という声がした。どうやら、昴くんはホームに降り立ったようだ。

改札口を見ていると、ぞろぞろと人が出てきて、その中に真っ黒ずくめの男の人が現れた。あ、私が空中に浮いてるとき、私を見ていた人…。その人がどんどんこっちに向かって歩いてきて、

「すみません。１０分の遅刻…。寝坊しちゃって、これでも慌てて、走ってきたんですけど」

あ、真っ黒ずくめの人が、昴くんだったのか…。

「ううん…。すごいね、頭の先から足の先まで、真っ黒」

「あ、そうですね。今日、真っ黒ですね」

と、昴くんはうつむきながらそう言った。

黒の帽子、サングラス、黒のTシャツ、黒のパンツに、黒の靴。それに、黒のベストまで着てる。

「これ、ちょっと怖いっすか？」

「うん。けっこう怖い。ちょっと近づけない…」

「それが狙いです」

「え？なんで？」

「みんな、ちょっと引くんです。それに、あまりジロジロ見られない。だから、けっこうばれない」

あ、変装か～。

『そう。変装です』

また、心の中を読まれた。

「それ、どうやるの？」

「え？」

「だから…」

『私の心の声、どうやって聞いてるの？』

『え？それはなんていうか、チューニングするみたいにするんですよ』

『チューニング？』

私たちは、レストランに向かいながら、心で会話をしていた。はたから見たら、黙ってただ歩いている状態だ。

『そうです。ひかりさんに合わせるんです』

『何を？』

『波長って言うのかな』

『私にも、できる?』

『できますよ。あまり無理して、聞こうとしないで、頭の中静かにするんです』

『考えないってこと?』

『そう』

『難しそう…』

『なんで?今も俺の声聞いてるじゃないですか?一緒ですよ』

『ふうん…』

「あ、ここだよ!レストラン」

「へえ、ちょっといい雰囲気ですね」

私たちは、レストランに入った。

「いらっしゃいませ」

店員さんに案内されて、席に着いた。

その店はわりといつも、高年齢のおばさまがたで、平日の昼はにぎわってて、今日も、おばさまがたが何人か来ていた。

「こういう店いいですよね」

「え？」

「俺のこと、知ってる人が、あまりいないんです」

「ああ。そうか…。若い人だと、わかっちゃうもんね」

「はい」

昴くんは、帽子もサングラスも外した。それから、オーダーをして、水を一口飲んだ。

私はさっきから、目の前にいる昴くんにときめいていた。なんて、かっこよくて綺麗なんだろう。

『それ、自分のことですよ』

いきなり、昴くんが、心の中で語りかけてきた。

「え？」

わけがわからず、私は口にして聞き返した。

『だから、俺はひかりさんだから、俺が綺麗ってことは、ひかりさんも綺麗ってことです』

ああ、そうか…。みとれてときめいているのもバレバレか…。なんかずるいな。

『ずるくないですよ。俺の心の中だって、見えますよ』

『それが、まだ、できないんじゃない…。だから、ずるいよ』

『じゃ、いいこと教えます』

『何?』

『たいてい、同じこと思ってます。俺はひかりさんだから、当たり前ですけど』

『え?』

『まあ、一緒にいないときには、別々のこと考えてたり別々の行動してますけど、二人でこんなふうに面と向かってるときには、同じようなことを感じてますよ。感覚を共有してるっていうのかな』

『ええ?何それ?だって、私は今、昴くんってどうしてこんなに奇麗なんだろうって思ってたんだよ?これは、私だけの感覚でしょ?』

『だから、俺も今、ひかりさんって奇麗だなって思ってたってことですよ』

「またまた〜〜〜」

あ、声に出てた…。でも、あまりにもびっくりすることを言うから。

「ほんとですよ」

そう言うと、昴くんはにこって笑った。

頼んだものが運ばれてきた。昴くんは嬉しそうに、

「うまそう！いただきます！」

って手を合わせた。そして、嬉しそうに食べだした。私はその嬉しそうな顔を見て、可愛いな～～と思いつつ、食べだした。

「美味しいね～～！」

と私が言うと、昴くんは、

「あはは…。ひかりさんだって、嬉しそうに食べてて、可愛いですよ。」

と笑った。

あ、また、可愛いって思ってたのが、伝わっちゃったのか…。これじゃ、どんな感情も考えも、昴くんにはつつぬけだ。嘘をついても、わかっちゃうし、隠し事もできないや。

「そりゃ、そうですよ。だって、自分なんですから」

うん。そうなんだよね。でも、その感覚がまだ、わからない。昴くんは昴くんで、私は私でしょ？って思ってしまう。

「そのうちに、わかりますよ。ほっといても、わかるからほっといていいですよ」

昴くんは、にこって笑ってそう言った。そして、また美味しそうに食べだした。

食べ終わると、デザートとコーヒーが、運ばれた。

「ひかりさん、砂糖は何杯？」

「私は、いつもミルクだけ」

「え？砂糖入れないんすか？」

「うん。」

「そうなんだ。俺は２杯も入れちゃう。甘くないとコーヒー飲めない」

「ふうん、そういうのは、違うんだね。まだ、１９歳だから？」

「それ、子どもだって言いたいんすか？」

「う～～ん。だって、１０歳も下だから」

「ちぇ～～～～」

あ、本当にふてくされてる…。

『魂じゃ年齢なんて関係ないのに…』

昴くんの声が聞こえた。

「そうか…。そうだよね？年齢があるのって、ここの地球上でだけなんだ」

「そうっすよ」

「……」

「え？」

昴くんが少し驚いていた。あれ？なんで？私が思っちゃったことで、驚いたけど…。私今、なんて思ってたっけ？

そうだ…。１０歳も下の昴くんに恋したりするのは、変だよなって思ってたけど、そういうのも関係ないのかって…。

「あ…、う～～ん。恋するのは変だって言う、そういう感覚、俺もありますけど…」

「え？！そうなの？」

「はい。でも、俺は１０歳も上なのにっていう感覚はないです。どっちかっていうと、ひかりさんは、俺じゃないですか。俺が俺に恋してるってどうよって…。そんなことは思ってました」

「そっか～。私は、１０歳も年下の昴くんをまさかねって思ってたけど…」

「ですよね。でも、年齢は関係ないすよ」

「うん…」

私はデザートを食べた。甘さの控えたケーキで、とても美味しかっ

た。昴くんも美味しいって言って、食べていた。

それから、コーヒーを飲んで、ふと思った。そのふと思ったことも、昴くんは、感づいていた。

「…悩んでるんですか？」

「え？うん。ちょっとね…」

「緒方さん…？」

「うん。薫って友達が、昔の旦那を忘れるには、新しい恋だよって言うんだけど…。映画に誘われた。でも、どうも一緒に行く気がしなくて…。どうしたらいいのかなって。薫はね、前進だって言うんだけど…」

「でも、行きたくないんでしょ？」

「うん」

「じゃ、その気持ちに素直に、従ったらいいんじゃないんですか？」

「え？」

「だって、行きたくないんですよね？」

「うん」

「今までも、何で会ってたんですか？」

「え？」

「緒方さんって人のこと、好きじゃないんですよね？って、ひかりさんの心は言ってますけど？」

「うん…。そうだよね。やっぱり、昴くんもそう感じるよね？」

「はい」

「そうだよね～～。無理して人を好きになんてなれないよね。それに…」

「まだ、傷も癒えてない…」

「それも、わかる？」

「わかりますよ。多分、俺の方が、びしばし感じてると思います」

「え？」

「ひかりさん、蓋してるから」

「何に？」

「悲しいとか、辛いとか、そういう感情。心の奥に溜め込んで蓋してる。でも、俺には、そういう蓋された感情も流れこんできます」

「え？そうなの？じゃ、昴くんが苦しくなるんじゃないの？」

「大丈夫です。ただ、感じてるだけですから。俺があれこれ、考え

込んだり、悩むことじゃないから、ただ、感情を感じるってことができますから」

「……」

「でも、ひかりさんは、あれこれ、考えちゃうでしょ？本当は、ただ、悲しいって泣いたり、苦しいって叫んだりしたらいいだけなのに…。自分がいけなかったのかとか、赤ちゃんに対しても、すごい罪悪感じてたりとか…」

「そういうのも、わかるの？」

「わかりますよ。すごいですよ。溜め込んじゃって、なんていうのかな、渦になってるって言うか、重いし、暗いし、そんなの心の中に溜め込んで、そうとう苦しいだろうなって思います」

「…。でも、どうしたら…」

「だから、感情出して、味わって、開放したらいいんです。味わうだけでいいんです。罪悪も感じなくていいんです」

「でも…」

私は、涙が出てきて、言葉が続かなくなった。

「それに、誰かを恨んではいけないとか、そういうことも考えなくていいんです。自分を責めたり、裁かなくてもいいんです。ただ、感情を、そして、自分の中の思考を観ていたらいいんです」

「でも…」

「言ったでしょ？思考は、本来のひかりさんじゃないですよ。誰かを憎らしいって思ったら、それは、過去から来ている情報ですから。本来のひかりさんは、ただの光です…。あれ？なんか、光、ひかりでわけわからなくなりそうですね」

昴くんはそう言うと、にこって笑った。

「……」

私は、涙があふれて止まらなくなった。なんて、優しい言葉を言い、優しい表情をするのだろうか。その言葉を発するたびに、昴くんから光の渦が発せられ、私を優しく包んでいた。

「優しいね。昴くん」

「でも、この優しさは、ひかりさんのものでもあるんですよ」

「私が、昴くんだから…？」

「うん。そう」

「……」

「俺、ちょっと今思ったんですけど…」

「え？」

「俺は、ひかりさんみたいな辛い体験ってないんです。１９年間生きてきて、そんなに悩んだり苦しんだこともないし。いろんなこと

に恵まれてて、夢もどんどん叶ってるし。だけど、苦しいって感情や、悲しいって感情を、ひかりさんと共有して、ひかりさんと一緒に、それを乗り越えていくのかなって、そんなこと思ったんですよね」

「……」

「それで、もしかしたら、俺が一緒に感じることで、ひかりさんは癒されていってるのかなって」

「私、去年の秋から冬にかけて、本当に苦しかったの。ずっと自分の部屋に閉じこもって。それで、友達の薫が心配して、外に連れ出してくれて…。それから、今年になったら、美里が私に会ってくれて、いろいろと一緒に行動していたら、だんだんと気持ちがあがってきて…。でも、本当に癒してくれてたのは、昴くんだったような気がする」

「俺？」

「うん。昴くんが出てる映画やドラマを観たり、あ、写真集も買った。それを見てるとね、すごく心があったかくなった。幸せな気持ちになれたんだ」

「うん…。それ、今年に入ってからでしょ？」

「そう」

「俺、何度もひかりさんのもとに、来てたよ。どうにか、ひかりさんとコンタクト取りたくて。でもなかなか、ひかりさんに俺の声届かなくて。それで時々、宇宙船に魂だけ飛ばしてたんだ。そうした

ら、ある日、映像がスクリーンに映し出された。ひかりさんが、階段から落ちて、魂が抜けて、宇宙船に来るまでの映像。それも、俺がエネルギーで、ひかりさんのこと階段から落としてる…。はじめは、びっくりした。でも、それをしないと、ひかりさんとコンタクト取れないってわかってさ」

「それで…？」

「うん。それであの日、駅まで行って、エネルギー飛ばして…。でも、ちゃんと怪我しないよう、エネルギーで包んで…。ちょっと、そんなことが自分に出来るか不安だったけど、でも、あのスクリーンに映ってたことは、きっと起きるだろうって信じてさ」

「スクリーンには、未来が映るの？」

「わからない。他の未来の映像は映ったことないし…」

「そう…」

「うん」

「じゃ、私が昴くんの出てる雑誌やＤＶＤを見て癒されてたとき、昴くんのエネルギーも来てたんだ」

「うん。だから、俺のことをひかりさん、見てたんじゃないかな～。そのへんはよくわからないけど。この世界ってうまくできてて、何も偶然ってないからさ」

「そうなんだ…」

「なんでもうまくいってるんだよ。だから、あまり悩むこともないし、今、目の前のことを取り組んでいたらいいんじゃないかって思う。それは俺、なぜかわからないけど、ずっとしてきてたな」

「目の前のこと？」

「うん。だから、無理して好きでもない人と会おうってしなくっても、いいんじゃないの？」

「…うん」

あ、そういえば、明日の夜、葉月ちゃんとプレアデス星の人と会う…。昴くんに言ったほうがいいかな。

「うん。言わなくても、聞こえちゃってるし…。プレアデス星？」

「あ。そうか。聞こえてるんだもんね…。」

口を使って会話してたから、心で会話できること忘れてた。

「なんかね、葉月ちゃんって昨日一緒に行った子、宇宙人とチャネリングができるんだって。そのことを教えてくれたのが、その過去生がプレアデス星の人でね…。その人、地球のアセンションの手伝いに来てるって…。」

「一緒だね。俺らと」

「やっぱり？目的が一緒の人？」

「っていうかさ、俺らもプレアデス星人だよ。あ、だったよって言

った方がいいのかな」

「ええ?!!!!」

「だから、仲間かもね」

「……」

「あ、でも、わからないよ。いろんな人がいて、幻想を見てものを言ってる人もいるから」

「幻想?」

「そう、例えば、２０１２年に地球は破滅するとか、宇宙人の襲撃があるとか…。あれは、まったくの幻想」

「まったくの?」

「うん」

「なんでわかるの?」

「う〜〜ん。なんでかな。多分、地球は愛と光に包まれた世界になるって、確信があるからかな」

「…その手伝いに来ているんだよね?私たち」

「そうだよ。なのに、地球が破滅なんて、おかしいでしょ?俺らが会ったのも、ちゃんとミッションに組み込まれてることだ。宇宙は完璧だからね」

「……」

「あれ？頭の中、こんがらがってる？ぐちゃぐちゃしてるね。」

「うん…」

じゃ、葉月ちゃんは？

「葉月ちゃんも、もしかしたら、同じミッションを持ってるかも」

「え？」

「わからないけど…。そのチャネリングしてる人は、俺みたいな存在かも」

「ね。いろんなスピリチュアルの本を読んだんだけど、ツインソウルっていう本があって」

「ソウルメイトとか、ツインソウルでしょ？」

「知ってる？」

「なんとなく、俺は本じゃなくて、誰かのブログで読んだかな」

「あれ、本当のこと？もしかして、私と昴くん」

「本当といえば、本当。嘘といえば、嘘」

え？どういうこと？！

「何度か味わってない？俺とだけじゃなくて、地球というか宇宙全体と一体になる感覚」

「ある。すべてが一つになる…。すごい開放感」

「うん。みんなつながってるんだ。だから、二人だけつながってるっていうのはない」

「じゃ、私たちは？」

「うん。俺がひかりさんってことと同じように、他の人も、ひかりさんなんだ。みんな一つだから。」

「じゃ、なんで？昴くんと…」

「う～～ん。難しいね、説明するの。プレアデス星での俺らは、一つだった。いや、分離も出来たし、一つにもなれたし…」

「？？？」

「地球上じゃ、考えられないよね。俺と、ひかりさんの体は、一つになれないもんね。でも、光の状態なら同化できる。もっと、大きな大きな意識と一緒になろうと思えば、それも可能。だけど、少しだけ波動を下げてっていうか、分離して、光なんだけど人型になってたのが、宇宙船での俺たち…。もっと波動を下げて、こうやって物体化して、分離しているのが3次元の俺たち」

「う～～ん。波動を下げるって？」

「これまた、難しいけど…。粒子の動きをゆっくりする…。早ければ早いほど、高い波動になる。わかる？」

「さっぱり…」

「じゃ、これ見て」

昴くんは、スプーンの端を持って、ゆっくりと振った。そのあと、早く振って見せた。

「早いと、ぐにゃぐにゃに見えない？それに、もっとスピードをあげたら、スプーン自体見えなくなる。早いと柔らかくて、もっと早いと見えなくなるんだ」

「へ～～～。なるほどね」

「でも、止めると、ほら…。硬いし、まっすぐだ」

「目の錯覚じゃないの？」

「う～～ん。ま、錯覚ってのはおいといて…。俺らはみんな、粒子でできてる。エネルギーってそうなんだよ。それが早くに動いているか、遅いかの違い…」

「へ～～～～」

なんで、そんなこと知ってるのかな？

「あ、いろいろとインターネットや、本で読んだりしたし。ある程度は思い出したところもあるし」

「ふうん。すごいな～」

あれ？そういえば、「小さな宇宙人アミ」でもそんなことが書いてあったっけ。

「うん。それ読んだよ。俺も」

「前から、こういうの興味あったの？」

「う～～ん、ちょっとは。俺の母さん、スピリチュアル好きでさ。いろんな本あったし」

「じゃ、お母さんももしかして、何か…」

「そうだね。同じ目的もってるかもしれない。でも、そうじゃないかもしれない」

「ふうん…」

じゃあ、もしかしたら、私たちの周りにも、仲間がたくさんいるかもしれないんだ。

「かもね。でも、詮索はなしだよ」

「うん。思考はいらないんでしょ？」

「そう」

あれ？そういえば、思い切り、昴くん、タメ口…。

「あ！ごめん。なんかずっとそうだった…」

「いいよ。なんかそっちの方が、話しやすい。それに、魂には年齢ないんでしょ？」

「うん」

コーヒーも飲み終えてたし、私たちは出ることにした。昴くんは、また帽子とサングラスをかけた。

「ここ、俺のおごりね」

「え？いいよ。払うよ」

「誘ったの、俺だから。次は、もしかして、ひかりさんに払ってもらうかも…」

「そう…？ありがとう。ごちそうさま」

昴くんは、レジでお金を払った。するとお店の人に、

「天宮昴くんですよね？」

って聞かれていた。

「ああ…はい」

あれ、答えちゃったよ。

「サインしてもらえますか?!」

ああ…。どうするの?

「はい、いいですよ」

ええ?受けちゃったよ。

お店の人はなぜだか、色紙を持っていて、そこに昴くんは、サインしていた。壁を見ると、なにやら、誰だかわからない人のサインが飾ってあり、たまにもしかしたら、有名人が来るのかもしれない。それで、色紙があるのか…。

お店を出て、駅までの道、心の中で聞いてみた。

『サイン、よかったの?しても…』

『うん、全然』

でも、あそこの店に昴くんが来たなんてことが、知れたら、みんな驚くんじゃないかな~。

『そうかな?飾ってあっても、俺のサインだってわからないよ。読めないでしょ?あのサイン』

『だけど、お店の人が、色紙の下に名前書いたりしたら?』

『そんときは、そんときだって。抵抗したりせず、現実はそのまま受け止めていったらいいと思うよ』

は〜〜。ときどき、昴くんがすごいって思うよ。大人だなって…。

「え?さっきは、子ども扱いしたのに?!」

「え?ああ、お砂糖のこと?」

「そうだよ」

「いいじゃん。もう…。あれ?根に持ってたとか?」

「べ、別にそんなことないけど」

心を静かにして、ちょっと昴くんの心の声を聞こうとした。すると、

『ガキだって思われたくないよ…』

って声が聞こえた。

『思ってないよ。でも、たまに可愛いなって思うことはあるけど』

『あ、読んだ?俺の考えてること』

『うん、読めちゃった。へへ…』

『何?そのへへって…。やけに、嬉しそう』

『だって、昴くんの心の中、見れるんだもん。なんか、嬉しくて…』

『なんだよ、それ…。言っとくけど』

『昴くんは、私でしょ？』

『そう、そういうこと。自分のことを知って、喜んでるんだよ？』

『だとしても嬉しいよ』

『そう…？』

私たちはお互い、なにもしゃべらず、ただ、顔をにやけさせていたから、周りの人から見たら、かなり異様な二人だったかもしれない。

駅に着き、改札口で昴くんのことを見送った。周りには女子高生もいたが、黒ずくめの昴くんのことは、誰も見ようとはしていなかった。

なるほど。みんな逆に避けてるわ…。

『でしょ？』

昴くんは、ホームへの階段を下りながら、そう心の中で言ってきた。

『明日も、舞台でしょ？頑張ってね。あ、これから仕事もあるのか…。頑張って』

『サンキュー。ひかりさんも、仕事でしょ？頑張ってよ』

『うん！ありがとう』

そして、昴くんの声はしなくなった。

ミッション2　仲間に出会う

翌日、バイトが終わり葉月ちゃんと共に、あのプレアデス星人だったという人のもとを尋ねた。その人の名前は、白河ノエル。ハーフで、すごく美しい人だった。年齢は、私よりも3~4歳上かな。とても、グラマラスな、セクシーな女性だ。

その人のマンションの一室で、セッションを行うらしいが、部屋にはいってみると、いたるところに水晶や他の石が並んでいて、お香もたいてあり、かなり怪しい雰囲気だ。

「リーディングもしてみますよ。初回でしたら30分で、3000円で受けられますけど」

30分、3000円?それも、初回だから、安いってことかな?じゃ、いつもならいくらなんだ…。と、思ったけど、まあ、3000円なら払えないこともないと思い、見てもらうことにした。

「じゃあ、葉月ちゃんは、あっちの部屋で待っててくれる?それとも、一緒にいても平気かしらね?」

「ああ、はい。別に…」

リーディングというものが、何かはわからなかったが、特に一緒にいてもらっても問題はない気がしたし、逆にちょっとこの部屋の雰囲気になれなくて、一緒にいて欲しいと思ってしまった。

ノエルさんは電気を消して、キャンドルに火を灯した。ますます、怪しくなってきた。そして私の名前と、誕生日と、何を聞きたいか

を聞かれた。

「えっと…」

特になかったので、

「これから起きる未来…」

と聞いてみた。

ノエルさんは目を閉じて、なにやらぶつぶつ言い出した。そして、

「あ、見えてきました。ビジョンが…」

と話し始めた。

「あなた、大恋愛するわね」

「え?!」

驚くような答えが返ってきた。

「それと…、なんだろう、これ…。本、1冊の本。小説か何か…。本を出してる」

「え?!」

これまた予想外というか、そんなこと思ったこともなかったし、逆に私は昔から文章を書くのが、苦手だった。

「そうね…。それがどうも、役割のようよ。今生の目的…」

「じゃ、過去生も見れますか？」

私は思わず、聞いてしまった。あ、知ってることだったっけ。

「じゃ、ちょっと見てみるわね」

また、ノエルさんはぶつぶつ小さく何かをつぶやき出し、

「過去生は…、あ、面白いビジョンね。宇宙船だわ、大きな…。そこにいるみたいよ」

と、目を閉じたまま言った。

「一人で？」

「他にもあなた以外にいるみたいだけど…。あ、あなたプレアデス星人ね。私と一緒だわ。あ…。すぐ隣にあなたと同じ波動の人がいる。う～～ん。ツインソウルかしら。もしかして、大恋愛するのは、その人…」

「え？！！！！！」

また、私は思わず叫んでいた。それって、昴くんじゃないのか？！

「その人、誰ですか？」

隣から、葉月ちゃんが聞いてきた。

「う〜ん、わからないわ。宇宙船の中のその人と、地球では姿形が違うし、さっき見たビジョンによれば、そうね。若そうだったわね」

ああ、やっぱり？

「ありがとうございます」

「そうとう、ショックなことばかりだった？まあ、受け入れられないわよね。いきなり、あなた宇宙人でしたって言っても…」

「は…はい。」

それは、もう知ってたこと。それより大恋愛っていうのと、本を出すっていうのが驚きで…。本当だろうか？

「じゃ、次は、葉月ちゃん。葉月ちゃんは、星野さんがここにいてもいいのかしら？」

「はい。いろんな私の体験話してるし、平気です」

「そう。じゃ、今日は何を見てみる？」

「チャネリングしてくる宇宙人について。なんの目的があって、話してくるかがわからなくて」

「わかったわ」

また、ノエルさんは目を閉じて、ぶつぶつ言い出した。

「う〜ん。今回、そのチャネリングしてくる宇宙人のことを聞いたんだけどね。どうも、その人、あなたと同じ時代に地球人として、生まれ変わってきてるようよ」

「え…？」

「あ、さっきの星野さんもそうね。宇宙船にいた人も、地球で地球人になっているように…」

「じゃ、もしかして、会える？」

「……あ！」

「え？」

「あなた、もう会ってるみたい」

「え？！」

「未来じゃないわ、この映像…。ここ最近、誰かに会ったでしょ？」

「男性ですか？」

「そう」

「え？誰かな…」

「新しい出会いなかった？本当にここ数日」

「え？え？バイト先？違う？」

「う〜〜ん…。一瞬って感じ…。ああ…、ぼやけちゃって見えないけど」

「一瞬？じゃ、すれ違っただけとか？」

「会話はしてる。何かびんと感じた人いない？あったかさや、懐かしさや、優しさや…」

「話していて、あったかいって？」

「そう、何かこう、惹かれたとか、感動したとか」

「感動か〜〜。最近じゃ、昴くんかな」

え？！

「昴？どんな人？」

「俳優さんです。若いイケメンの。最近その人の舞台観に行って、帰りがけばったり会えちゃって」

「…ばったり？」

「そうなんです。びっくりしちゃった。優しくて、あったかい人でした」

「その人かも。なんか若い感じだし、雰囲気かっこいい感じもするし、私最近の若手の俳優さんって、まったくわからないから、名前も顔も一致しないけど」

「ええ?!ほんとうですか?」

「う〜ん。もし、彼なら、また会えるようになってるんじゃないかな」

「わ〜。嬉しい。え?でも、じゃ、その彼から、私話しかけられてたってことですか?テレパシーで」

「それは、わからないわ。ややこしくなると思うけど、宇宙とここ、地球だと、時間が違ってるの。正確に言うと、宇宙には時間がないって言った方がいいかな。つまり、今この瞬間に、無数の次元のあなたがいて、無数の次元の彼がいる。だから、高い次元の彼からのコンタクトだってことも、ありえる」

「難しいです〜〜」

「そうよね。ま、どっちにしろ、多分この地球にいる彼も、そのうちに目覚めるかもね」

「何にですか?」

「使命よ」

「え?じゃ、私も、使命が?」

「そうよ。私と一緒の…」

「私もプレアデス?」

「ああ、違うわね。でも、違う星だけど、やっぱり地球を助けるために来てるわね」

「え?でも、未来の私が宇宙人…」

「宇宙に時間はないの。未来も過去も正確に言うとない。ただ、地球上で説明するには、時間って言うのかな、過去だの未来だの言った方がぴんとくるでしょ?だから、未来のあなたであり、過去のあなたでもある」

「ええ?ますますわからない。星野さん、わかります?」

「え?ううん。初めて知った」

「そうですよね。あ、でも、嬉しい!私、昴くんともしや、ソウルメイト?」

「そうかもね」

ノエルさんがそう言った。

私は、ショックを隠しきれなかった。

ええ?ええ?ええ?なんで?頭の中はパニックだ。

そうか…。えっと…。昴くんは私であって、葉月ちゃんでもあるのか。あれ?でも、昴くんは、プレアデス星人。

ああ。混乱する!!!!!!!!

頭がぐわんぐわんする中、その部屋を出た。隣の部屋に移動して、ノエルさんが冷たいお茶を出してくれた。

「星野さん、今日みたいなセッションは初めて？」

「はい」

「でも、精神世界は興味ある？」

「あ…はい。」

「そう…。どうして？」

私は、ちょっとだけ、自分の体験を話してみることにした。

「5月に私、駅の階段から落ちて、幽体離脱したことがあるんです」

「え？」

そのことは、葉月ちゃんに言ってなかったから驚かれた。

「その時に、光の中に入ったっていうか、すべての存在と一つになったっていうか。ものすごい開放感と、自由さを味わって」

「人間の体は窮屈なのよね、魂にとっては…。魂はもっともっと大きくて、広くて…」

「知ってるんですか？」

「私、子どもの頃から、しょっちゅう幽体離脱してるのよ。そこで

ある光に会って、それがプレアデス星の人だったわけ。私のふるさとの…」

「その人、地球に…」

「来てないわ。でも、私がチャネリングするときには、その人とコンタクトを取り、いろいろと見せてもらってるの」

「そうなんだ…」

葉月ちゃんが、また驚いていた。

「そんなすごい体験をしているのね～～。そうか～～」

ノエルさんは、私を見ながら微笑んだ。

「あなたのソウルメイト、会えるの楽しみね」

あれ？もう会ってるけど、見えなかったのかな。あ、未来を見せてくれって言ったからかな。

「さて…。そろそろ遅いし、今日はこのへんで終わろうかしら。いい？」

「はい。ありがとうございました」

セッションの料金を払って、私たちはマンションを出た。駅まで葉月ちゃんは、うきうきした感じで話をしていた。

「そういえば、昴くんと会ったとき、ほんとうにあったかい光に包

まれてる気がしたんですよ」

ああ、確かに。光で包んでたからな～～。

「会うの、運命だったんだ。きっと」

私は、何も言えなくなっていた。

その夜、寝る前に昴くんを呼んでみたが返事はなく、じゃあ、昴くんが何を感じて考えてるかを感じてみた。あ…。どうやら、寝ているようだ。

私も、じゃ、夢の中で会うとするかなって思い、眠ることにした。だけど、寝ても昴くんのエネルギーを感じられず、変な夢を見ただけだった。

その夢には、ノエルさんが出てきて、葉月ちゃんも出てきた。そのうえ、そこにいきなりもと旦那も現れて、ノエルさんがこの人が大恋愛をする人だと言うのだ。

私は、夢の中でものすごいショックを感じ、真っ暗になっていた。それから、ぐるぐると走馬灯のように、彼と暮らして苦しんだ記憶がよみがえり、ものすごい苦痛を感じて、汗だくになって目が覚めた。

全身に冷たい汗を掻いていた。ああ…、私は、まだまだ昴くんが言っていたように、辛いという感情を閉じ込めたままでいるのか…。

ぐったりしながら、もう寝ることができなくなり、起きてシャワー

を浴びた。外は、明るくなり始めていたが、まだ5時半だった。

私は、自分の部屋に戻りベランダに出た。そして、ぼ〜〜っと、明るくなる空をただただ見ていた。

6時になり、朝ごはんを食べにダイニングに行った。まだ誰も起きていなくて、私はさっさと朝食を済ませ、着替えをして化粧をして、散歩に出ることにした。

家を出て、近くの公園に行った。ベンチに座り、ため息をした。私はいまだに、自分の家では自分の部屋しか居場所がなかった。

ベンチにぼ〜〜ってしながら、昴くんのエネルギーを感じてみた。どうして、昨日は夢の中に現れなかったんだろうか。

『おはよう。早いね』

昴くんの声がした。

『おはよう』

携帯の時計を見たら、7時を少し回ったところ。

『起こしちゃった?』

『ううん。今、目覚ましで起きたところ』

『そうなんだ。いつもこの時間?』

『うん。舞台があるときはね』

『そう…』

私は昴くんに話しかけるでもなく、何かをぼんやりと考えていた。
自分でも無意識のうちに。

『昨日は夢に、俺が出てこなかったって思ってるの?』

あれ?私そんなこと、今考えたかな…。

『俺いたよ。っていうか、一緒に苦しんでた』

『え?どういうこと?』

『ひかりさんの苦しい思いと一緒にいた。かなり、辛そうだったね。
変な夢っていうか、過去がよみがえってたのかな?』

『一緒に私の夢を見てたの?』

『みたいだね。多分、ひかりさんと同化してた。だから、いないよ
うに感じたんじゃないの?』

『そっか…』

『あの人、旦那さんだった人だよね?』

『うん…。徹郎って名前。』

『あの人は誰?なんかハーフっぽい色っぽい女性』

『ノエルさん？ほら、プレアデス星人だった…』

『会ったの？』

『昨日…。なんか、いきなり私もリーディングしてくれて…。未来とか、過去とか。あ、私がプレアデス星人で、宇宙船にいたことも当てたよ』

『未来って？』

『……』

昴くんとの大恋愛は、言わない方がいいかな。

『聞こえてるから…。俺と大恋愛？！そう言ってたの？』

『あ、昴くんとは言ってない。でも、宇宙船で一緒だった人だって言ってた』

『俺じゃん…』

『そうなのかな…。やっぱり』

『でも、未来ってのは、変わる可能性があるんだよ。今何を選択するかで』

『え？』

『他には？何か言ってた？』

『私が本を出すって。それが使命だって』

『ふうん…。そうなる可能性もあるってことだし、そうならない可能性もあるってことだね』

『なんで？違うかもしれないの？』

『宇宙が、その時1番俺らにとっていいってことを起こす…。っていうか、なんて言えばいいかな。何通りも、何百通りもあるんだ。でも、結局何を選んでも、行き着くところは一緒。使命を達成するように宇宙は、流れてるから』

『ごめん、ちんぷんかんぷんだ』

『なんか、まだひっかかってることあるね。何？ちょっとわかりづらい』

『え？何かな…』

あ…。葉月ちゃんのことかな。

『葉月ちゃん？俺とソウルメイト？』

『あれ…。私それ、考えてた？今。』

『うん。でも、それ多分、俺じゃないんじゃないかな。いや、はっきりとはわからないけど』

『なんで、はっきりとしないの？』

『これも、何ていったらいいのかな。俺って、たくさんの次元にいるから…。もしかすると、別の次元の俺が、コンタクトを取った可能性もあるし…。でも、今、この3次元にいる俺は俺だし…。う～～ん、もし今、3次元で会うようになってるとしたら、やっぱり、俺じゃないかな』

『???』

『わかんないよね?言ってる意味』

『さっぱり…』

『うん、いいよ。別に理解できなくても。それよか、やっぱり俺じゃないから、そう言っといて、葉月ちゃんに』

『ええ?なんて説明したらいいの?』

『そうだな～～。じゃ、一回俺会おうかな。このままうやむやにしてるのも、葉月ちゃんに悪いよね。それに、俺だって決め付けてたら、ほんとうの相手に出会っても気づけないことになるかも…』

『え?』

『人間の思い込みってすごいから、真実見えなくする。そのノエルさんって人も、もっと、しっかりとチャネリングしたら、俺じゃないことわかったんじゃない?』

『そうなの?』

『ま、いいや。そのうち、会えるようにセッティングするよ。あ、

じゃ、顔洗ってそろそろ、朝めし食べるから。またね』

『うん。今日も舞台、頑張ってね』

『サンキュ！』

それから、昴くんの声が消えた。私は、どっと安心感がやってきて、いきなり眠くなってきた。バイトの時間まであるし、もう一眠りしようかな…。

そうか。昴くんじゃないのか…。そうか。夢の中で同化していたのか…。そして、苦しみを共有していたのか…。

自分だけじゃなく、いつも昴くんが、同じように感じててくれることが嬉しかった。私、一人じゃない。いつも、昴くんがいる…。

公園を出て、家に帰り部屋に行って、ベッドに寝転んだ。そして、すぐに眠りにつき、母の声で起こされた。時計を見たら9時過ぎてて、慌てて着替えをして家を飛び出した。１０時前には店に行き、本を整頓しないとならないのに。

走って、走って、どうにかギリギリで本屋に着くことができた。息切れをしながら、着替えをして、店内に行った。

「おはようございます。もしかして、走ってきましたか？」

葉月ちゃんが、声をかけてきた。

「うん。寝坊しちゃった」

「夜、寝れなかったとか？」

「そうなの」

「私もです。興奮しちゃって。だって、ソウルメイトが、昴くんだってわかって驚いて」

「それ…、そのことなんだけど」

「星野さん、レジの3番に入ってくれる？」

「はい。」

店長に言われて、レジに入った。息がまだ上がっていたが、どうにかお客さんには笑顔で接することが出来た。

昼休憩の時、昴くんの声がした。

『今日、昼の部だけなんだ。そのあと、6時から取材が入ってるんだけど、新宿での取材だから、本屋に寄るね』

『え？！』

『取材の前の…5時くらいかな。いる？』

『5時まで仕事…』

『あ、じゃあちょうどいいかも、お茶でもしようよ』

『うん、いいけど…』

『えっと、なんていったっけ?あ!葉月ちゃん…。今日バイト?』

『うん、同じ時間だよ。あがるのも一緒』

『すごいグッドタイミング。じゃ、葉月ちゃんも一緒に』

『え?』

葉月ちゃんも?でも、そんなことしたら、ますます勘違い…。

『それを、きちんと説明するために行くから』

『わ、わかった。お茶していこうって誘ってみる』

『うん、よろしく。んじゃね』

『うん』

あ、頭の中真っ白だ。いきなりで、葉月ちゃん、驚くだろうな…。

私の休憩が終わり、葉月ちゃんと交代した。そして、葉月ちゃんが休憩から戻り、私は、

「葉月ちゃん、今日帰り、お茶していかない?」

と誘ってみた。

「はい。いいですよ~~」

葉月ちゃんは、にこって微笑んだ。

ああ…。なんだか、申し訳ない気もする。だって、昴くんがソウルメイトだって喜んでいたのに…。でも、真実を言った方がいいんだっていう、昴くんの言葉を信じることにした。

5時になり、まだ、本の整頓が終わらず私は店にいた。

『終わった?仕事』

いきなり、昴くんの声がした。

『まだ、本の整頓してる。葉月ちゃんもまだみたい』

『じゃ、本屋に行くよ』

『え?場所…』

『わかる。去年、サイン会で行ったから』

あ、そうか。また真っ黒ずくめなのかな…?

『ちゃうよ…』

すぐに昴くんが、返事をした。ああ、まだ私の心聞こえてたのか…。じゃ、この漠然とした不安も感じてたり…?

『な〜んも、心配することないって』

『やっぱり、感じてた?』

『うん。でも、大丈夫だから』

『わかった』

昴くんが、私だっていうことが、まだわからない。だって、性格があまりにも違ってて…。

『思考は…』

『本来の私じゃないんだよね？』

『わかってるじゃん。性格なんてのも、もともとないんだよ』

『なるほど…』

じゃ、心配性もマイナス思考も、私じゃなくて、植え付けられた観念ってわけで…。

『そうそう。親の影響かな。あ、でも親もまた、その親の影響受けてたりするし』

『そっか…』

手は、作業を続けてはいるが、心で会話を続けていた。そして、やけに昴くんのエネルギーをじかに感じると思って振り返ると、そこに昴くんが立っていた。

「わ！」

いきなりいるので、びっくりしてしまった。

「あ、ごめん、驚かせた？」

「うん…」

昴くんは、今日はサングラスも外してて、黒の帽子と白のTシャツにグレイのベストを着てて、それに、黒のジーンズ。見た目、どう見ても昴くんだとまるわかり。

『変装してないの？大丈夫？』

『外では、サングラスしてた。でも、本屋じゃ変でしょ？サングラス。それに、本が見れないし』

『でも、ばればれだよ～～～』

『いいよ。新宿だといつもの黒ずくめでも、ばれたりすんの。だから、もう隠さずそのままでいることにしてる』

『騒がれない？』

『意外とみんな、遠巻きにして見てるほうが多い』

すると、近くにいた女子高生が気がついたらしく、

「あ！うそ。昴くんだ」

と小声で、友達とこそこそしだした。隣の棚の整頓をしていた、バイトの子も気がつき、顔を赤らめていた。でも、だれも昴くんに話

しかけてはこなかった。

昴くんは普通に、本を棚から引き抜き、ぺらぺらと眺めたりしていた。

バイトの子が、すっといなくなり、しばらくすると、何人かの店員がちらちらとこちらを見出した。あれは、駄目だろう。他のお客さんにもばれちゃう…。

そして、すすすって私の横に来た子がいて、横を見たら葉月ちゃんだった。

「星野さん、気づいてます？すぐそこに、昴くんがいるんです」

ささやくように言って来たが、かなり興奮状態だ。

「なんか、また運命感じますよね！」

あ…、やっぱり変な誤解をしている…。

「何か、本お探しですかって聞いてきてみます。私のこと、覚えてるかもしれないし」

え？うわ…。積極的だな～～。大人しい感じに見えるんだけど…。

葉月ちゃんは、そっと昴くんに近づき、そのへんの本を片付けながら、

「何か、本をお探しですか？」

と本当に聞いていた。でも、どう見ても不自然だ。だって、昴くんは、本を探している様子がまったくなかったから…。

一瞬、昴くんが驚いているのがわかった。そして、

『え?なんて言ったらいいの?俺』

と私に聞いてきた。

『大丈夫ですって言って、断れば?』

『でも、変じゃない?あとで、お茶するんだよ?』

『じゃ、こんにちはって挨拶するとか?』

半分、冗談で言ったのに、

「こんにちは」

って本当に挨拶をしてしまっていた。もう、葉月ちゃんの顔は、喜び一色。

「も、もしかして、覚えてます?」

「え?あ…はい。舞台観に来てた…」

「やっぱり〜〜?」

わあ!葉月ちゃん、声でかい!私はそっと横に行き、

「葉月ちゃん、声大きくて、他のお客さん驚いてる」

と耳打ちした。葉月ちゃんはすぐに、

「あ！すみません」

と謝った。

…さて、このあとどうしたらいいものか…。

『ひかりさんから、一緒にお茶って誘ったら？』

『もう、葉月ちゃんには誘った』

『違うよ。俺に…』

『え？不自然でしょ？』

『…しょうがないな』

「えっと…神野さん？」

昴くんが、葉月ちゃんに向かってそう言うと、

「え？なんで名前？」

と、葉月ちゃんが驚いてて、

「あ、ネームプレート…」

と胸のネームプレートを、昴くんが指差した。

「あ、そうか…」

葉月ちゃんは、一回嬉しそうにした顔が、ちょっと曇った。

「…もう、仕事あがるんだよね？」

昴くんがそう聞くと、また、ぱあっと明るくなり、

「はい！」

と元気よく、答えてしまった。

「し～…」

私は思わす、葉月ちゃんにそう言った。

「あ…」

葉月ちゃんは、体を小さくまるめて、申し訳ないという顔をした。

「えっと…、え～と…。このあと、お茶…」

昴くんが、なんて言ったら、いいのかわからないながらにも、そんなことを言うと、

「え？」

葉月ちゃんは、ささやき声だけど、ものすごく驚いて一瞬その場を

飛び上がった。

「お茶をする予定なんだけど…。あの…、ひかりさんと…。それで、一緒にどう？」

「…え？」

今度は、葉月ちゃんは私の顔を見て、また、昴くんの顔を見て目を丸くした。

「し、知り合いなんですか？」

「うん。まあ、そのことは、あとでゆっくり話すよ」

「え？」

「もう、終わるでしょ？俺、先に店に行ってるよ。確か地下にカフェあったよね？」

「うん」

私がうなづくと、昴くんは、さっさと本屋を出て行った。

「…知り合い？いつ？いつの間に？」

「えっと…、あとで、話す。とにかく終わらせようよ、仕事」

私は黙々と、仕事を終わらせたが、葉月ちゃんはなかなか、はかどらず、私が手伝いをしてようやく終わった。

それから急いで着替えて、地下に行った。

「どこの店だか、わかりますか?カフェって3箇所くらいありますよね」

「えっと~~」

心の中で、聞いてみた。

『どこのお店にいるの?』

『なんとかコーヒー店。1番奥にある…』

『わかった』

私は、まっすぐに昴くんがいる店に行った。あとから、葉月ちゃんもついてきた。

席も1番奥の席にいた。この店は、奥まったところにあるのと、ちょっとおじさんがたむろしやすい店なので、ここにいるだろうなって、予想はだいたいついていた。

葉月ちゃんは、すごく不思議そうな顔をしたまま、席に着いた。

「あの…、知り合いって?」

そりゃ、びっくりだよね。何も言ってなかったし。

「コーヒーでいい?頼んじゃうよ」

昴くんが店員さんを呼んで、頼んだ。

「あの…」

葉月ちゃんは、自分の質問に早く答えて欲しいようだった。

「えっと…」

昴くんは頭を、ポリって掻いて、話し出した。

「何から話そうかな。その…、ノエルさんって人から聞いた、ソウルメイトの話なんだけど…」

「え?!なんで知ってるの?昴くん」

葉月ちゃんが、びっくりして聞いた。

「ああ、ひかりさんに聞いたから」

「え?」

「それで、ちゃんとその誤解というか、間違いというか、それを訂正した方がいいと思って」

「え?!」

ますます葉月ちゃんの目は、丸くなった。

「あのね…、葉月ちゃんと俺、ソウルメイトとか、そういうんじゃないんだ」

葉月ちゃんは、なにげに私の方を見てから、また昴くんの方を向き話し出した。

「そういうの、信じないってことですか？っていうか、なんか、せっかく私が信じてたのに、それをわざわざ訂正なんてされたくありません。信じられないならそれはそれで、けっこうです。でも、二人して、私にわざわざ、そんなこと言いに来るのってどうかと思います」

…あれ？なんか、変な感じになってきちゃった。…っていうのは、昴くんも同じように感じたようだ。

「ひどいです。ひかりさん。なんで、昴くんにこんなこと言わせてるんですか？」

「え？」

「わかった。昴くんのソウルメイトが自分じゃないから、それでひがんでとかですか？」

「え？違うよ」

「ちょっと待って。まず、話を聞いて」

昴くんが、慌てて葉月ちゃんの話を止めに入った。

「あのさ、多分他にいるんだ…。俺じゃなくて…。ノエルさんって人も、確実に俺ってわかって言ってたわけじゃないと思う。う～ん、なんて言ったらいいのかな」

葉月ちゃんは、暗い顔をして聞いていた。その表情を見て、昴くんはなんとか葉月ちゃんを、傷つけないよう言葉を選びながら話していた。

「もしね…、もし葉月ちゃんが、ソウルメイトとかそういうの、本気で探したいとか、君の使命を全うしたいと思ってるとしたら、本当の君の相手と出会うべきなんだ」

「え？」

葉月ちゃんの表情が、少し変わった。

「俺だって思いこんでたら、もし出会えてても、気づけないよ？いいの？」

「え…？どういうことですか？」

「ひかりさんから、話を聞いた限りだと、君、何か使命があるよね？」

「はい、そんなこと言われました」

「俺も、ひかりさんにもある。俺は、ひかりさんと一緒にその使命を達成するために、今、ここにいる。あ、聞いてたよね？ひかりさんが宇宙船で会った人…。それ、俺なんだ」

「え？！」

もう、葉月ちゃんの目はこれ以上大きくならないんじゃないかって

いうくらい丸くなり、口も四角く開いたままになっていた。

「ひかりさん、宇宙船での話は？」

「してない。幽体離脱の話しか…」

「ああ、そっか…。じゃ、その幽体離脱をしたあと、宇宙船に来て俺とひかりさんは会ったんだ。そのへんは、理解できる？」

「…ノエルさんが、ひかりさんは宇宙船にいたって」

「うん。それで、使命を全うするために、地球に二人で来た。その辺もなんとなくわかる？」

「じゃ、私のソウルメイトは？」

「わからない。でも、出会うようになってるし、ちゃんと流れに任せていたら、それが誰かはわかるようになってるよ」

「……」

葉月ちゃんが、うつむいて何かを考えているようだ。そこで私は、

「チャネリングできるんでしょ？してみたらどうかな」

と提案してみた。

「駄目なんです。声が一方的に聞こえるだけで。でも、最近ずっと、聞こえないんですよね」

「あれこれ、考えすぎてない？思考が邪魔するんだよ」

昴くんがそう言った。

「思考が…？」

「何も考えない方がいい。誰なのかとか、いつ会えるのかとか、あれこれ考え出すと、コンタクト取れなくなるんだ。だから、こんなことを言うのはなんなんだけど、そのノエルさんって人にリーディングもしてもらう必要はないんだ。宇宙に任せていたら、ものすごいタイミングでちゃんと出会えるようになってるから。それが誰かなんて、詮索すると、今回みたいに的外れなことになるよ」

「的外れなんですか？でも、私、昴くんに会ったとき、すごくあったかくて…」

「あ、それはきっと、俺から光が出てて、それに包まれたから。あ、でも言っとくけど、その光は、俺と、ひかりさんの光が同化したものなんだ」

「？」

葉月ちゃんの目が点になった。

「って、わからないか…。でも、とにかく俺は、そのソウルメイトって言い方をするなら、ひかりさんとが、ソウルメイトで葉月ちゃんとじゃないんだよ」

『でも、やっぱり葉月ちゃんとも、つながってるんじゃないの？』

心の中で昴くんに聞いてみると、

『みんな一つだからね。でも、今それ言ったら、こんがらがるだけだから』

と返ってきた。

『そっか…』

「なんか、すごく意地悪なことしているような気もしてきたけど…。でも、やっぱり、君は君の使命のために、ちゃんと出会うべきだと思うよ。その、君のソウルメイトに…」

「…二人は、ソウルメイトなんですか？」

「うん…。プレアデスでは、一つだった」

「え？ツインソウル？あ、それだったら、双子の魂か…」

「なんて言い方なのか、それはわからないけど…。一つでもあり、別でもあり…。この辺はまだ、理解できないよね？まあ、ひかりさんも理解していないみたいだけど」

「え？そうなんですか？」

葉月ちゃんは私の方を見て、聞いてきた。

「うん」

私はうなづいた。

「まあ、とにかく。ノエルさんといい、君といい、目的は一緒なわけだから仲間かな」

「え？」

「俺と、ひかりさん以外に、地球のアセンションのために、地球にやってきた宇宙人、初めて会ったや…。これからは、もっと、出会うようになっていくのかな」

「……」

私と葉月ちゃんは、目と目を合わせた。

「どうしたら、仲間だってわかるんですか？」

葉月ちゃんが聞いた。

「さあ？わかるときに、わかるようになってるんじゃないの？」

昴くんが答えた。

「あ、やばい。取材がこのあと、入ってるんだ。そろそろ行くよ」

「うん」

「はい」

私と、葉月ちゃんは、ほとんど同時にうなづいた。

「じゃ、あ、コーヒー代は払っておくから。ゆっくりしてって」

「え？駄目だよ。この前も、おごってもらった…」

私が慌てると、いい、いいって言って、昴くんは、とっととレジでお金を払い、出て行ってしまった。私はしかたなく席に戻り、まだ、半分残っていたコーヒーを飲んだ。もう、すっかり冷めていた。

「…昴くんじゃなかったら、誰？」

葉月ちゃんは、考え込んでしまっていた。

「わかるときが来ると思うよ。私もはじめ、誰だかわからなくて、知りたかったけど、思考が邪魔をするって言われて、頭の中、真っ白にして考えないようにしたんだ。そうしたら、わかちゃったんだよね。昴くんだってことが…」

「いつですか？」

「前に、友達と舞台を観に行ったとき」

「じゃ、私と一緒に見に行ったときは、もう…？」

「うん…。もう、知ってたあとだった」

葉月ちゃんは、黙っていた。

「でも、そんな話しても、誰も信じてくれないかなって思って。一緒に行った友達にも、まだしていないの」

「そうなんですか…。でも、そうですね。ドン引きされますよね」

「うん…」

「そうだったんだ…。じゃ、私もほっといてても、出会えるようになってますか？」

「うん。ほっておいた方がいいと思う」

「ええ？気になるのに…。ああ。でも、早くに会いたいし、ほっておくことにします」

「うん」

やっと葉月ちゃんの表情が、和らいだ。

「でも、すごいですね。昴くんがソウルメイトって…。あれ？ノエルさん、大恋愛をその人とするって言ってましたよね？」

「昴くんがね、未来は変わるかもしれないって…。今、何を選択するかで変わっていくから、わからないよって言ってた」

「え～～～？そうなんですか？昴くんと大恋愛だったら、超嬉しいことなのにね！」

「……」

葉月ちゃんは笑ってそう言ったが、私はなんとなくうんと言えず、苦笑いをしただけだった。

ミッション3　心の癒し

その日の夢もまた、悪夢だった。それも、うなされていたらしい。
朝、起きてダイニングに行くと兄がいて、

「昨日、うなされてたけど大丈夫か？」

と、聞いてきたので、はじめて、自分がうなされていたことに気づいた。そのうえ、兄が心配をしてくることにも私は驚いていた。

「ちょっと2日間、変な夢を立て続けに見て…」

兄にそう答えていると、母がキッチンからやってきて、

「あなた…、5月の終わりに、駅の階段の上から落ちたって本当？」

と、いきなり聞いてきた。

「え？何それ…」

兄が驚いて、

「それで、怪我は？」

と聞いてきた。

「ないよ。頭にたんこぶ作ったくらいで」

「でも、ちゃんと病院に行ったほうが…」

兄がそう言いかけたが、

「もう、診てもらった。異常はなかったから」

と、言って私は、黙々とご飯を食べた。

「なんでおふくろは、それを知ってるんだ。誰かに聞いたのか？」

「ばったり、ひかりの中学の同級生のお母さんに、昨日スーパーで会って…。あなたが階段から落ちたところを目撃したらしくて、しばらく気を失ってたけど、ひかりちゃんは大丈夫だった？って聞かれたのよ」

「ふうん」

私は、まったく感情を込めずそう答えた。

「こっち、知らないから、でも、話をあわせてもう大丈夫ですって言ったけど…。まさか、母親が知らないなんて恥ずかしいでしょ」

「……」

結局はそこか。私の怪我なんて関係ない。

「夢でうなされてるのは、関係あるのか？もう一回きちんと診てもらったら」

兄がそう言った。

「大丈夫だから」

私はそう言って、2階に上がった。後ろから、母が愛想のない子ねって言ってるのが聞こえた。兄は、それに対して何も答えていなかった。

情けない。体の心配より、体裁の方が気になるのか…。落ち込んだまま、私はバイトに出た。

昨日も夢に昴くんは出てこなかったけど、また、私の悪夢を一緒に体験していたんだろうか。だとしたら、申し訳ない気すらする。これは、私の苦しみなのに…。あ、ああ…。私ってことは、昴くんでもあるのか…。

バイトをしてても、その日は身が入らず、何回も間違えたりしてしまった。

昼に、地下の喫茶店で一人で、ランチを食べていた。すると、葉月ちゃんがやってきた。

「あれ?休憩時間、一緒?」

「はい。ひかりさんのあと、追っかけてきちゃいました」

「そう…」

「私、昨日の出来事、ノエルさんに言うかどうか迷ってて…。でも昴くんが、ノエルさんのリーディングすら、必要ないようなことを言ってたから、少しこのままにしておこうって思ったんです」

「そうだね。その方がいいかもね」

「あの…、舞台を観てて、どうやって相手が昴くんだってわかったんですか？」

「エネルギーかな…。宇宙船で会ってから、エネルギーだけはわかってたから…。昴くんから出てるエネルギーっていうかオーラっていうか、それが、宇宙船で会った人と一緒だったんだ」

「エネルギーって、わかるんですか？」

「うん。葉月ちゃんは声が聞こえたとき、何か感じなかった？」

「う～～ん。何も…」

「そっか。声がしただけ？」

「はい。体の中から聞こえてきて…」

「あ、一緒だ。私もだよ。昴くんの声、体の中から聞こえるよ」

「え？宇宙船で会ってからも、聞こえてたんですか？」

「うん。たいていが夢の中で。一回また幽体離脱しちゃって、そのときには、昴くんの魂と会話してたみたい」

「幽体離脱って、どうしたらできますか？」

「わかんないな。一回目は、頭を打ったとき、２回目は、ただぼ～～ってしてたら、体から離れてたんだよね。それ以来ないけど」

「へ〜〜」

頼んだホットサンドとコーヒーがきて、黙々と葉月ちゃんは食べだした。しばらくすると、口を開いた。

「なんか、聞いてても、ときどきちんぷんかんぷんで、ついていけないときがあって…。そういうときには、考えてもわからないから、何も考えないように最近してるんです」

「ああ、それ、いいかも。思考は邪魔をするって昴くんよく言うし」

「そんなによく、会っているんですか？」

「ううん。あまり会ってないよ」

「じゃ、電話とかメールで？」

「ううん。電話番号もメアドも知らない」

「え？じゃあ、どうやって連絡取り合ってるんですか？」

「うん、だから、心で会話する…」

「え？！どうやって？」

「いきなり、昴くんが話しかけてくることが多いかな。こっちからは、昴くんのエネルギーを感じてそこに、集中する。そうすると、呼んだ？って昴くんが答える…。あれ？なんで呼んだかどうかわかるのかな。不思議だな…」

「テレパシー？」

「テレパシーっていうか…。よくわからないや、私も」

「すごいですね…。ちょっとびっくり」

「でも、葉月ちゃんだって、声聞こえたんでしょ？」

「はい。いっとき…。最近は全然」

「もしかしたら、向こうはコンタクト取ってるのかも。思考が邪魔すると、聞こえなかったりするみたい」

「え？じゃあ、あれこれ考えない方がいいってことですよね」

「うん」

「あ～、もうやめよう。考えるの…」

葉月ちゃんはそう言って、コーヒーをすすった。

「あ…、ねえ、葉月ちゃん」

「え？」

「今、お店にはいってきた人、似てる…。でも、ここにいるわけないか」

「誰にですか？」

「悟くん。」

「え?!」

葉月ちゃんが、振り返ったその時、私たちのテーブルの横をその彼は素通りしていった。それを私も、葉月ちゃんも目で追った。

「ほ、ほ…星野さん」

葉月ちゃんは、驚きの様子を隠せない感じで私を見た。

「絶対、悟くんですよ~~」

ささやき声で私に言って、目を輝かせた。

「なんで、ここにいるのかな…」

葉月ちゃんは、どうやら、私の後ろの席に座った、悟くんをじっと見つめているようだった。

『悟くんが、この前の喫茶店にいる!』

私は、昴くんに心の中で話しかけた。

『ああ、昨日俺が行った、取材の場所、今日は悟さんが取材受けるって言ってた』

昴くんは驚くこともなく、普通に言葉を返してきた。

『舞台は？』

『今日は、夜だけだから』

『昴くんは何してるの？』

『これからＣＭの撮影』

『忙しいね…。ゆっくりする暇ないんじゃないの？』

『そんなことないよ。今日、１０時までぐーすか寝ていられたし』

『夢でうなされることなく？』

『あ…。悪夢っていうか、かなり苦しんでる夢は見た。ひかりさんの夢だよね？うなされちゃったの？大丈夫だった？』

『うん。昴くんは？』

『うなされてたかどうかは、一人暮らしだし、わからないや』

『一人暮らしなの？大変じゃない？自炊や掃除、洗濯』

『やってるよ～～。洗濯はコインランドリーに行くことも多いけど。でも、掃除が苦手。たま～ににになっちゃう。今度ひかりさん、掃除しに来て』

『ええ？』

「星野さん…。どうしましょう？」

「え？何が？」

「聞いてませんでしたか？私の話」

「ごめん…。あ、ちょっと待って」

『葉月ちゃんが、話しがあるみたい。じゃ、仕事頑張ってね』

『は～～い。またね～～！』

う～～ん。明るい返事だな～～…。

「ごめんね、ぼ～ってしてたよね？私」

「はい、ちょっと…。一点見てぼ～～って」

「昴くんと話してた。あ、悟くんは取材で新宿来たみたい」

「え？今、心で昴くんと、会話していたんですか？！」

「し～～。声大きい」

「す、すみません。でも、びっくりして。昴くんは今、何してるんですか？」

「今？どうだろ。これからＣＭの撮影って言ってたけど。舞台は夜だけなんだって」

「へ～～。そんな会話を今、してたんですか。すご～～～～い。羨

ましい！」

「昴と、会話してたって？」

いきなり、後ろの席にいた悟くんが私に聞いてきた。

「え？」

今の話、聞かれてたんだ。うわ～～～。かなりおかしな奴だって思われたかも…。

「君、心で会話できるの…？」

「え、えっと…」

「そうなんです」

私でなく、葉月ちゃんが答えた。

「君には聞いてないから、黙っててくれる？」

「すみません…」

葉月ちゃんが黙った。

「ちょっと、隣いい？」

悟くんは、私の隣の席に移ってきた。

「今の話…、ちょっと詳しく聞いてもいい？」

「なんでですか？」

「興味あって…」

「じゃ、今日昴くんに会ったとき、聞いてみてください」

「昴にも、話は聞いてみる。でも、君の話も聞きたいんだけど。それ、いつぐらいから？」

「…つい、最近です」

「はじめは何がきっかけ？」

「私が階段から落ちて、意識失って…」

「それから、声が聞こえるとか？」

「…はい」

「…で、どうして昴だってわかったの？」

「舞台を観に行って…。昴くんの方は、私のこと知ってたし」

「……。どうして、昴は君のことを知ってたの？」

「それは、私もよくわからないから、昴くんに聞いてください」

「…まいったな。こんなに近くにいたとは…」

「え？何がですか？」

「いや…。ちょっと変なこと聞いてもいいかな。その…。声が聞こえる前に、ＵＦＯとか、見なかった？」

「いいえ…。なんでですか？」

「いや、ちょっと…」

「ＵＦＯは見てません。でも頭打って、その瞬間幽体離脱して、宇宙船に魂が飛んでいってました」

「え？」

「そこで、昴くんと会いました。っていっても、昴くんの魂で、それが昴くんだとは、わからなかったですけど」

「昴、宇宙船にいたの？何の宇宙船？」

「わかりません」

「君、どこの星の人？」

「プレアデス…って昴くんは言ってました」

「そっか～。じゃ、星は違うんだ」

「はい？」

「あの…」

葉月ちゃんが、口をはさんだ。

「黙っててって言われたから、黙ってましたけど…。ちょっといいですか？」

「何？」

かなりぶっきらぼうに、悟くんは聞いた。

「私、ＵＦＯ見ました。ＵＦＯから光がど～～って私の方に向かってきて、一瞬包まれて。怖くて逃げました。そのあとしばらくの間、声が聞こえるようになって…」

「いつ？」

「去年の秋」

「その声は今もする？」

「いいえ、今年にはいってから、まったく…」

「何かした？」

「何かって？」

「あれこれ調べたり…」

「はい。ある人にリーディングしてもらって。あ、それからかも…

聞こえないの」

「ふうん…」

「何か関係があるんでしょうか？」

「そのリーディングしてくれた人、怪しい人じゃない？」

「いいえ。その人もプレアデス星人だったって…」

「……ふうん」

「あの…、なんでですか？」

「いや、本人はわかってないかもしれないけど、いんちきもいるから」

「いんちき？」

「そういうの名乗って、邪魔をする」

「なんの邪魔を？」

「真実を知る邪魔。」

「どうしてですか？」

「はっきり言うと、地球のアセンションを邪魔するって感じかな」

「ノエルさんは、そんなことないですよ。ね？ひかりさんも一緒だ

ったけど、全然、そんなことないですよね？」

「ごめん、私にはわからない。でも、葉月ちゃんのソウルメイトが、昴くんだって言ってみたりしたし…。どうだろう？未来の話だって、昴くんが言うには変わるって言うから、そういうのをリーディングするのも、どうかなって思う」

「でも、何回も幽体離脱して、プレアデスの人と交信もしてて…」

「昴と君が、ソウルメイトってその人言ったの？」

「はい。でも、確信してじゃないですよ。多分そうかなって感じで」

「そんなにあやふやなことを言うの？」

「……」

悟くんはずっと、クールに表情も変えずに話をしていた。だが、葉月ちゃんは、だんだんと不安げな表情になっていた。

「ね。葉月ちゃんだっけ？今、ちょっと目をつぶって、心の中静かにできる？」

「え？」

「頭で何かを考えない。っていうか考えてもいいけど、その考えを通り過ぎていくまで待つ」

「通り過ぎる？」

「禅を組んだときと同じ感じで…。したことあるでしょ？そういうの、興味持って、やってたよね？そのリーディングしてもらう前」

「禅はしていません。でも、ヨガをならってました。それで、ゆっくりと呼吸してると、声がはっきり聞こえてきていました」

「じゃ、そのときの呼吸を思い出だして」

「はい…」

どうしたんだろう？いきなり…。っていうか、なんで葉月ちゃんに禅をしていたでしょ？なんて、悟くんは言ったのかな？

しばらく、目を閉じて、葉月ちゃんは深く呼吸をしていた。すると、

「え？」

といきなり、目を開けて、ものすごいびっくりした顔をして悟くんのことを見た。

「……」

目を真ん丸くして、悟くんを凝視してる。悟くんも黙って、葉月ちゃんを見ていた。

「さ、悟くんだったの…？」

「え？え？何が？」

私は何がなんだかわからなくて、聞いてしまった。

「わ、私のソウルメイト…」

「え？」

「今、体の中から声がしてきて…。それで…」

「そう。ようやく聞こえた？この前劇場で会ったときにも、俺、心の中で話しかけてたよ」

「え？」

「さっきも、心の中でコンタクトとってたけど、まったく聞こえていないようだったから、何かあるなって…」

「じゃ、ノエルさんが、邪魔を？」

「いや、直接的にじゃないよ。多分、あれこれ言って、葉月ちゃんが混乱したり、考え込んだりさせるためだと思う。そうしたら、俺の声、もう聞こえなくなるからね」

「なんのために？」

「だから、アセンションをさせないために」

「ど、どうしてそんなことを？」

「光とは逆のエネルギーを好んでるからかな。地球が上昇しちゃうと、きっと、生きていけないんだ。まあ、そうしたら、また3次元の星に移住するのかもしれないけど…」

「でも、でもノエルさん、過去生プレアデス星人だって…。嘘だったの？」

「本当だろうね」

「え？」

私が、それを聞いて驚いてしまった。

「君と昴は、かなり波動の高いプレアデス人だったろうね。もしかして、光の体してなかった？」

悟くんは私に聞いてきた。

「うん。してた。光の人型だった」

「うん。プレアデスも、地球のように3次元から、だんだんとアセンションしていった星だ。次元をあげる人たちと、そのまま3次元にいすわるプレアデス人がいた。でも、プレアデス星自体が次元上昇して、そこにいられなくなったプレアデス人が、新たに3次元の星をめがけて、やってきた。ま、移住してきたようなものかな。それが地球」

「……」

私と葉月ちゃんは目を合わせた。葉月ちゃんは目が点になっていた。多分、私もだ。

「そのなかにも、今回、地球と一緒にアセンションするプレアデス

星人もいるだろう。でも、まだまだ、3次元で遊んでいたい人たちもいるんだよ」

「だったら、邪魔なんてしないでも…」

思わず私がそう言うと、

「そうだよね。でも、しちゃうんだろうね。それを見抜いて、邪魔されないようにするのも、俺らの役目」

と悟くんは答えた。

「え？」

「それを昴と、君、えっと名前は？」

「星野ひかり」

「星野さんか…。昴と星野さんとで、やっていく。そして、俺は葉月ちゃんと」

「私と、悟くんとで？」

「そう…」

悟くんはとても、クールにそう言った。なんだか、昴くんとは正反対のタイプ。沈着冷静。とってもクール。

「驚いたね。本当に、こんなに近くに仲間がいたとは…。でも、そんな時期に入ってるってことだな」

「時期って？」

「いよいよ、アセンションのために、俺らが動き出す。仲間集めて、結束して」

「どうして、集まるの？何をこれからするの？」

葉月ちゃんが聞いた。

「今回みたいに、邪魔をする存在から邪魔をされないよう、みんなで注意深く観察したり、みんなを守ったりってこともあるし…。あとはそうだな。俺にも今は、わからない。その時期が来たらわかる。これは、俺らが詮索する必要はない。なるようになってるから、目の前のことをしていくだけだ」

あ、昴くんと同じことを言ってる。

「目の前のこと？」

葉月ちゃんが不思議そうに聞いた。

「そう。あれこれ考える必要はない。流れに任せて、やってくることを受け止めてみたらいい。それだけだ」

「それだけ？」

「そう、あ。今の舞台だって、かなりアセンションに役立っている。昴の歌声なんて、ものすごい光を放って地球が浄化する手伝いをしているよ」

「浄化？」

葉月ちゃんはずっと、目を丸くしながら、聞き返していた。

「いろんな人の感情を、浄化させている。心を癒している。人を憎む思いだったり、羨む思いいだったり、悲しみや苦しみは、愛や光とまったく反対に、ベクトルが向くからね。アセンションのとき、かなりそういう感情があると、上昇しにくいんだよね」

「あの歌声で、地球が光に包まれるのを、私見ました」

私がそう言うと、

「え？」

葉月ちゃんが驚いていた。

「すごかったです」

「うん…。それが、昴の使命。俺はその補助をしている。今回の舞台ではね。反戦の物語で、ちょっと捉え方を間違えると、戦争を憎んだり、悪者にするところがある。でも、そもそも憎む行為や感情は、マイナスに働くから、そうじゃなくて、プラスに働くように、役者や客席の気持ちのベクトルを見守って、手伝っているのが僕の役目」

「でも、どうやって？」

「光で、闇の感情を覆うのさ。包んじゃうとね、闇は消えるんだ。

すごい光に照らされると影すらできなくなるんだよ」

「へえ～～～」

なるほどって私は思ったが、前で聞いている葉月ちゃんの顔は、なんのことやらって感じだった。

「ヨガでもいいし、禅でもいい。なるべく、邪念とっぱらえることをしてくれる？葉月ちゃん。深い呼吸っていうのはいいんだよ、ものすごく。その時には、多分俺とつながりやすくなる。そうしたら、声が届くようになるから」

「はい…、わかりました」

「うん。さて、そろそろ行こうかな…。じゃ、またね」

そう言うとレシートを持ち、悟くんはレジに行った。

私と葉月ちゃんも、時計を見て、慌ててレジでお金を払いお店に戻った。休憩時間を何分か、過ぎていた。

それにしても、驚きだった。葉月ちゃんのソウルメイトは、悟くんだったのか。

このことを早くに昴くんに言いたかったが、ＣＭの撮影を邪魔したくなくて、なるべく昴くんのことを考えず、エネルギーも感じないようにしていた。

夜、お風呂につかってぼけ～～ってしていると、昴くんが話しかけてきた。

『葉月ちゃんのソウルメイト、悟さんなんだって?!』

『うん。驚きでしょ?葉月ちゃんも驚いてた』

『俺も、驚いたよ。今日舞台が終わってから、二人でご飯食べに行こうって悟さんから誘われて、で、ご飯食べてたら、いきなり、葉月ちゃんと交信してたのは、俺なんだとか、お前と星野さんは俺の仲間なんだなとか言い出すから、もう、びっくり!』

『ごめんね、べらべらとしゃべっちゃって』

『大丈夫だよ。悟さんは、本当の仲間だ。でも、ノエルさんは違ったみたいだね』

『うん。それもびっくりしちゃった。』

『これからはそういうの、気をつけないとね』

『うん』

『今、何してるの?ひかりさん』

『お風呂だよ』

『気持ちよさそう。俺、まだ、帰りの電車の中だよ』

『そうなの?』

……あれ?いきなり、昴くんの声が途切れた。と、思った次の瞬間、

ものすごい昴くんのエネルギーを感じた。

わあ。同化してるのがわかる…。え？同化…？！

『あ、一瞬だったけど、風呂、気持ちよかった』

『ええ？もう！信じられない。お風呂に入ってるときには、やめてってば。恥ずかしいよ！』

『大丈夫だよ、同化してて、自分の体に戻るのって、何か考えたときなんだ。今、風呂気持ちいいって思った瞬間、俺の体に戻ってた。だから、もしよこしまな気持ちで、同化したらすぐに、俺の体に戻っちゃう。っていうか、よこしまな気持ちがあったら、同化すること自体無理だろうけど』

『そ、そうなの？』

『そ。だから、安心して。さて、そろそろ降りる駅だ。じゃ、またね』

『うん。お疲れ様』

昴くんの声が聞こえなくなった。

部屋に戻ると、美里からメールが入っていた。

＞明日の夜、ご飯食べない？

バイトが5時にはあがるので、

＞いいよ～。

と返事をした。

そういえば、緒方さんからはメールが来なくなったな。あ、そっか。返事をしていないからか。誘われた日曜日っていうのは、もうあさってだ。

＞日曜日は、用事が入りました。すみません。

と、緒方さんにメールを送った。その日、緒方さんからメールは来なかった。

翌日は、葉月ちゃんはシフトに入っていなかった。あのあと、悟くんと会話したのかな…。

6時に、美里と待ち合わせをしていた場所に行った。昴くんが芝居をしている劇場の駅、赤坂で会おうと美里に言われて、地下鉄の改札の前で待っていた。

「ひかり！」

美里が5分遅れてやってきた。

「ごめんね～。遅れた」

「ううん、大丈夫。でも、なんで赤坂？」

「うん。この近くにしゃれたレストランがあるの」

「へえ。そうなんだ」

さすが、いろんなところに遊びに行ってるだけあるな～～。

レストランに移動すると、まだ6時半にもなっていないのに、けっこう席が埋まっていた。

「予約した篠崎です」

「はい、篠崎様、お二人ですね。ご案内します」

美里、予約してくれてたんだ。

「すごい今、人気で予約しないと入れないって、昨日PCで見たら書いてあったんだ」

席についてから、美里がそう言った。

「そうなんだ」

「ちょっと楽しみでしょ？どんな料理なんだろうね。あ、そうだ。今日はこのあとも、もう1軒付き合ってよ」

「うん、明日バイト休みだし、いいけど。どこ？」

「ちょっとしたバーなんだけど。ビリヤードがあるの。お洒落なところで、たまに舞台が終わると、来るらしいんだわ」

「誰が？」

「悟くんと、昴くん」

知らなかった。そうなの？って今、昴くんに聞いてみたかったけど、舞台がもう始まるもんな…。

ワインが運ばれてきて、美里と乾杯をした。

「例の緒方さん、どう？その後」

「明日もね、映画誘われててたけど、断っちゃった」

「なんで？」

「気分乗らなくて…」

「あまり、好みじゃなかったか」

「う～ん。そういうわけじゃないかもしれないけど…。なんだかね。まだ、男の人と付き合う気になれなくて」

「そうなの…？」

「うん…」

「そっか…。まじめに考えすぎてる？もっと、気軽に付き合えばいいのに」

「でも、私も２９歳だし、相手は３２歳だし…。結婚のこと考えると思ってるよ」

「う〜ん、そうなのかな」

「…離婚してることは、緒方さん知ってるんだ。赤ちゃん流産したことも…でも」

「でも？」

「赤ちゃん、できにくいってことは知らないの」

「え？そうだったの？」

「うん。なんかそういうことを、知っちゃったら、結婚いやがるんじゃないかと思って…」

「そんなの…。子どもができなくてもいいって人かもしれないよ？聞いてみないと…」

「どうやって聞くの？」

「子どもが欲しいですかって」

「そんな単刀直入に？」

「それしかないでしょ」

「…やっぱり、やめた」

「え？なんで？」

「だって、別に緒方さんと結婚したいわけでもないし。そんなこと聞いたら、結婚したいって思ってるって思われるじゃん」

「したくないの？結婚」

「今はどうでもいい。それよりも、一人暮らしがしたいな。美里みたいに」

「う～～ん、気は楽だけど、大変は大変よ。私の場合は学生の頃、東京出てきたから、その延長だけど」

「…家にいるとね、息が詰まるんだ」

「そうなの？」

「バツ一は、実家にいると辛いよね。なんか、親がさ…、嫌がってるんだ」

「せっかく大事な娘が帰ってきたんだから、喜べばいいのにね～～」

「うちの親は世間体を何よりも、考えるから。私が駅の階段落ちたのを知っても、体の心配なんてしてくれないし…」

「ああ。そういえば、そのあと大丈夫だったの？」

「うん。たんこぶも１週間でひいたし」

「そう」

「兄が心配してくれてた。びっくりしちゃった。離婚して家に戻っ

たときには、何も話をしてくれなかったし、そのあとも、あまり口をきいてくれてなかったから」

「けっこう仲良かったじゃん。昔…」

「うん…」

「なんて声をかけたらいいのか、わからなかったんじゃないの？そっとしてただけかもよ？」

「そうかな…」

「ひかりから、話しかけたらどう？お兄さん話してくれるのを、待ってるのかも。そうしたら、家で一人は味方ができるじゃない。親はどこも一緒だよ。うちだってたまに帰ると、まだ結婚はしないのか、彼とはどうなってるんだって、うるさくて」

「そうなの？」

「そんなもんよ」

料理が運ばれてきて、私たちはしばらく料理を堪能した。食後コーヒーが運ばれ、ゆっくりとまた、話をし出した。

「ね、昴くんとの話、聞かせてよ」

「あ、うん。そうだな…。なんて言ったらいいかな。昴くんとは、昔一緒の魂だったらしい」

「え？ツインソウル？」

「ツインソウルなのかな？」

「双子の魂だから、違うか。ツインフレームかな？」

「なあに？それ」

「一つの魂だったのが、二つに分かれた…。だったかな？あれ？違ったかな。ごめん、私もあまり詳しくは知らないんだ」

「ふうん。でも、そんな感じかな」

「すご～～い。じゃ、分かれた二人が出会うようになってたってわけ？」

「うん…」

「わ～～、ドラマチック！素敵！それが昴くんだなんて。それを昴くんも知ってるの？」

「うん」

「で？」

「え？」

「それで、何があったの？」

「別に、何も…」

「え～～？別れ別れになってたのが、出会って、何もないわけ～～？」

「ないよ。別に…」

「なんだ、つまらない～～」

何を期待してたのか…。あ、恋愛とかそういうの？それは、きっとないだろうな～～。だって、大恋愛をするってノエルさん言ってたけど、あれもどうやらいんちきっぽいし。未来は決まってないって言うし。

「そっか。でも、知り合いってだけでもすごいわ」

美里が、そう言って目を輝かせて、

「今度会うとき、私も紹介してよ～～」

って言ってきた。

「う、う～～ん。一緒にいるときに会えたらね？」

「会う約束とかしてないの？」

「別に…」

「なんだ～～～！もう。じゃ、本当になんでもないんじゃんか！」

「うん…」

まさか、二人で使命を全うするのが、目的だなんて言えないしな。

「昴くんみたいな人なら、いいよね。もし言い寄られたら、ぐらってきちゃう」

「悟くんが好きなんじゃないの？」

「そうだけど、この前昴くんを間近で見て、ぐらってきちゃった～。あんな子なら、浮気してもいいかな～～」

え～～～？！

「なんで、もっと仲良くなろうってしなかったの～～？」

そう言われても…。

「あれ？そもそもいつ、ツインフレームだってわかったの？」

「劇を観にいったあの日だよ。それまでは知らなかったよ」

「え？なんでわかったの？！」

「なんでって。昴くんが教えてくれて…」

「あのときに？そんな話をいつしたの？」

「う～～ん。説明するとややこしくなるから、ごめんね」

「ふうん。ま、いいけどさ～～。な～～んだ、これからの展開を楽しみにしていたのに」

美里は本当に、残念そうにそう言った。

それから私たちは、その店を出て、バーに移動した。ビリヤード台が2台おいてある、お洒落なバーだった。そこでまた、簡単なおつまみと、カクテルを飲んだ。ワインだけでも私はけっこう、酔っていた。

二人で、ビリヤード台のすぐそばのテーブルで飲んでいると、

「ね。一緒にビリヤードしない？」

って、私たちよりも若めの、男性が話しかけてきた。

「二人できてるんでしょ？俺らも二人なんだ」

美里がいいよって言って、４人でビリヤードをした。

私は一回だけ、結婚前に徹郎とビリヤードをしたことがあったが、ほとんど素人。

一人の人が、あれこれ教えてくれた。最初は言葉だけで教えてくれてたのが、だんだんと手を触ってきたり、べったりと体をくっつけてくるので、そのたびに私は寒気を感じていた。

やだ…。男の人に触られるだけで、鳥肌が立つ。知らなかった。私、こんなにも男の人が苦手になってる。

「私、ちょっと酔ったから椅子に座って休む」

と言って、その男性から逃げた。

座っていてもどんどん、具合が悪くなった。寒気がして気持ちが悪い。お酒のせいかもしれない。

トイレに行ってみたが、吐きそうでも吐けず…。口だけゆすいで出た。すると、トイレの前にさっきの男の人が立っていた。

「大丈夫？」

と言って、私のそばによってくる。

「外の空気吸ったほうがいいんじゃない？」

と、私の腰に手を回す。どう見ても、顔は心配している顔じゃない。ますます私は、気持ちが悪くなった。

「だ、大丈夫」

と、その人から離れようとしたが、私からその人は離れようとしないで、出口から外に私を連れて出た。それから、人がいない暗い方へと、向かって歩いていく。

「離して」

と言っても、離してくれない。

「もう、大丈夫。店に戻る」

「まだ、顔色悪いよ」

「大丈夫！」

でも、ぐいぐいと私を連れて行こうとする。

やだ！昴くん！助けて！心の中で叫んだ。頭はぐるぐるする。目の前が暗くなる。息苦しくなる。気持ち悪い。

ぐいっ！

いきなり後ろから、腕を掴まれた。そして、その掴まれた腕からあったかいエネルギーが注ぎ込まれた。

「ひかりさん、大丈夫？」

「昴くん！」

後ろを振り返ると、真っ黒ずくめの昴くんがいた。

昴くんは、その男の人から私をひっぺがし、私を引き寄せた。私は、そのとき自分がガタガタ震えていることに気づいた。夏だというのに、体中が冷たくなっている。

ふわ…。その時、私にジャケットをかけてくれた人がいた。顔をあげると、悟くんだった。ジャケットから、すごくあったかいエネルギーが流れ込んできた。

「あんたたち、何？」

男の人が、昴くんに聞いた。

「俺らひかりさんと、この店で会う約束してたんだ。そっちこそ誰だよ？」

「なんだよ。連れがいたのかよ…」

そう言うと、その男の人は店に入っていった。

「大丈夫？」

昴くんはそう言うと、ぎゅって私を抱きしめた。ものすごい勢いで、昴くんのあたたかいエネルギーが注がれてくる。

「こっから、離れてどっかで休もう。あったかいものでも飲んだらいいよ」

悟くんが言った。

「美里がまだ、中にいるの」

「美里？ああ、前に舞台一緒に観に来てた…」

昴くんはそう言うと、

「悟さん、ひかりさんのこと頼む。俺、美里さん連れてくるよ」

と言って、お店に入っていった。

悟くんは、ジャケットの上からそっと肩を抱いてきた。悟くんからもあたたかいエネルギーが、注がれてくるのがわかった。

「あ、だいぶあったまったね。さっきすごい冷たくなってたけど」

「え？」

「体、冷え切ってたでしょ？震えてたし…」

「うん…」

そういえば、気持ちが悪いのも少し治っていた。

「あの男のエネルギーにやられたね。そうとう負のエネルギー出してたから…」

「負のエネルギー？」

「うん。吸収しちゃってたでしょ？多分、前よりもそういうの、入りやすくなってるよ。気をつけないと」

「どうして入りやすくなったの？」

「心を開いてるから。いつも開けている状態っていうのかな。いいんだけどね。そっちの方がたくさん愛や光のパワーを出せるから」

「…私が、開けてる？」

「うん。だから、今、昴と交信もしやすいでしょ？今、俺のエネルギーも受けやすいでしょ？」

「うん…。悟くんからは、昴くんがくれるみたいな、あったかいエ

ネルギーがくる」

「光を注いでるからね」

「どうしたら、負のエネルギーの影響、受けなくてすむようになるの？」

「一つの方法は、閉じること。それか、ガードすること。人と会うときには、その人のエネルギーを感じないよう、影響を受けないようにするって方法がある」

「そうしてるの？悟くんは」

「いや、俺も、多分昴もしてないよ。いつも全開」

「じゃ、負のエネルギーが入ってきちゃう」

「来ないよ。心の奥からいつも、光を出すようにしてる。そうすると、逆に負のエネルギーを持ってる人、闇って言った方がいいかな…。それすら、俺から出す光で包んじゃう。そうしたら、俺はまったくその負のエネルギーに影響受けないし、相手を光で包むから、その人の闇も消すことができる」

「すごい！何それ…」

「君もできるようになるよ。いや、多分そういうのもう、してるはず。でも、今日は何か自分がマイナスのことを思わなかった？」

「え？」

「光を出すどころか、自分の中の光も消すようなこと、考えなかった？」

「うん。考えたかも。男の人が苦手で、嫌だって…」

「それだけじゃないかもしれないな。なんか、心の奥に負のエネルギーを飼ってない？」

「飼う？」

「住まわせてるでしょ？奥底に…。いつもは蓋をして、でもたまに、蓋が外れて出てくる」

「…うん。そうかも」

「そのエネルギー、他の人の負のエネルギーと同化しやすいよ。気をつけないと…」

「蓋して、鍵でもかけたらいいの？」

「いや、その逆。さっさと心から追い出した方がいい」

「どうやって？」

「浄化…。まあ、昴がいるから、浄化してくれると思うけど」

その時、昴くんと美里がやってきた。

「ひかり、大丈夫？」

と、私のもとに来てから、

「わ！悟くんだ！」

と驚いていた。

「び、びっくりよ。もう、あんたはいきなりいなくなるし、トイレかと思って見にいってもいないし、そうかと思ったら、いきなり昴くんが目の前に現れるし。でも、なんで悟くんと昴くんが…」

「お助けマン参上ってとこ？」

悟くんが言った。

「え？」

「舞台終わって着替えしてたら、いきなりこいつが、ひかりさんが危ないって言って、飛び出していって…。俺も慌てて追いかけてきた。」

「ええ？」

美里は目を丸くして、驚いてた。

「危なかったの？さっきの男に、何かされそうになったとか？」

「いや、ぎりぎりセーフかな」

悟くんが言った。

「なんだ。そうか～。ちょっと、ひかりおおごとに捕らえすぎなんじゃない？もっと楽しめばいいのに。そんなに危ないやつらじゃなかったよ」

「美里さんだっけ？君はいいかもしんないけど、もうひかりさんを巻き込むのはやめてくんない？！」

「昴…」

一瞬、昴くんから黒いもやもやしたものが、美里の方に向かって出たのが見えた。それをすぐに横にいた悟くんが、光で覆って消していた。

「あ…。ごめん」

昴くんが、悟くんに謝った。

昴くんは私の肩を抱き、

「あ、だいぶあったまったね。良かった」

って言って、ほっとしていた。

「でも、まだ芯からあったまってないみたいだから、どっかであったかいもんでも、飲んだ方がいいかもよ」

と悟くんが言った。

「あったまった方がいいって？どうしたの？ひかり…」

美里が聞いてきた。

「そうとう具合が悪くなってたみたいだよ。俺らが駆けつけたときには、全身冷たくなって震えてたから」

悟くんが、美里に答えた。

「え？大丈夫？お酒のせい？」

美里が心配そうに聞いてきた。

「心の方…。まだ、いろんな傷が癒えてないんだ。それなのに、怖い思いをしたから」

昴くんが、少し辛そうに言った。ああ、そうか。昴くんも私の恐怖を感じたんだろうな。

「ごめん、ひかり。私が勝手に、あの男の人たちの誘いにのったから」

「……」

私は何も答えられなかった。ただただ、昴くんのエネルギーを体中で、吸収していた。

「その辺に、遅くまでやってるカフェ、あったよね？俺、腹減ってるし、入らない？」

悟くんがそう言った。

「うん。確かこっちにありましたよね」

昴くんは、私の肩をぎゅって抱きしめたまま、歩き出した。

夜、だいぶ遅くになっているのに、土曜日だからか人がたくさんいた。カフェについても、けっこう人がいて、昴くんと悟くんのことをすぐに気がつく人もいた。でも、そんなのおかまいなしに、ずっと昴くんは私の肩を抱いていた。

席に座ると、ようやく昴くんが私から離れて、

「何がいい？ひかりさん。あったかいコーヒーにする？あ、カフェオレとかの方がいっかな？」

と、私に聞いてきた。

「うん…」

私がうなづくと、昴くんは店のカウンターに注文しに歩いていった。

「美里さんの分、買ってこようか？」

悟くんが美里に、聞いた。

「え？ありがとう！ホットコーヒーがいいな」

「じゃ、買ってくるから、ひかりさんのそばにいてね」

悟くんが、そう念をおして、カウンターの方に行った。

「なんだか、ひかり、大事にされてない？あの二人から」

美里がそう言った。美里から少し冷たい空気が流れてきた。その空気に触れ、あったまっていた体が冷たくなっていくのがわかった。

「はい。カフェオレ」

昴くんが私のカフェオレをテーブルに置き、私の隣に座った。そして、テーブルの下で私の手を、ぎゅってにぎってきた。

片手で、ホットドッグを持ち、食べて、片手は私の手を握っている。

『あれ?また冷えた?』

『うん、ちょっと…』

美里のことは、言えないって思っていたら、

『美里さんのエネルギー吸っちゃった?』

と、昴くんが聞いてきた。ああ、そうか…。全部わかっちゃうんだっけ。

ぎゅうって握り締めてる手から、ものすごい勢いであったかいエネルギーが入ってきた。

悟くんが席に戻ってきた。悟くんは黙って席に着き、クールな顔をしたまま、食べだした。でも、悟くんからもすごい光が出ているのが見えた。その光と、昴くんの光がぐるぐると混ざり合い、店全体を包み出した。

あったかかった。そして優しくて、心地よくて…。気持ちの悪さもすっかり治っていた。体もほかほかと、あったまっていた。

『もう、大丈夫そうだね？』

『うん。ありがとう』

昴くんは、そっと手を離して、がつがつとホットドッグを食べだした。

「は～～」

いきなり、美里があくびをした。

「あ、ごめんなさい。なんか、体がほかほかして、眠くなっちゃって」

美里もすごい光に包まれたから、無理はない。

店の中にいる人も全員、なんだか安心したような、ゆったりとリラックスしているのがわかった。会話も少なく、店全体が、ゆるりとした時間の流れにいるようだった。

今まで、昴くんのエネルギーしか見えていなかったけど、悟くんもこうやって、光を出していたんだな。

「それにしても…」

美里が話をし始めた。

「昴くん、なんでひかりがピンチってわかったの？」

「え？」

「何か、メールでもしたの？」

美里が、昴くんに聞いた。

「あ、うん。ＳＯＳのメールがきて、すっとんで来たってわけ」

昴くんは、そう言ってごまかした。

「そうか、もしかしてトイレ行ったとき？」

「うん。そう…」

私もごまかした。

「さ、もうそろそろ出る？」

悟くんが、立ち上がりそう言った。

店から出て、４人で駅に向かった。店の中でも道でも、悟くんと昴くんに気がつく人はいたけど、誰も何も言ってこなかった。

「じゃ、俺ら、車で帰るから」

「え？そうなの？」

「うん、俺の車で、昴は送ってく。近くに住んでるし…」

「そう…。悟くん、今日はいろいろとありがとう」

「うん。じゃあ、また…」

悟くんはクールにそう言って、手を振った。昴くんも、

「気をつけてね」

と言って、また、あったかいエネルギーを送ってくれた。

「うん、ありがとう」

昴くんは満面の笑顔で、手を振った。美里も二人に手を振り、

「あ〜、なんだか信じられない」

と二人と別れたあとで、目をとろんとさせてため息をついた。

「あんなにかっこいい二人と、私たち、一緒に今までいたんだね。すごい〜〜。周りが見てたのわかった?私たち羨ましいって目で見てたよ」

美里がそう言うと、美里から暗いもやもやが出てきた。

え?何か今、変なことを言ったかな。マイナスなこと…。不思議に思いながら、私は光を出そうとした。でも、出てこない。その暗いもやもやがあわや、私の体を包み込もうとした瞬間、私はぎゅって心を閉じた。

方法はよく、わからなかったが、でも、心にシャッターを閉めるよ

うなそんなイメージをしてみた。そうすると、そのもやもやは、宙を浮き、そのうちに消えていった。

あ、黒い霧は、私には入ってこなかった…。それがわかった。

悟くんも、昴くんもいったいどうやって、光を出すのか…。やっぱり私には、心にマイナスの感情を飼ってるからできないのか…。

隣で、美里があれこれ話していたが、私の耳にはあまり届いてこなかった。私は昴くんのエネルギーを感じてみようとした。でも感じられず、話かけても返事はなかった。少し寂しくなりながら、私は家に向かった。

ミッション4　光で浄化

お風呂にゆったりとつかり、思い切りリラックスをした。すると、

『ひかりさん…』

と、昴くんの声が聞こえた。

『あ、昴くん』

『ああ、よかった。ずっと話しかけてたんだ。何かに没頭かなんかしてた?じゃなきゃ、考え事とか?なんか、ずっとひかりさんのエネルギー感じ取れなかったよ』

もしかして、さっきシャッターを下ろしたからかな?

『心に?美里さんからのエネルギー遮断したの?』

『え?なんでわかったの?』

『今、その時のこと思い出したでしょ?』

『うん…。光を出してみようとしたの。悟くんが教えてくれたみたいに。悟くんや昴くんは、負のエネルギーも光で包んじゃうんでしょ?』

『うん。そういうことを俺は、無意識にしてるみたい。でも、悟さんは意識的にしてるね。俺はまだまだだよ。さっきだって、美里さんに負の方を発信しちゃった。ひかりさんのことを傷つけるような

ことをして、美里さんに頭きちゃって…』

『見えた…。黒のもやもやしたの…。悟くんが光でそれを消してた』

『見えるの？』

『うん…』

『そっか…。俺も見えるんだ。だから、俺から出ちゃったら、慌てて光の方を出すようにしてる』

『どうやったら、光が出るの？』

『う～～ん。口で言うのは難しい。でも、出てるよ。ひかりさんからも』

『え？いつ？』

『舞台観に来てたときも…。あと、たまに、俺すごい光に包まれるよ』

『え？そうなの？』

『自分じゃ意識してないか…』

『うん…。どうやったんだっけな？』

『ひかりさん、俺のこと好きでしょ？』

『え？！な、何？いきなり…』

何を言いだすの～～？

『隠してもわかるよ。それに俺もひかりさん好きだし。その好きだっていう感覚、こう、心の奥から沸いてくるようなあったかいエネルギーってわかる？』

『なんとなく…。溢れてくるような感じ？』

『そうそれ…。それを他の人に対しても、感じてみるんだ。そうすると、光がふわって出る』

『…なんか難しい』

『そう？うん、そうかもね。本当に好きな相手なら、意識しなくても出るし、好きでもないと難しいよね。俺もだ。悟さんはすごいよ。誰に対してもそれができるみたいだ。って言っても、ここ最近しか見てないけど、誰に対しても光で包んでるみたい』

『なんでそんなこと出来るの？』

『なんでかな？でも、俺らがいたプレアデスより、ずっと高次元の星から来てるんだ。俺らよりもずっとお兄さんだよ』

『え？そうなの？』

『うん。そうみたい』

『じゃ、葉月ちゃんも？』

『だろうね。でも、葉月ちゃんにはまだまだ浄化しないとならない感情が、心の奥にあるみたいだよ』

『私みたいに？』

『うん、子どもの頃の辛い記憶みたい。俺もよくは知らないけど…。でも、悟さんがいるから大丈夫だろうけど』

『あ、それ、私も昴くんがいるから大丈夫だって、悟くんが言ってた。浄化できるって』

『うん…。だから、俺といるときには心閉じないでね』

『うん…。わかった』

『俺はまだまだだな…。修行が足りんよね』

『え？なんの？』

『1番に思っちゃうんだ、ひかりさんのこと…。そりゃ大事な存在だけど、周りの人も、同じように大事なんだ。なんてったって、みんな一つなんだし…。でも、ひかりさんのことだけを守ろうとしちゃってる』

『……』

『それ、今嬉しいって思った？』

『え？思ってたかな？私』

『うん。ひかりさんのことは、本当にいつでも大事に思ってるよ。思い切り大事』

『……』

『あ、思いっきり嬉しいって思った？』

『もう、いいよ～～。私の心の中解説しなくても…』

『あ…。俺のことも思い切り大事だって思ってる…？』

『だから、解説しなくてもわかっちゃうんでしょ？全部』

『そう、わかっちゃうよ。だから、必死で隠そうとしても無駄だよ』

『隠してないよ』

『隠そうとしてたよ。それに、恥ずかしがってるし。でも、どんなことも恥ずかしくないからね』

『うん…』

『あれ？なんか、ボ～～ってしてない？』

『のぼせたかも…』

『え？ごめん、お風呂に入ってた？もう話しかけるのやめるよ。じゃあね。おやすみ』

『うん、おやすみ』

お風呂から出て、リビングで扇風機に当たっていた。そこに、兄がやってきた。

「ひかり…」

「何？」

「バイトどうだ」

「どうって？」

「しっかりとやれてるのか？」

「うん」

「そうか…」

「なんで？」

私は、美里が兄と話したらどうだっていうアドバイスを思い出し、ちょっと話をしてみようって思った。

「いや…、離婚して家に戻ってきてからのお前は変だったから…。バイトしだして大丈夫なのかってちょっと思っていたけど、だいぶ回復したんだな」

「心配してたの？」

「当たり前だ」

「でも、何も話しかけてくれなかった…」

「友達で、鬱のやつがいたんだ。家にひきこもっているときにあれこれ声をかけて、頑張れって言ってたら、ますます悪化しちゃって、入院しちゃったことがあって…。鬱状態のとき、頑張れって言ったり、周りでとやかく言うのは、駄目なんだってあとで知った。だからお前のことも、何も言わないほうがいいんだろうって思ってさ」

「それで、今まで黙ってたの？」

「うん。だけど、外に行くようになったし、家ではまだしゃべりもしないし、笑いもしないけど、でも、バイトができるってことは、そうとう回復したのかって思ってね」

「そうなんだ…。うん、もうだいぶいいよ。友達や他にも、励ましてくれる人がいるし」

「うちは親があだからな。まったく逆効果だ。でも、しかたないかな」

「え？」

「頭の固い、世間体を気にして生きてる連中だから。ほっとくしかないよ」

「お兄ちゃんもそう思ってたんだ」

「そうだよ。俺だって、いろんなこと言われてるさ。この年で独身で、まだ家にいてとかさ…。ま、そろそろ家から出ようとは思って

たけど。そこにお前が帰ってきたから、この状態で家を出るわけにはいかないって思ってさ」

「私のために？」

「そりゃそうだ。大事な妹だからな」

私はそれを聞いて、ボロボロ涙を流した。

「泣くやつがあるか…。あ…いや、泣いてもいいんだ。泣きたいときは泣けばいいさ」

兄の言葉が、身にしみていく。本当だ。話してみないとわからないんだ。

兄からはあったかい光が出ていた。それが私を包んでいく。今までもこの光を、私に向けてくれてただろう。見えなかっただけで…。

「ありがとう」

私がそう言うと、

「なんかあったら言えよ。辛いでも悲しいでもいいからさ…」

と、また優しく言ってくれた。その言葉と一緒に兄から光が溢れ出てくるのを感じた。

自分の部屋に戻り、美里に、

＞兄と話をしたら、兄はずっと私の心配をしてくれてたのがわかっ

たよ。そして、私のために家に残っててくれたんだとそう言ってくれた…。

と、メールした。美里が、良かったね。ってすぐに返事をくれた。

不思議なことに、そのメールの文字からも光が見えた。メールからも光はやってくるのか…。じゃ、美里が本当に今、喜んでくれてるんだな…。

翌日は休み。ゆっくりしようと思っていたら、朝から携帯が鳴った。

「ひかり?あんた今日デート断ったの?」

薫だった。

「私のところに昨日、緒方さんから電話があったよ。ね?映画はいいから会うだけあったら?それで、付き合えないならはっきり断ったら?」

「え?」

「今の状態は、やっぱりお互いよくないかも。このままじゃ、二人とも前に進めないじゃん」

「うん」

「会うだけ会いなよ。用事なんて本当はないんでしょ」

するどい…。

「わかった」

私は、今日ではっきりと断ることにしようと思って、緒方さんにメールをして、時間を決め家を出た。

待ち合わせの場所に行くと、もう緒方さんは来ていた。

それから、二人でランチをしにお店に入った。

「すみません。用事があるなんて言って…。私まだ、二人で会うのに抵抗があって…っていうか、男の人と付き合うのがだめなんです」

「…まだ、傷が癒えてない？」

「はい」

「それを、僕が癒していこうと思ってるけど…」

一瞬、緒方さんから光が出た。ふわって出たけど、すぐに消えてしまった。

「癒してくれる友人がいるから、大丈夫です」

「薫さん？」

「いえ、薫もですけど、学生のときの友人や、他にも」

「…結婚はもうしないつもり？」

「わかりません。でも、今は考えられません。でも、緒方さんは、結婚考えてますよね？」

「まあ、この年だから」

「だったらなおさら、他の人を探してください」

「一目惚れだったんだよ」

「え？」

「君に惹かれて…食事にいけるようになって、嬉しくて」

え…？

「僕は、結婚が出来なくてもかまわない。このまま、君のそばにいられたら」

ゾク…。言葉は嬉しい言葉なはずだ。でも、緒方さんから出てくるのは、黒いもやもや…。

やばい。光を出そうとしても出ないし、心を閉じるのも遅かった。その黒の霧に包まれて、体が冷たくなった。それに、重苦しいし、息苦しい…。

「その友達の中に、男の人はいるのかい？」

「え？」

「いるの…？」

ますます、エネルギーは重くなる。ぐるぐるに巻きついて離れない。
何？これ…。

どうしよう…。どうしよう……。

昴くん…。昴くん…！今、舞台をしてる？…返事がない。

「ご、ごめんなさい。ちょっと具合が悪くて…。気持ち悪い。私帰ります」

出てきた料理にほとんど手をつけず、席を立った。頭がぐるぐるして、立ちくらみもする。

ふらつくと、緒方さんが、

「大丈夫？送っていくよ。車で来てるから」

と言って、私の肩を抱いた。

グラ…。重い…。駄目だ…。苦しい…。

「車、乗れません。電車で帰ります」

ますます、黒の霧が立ち込めた。

「じゃあ、車はおいていく。安心して。電車で帰ろう」

優しい言葉とはうらはらに、緒方さんから黒い霧がどんどん溢れ出るのがわかる。怖い…。

レジまで行くと、

「そこに座ってて。お金払ってくるから」

と私から、緒方さんは離れた。

今だ！私はふらつく足で店を出て、なるべく緒方さんから離れようとした。だけど、体はガタガタ震えるし、気持ちは悪いしで、なかなかうまいように歩けない…。

でもどうにか、トイレに逃げ込むことが出来た。

「どうしよう…。外できっと待ってる…」

私は、誰かに助けの電話をしようと思った。1番近くにいるのは、葉月ちゃんだ。私のバイト先はすぐ近くのビル。でも、今バイトの時間…？それでも望みをかけて、葉月ちゃんに電話した。

「もしもし？」

「葉月ちゃん？今、お店？」

「いいえ。今日は遅番で、のんびりと買い物してるところです」

「どこで？」

「新宿で…」

ああ…、良かった。新宿にいるし、バイトじゃないんだ。

「今ね…。気持ちが悪くて、トイレから出られないの。私も新宿にいるんだけど」

「じゃ、今すぐに行きますよ。場所は？」

私は、自分のいるビルの名前と階を教えて、じっとトイレの中で、葉月ちゃんを待っていた。

しばらくして、葉月ちゃんが来てくれた。

「星野さん、大丈夫ですか～～？」

「葉月ちゃん。良かった…。ごめんね」

「いいえ。星野さん、真っ青ですよ…」

葉月ちゃんは私が震えているのに気がつき、背中をさすってくれたり、手をさすってくれたりした。葉月ちゃんからは、すごい光が出てて、私はどんどん体があったまっていった。さすがだ。悟くんと同じエネルギーを感じる。

「外に誰かいた？」

「え？」

「男の人」

「そういえば、誰かを待ってる感じだった」

「私のことを待ってるの。でも…、私」

「どうしたんですか？」

「ちょっと、具合悪くて…。先に帰ってもらうよう伝えてくれない？」

「いいですけど…。送ってもらわなくていいんですか？」

「いいの…。本当は、お付き合いを断りにきたし…」

「え？」

「お願い…」

「はい、わかりました」

葉月ちゃんは化粧室から出て、しばらくして帰ってきた。

「言ってきましたよ。私が送っていくから大丈夫だって伝えました」

「ありがとう」

「でも、これから私仕事あるし、どうしますか？」

「うん、だいぶ楽になったし、一人で帰れると思う」

「…昴くんには？」

「え？」

「心で会話出来るんですよね？来てもらったら…」

「だめだよ。舞台があるもん」

「今日2回公演でしたっけ？」

「うん。多分、昼の部もあるから、今ちょうど本番中だよ」

「…じゃあ、私ちょっと時間あるし、どこかでお茶しながら休みましょうよ」

「ありがとう、そうする」

私と葉月ちゃんは、そのビルから出て駅の近くに行き、カフェに入った。そこで、あったかい紅茶を頼み、あったまった。

「あれから、会話してるの？悟くんと…」

「はい、何度か…。でも、私が、ゆったりと呼吸して、気持ちを落ち着かせないと、声がしないんです。もっといつでも、会話が出来たらいいのに…」

「そうなんだ」

「星野さんと昴くんは、よく会話してますよね。どうして出来るんですか？」

「わからないけど…。でも、他のことに集中したり、心閉じてると無理みたい」

「心を閉じる？」

「うん、今は私開いてるんだって…」

「え～～？じゃ、私閉じてるのかな。どうやって、開けるんですか？」

「ごめんね、意識してないからわからないや」

「そうなんですか。私もそのうち出来るようになるかな～」

「何時から仕事？」

「４時です」

「そう…。じゃ、あと１時間くらい」

「はい。ゆっくりとしていられますから、星野さんもそれまで一緒にここで、ゆっくりしていってください」

にこって葉月ちゃんが笑うと、あったかい光がくるくると葉月ちゃんから放たれた。その光に包まれ、また、私はあったかくなった。

二人でのんびりとしていると、

『ひかりさん…』

と、昴くんの声が聞こえた。

『昴くん？お芝居は？』

『今さっき終わった。今、楽屋にいる。どうしたの？何かあった？』

『え？』

『さっき、舞台の合間の休憩のとき、すごい冷たいエネルギー感じたから。ひかりさんでしょ？大丈夫なの？』

『大丈夫。今、葉月ちゃんといる』

『ごめんね。夜の部もあるし、俺今、ぬけられない…。もし辛かったら、劇場まで来て。楽屋に来れるよう、手配しておくよ』

『大丈夫。もう、だいぶあったまったし…』

『ほんと？でもまだ、いつものエネルギーと違ってるよ。あ…。ちょっと今、目を瞑ってて。ほんの一瞬、何も考えないで』

『うん…』

ふわ…。一気に体の中に昴くんのエネルギーが流れこんだ。あ…、今同化している…。しばらく、あったかいエネルギーに包まれていた。

『すごい怖い思い、した？』

『え？』

『今、同化した時に感じた…。緒方さん？』

『わかるの？』

『ひかりさんの記憶を読み取った…』

『……』

『そんなことがあったの？』

『え？』

『今、回想してたでしょ？』

『うん。そうか、そういうのもわかるんだね』

『独占欲だ。悪く言うとストーカーみたいな…』

『え？』

『緒方さんって人、ひかりさんを自分のものにしたくて、しかたないんだ。そういうエネルギーも、重くって暗い…。執着って感じかな』

『どうしたらいいの？とてもじゃないけど、光で包み込むなんて、私出来そうにない…』

『俺が一緒になんとかする。でも、ごめん、今日は無理だ。明日なら夜の部だけだ。明日の昼間会おうよ。バイトはいってる？』

『遅番で４時からだから、昼間はあいてる。昴くん、仕事は？』

『明日は何も入ってないよ。そっちに行こうか？』

『ううん、悪いもの。昴くんの家の方まで行くよ』

『あ、じゃ、うちに来て、うちの掃除手伝って…。なんて無理なお願いか』

『いいよ。でも、女性が行ったりして平気なの？』

『平気だよ。管理人さんには、お姉さんってことにしとく』

『お姉さんなんていないくせに』

『いるよ。もう、結婚して子供もいる…。あ、ごめん。これからみんなで集まるみたい。またね』

『うん』

私は目を開けた。すると、葉月ちゃんがじっと私の顔を見てた。

「もしかして、昴くんと交信してました？」

「うん。同化もしてた」

「同化ってなんですか？」

「うん、あのね。魂が一緒になるっていうか、どっちかの体に入るっていうか」

「え？そんなことも出来るんですか？」

「うん…。今は、私のところに来てた。ほんの一瞬だけ」

「幽体離脱してってことですか？」

「ああ、うん。そう…」

「わ～～、すご～～い！」

「それで、昴くんのエネルギーで充電してくれたから、もう大丈夫」

「こんなに離れてても、すぐ来てくれるんですね。愛されてますね～～」

「葉月ちゃんも、悟くんに愛されてるでしょう」

「え～～？そうかな。なんか冷たいけど」

「クールなだけだよ。ただ…」

「ただなんですか？」

「悟くんの場合は、他の人も愛してるっていうか…」

「他に愛してる女性がいるんですか？」

「ううん…。そうじゃなくて、博愛ってこと」

「ああ。みんなを愛してる…？そうかも。なんか、そんなこと言っ

てました。私が特別ってわけじゃないんですよね」

「でも、悟くんは葉月ちゃんなわけだし、やっぱり他の人とは違うよ」

「…そうですか？私は昴くんと星野さんが羨ましいです。私も昴くんだったらよかった」

ブワ…。黒いもやもやが、葉月ちゃんから出てきた。

ああ…。羨ましいって感情は、重いのか…。それって妬みになるのか…。

でも…。なんだかわかる気がする。自分だけを愛して欲しいって思っちゃうよね。大事に思われたら、嬉しいもの。そう思うと、葉月ちゃんのことが愛しく感じられた。

フワ…。私から光が放たれた。くるくる円を描きながら、葉月ちゃんを包み込み、葉月ちゃんから出た黒の霧がすうって消えた。

あれ…。ああ！これ…？！相手を愛しいと思う感情。それが光になって放たれるのかな…。

「そろそろ行きますね。私…」

「うん。本当にありがとう。助かった」

「はい…。それじゃ」

葉月ちゃんは、にこって笑って店を出て行った。葉月ちゃんからは

また、奇麗な光が飛び出していた。

…昴くんが、緒方さんの黒い霧は、独占欲だって言ってたな。自分のものにしたいという欲望、執着…。

怖いって思ったけど、私にだってある。好きな人が出来ると、私のことを好きになって欲しいと思い、他の誰かと仲良くしてたら、すごい嫉妬もする。自分のことを特別だって思ってほしいとも思う。それって、誰にでもある感情じゃないのか。相手が好きなら…。

昴くんにだって、そう思って欲しい。ううん。本当に今、ものすごく大事に思われてるのがわかるから、嬉しくてしかたがない。

すっかり元気になり、私は自分の家に帰った。兄がいてくれるという心強さがあり、自分の家が、そんなに嫌じゃなくなっていた。

そういえば、母からも父からも、そうとうな負のエネルギーを感じていたはずだ。ちょっと前まで、エネルギーが見えなかったし、心も閉じていたからわからなかったのか…。

家に帰ると、父も母もリビングにいた。私は、リビングからキッチンに行き、水を飲み、すぐにその場を去ろうとしたが、兄がダイニングに来て私に向かい、

「出かけてたの？」

と聞いてきた。

「うん。ちょっとね。」

「そう、日曜はバイト休みだったよね。友達と？」

「うん…。バイトの友達と、お茶してた」

「そうなんだ」

私と兄が会話をしてるのを見て、母と父はこっちをじっと見ていた。多分、驚いていたのだろう。何しろ私はこの家で、ほとんど口をきいていなかったから。

「ひかりはいつまで、本屋でバイトをしている気だ？そろそろきちんと働いたらどうだ」

父が私に言ってきた。あ…。やばい。また、黒い霧に覆われる。

と、警戒をして、心にシャッターを下ろそうとした瞬間、父からものすごいあったかい光が出ているのが見えた。

え…？なんで、光…？

「そうね。バイトなんかしてないで、きちんと就職して、一人立ちしてくれないと…。いつまでも家にいられたらこっちが迷惑するのよね」

母はいつものように、きついことを言いだした。でも、そんな母からも、光がどんどんと溢れ出てくる…。それは混ざり合い、私のことを大きく包んだ。驚いた。めちゃくちゃあったかい…。

そして、私はまるで母のお腹にはいったように、胎児のような安心感を覚えた。何重にも何重にも、あったかい光で包んでくる。家全

体を包み、兄までも包んでいた。

私はしばらく、呆けていた。いったい何が起きたんだろう…。知らない間に、涙も溢れていた。

「いい加減にしろよ！親父もおふくろも、ひかりのことなんだと思ってるんだよ？」

兄が、いきなり怒り出した。私が泣いたのを勘違いしたのだろう。

兄を見ると、ものすごい黒い霧が兄から放出されていた。私のことを思っての怒りだ。でも、怒りは怒りだ…。黒い霧が母と父をめがけて、飛んで行く…。

あ！母と父が霧に覆われちゃう！

そう思った瞬間…。母と父からものすごい光が飛び出て、あっという間に黒い霧を消してしまった。その光はどんどん大きく広がり、兄を包み込んだ。

ところが、父は、

「お前も人のことは言えないぞ。早くに結婚して、独立したらどうだ」

と、低い声で兄にそう言った。

「そうよ。家も出るはずだったでしょ？それなのに、いったいいつ出てくつもりなの？」

母も、きつい口調で言った。でも二人が話すたびに、奇麗なあったかい光が放たれる。そして兄を包む。

驚いた。言葉とは裏腹に、彼らは、私たちのことを思い切り、愛している。それは間違いなく、無償の愛だ…。言葉はこんなにきつくても、思いのエネルギーは、ものすごい愛だ……。

感動して、言葉が出なかった。常に常に、彼らは私と兄にこんなにも愛を注いでくれてたのか…。世間体じゃなかったのか…。これが親の愛か…。子を思う、無償の愛なのか…。

彼らももしかしたら、無意識なのかもしれない。でも、いつも無意識だとしても私たちを愛していたのか。根底に流れるものは、変わることのない愛だったのか…。

「ごめんなさい」

私は思わず、謝っていた。

「どうしたんだ？ひかり」

兄が驚いていた。

「私、心配をいっぱいかけてたんだ…。ちゃんと仕事も探す。家も出て自立する。結婚はまだ傷が癒えてなくて、できるかどうかはわからない。だけどもう、心配かけないように私、頑張るから…」

私からも、ものすごい勢いで光が二人に向かって放出された。

「わ、わかればいいんだ。わかれば…」

父がそう言うと、父からも光が放たれた。母は何も言わなかったが、母からも光が放たれて、二人の光がまた、混ざり合い私を包み込んだ。

「ありがとう…」

思わず、わたしはその光に御礼を言っていた。父と母は、驚いて私を見たが、でもすぐに視線を違う場所に向け、何かをし始めていた。でも、あたり1面には光が立ち込めていて、心地が良くてあったかかった。

ああ、なんで気づかなかったんだろうか。この家はいつも光で満ち溢れていた。こんなにも…。

私は自分の部屋に戻った。そこにも光は溢れていた。二人がいつも、家を光でいっぱいにしててくれたんだな…。

今まで、家では心を知らぬ間に閉じてて、気づけなかった。

お風呂に入っているときと、自分の部屋でだけリラックスをしていたから、自分の部屋が唯一の、心休まる場所だって、勝手に思い込んでただけだった。この部屋が心地いいのも、父と母の光で包まれていたからだったんだ。

「は〜〜〜〜〜〜」

私はベッドにねっころがって、大きく深呼吸した。

「気持ちいい……」

あったかくって、すっきりしてて、ものすごい居心地のいい部屋で、私は思い切りリラックスをした。

しばらくして眠気が襲ってきて、私は眠ってしまい、夢の中でふわふわと、昴くんの近くを浮遊していた。ああ、多分、幽体離脱してるな、私…。

どうやら、私のエネルギーに気づいたらしく、昴くんが話しかけてきたが、私は黙って昴くんと同化した。あったかくって、愛しくて、広がっていくなんとも言えないエネルギーだ。

ふって気がつくと、私は自分の体に戻ってて、目が覚めた。

『サンキュー、ひかりさん。これから舞台なんだ。緊張してたけど、落ち着いた』

昴くんが話しかけてきた。

『うん…。頑張ってね』

『うん！』

昴くんの元気な明るい声が返ってきた。

ああ…。昴くんが大好きだな…。ものすごく愛しい…。そう思うと、

『俺も！ひかりさん大好きだよ』

と昴くんの声がした。あ、まだ聞いてたのか…。

少し恥ずかしくなったが、でも、恥ずかしがらなくてもいいって昴くんは言ってたし、大好きだって思うことはけして、恥ずかしいことじゃないって思って、そのまま、昴くんから来るあったかいエネルギーを感じていた。

翌日、朝１０時に、昴くんの住んでる町に着いた。ドキドキする…。改札を抜けたところで待ってると、

『今いく。ごめん。５分待って！』

と、声がした。

『いいよ。慌てなくても…』

５分後、髪がぼさついてて、太いふちのあるメガネにＴシャツ、たくさん穴があいてるジーンズを着た昴くんが現れた。昴くんは走ってきたのか、息を切らしていた。

「ハア……。ごめん…。寝坊した。１５分前に起きた」

「え？そうだったの？」

「ごめん…。昨日、遅くまで起きちゃってて…」

「いいよ～。それよりメガネなの？いつも…」

「ああ、これは度なしレンズ」

「変装用？でも、どっから見ても…」

「わかってるって…。でも、わからない人には、わかならいからいいんだよ」

とぶつくさ言いながら、歩き出した。

『こっちだよ』

昴くんのあとを、とぼとぼとついていった。なんだか、隣で歩くのに気がひけた。

『大丈夫だよ。誰も気にしない。お姉さんかな?くらいにしか思わないって』

『そうだよね。もう、私年だし…』

『また、そういうこと言ってすねる…』

『す、すねてないよ』

『はいはい』

う〜〜…。なんかいつもと違わない?寝起きで、機嫌悪いとか?

そう思ったけど、何も返ってこなかった。昴くんはその代わりに、大きなあくびをした。

マンションの一階に、コンビニがあり、昴くんはそこに入っていった。

『ちょっと、食料買わせて』

『うん、いいよ』

私は、本をぺらぺらとめくった。心の中で会話をしているので、一見私たちはまったく赤の他人のように、見えただろうな。

サンドイッチと牛乳を買って、雑誌も1冊買い、昴くんは、

『いっくよ～～』

と、私に心で話しかけた。

『うん…。私も雑誌買ってから出る。先に店から出てて』

『はいはい』

私はレジに行き、雑誌を買った。ふと外を見るとコンビニの前で、昴くんは、雑誌を広げて待っていた。

『うわ!!!!!!』

昴くんが、雑誌を見ながら心で叫んだ。

『ど、どうした?』

『あ…。俺、先、部屋行ってる。そこのエントランスで、３０６を押して。俺の部屋番号だから』

『うん』

なんだろう…。なんでいきなり?何かへんなものでも、載ってた?

私はお店を出て、エントランスに行き、３０６を押した。しばらくして、

「開けるよ!」

って声がして、マンションの入り口が開いた。

中に入り、３０６の部屋に向かった。私がチャイムをならそうとすると、中からドアが開き、

『はいって』

と、心の声で、昴くんが言った。

『うん』

こっちも、心で返事をした。入ると、カギを昴くんは閉めた。一瞬、私はドキってした。

「あ。誰か変なやつが入ってこないようにカギ、しただけだから」

その、ドキっていうのが、昴くんに伝わっちゃったらしい。

「わかってるよ」

なんだかにくらしくなって、そう言った。

「それより、どうしたの？さっき…」

と、昴くんに聞くと、

「ああ…。これ見て」

昴くんが、見ていた雑誌を見せてくれた。

「え？！！！！！」

そこには、私と昴くんが写っていた。あれだ。赤坂のカフェで夜、悟くんや美里といたときのだ。美里と悟くんは写ってなくて、私の肩を抱いている昴くんの姿がしっかりと、写っている。

「これ…！いつの間に？」

「ああ…。撮られちゃったね」

「…私だって、わかるかな？これ…」

「知ってる人が見たら、わかるかもね。顔はちょっと隠れてはいるけど」

「うん…」

両親が見たら、わかるかも…。あ、もしかして、緒方さんも…。ゾク…。また寒気がした。

「大丈夫？」

昴くんがそれに気がつき、心配してくれた。

「うん…」

なんだろう…。緒方さんのことを思い出しただけで、ぞっとする。

ぎゅ…。昴くんが私を抱きしめた。わあ…。あったかいエネルギーが溶け込んでくる。

「大丈夫だよ」

「うん…」

しばらく目を閉じて、昴くんのエネルギーを感じていた。

「きっと、緒方さんのことを思うと、波長があっちゃうんだね？」

「え？」

「どうやら、いつも思ってるみたいだよ。ひかりさんのこと」

「なんでわかるの？」

「同化した時に、感じたから」

「いつ？」

「今もちょっと…。この前もかな」

「いつも、思われてるの…？」

ますますぞっとした。でも、いつも思ってくれてるなら、昴くんだって同じだ。昴くんだったら嬉しくて、緒方さんだったらぞっとするって、緒方さんに悪いことなのかな…。

「ああ、それは違うよ。エネルギーがまったく異質なんだ。俺からは、まあ、もともと俺とひかりさんはエネルギーが一緒だからさ、心地いいのは当たり前だけど。それに俺からのエネルギーは、光、愛。それも無償のね。見返りを求めていない。わかる?」

「うん…」

「緒方さんの場合、思い切り見返りは求めてるし、独占欲はあるし…。愛とは違う。執着だ。どうにか振り向かせようとしてる…。そりゃ、いいエネルギーを感じないのは当たり前だよ」

「…昴くんは、見返り求めないの?」

「ひかりに?求めるわけないじゃん。だって、ひかりは俺だよ。俺が俺に見返り求めてどうすんのって話だよ」

「そっか…」

あれ?今、呼び捨て…。

「いいじゃん…。駄目?呼び捨て」

「ううん。別に」

ちょっと嬉しかったりして。

「でしょ？喜んでたもんね、今」

「もう、わかってるなら、聞かないで！」

「あはは…。いいじゃん」

「……」

「そ…。人を愛してるようで、愛してなかったりするんだよ。みんな…、感違いしていることが多い」

「え？」

「えって…。今、心の中で言ってたじゃん。求めるのは愛じゃないのかってさ」

「与えるのが愛？」

「うん。それとか、癒しだったり、信頼だったり、支えだったり…」

「求め合うのは違うの？」

「求める必要がないからさ」

「？」

「愛を求めなくても、自分から湧き出る愛で、十分なんだ。自分だって満たされる」

「ああ、それはなんかわかる。自分から溢れ出てくる愛が、すんごいってこと」

「心の中思い切り満たされて、幸せでしょ？」

「うん。無償の愛か…」

「そう」

「それ、昨日両親からも感じた…」

「ああ。なんか俺も感じた。すごい光に包まれてたのが…。すごい癒しの瞬間だったよね」

「癒しの？」

「うん。ものすごい勢いで、ひかりの怒りとか、悲しみとか、孤独とか、浄化されたよ。光に包まれて…」

「そうだったんだ」

「だいぶ、気持ちが軽くなったでしょ？」

「うん。本当に…」

「良かったね。家族はみんな、ひかりのこと愛してたでしょ？」

「うん…」

私は嬉しくて、一気に心が満たされ、そのままその光は部屋中を覆

った。部屋からも外に放出し、辺り1面に広がったと思う。

昴くんは、しばらくそれを感じているようだった。それから、

「なんだ。俺がぎゅってしなくても、大丈夫そうだね」

って言って、笑った。

「じゃ、逆に俺のことぎゅってしてもらおうかな…」

「ええ?そんな必要あるの?いつも光で満たされてる昴くんが…」

「あるよ。これでもね、いろんな感情を持っちゃうんだよ。でもたいてい、外に出して浄化はしてるけど」

「え?」

「溜め込むとよくないんだ。浄化するには出して、光で覆う…」

「うん。なんとなくわかる気がする」

「じゃ、浄化してくれる?俺の中にあるもやもや、今から出すから」

「え?うん。…でも私に出来る?」

「出来る。昴のことが大好きって言って、ぎゅってしてくれたらいいから…」

「ええ?」

なんだか照れくさかった。でも、昴くんのためにしてあげようって思った。

「うん…、そんな感じ」

私からはもうすでに、昴くんに光が放たれて包み込んでいた。

「じゃ、行くよ。けっこう、マイナスのこと吐くからね」

「う、うん」

どんなマイナスなことでも、包み込もうと覚悟を決めた。

「緒方のやろう！ひかりはお前のもんじゃねえ！ひかりのことを悪いエネルギーで覆ったりするな！独占できるなんて思ってんじゃねえよ！」

……？！驚いた。そんなこと思ってた？あれ？それを私は感じ取れていなかったな…。

昴くんの中から黒いもやもやが飛び出た。ふわって辺りを覆っていく…。私は、ただただそんなことを思ってくれてたのが嬉しくて、昴くんがめちゃくちゃ愛しくなった。

あ、抱きしめるんだっけ…。恥ずかしかったけど、ぎゅって昴くんを抱きしめた。ものすごく愛しくて、心の奥からこんこんと愛が溢れてくるのを、自分でも感じ取ることができた。

ふわ～～～。優しくてあったかい光が、私から放たれ、昴くんを包み込む。黒い霧はあっという間に消えていった。

「上出来…」

昴くんがそう言った。でも、まだ私は昴くんに抱きついていた。とても、気持ちが良かった。光に溶け込み、どこからが昴くんで、どこからが私かわからなくなる。

昴くんもぎゅって私を抱きしめた。あ…、同化した。ふわ…。魂だけ宙に浮いた。昴くんの魂と同化したまま…。どんどん浮かび上がり、いつの間にか天井をつきぬけ、空に舞い上がり、それでもまだあがっていった。

ひゅ〜〜〜。光があたり1面広がり、気がつくと宇宙船に二人でいた。そこで、二人は離れると、二人とも光の人型になっていた。

「あ…。ここまで来ちゃったよ」

と昴くんは笑った。それから二人で、スクリーンに映ってる地球を見た。

「ズームアップさせてみる?」

「え?そんなこと出来るの?」

「出来るよ。俺のマンションの俺の部屋…」

いきなり地球が迫ってきて、大気圏を抜け、日本が見えて、さらに東京、さらにもっともっとズームアップされ、あっという間に私と昴くんの頭上の絵が見えた。

「あ～～。いっちゃった顔して、抱きついてるな。ちょっとエロチックだね」

あれ？今、ものすごく変なことを昴くんが言ったのに、恥ずかしいとか、そういう感情がわかない。

「魂だからね。恥ずかしいって感情がないんだ。今のひかりには…」

「そうか…。悲しいも、苦しいもない？」

「ないよ。感じてる？」

「ううん、全然」

「痛みもないでしょ？」

「うん。ただ、開放感…。すごく気持ちがいい」

「うん」

「…時々ここに来てるの？」

「うん、時々ね」

「どうやって？」

「ここのエネルギーを感じる。一瞬で来れるよ。今日みたいに」

「ここを感じたの？昴くん。」

「いや、ここを思い出したのは、ひかりじゃない？」

「そうかも…」

無意識のうちに、昴くんを抱きしめてたら、ここの気持ちのいいエネルギーを思い出したのかもしれない。

「……」

昴くんの考えてることが消えた。ぼ〜〜ってして、ほとんど空白。昴くんはただ、スクリーンを観ていた。スクリーンは、また地球が映し出されていた。

昴くんからは、ものすごい光のうねが出ていて、それが地球に向かって発信されていた。ものすごい愛だ…。私は昴くんと同化した。そして、一緒に光を地球に向けて発信した。地球はまるごとその光で、包まれた。

心の奥からこんこんと湧き出る愛…。愛…。愛……。

そして…。ふっと気がつくと、自分の体に戻っていて、昴くんがぎゅって抱きしめてるその感覚を、感じていた。

「あ…」

昴くんを見ると、涙を流していた。気がつくと、私の頬も涙が流れていた。

「あれ？」

「感動して泣いちゃったんだ。俺ら…」

「え？」

「魂じゃわかんないけど、戻ってきて、心が感じて泣いちゃったんだ」

「何に…？」

「愛に…。地球はものすごい愛を返してた。感じた？」

「うん。なんか、大きな愛で包まれた…」

「地球の愛の力だよ。一体化してたんだ。俺らと…」

「すごいね…。ものすごい愛だったね」

「うん…。地球も生命体なんだ。地球にいる存在全部を愛してるんだよ。俺らのこともね」

「今も？」

「もちろん。今も…」

「…すごいね、感動だ…」

「うん…」

しばらく泣きたいだけ、私たちは泣いていた。二人で、抱き合いながら…。

それから、昴くんがサンドイッチを食べた。私は洗濯をし始め、サンドイッチを食べ終わると、昴くんも一緒に手伝い出し、部屋の掃除をした。

部屋が奇麗になってから、昴くんは髪を整え、今度はサングラスをして帽子もかぶり、Tシャツの上からグレイのベストを着て、めちゃかっこよくなって、

「昼飯、食べに行こう」

と言い出した。

「え?でも、外出ても平気?」

「ああ、もういいじゃん。写真に撮られても…。そんときゃそんときだ。第一、宇宙は完璧だから、いい方に流れるってことだよ」

そう言うと、私の手を引き玄関の外に出た。

鼻歌まで歌っている…。う〜〜ん、さすがだ。大物になるわ、この人。

「え?そう思う?実は自分でもそう思う」

「ええ?」

「あはは…。なんつってね」

くす…。それが鼻にかけてる言葉でなく、可愛い冗談だというのが

わかるから、めちゃ可愛くなる。

でも、もし鼻にかけてたとしても、許しているだろう。どんな昴くんも、私はきっと愛していくと思うって、そういう確信がある。

昴くんは私がそう思ったと同時に、こっちをぐるりと見た。エレベーターの横の非常階段から、降りようとして、非常階段を降りかけたところだった。

『それ…、俺も同じだよ』

と、心で話しかけてきて、いきなりキスをしてきた。

「え?!」

思い切りびっくりしてしまうと、

『だって、今、キスしたくなったから』

と、昴くんは心で言った。そして、

『それに、ひかりも思ってたよ。同じこと…』

と、言われてしまった。うわ…。そうだ、そのとおりだ。昴くんが振り返って私を見たとたん、昴くんの方が1段下にいて、目線があって、今キスしたいなって思ってたもん…。

『同じことを感じてるんだ。しょうがないよね。だって、俺はひかりで、ひかりは俺だから…』

じゃあ。じゃあ…。キス以上を求めてしまったら、どうなっちゃうの？

『求めなくても、きっと、そういうときがきたら、そういうことになるよ』

『それも、宇宙に任せておくってこと？』

『そういうこと。くるかもしれないし、こないかもしれないし…』

『そっか…』

今じゃないんだ…。それだけはなぜか、確信できる。今は、昴くんと抱きしめあったり、こうやって手をつないでたりするだけでも、幸せで、満足しているし…。エネルギーを体中で感じられ、同化もできるから、わざわざ抱き合いたいとも思わない。

『そうだね…。それは俺も思うよ』

やっぱり？ほんとうに同じことを思ってるんだな…。

駐車場の方から外に出て、近くのレストランに向かった。と言っても、近くにあるのは、ファミレスらしい。

「ここ、行く事あるの？」

「夜中とかね。帰ってきて開いてるのって、ここか、焼肉屋で…。一人で焼肉屋ははいれないじゃん？」

「うん」

ファミレスに入ると、店員さんが一回、あっていう顔をして顔を赤らめ、それから席に案内してくれた。

もう、2時近くになっていて、店内は空いてはいたが、何人かの若いお母さんたちと学生がいて、みんな昴くんを見た瞬間に気がついていたらしい。

変装用のサングラスも、帽子も意味がないじゃないか…。

『だって、この辺よく歩いてるし、この辺に住んでるってのも、知ってる人多いしばれるよ、そりゃ』

『じゃ、昴くんちの近くじゃない方がよかったんじゃないの?うちの方が良かった?』

『いいよ。もう、ばれてもなんでも…。だいたい隠し事ってのは苦手だよ』

「で?ひかりは何にする?」

いきなりメニューを見て、昴くんは声を出した。

「え?ああ…。えっと、日替わりランチでいいや」

「んじゃ、俺もそれ。ご飯大盛りにしよう」

店員が注文を聞きに来て、昴くんが注文した。

『でも、あんな雑誌に出ちゃったら、どうなっちゃうの?』

『さあ？載ったことないから知らない』

『え？』

『心配はしないでいいよ。そうだ。ねえ。この世界って、実は心が映されてるって話したっけ？』

『ううん』

『ちょい、黙ってんのも変だから、携帯見てるふりして話すよ。ひかりも何かしてて』

『え？わかった。文庫本持って歩いてるから、それ読むふりをする』

『うん』

昴くんは携帯を開き、なにやら読んでるようなふりをした。私はかばんから文庫本を出し、開いて顔をそっちに向けた。

『あのね…。この物質世界っていうのは、幻想なんだ。スクリーンに映し出された映画みたいのもので』

『え？』

『何が、映し出されているかって言うと、俺らの思考だったり感情だったり、固定観念だったり…』

『…？』

『例えば、何かを怖いと思うと、怖い思いをしないとならないことが次々に、スクリーンに映される。こんなことが起きたらどうしようと思うと、そんなことが…。それに、これは絶対にこうじゃないといけないみたいに、思ってるとそれもね、映し出される』

『つまり、心の中のものが、外側に映されるってこと?』

『そう。だから、外側を見るよりも、心の中を見るほうが大事なんだ。わかる?みんなそれを知らないで、外側で起きたことに対して、右往左往している』

『じゃ、心が平和なら、平和な世界になる…』

『あ、さすが!ひかり、そこに行き着くのが早いね。そのとおりなんだ』

『心が愛で満たされていたら、愛で満たされた世界に』

『そう』

『そうか…。じゃ、今回、こんな雑誌に載っちゃったのは、そんな不安があったから?』

『う〜ん、どうかな。起きるべくして起きるから…。宇宙に任せておいても、え?なんでこんなことってことは起きるよ。でも、それが必要なことだったりするんだよ。これからの展開はまったく俺にもわからない。でも、いい方向に行くためのものなんだ。だから、心配する必要はない。宇宙は完璧。任せておけばいいんだ』

『それは、いつも昴くんが言ってる…』

『そう…。悪いことなんて起きないから』

『わかった。じゃ、隠そうとしたり、何かをどうにかしようとしないでも、起きて来た事をしっかりと受け止めたらいいんだよね？』

『そのとおり！パーフェクト！さすが～～！』

心の中で昴くんは、ぱちぱちと拍手をしていた。

『じゃあ…、私はもう、何かの役に立ってるってことかな？』

『え？』

『こんな私でも…』

『…何も役に立ってないと思ってた？』

『うん。だって……』

私は、漠然と感じていたことを、またその場で感じた。

『ああ…、そうか』

それを昴くんは、感じてしばらく沈黙した。昴くんはいつも、私の何か微妙な感覚や感情も察知する。

私はいまだに、昴くんが心で話しかけてくれないと、聞こえてこない。なんでかな？

『そのうちに、感じるようになるよ』

あ。今のも聞こえてたんだ。

『うん…。それより、さっきの…。子どもが生まれてこなかったのは、別にひかりのせいじゃないよ。子どもも産めない役立たずなんて思わなくてもいい。そのうちに、それも必然だったことがわかるよ』

『必然…？』

『うん…。それと、仕事していないっていっても、そんなことも関係ない。どんな仕事をしてるか、してないか、そんなのも外側の世界で起きてるだけで、まったく君の存在価値とは、関係ないものだから…。あと、離婚だって、悪いことでも恥ずかしいことでもないよ。確かに親御さんはあれこれ言ったみたいだけど、それもなんとなくわかってるでしょ？』

『私のことを思ってのこと』

『自分たちが死んだあとが心配なんだ。仕事するなり、結婚するなり、ひかりがちゃんと生きていけるようになってて欲しいって思ってるんだよ。本当は結婚して子ども産んで幸せになってほしい、それがひかりのご両親の願いだ。それで、離婚して子どももいなくて仕事もしてなくて、このままだったら、自分らがもし万が一のことがあったらどうしようって思ってる。いつも、ひかりが幸せになること、考えてるんだよ』

『なんで、わかったの？それ…』

『ずっとわかってた。ひかりのことを見つけて何度か、幽体離脱して、ひかりの家にも行った。ひかりの家はいつでもすごい愛で満たされてた。ひかりの両親からは光が出てて、君を包み込んでたから』

『なんで、言ってくれなかったの?』

『ひかりが自分で感じ取らなくちゃ、意味がないから』

『そうだったの…』

私は、まったく読んでない文庫本を、たまにぺらってめくった。そして、料理が運ばれてきて、いったん、心での会話をやめにした。

「わ、美味しそう。いただきます」

昴くんは嬉しそうに、手をあわせて食べだした。私も、いただきますと言い、食べだした。周りにいる人がたまに、こっちを見た。でも、すぐに見るのをやめていた。

私は目の前で美味しそうに食べている昴くんを見ながら、幸せに浸った。すると、昴くんはそれを感じ取ったらしく、私を見てにこって微笑んだ。昴くんから無数の光が飛び出し、くるくると混ざり合い、店全体に広がった。優しいあったかい光だ。

『これがもう、私たちのミッションかな?私たちはもう、ミッションを遂行してるのかな?』

『もちろん。だから役立たずどころか、すごい地球に貢献してるんだよ?』

『そうか…』

『うん。誰かを無償で愛するっていうのは、ものすごい力があるものなんだ。それ、もう俺らしてるんだ』

『そうか…。そうだね…』

私は嬉しかった。自分のことが誇らしくも思えた。自分の存在をやっと、認められたようなそんな気もした。私の中からも、すごい輝きを持った光が放射され、店を覆った。きらきら光る、今までとはまた違う光だった。

『奇麗だね、この光…。なんか、歌ってるみたいだ。喜びの歌かな…？喜びってすごい光なんだよね』

『そうなんだ…』

『うん。他にも、感謝、笑い、信頼、許し…。これも奇麗な光だよ』

なんとなくわかる気がした。

昴くんと、しばらくそのあとは、普通に雑談をして笑いあった。笑うと、きらきらと光が嬉しそうにダンスをした。それは、楽しくて、軽やかなダンスだった。

ミッション5　相手の光を見る

4時、お店に出た。すると、今日は早番の葉月ちゃんがやってきて、

「これ、見ましたか？」

と、例の私と昴くんの写真が載ってる雑誌を、持ってきた。

「見たよ」

「星野さんですよね。ちょっと写真ぼけてるし、わかりにくいですけど…」

「うん。そう」

「他に気づいてる人はいないみたいですけど…、昴くんが深夜に女性とデートなんて見出しがあったから、私びっくりして中見たら、星野さんだったから…。でも、ちょっと安心した」

「え？なんで？」

「他の人だったら、嫌ですもん…」

「……」

葉月ちゃんから、黒のもやもやが出た。と同時くらいに、自分からも出ていることに気づいた。葉月ちゃんに言われて、私も昴くんが他の子と深夜にデートとかしてて、写真が載ってたら嫌だなって思ってしまったからだ。

嫉妬だ…。いけない…。どうしよう。自分から出た黒の霧と、葉月ちゃんから出た黒の霧が混ざり合い、辺りを覆い出した…。

こんなときには、光を出して消す…。どうやって?誰かを好きだって思うこと?葉月ちゃんを?でも駄目だ。私から発せられるこの黒のもやもやは、葉月ちゃんを好きだって思ってみても、消えないんじゃないの?

『葉月ちゃんに愛を送るのも、一つの方法。もう一つは、自分のことを愛することだよ』

突然昴くんの声がした。私の声聞いてた?

『昴くん、どうしようって呼んだでしょ?』

『私が?無意識に呼んじゃったかな…。ごめん』

『大丈夫、これから出るところだったし。それより、自分をね、愛するといいんだよ』

『自分のことを?』

『そう。嫉妬しちゃってる自分も、受け入れて、愛しちゃうの』

『え?そんなこと出来ないよ』

『嫉妬する自分を醜いって思わなくてもいいんだよ。俺も、嫉妬したじゃん。緒方って人に。そんな俺のこと、愛しいって思ってくれたでしょ?一緒だよ』

『一緒？』

『いいんだよ。どんな感情も、持っちゃいけないってことはないんだ。出たら、その感情を愛しちゃうの。それが、自分から出た負のエネルギーを浄化するやりかた…。思ってみて。嫉妬してる自分も可愛いってさ』

『可愛くないから、思えないよ』

『可愛いよ。俺、嬉しかったし』

『独占って、だって、執着で本当の愛じゃないんでしょ？』

『そうだよ。でも、そんな感情を持ってるひかりも、可愛いって思うよ。俺』

『え～～～？』

なんだか、いきなり恥ずかしくなった。それから、そんなことを言ってくれることが嬉しくなり、そんなことを言ってくれる昴くんが、愛しくなった。

ふわ…。光がいきなり私から飛び出た。それがどんどんと広がり、黒の霧を包み込み、消してしまった。

『あ、消えた…。昴くんのことが好きだって思ったら、消えちゃった』

『ああ、そっか。俺は、ひかりだもんね』

『ふふ…。変なの』

『じゃね。これから劇場行ってくるから』

『うん。頑張ってね』

昴くんの声が消えた。私は、落ち着きを取り戻し、仕事に打ち込みだした。

仕事が終わり、家に帰った。遅い夕飯を食べ、そしてゆったりとお風呂に入った。

思えば、遅いバイトの時間でも、母はあったかいご飯を用意してくれた。今までそれが、当たり前のことのように思ってたけど、これも私を思ってのこと。愛情だったんだ。

「いつも遅くまで、待っててくれて、ありがとうね」

お風呂からあがると、母はキッチンで片づけをしていて、その後姿に私はお礼を言った。驚いた表情で母が、振り返って私を見た。

「いいわよ。そんなの…。当たり前でしょ」

母が驚いた表情のまま、そう言った。そして、またあったかい光を放った。私はその光に包まれ、幸せを感じ、そして自分の部屋に行った。

夜寝る前に、昴くんのエネルギーを感じてみた。でも、感じられなかった。寝ちゃったのかな…？

私も、夢で会えるかなって思って、眠りに着いた。

なんだか、怖い夢を見た。何かに追いかけられている夢だ。不安や心配が心の中から、どんどん溢れてくる。たくさんの顔と声に、追い立てられた。

あ…。これ、昴くんの夢だ。誰かに問い詰められてる感じだ。そして、私のことを心配してる。ひかり、大丈夫か…。ひかりに手を出すな…。ひかりを守らないと…。そんな思いでいっぱいになってる。

不安や心配は、黒い霧をどんどん出す。昴くんの夢は重苦しく、黒い霧で覆われていく…。私は昴くんと同化していた。重苦しい気持ちがどっと、私の心の中にも入り込み、息苦しくなった。ああ…。昴くんは今、苦しんでいる。それも私を心配して…。

原因はなんなのかわからなかった。緒方さんのこと…？私は昴くんの中で、昴くんに光を送ろうとした。昴くんのことを愛しい…、愛してるって心から思って…。

ふわ…。昴くんの内側から、光が出て行く。私から発せられた光だ。それから、私は昴くんを優しく包み込むようなイメージをした。大丈夫。私なら、大丈夫。そう言いながら…。

昴くんの夢の中の霧が晴れていく。どんどん晴れていき、夢の中にたたずんでいる昴くんの周りを、大きな光が包み込んだ。

目が覚めた。朝の7時だった。今日は昴くんは、休演日だ。ゆっくりと寝ているだろうか…。もう、悪夢も消えて、気持ちいい眠りの中にいたらいいな…。

私は起きて、しばらくのんびりとした。一階に降りると朝食を母が作り出し、それを食べてから、リビングでテレビをつけた。

テレビはふだんは、あまり観ない。とっとと自分の部屋に行ってしまうからだ。ＤＶＤはもっぱら、パソコンで観ていたし、だから、テレビからの情報にはうとかった。

朝、のんびり、コーヒーを飲みながらテレビを観ていると、ワイドショーが始まった。

「あ…。こういうのは、あまり好きじゃないな…」

と他のチャンネルに回すと、やっぱりワイドショー。朝は、こんな番組ばかりか～。と思いつつ、また違う番組に回してみると、そこにいきなり昴くんが映されて、たくさんの報道陣がつめよってる映像が流れた。

「え？」

どうやら、昨日の劇場に入る前の映像らしい。

「昴くん、深夜のデートのお相手は誰ですか？」

「お付き合いしてる方ですか？」

「今日のお昼も一緒に食事をしていたという、情報が入っていますが」

ええ！？何これ…。

昴くんは、黙っていた。周りには昴くんのマネージャーや、スタッフらしき人がいて、

「もう、舞台のリハーサルが始まるので、また今度にしてください」

と言い、昴くんを劇場内に入れようとしていた。でも、レポーターは昴くんのまわりから、離れなかった。

昴くんから、黒いもやもやが発せられた。それが辺り1面を覆う。昴くんは、それに自分で気がついたようで、慌てて光を出していた。そして、一気にレポーターを振り払って、劇場の中に飛び込んでいった。

ああ…、これが原因で昨日、あんな夢を見たの?こんなことがあったから?

そのあと、ワイドショーのコメンテーターが、あれこれ話を勝手にしだし、私と昴くんの写真が思い切り、映された。そして、

「年上のようですね」

とか、

「どんな関係なんでしょうね?ずいぶんと親しいようですが…」

とか、話をしていた。

それを見ている私の横で母が、

「これ、あんたじゃないの?!」

と仰天していた。

「え?」

「あんたでしょ?この服だってこの前着てたのでしょ?何やってんの?あんた…」

もう、目が点になったり見開いたり、母はそうとう驚いたようだ。

「……」

隠せないか…と思い、素直に白状した。

「うん…。でも美里も一緒だったし、このとき気持ちが悪くて、ぐったりしてて…。それで、昴くんはお店まで付き添ってくれてたの。それだけだよ」

「……」

母の口が開いたままになった。

「な…なんで、天宮昴と知り合いなの?」

「う~ん…」

どう説明したらいいものか…。母は、私の説明を待っていた。

「えっと…。舞台を観に行ったとき、最後まで会場に美里といたら、

たまたま昴くんが舞台から降りてきて、その、それで話をして…」

「ええ?!」

「このときも、美里と赤坂で飲んでて、私それで、気持ちが悪くなっていたところで、ばったり会って…」

「それで…?」

「うん」

「…」

母は、納得いかないような顔をした。そりゃそうだよね。

「本当のことを言うと、美里とバーで飲んでたとき、声をかけてきた男の人の誘いに乗って、一緒にビリヤードしてたら、その一人がしつこく言い寄ってきて、それで、私、ものすごく気分が悪くなって…。寒気と吐き気がしてたんだ。そこに昴くんと悟くんが助けに来てくれたの…。それで、あったまった方がいいって言って、近くのカフェに連れていってくれて…」

「悟って、結城悟?」

「そうだよ」

「……」

ますます母は、固まっていた。

「それ、ほんと？」

「本当だよ」

「ただ、それだけ？」

「うん」

「そう…。そうよね。だって、１０歳くらい下でしょ？そんな子と付き合うわけないわよね」

「うん…。そりゃそうだよ。だいたい私まだ、男の人と付き合えるような、そんな状態まで回復してないし」

「え？」

「だから、なんでもないから…」

それだけ言うと、私は2階に上がった。何度も何度も、母から心配する黒い霧と、私を信じる光が、交互に出ているのが見えた。心配は、黒い霧になるのか。でも、それも私を思ってのことだよね…。

昴くんのエネルギーを感じてみた。心を穏やかにして、静かに目を閉じて…。呼吸を深くして、何も考えないようにする…。昴くんのエネルギーだけを感じるよう、感じ取れるようにしてみた。

『こんなおおごとになるのか』

昴くんの声がした。

『ひかり、大丈夫かな。向こうまで、レポーター行ってないよな…』

私の心配をしている。どうやら、テレビを観て考えているようだ。

『大丈夫だよ』

昴くんに声をかけたが、返事がない。あれ?聞こえていないみたいだ。

その時携帯が鳴り、思わず昴くんかと思い、出てしまった。

「もしもし!」

「もしもし、ひかりさん?」

あ、緒方さん…。そうだ。昴くんは私の携帯の番号もメアドも知らなかったんだ。

「テレビを今朝、観た。雑誌も売店で買った。これ、天宮昴と写ってるの…、君?」

「……」

やばい。電話から黒い霧がもれてくる。その霧に思い切り包まれてしまった。

「あの…」

私は何も言えなくなった。

霧は私を包み、そこには嫉妬や執着や憎らしい、妬ましい、いろんな感情が混ざり合っていて、それが私に思い切り重たくのしかかってくる…。

どうしよう…。光を出せない。苦しい……。

『ひかり！ひかり！』

昴くんの声がした。

『昴くん…』

心が少しだけ、あったかくなった。

『電話、切って。今すぐ』

『でも…』

『いいから』

私は言われたとおりに、電話を切った。

『目を閉じて。俺のエネルギーに集中して。今、そっちに行くから』

目を閉じて、昴くんのエネルギーだけを感じた。

ふわ…。昴くんのあったかい、優しいエネルギーに包まれた。それから、宙を浮いた。あ…。昴くんと同化してそのまま、幽体離脱してる。

光に包まれて、次の瞬間宇宙船にいた。それから、私と昴くんは離れた。

昴くんも私も、光の人型になっていた。前のスクリーンには、地球が映し出された。それから、昴くんが、

「緒方さん、映すよ」

と言った。スクリーンには、緒方さんの姿が映された。どうやら、会社の屋上にいるようだった。そこで、煙草を吸いながら、携帯を耳に当てていた。

私が幽体離脱をしているのは、ほんの一瞬だ。宇宙船にいくら長く居るような気がしても、地球に戻ると、一瞬だけ離れていただけなのがわかる。だから、私が電話を切ってすぐの映像が映されているのかもしれない。

緒方さんは、大きなため息をして、携帯をポケットにしまい、煙草をゆっくりとふかした。遠くを見つめながら、ふう…って長く煙を吐き出す。その顔は、沈み込んでいた。

「何を考えているんだと思う?」

昴くんが言った。

「わからない。聞くことができるの?」

「いや…、それは無理だ。でも、感じ取ることならできるかもしれない。」

「どうやって？」

「緒方さんのエネルギーを、ここで感じ取る」

「ここで？出来るの？」

「地上じゃ、ひかりのいろんな感情が邪魔をするでしょ？俺もそうだ。緒方さんのことを、客観的には見れない。どうも、敵みたいに意識してしまう」

「魂の今なら、まったく影響されないね」

「うん」

「やってみるね」

私は目を閉じて、緒方さんのエネルギーに焦点を合わせた。そこには、いろんな感情があったが、１番深く感じたのは孤独感だった。誰からも愛されていないという孤独感…。

その孤独感は、私が家に引きこもっていた時の、孤独感と同じだった。寂しく、暗く、冷たく、重苦しい。どうして自分は、愛されないのか…。愛を求め、結局得られず、みんなを恨んだあのときのような…。

私や、昴くんに対しての恨みの感情も感じられた。

「一緒だ…」

「え？」

「私が、引きこもってしまったときと、同じ感覚だ」

「今、光を送れる？」

「手伝ってくれる？昴くん」

「もちろん」

昴くんのエネルギーと同化して、光のエネルギーを緒方さんに送った。それはすぐに緒方さんのもとに到達して、緒方さんをあっという間に、包み込んだ。

と、同時に緒方さんのエネルギーが、こっちに向かってやってきた。それは、優しさや思いやり、愛、たくさんの光だった。それを感じて、昴くんと私は、自分の体に戻った。

『今の、わかった？』

昴くんが聞いてきた。

『うん。緒方さんの黒の霧が晴れたら、ものすごい光のエネルギーが溢れ出した』

『あれが本来の、緒方さんなんだ』

『うん、そうだね』

『レポーターの人も、緒方さんも、本来は光の存在だ。でも、そこにはなかなか俺ら、意識を向けられない。もやもやしたマイナスの

方に向けてしまうと、こっちのマイナスな面と、リンクしちゃうんだ』

『引き合っちゃうの？』

『うん。この人はこうだって思い込みだったり、こっち側が相手を嫌ってたり、嫌がってると、どうしても負のエネルギーを出しちゃうでしょ？向こうの負のエネルギーが、来ちゃうんだよ』

『じゃ、もし私が緒方さんのことを愛したら、緒方さんから光が来るの？』

『うん。だろうね』

『私、親は嫌ってたよ？』

『親のこともお兄さんのことも、愛してたよ、ひかりは…。心の奥でね』

『そうか…』

『薫さんや、美里さんに対してもそうだ。ひかりが信頼し、感謝してるから、二人からはそんなにマイナスの波動を感じないですんでる』

『みんな、マイナスの面もプラスの面もあるんだね』

『うん。こっちがその人をどう思うかで、変わっちゃうんだね』

『うん…』

『レポーター、昨日劇場に入る前にとっつかまったんだけど、すごい黒い霧出してて…。でも、その前に俺のほうが、なんだよ、こいつらって、かなりマイナスのエネルギー出しちゃってた。それに、ひかりのこともあれこれ聞くからかなり、俺、頭にきちゃって…。自分からすごい黒い霧が出てるの見えてさ』

『どうやって、光を出したの?』

『いつものやり方だよ。相手のことはそうそう好きになれない。だから、自分にある感情を、愛した。あと、ひかりのことを愛してるってことだけ、集中して感じてみたり…』

『……』

『あ、そんなに照れなくても…』

『わ、わかってるよ。でも、いいじゃん。まだ慣れないんだもん、そういう言葉に』

『はは…。そういうひかりも可愛いけどね』

『…。それで…。緒方さんはこれから、何か変わるのかな?』

『こっち側次第だよね。今までみたいに嫌がってたら、また向こうからもマイナスのエネルギーが来るかもしれない』

『うん』

『俺、昨日の夜、悟さんに聞いたんだ。レポーターにものすごい負

のエネルギーだしちゃったから、いったいどうしたら、そういうの出さなくて済むようになるか…。いつも悟さんは、どうやってるのかって』

『うん…』

『そうしたら、みんな人間は本来愛なんだ。光の存在なんだ。そこに着目するんだって…。その人の本来の姿をきちんと、見るようにしたらいいってそう言われた』

『難しいね』

『だよね。こっち側の観念とか、思い込みとか入っちゃうもんね。でも、そのへんを外して、この人も光の存在だって思うようにして、心を落ち着けたらいいらしいんだけどね』

『昴くんもそういうの、まだ、出来ないの？』

『できないよ。難しい…』

『でも、たくさんの人の心を癒しているし、光で包んでると思うけどな』

『うん。だけど、まだまだなんだよ。きっと、それはひかりとしていくんだろうね。これからの課題だ』

『ミッション…？』

『うん、そう』

『でも、なんだか見えてきたね。これからの課題というか、私たちのすべきことが』

『うん、そうだね。なかなか人間でやっていくのは大変だろうけど…』

『うん。魂ならたやすいよね』

『ああ、だから悟さんもたまに、宇宙船に戻ってるみたい。じゃないと、地球でずっといると、感情に左右されすぎて、なかなか愛と光を発することに、集中できなくなるって言ってた。だから、ひかりと一緒に、時々宇宙船に行くといいって言われたよ』

『それで、さっきも?』

『うん。二人して、感情がぐらついてたから…』

『…ありがとう』

『こっちこそ…。昨日夢の中で、包んでくれたでしょ?すげえあったかかった』

『わかった?』

『そりゃね…』

『これからも、大丈夫だよ。ね?心配は要らないんだよね?』

『うん。ひかりと一緒なら大丈夫だ』

『私も。昴くんとなら、大丈夫って確信してる』

『サンキュー』

『そろそろ支度して、バイトに行くね』

『うん。仕事頑張って』

『昴くんは今日休演日でしょ？』

『うん。でも、事務所に呼び出されちゃった。これから行ってくるよ』

『私とのことで？』

『うん…。ま、なるようになるさ』

『そうだね』

私たちは、それで交信を終わらせて、お互いのするべきことを始めた。私は着替えをして、化粧をしてバイトに向かった。

お店の更衣室につくと、

「テレビ観たけど、昴くんと写真に写ってたの、星のさんに似てたわ～～」

という話で盛り上がっていた。

「わ…。入りにくい」

「おはようございます」

後ろから葉月ちゃんが来て、一緒に更衣室に入ってくれた。

「あら、おはよう星野さん」

みんな、いっせいに話をするのをやめた。私と葉月ちゃんは、さっさと着替えて、お店の方に向かった。

「ああいうのは、無視ですよ、無視。何か聞かれても、知りませんとか言って、右の耳から左の耳でいいんです」

「うん。ありがとう。葉月ちゃんがいてくれて、心強いよ」

「そんな〜〜。いつでも、言ってください。悟くんとも話したんです。今、昴くんも動揺してるみたいだから、悟くんと私とで、なるべくフォローしようねって」

「そうなの？」

「はい」

にこって葉月ちゃんが笑うと、きらきらとまぶしい光が出た。なんだか、自信がみなぎっている光だった。

「ありがとうね」

私は、本当に嬉しくて、そう言うと、私からも光が出た。優しい穏やかな光だった。感謝の光かな…？

レジに入り、仕事を始めた。もう、特に何かを言ってくる人もいなくて、その日は何事もなく過ぎていった。

バイトが終わり、ちょっとお茶でもしていこうかってことになり、葉月ちゃんと地下の喫茶店に入った。そこで、二人でゆっくりと話をした。

いろんなことを悟くんから聞いているらしく、最近は光が見えてくるようになったとも言った。まだ悟くんから発信される光しか見えないらしいが…。その光を感じると、ものすごく落ち着くんだそうだ。私が、昴くんの光を感じて、気持ちがいいのと一緒だろうな…。

しばらく話をしていると、携帯が鳴った。見ると、緒方さんからだった。

「あ…」

出るのを戸惑った。でも、思い切って出てみることにした。

「もしもし?」

「ひかりさん。今朝はすみませんでした」

「いいえ…」

不思議ともう、緒方さんからは、黒いもやもやしたエネルギーを感じなくなっていた。

「仕事終わりましたか?もし、よかったらこれから会えないですか

？」

「え？」

「食事でも、どうですか？」

「今、バイトの友達とお茶してて、少し食べたから、あまりお腹すいてなくて…」

「じゃ、会って話をするだけでも…」

「…はい」

「今、もう新宿にいるんです。そちらに向かいます」

「じゃ、地下の喫茶店に来てください」

「わかりました」

そう言って、緒方さんは電話を切った。

「誰ですか？」

葉月ちゃんが聞いてきた。

「緒方さん。前に葉月ちゃんに、先に帰るよう言ってもらった、あの人」

「お付き合いを断ったっていう人ですよね？なんでまた、会うんですか？もしかして、しつこく付きまとわれているんですか？」

「ううん…。そういうわけじゃ…」

「私、そばにいて、守ってますからね！」

そう言うと、黒い霧が葉月ちゃんから出てきた。あ、多分、心配をしてる。

「ありがとう。でも心配はいらないからね。大丈夫だから…」

そう言うと、葉月ちゃんは、

「本当ですか？でも、別れ話しても、こうやって会いに来るってやばくないですか？」

とまだ、黒い霧を出しながら聞いてきた。

「でも、それがどうやら、ミッションの一つみたいでさ…」

「え？」

「ここをクリアーしないと、いけないみたい…」

「そ、そうなんですか…。そんなところまで、いってるんですね」

「え？」

「私は何がミッションかもわからないし、何をしていけばいいのかも、まだわからないし。その辺は、なかなか悟くんも言ってくれなくて」

「そうなの？」

「ただ、今回のお二人をフォローしていくのは、ミッションの一つなんだろうなってそう思ってます」

「そう…。じゃ、心配しないで、できたらいつでもあったかい優しい光を出してくれると嬉しいな」

「え？」

「大丈夫って、そう思っててくれればそれでいいんだ」

「わかりました。隣で、大丈夫って思うようにします」

「うん。お願いね」

「はい」

そのときちょうど、緒方さんがお店に入ってきた。すごく落ち着いた、穏やかな表情だった。

「こんにちは。あ、バイトの友達ですか？すみません、いきなりお邪魔して…」

すごく丁寧にそう言って、葉月ちゃんに挨拶をした。

「あ、どうも…」

葉月ちゃんは、あっけにとられた感じでお辞儀をした。

「ごめんね。ひかりさん…」

そう言うと、緒方さんは私の隣の席に座り、コーヒーを注文した。

「話って言うのは、例の俳優のことなんだ」

「昴くん？」

「ああ。そう…。お付き合いをしてるのかな？」

私は、どう答えたら言いか悩んでしまったが、

「付き合ってるっていうのとは、少し違うかもしれないけど…。とても大事に思ってるし、大事に思ってくれてる」

「そういうのを、付き合ってると言うんじゃないのかい？」

緒方さんが穏やかに言った。そして、

「そうか…。大事に思ってくれてるのか…」

と、小さな声で言った。

「はい。すごく…」

私は、もう一回そう言った。

「じゃ、安心かな。まだ、ひかりさんは傷が癒えてないし、ちょっと心配だったんだ」

「え？」

「自分も、以前愛してる人を失って、何年か辛くて、死のうとまでしたことがあったから」

「愛する人を、失った？」

「…突然の事故だった」

「え？！」

「もう8年も前のことだ。立ち直るのに、何年もかかった」

「……」

そうだったんだ…。あのものすごい孤独感って、そういうことだったの？愛するものを失った、私と同じ…。ああ、それも夫じゃなくて、子供を失ったときの私の気持ちと一緒だったんだ。

「ちょっと、ひかりさんに雰囲気が似ている…。それでなんだか、彼女が僕のもとに帰ってきたような気がして…。絶対に今度は、手放しちゃいけないってそう思い込んだ」

それが、執着に変わったの…？

「だけど、君は彼女じゃない…」

「……」

私も葉月ちゃんも、黙って緒方さんの話を聞いていた。

「でも、ずいぶん君といて心が癒された…。ありがとう。君も、昴くんだっけ？彼といて、心が癒されるというならそれが1番なんだ」

「え？」

「僕じゃなくて、君を癒すのは彼なんだろうな…」

驚いた。今日の緒方さんはどうしたというのだろうか。穏やかに話す緒方さんからは、優しいエネルギーが溢れ出ていた。

ああ。そうか、昨日昴くんが言ってた、こっち側の気持ちなんだ。私が今日は緒方さんに対して、マイナスのことを思ってないんだな…。

「じゃ、これで失礼するよ」

「はい」

コーヒー代をテーブルに置き、緒方さんは席を立った。

私は緒方さんに、光を放った。大好きとかそういうものではない。感謝と、これからどうか幸せにいう願いをこめた、そんなエネルギーだ。その光が緒方さんを包みこむと、緒方さんからも奇麗な光が発せられた。店中に光が充満して、その中を緒方さんはゆっくりと歩いて、お店を出て行った。

「なんだか、拍子抜けしました」

隣でそうとう緊張していたのか、葉月ちゃんがだらんと体を椅子にあずけていた。

「あ…、脱力。力が抜けてく〜〜」

ああ。光に包まれたから、リラックスしたんだろうな…。

「緒方さん、穏やかでしたね」

「うん、本当に…。なんかびっくりしちゃったけど、こういうことだったんだな」

「え？何がですか？」

「う〜〜ん。ごめん、言葉でなかなか説明できない。きっと葉月ちゃんも、体験すると思うよ」

「ええ？今はまだおあずけってことですか〜〜？」

「ううん。そうじゃないけど。あ、もしかしたら、私と別のミッションがあるかも知れないから、先のことはわからないよね」

「そうですね。今、目の前のことですよね」

「うん」

私と葉月ちゃんは、お店を出た。それから、駅に向かって歩き出し、駅で別れた。電車に乗り、ぼ〜〜ってしていると、昴くんの声がした。

『ひかり。聞こえる？』

『うん。聞こえてるよ。どうだった？今日…。事務所で何か言われた？』

『あんまり、人前であいうのはしないよう、自粛してってさ』

『それだけ？』

『いいや。どういう関係かとか、けっこううるさかった』

『どう説明したの？』

『ウ～～～～～～～～～～ン…』

あれ？言いづらいのかな？昴くんにエネルギーを集中してみた。

『恋人かって聞かれて、はいって言っちゃったんだよな～～』

『ええ？！恋人～～～？』

『あ、読めた？俺の考えてること…』

『うん、今…』

『ごめん。でも、どう説明していいかわかんなくてさ。はじめは、大事に思ってる人だから、あまり騒がれても困るって言ったんだけど、じゃ、恋人ってことかって言われたから、ついそうですって…』

恋人？恋人って、なんだ？えっと…、何？

『恋人ってなんだって言われても、なんだろうね？』

そういえば、緒方さんにも言われたな。大事に思ってるって言ったら、それが付き合ってることだって…。

『会ったの？緒方さんに…』

『うん。今さっき…。あ、その記憶思い返すね』

私は、さっき緒方さんと会ったときのことを、一部始終思い出した。

『へ～。そうだったんだ』

『うん。昴くんが言うように、こっち側がどう思うかで全然違うんだね』

『そうだね』

そうか…。付き合ってるっていうのはそういうことか…。昴くんの漠然とした思いが伝わってきた。

『あ…、今俺が思ったこと、伝わった？』

『うん』

『もし、大事に思いあうことが、付き合ってるとか恋人になるなら、俺らってそういう関係なのかな』

『どうかな？同じ魂だって言っても、周りにはわからないだろうか

ら…』

『ああ、そうだよね…』

……。あ、また何か漠然としたことを、昴くんは感じている…。

『恋とは違うんだけどな…。ね？』

『え？』

『と、思うけど…。ほら、一緒にいてときめいたりっていうのはないし』

『……』

『え？あるの？』

『へ、変だよね。自分だもんね』

『うん。まだ、俺とひかりは別ってどっかで、思ってるとか？』

『…そうなのかな？』

だから、昴くんが他の人ともし付き合うようになったら、私は嫌だって思っちゃうのかな…。

『う～～ん』

昴くんがうなった。

『それ、ちょっと俺もあるし…。いや、これは人間のときの俺であって、魂じゃそうは思わない。当たり前か…』

『そうだね。嫉妬なんて感情もないもんね。これも、植えつけられてるものだよね』

『うん』

『そうだよね…』

『でも、ま、いいじゃん。そんな感情を持ってる自分もＯＫなんだし』

『うん…』

『……』

今、また昴くんは、漠然と何かを思っているみたいだった。

『ときめくってどんな感じ？』

『え？ときめいたこと、ないの？』

『あるよ。今までだって、好きになった子いたし。ただ、俺にときめくってどんな感じかなって…』

『同じ感覚を持つんじゃなかったの？』

『うん。そのはずなんだけど…』

『じゃ、どうして？私だけがときめいてるの？』

『さあ？』

……。また、漠然と何かを昴くんは、考えてる。

『ひかりが俺だってことを、意識しすぎてるのかな？そう思い込もうとしてるところもあるかも。確かに魂の俺らは一つだけど、３次元の地球じゃ別の肉体を持ってるわけだし…。それをちゃんと味わって、体験したらいいのにね』

『え？』

『ちょっと、ちゃんと受け止めようってしてなかったかな。同じ魂なのに、恋をすること自体が変だって思いこんでいたかもしれない』

『そうなの？』

『ああ。やば…。考え込みすぎてるね？俺ら…。もっと、流れに任せてみよう。うん。じゃ、俺、これからラジオに出るから、行ってくるよ』

『え？そうなの？頑張ってね』

『うん。１０時からの生放送だから、聞いてね』

『うん。わかった』

ちょうど私も駅に着き、電車を降りた。

家に帰りご飯を食べ、お風呂に入り、１０時5分前からラジオをつけた。生放送って、いったいどんな話をするのだろうか。でも、もうあれこれ考えず、起きてくる事をただ受け止めよう…ってそう思っていた。

１０時。ラジオ番組がスタート。１０分が過ぎて、ようやくパーソナリティの人がゲストを紹介した。

「今日のゲストは、素敵な若手俳優。今、ホットな話題も出てますね。天宮昴さんです！」

紹介され、昴くんは、

「どうも、こんばんは。天宮昴です」

と、挨拶をした。わ～～～～。昴くんの声だ…って、ついさっきも自分の体の中から聞こえてたじゃないか…。

「ゲストできていただくのは、初めてですね～～。私すっごく嬉しくて、昨日から緊張して寝れませんでした」

「え？そうなんですか？」

「はい。もう、ラジオを聴いてるみなさん。昴くん、美しいですよ～～～～。本当に間近で見ても奇麗です」

「ありがとうございます」

「あ…。奇麗って言われるのと、かっこいいって言われるのとどっちがいいですか？」

「もう、どちらでも嬉しいです」

「そうなんですか～～？今、１９歳でしたっけ？」

「はい」

「若いですね～～。ついこの前まで高校生ですね」

「はい、そうです」

「は～～。それでもう、こんなに色気があるのはすごいですね」

「え？色気ありますか？」

「ありますとも。舞台の方も、観させていただきましたけど」

「あ、ありがとうございます」

「迫力もあって、歌もお上手で…。素晴らしかったです。感動しました」

「ありがとうございます」

「初めての舞台ですよね？でも、堂々としていましたが、どうですか？緊張とかするんですか？」

「はい。毎回しています。でも、お客さんからの拍手がエネルギーになって、すごいパワーになるんです」

「やっぱり?私もじかにラジオだと感じられないけど、メールや電話でお話しするとリスナーの方とつながって、力をもらえますね」

「あ、そうなんですか?」

「いろいろと、昴くんに質問が来てるんですよ。いいですか?聞いても…」

「はい。かまいません」

「まず、これは東京にお住まいの、昴くん大好きさんから…。昴くんの好きなタイプはどんな人ですか?」

「好きなタイプですか?う〜〜ん、そうだな…。決まってないですよ。なんか、好きになった人が、タイプって感じですかね…」

「性格とか、外見とか、こんな人がいいなってないんですか?」

「そうですね〜〜。どうかな…。なんかフィーリングがあえば、それでいいですね」

「そうなんだ〜〜。じゃ、次の質問。千葉県にお住まいの、舞台観たよ〜〜さんから。好きになったら、自分から告白する方ですか?あ…。今、草食男子か肉食かって言いますもんね。どっちですか?」

「え〜〜?そうだな。自分からかな…。でも、あまり積極的にいけないほうかもしれない。あ〜〜どうだろ?恋愛の数があまりないから、わからないですね」

「あまりないの?」

「はい…。少ないと思います」

「でも、もてるでしょう？」

「もてるかどうかも…？どうも、恋愛の対象としてみてもらえないみたいで…」

「え？そう？昴くんに告白されたら、誰でもＯＫだと思うけど。多分、相手になんかされないだろうって、思われちゃうんじゃない？」

「そうですかね？」

「うん。思っちゃうよ。きっと」

「そうかな～」

「次の質問は、神奈川県の、みっちゃんさん。え～…。あ、今話題になってる、写真で写っている彼女は、恋人ですか？ああ！ものすごくストレートな質問ですね。でも、みなさん気になってるところだと思いますけど。どうですか？ここで真相を…なんていうのは…」

「ああ…。はい。そうですね…。今日も事務所で、同じこと聞かれて…」

「え？そうだったの？」

「はい。でも、今って恋愛ＯＫなんですよね。僕の周りの俳優さんも、お付き合いしてますって、どうどうと宣言するし、若いのに結婚した俳優さんもいましたよね」

「はいはい。最近ね」

「だから、別に隠さなくてもいいけど、あまり堂々と人前でいちゃつくなって注意されました。はは…」

「え？じゃあ、やっぱりお付き合いしてるってことかな？」

「はい。してます」

う～～わ～～～～！昴くん言っちゃったよ～～。生放送で、言っちゃったよ？！！！！

「おお！真相を話してくれましたね！すごい！今頃ラジオの向こうで、ショックを受けてる人もいれば、記事にしている記者も多いかと思いますけど…。お相手の人のことを、伺っても大丈夫かしら？」

「あ、すみません。一般の方なので、あまり…」

「あ。そうなんですね～～。じゃ、その辺は触れない方がいいのかな…。最近のお付き合いなのかな？それとも、もう長いの？」

「あ。触れないって言っておいて、聞くんですか～～？」

「相手には、触れないですよ…」

「そうか～～。う～～ん…。うまいですね。えっと、けっこう最近かな？」

「どっちが告白？やっぱり昴くんの方？」

「告白ですか?どっちかな?えっと…。あれ?えっと…」

「知らないうちに、付き合ってたとか?」

「ああ。そんな感じですね」

「へ〜〜。デートとか、よくしてるんですか?」

「え〜〜。どうですかね?」

「忙しいからなかなか、会えないかな?」

「そうですね。毎日舞台があるし…」

「でも、いいですね〜〜。若いっていいな〜〜。恋したいな〜〜」

「恋してないんですか?」

「今はね〜。寂しいことに。若いってだけでも、未来があってときめきがあっていいよね。一緒にいて、ドキドキしたりするでしょ?」

「いえ、あまりそういうのは…」

「え?でも最近お付き合い始めたんでしょ?」

「ああ…はい」

「ときめきないの?ドキドキしたり…」

「そうですね…。あまり」

「ええ？じゃ、どんな感じなの？一緒にいて…」

「う～～ん。あったかい感じですかね？」

「あったかい？」

「癒されるっていうか…」

「優しい人なんだ」

「はい」

「ふうん。若いのにめずらしいね。私くらいの年ならね、もう、一緒にいて楽な人とか、落ち着くのがいいとかあるけどね」

「おいくつなんですか？」

「私～～？聞いちゃう～～？女性に年齢、ま、いっか。昴くんよりも１１歳上。ジャスト３０ですよ」

「え？そうなんですか？まだ、若いじゃないですか」

「そんなことないよ。もう、三十路だもの」

「え？でも、僕が付き合ってる人も２９ですよ」

「え？！！！！」

あ～～～～～～～～～。年齢までばらしてる～～～～～～！！！！

「そうなの？１０歳も上？」

「はい」

「そうか～～。じゃ、優しいよね～～。年上が好みなんだ」

「いえ…。好みってわけじゃないですけど。たまたま、１０歳上だっただけで…」

「え？そうなの？でも、甘えさせてくれるでしょう？わがままも言わないんじゃない？」

「ああ。そうですね。全然…」

「でも、大人な女性で、ドキドキしたりしないの？」

「えっと……。う～～ん……。どうかな…？」

「いや～～。ちょっと驚いちゃった。じゃ、私も年下の子と付き合えたりするかもしれないかな」

「ああ、全然大丈夫じゃないですか？」

「そう～～？でも、昴くんの場合は、大人っぽいからね」

「そんなことないですよ。子供っぽいところもありますよ」

「そうなの～？相手は、やっぱり大人の人かな」

「そうですね。でも、けっこう可愛いところもあって…。あ…ってだから、相手のことは、ノーコメントです」

「でも、自分でいろいろと暴露してるよ？年とか…」

「え？ああ、そうですよね。駄目ですよね。嘘とか、ごまかすの苦手なんですよね」

「じゃ、もっと聞いちゃったら、話してくれちゃうかな？出会いとか…」

「出会いですか？う～～ん。ノーコメントです」

「あれれ～～？じゃ、第１印象は？」

「奇麗だって思いました」

「え？！すごいな～。そうだったんだ～～。のろけてくれるな～～。あははは…。じゃ、どこが好きなのかな？」

「…全部ですね」

「え？全部？嫌いなところってないの？」

「ないです」

わ～～～～～。そんなことラジオで言ってるし…。

「でも、お付き合いして間もなかったらそうだよね～～。あばたもえくぼになるよね～～。あははは。じゃ、今めちゃくちゃ幸せなんじゃない？」

「はい、そうですね。毎日が充実してますね」

「そうだよね～～。舞台やって、恋もしてて、最高だよね？」

「はい」

「舞台は観に来てくれたの？」

「ああ、はい。2回観に来てくれました」

「そういうときって、照れるの？それとも嬉しいものなの？」

「嬉しいですね。倍パワーが出ます」

「あ。そうなんだ。もう、のろけっぱなしだよね～」

「え？そうですか？」

「そうだよ～。もう、羨ましいわ、聞いてて。その彼女…」

「ああ…、でも…」

「え？」

「ちょっと占いって言うか、ある人に見てもらったんですけど…」

？何を言いだす気かな？占い？

「え？何を見てもらったの？彼女とのことかな？」

「はい。なんかいろいろとわかる人がいて…。そうしたら、同じ魂だったとかって言われました」

げ～～～！そんなこと言ってるし…。ばらしてるし？ドン引きされちゃうよ？！

「え？彼女と？本当～～？わ～～～。すごいロマンチック。もう、出会うべくして会ったっていうか、会うのが必然だったのかな？」

「そうですね。運命なんじゃないですか？」

「え～～～。そこまで言う？それって、自分でも感じるの？」

「はい。感じますよ…。だから、僕の彼女を羨ましがらないで、自分の相手が絶対にいるはずなので、自分の相手と巡り会うことを、1番に思ったほうがいいと思います」

「あ…何？私のこと？」

「いえ…。一般的に。リスナーの方も含めての話です」

「ああ…。昴くんの彼女羨ましいっていうことじゃなくて、みんな、自分の相手を見つけようってことかな？」

「はい。あ、でも、見つけようって言っても、必死に探すんじゃなくて…」

「うん、必死だと、顔に出ちゃうもんね。みっともないよね」

「あはは…。そういうことじゃなくて…。絶対に、自分の相手なら現れるから、探そうとしなくても、出会えるようになってるので、今、目の前のことを、ちゃんと取り組んでいたらいいと思います」

「へ〜〜。なるほどね。そうしているうちに、出会えるんだ。昴くんもそうだったの？」

「はい。そうですね。僕はなんでも、いつでもそうです。この芝居も、出たかったですけど、前から、今目の前にあることを、ただしてきたって感じです。そうしたら、この舞台に誘われたり、他にもいろんなことが叶ってますね」

「なるほどね〜〜。先の心配をするよりも、今、目の前のことを一生懸命取り組めば、未来はきちんとやってくる…」

「はい」

「わかる！私も同じ考えだな。そうか。じゃ、私の運命の相手も現れるね」

「はい」

「よし、なんか元気でた〜。ってゲストの人から元気もらっちゃった。じゃ、昴くんは、その彼女と運命的に出会えたってことで、私はお祝いをしたいと思います。おめでとう」

「え？はい…。ありがとうございます」

「そんな昴くんに、私から歌のプレゼントを…。うん。ぴったりの歌だよね～～。私が大好きな歌。こんなことを言って欲しい～～。あ、これはもしかしたら、彼女の方へのプレゼントになっっちゃうかも？ＧＲｅｅｅＮで『愛唄』どうぞ！」

歌が流れ出した…。私の心には、あったかい優しいエネルギーが広がった。

素敵な歌詞だ…。涙が思わず流れ落ちた。

歌が終わり、昴くんが言った。

「素敵な歌詞ですね。ありがとうございます。まさに、今の僕の気持ちと合ってました」

「あ、やっぱり？こんな気持ちでいましたか？いいですね～～。彼女へのプレゼントになりましたね。今、聞いてて、喜んでくれたかな？」

「はい。感動して、泣いてると思います」

あ…。わかってるっていうか、私のエネルギー感じ取ってる？もしかして…。

「そうですか～～。もう、最後までのろけっぱなしですね～～。もう、ご馳走様でした。おなかいっぱいです。では、これからも舞台頑張ってください。今日のゲストは、天宮昴くんでした～～」

「ありがとうございました」

それから、ＣＭが流れた。

私は、しばらくぼ～～ってしていた。さっきの歌が何回も、頭の中を廻っている…。その時いきなり、携帯が鳴った。美里からのメールだった。

＞ラジオ聞いてたよ！恋人って、ひかりのことでしょ？もう～～付き合ってたんじゃないの～～！！！！何もないようなこと言っちゃってさ～～。

＞何もなかったんだけどね。なんか急展開なんだ。自分でも何が起きたのか、よくわかってないし…。

＞そうなの～～？ま、いいや。今度ゆっくりと聞かせてね。じゃ、おやすみ！

また、メールが来た。薫からだ。

＞天宮昴と写真出てたの、ひかりなの～～？ラジオで付き合ってるって言ってたけど、ひかりなの～～～？？？

＞そうみたい。

＞何そのあやふやな返事は！いったい何がどうなってるの？今度詳しく聞かせてね。

＞うん。

ああ…。いろんなところからメールが来る。また、もう１件来た。

葉月ちゃんだ。

＞聞きましたよ。ラジオ。やっぱり昴くんと大恋愛！ノエルさんの言ってた未来、当たっちゃいましたね！

＞大恋愛？そうかどうかは、自分でもわからないよ。

＞そんなことないですよ～。だって、昴くんが運命の相手だって言ってたじゃないですか～。もう、聞いてて、こっちが恥ずかしくなりました。のろけっぱなしなんですもん。いいな～～～！！私も言われたい。悟くんから言われたいです。

＞そうなの？

＞ま、夢のまた夢ですけどね。じゃ、おやすみなさ～～い。

そうか…。昴くんのファンだったけど、今は悟くんが好きなんだな～～。

は～～～～～～～～。それにしても昴くん、正直すぎる…。結局ほとんどしゃべっちゃったじゃないか…。

ああ…。明日バイトに出るのがちょっと、怖い気もする…。

ベッドに入っても、なかなか寝れなかった。昴くんの言葉を思い出しては、ドキドキしていた。あ、おかしいよね。昴くんは私なんだし…。

幽体離脱をすると、私なんだってことを、思い切り感じる。魂というかエネルギーが一緒になると、本当にどこから昴くんで私かもわ

からなくなるし…。だけど、やっぱり3次元にいると、私はこうやって、ときめいてしまう…。

『ひかり？まだ起きてる？』

『起きてるよ』

『今、家に着いた』

『お疲れ様でした』

『なんか、ごめん…。いい気になって、べらべらしゃべってたよ、俺』

『うん。聞いてて超恥ずかしかった…』

『やっぱり…？俺もラジオ終わってから、なんか恥ずかしくなった』

『へえ…。めずらしい。恥ずかしいって思うこともあるの？』

『俺？そりゃ、人間だから』

『ふうん…』

『ラジオからなんか、エネルギー出てた？』

『うん。昴くんのいつもの、優しいあったかいエネルギー出てた』

『あ…。それは多分、ひかりを思ってたから…。そうじゃなくってさ、司会してた人の方』

『一瞬、黒いもやもや出たよ。あれ、嫉妬かな？』

『うん。そう思って、いきなり一緒の魂だったなんて話をしちゃった』

『あ、それでなの？そういえば、そのあともう黒いもやもや、出なくなってたね』

『うん』

『最後の方は、きらきらした光が混ざり合ってたよ』

『うん。あの人からも出てたよね』

『うん…。ああ、こうやって、ラジオからも昴くんの光が、たくさんの人のもとに送られるんだね』

『公共の電波の影響は、大きいからね。ニュースなんて怖い情報しか流さないけど、かなりの黒い霧出してるんだよ。みんなに不安や恐怖を与えてる…。あれも、アセンションを邪魔する人たちの作戦だろうね。メディアには多いんだ。1番手っ取り早いしね。たくさんの負のエネルギーを、世界中に広められる』

『わ…。なんかウイルスみたいだね』

『ああ…。そういう負のエネルギーで、本当にウイルスが発生したりもするんだよ。みんなが怖がると、創造されちゃうんだ…。怖い事件のあとに似たような事件が続くのも、飛行機事故が立て続けに続くのも、地震もそうだね。みんなの中に恐怖が住み着いて、怖い

イメージをしちゃうからそれが現実化しちゃう…』

『それを変えていくには、どうしたらいいの?』

『そういうのをしていくのが、俺らのミッションになるのかな』

『そっか…。昴くんは、もうたくさんの人を癒しているし、大きい存在だよね』

『俺だけじゃないよ。ひかりも一緒にしていくんだよ』

『うん……』

『あれ?なんか釈然としていない感じ?』

『……。いったい、何をするのかなって、ちょっと思っただけ。最近の私、いろんなことが起きてるから、どうなるのかなって…』

『怖い?』

『ちょっとね…』

『うん、そっか…。怖くなったり不安になったら、宇宙船行くんだよ?もう、多分一人でも行けるよ』

『一緒に行ってくれないの?』

『行ける時には行く。でも、俺が行けないときでも、ひかり一人で行ってもいいからね』

『うん…。わかった』

『じゃ、俺これから風呂はいってくる…。風呂の中でも話してていいけど…』

『ううん。私、もう寝るよ』

『そっか。じゃ、おやすみ…』

『おやすみなさい』

ふって、昴くんのエネルギーが途切れた。

「は～～～～～～～」

大きなため息をしてみた。明日は何が起きるかわからない。これからのことも、想像つかない。でも、何がきても大丈夫。昴くんとなら大丈夫だよ！そう思いながら、私は眠りについた。

ミッション6　許し

翌朝、朝食をとってまた、リビングでコーヒーを飲みながらテレビをつけた。ワイドショーでもしかしたら、昴くんと私とのことが話題になってやしないかと思ったからだ。案の定、昨日のラジオで昴くんが、交際宣言をしたと話題になっていた。

ああ、やっぱり…。

「ラジオで天宮昴さんが、写真に写っていた女性とお付き合いをしていると、宣言していました。一般人の方で、年齢は２９歳。昴さんよりも１０歳も年上なんですね」

また、写真が映し出された。

「ちょっと？あんた、付き合ってないって言ってたわよね…？」

ダイニングからテレビを観ていた母が、言いよってきた。

「え？！」

「昨日、お付き合いはしていないって、言ってたでしょ？どうなってるの？」

「うん。なんか、こんな展開になっちゃって…。私も驚いたんだけど」

「え？じゃ、付き合ってるのは嘘なの？」

「嘘じゃないけど…。付き合ってるような、友達のようなそんな仲だったから」

「…？」

「でも、もう付き合ってるってことなのかなって、昴くんとも話して…。それで…」

「それでって…。だって、昨日の朝は付き合ってないって言ってたでしょ？じゃ、それからいきなりの展開になったって言うわけ？」

「そういうことかな」

「呆れた、何それ？大丈夫なの？あんた…。すっかり変なことに巻き込まれてない？」

「うん。大丈夫だよ。心配はしないで」

「何言ってんの。心配は心配でしょう？」

「でも、大丈夫だから…」

一瞬、母から黒のもやもやが出たが、また、す～～っと奇麗な光が出て私を包んだ。

「わかったわ。あんたがそんなに言うなら…。でも、お付き合いをしてるってことなら、一回くらいうちに挨拶に来てもらってよ」

「え？ああ…。うん、そうだね」

来るかな…？いや、昴くんのことだから、来てくれるかな？

化粧と着替えをして、私はバイト先に向かった。これがけっこう憂鬱…。でも、何が起きても、まるのまま受け止めたらいいんだよね…って自分に言い聞かせ、更衣室に入った。

「おはようございます」

すると、意外にもみんな静かだった。

あれ…？

「星野さん。今日悪いけど、レジの方ははいってもらわなくてもいいから。事務のほう手伝ってくれるかしら？本の発注や、書類作成の方をお願いしたいんだけど…」

更衣室にいた主任から、いきなりそう言われた。

「え？はい…」

「それと、今言ったように、ここでもお店でも、星野さんのことであれこれ言うのはやめてください。仕事に集中できなくなりますから。よろしくお願いします」

「はい、わかりました」

更衣室にいた他の人が、みんないっせいにそう答えた。

私が着替えをして、事務所のほうに向かおうとすると、後ろから葉月ちゃんがやってきて、

「星野さん。星野さんが来るまで、すごいみんなが噂さしてて、それを主任が来てばしって注意したんです。それに星野さんには、この騒ぎがおさまるまで、事務を手伝ってもらって、店には出ないようにしてもらうって言ってましたよ」

「そうなの…」

「大丈夫ですか?」

「私?うん。全然。でも、みんなに迷惑かけちゃったよね」

「大丈夫ですよ。それじゃ、お昼の休憩一緒だと思うので、一緒にランチしましょうね」

「うん。そうしよう」

私はそこから、お店のレジのカウンターの奥の事務所に入った。

お店の人にも迷惑をかけてるなって思ったけど、事務の人は親切に教えてくれたし、昨年までは事務の仕事をしていたので、すぐに仕事に慣れてさっさと伝表を仕上げたり、発注する作業を済ませてしまった。

「星野さん、こっちの仕事の方が向いてませんか?これから、ずっとこっちに来たらどうですか?」

と、若い正社員の人に言われた。

「そうですね。私もそうしてもらうと助かるかも…」

レジでのずっと立っての仕事も、本の整頓も意外ときつかったのだ。事務の方がずっと楽。それとも、そろそろ本格的にまた仕事でも探そうか…。

昼になり、エレベーターの前で葉月ちゃんと会った。それから地下のレストラン街に行った。

「朝のワイドショーでも、話題になっていましたね」

「うん…」

「当分は持ちきりかな。でも、そのうちに違う話題が持ち上がりますよ」

「そうだよね…」

「それにしても、昴くんあんなに堂々と全部言っちゃうなんて、びっくりです」

「私もだよ」

「ほんとに、隠し事も嘘も嫌なんですね～～」

「多分、黒いもやもや出ちゃうのかもね」

「え？」

「嘘ついたり、ごまかしたりすると…」

「そうなんですか？」

「わからないけど、そんな気がするな…」

葉月ちゃんとランチを食べ出したときに、携帯がなった。母からだった。

「今、休憩中？」

「うん」

「さっきね、徹郎さんから家に電話があったの。ひかりはいますかって…」

「え？」

「話がしたいって言ってきたのよ…。それで、バイトに行ってるって言ったら、夜、仕事終わってから会えないかって。携帯の番号変わってないから電話してほしいって…」

「でも、私のほうがもう、携帯の番号消しちゃってわからないよ」

「そう言ったら、教えてくれた。いい？今から言うから控えてね」

「え？うん」

母から言われた番号を、手帳に書いた。

「一応電話してみたら？あれから、電話して来たのって初めてでしょ？多分、昴くんのことでも、テレビで観たんじゃないかしらね」

「それでどうして、電話してくるのかな？」

「わからないわよ。でも、何か話したいからでしょ？」

「……」

「昴くんにも同席してもらえば？」

「え？！そんなわけには…」

「だって、今は昴くんとお付き合いしてるんだし。ちょっと、あんた一人じゃ辛くない？」

「……」

驚いた。母からそんな言葉が出るとは…。

「昴くん、舞台があるし…。あ、でも今日は昼だけかな？舞台…」

「じゃ、夜はあいてるかも知れないわね」

「でも、外で会ったら、今の今じゃちょっと目立つかも…」

「そうね。じゃ、うちに来てもらったら？」

「え？！」

「そうしなさい。二人ともうちに来たらいいわよ」

「……」

ものすごく強引に母から言われ、そうすることになってしまった。
いや、昴くんに聞いてみないとわからないけど…。

でも、なんで今さら、徹郎に会わなくちゃならないのか…。それに母はなんで昴くんと、会わせたがるのか…。あんなに世間の目を気にしている人が、家に昴くんを呼びなさいと言うなんて驚きだ。

電話を切ると葉月ちゃんが、

「舞台、今日は昼の部だけですよ」

と、教えてくれた。

「やっぱり？じゃ、夜、あいてるかな？」

「徹郎さんって？」

「あ、前の夫…」

「え？！離婚してたんですか？」

「し〜〜」

「ごめんなさい。声大きかったですね…」

周りの人が、ちらってこっちを見た気がした。

「そうなの。バツ一なんだ。昨年ね、離婚したの」

「そうだったんですか。全然知りませんでした。あ…。そのこと、昴くんは？」

「知ってるよ。私が落ち込んで、３ヶ月家に閉じこもってたとき、昴くんは私の苦しみを感じていたらしいから」

「え？」

「昴くんの方にいっちゃったみたい。私の苦しいっていうエネルギー」

「そうなんですか…」

「今ね、その悲しみや苦しい感情を、昴くんも感じてくれて浄化中なの」

「あ…私もです。私の子どもの頃の傷がまだ残ってて、それを悟くんが消してくれてるみたいで」

「そうなんだ」

「はい」

私は、その子供の頃の傷って？って聞いてみようかとも思ったけどやめた。私だって、赤ちゃんを流産したことは話したくなかったし…。

ご飯を食べ終わり、仕事に戻った。それから４時くらいに、もう舞台は終わったなと思い、仕事をしているふりをして、昴くんのエネ

ルギーを感じてみた。

すう…。穏やかな優しいエネルギーが感じられた。

『昴くん?』

『うん…。どうしたの?』

昴くんの優しい穏やかな声だ。

『あのね、さっき母から電話があって…。あ、記憶を思い出すよ』

『…徹郎って、もと旦那さん?』

『うん』

『その徹郎さんには電話したの?』

『まだ。昴くんに相談したくて…。私、会ったほうがいいのかな?』

『嫌なら無理することないよ』

『嫌っていうか、怖い…』

『…怖いって過去の記憶が、よみがえってたね。昔の徹郎さんだ。いったんそれは忘れないと、マイナスのエネルギーを呼んじゃうよ?』

『うん…。そうなんだけど…』

『わかった。俺なら、夜、あいてるから、ひかりの家に行けるよ。それから、会う前に宇宙船行って、また落ち着こう』

『うん…。じゃあ、うちに来てもらうよう電話してみる』

『うん』

私は携帯を手にして、

「すみません、ちょっとトイレに行ってきます」

と、事務の人に声をかけ席を立った。それからトイレに行くと、徹郎に電話をした。何回かコールしたが出なくって、留守電に「家に仕事の帰りに来てください」と、入れておいた。

「は～～」

重いため息と共に、黒の霧が出た。

「あ、いけない」

急いで、昴くんのことを思い出した。昴くんの笑顔を思い出すだけで、ふわって光が出て黒の霧を消してくれた。

家に帰ってしばらくすると、昴くんの声がした。

『もうすぐ駅に着くよ』

『家わからないでしょ。迎えに行こうか』

『なんとなくわかる。何度か魂で行ったから』

『そっか…。じゃ、待ってるね』

『徹郎さんはもう来た?』

『ううん、まだ来てない。仕事いつも6時までだし、定時に上がってもここまで30分はかかるし、まだ来れないと思うよ』

『よかった。じゃ、宇宙船まで幽体離脱する時間があるね。まだ、一人で行ってないでしょ?』

『うん。まだ…』

それからしばらく声が途切れた。そして、5分位してチャイムがなった。

「はい」

母が玄関に出て行った。

「こんばんは」

昴くんが母に挨拶をしたが、

「あら~。昴くん、本物だわ…」

と母はなんだか、わけのわからないことを言っている。

「昴くん、あがって」

母がぼけっと立っている横から私は、昴くんにそう言った。

「はい。お邪魔します」

昴くんは玄関で靴をぬぎ、きちんとそろえて上がった。

「すみません。突然お邪魔しちゃって…。手ぶらできちゃったし…」

昴くんが、母にそう言うと、

「あら。いいのよ、呼んじゃったのはこっちですものね」

と母もやっと我に帰り、そう答えた。

「あ…。僕、自己紹介してませんでした。天宮昴です。こんばんは、はじめまして」

昴くんは、ちょっと恥ずかしげに頭を下げた。

「はじめまして。ひかりの母です」

母も頭を下げた。母は、ちょっと動揺していた。っていうかあきらかにあがってしまっていた。

それから、母はリビングに昴くんを通して、キッチンにコーヒーを淹れに行った。

しばらくして母がコーヒーを運んでくると、昴くんはいただきますと飲みながら、

『お母さんに、ちょっと席を外してもらうことできる?』

と、私に心の中で聞いてきた。

『じゃ、昴くんが私の部屋に来ることにするね』

「お母さん、ちょっと私、緊張して頭痛くなったから、部屋に行って休むね」

「え?でも昴くん…」

母は、動揺していた。

「昴くん、ついてきてくれる?」

「え?!ああ。いいよ」

昴くんは、私が席を立つと慌てて席を立ち、私と一緒に2階にあがった。そして私の部屋に入り、

「じゃ、座って。すぐに幽体離脱するよ。意識を俺に合わせてくれる?」

と昴くんが言った。

「うん。」

私は、昴くんのエネルギーを感じて集中した。昴くんが私と同化して、そのまま魂が体から離れた。そして、光の中を通り抜け宇宙船

に着いた。

『じゃあ、スクリーンに徹郎さんを映すよ』

私から離れた、光の人型の昴くんが言った。スクリーンに徹郎が映し出された。どうやら今、会社から出るところのようだ。

私は、徹郎にエネルギーを集中した。徹郎から苦しみが伝わった。何の苦しみだろう。罪悪感、孤独感…。今、幸せでないことは確かだ。

『いい？光を送るよ』

『うん』

昴くんと同化して、光を徹郎に送った。パア……。明るい光が徹郎を覆い、光に徹郎は包まれた。そして、徹郎からも奇麗な光が返ってきた。

『……あれ？』

私は、その光に身に覚えがあり、不思議な感覚だった。

『徹郎さんの光のエネルギーを知ってた？』

『うん。奇麗であったかい…。時々、その光に私は包まれてた』

『愛されてたんだよ。その時に、ひかりの魂が感じ取ってたんだ』

『そうだね…。幸せを感じていたときもあったもの』

『これ、地球上だったら、確実に俺嫉妬してたかも』

『え？』

『独占欲あるからさ。人間の俺には…』

『じゃ、地上に戻ったら、徹郎に会ったとき、昴くん嫉妬しちゃうかな？』

『どうだろう？わかんない。もし黒い霧出たら、光を出すようにするけど、ひかりも協力してよ』

『うん。もちろん』

『じゃあ、戻るよ』

『うん』

一瞬にして私は、私の体に戻った。そして窮屈さを味わった。昴くんも自分の体を、思い切り伸ばしていた。

「う～～。窮屈。体に戻るといつも感じる」

「だよね…」

くすって二人して、同時に笑った。

「生身の体で、ひかりの部屋に来るの初めてだ」

「同化したときに来てたの？」

「いや…。幽体離脱して、来たことあるよ」

「私も、昴くんの家に行けるのかな？」

「魂で？」

「うん…」

「来れるよ。どこにでも行ける。世界一周だってできるよ」

「したことあるの？」

「一周はないけど。行ってみたいところは行ってみた」

「どうだった？」

「う～～ん。魂で行くのと、生身の体で行くのでは違うだろうね。人間で行く方が、感動はあるかもしれない」

「そうなの？」

「感情があるじゃん。体から抜けたときの感覚とは、また違う感覚」

「ふうん…」

「ね。アルバムってある？」

「私の？どうして？」

「見てみたい」

「うん」

昴くんに、私の赤ちゃんの頃からのアルバムを見せた。

「可愛い～～～！」

赤ちゃんの私を見て、昴くんがうなった。

「めっちゃ可愛いじゃん。誰？これ」

「私だよ～～！悪かったわね。今はこんなおばさんで」

「あはは…。言ってないって、そんなこと…」

昴くんは、すごく嬉しそうに私のアルバムを眺めていた。

「どんな子だったの？」

「あまり泣かない大人しい子。それに子どもの頃は引っ込み思案で、いじめにもあったことがあるよ」

「え？そうなの？」

「でも、不思議と相手の子を恨んだことはなかったな。悲しいって思いはあったけど…」

「ふうん…」

「そういえば、小学生のころ、毎日祈ってたことがあった」

「祈る？」

「大事な人を一人ずつ思い出しては、その人が、みんな明日も無事に元気でいられるよう、幸せでいられるよう…」

「ふうん。すでにミッション、遂行してたんだ」

「え？」

「それ、そうとうな光をその人たちに送ってるよ。純粋な祈りだし、純粋な思いだし」

「そっか～～。いつからしなくなったのかな、私…」

「自分のこと好きだった？」

「大嫌いだった」

「なんで？」

「だって、なんのとりえもなくて、いるかいないかもわからない子で…。親に心配ばっかりさせてた」

「どんな？」

「運動も勉強もそんなにできないし、将来どうなっちゃうんだろうって。人前は嫌いだし、もっと積極的になったらとか、何かこれっ

てものを見つけたらとか、そんなことばかり言われてた」

「…そうなんだ。それでだんだん、自分が嫌いになったの？」

「そうかな…」

「きっと祈ってたときは、自分も他人も分け隔てなく愛してたんだろうね」

「え？」

「人は自分でしょ？自分を嫌いになってくると、人も嫌いになってくるよね」

「うん。そうだね…。コンプレックスの塊で、自分にないものを持ってる人が特に嫌いだったかも」

「…。どんなコンプレックス？」

「そうだな…。明るい人がだめかな。人前で元気で、誰とでも仲良くなれる…。私、人見知り激しかったし。奇麗でいつも人の中心にいる人、あこがれたけど…、そういう人にコンプレックスがあったかも…」

「ふうん…」

「昴くんにはないの？」

「俺？あるよ。たっくさん」

「ええ？本当に？」

「俺も人見知りする」

「嘘だ！」

「ほんとに…。今もあるよ。気が置ける人なら大丈夫だけど、こっちからそうそう、声かけられない。俺と同じくらいの年の人なら、だんだん打ち解けられて楽しいけど…。あ、それでも、はじめは構えちゃうかな」

「そうなんだ」

「だから芸能界で友達少ないよ。悟さんは、向こうから話しかけてくれたり、気さくな人だからこっちも楽だけど」

「え？そうなの？クールな印象あるけど」

「うん。でも優しいよ」

「ふうん…。そうなんだ。じゃ、女性の友達は？」

「ほとんどいない」

「え？そうなの？」

「どう話していいかわからない。映画やドラマなら、撮影中は話したりするけど、終わるとそれっきり。けっこう、年上の男の役者さんで、すごく可愛がってくれる人とかは、終わってからも飯につれていってくれたりするけど。女性はないな～。だから俺、浮いた

話ないでしょ？」

「そうなの？でも、好きになった人とか…」

「いるよ。でもな～～。ドラマや映画の役で、のめりこんだりするじゃん。役になりきると、本当に恋してるのかって思うんだけど、終わってみて、あれ？本当に好きなのかなって、なっちゃうこともあって」

「錯覚しちゃうの？」

「その人本人じゃなくて、役の女の子に恋してたってこともあってさ」

「ああ。そうか…。そういうことか」

「……」

昴くんが、いきなり黙り込んだ。何を感じてるんだろうって思って、昴くんのエネルギーに集中した。

昴くんは私のすぐ横に座っていて、肩と肩が触れ合うくらいに接近している。その肩から優しいエネルギーが、私に流れ込んでいたが、私は昴くんの奇麗な横顔を見ながら、実はずっとドキドキしていた。

昴くんの匂い、顔にかかる髪、奇麗な指、細いけど筋肉質な腕。全部がすぐ隣にあって、話しながらも、なんでこんなに奇麗なのかなとか、かっこいいんだろうとか、あれこれ思っていた。

しばらく、昴くんのエネルギーを感じてみたが、なんだかわからな

かった。どんな気持ちでいるのか、どんな感情を持っているのか、何を考えているのかがわからない。ただ、さっきから私の鼓動が早くて、体の奥からドキドキってしているだけで…。

「これ、徹郎さんとの結婚式の写真？」

昴くんが、他のアルバムを開き私に聞いた。

「え？うん。そう…」

「ひかり、すごい奇麗だね…」

「……」

私は照れて、何も言えなくなった。

「それに幸せそうだ。このときは、すごく幸せだったんだね」

「うん」

「これは新婚旅行？どこに行ったの？」

「バリ島だよ」

「ふうん…。楽しそうだね」

「でも、一回派手に喧嘩したけど」

「新婚旅行で？」

「うん」

「そうなんだ」

「新婚時代は楽しかったけど、それもつかの間だったな」

「なんで？」

「徹郎の親がね…。早くに子どもを作れって、うるさかったから。ものすごいプレッシャーになっちゃって」

「子どもできにくかったんだ」

「うん…。不妊治療もしたよ。大変だった」

「そう…」

「その頃はもう、徹郎ともぎくしゃくしてた。二人で家にいても、なんか落ち着かなかったな。仕事をして、家にはなるべくいないようにして、徹郎が週末出張だとほっとして、友達の家に遊びに行って…」

「ふうん…。写真も、新婚旅行から全然ないね」

「うん」

「……」

アルバムを静かに昴くんは閉じた。それから、私の方を向いて黙っている。

「何？」

「……」

まだ、昴くんは黙っていた。私は集中して、昴くんを感じてみた。
でも何も感じられなかった。私の思考が邪魔してるのか、それとも昴くんの方が何か考えてるのか。聞こえてこない。

『俺の感じてることが、感じられないの？』

心の中で、昴くんが聞いてきた。

『うん。全然わからないよ』

『そうなの？なんでかな…。俺はわかるけど、ひかりの感じてること』

「まだそういうの、出来ないのかな？私…」

思わずため息とともに、口にして私はそう言った。

「なんにも感じなかった？俺のエネルギーに集中してみたでしょ？」

昴くんも、声を出して話してきた。

「うん。何も…。さっきから私が、自分で感じてる感覚しか…」

「自分で感じてるって、どんな？」

「どんなって…」

口にするのが恥ずかしくて、言えないでいると、それを察知して、

『あ、ドキドキしてるとか、鼓動が高まってるとか…って感じだよね？』

と、昴くんが心で話しかけてきた。

『うん…。それ、昴くんは私がそういうふうに、感じてるのをわかってたんでしょ？』

『うん』

『こういうのは、ずるいよ…。昴くんだけわかってるの』

そう言うと、昴くんは少し微笑んでから、

「もう一回集中してみて。俺に…」

って言ってきた。

「うん…」

私は黙って目をつむって、昴くんに集中した。すぐ横にいる昴くんの肩からまた、優しいエネルギーが来る。

それから、私の体の中からドキドキが聞こえ、鼓動が早くなる。隣にいるのもドキドキして、一回離れようかと思ったり、でももっと昴くんのエネルギーを感じていたいと思ったり、触れていたいと思

うのと、離れたいと思うのが、交互にやってくる感覚…。

「やっぱり、私の感覚しかないよ。昴くんのはわからない。優しいエネルギーは来るんだけど…」

「え?!わかんないの?それ、多分、ひかりのじゃないよ」

「何が?」

「だから、ドキドキしてるのも、鼓動が早くなっちゃってんのも俺の感覚だよ」

「え?!」

一瞬、頭が真っ白になった。あれ?でも、ときめいたりしないって言ってたじゃん…。

「うん。そうだよね。でもやばいことに今、すぐ横にいてドキドキしてどうしようかって、焦ってるところ…」

「え?!」

ますます混乱した。それは私の感覚じゃないの?

「あ…。一緒の感覚なのかな?もしかして…。同じこと感じてて、どっちの感覚かわからなくなってるとか?」

「え?!」

ますます、わけがわからない。

ピンポーン。その時、チャイムが鳴った。

「徹郎だ…」

私に緊張が走った。それを察知した昴くんが、私の手を握って、

「大丈夫」

と優しく微笑んだ。

私たちは、それから一階におりていった。リビングにはもう徹郎がいて、私と昴くんがリビングに行くと、ソファから立ち驚いた表情を見せた。

「あら、ひかり…、徹郎さんに昴くんも来るって言わなかったの？」

母が察して、聞いてきた。

「うん。ごめん…」

「こんばんは、天宮昴です」

昴くんが、お辞儀をした。

「え……」

徹郎は、黙ったまま立っていた。

「さ、座って。お茶を持ってくるわ」

母はそう言って、キッチンに行った。私と昴くんは、徹郎の前のソファに腰かけた。

「ひかり…。なんで、その…、天宮昴がいるんだ?」

徹郎もソファに座って、それから聞いてきた。かなり動揺しているようだった。

「私、一人だと不安だったから…」

「何が?」

「徹郎が、どうして会いたいって言って来たのかわからなくて…」

私は正直に答えた。

「まあ、天宮昴とのことを聞きたかったのもあるけど…。ここにこうしているってことは、付き合ってるというのは、本当のことなんだな。写真を見て、まさかとは思ったんだが…」

「はい。ひかりさんとは、お付き合いしています」

昴くんは背筋を伸ばし、はっきりとした口調でそう言った。

「驚いたな…。いったいいつから?」

「最近だよ。本当に最近…」

「…どこで知り合った?」

「いいじゃない。そんなこと、もう徹郎には関係ないことだし。それよりも、他に用があったんじゃないの？」

「関係なくはない……」

徹郎はそう言って、口ごもった。それから、

「ひかりには、幸せになってもらいたいと心から思っている」

と、今度ははっきりと徹郎は言った。私は驚いていた。離婚するときだって謝ってはいたが、そんなこと一言も言ったことがなかったから。

母がお茶を持ってきて、テーブルに置いた。

「どうぞ。じゃ、私は席を外していた方がよさそうだから、向こうに行ってるわね」

母はそう言うと、リビングを出て行った。

私は一口、お茶を飲んで喉を潤してから、

「徹郎は？今幸せじゃないの？」

と、さっき宇宙船で感じた徹郎の苦しみを思い出し、聞いてみた。

「……。幸せなのかどうか…」

「子どもも生まれたんでしょ？」

「生まれたよ。女の子だ。妻の静江も俺も生まれて喜んだ」

「お母さんやお父さんも、喜んだでしょ？」

「いや…」

「え？どうして？待望の赤ちゃんじゃない」

「生まれてきたのが女の子だったから、跡取りにはならないって言って、男の子を産めって言ってる」

「……」

そうか…。赤ちゃんじゃなくて、男の子じゃなきゃいけないのか。

「静江はかなり、今、落ち込んでいる」

「そう…」

私と一緒だ。きっと、プレッシャーを感じているんだろうな。

「なんだか、わからなくなったよ…」

「え？」

「俺はずっと、親の期待にこたえて生きてきた。大学も会社も…。でも、そんなに自分の家系を守って、跡取りを残すことに意味があるのかどうか…。そりゃ、俺は一人息子だ。でも、一人っ子を産んだのは親の責任だ」

「……」

「まあ、うちの母親も嫁いだときに、男の子を絶対に作れと言われたらしいけどね。それで俺が生まれて、お家安泰になったらしいけど」

「そうだったんだ」

「今は親とは別居してるけど、そのうちに同居をしてくれって言われた。それも相談なく勝手に、2世帯にしてしまったし…。静江が、同居はしたくないと言ってる。だけど2世帯に増築しちゃったんだから、断ることもできない」

「親のいいなりなんですね」

思わず、昴くんが口走った。

「お前に何がわかる？小さな頃からずっと、親の期待を背負って生きてきたんだ」

「自分のしたいこととか、好きなものとか、大事なものってないんですか？」

「……」

徹郎は黙った。それから、

「あったよ。夢もあった。でも、親には反対された。今の会社も、父親の経営する会社の子会社だ。いずれは、父の会社を俺が引き継

ぐ…」

「社長ですか？すごいですね」

「簡単に言うな」

「じゃ、どうしたいんですか？」

昴くんが聞いた。徹郎から黒い霧が出てきた。それが一気に広がろうとしている。それを昴くんは見て、それから私を見た。そのあと昴くんからすごい光が飛び出し、黒い霧を消してしまった。

「親を切ることができないんだ。いっそ家を出て、縁を切ろうかとも思った。でも出来ない。だが、静江を見ていると、このままでいいわけがないとも思う。このままじゃ、またひかりの時と同じことを繰り返すって…」

「私と？」

「ひかりには、申し訳ないことをしたって思う。本当に思う。俺は自分のことで精一杯で、まったくひかりを守ってやることができなかった。赤ちゃんだって、ひかりが1番に苦しんだだろうに、思いやるどころか、俺は親の期待を裏切ってしまったという罪悪感と、親の期待を裏切ったひかりを、責めていたんだから」

「……」

私は黙って聞いていた。こんな話を徹郎がするのは、初めてだった。

「逃げたんだ。ひかりを守るよりも、つらい家にいるよりも楽な方

に…。静江と居る方が、ずっと気が楽だったから。それで、静江に子どもが出来たときには、これですべてが解決するとか、親の期待を裏切らないで済むとか、俺は救われるって思ってしまった」

ぎゅう…。隣で昴くんがこぶしを握り締めていた。昴くんの体から黒い霧が出る…。

『昴くん…？』

心の中で昴くんに、声をかけた。昴くんのエネルギーに集中すると、ひかりのことをなんだと思ってやがるっていう、徹郎に対しての憎しみのようなものを感じた。

そんな昴くんを、愛しく思った。そして私から昴くんに、光が飛んでいき黒い霧を消していった。それに気づいた昴くんが、私の方を向いて、

『サンキュー』

って心で、言った。

「でも、結局は何も解決しなかった。女の子が生まれて、まったく状況は変わらなかった。それに、俺はひかりと離婚してからものすごい罪悪感があって、赤ちゃんが生まれてもまるごと喜べなかった」

「え？」

「生まれてこなかった赤ちゃんに対して申し訳ないのと、さっさと切ってしまったひかりに申し訳ないっていう思いが残って…」

「それを謝りに来たの？」

「そうだ。もし、ひかりが幸せになってくれてるなら救われる…。ああ、結局は俺は、自分が救われたいだけかもしれない。情けない男だよな」

「……」

黒い霧が出てきた。徹郎からの罪悪感だ。それが黒い霧になる…。私からも、知らぬ間に出ていた。徹郎の思いと混ざり合う。

あ…、これ…。赤ちゃんに対しての罪悪感だ…。徹郎の思いとリンクする。

それに気づいた昴くんが、心で、

『大丈夫だよ。ひかり』

と言いながら、光を私に向かって出してくれる。でも、黒い霧が消えても、まだ体の中からどんどん出てくる。徹郎からもだ。

やばい…。重い…。苦しい…。

『ひかり！俺に集中して。俺を見て！』

昴くんの声が、聞こえるのはわかる。でも、徹郎の重苦しいエネルギーと混ざり合い、どうしても昴くんのエネルギーを感じられない。

苦しい！呼吸困難になってる。息苦しい…。体が冷たくなる。息が出来ない…。

「はあ…はあ……」

私の異変に、徹郎も気がついた。

「ひかり?!大丈夫?ひかり!」

昴くんが、私を抱きしめた。

「ひかり?どうした?」

徹郎が、心配そうに聞いてきた。昴くんと徹郎の声で、母も隣の部屋から飛んできた。

「どうしたの?ひかり!」

意識が朦朧とする…。黒い霧が私を覆う…。

『ひかり。俺のエネルギーに集中して』

昴くんの声が聞こえる。同化しようとしてる…。でも駄目だ。集中できない。

『ひかり!頼むから!』

す〜〜。昴くんの声がだんだんと聞こえなくなる。黒い霧に覆われる…。

何も考えられなくなり、何も聞こえなくなったとき、私の体の奥にある光を感じた。小さな光。だんだんとその光が、大きくなってい

く…。ほかほかと、私の体をあたためてくれてる。昴くんなの？

『ママ…』

違う…。可愛い可愛い声が今、聞こえた。ママ？私のこと？

『僕ね…。ママのお腹にいたんだ。覚えてる？』

『え…？』

『僕のことで苦しんでるでしょ？僕、ずっとママに話しかけてたんだ。ずっと魂の僕は、ママの中にいたんだよ。やっと聞こえた？僕の声…』

『お腹にいた、私の赤ちゃん…？』

『うん。そうだよ。僕ね…、ママのお腹に来たかったの…』

『え…？』

『僕、幸せだったんだ。ママのお腹にいたとき、ママがいっぱい愛してくれたから。それをね、経験したくてママのお腹にきたんだ。生まれなくても良かったの。お腹にいて、ママの無償の愛を感じるのが、僕のしたかったことだから』

『え？生まれなくても、良かったってどういうことなの？』

『僕ね…、今回はお腹の中で、ママの愛を感じるってことをしにきたんだ。そして、無償の愛を感じて、それを今度次に生まれるとき、僕のパパやママにしてあげるの』

『え?』

『だから、もう苦しまないで。ママは何も悪くないんだ。自分のことを責めないで。僕が不幸だって思わないで。だって僕は幸せだから』

『……』

涙が溢れた…。体の中から光がどんどん溢れてくる。気がつくと、周りにあった黒い霧は消えてなくなっていた。

昴くんの顔が、見えた。隣に心配そうに見ている母と、徹郎の顔も…。昴くんが私から出ている光を見て、ほっとして微笑んだ。

『ママ、パパに言って』

『パパ?徹郎のこと?』

『そう…。僕、次に生まれるときも、パパの子になるよ。男の子で生まれる。だから心配しないでって。もう、苦しむことはなくなるよって。パパと、新しいママは最高に幸せになれる。きっと、おばあちゃんもおじいちゃんも…。みんなを幸せにするのが、僕の役割。でもその前に、ママの子になりたかったの。僕、ママの愛を感じたかったの』

ポロポロ…。涙が溢れて止まらなかった。ものすごい光が私の中から発せられて、辺り1面を包み込んだ。その光を、昴くんが感じ取っていた。

『ひかり？ひかりの中に、誰かいるの？』

『私の赤ちゃん…』

『え？』

『赤ちゃんの魂…』

昴くんが私のエネルギーを感じ取り、そして次の瞬間同化した。昴くんも私と一緒に赤ちゃんの、光を感じていた。

『ママ、だからパパに言って。パパ、きっと信じてくれる。大丈夫。パパにも、安心してって言って』

『うん。わかったよ』

『それからね。僕はもう生まれ変わるから、ママの中から消えるけど、でもずっとずっと、ママのことは愛してるからね』

『うん…。うん…。ありがとう…』

『僕の方こそ、ありがとう。すんごく幸せだった。ありがとう…』

そして、パア……。光が私の中から、離れていった。私の中から出たその光は、すごく奇麗できらきら光って、まるで笑っているようだった。

「……」

しばらく、私と昴くんはその光を見ていた。そのうちに、どんどん

その光は上昇して天井をつきぬけ、天高く昇っていった。

「ひかり？大丈夫か？」

呆けている私に、徹郎が言った。

「うん…、大丈夫」

「ひかりは、時々こんなことになるのか？」

徹郎が私に聞いた。

「どうなの？ひかり」

母も、心配そうに聞いてきた。二人から心配の黒い霧が出た。私はすぐに光を出して、その黒い霧を消した。

「ううん。ないよ。初めて。でももう、きっとないよ」

「え？」

「信じてもらえるかわからないけど、赤ちゃんの魂が話しかけてきてたの」

「え？幽霊？」

徹郎の顔が一瞬青ざめた。

「ううん。魂…」

「それは、声がするのか?俺の夢でも聞こえてた…」

「え?赤ちゃんの?」

「パパ、パパって、なんか白い小さな光がこっちに、話しかけてくる…。赤ちゃんの幽霊が夢で、話しかけてきてると思って…。何度かあった」

「それで?」

「聞かないようにした。早くに消えてくれって頼んで…。お祓いにでもいったらどうだって静江に言われた。そういうのに詳しい人が、知り合いにいるからと…。でも、行ってない」

「それ…、幽霊じゃない。赤ちゃんの魂。徹郎に話しかけてたんだね」

「え?」

「ずっと、私と一緒にいたんだって。それで、私にもずっと話しかけてたみたい。私気づけなかった。多分、いっぱいいっぱい赤ちゃんに、申し訳ないことをしたって、その思いが苦しくて蓋していたから」

「赤ちゃんの魂?」

母も、変な顔をした。

「その赤ちゃんがね、今、話しかけてきたの。私にもう苦しまないでって。今回は私のお腹に来て、私にいっぱい愛されるのが、目的

だったって。今度はまた、パパの子になる。男の子で生まれるよって。だから安心して、これからはパパも新しいママも、おばあちゃんもおじいちゃんも、みんなで幸せになれるよって…」

「……」

徹郎は、目を丸くした。ああ、信じてもらえないかって思ったけど、そのあと、目にいっぱい涙を浮かべた。

「そんなことを言ってたのか？」

「信じてくれる？」

徹郎は、一瞬黙った。でも、こくってうなづいた。

「変なことを、ひかりは言ってるってわかってる。でも、なぜかわからないけど信じられる」

そう言って、目を押さえた。

「ずっと、それを告げたくて、俺の夢にも現れていたのか…」

「うん。きっと、そうだと思う」

私が言うと、徹郎は涙を流した。

「そうか…」

そして、光がどんどん溢れ出した。私からも、昴くんからも光が溢れ辺り1面を覆った。ああ…、徹郎からの光は赤ちゃんに対しての

愛だ。徹郎も、赤ちゃんを愛していたんだ。

「ひかり…。俺はやっと、心が開放された気がする」

「うん。私も同じ…。ずっとずっと、赤ちゃんに罪悪感じてた」

「ひかり、お前も幸せなんだな？今…」

「うん」

「そうか…。じゃあ、俺も幸せになっていいんだな？」

「もちろん…」

私から徹郎に、ものすごい光が溢れ出た。光の渦が、徹郎を包み込んだ。徹郎からもあったかい、光が出ていた。私に向けられていた。

不思議と辛く悲しかった思い出よりも、徹郎との幸せだった楽しい思い出ばかりがよみがえった。

ああ…。私、こんなに幸せなときを過ごしていたんだな…。そう思うと、徹郎に感謝の気持ちが溢れてきた。その感謝の光も辺り1面を、あたたかく包み込んでいた。

母が、

「徹郎さん、昴くん、夕飯は？」

と聞いた。

「いえ、まだ」

二人とも同時に答えた。

「じゃ、食べていかない？多めに作ってあるのよ」

「え？いいんですか？」

昴くんが喜んだが、徹郎は、

「すみません。静江が待っているから、帰ります」

と断った。

「赤ちゃんも待ってるね。なんて名前？」

私が聞くと、徹郎は嬉しそうに、

「愛っていうんだ」

と言った。

「素敵な名前だね。愛ちゃん…」

「うん…」

徹郎はまた、嬉しそうに笑った。不思議と私は本当に心から、徹郎が幸せになって欲しいと思い、その愛ちゃんにも奥さんの静江さんにも愛を感じた。

「じゃあ、これで俺は帰るよ。昴くん、ひかりを頼んだよ」

「はい」

昴くんは、にこって微笑んだ。

徹郎を玄関で、母と昴くんと一緒に見送り、それから母は、

「さ、昴くん。ご飯あっためるから、座って待っててね」

と言った。

昴くんは、嬉しそうに席に着いた。私も昴くんの隣の席に座った。

「良かったね。ひかり」

昴くんが嬉しそうに言った。

「うん」

「赤ちゃんの光、奇麗だったな。赤ちゃんからの無償の愛、すごかった…」

昴くんが言った。

「うん」

私の心からまた、愛が溢れ出た。

『昴くん、同化してたよね？一緒に感じてたでしょ？』

『うん…』

『徹郎のことも許せた…。苦しかった思い出よりも、楽しかった思い出ばかり今は浮かぶの』

『許すってすごいことだよ、ひかり。それもすごい光を出す…。良かったね。徹郎さんを許したことで、ひかりはいろんな苦しい感情を浄化しちゃったんだ』

『うん、なんかわかる気がする』

「はい、お待たせしたわね」

母が、昴くんと私のご飯を運んで来た。その時に、兄がちょうど帰ってきて、昴くんが食卓にいて驚いていた。でも兄も席に座り、昴くんとご飯を食べだし、二人であれこれ話をし始めた。母もそこに加わり、なぜだか、ほんわかあったかい食卓になっていた。

そこに父も帰ってきて、やはり昴くんがいるのに驚いていたが、一緒に夕飯を食べて話し出し、昴くんとすぐに打ち解けた。

ものすごく不思議な光景だった。昴くんは、人見知りをすると言っていたが、とんでもない。うちの家族とすぐに打ち解けてしまったではないか。

食べ終わり、しばらくは家族で話をしていたが昴くんが、

「そろそろ僕、帰ります。明日は昼から舞台があって早いので…」

と言った。

「そう。毎日舞台なんでしょ？大変ね。体に気をつけてね」

母が言った。

「はい、ありがとうございます」

昴くんは、そう言うと玄関に行き靴をはき、

「じゃ、失礼します」

と、丁寧にお辞儀をして玄関を出た。

「おやすみなさい。明日も頑張ってね」

私がそう言うと、にっこりと微笑んでそして駅に向かって歩いていった。

「は～～～。奇麗ね～～。昴くん。間近で見ても奇麗」

と母が言った。

「なかなか、礼儀正しい子だな」

父が言った。

「本当に、お前と付き合ってるんだな。びっくりだよ。でも、優しそうないい青年だな」

兄がそう言った。

不思議と家族みんなが、私と昴くんの付き合いを賛成してくれた。昴くんの人柄だろうか。年齢とか芸能人とか、そういうのをまったく気にしていないようだった。

「結婚とかはな、考えられないかもしれないが、まあ、お付き合いをすることに関しては、反対はしない」

父が、リビングで少しお酒を飲みながら、横にいた私に言った。

「まあ、そのうち本気で結婚を考え出したら、それも反対しないけどな」

「なんで？絶対反対するかと思った。世間体とか考えて…」

「そんなことはしないぞ。お前が幸せになるのが１番だ。これからもずっと、一人身でいることを考えたら、相手が年下でもそんなの関係ない。１０歳くらいの年齢差、５０代、６０代になれば、たいしたことはないさ」

「……」

父からそんなことを言われるとは、思ってもみなかった。父からは、優しい温かい光が出ていた。

「父さんも母さんも、ひかりが一人ぼっちでいるよりも、誰かと寄り添って、幸せに生きて欲しいって、そんなことを望んでいたんだ。子どもはできてもできなくても、それはかまわない。子どもができにくいなら、無理することはない。それで、辛い思いをしてしまっ

たんだしな」

「……」

「相手が大事に思ってくれる人なら、誰でもかまわないさ。父さんたちが死んで、父さんたちの代わりにお前のことを、見守ってくれる人がいたら安心だ」

「死ぬなんて、まだまだ先じゃない。そんなこと言わないでよ」

「ははは。そうだな。ま、その前にさっさと二人にはこの家を出てってもらって、父さんたちは、余生を楽しむよ」

「そうだね。いつまでも私とお兄ちゃんがいたら、楽できないもんね」

「そういうことだ」

「じゃ、俺、家を出て行こうかな…」

兄がいきなり、そう言った。

「考えてたんだ。仕事場の近くに引っ越そうかって。もう、ひかりも大丈夫そうだし」

「前に出て行くって言って、そのままになっていたわね…」

母が兄にそう言った。

「お兄ちゃん、私のために家にいてくれたの」

私がそう言うと、

「ひかり、ばらすなよ」

と兄が言った。

「あら、そうだったの？ひかりのために？」

母が兄に聞いた。

「いや、ちょっと気になってたから。でも、もう大丈夫そうだし…。一人暮らしをする準備はしていたんだ」

「そう…。結婚は？」

「結婚はまだかな。でも、お付き合いを始めた人はいる。そのうちに連れてくるよ」

「あら、そうなの…」

母は、目を丸くした。

「ひかりはどうするんだ。仕事はアルバイトを続けるのか？」

父が私に聞いた。

「うん…。このまま続けてたら、正社員になれるかもしれないし…。わからないけど。いずれは正社員になりたいなって思ってるよ」

「そうか…。ま、それからでも一人暮らしは遅くはないかな…」

父が穏やかにそう言った。

「さて、そろそろ風呂に入るか…」

父はそう言って、ソファから立ち上がった。こうやって、家族がリビングに集まり、話をしたのは何年ぶりだろう。私が結婚する前だったな…。

私も、自分の部屋に行った。そして、今日の赤ちゃんの光をまた思い出した。奇麗な可愛い光だった。いつか、また私のお腹に生命が宿る日は来るのだろうか…。来てくれたらいいな。そして、その赤ちゃんが昴くんとの子だったらいいなって、そんなことをふと思った。

昴くんから、寝る前に優しいエネルギーが飛んできた。

『おやすみ』

って言うと、昴くんも、

『寝るところだった?おやすみ。ひかり』

と返事が返ってきた。あったかい優しい、エネルギーと共に…。

ミッション7　愛を書く

翌日バイトに行くと、一緒に事務をしている正社員の男性からこんなことを言われた。

「僕、小説家になりたいんです。それで、書いてるんですけど…」

「へえ。そうなの？」

「はい。今も書いてます。賞に応募しようって思ってます」

「ふうん…。小説って、賞を取ったら本になるの？」

「はい。なかなか出版社に持ち込んでも、なれないようですよ。小説家には…」

「茨の道だね。大変だ」

「そうなんです。でも賞を取ったら、いっきに本も出るし、有名になれます」

「有名になりたいの？」

「そりゃ、そうです」

「ふうん…」

そうか、本か…。ノエルさんが見てくれたとき、本を出すって言ってたっけ…。あれ、本当のことになるかもしれないし、ならないか

もしれないことだよね。流れに任せていたらいいことだけど…、本を出すってことが大変なことなら、なかなかできないかな。

パソコンに向かって私は仕事をし始めた。だが頭の中には、不思議な世界が広がっていた。

物語だ。ある女性と男性の…。すごい無償の愛のストーリーが浮かんでしまい、こびりついて離れない。休憩になっても、それが頭から離れようとはしなかった。

それから、午後仕事に戻ると少しだけ時間が空き、その時間にメモを出し、さっき思い描いたストーリーをざっと書いてみた。

なんだか不思議だけど、書けそうな気がするな、小説…。

そして家に帰り、私は、おもむろにパソコンを開き打ち出した。文字がすらすらと打てる。物語が勝手に展開していく。不思議な感覚だ。そのうちに、登場人物が勝手に台詞を言い出し、各々の性格も勝手に作り出されていった。

展開は自分が考えてるわけではない。逆に書いていて、

「こうきたか…」

っていう展開だった。

そして、その日は明け方の４時まで書いていて、１０時過ぎまでぐっすりと寝ていたようだ。昴くんの声で起こされるまで…。

『ひかり！聞こえる？』

『ん～～？昴くん？』

『テレビ観た？じゃなきゃ雑誌…』

『何？観てないけど、また何か出てた？』

『ひかりのこと…。どっかで調べたみたい』

『え？』

『バツ一で、流産もしてるって記事に出てた』

『……』

『ごめん。俺が巻き込んじゃった。やっぱり付き合ってるなんて、言わなければ良かった』

『いいよ、別に…。それで？』

『それでって…』

『私、別に気にしてないよ。事実だし・・・・。徹郎の名前までは出てないでしょ？』

『ひかりの名前も出てないよ。それはさすがに、ふせてるみたい』

『そう…。別にいいよ。なんかどうでもよくなっちゃった』

『え？』

『外側で、あ～だこ～ださわがられても、私自身はどこも変わらないし、傷もつかないよ』

『すごいな…。ひかり、強くなったね』

『ううん。強くなったんじゃなくって…。何かな？気にしなくなったっていうのかな』

『そうか。じゃ、俺も気にしない。勝手にさわがせておくよ』

『うん。今日は舞台は？』

『夜の部だけだよ。昼は取材が入ってる』

『そう…。頑張ってね』

『うん。もうすぐ東京での千秋楽だ。そうしたら…』

『大阪公演だっけ？』

『うん…。２週間だけだけど、しばらく会えないね』

『でもこうやって話もできるし、魂で会いに行けるよ』

『そうだね』

昴くんは、そうだねって言いながらも、どこか寂しげだった。

『大阪行く前に、休みはあるの？』

『2日間だけあるよ』

『会えるかな?』

『多分、会えるよ。1日はオフなんだ。1日は仕事入っちゃったけど…』

『じゃあ、会おうよ』

『うん…。丸1日いい?仕事休める?』

『いつ?』

『来週の月曜』

『ごめん、シフトはいってる…。5時まで仕事だ』

『じゃ、仕事の後会おう。火曜の仕事は午後からだし、夜はゆっくりとできるかもしれない』

『うん』

『じゃね。今日も仕事でしょ?』

『うん。今日は遅番。あ、昨日ね、私小説を書いてたの』

『夜ずっと?それで俺の声も、聞こえなかった?』

『え?話しかけてた?』

『うん』

『ごめん…』

『うん、いいよ。すごい集中してたね。どんな小説?』

『恋愛小説…。できたら見せるよ』

『うん』

『じゃ、仕事と舞台頑張って』

『サンキュー。ひかりもね』

昴くんからのあったかいエネルギーを、一瞬感じた。交信を切る前にどうやら、すごい愛のエネルギーを送ってきてくれたようだ。私も同じように返してみた。心の奥で大好きって思いながら…。

バイトは4時からなので顔を洗い、また小説を書き出した。また、ものすごい集中力で私は書いていた。

あっという間に昼を過ぎてて、母が昼ごはんはいらないのかと聞きに来て、慌ててダイニングに行き、昼食をとった。そして化粧をして着替えをして、バイトに行った。

更衣室ではまた私の話をしていたようだが、どうでもよくなっていたので、さっさと着替えをして私は事務所に行った。

ありがたいのは、事務の男の子が、まったく私と昴くんのことに、

興味がなかったことだ。男の子だからかな。それよりも、話すことといえば小説のこと。どんな内容のものを書いているのかとか、誰にあこがれているのかとか、そんなことばかりだった。

「私も書き出したんだ」

と言うと、目を丸くして喜び、

「どんなの書いてるんですか？」

と聞いてきた。恋愛小説で、だいたいの内容を話すと、

「面白そうですね！」

と言ってくれた。

「最近けっこう携帯の小説が、本になってるじゃないですか。そういう小説なら、いけるかもしれないですよ。いつかドラマ化や映画化…」

「ああ～。いいね…、それ」

実は書いている小説の男性は、昴くんがモデルなんだ。もし映画化されるなら、昴くんに演じて欲しい。でも、相手はだれか女優さんか…。ラブシーンはちょっと嫌かな。

「賞をねらいますか？」

「ううん。賞は別に欲しくないよ。でも多くの人には読んで欲しいかな」

「じゃ、賞をねらって、本にするのが1番かも…」

「う〜ん。そうね…」

本か…。どうなるのかな…。それは全部、宇宙の流れに任せるしかないな…。

小説は順調に書き進み、あっという間に１００ページを超えた。

「わ〜〜。こんなに書いちゃった」

プリントアウトしてまとめて、昴くんに見せることにした。明日は昴くんに会う日だ。

夜中、昴くんのエネルギーを感じてみた。

『ひかり?』

すぐに昴くんが、話しかけてきた。

『東京での公演、お疲れ様』

『うん。ありがとう』

『今までもしかして、打ち上げ?』

『うん、今さっき終わった。マネーシャーさんが送ってくれるって、今、車ん中…』

『寝てた？』

『ううん。ぼ～～ってしてた』

『ね。なんでいつも、私がエネルギーを送るとすぐにわかるの？』

『え？』

『呼んだ？って感じで声をかけるでしょ？』

『だって呼んでるじゃん…。昴くんって聞こえるよ、いつも』

『え？そうなの？』

『何？無意識だったの？』

『うん』

『あははは。面白い…』

そうか。エネルギーを感じるときに、声をかけてたのか。無意識に…。

『明日だね。会えるの…。なんか、すごい久しぶりに会うみたいだ』

『ええ？変なの。夢でもよく会ってるし、こうやって話してるのに？』

『ひかりの実体に会いたくなるの』

『ふうん…』

『俺に会いたくならないの？』

『なるよ』

『触れたくならないの？』

『え…。どうかな…』

『あれ？ならないの？』

『……』

『そうだよね。なるよね』

『え？私今、そう思ってた？』

『うん。触れられたら嬉しいけど…って思ってた。あ、隠そうとした？たまにするよね。自分でも感じないようにするでしょ。でも、俺にはばれればれ』

『もう…。それだから困る』

『なんで？困らなくてもいいじゃん』

『でも…』

『あ、そろそろうちに着く。また明日ね。仕事終わったら、直接俺のうちに来てね。パスタでも茹でて待ってるから』

『ほんとに？』

『うん。けっこう俺、料理うまいよ』

『ふふ…。楽しみにしてる』

そう言うと、昴くんはあったかいエネルギーを送ってきた。私もエネルギーを返して、交信を終わらせた。そのまま、目をつむった。昴くんへの思いで心があったかくなる。ふわ…、ふわ…。宙に浮いているくらいに軽くなる。

そしていつの間にか夢の中にいて、夢でも昴くんのあったかいエネルギーをずっと感じていた。

翌日、仕事が終わるのを心待ちにして、すぐに着替えて更衣室を出た。葉月ちゃんも同じ時間にあがり、一緒にビルを出た。

「これから、昴くんと会うんですか？」

「え？なんで？」

「私も、これから悟くんと会うんです」

「あ、そうなの？」

「もう大阪行っちゃうじゃないですか。２週間会えないのは寂しいから」

「そうだよね」

「でも悟くんと私は、お付き合いしてるわけじゃないですけどね」

「そうなの？」

「はい。悟くん、付き合ってる人いるみたいだし」

「え？！」

「女優さんみたいです。そういう話、あまりしてくれないけど。私のことは大事だけど、恋愛対象じゃないんですって…。私も悟くん好きですけど、お兄さんみたいな感じだし」

「……」

そうなんだ…。私はてっきり、悟くんと葉月ちゃんも、恋愛に進展していくのかと思ってた。

「だから、私にも恋をしたらいいって言ってます。悟くんが、好きな人はいないのか？って」

「いるの？」

「ドキドキする人は、やっぱり昴くんですよね」

「え？！」

「あ。安心してください。だからどうってことじゃなくて。あれだけ素敵な人は、そうそう現れないなってことです」

「そ、そう…」

「はい。でも、お二人が本当に仲いいの知ってますし…。羨ましいですけど…」

「そう…」

「あ～～あ。魂一緒なのに、悟くんとは恋愛対象にならないし…。私の相手って、いるのかな～」

葉月ちゃんはそうぼやいた。そうか～。悟くんじゃないのか～。

駅に着き、葉月ちゃんと別れた。それから電車に乗り、昴くんの家に向かった。駅に着き、

『昴くん、駅に着いたよ』

と心で言うと、

『道わかる？』

と聞いてきた。

『うん、なんとなく覚えてる』

そう言って歩き出した。心の中で、昴くんがどこを曲がるのかとか、ナビゲーターをしてくれた。そして、簡単に昴くんのマンションにたどり着いた。

確か、３０６だよね…って思っていると、

『うん、そう』

って声がした。３０６を押すと、すぐにマンションの入り口が開いた。中に入りエレベーターに乗り、さっさと３０６号室に行った。ドアの前まで来ると、自動ドアのように開き、

『はいって』

と、昴くんが心で言った。

『お邪魔します』

私も心でそう言ってから、中に入った。中に入ると、奇麗に片付いていた。

「あれ…、片付いてるね」

「うん。朝から片付けてた。なんてったって、２週間もあけるしさ」

「あ、そうか。向こうではホテル？」

「うん。みんなで同じホテル。それも楽しそうだよね」

「うん…」

「え？女性？いるよ、たくさん…」

私の心の声を、察知したらしい。昴くんが言った。

「だよね…」

「はは…やきもち？」

「ううん…」

なんて言ったけど、心配は心配…。もてるんだろうな、昴くん…。

「もてないよ」

いきなり昴くんは、私の手を握った。

「それに、俺にはもう彼女がいるってみんな知ってる。けっこう劇団の人の中でも、この話題は持ちきり…」

「え？」

「俺、ひやかされて大変なんだ。彼女とは仲良くやってるかって、いっつもうるさいんだよ。まあ、みんなあったかく見守ってくれてる感じだけどね」

「そうなの？」

「そうだよ」

そっか～～。ちょっと安心…？

「くす…」

あ、今、笑われた。なんて思ったのかな。昴くんにエネルギーを集

中してみた。

『可愛いよな～～ひかりって…』

あ…。なんか照れくさくなるようなことを、昴くんは思ってた。

「お腹すいてる？ちょっと下ごしらえはしたんだ」

「うん。ちょっとお腹すいてきてる…」

「じゃ、準備しちゃうね。そこで、座って待ってて」

「手伝うよ」

「いいから。座ってゆっくりしてて」

「うん…」

そう強引に言われて、私は床においてあるクッションに座り、雑誌を広げた。昴くんの写ってる雑誌だった。昴くんの写真をぼけ～～って眺めた。かっこいいよな～～。

それから、何冊かの男性のファッション雑誌と、車の雑誌が置いてあった。それもぺらぺら、めくってみた。

そして、くるりと部屋を見回した。洋服が何枚か、ハンガーにかかってあった。それから、外にはまだ洗濯物が干してある。どうやら自分で干したらしい。

「洗濯物、しまおうか？」

「え?ああ。忘れてた。お願いしてもいい?」

「うん」

洗濯物を取り込み、たたみ出した。あ…。さすがに昴くんのパンツは、たたむのが恥ずかしかった。

「あれ?たたんでくれたの?良かったのに、そのへんにぐしゃって置いといて…」

「そんなことしたら、しわになっちゃうよ」

「ごめん、ありがとう。あ!でも、パンツもあったよ」

「うん…」

ちょっと、しばらく二人して照れてしまい、変な空気が流れた。

「ま、いっか…」

と昴くんは笑い、キッチンに戻っていった。

キッチンを覗くと、鼻歌交じりで昴くんは野菜を切っていた。なかなか、手馴れた感じだ。備え付けられた食器棚には、ちょっとの食器が置いてあった。一人暮らしだもんね…。

また私は部屋に戻り、その辺を歩き回った。部屋中に昴くんの優しいエネルギーが満ちていて、心地がいい。

昴くんのマンションは1DK。ダイニングのテーブルは二人がけだ。部屋には小さなテーブルと、クッションがごろんところがっていて、それに小さめのデスクがあり、ノートパソコンが置いてある。そして、大き目の薄型液晶テレビがドンとあって、そのテレビを寝転がっても見える位置に、ベッドが置いてあった。

けっこう広い1ルーム。部屋には大きな収納スペースもあり、一人で暮らすには、十分な広さだ。

ベッドに腰掛けてみた。奇麗にベッドカバーまでしてある。ベッドからは昴くんの匂いが漂い、ふわって昴くんに包まれた気持ちになった。

「できたよ～～」

昴くんがダイニングから、私を呼んだ。

「わ…。良い匂い。なんのパスタ？」

「和風パスタ。好き？」

「和風？すごいね。そんなの作れるの？」

「うん。意外といけるんだ。これが！」

すごく嬉しそうに昴くんが言う。

グリーンサラダも、横にちょこんと置いてあった。それに、冷たい麦茶をグラスに入れてくれていた。

「いただきま～す」

二人で同時に言って、食べだした。

「うん！美味しい！レシピ聞いていこうかな」

「あはは…。聞いたら簡単すぎて、驚くよきっと」

「そうなの～～？」

それから、二人でいろんなことを話しながら食べた。舞台での失敗談。同じ楽屋の人の面白い話。昴くんの家族のことから、初恋の人のことまで。昴くんのことを知るたびに、私は嬉しくなった。

「アルバムはないの？」

「ないよ。全部、家に置いてあるから」

「なんだ、残念。見たかったな」

「いつかね」

「あ。そうだ。小説、書いたところまで、プリントアウトして持って来たの。見る？」

「見たい！」

私は鞄から取り出して、昴くんに渡した。昴くんが見ている間に、食べたものを片付けた。

「あ、ごめん。適当に流しにつっこんどいていいよ」

「いいよ。洗っておくよ。ごちそうになったんだもん。そのくらいします」

「そう?ありがとう…」

洗いものを済ませて、ダイニングの席に戻ると、

「すげえ…。本格的な小説だね。それに内容もすごくない?感動ものじゃん。ドラマ化か、映画化したらいいのに」

と昴くんは目を輝かせて、私に言ってきた。

「そうしたら、主役で出る?」

「出る出る!でも、相手役の女優さんとラブシーンもあるんじゃないの?」

「そうなんだよね。私、妬いちゃうかな」

「あはは…。じゃ、ひかりが相手役で出る?」

「じょ、冗談でしょ?」

「冗談だよ」

「もう〜〜〜!」

あはは…。昴くんは、笑ってから、

「あ…。向こうの部屋に移動しない？ゆっくりこれ、読みたいし…」

って言って立ち上がった。

「うん。」

昴くんのあとに続いて、部屋に入った。昴くんは、ベッドにどかって座って読み出した。

「ねえ。最後、この圭介って人、どうなるの？死んじゃうの？」

「ううん。死なない」

「え？」

「ハッピーエンドにしたいから」

「そっか…」

「奇跡が起きるの。まず、二人で死を受け止めるの。それから、今に生きて毎日を大事に生き始めるの。そうしているうちに、がん細胞が消えてなくなっちゃうんだ」

「へえ…」

「前にラジオで聞いたことがあるの。そんな作家さんの話」

「その人も、がん細胞消えたの？」

「うん。そういう奇跡って起きるんだよね？」

「うん。あるよね。映画でも観たことある。ノンフィクションの…」

「うん」

「そっか～。いいね。彼が死ぬってわかっても愛していくって、なんか見返りを求めない無償の愛だね」

「うん…」

「本にしたいね。どうにかなるかな…」

「あれ？流れに任せるんじゃなかったっけ？」

「ああ…。そうか…。そうだね」

私は昴くんのすぐ横に座って、昴くんのエネルギーをじかに感じた。優しいあったかいエネルギー…。それから、いきなりドキドキし始めた。わ…。胸の鼓動がどんどん早くなる。

横にいる昴くんの顔を見た。目は小説の方を見てはいるものの、どうやら読んでいるわけではないようだ。私は昴くんにエネルギーを集中してみた。すると、声が聞こえてきた。

『やばいよね』

『え？何が？』

『あまり、くっつかれると、俺ちょっと…』

そのあとに、ますますドキドキが強くなる。

『これ、昴くんの方？』

『そう…』

『この前も聞いたけど、私にときめかないんじゃなかったの？』

『うん…。それ、自分でセーブしてた』

『？』

『で、そのセーブを外して、ありのままに感じてみようってしてみた』

『うん…。それで？』

『それで、こうなってる』

『え？』

『だから、ドキドキしてる…』

そう言われて、こっちもドキドキしてきてしまった。

『隣、座ったから？ごめん…』

そう心で言って、離れようとすると腕を掴まれた。

「昴くん？」

「…2週間会えないんだよね？」

「え？うん…」

「そりゃ、心で会話は出来るけど、こうやって触れられないんだよね？」

「うん…」

昴くんはいきなり、抱きついてきた。

「え？」

私は、いきなりで驚いてしまった。ドキドキがもう、昴くんのものなのか、私のものなのかがわからない。

昴くんの心の声がどんどん聞こえてきて、こっちが恥ずかしくなってきた。

『このまま、ひかりを抱いてもいいかな…』

『ひかりのこと、抱きたいって思ってるってことはひかりもかな…。同じ気持ちでいるのかな…』

昴くんは私の顔を見た。じっと見ている…。しばらく見つめあってると、

「聞こえちゃった？俺の心読んでたよね？」

って聞いてきた。

「うん…」

私は、なんだか照れくさくて目をふせた。

「……」

昴くんは黙っていた。どうやら、私の心の声を聞いているようだ。
私は、慌ててしまった。

「駄目！」

「え？」

「聞いちゃ駄目！」

「なんで？俺のは聞いたくせに？ずるくない？」

「だって…、恥ずかしいから…」

「俺と同じ気持ちでいる？」

「……」

「黙ってたらわからないから、やっぱり聞くしかないじゃん。心の声…」

「わかった！言う。一緒の気持ちになってる…。でも…」

「でも？」

「いいのかな…」

「え？何が？」

「だって私…」

「年齢の差のこと？関係ないじゃん」

「でも…」

「俺ら、もう付き合ってるって、公認の中だし…」

「え？そっか…。いや、でも…」

「嫌なの？」

「え？」

「今、いやって…」

「思ってないよ。あれ？心の奥で思ってた？私…」

「いや、心の声は聞いちゃ駄目って言うから、聞いてないよ」

「そ、そうなの…？」

ふ～～～。力が抜けた。本当に聞かないようにしてくれたんだ。

「聞いてもいいの？」

「え？」

ああ…。もう、聞かれようが聞かれまいが、一緒かもしれない。口であれこれ言うより、もしかして楽なのかな。

「そうかも」

「あ！聞いてた？」

「ごめん、つい聞こえちゃった」

「……」

「もう聞いてもいいって、今、心の中で言ったよね？」

「聞いてたんでしょ？それも…」

「一応、確認。そんなこと思ってないって言われたら、困るから」

「…言ったよ」

「そっか！」

昴くんは、私のエネルギーに集中しているようだ。それから、私の目をまたじっと見て、ものすごい光で私を包み出した。

わあ…。その光だけで、私は溶けそうになった。

そしてキスをしてきた…。優しいキスだった。エネルギーがどんどん伝わり、私のことを包み私の体にも入ってくる。

ふわ…。体が宙に浮かぶようだ。あ…。幽体離脱しそうだ。

「待って…。魂ちゃんと、ここにいて」

いきなり、昴くんがそう言った。

「え?うん」

そして、昴くんにまた優しくキスをされ、そのままベッドに押し倒された。

昴くんが、Tシャツを脱いだ。わあ…。Tシャツの下は、意外にも筋肉があって、でも色が白くてすごく奇麗だった。

『意外はよけい…』

『え?』

『筋肉、ないと思ってた?』

『ううん…。そういえば、舞台で上着の内側着てなくて、筋肉見えてたっけ…』

『色白なのは、焼いちゃだめだったから。舞台してたし。夏なのに、海にも行けなかったよ』

『でも、奇麗だよね。肌も…』

私はうっとりしながら、昴くんを見ていた。首の線、喉仏、鎖骨、どこをとっても奇麗だ。

「男の人も、奇麗って思うの？」

昴くんが、私に聞いてきた。

「思うよ」

「セクシーだって今、思ってた？」

「思ってた」

「わかんねえ、その感覚。俺別に奇麗じゃないし、セクシーでもないでしょ？」

「自覚してないの？」

「まったく」

「自覚してきたら、ナルシストかな？」

「ええ？じゃ、自覚しないどこう」

くす…。なんか笑ってしまうと、いきなり昴くんは、私の服を脱がし出した。

「え？ちょ…」

抵抗すると、

「あれ？なんで？」

と聞いてきた。

「あ…明るいの嫌だな…」

「電気？消したら大丈夫？」

「うん…」

昴くんは立って、電気を消しにいった。その間に、私は布団の中に潜り込んだ。

「何それ？ずるくない？なんで布団に入ってるの？」

「ずるくないよ」

「だけど、俺だけ裸だよ？」

「裸じゃないじゃん。上だけじゃん、脱いだの」

「下も見たいの？」

「違う！見たくない！」

「そんなに拒否しなくても…」

「……」

「あ！まじで、見たくないって思ってる？！」

「うん」

「ショック…」

「なんで？」

「なんか、嫌がられたって…ショック」

「だって…」

見てはいけないような気がするもの。やっぱりアイドルは永遠にそういうところを、見せちゃいけないような…。

「何それ～～。もしかして、トイレにも行かないとか思ってないよね？」

「思ってる」

「おならもうんちもしないとか、思ってる？」

「あははは…。思ってるよ～～。昴くんは永遠のアイドルだから」

「ええ？」

布団の中でけらけら笑ってると布団の中に、昴くんも潜り込んできた。そして、笑っている口をキスしてふさがれた。

キスをされると、優しいあったかいエネルギーが入り込み、どうしてもふわって、魂が抜けそうになる。でも目を開けて、しっかりと昴くんの顔を見て、昴くんの体に腕をまわしてぎゅうってして、魂が抜けていかないようにした。

昴くんが、

「そんなにひっつかれたら、俺、服を脱がせられないよ」

と言ったから、抱きついてる手は離した。昴くんは優しく、1個ずつブラウスのボタンをはずしだした。

昴くんが触れるところが熱くなる。さっきからドキドキは、私のものか、昴くんのものか、それともお互いが同時にドキドキしているのか、わからなくなっていた。

昴くんの心で感じることが、ダイレクトに伝わってくる。

『奇麗だ。ひかり…』

『あったかい…』

『やわらかい…』

その声に思い切り恥ずかしくなる。恥ずかしくなっているのも、昴くんには伝わっている。

『ひかり、すげえ可愛い…』

ああ…、そんなことを言われると、溶けちゃうよ…。

昴くん、大好きだよ。

昴くん、愛してるよ。

昴くん…。

その私の心の声も全部、昴くんには聞こえてて、そのたびに昴くんも、

『俺もだよ』

って返事をしていた。そして…。

あ…。やばい…。気が抜けた瞬間、魂が抜けてた。でも、それは昴くんも一緒だった。その前に昴くんと同化してた。ぐるぐるとエネルギーが体の中から突き上げ、パアって軽くなった瞬間、幽体離脱してしまった。二人して…。

光の渦に溶け込み、宇宙のすべてと同化した。そして、しばらくその開放感を一緒に味わって、それから体に戻っていった。

いつもなら、すごく窮屈な自分の体…。でも、今は体に戻っても昴くんの体温を感じ、昴くんの体の重みを感じ、思いきり幸せを味わった。このぬくもりも重さも、ものすごく愛しい…。

昴くんは、私の髪にキスをした。それから耳、頬、鼻、あご、首筋、肩、腕、手のひら、そして指…。それから、

「朝まで、ひかりとこうしていたいな…」

と優しい目で見つめながら、ささやいた。

「うん。いるよ?私…」

「いいの?」

「うん。家には電話するけど…。いられるよ。明日遅番だし…」

「ほんと?」

「うん…」

昴くんの中から、喜びの感情が溢れ出ていた。そして、またキスをしてきた。

「キスされると気持ちが良くて、魂抜けそうになる」

「俺も」

「昴くんも?」

「でもどうにか、ここに留まってた」

「そうなんだ」

「だって、ひかりのぬくもりとか、ずっと感じていたかったから」

「同じだ…」

「変だね…。魂じゃ、しょっちゅう一緒になってたのにね。肉体では初めてだった。でも、やっぱり魂でくっついちゃったね。同化してた」

「うん」

「でもこうやって、肉体持って重なり合って、お互いの体温感じたり、鼓動を聞くのも気持ちいいね」

「うん…」

昴くんと指と指を絡めた。昴くんのエネルギーと私のエネルギーも、絡み合った。

「俺、まだドキドキしてる。わかる?俺の心臓…」

昴くんが私の手を、昴くんの胸にくっつけた。

「あ…、ほんとだ」

「ね?すごいでしょ?」

「うん」

「ひかりが隣にいるだけで、ドキドキする。でもすごく嬉しいし、幸せなんだ」

「私もだよ」

「やばいね。離れられないね。もう…」

「うん…」

昴くんは、また私にキスをして、それから、

「汗かいたし、シャワー浴びてくるね」

と言って、布団から出ようとした。

「あれ?離れないって今、言ったのに?!」

と冗談でそう言うと、

「じゃ、一緒に行こう!」

って、手をぐいってひっぱられた。

「え?」

「恥ずかしがらなくても、ひかりは俺だし」

「もう、こんなときばっかりそういうことを言って…」

「あはは…。いいじゃん」

結局、そのままバスルームに連れて行かれて、一緒にシャワーを浴びる羽目になった。

思い切り頭からシャワーをかけられ、私も昴くんからシャワーをぶ

んどりかけ返した。そんなことをして、しばらく二人できゃ～きゃ～遊んでいた。

バスルームから出て、髪をお互いが乾かしてあげて、それから部屋に戻り、また、べったりとくっついていた。

テレビをつけ、適当にまわした。お笑いの人が出てる番組にして、二人で観て笑った。

昴くんは私のことを、後ろから抱きしめていた。時々首筋にキスをしたり、肩にキスをした。そのたびに、胸がきゅんってなった。

そして夜も更けてきて、ベッドに入り、二人でべったりとくっついて寝た。

寝ているときにも、夢の中で昴くんを感じた。エネルギーが私を包み込み、とてもあったかかった。時々目が覚めた。目が覚めると、やっぱり昴くんの体温を感じられ、あったかいエネルギーに包まれていた。

『わ、私なんて、贅沢なんだろう。寝ていても、昴くんのエネルギーに包まれ、起きていても包まれてる』

心でそう思うと不思議なことに、昴くんはぐうすか寝ているのに答えてきた。どうやら夢の中で、私の声を聞いているらしい。

『プレアデスでもそうだったよ。ずっとずっと一緒だった。たまに一つになったり、分かれたり。でも、いつもお互いを感じあってた。今と一緒だ』

『そうか…。じゃ、ずっとこうやって、一緒なんだね』

『うん』

私はまた、目を閉じた。そして夢の中へと、戻っていった。

翌朝、昴くんの腕の中で目が覚めた。そっと私の体に回していた昴くんの腕を外して、ベッドから出た。しばらく昴くんの寝顔を見て、それからシャワーを浴びに行った。

バスルームから戻ってくるとまだ、昴くんはすやすやと寝ていた。

『は～～。なんて可愛い寝顔なんだろう…』

ぼけ～～ってしばらく、見入ってしまった。

「ひかり…？」

昴くんが起きたのかと思ったら、どうやら寝言のようで、またごろんと寝返りをうち寝てしまった。

『どんな夢を見てるのかな…』

自分の名前を寝ながら、昴くんが言う…。なんか、くすぐったいような気がした。

朝食を作りにキッチンに行き、まずサラダを作り出した。しばらくして、昴くんが起きたようでキッチンに来た。

「おはよう～～、ひかり…」

大きなあくびをしながらそう言うと、昴くんは後ろから抱きついてきた。

「目が覚めたら隣にいなくて、ちょっとびっくりした」

「なんで？」

「昨日のは、俺の夢だったかなって…」

「え？」

「最近、夢と現実がごっちゃになる…」

「くす…。昨日ぐっすり寝てたのに、私の考えてることに、昴くん答えてたよ」

「ほんと？」

「うん」

「夢の中にいたもん、ずっと」

「私が？」

「うん」

「そうなんだ…。不思議。本当に夢も現実も、一緒になってるね」

「うん」

昴くんは、抱きついたまま離れなかった。

「抱きついてたら、作れないよ、朝食」

「いいよ」

「ええ?でも、お腹すいてるでしょ?」

「すいてない」

そう言うと、もっと私のことをぎゅうって抱きしめてきた。

「やばい、やばい、やば〜〜い!俺、すげえひかりが好きかも!」

「え?」

「こうやって、ずっと抱きついていたいよ。このまま、今日は抱き合っていようよ」

「くす…。いいよ」

そのまま部屋に二人で移動して、しばらくまたべたべたとひっついていた。

ブルルルル……

「あ、携帯…。振動してるの昴くんのじゃない?」

「いいよ、出ないでも…」

「仕事のことかもよ？」

「う～～ん…」

昴くんは、しかたがないって感じで携帯を取った。

「もしもし…？」

誰かな…。

「あ、はい。…え？今日っすか？…はい。あ～。でも、夕方から仕事です。俺…」

何かの誘いかな？

「悟さんは？仕事ないんですか？」

悟くんか…。

「え？葉月ちゃんと？じゃ、二人で会った方がよくないですか？」

葉月ちゃん？

「はい…。え？俺？そうです。ひかりといます。はい…。今もいますよ、横に」

え？そんなことばらしてもいいの？

「はい…。あははは…。そういうことですよ。じゃ、いいっすか？

俺行かなくても。はい…。じゃ、葉月ちゃんによろしく言ってください。それじゃ、また明日」

そう言って、昴くんは電話を切った。

「お誘いだったの？」

「うん。葉月ちゃんと会うから、一緒に会わないかってさ。ひかりと一緒にいるって言ったら、じゃ、二人っきりでいたいよなって言うから…」

「よかったの？お誘い断って」

「うん。だって、葉月ちゃんと悟さん、二人で会った方がよくない？」

「…でも、あの二人は、付き合ってるわけじゃいし…。二人で会うよりもよかったのかも」

「え～～？駄目だよ。今日はひかりと二人でいるって、もう俺は決めてたんだから。こうやって、ずっとべたってくっついてるって言ったじゃん」

そう言うと、また私のことを後ろから抱きしめた。

くす…。なんか、子供みたいで可愛いな～。

「どうせ、ガキだよ」

あ…。心の中を読まれたか…。

「可愛いなって思ったんだよ？」

「ひかりは俺といたくないの？」

「いたい。ずっとこうしていたいよ」

「なんだ。じゃ、いいじゃん」

「うん…」

「ひかり、気づいてた？俺とひかりが愛し合うと、すごい光が放たれて、地球を覆ってた」

「うん…。感じてた」

「だから、こうやって二人でいちゃついてたら、光がドンドン出て地球を覆う。それも、俺らのミッションだよ」

「ほんとに？」

「ほんと、ほんと…」

そう言うと昴くんはまた私を、ぎゅうって抱きしめる。

でも、私も実は気がついてた。私を抱きしめるたびにすごい光が、昴くんから飛び出してくる。その光は私の体を包み込み、さらにそこら中に放射され、空高く上っていく…。それに私からの光も交ざり、それはもう、すごい光がそこら中に放射される。

そりゃ、まるまる1日いちゃついてたら、すごい光が地球を覆うだろうな～～。

そして、その日は私のバイトと、昴くんの仕事がある夕方まで、ずっと二人でじゃれあっていた。うん、「じゃれあっていた」が1番ぴったりくる言葉だと思う。

ご飯を一緒に作っていても、洗濯をしていても、昴くんはひっついてきたり、ふざけて邪魔してきたり、くすぐってきたり…。

ご飯も、食べさせあいっこをした。昴くんはすぐにゲラゲラ笑って、ものすごくご機嫌だった。そのたびに、光がきらきら飛び出してきてダンスを踊っていた。

ご飯を食べ終わり、片付けも終わると昴くんは少し大人しくなった。私の後ろからまた、私を抱きしめてきて、そして首筋にキスをする。

「首ってあったかいんだね…」

昴くんが言った。それから耳たぶにキスをしてきた。そして、またぎゅって抱きしめる。

「ああ…。2週間会えないのか…」

「でも、いつでもエネルギーは感じられるよ」

「うん…」

『一緒に、暮らせたらいいのに…』

昴くんの声がした。

『うん、そうだね…』

『ひかりも、そう思う？』

『うん。思うよ』

『いつか、実現できるかな』

『いつか、きっとね』

昴くんよりも、早くに出ないとならないので、支度をして部屋を出た。玄関で昴くんは、私のことをハグしてキスをして、

「じゃあね…、仕事頑張って」

と、にっこり優しく微笑んだ。

「うん。昴くんも大阪公演頑張ってね」

私はそう言って、玄関を出た。ふわ…。昴くんのあったかいエネルギーに包まれた。また、送ってくれたんだな。

『昴くん、大好きだよ』

マンションを出ながら、私はそう心で言うと、

『俺も、大好きだよ』

と、昴くんの声がした。幸せだった。めちゃくちゃ幸せだった。こんなに幸せで良いんだろうかっていうくらい、満たされていた。

バイトに直接行った。昨日と同じ服だろうが、制服なので、そんなのを気にする人もいなかった。

葉月ちゃんは休みだった。あ、そうか。悟くんと会っているのか…。

事務所に行くと、例の正社員の男の子が嬉しそうに話しかけてきた。

「小説書き終えたんですよ。今度読んでくれますか？」

「いいよ」

「じゃ、明日にでも持ってきます」

「うん」

そう言うと、とても嬉しそうに笑った。彼から、奇麗な光が発せられた。喜びの光だ。喜びと、希望の…。

バイトが終わり家に帰って夕飯を食べ、お風呂に入りさっさと部屋に行った。そして、小説の続きを私は書き出した。

気がつくと、1時をあっという間に過ぎていて、明日は早番だからもう寝ようと、電気を消してベッドに入った。

『ひかり？』

『昴くん？遅くまで起きてるんだね』

『うん。大阪行く準備してたんだ。遅くなっちゃった』

『仕事は？大変だった？』

『いや、そうでもない』

『明日は朝、早いの？』

『早いよ』

『じゃ、もう寝なくちゃね』

『うん、おやすみ。でもまた、夢で会えるね』

『うん。きっとね』

私たちは、眠りに着いた。不思議なことに、一緒に眠りに着いたというのがわかった。そして夢の中で、昴くんの優しいエネルギーに触れ、私は心地良い光に包まれ幸せを感じていた。

翌日と、翌々日の3日間で、私は小説を書き上げた。昴くんが帰ってきたら、全部を読んでもらおう。

そして、私は自分のことに集中していたので、葉月ちゃんの異変にはずっと気づけないでいた。

ミッション8　仲間を救う

葉月ちゃんの異変に気がついたのは、昴くんたちが大阪に行ってから、1週間を過ぎた頃だ。それまで、休憩時間が一緒になかなか取れなくて、話をしていなかったからわからなかったが、葉月ちゃんはなんだか元気をなくしていた。

私は、悟くんがそばにいないからかなって、勝手にそう思ってしまい、特に何も聞かないでいた。

だがその3日後、バイトが終わる時間に携帯がなって、

「仕事終わりましたか？」

と、葉月ちゃんが聞いてきた。その日は、葉月ちゃんはシフトにはいっていなかった。

「うん。ちょうど今終わったよ。どうしたの？」

ちょっと元気のない声なので、心配になり聞いてみた。

「あの・・・・、助けてもらえませんか？」

「え？」

「前に星野さん、具合悪くなったことありますよね。今、そんな状態で…」

「わかった。今どこ？」

「渋谷にいるんです」

「渋谷のどこ？」

「ＪＲの駅までは来ました。でも人混みもあって、気持ち悪くて動けない…」

「いいよ、大丈夫。そのまま動かないでね。すぐに行くから、休んでてね」

「はい…」

私は急いで着替えをして、ビルを出た。駅に向かい電車に乗り、渋谷に着いた。携帯でどこにいるかを聞き出し、葉月ちゃんのもとに行った。

葉月ちゃんの顔色は真っ青。震えていた。ああ、同じ症状だ…。

「大丈夫？」

葉月ちゃんは私の顔を見ると、ほっとしていた。

「何かあったかいものでも飲もうね。そのカフェに入ろう」

ちょうど前にあった、カフェに入った。それからホットミルクをたのみ、葉月ちゃんに持って行った。

そして、葉月ちゃんの背中や肩、腕をさすった。さすりながら、葉月ちゃんのことを私は愛しいと思った。そして私から葉月ちゃんに

向かって、光が飛び出し包み込んだ。だんだんと葉月ちゃんの顔は、ピンク色になっていった。

「良かった、体あったまってきたね。はい。ホットミルクも飲んで」

葉月ちゃんはこくってうなづき、ミルクを飲んだ。

「は〜〜」

葉月ちゃんが、ため息をした。でも、ほっとして出たため息のようだった。

「どうしたの？何かあったの？」

「はい。実は、今、お付き合いを始めた人がいて…」

「え？初耳。誰と？」

「友達の紹介です…。悟くんに恋でもしたらって言われて…。あ、この前大阪行く前の日にも会ったんですけど、その日にも言われたんです。心を閉じ込めちゃ駄目だって…。だから、誰かに恋をするのは、いいことだからって」

「悟くんが？」

「はい…。それで、ちょうど高校の時の友人が、ダブルデートに誘ってくれて行ったんです」

「うん…」

「あまり、気乗りはしなかったんです。なんか、タイプと違ってたし…。でも…」

「うん…」

「二人で会わないかって昨日、電話が来て今日会ったんです。はじめは大丈夫だったんですけど、途中から具合が悪くなって…」

「そうだったんだ…」

「二人で、渋谷を歩いてたんです。途中で肩に手を回してきて、その頃から具合が悪くなってきて…。その人から、黒いもやもやが見えて…」

「うん。私にも見えるよ。黒い霧でしょ?」

「はい…。それが私の体を覆ったんです。それから私の体が、冷たくなって…」

「わかるよ。私もそうだったから」

「私が助けに行った時ですか?真っ青でしたよね」

「うん」

「黒い霧って、なんなんですか?」

「負のエネルギーかな」

「負の?」

「葉月ちゃんの中にもあるの。それとリンクしちゃうの」

「え？じゃ、私が、その黒いもやもや出してるんですか？」

「う～～ん…。内側にあるんじゃないかな。男の人が怖いとか、そういうの…ある？」

「はい。あります…」

「そういう思いが、呼び寄せちゃうのかも」

「じゃ、そういう思いを私がもっていたら、ずっと…？」

「浄化できたら、いいんだけど…」

「…怖いっていうのをきちんと味わって、浄化するんだよって言われました」

「え？」

「悟くんに…。悟くんは、私が男の人を怖がってるのを、なんとなくわかってるみたいで…」

「それを知ってて、恋をしろって？」

「はい。ずっと、心の奥に押し殺していたら、浄化はできないって…」

「そう…。でも一緒に感じて、浄化できるかもしれないのに」

「え？」

「昴くんは、そうしてくれたの。私の苦しみも一緒に感じてくれてた」

「優しいですよね…。悟くんは冷たいんです。でも、悟くんって私なんでしょ？同じ魂なんでしょ？私が冷たいからでしょうか」

「わからないけど…。もしかして、自分にも人にも厳しい人なのかもね」

「え？」

「ごめん。やっぱりわからないや。悟くんの心のうちを聞いたことないし…」

「……」

「葉月ちゃんはないの？悟くんの心の中の声を聞くこと」

「ないです。そんなのできないです」

「できるよ。悟くんは聞いてるでしょ？」

「いえ…。私と心で会話はしますけど、私が何を考えてるかは、わからないみたいです」

「え？そうなの？」

「はい…」

そっか～。葉月ちゃんが閉じちゃってるからなのかな。

「じゃ、今日の具合が悪くなったの、悟くん知らないの？」

「いえ…。私さっき、無意識に悟くんに助けを呼んでて…。どうしたのって声が聞こえました。でも大阪だし、助けに来てくれるわけないし…。それで星野さんの方に、電話を入れたんです」

「悟くんには？」

「大丈夫って言いました」

「それで悟くんは？」

「もう、会話が出来なくなっていました」

「……」

そうか…。

「私、本当にミッションなんかあるんですか？それを遂行できるんでしょうか？自信ないです。それを悟くんとしていくなんて、考えられない…」

「……」

「悟くんのことも、信じられないんです」

「え？」

「ノエルさんのこと、あんなふうに言ってたし…。私、実は一昨日ノエルさんに会ったんです。ソウルメイトが、悟くんなのかどうか聞いてみたら、わからないって言われて…。なんか、同じ魂って思えないって言われました」

「え？」

「冷たいエネルギーを感じるって…もしかして本当は、悟くんの方が悪い宇宙人かも」

「ちょ…、ちょっと待って。それはないと思う。だって、すごく優しくてあったかい光を出す人だよ？」

「なんでわかるんですか？」

「私、助けてもらったもの。あ、写真あったでしょ？週刊誌に写ってた、私と昴くんの…。あの時、悟くんもいたんだ。横に…。昴くんと一緒に助けてくれたの」

「どうして、星野さんのことは助けてあげるのに、私のことは助けてくれないんですか？」

「助けようとしたんじゃない？」

「え？」

「でも、葉月ちゃんのほうから、交信も切っちゃったでしょ？」

「だって、遠いから…」

「遠くても、エネルギーは送れるよ」

「無理です。そんなこと一回もしてくれたことないです」

「もっと頭の中からっぽにしないと、感じられないよ？」

「え？」

「ほら、呼吸をして静かにして、頭を空っぽにする…。悟くんも言ってたじゃない」

「できません。なんか、雑念ばっかりはいって…」

「どんな？」

「悟くんって、本当に私と同じ魂なのかとか、どうして冷たいのかとか、そんなこと考えちゃって…」

「信じられないの？」

「はい…」

「だからかな。悟くんのエネルギーを感じられないのは…」

「わかりません。そういうの、よく…」

「…男の人、怖いのいつから？」

「幼稚園の頃、私父に暴力振るわれてたんです。お酒を飲むとぶってきて…」

「え？」

「もう離婚して、今は私、母と母の両親と暮らしてます」

「そうだったんだ」

知らなかった。それが子どもの頃の、辛い記憶だったんだ。

「だからお酒を飲む人も駄目だし、大きな声を出したり、男っぽいっていうだけで駄目なんです。嫌悪感を感じて…。今日会った人も、なんか男っぽすぎて…、そこも嫌だったんです」

「……」

「昴くんって、奇麗で優しくて、中性的じゃないですか。色も白くて、線も細くて」

「まだ、１９だからね…。でも、これからはわからないよ？」

「そうですね。でも、昴くんなら大丈夫なんです。怖さもなくて、一緒にいても安心してられる。だけど、悟くんってちょっと怖いんです」

「え？葉月ちゃんなのに？」

「それ、よくわかりません。悟くんが私って言われても、全然…」

「だよね。私もわからなかった」

「今は、わかるんですか？」

「魂になって同化しちゃうとね」

「幽体離脱ですね。それ、私まだ、できないし」

そうか…。同化したこともないのか。

「私、ミッションなんてもういいです。男に人が怖いのも、感じたくない。もう、こんなこと終わりにしたいです」

「でも浄化しないと、蓋しただけではまた、同じことを繰り返すよ」

「え？」

「同じ、繰り返しをしちゃう…。負のエネルギーを飼ってるだけで、逃がさなかったら…」

「そんなの、出来ません」

「それを悟くんが、手伝ってくれるから」

「…ほっておかれてます」

「え？」

「この前会った時にも、あまり話もしなくて1時間くらいで別れたんです。私二人で会うのも、気が引けて…。本当は昴くんと星野さ

んにも、同席して欲しかったんです」

「あ…」

それで悟くん、電話してきたんだ。

「ごめんね」

「え？」

「一緒にいられなくって…」

「…お二人は、一緒にいたんですよね？」

「うん」

「羨ましいです。仲が良くて…」

そう言うと、葉月ちゃんから黒いもやもやが出た。

「…これ、どうしたらいいですか？時々自分から出るのが見えて、どうしていいかわからない」

「黒の霧？大丈夫…。今消すね」

私は、葉月ちゃんが愛しいと思った。そして私から光が出て、霧を消した。

「どうやるんですか？それ…。どうして、光が出るんですか？」

「見えてた？」

「はい」

「これは、葉月ちゃんのことが愛しいって思ったから、出た光なの」

「え？」

「私は葉月ちゃんが、大好きだから」

「でも、私醜いです。だから、黒い霧が出るんです」

「醜くないよ。でもね、たとえ醜いことを考えたとしても、そんな葉月ちゃんも大好きだよ」

「え？」

「だけど醜い考えも、その思考は葉月ちゃん自身じゃない…。なんて言ったらいいかな。植えつけられたものなんだ。本来の葉月ちゃんは、すごく奇麗な魂なんだから」

「……。ほんとに？」

「うん」

「ありがとうございます。今、光で私のこと包んでくれてますよね。すごくあったかい」

「わかるの？」

「はい…。感じます」

「そっか…」

私がにこって微笑むと、葉月ちゃんはぽろっって涙を流した。

「あったかいんですね。光って…」

「うん。でもね、葉月ちゃんからも、いっぱい出てたよ。私を助けに来てくれた時…。悟くんと一緒に私を守るんだって、自信たっぷりで奇麗な輝く光が出てた」

「え?」

「悟くんからも、きっと出てる。感じてみて?今度…。ね?」

「はい」

「じゃ、もう大丈夫?駅隣だよね?一緒に帰ろう」

「はい」

私と葉月ちゃんはカフェを出て、一緒に電車に乗った。葉月ちゃんの横に、ぴたっとついて、常に葉月ちゃんを光で包んだ。他の余計なエネルギーが入らないように。

黒い霧に影響されたり、見えるようになったってことは、かなり心が開いたからなんだろうけど、まだ、黒の霧から守る術を知らないんだよね。この時期は辛いかもしれないな。

私はもう、黒の霧が来ても、ふって光を出してその霧を消せるようになったけど…。

光を出す方法はいくつかある。まず、その人本人を愛しいと思うこと。これがてっとりばやい。でも、赤の他人だったり、あまり好いていない人の場合は、いつも昴くんのことを思い出し、昴くん、大好きって思うようにしている。そうしたら、すぐに光が出せる。

悟くんは、どうなんだろうか…。どうしてほっておいているんだろう？わからない。

葉月ちゃんは、私の駅の前で降りた。最後まで葉月ちゃんにエネルギーを送り、しばらく別れたあとも、葉月ちゃん大好きだよって、思い続けた。その光は葉月ちゃんのところにきちんと届き、葉月ちゃんのことを包んでいた。

翌日は、だいぶ元気になった葉月ちゃんがバイトに来た。休憩時間が合わず、話があまり出来なかったが、でも、そのエネルギーは、結構元気だったから安心した。

私と昴くんは、毎晩寝る前に会話をした。今日あったことを話していた。

時々同化して、一緒に宇宙船に行ったり、世界に旅に出たりした。大海原で鯨を見たり、エジプトのピラミッドの頂上に登ってみたり。

でも、昴くんが言うように、人間でいるときの感動とはまた、別の感覚だった。どこにいても、何とでも一つというそんな感覚。

夢でもしょっちゅう会っていた。夢で会って、抱き合ったことがあ

る。不思議だった。夢なのにきちんと昴くんのぬくもりや、匂いや、息遣い、それに、感触がある。とてもリアルに感じられた。

朝目が覚めて、そのことを昴くんに言うと、昴くんもまったく同じことを感じていたらしい。もう、夢か現実かわからないねって、二人で笑った。

昴くんには、葉月ちゃんのことも言ってあった。悟さんが何を考えてるのかは、俺もわからないなって言っていた。私たちとはまた別のミッションがあるのかもしれない。私たちは見守ることしかできないのかもねって、そんな話をした。

昴くんが舞台に上がっているとき、一回同化した。すごいエネルギーだった。昴くんからはものすごい光が出てて、観客を見るとみんな泣いていた。

昴くんの大阪公演が終わり、東京に帰ってくる日が来た。その前日の夜に、

『明日、夜に４人で飯食わない？』

と、昴くんが言って来た。

『４人？悟くんと葉月ちゃんもってこと？』

『うん。悟さんからの提案。なんならうちで』

『昴くんち？』

『狭いけど、もう一つ小さなテーブル買えば、４人でどうにか食え

るかも』

『いいよ。私も葉月ちゃんも明日は早番で、5時にあがるから、そのあとに行けるよ』

『うん。じゃ、家で待ってるよ。ピザでも取って』

『うん。わかった』

すぐにそれをメールで、葉月ちゃんに送ると、

＞はい、星野さんがいてくれるなら安心です。それに、昴くんの家に行けるの楽しみです＾＾

と、返ってきた。葉月ちゃんって、本当に昴くんのことが好きなのかな…なんてちょっと思ってしまった。

翌日仕事が終わり、二人で昴くんの家に向かった。途中で、お惣菜とフルーツを買って、それからマンションに行った。３０６を押すとすぐに、

「今、あけるよ」

と昴くんの声がして、マンションの入り口が開いた。

「星野さん、来たことあるんですか？」

「うん。２回だけね」

「そうなんだ～～。わ～～。私ドキドキしてます～～」

え?そんなにドキドキしちゃうこと…?なんて思いながら、ドアの前に来ると、

「いらっしゃい」

と、すぐにドアが開いた。

「わ!すごい。なんでわかったんですか?それとも、ドアのところで待っててくれたんですか?」

葉月ちゃんが驚いていた。

「ううん。ひかりが、来たよって、心で言ったから」

「え?会話してたんですか?」

「うん。葉月ちゃん、どうぞ入って」

昴くんは、葉月ちゃんに向かってそう言った。

「はい…。お邪魔します」

葉月ちゃんが入り、私も後ろから入ってドアを閉めると、

「ただいま!ひかり!」

と、昴くんが突然、ぎゅってハグをしてきた。

「え?!」

私もだけど、葉月ちゃんがものすごく驚いていた。

「昴くん、葉月ちゃんがびっくりしてる」

「え？ああ…。ごめん。でも、久しぶりに会ったから、つい…」

そう言うと、昴くんは少し照れ笑いをして、奥に葉月ちゃんを案内した。

部屋に入ると、もう悟くんがいた。

「どうも」

「あ、こんにちは」

私はぺこってお辞儀をしたが、葉月ちゃんは何も言わなかった。

『あれ？なんかこの二人、変？』

『う～～ん。どうしたんだろうね？』

昴くんも気がついたらしく、心の中で言ってきた。

「ピザも、今さっききたところ。あと、サラダとパスタ作った」

「え？また作ったの？」

「うん。今日のは、じゃじゃ～～ん。トマトソースだよ。これもけっこういける！」

「昴くんが作ったんですか？」

葉月ちゃんが、驚いていた。

「うん。なんつって。トマトソースを買ってきて、実は和えただけ。ごめんね。手抜きで」

「いえ…、でも、パスタ茹でたんですよね？」

「それくらいはね。あ、座って、葉月ちゃん。何飲む？ジュースで良い？」

「はい」

昴くんはそう言うと、キッチンに行った。私はそのあとを追いかけ、

「これ、お惣菜なんだけど…。あとフルーツ盛り合わせも買ってきたよ」

と、買ってきたものを渡した。

「サンキュー」

昴くんが食器棚からお皿を出して並べ始め、フルーツのメロンを一口、口に入れ、

「あ、うまい」

って言ってから、いきなりキスをしてきた。

「え?!」

「メロン味した?」

「もう〜〜」

慌てて、後ろを振り返ったが、葉月ちゃんも悟くんもいなくて、

『良かった。見られてなかった』

と、ほっとした。

部屋に二人で、お皿とグラスを持って行くと、悟くんと葉月ちゃんは黙り込んでいた。

「あ、すみません。私何も手伝わなくて…」

「いいよ。座ってて」

昴くんはそう言うと、葉月ちゃんにジュースの入ったグラスを渡した。

「ありがとう」

葉月ちゃんが受け取った。

「昴くんの家、奇麗に片付いてるんですね」

「あ、これは2週間あけるから、奇麗にしていったんだ。普段はも

っと散らかってるよ」

「でも、洗濯とかもきちんとして…」

「うん。旅行中のは、みんなコインランドリーですませちゃった。あと、ホテルでお願いしたり…。だから、そんなに帰ってから洗濯する物なかったし。行く前のは、全部ひかりにしてもらっちゃったから」

「え？」

また、葉月ちゃんはびっくりしていた。

「そ、そんな仲なんですか？」

「そんな仲…って？」

どんな仲…？

「通い妻みたいですね」

「あ。それいいね！」

昴くんは、喜んでいた。

え～～？どんななの、それ…。

葉月ちゃんははしゃぎだしたが、まったく悟くんの方は見ようとしていなかった。逆に避けてるようにも見えた。その様子を、昴くんも感づいていた。

「これ、美味しいです。サラダもパスタも。昴くん、お料理も出来て、洗濯や掃除も出来てすごいですね」

「オトメンってやつ？」

って言いながら、昴くんは笑った。

「それに優しいし、羨ましいな。星野さん…」

葉月ちゃんから、黒いもやもやが出た。

「あ…」

それに自分で気がつき、葉月ちゃんは焦っていた。

「羨ましがると、出るんだよ」

悟くんがクールにそう言って、光を出しその黒い霧を消した。

「……」

葉月ちゃんは、その言葉に黙り込んでしまった。顔が沈んでいくのがわかる。それとともにまた、黒いもやもやが出る。

「……。ごめんなさい。私ばかりがこんな黒いの出して…。みんなは光を出しているのに」

「見えるの？」

昴くんが聞きながら、光を出しその霧を消した。

「はい。さっきから昴くんが笑うと、きらきらした光が出てたのも見えてました」

「そっか…。でも俺だけじゃなくて、葉月ちゃんも喜ぶと出してたし、ひかりも出してたし、悟さんからも出てたよ」

「悟くん…も？」

「見えてないの？俺のだけが見えてた？」

「…はい」

「昴に集中してたんだろ？」

葉月ちゃんは、そう悟くんに言われて真っ赤になった。

悟くんからは、本当につねに光が出ていて、葉月ちゃんを包み込んでいた。でも、葉月ちゃんは気がつかないようだった。

「ねえ。葉月ちゃん多分、誤解してるよ」

昴くんがそう言うと、

「え？何をですか？」

と不思議そうに葉月ちゃんが、聞いた。

「俺のこと」

「？」

葉月ちゃんが、もっと不思議そうな顔をした。

「俺、こう見えても、けっこう男だよ」

「え？」

「う～～ん、他の男と、そう変わらないって言うか…」

「…？」

葉月ちゃんは、首をかしげたままだった。

「葉月ちゃんの心は読めないから、ひかりや悟さんから聞いただけだけどさ…、葉月ちゃん男の人が怖いんでしょ？」

「え…」

葉月ちゃんの顔が、一瞬固まった。

「隠さなくていいよ。そういうのを俺とひかりもサポートするためにいるんだから」

「…男っぽい人とか、駄目なんです」

「俺、女っぽい？」

「中性的…」

「そう思ってるかもしれないけど、これでも普通の男だよ」

「……」

葉月ちゃんは、戸惑っていた。

「ひげもはえるし、酒も飲むし」

「え？未成年でしょ？」

私が言うと、

「ちょっとだけだよ。外では飲まないようにしてる。大阪ではホテルの部屋で、悟さんと飲んでた」

「そうなんだ～～」

私がちらって悟くんを見ると、悟くんはちょっと苦笑いをした。

「…お酒、飲むの？」

葉月ちゃんが、昴くんに聞いた。

「飲むよ。２０歳過ぎたら、きっと普通に飲むよ。煙草は吸う気ないけど」

「……」

葉月ちゃんが、少し顔をこわばらせた。

「でも…」

そして何かを言いたそうにした。悟くんが、葉月ちゃんの思いを察知したようだ。

「暴力はふるわないだろうけど、セックスは普通にするんじゃないの？」

いきなり、悟くんがそう言った。

「え？！」

驚いて、葉月ちゃんと私が同時に聞き返してしまった。

「だからさ、昴だって普通の人間の男なんだから、そういう欲求はあると思うよ。今まではどうか知らないけど、これから先…」

そう悟くんが言うと、葉月ちゃんがちょっと体をこわばらせた。その瞬間にまた、黒い霧が出てきた。

「あ、だからって、葉月ちゃんをどうこうするつもりはないから、その辺は安心して」

昴くんは、慌ててそう言ったが、葉月ちゃんの中からどんどん霧が出てきた。それを悟くんが、光を出して消していた。

「あ～～。なんか変な言い方してるよ。悟さん。だから、葉月ちゃんが怖がる」

昴くんが、悟くんに向かってそう言った。

「なんで？」

悟くんが、昴くんに聞いた。

「俺、セックスするけどさ。ただ、そういう欲求があるって訳じゃなくて…。愛してるから、愛し合いたいって感じだよ」

隣で聞いてて、私が照れて真っ赤になってしまった。

『そこで、動揺してるし…、ひかり真っ赤だよ』

昴くんがそれに気がつき、心で言ってきた。

『う、うるさい。私のことはいいの』

そう言うと、昴くんは葉月ちゃんの方を向いて、

「葉月ちゃんも、好きな人ができたらわかるよ。愛し合うってすごいよ。それだけで、地球を覆うくらいの光が放たれる。純粋に愛し合うって、悪いことじゃないし、怖がることでもないし」

「でも、男の人って…」

「まあね。セックスだけが目的みたいな、野蛮なやつもいるだろうね」

悟くんがまた、葉月ちゃんの心を読み取ったようだ。

「…でも、そんなやつばかりじゃないと思うよ。ちゃんと葉月ちゃんのことを愛してくれて、大事にしてくれるやつもいるよ」

昴くんは優しく、葉月ちゃんに言った。

「……」

葉月ちゃんは、黙り込んだ。

「でも、それは昴じゃないよ」

悟くんがそう言った。

「悟くん、もう私の心勝手に読まないで！」

葉月ちゃんが怒って、そう言った。その瞬間、黒い霧が出てきた。
それを光で消しながら、悟くんは、

「わかった。読まない」

とクールに言った。

『悟くんって、葉月ちゃんのことを大事に思ってるよね』

私は、心の中で昴くんに話しかけた。

『うん。思ってるよ』

『じゃ、なんでそれを言わないのかな?悟くんが、葉月ちゃんのことを大事に思ってるって知ったら、葉月ちゃんも変わるような気が

するんだけど』

『そうだね…』

「悟さん…。さっきからすごい光で、葉月ちゃんのこと包んでるけど…」

昴くんが話し出した。それを聞いて、葉月ちゃんは驚いていた。

「すごく大事に思ってるでしょ？」

昴くんが、悟くんに聞くと、

「あたりまえじゃん。葉月ちゃんは、俺だよ。俺の魂だよ。大事とか、そんなの通り越してる」

と、悟くんは答えた。

「え？」

葉月ちゃんが、驚いた顔をした。

「大事を、通り越してるって？」

私が聞くと、

「なんて言っていいのかは、わからない。でも、その存在丸ごとを認めてるし…」

「愛してるし…？」

昴くんがそう聞くと、悟くんは静かにうなづいた。

「…！」

葉月ちゃんは、目を丸くした。

「でも…、それはお前に対してもだし、ひかりさんにもそうだし」

と、悟くんが言った。

「ああ…。だから悟さんは、なんていうか、上をいっちゃってるんだよ。もう人間離れしちゃってる」

「そう言われてもな～～」

悟くんが、困ったっていう顔をした。

「もっとさ、普通に葉月ちゃんのことを大事にしたらいいじゃん」

昴くんがそう言うと、悟くんは、

「え？」

と聞き返した。

「葉月ちゃんにだけ特別にはできないとか、そんなこと思ってない？」

「特別も何も、葉月ちゃんは俺だし…」

「それそれ…。その感覚から離れて、もっとこの3次元の体を持った方の感覚、一回味わってみたら?」

「どういうことだ?」

悟くんは、不思議そうな顔をした。

「俺もはじめは、ひかりは俺なんだから、好きになったり恋したりっていうのは、おかしいって思ってた。でも、俺ら、今は地球上で人間してる。女と男の体を持って、物質化してる。それはそれで、ちゃんと体験したらいいと思ったんだ。なんていうか…、人間の俺が感じることをあるがまま、感じたらいいのかって…」

「人間の俺が、感じること?」

「うん。そういうのを無視してっていうか、感じないようにしてたら、何もこの地球上で体験できない。まだ俺ら人間だし、体験してもいいんじゃないの?」

「……」

悟くんは、黙り込んだ。

「それでお前は…、ひかりさんと交際してるって宣言してみたりしたのか?」

「ああ…。うん。だって、ひかりのこと好きだし…、ひかりも俺のこと好きだし、だったら付き合ってるってことじゃん」

「……。そっか…」

悟くんが何か、わかったぞっていう顔をした。

「なんだ。俺は葉月ちゃんが恋をして、ちゃんと男の人も受け入れられるように、そんな体験が出来たらいいって思ってたけど、それ、俺でも良いのか」

「へ？」

私と昴くんが、同時に聞いた。葉月ちゃんは、びっくりしていた。

「いや、そういう体験は必要だって、なんとなく感じてたけど…。だからそういう相手が現れたら良いなって…」

「うん…」

昴くんも私も、真剣に悟くんの言うことを聞いていた。葉月ちゃんは、目がまん丸だった。

「俺じゃ、その役はできないだろうなって思ってた」

「なんで？！」

昴くんが、すっとんきょうな声をあげた。

「だから、お前がさっき、言ってたのと同じ…。俺が俺のことを恋してどうよって…」

「あ～～～。俺も思ってた！やっぱり、悟さんも？」

「……」

悟さんは、黙って下を向き頭を抱えた。

「え?どうしたの?悟くん」

私が聞くと、

「いや…」

と言ったきり、また黙ってしまった。葉月ちゃんは、何がなんだかわからない様子だった。

「1番、大事に思ってるだろうし、1番の理解者だろうし、一緒に感情を浄化できるし、同じ魂だからこそ、恋人になるのがいいみたいだよ?」

と、昴くんが悟くんに言った。それからさらに、

「それに、こうやって男と女に分かれて、地球に生まれてきたのにも、意味があるんじゃないかって思うんだよね…」

と、昴くんが言うと、

「…そうだな」

って悟くんが、ぼそってつぶやいた。

「え?え…?」

葉月ちゃんは、ちょっと慌てていた。

「純粋に愛し合う…か。それがすごい光を出すのか」

悟くんは、下を向いたままそう言った。

「ミッション遂行だね。それもまた」

昴くんはそう言って笑って、私の肩をぎゅって抱いた。そして、ものすごい光を放った。それが私からの光と混ざり合い、辺り1面を包み込み、そのまま上昇して四方八方に放たれた。

「ね？すごいでしょ？」

昴くんが、そう言った。

「そうだな…」

悟くんは宙を見ながら、静かにそう言った。

「すごい光…」

葉月ちゃんにも見えたらしい・・・。

「愛し合うと、こんな光が出るんだ…」

葉月ちゃんが、ぼ～～って光を見ながらつぶやいた。

「怖いことじゃないでしょ？」

昴くんがそう言った。

「あとね、どうも葉月ちゃんは気づいてないみたいだけど、悟さん、本当にいっつも葉月ちゃんに光を送ってるよ。葉月ちゃんのエネルギーを感じるようにしてたし、葉月ちゃんのエネルギーが変化したのにも敏感になってた。大阪からでもいつでも、光を送るようにしてたよ」

「なんで、お前知ってるの？」

「そんなの見ててわかる。すごい光を出してて、あ、また、葉月ちゃんに送ってるなって…」

「……」

葉月ちゃんは、目を丸くして悟くんを見た。

「私、全然気がつかなくて…」

「だろうね…」

悟くんが、ぽつりと言った。

「俺に心、閉ざしてたから」

「悟くんが冷たいって、よく葉月ちゃん言ってたもんね」

私がそう言うと、葉月ちゃんは少し慌てた。

「それは、だって…」

「優しくって、どうすりゃいいの？俺はせいいっぱいしてたけど？」

悟くんがそう言った。

それを聞いて、私と昴くんはちょっと驚いてしまった。そうか…。悟くんなりの優しさで、接してたのか。

「あ！わかった。もっと、葉月ちゃんが心を開いたらいいんだ。そして、悟さんの心の声を聞いたり、感じたりしたら、わかるようになるよ」

昴くんが言った。

「え？でも、心を開くって…？」

「悟くんのエネルギーを感じてみるの…。黙って、心を穏やかにして…。そうしているうちに、感じるようになるから」

私が言うと、葉月ちゃんは悟くんの顔を見て、それから静かに目をつむった。どうやら、悟くんのエネルギーを感じようとしているみたいだった。

私と昴くんも、黙った。しばらく静かな時間が流れた。その間ずっと、悟くんから葉月ちゃんに光が送られていた。

いきなり葉月ちゃんが、ぽろぽろ涙を流した。

「え？」

私と昴くんは、動揺した。でも悟くんは、静かにまだ光を送っていた。

「あったかいです…。すごく…」

葉月ちゃんが、涙を拭きながらそう言った。

あ…。悟くんからの光を感じて、泣いてるのか…。

「ずっとこうやって光を送ってたし、包んでたんだけどな…」

悟くんがぼそって、そう言った。

「……」

葉月ちゃんは黙っていた。それから、目をあけて悟くんを見た。

「ごめんなさい…。冷たいなんて言って。私…」

「ああ。いいよ。言わなくても、心で感じたことはわかるから」

悟くんが、途中でさえぎった。二人から出る光が混ざり合っていた。きらきら奇麗な、あったかい光だった。それが辺り1面を包み込んだ。

「これ、悟さんと葉月ちゃんの光だよ…。わかる?」

昴くんが、葉月ちゃんに聞いた。

「はい。さっきの昴くんと星野さんの光と一緒ですね」

「うん」

葉月ちゃんは嬉しそうに笑った。そして悟くんを見て、恥ずかしそうに笑った。

「え？」

悟くんが、少し動揺した。

「どうしました？」

昴くんが聞くと、

「いや…」

と、悟くんは黙り込み、しばらくして、

「こういう、感情も自分の中にあるんだな」

とつぶやいた。

「どんな？」

昴くんが聞くと、

「昴がひかりさんに感じてるのと、多分一緒だよ」

と言った。

「ふうん…」

昴くんが、にやって笑った。

「あ。もうこんな時間だ。帰らないと…。車で来てるから、葉月ちゃんとひかりさん送ってくよ」

と悟くんが時計を見て、そう言った。

「ひかりは泊まってくからいいよ」

昴くんがそう言うと、

「え?!」

葉月ちゃんが、驚いていた。

「と、泊まるんですか?星野さん」

「うん。昨日の夜、明日会おうって昴くんが言って来た時から、昴くんは私が泊まっていくものだって思ってるなって、感づいてたよ」

と言って、鞄から、化粧道具やはぶらしを私は出した。

「あ。やっぱり気づいてた?」

「うん」

「……」

葉月ちゃんは、呆けていた。

「だから、言ったじゃん。昴はセックスもするよって」

ものすごく冷静に、悟くんが言うと、

「え？」

また、葉月ちゃんは動揺した。

「俺ら、恋人どうしなんだよ。葉月ちゃん」

昴くんはそう言うと、私の腰に手を回した。そして、

「もう、ラブラブなの」

と言って、にやって笑った。

「あほ！」

って私は、昴くんの腕をつねると、

「いて！なんだよ～～！」

って昴くんは、すねた顔をした。

「あはは…。本当に仲がいいんですね」

葉月ちゃんは笑った。

「悟さん、葉月ちゃんだけ送っていってあげて」

昴くんが言うと、

「うん。じゃ、またな」

と悟くんはクールに言い、葉月ちゃんと玄関の方に行った。

「ごちそうさまでした。あ、私何も片付けもしないで…」

玄関で靴をはいた葉月ちゃんが、そう言った。

「いい、いい。俺とひかりでやるから」

昴くんはそう言って、

「じゃ、またね。葉月ちゃん」

と、にっこり微笑んだ。

「はい。おやすみなさい」

「うん、おやすみ」

私と昴くんは、同時にそう言った。二人は玄関を出て行った。

「なんか、あの二人いい感じ」

後姿を、しばらく眺めていた昴くんが言った。

「ふふ…そうだね」

私も昴くんと眺めながら、そう言った。昴くんは私の腰に腕を回して、

「もう、つねらないでね」

って、笑って言った。

ミッション　第1段階終了

二人が帰った後、昴くんと洗い物を終え、部屋に行きくつろいだ。

「悟くん、昴くんが私のことで感じたようなことだって言ってたでしょ？」

「うん」

「あれ…。どういうことかな？」

「俺がいつも、ひかりのことを思うようなことってことじゃないの？」

「だから、それってどんな？」

「こんな感じ？」

昴くんは黙って私も見た。ああ…、心で感じてることを、私に感じろってことか…。

昴くんに、エネルギーを集中した。

『すげえ、ひかりが愛しい…。可愛い…。抱きたい…』

「え？！」

「わかった？多分、こんな感じ…」

と言って、背中から抱きついてきた。そしてぎゅって、抱きしめた。

「あ～～。2週間、ずっとこうして抱きしめたかった」

「夢で抱きしめてきたよ？」

「うん。でも、夢は夢だから」

「……」

私はしばらく、昴くんの腕の中にいて、そのあったかいエネルギーに浸っていた。

「もう、きっと葉月ちゃん、大丈夫だよね？」

私がそう言うと、

「うん。悟さんいるから」

と、昴くんは答えた。葉月ちゃんの心の中に巣くっている闇も、きっと悟くんの光で浄化されていくだろう。私の闇を、昴くんが浄化してくれたように…。

「ねえ…。第1段階は、苦しみや哀しみの感情を知り、それを乗り越え、愛や喜びを知るってことだったよね？」

「うん」

「じゃ、もうそこは、クリアーしたのかな？」

「ああ。そうだね。そうかもね」

「じゃ、もう第2段階に行くの？」

「そういうことになるかな」

「どんなことが起きるのかな？」

「もう、行動してるじゃない」

「え？私？」

「うん」

「何…？なんだろう…」

「小説だよ」

「え？」

「あれ、きっとミッションなんじゃないかな…。すごい内容だったもの。思い切り無償の愛を描いてた。それに、すごく大事なメッセージが隠されてる」

「どんな？」

「今に生きることだよ」

「今に…？」

「そう…。言わなかったっけ？宇宙には、今しかないんだ。時間があるってのは錯覚なんだ」

「錯覚？」

「幻想。明日も昨日も、本当はない」

「……」

「今、この時しかないんだ。だから、明日はきっといいことがあるとか、いつか幸せになるっていう考え自体が幻想なんだ。今しかないからね」

「そうなんだ…」

「今を感じるって、ものすごいことだよ。あ、面白い話しようか？」

「何？」

「Ｙｏｕ　Ｔｕｂｅ観たんだ。脳の博士の講演。これが面白いんだ。」

「脳…？」

「そう。その博士、女性だけどね、自分が脳卒中になって、体験するんだけど」

「何を？」

「人間の左脳と右脳の違い。役割っていうのかな」

「うん」

「博士は、左脳が機能しなくなるんだ。それで、涅槃の世界を体験するんだ」

「涅槃？」

「ブッダが悟りを開いて、感じた世界。宇宙はすべてがつながっている…」

「え？じゃ、私が魂になってすべてとつながってるっていう、あの感覚と同じ？」

「そう、それ…。右脳はね、今しか感じられない脳なんだって。味、匂い、触った感じ、すべて、今に感じることでしょ？」

「うん」

「それに、すべてはつながっているという、感覚なんだって。地球全部、兄弟だって言うそういう感覚」

「うん」

「それに対して左脳はね、未来と過去しか考えられない。だから、過去のデータをもとにして、未来を考える。計画する。あと、言語でものを考える脳なんだって」

「へえ…」

「それで、私は私…っていう分離の感覚なんだってさ。だから、誰かと比較したり、競争したり、孤独を感じたりする…」

「人間だ。人間の感覚じゃないの？3次元の…」

「うん。その二面性を人は誰しも持ってるんだ。でもね、その博士が言うには、左脳と右脳を上手に使い分けたらいいって。右脳のみんなは一つ、つながっているという感覚でいたら、世界は平和になるって、そう言ってたよ」

「今を感じる脳だよね？」

「そう。今、この瞬間にいつもいて、今を感じてたら、いっつも俺らはすべてとつながっている感覚でいられる。だから、競争もしない、比較もしない、未来への不安もない、過去にたいしての後悔や罪悪感もない。いつも愛を感じて生きていける…。みんなは一つだから、孤独感もない、寂しさもない、怖さもない」

「すごいね。でも、それって、アセンション後の世界なんじゃないの？」

「あはは…。実はアセンションなんていつでもできるんだよ。いつも、今ここを感じたら、それだけでいいんだ。簡単でしょ？なのに、宇宙人が攻めてくるだの、地球が崩壊するだの、変な話だよね？」

「そうだね。じゃ、いつでも誰で今ここに生きたら、それだけでもう…」

「うん。本当はすごくシンプル…。でも巧妙に、今ここにいられないようにしてるんだ」

「何が…？」

「思考が。左脳がって言った方がいい？」

「なんのために？」

「う～～ん。そこまではわからないや。でも、自分って存在を忘れて、３次元をたっぷりと味わってたんじゃないのかな」

「なんのために？」

「体験するために…かな？」

「人間を？」

「うん」

「じゃ、地球って人間体験できる、バーチャルシアターみたいなもの？」

「ああ。いいね、そのたとえ、面白いかも」

「マトリックスの映画みたい」

「うん。ほんと、そうだよね。俺ら、魂で本当は感情もないし、痛みもないし、体もないじゃん。それは、ひかりも知ってるよね？」

「うん」

「でもこうやって、人間の体で、いろんな感情を感じたり、痛いって感じたり、感動したりしてるじゃん」

「うん」

「魂の俺は、ひかりのこと見てドキドキしたりしないし、恋したりしない。嫉妬もしない。でも、人間の俺はそれを体験する。けっこう面白いもんだよ。それは全部体験であって、俺自身じゃない。なんていうのかな。本来の俺は、ただの光だ。でも、人間の俺はいろんな体験が出来る」

「遊園地みたいだね。じゃなきゃ、舞台で役を演じてるか…」

「うん。そうだね。遊園地では、作り物のジェットコースターだってわかってるし、安全なのをわかってるから、キャ〜〜怖いって悲鳴上げながらも楽しめる。でも、あれが何に乗ってるか、安全かどうかもわからないで、上下左右にぐるぐる回されたんじゃ、そりゃ心底怖いよね。きっと今の人間は、遊園地の乗り物に乗ってるのを忘れてる。それでぐるぐるになって、怖い〜〜ってことだけを感じているんじゃないのかな。ほんとうは安全で、作り物の世界なのにさ…。降りてみたらわかるんだ。な〜〜んだ。これ、遊園地のジェットコースターだったのかって」

「なるほどね…」

「舞台で演じてるってのもそうだよね。悪者の役や、悲劇のヒロインを演じてる。役になりきってて、役を今演じてるってことを忘れちゃう。それじゃ、ただ悲しい、苦しい、それだけだよね。でも、今演じてる役者なんだってことがわかれば、いろんな感情も楽しめるし、余裕持っていろんな役も演じられるし、全部を楽しめるじゃ

ん」

「うん」

「もし、もしね、万が一俺が浮気したとして…」

「え?!」

「人間のひかりは、めちゃ傷つくか、悲しむか怒るかするよね」

「うん」

「でも、魂のひかりはびくともしない。それに浮気も何も俺はひかりだし、そのうえ、浮気した相手も俺であって、ひかりでもあるわけ。みんなが一つだから、浮気も本気もないわけ。人間やってるときだけ、泣いたりわめいたりするけど、魂になってみたらなんでもないこと。ああ、面白い体験したなってそれだけ…」

「…。そうか。そんなもんか…」

「しらけた?」

「え?」

「そんなもんかって…」

「ううん。いろんな苦しみあるけど、全部、本当はたいしたことないんだなって思っちゃって…。でも、みんな思い切り苦しんでるよね。私だって、苦しんでた」

「そうだよ、そうなんだよね～。本当は、単なる体験に過ぎないのにさ」

「自分がしたい体験をしているの？」

「そうかもね」

「ふうん…。じゃ、ものすごく苦しんでる人も、自分で選んだ？」

「そのへんはわからない。ほら、ずっと過去生見てたとき、気づいたでしょ？輪廻転生。あの輪の中にいて、ぐるぐるしてるだけかもしれない。でもね、あれも今に生きたらなくなるんだよ。消えちゃうんだ」

「なんで？あ…。そうか、時間がないから。未来も過去もないから？」

「そう」

「過去生も何もないんだ。じゃ、来世で自分に返ってくるとか、来世で恨みをはらしてやるとか、そういうのもなくなって…」

「そう、それも全部幻想の世界。今に生きると抜けるよ、そこから…。だいたい、みんなが一つなのに、誰かを恨むこともしないでしょう。今しかないのなら、未来の生でこんなことをしたいってのも、なくなるわけ」

「そうか…。でも、そういうことを思ってると…」

「うん。幻想を創り上げ、そこに生きることになるよね」

「ね、天国がないってはじめに言ったよね？あれはどういうこと？」

「今しかない。ここしかない。ここがもう、天国みたいなもの。極楽浄土みたいなもの。涅槃なの。だから、死んだらそういう世界に行くんじゃなくて、もう、今ここにあるものなの。わかる？」

「うん、なんとなく…。あれ？じゃ、死なないの？」

「肉体は滅びるときはくるけど、魂は死なないよ。今ここにあるだけだよ」

「そうなんだ…。あれ？じゃ、肉体が死んだら思考とか、感情は？」

「なくなるよ」

なんか、寂しい…。

「寂しいっていうのもなくなる。だから死んだら、寂しさもない。なにしろすべてとつながるわけだし。だって、それ体験してるじゃない？」

「そうだね。そっか。人間の私だから、今寂しいって思ったのか」

「うん。そういうこと」

「…じゃ、寂しいっていう思いも、けっこう貴重な体験かな？」

「どんな体験もきっとね」

「ふうん…」

べたって、昴くんにくっついた。

「こういう感覚、別の体を持ってるから感じられるんだね。昴くんの匂いとかあったかさとか、鼓動とか…」

「うん。あれ？なんか俺、匂う？」

「うん。昴くんの匂いね…」

「くさい？」

「ううん。全然。愛しいよ…」

「あ…そう？…」

昴くんは鼻の頭を、ぼりって掻いてそうつぶやいた。照れてるのかな？

「そうだ。今日、小説全部プリントアウトして持ってきた。完成したの、読んでみてね」

「うん」

「それから、どうしようかな…」

「携帯か、パソコンのサイトに掲載したら？」

「え？」

「今、無料で載せてくれるサイトあるよ」

「そうなんだ」

「俺、いろんなところで宣伝するから…」

「宣伝？どうやって？」

「今、夢中になってる小説ですって…。雑誌のインタビューから、テレビから、あ、自分のブログにも載せる」

「ブログ？してたの？」

「今は、スタッフが書いてる。スタッフのレポートって感じで…。それを自分で書こうかって思ってたところなんだ」

「へえ…」

「毎日の更新は無理でもさ…」

そっか…。昴くんも発信していくんだね…。私は…、そうだ。私、星野ひかりで小説を載せるより、ペンネームで載せたいかも…。

「あ、そうだね。そっちの方がいいと思うよ。なんて名前にする？」

昴くんは私の心の声を聞いて、そう言ってきた。

「う～～～ん。そうだね～」

「星野ひかりでも、十分なペンネームになりそうだけど…」

「でも、本名だもん…」

「あ、逆にして、ひかりの星なんてどう?」

「え?」

「駄目か…。俺の名前とごっちゃにして星野昴」

「…」

「あ、今、心の中で、ばっかじゃないって言った?」

「わかる?今、読まなくてもわかったでしょ?」

「まあね…。顔つきでね…」

「祈り…とかいいな〜〜」

「え?」

「いのり…」

「星野いのり?」

「あ、それもいいな。でも、苗字も変えたいから、天野いのりとか…。それか、もう堂々と宇宙って書いて、そらって読むの。あ、ひらめいた。美しい空で、美空」

「美空ひかり」

「美空ひばりに似ちゃう～」

「あはは…」

「もうわかんないや。昴くん考えて」

「いのり…。気に入ったけどな。星野いのり…。苗字が同じでもいいんじゃない？もし変えたいなら、空野いのり…とか」

「そらの？」

「そらの、いのり…」

「うん、いいかも。なんか広がるイメージあるし…」

「よっしゃ～～。あ、なんか楽しくなってきた」

「くす。なんで昴くんが…？」

「え？だって、なんか面白そうじゃん。これからの展開…」

「うん。ふふ…。昴くんってどんなことも楽しんじゃうよね」

「そりゃそうだよ。だって、ここはバーチャルシアター。体験版だよ。遊園地だよ？いろんな体験楽しまなくちゃ」

「そうだね」

「でも、ミッションは遂行する。で、ミッションは…」

「宇宙の流れに任せていたら、いい…でしょ？」

「そ。何が起きるかは任せて、起きてきたことを楽しむ…」

「うん。楽しそう。何が起きてくるかな」

「でも今は…」

「わかってるよ。今を楽しむんでしょ？」

「そういうこと～～！」

そう言って、昴くんは私をぎゅって抱きしめた。

「もう、夜が明けちゃうよ。明日俺は仕事ないけど、ひかりはあるでしょ？」

「ないよ。ちゃんとシフトあけておいたよ」

「まじで？！」

「うん。まじで…」

「やった～～～！丸1日、一緒にいられるじゃん。じゃ、寝坊も出来るね。夜更かしOKだね」

昴くんは、ものすごく喜んだ。もう、きらきらした光がそこら中に飛び散って、そこら中でダンスをしている。

「うん。だから、何かテレビでも観る？」

「なんでそうなるんだよ？ひかり、こっち…」

昴くんは、ベッドに私を座らせた。

「シャワー浴びたいな。仕事もしたし…」

と、私が言うと、

「……」

昴くんは、顔がええ～～？って顔してる。心の中を読まなくても、丸わかり…。

「シャワー浴びてきます！」

と言って、さっさと昴くんの体から、すり抜けた。昴くんを振り返って見ると、ベッドに倒れこんでいた。

「ちぇ～～～。ちぇ～～～」

何が「ちぇ～～」なんだか…。それから飛び起きて、聞いてきた。

「あ！一緒に浴びるのは？」

「駄目。今日は一人で浴びる」

そう言って、さっさと私はバスルームに、入ってしまった。さぞが

っかりしてるだろうと、昴くんの心の声を聞いてみた。そうしたら、

『1日、ひかりと一緒にいられる。すげえ嬉しい…！』

と、うきうきわくわくした思いが伝わってきた。なんか可愛いな～。

シャワーを浴びて部屋に行くと、昴くんはなんと寝ていた。うきうきわくわくしながら寝たようで、顔はにやけていた。

ああ…。このにやけ顔まで、可愛いや…。

私はしっかりと寝る準備を済ませて、そっと昴くんの横に潜り込んだ。

「うん…。ひかり…？」

起きたのかと思ったら、やっぱり寝ていた。寝言だったみたいだ。

寝ても覚めても私なの？って思うと、なんだか照れくさくなった。

でも、私もそうか…。寝ても覚めても昴くんだな～。

そして眠りにつくと、夢の中に昴くんがいた。思い切り抱きつかれ、そのまま押し倒され…。あ…。なんだか起きてたとしても、夢の中でも変わらなかったな～って、不思議と夢の中の私は、思っていた。

翌朝、昴くんは起きても寝ぼけていた。しばらく夢を現実と思っていたらしい。

「昨日、なんか俺、ちょっとあれだったよね…」

「え？」

「強引って言うか、その…」

「？昨日？」

「だから、その…。ちょっとワイルドになってました。で、いつ寝たかも覚えてないし」

「え？！何が？何のこと？もうシャワー浴びて出てきたら、ぐうすか寝てたよ」

「誰が？」

「昴くんが…」

「ええ？でも俺…」

「それ、夢だよ」

「……」

昴くんは、開いた口がふさがらないくらい驚いていた。

「あれ？夢？夢？すんごいリアルで…。感触っていうか、全部覚えてるけど？」

「でも夢だよ？」

「……」

また、昴くんはぽかんと口を開けていた。

「え～～～！！嘘だろう～～！じゃ、俺、まだひかりと愛し合ってないじゃん！」

「う～～ん。でも多分、同じ夢だよ。夢の中で、愛し合ってたからいいんじゃない？」

「でも……」

昴くんは、少し情けない顔をした。

「寝ちゃったの？俺……」

そうとう、ショックだったらしい。私は、さっさとそんな昴くんをその場に残し、顔を洗いお化粧をして髪をとかし、朝食の準備にとりかかった。

昴くんが後ろからやってきて、抱きついてくると、

「夢の中の俺のほうが、ワイルド…」

と、ぼそって言った。

「現実じゃあんなことできない。ちょっと、気が弱くって俺…」

「あはは…。何それ～～」

笑ってしまった。それから、昴くんも顔を洗いに行き一緒に朝食をとった。

いい天気で、洗濯物を干して掃除をした。昴くんは、いろいろと手伝ってくれた。っていうか、私のほうが手伝っているのか、本当は…。

昴くんが、コーヒーを淹れてくれてから、パソコンを開いた。

「何個かあると思うんだ。小説を載せられるサイト」

と言って検索をしだした。それから、

「あ、ここなんかよさそうだよ」

と一つ、サイトを見せてくれた。

「ふうん…」

他の人の小説を見てみたら、けっこう読みやすい感じだ。

「うん。いいかも…」

私が、今度はパソコンの前に座り、そのサイトの会員になった。そしてすぐに、私の小説を打ち出した。

題名は「今　このときを　愛してる」ペンネームは、空野いのり。

でも、横で何かと昴くんがちょっかいを出すので、なかなか進まない。

「昴くん、くすぐったいよ。打てないってば…」

「じゃ、こうやってくっついてるだけにする」

そう言って、後ろからべったり抱き付いてきた。でも、やっぱり首筋にキスをしてきたりするから、集中が出来ない。

「昴くん。集中出来ないよ」

「じゃ、家でやって」

「え?だって、パソコン開いたの昴くんだよ」

「うん」

「ま、いっか~~。そうだね。自分のパソコンなら、保存してるファイルから載せられるね」

「うん」

昴くんは、ちゃんと私の話を聞いていないようだ。生返事っていうやつ。

私は、昴くんの心の声を聞いてみた。あ…。聞くまでもなかった。そのまま、押し倒されてしまった。それにキス攻めにあっちゃうし…。

そして結局またベッドに乗せられ、着替えた服も脱がされた。

「もう、俺、絶対寝ない」

と、断言をしながら…。

ああ、確かに…。夢の中の昴くんのほうがワイルドだ。現実じゃとっても優しい。あ、それ、気が弱いからって言ってたっけ?それを思い出すと、ちょっと笑いそうになってしまった。

でも昴くんに悪いと思って、必死にこらえたが、

「全部、聞こえてるから」

と言われてしまった。ああ、心の声を聞いていたのか…。

「どっちの俺がいい?」

「え?」

「ワイルドな俺。優しい俺…」

「どっちも好きだよ」

「え?」

「どっちも昴くんだもん。大好きだよ」

そう言うと、昴くんは真っ赤になった。あれ?こんなに照れること、今までなかったのにな。

そして、その日も昴くんと二人で思い切りいちゃついて、1日が終

わっていった。

夜になり、帰り支度を始めながら、

「明日、早番だから今日は帰るね」

と私が言うと、

「うん。駅まで送っていこうか？」

って昴くんは言ってくれた。

「大丈夫、すぐ近くだし…。じゃ、明日は仕事でしょ？頑張ってね」

「うん。ひかりもね」

昴くんがぎゅってハグをして、優しい光で包んでくれた。私からも、いっぱい光が飛び出て昴くんを包んだ。

そして、私は家に帰った。家に着くとすぐに部屋に入り、私はパソコンを開いた。そして、小説を載せていった。でも、さすがにそれにも時間がかかり、半分も終わらないうちに、夜中になってしまい、私はお風呂にはいって寝ることにした。

寝る前に昴くんを呼んでみたが、もう寝てしまったようだ。私も寝たが、その日は昴くんは、あったかい光を夢の中で送ってくれるだけだった。その光に包まれて私は、ぐっすりと寝ることが出来た。

翌日は、バイトに出た。更衣室で葉月ちゃんに会い、昼ごはんを一緒に食べる約束をした。

事務所に行き、例の正社員の男の子に、小説を書き終わり、あるサイトに載せたんだって話をした。

「え?賞に応募しないんですか?」

「うん。だって、賞とか興味ないし…」

「もったいない」

「え〜〜。いいよ〜〜」

「なんていうサイトに載せたんですか?僕読みたいです」

と言うので、教えてあげた。早速今日、帰ったら読みますと言ってくれた。

なかなか、まじめないい青年だ。青年といっても、もう２４歳。名前は、斉藤くん。いつもあれ?佐藤くんだっけ?伊藤くんだっけ?と間違ってしまう。でもやっと覚えた。斉藤だ。

彼の書いた小説を読ませてもらったが、なんというか、ものすごく真面目なストーリーだった。文学っていった方がいいかな。

そういえば、私と昴くんとの噂は、みんないつの間にかしなくなっていた。人の噂話なんて、こんなものか…。

テレビや雑誌でも、もう取り上げられていない。それよりも、他の芸能人の大きなニュースが立て続けにあり、そっちで話が盛り上がってる状態だった。ありがたいといえば、ありがたい。さっさと忘

れてくれたら本当に助かる。

昼休み、葉月ちゃんとレストランに入り、ご飯を食べた。

「一昨日、どうだった？帰り…」

私が聞くと、葉月ちゃんは少し顔を赤らめた。

「悟くんが、もし、俺のことを恋愛の対象として見られるなら、俺と付き合おうって言ってくれました」

「へ～～。そうなんだ」

「はい…。でも、お付き合いしてた人がいますよねって聞いたら、別れたって…」

「…そうなの？」

「ミッション遂行するためには、別れた方がいいって思ったらしくて。そういうところも、クールですよね。私、ちょっとそれ聞いて、私もさっさと別れようって言われたらどうしようって、思っちゃいました」

「それで？」

「でも、その気持ちを悟くんが察して、それは絶対にありえないって言われました。だって、別れようにも、俺は葉月ちゃんだからって…。そのへんはよくわかんないですけど…。もし、別れたとしてもいずれは、またくっつくしって」

「一つの魂だったんだもんね。そりゃ、くっつくよね」

「いつですか？」

「え？今すぐじゃないよ。そうだな。葉月ちゃんの一生を終えてからかもしれないし。もっと先かもね」

「死んでからってことですか？」

「うん。だって今は別の肉体持ってるし」

「あ、そうですよね」

「うん」

「私、悟くんに聞いたんです。私のことを恋愛対象に見れるんですかって。私の方は見れたとしても、悟くんのほうが無理なんじゃないかって思って」

「うん」

「そうしたら、ちゃんと見ているよって…」

「そっか～～。良かったね」

「はい。なんか悟くん、口数少ないけど、優しかったです」

「そっか～」

「星野さんは、昴くんの家に泊まったんですよね？」

「うん。昨日の夜、家に帰った」

「じゃ、それまでずっと？」

「うん」

「あ、今羨ましいって思っちゃった。これ、黒い霧が出ちゃうんですよね。いけない」

「いいんだよ。そんな感情を持ってる葉月ちゃんのことを、自分で許してあげて」

「え？」

「そんなことを思っててもいい。そんな自分も可愛いわって…。そうすると、光がでるよ」

「そうなんですか？」

「うん」

「はい。そう思うようにしてみます」

葉月ちゃんはなんだか、素直になった。そして顔がすっきりした気がする。

「私今ね、小説を無料サイトに載せてるの」

「え？」

「昴くんに相談して、そんなことをしてみることにしたの」

「本になるんですか？ノエルさんが言ったみたいに」

「本になるかはわからないよ」

「どんな内容ですか？」

「恋愛もの。読んでみて」

「はい。どのサイトでなんていう小説か、教えてください。読みたいです」

私は葉月ちゃんにも、教えてあげた。

これからどうなっていくのかわからないが、とにかく何かを発信し始めた。それだけは感じていた。

昴くんが言うように、もうミッションの第2段階に入っているのだろうか…。私たちは第1段階を、クリアーしたんだろうか…。

一緒に苦しみを味わい、喜びや幸せを味わい…。そして、愛を体験した。じゃあ、これからは？

昴くんがいつも言うように、今にいて、起きてきた事を受け止めていったらいいんだよね。うん。大丈夫。だって、昴くんがいつも、いてくれるから…。あの優しくてあったかくて、私をいつでも大事に思ってくれる昴くんが、いつもそばにいてくれるから。だから、何があっても大丈夫…。

私はそんなことを思っていた。何がきても大丈夫…。まさか、これからのミッションはもっと、苦しむことになるなんて、予想もしていなかった。

昴くんがいてくれるから大丈夫。それが、まさかこんな展開になるなんて…。ミッションの第2段階は、さらに、私の心の奥底へと進みこんでいく旅になった。

第2部　ミッション1　違う次元へ（前書き）

ここから、第2部が始まります。

第2部　ミッション1　違う次元へ

私は、「今　このときを　愛してる」という小説をどんどん、小説サイトに載せていった。まだ、反響はない。ちょっとは、アクセス数が増えているものの、そんなには一気に増える感じでもなかった。

夜、寝る直前に昴くんが、

『今、小説見てるよ。だいぶ、載せられたね』

と、心で話しかけてきた。

『うん。昴くんはブログどうした?』

『今日書いたよ。見てよ。俺のオフィシャルサイト』

『ほんとう?見てみる。待って、今、見るから…』

そう言って、私は昴くんのサイトを開けてみた。

『あ!私の小説のこと早速書いたの?』

『うん』

ブログには、今はまっているものとして、パソコンで小説を読んでいますって書いてあった。私の小説の題名と、ペンネームも書いてあり、

＞はまりすぎて、すっかり夜更かししています。でも、舞台が終わ

り、しばらく夏の休暇をもらったので、ちょうどよかったです。みなさんも読んでみてください。感動して泣いちゃうこと間違いなしです。

なんて、書いてある…。

『ね？なかなかいい感じで書いたでしょ？明日のにも書いておくから』

『うん。明日なら、全部小説載せられそう。あ…。今って休暇中なの？』

『うん。８日間もお休みもらっちゃった』

『ええ？何するの？』

『今日から実家に戻ってる』

『今、山梨なの？』

『うん。明日までのんびりして、あさってからニューヨークに行く』

『ええ？！』

『同じ事務所で仲良くしてる先輩がいて、その人と一緒にニューヨーク行って舞台観てくる。もう、けっこう前から予定してたんだ』

『知らなかったよ！』

『ごめん。言うの忘れてた。ニューヨークから帰った次の日から、

もう仕事なんだ。しばらくひかりとは、ゆっくり会えないね』

『そうなんだ…』

『寂しい？』

『うん…。でも、夢で会えるか…。あ、時差があるから無理？』

『そうだね…』

『……』

『ごめんって…』

『え？私なんか怒ってた？』

『あれ？自覚無し？今、心の中で俺のことせめてたよ』

『ごめん…。無意識だ』

『いいけどさ。ずっと会えなくて寂しい。昴くんのばかばか！って思っててても…』

『そんなこと、思ってないよ～～！』

『あははは…。そのくらいに思って欲しいなって、俺の願望』

『何それ…』

『帰ってきたら仕事始まるけど、なるべく会えるようにするよ。仕

事って言っても、雑誌の取材と、ＣＭの発表とかそんなもんだし…。
あ、そうだ。俺、秋のドラマ出るんだ。主役で』

『え？すごい！』

『うん。それも、面白い役なんだ』

『どんな？』

『超能力を持った高校生で、人の心を読んだりして、いろんな事件を解決していくっていう…』

『へえ…。なんか、昴くんっぽいじゃん』

『あ。言っとくけど、俺が心読めるのはひかりだけだからね』

『あ。そうか…』

『まだ脚本もできてないし、どんな感じになるかわからないけど…。ラブシーンがあるかどうかも』

『え？』

『気になる？』

『べ、別に！』

『あはは…。素直じゃないんだから。ドラマのクランクインはまだまだ先だけどさ』

『そう…。始まると忙しいの？』

『けっこうね』

『……』

『寂しい。昴くんのばかばかばかって今、思ったでしょ？』

『思わないよ。もう～～。…そりゃ寂しいけど』

『じゃ、一緒に暮らす？』

『え？』

『離れてて寂しくなるなら、一緒に暮らさない？』

『……』

『あ。今、めちゃくちゃ嬉しい。昴くんのばかばかばかって』

『思ってない！そりゃ、嬉しいけど、でも…』

『でも？』

『私、ちゃんと自立できるようになってからがいいな…。バイトじゃなくて、正社員になって』

『家賃なら大丈夫だよ？』

『でも…。やっぱり…』

『そっか…。うん、わかった。ひかりがそう言うなら』

『……。うん。ごめんね』

『え？なんでごめんなの？』

『なんか、わがまま言ってるみたいで…』

『あはは。そんなことないよ。あ、いてて…』

『え？どうしたの？』

『猫。今、背中にのってきて…。爪が痛かった』

『猫、飼ってるの？』

『うん。２匹いる。にぼしと、かつおぶし』

『何？その名前…』

『あはは…。いいでしょ？俺がつけたの。愛称はにー坊と、かっちゃん』

『あ…。それなら可愛いけど…』

『今度写メールで送るよ』

『え？でもメアド知らないじゃん』

『え？ああ！そうじゃん！知らないじゃん！俺！！！！』

『あはは…。今頃気がついたの？』

『なんだよ～～。今、教えて、今！じゃなきゃ、いろんな写真送れない。ニューヨークからでも送るからさ』

『送れるの？』

『うん。ＰＣの方も教えといて』

『うん。今から言うよ。メモしてね』

なんだかおかしいな。今さらだよね。それにしても、ニューヨークからでも、昴くんのエネルギーは感じられるのかな。

『大丈夫だよ。宇宙からだって、どこからだって感じ取れるよ。同化もできる』

『そうだよね…』

昴くんがしばらく黙った。感じ取ってみると、どうやら猫とじゃれてるらしい。たまに、いてて…って言ってる。

『いいな…猫』

『え？』

『その猫になりたいよ』

『…なんだよ、ひかり、思い切り可愛いじゃん…』

『え？』

『じゃ、夢で会おう。思い切り夢の中で、愛し合っちゃおう。だからもう寝よう。ね？』

『うん。わかった。もう寝るね』

『うん。おやすみ。また夢でね』

『うん、おやすみなさい』

そう言って交信を終えて、それからベッドの中に潜り込んだ。すう……。すぐに私は夢の中に入った。そうしたら、昴くんが肩に猫をのせて登場した。

『これ、にー坊』

白でところどころが、茶色の猫。もう1匹、足元にじゃれてる猫もいて、

『こっちが、かっちゃん』

と昴くんが教えてくれた。かっちゃんは茶色の縞模様だった。それから、すぐに猫がぱっと消えた。

『写メで送らなくても、紹介できたね』

と、昴くんは笑った。そして、ぎゅって私を抱きしめてきた。ああ…。夢だか現実だか、本当にもう、わからないよね…。

翌日、バイトが遅番なので、朝から小説を載せる作業をしていた。そして、やっと最後までアップすることが出来た。

「は～～～、終わった～～」

小説のサイトを、美里や薫にもメールした。葉月ちゃんは、もう読んでいてくれて、

＞すばらしいです。これ、ぜひ映画化してほしい。

とメールをくれた。

バイトに行くまで、時間があったから昴くんを呼んでみたが、返事はなかった。

私は早めに出て、新宿の街をぶらつき買い物をした。いろんな人から、いろんなエネルギーが出ていたが、それにも対処できるようになっていて、黒の霧はすぐに光で消していった。

バイトに行くと、事務の斉藤さんが、

「昨日、読みましたよ。星野さんの小説。もう続きが気になって、読み続けて寝不足ですよ」

と言ってくれた。

「ありがとう。今日最後まで載せたから読んでね」

「はい。ああ。今日も寝不足になりそうだ〜〜」

斉藤さんはそう言うと、パソコンに向かい仕事の続きをした。

夜、仕事を終えて家に帰り、昴くんのサイトを見てみた。ブログが更新されていて、

＞「今　このときを　愛してる」を最後まで読みました。最後までどうなるか、気になりましたが、ラストは…、内緒にしておきます。この小説に出てくる圭介って青年、俺にちょっと似ています。もし、映画化とかドラマ化されることになったら、圭介の役やってみたいですね。きっと、やりがいがある役になりそうです。なんてね。そんなことになったらの話ですけどね（笑）

う〜〜ん。なかなかうまいこと、書いてるな〜〜。昨日の日記にはたくさんのコメントが書いてあって、読んでみると、

＞その小説、私も読んでみます。

っていうのがほとんど。他には、ブログ昴くん本人が書くようになったんですね…とか、今、休暇中なんですね…とか、そんなコメントだった。

昨日は写真が載せてなかったが、今日は猫の写真が載せてあり、

＞今、実家でのんびりしてます。これは、にー坊。

と書いてあった。昴くんの写真は載せてなくて、猫だけ…。な〜〜んだ。昴くんの顔、見たかった…。ってすっかりファンの気分。で

も私、数ヶ月前までただのファンだったもんな～～。

『顔も、見たかった？』

いきなり、昴くんの声がした。

『わ。びっくりした。いつから私の心の声、読んでた？』

『ちょっと前から…。なんか俺のブログ読んでるなって、わかったから』

『もう～～。だったら、もっと早く声かけて』

『へへ…』

『今、なにしてるの？』

『風呂にはいってるよ。実家の風呂は広くて、気持ちいい～～～』

『そうなんだ。今日は何してたの？』

『中学の時の友達と会って、地元うろうろしてた。みんな大学生で暇してたから。夜は姉貴が子ども連れてきて、ずっとその子守してたよ』

『へ～～。子どもって何歳？』

『3歳。もう、大変。俺、おままごとさせられてたんだよ？女の子って大変だな。もうすごいおしゃべりだし』

『あはは…。見たかったな。昴くんがおままごとしてるところ。そういうところを写真にとって、ブログに載せてよ』

『やだよ』

くすくす…。

『お姉さんっていくつなの？』

『俺よりも、６歳上だから、２５歳』

『じゃ、早くに結婚したんだね』

『できちゃった婚だよ』

『そうだったんだ。じゃ、昴くん、もうおじさんなんだ』

『そうなんだよね～～。あ、わりい。もう出るよ。そろそろ出ろっておやじに言われた。おやじが入るんだってさ』

『うん。じゃあね』

『またね』

なんだか不思議…。昴くんにも家族がいるんだよね…って、当たり前か。お姉さんは私よりも年下だし…。どんな人なんだろうな…。

小説サイトにはランキングもあり、観に来てくれた人の数も表示された。私の小説はあっという間に、何百人というアクセスになった。

それに、なんと感想や評価も昴くんが書いていて、五つ星にしてくれたおかげで、ランキングもあがった。そのうえ評価の名前に、昴くん本人の名前が書いてあり、他にも感想を書いてくれる人が増えた。昴くんファンに間違いないだろうな。

昴くんは翌日、ニューヨークへと飛び立った。

時々、心で話しかけてきた。でも、夜中寝ても夢には現れなかった。ああ、時差があるとやっぱり駄目なのか。でも、ニューヨークが夜中の時間帯に、どうやら、昴くんは夢の中で私のエネルギーに集中していたらしく、ずっと昴くんのエネルギーを感じていた。そうか…。じゃ、私が寝てる時、ずっと昴くんは私のエネルギーを感じていたのかもな…。

私は、昴くんがニューヨークに行っていても、昴くんのあったかい優しいエネルギーを感じられるから、寂しさはなかった。

昴くんが帰ってきてから、すぐその日にブログを更新して、ニューヨークの写真を載せていた。ニューヨークに行っていたことは、ファンの子も知らなかったようで、コメント数がすごかった。

私の小説も、昴くんがニューヨークに行っている間に、アクセス数が数千となり、感想もどんどん増えていった。

＞ぜひ、映画化して、圭介役を昴くんにして欲しい。

という感想もあり、どうやら昴くんのブログを読んで、そう書いているなって思った。

昴くんが、ニューヨークから帰ったその日の夜、

『ただいま。ひかり、寂しくなかった?』

という、心の声がした。

『おかえり。大丈夫だよ。たくさん昴くんのエネルギー感じていたから』

『俺も、向こうで感じてたよ』

『どうだった?向こうは…』

『舞台、面白かった。やっぱ、すげえよな…。あ、おみやげあるし、明日かあさって会おうよ』

『でも、仕事でしょ?』

『うん。でも、1~2時間くらいあけられる。バイト?新宿なら出やすいから、バイト終わってからでも…』

『明日は遅番だから、4時からなんだ。あさっては朝からはいってる』

『じゃ、あさっての夜がいいかな。俺、6時過ぎならあくと思うよ』

『うん。わかった。ビルの地下の喫茶店にでもいるよ』

『うん。あ、小説すごいね。ランキング、今2位だっけ?』

『そうなの。驚いちゃった。毎日のアクセス数すごいみたい。昴く

んがブログに書いてくれたおかげ』

『これからも、雑誌のインタビューとかでばんばん言うからさ』

『うん』

『ひかり…？』

『何？』

『愛してるよ』

『え？いきなりどうしたの？』

『へへ…。言いたかっただけ』

『もう～～。びっくりするよ』

『じゃ、俺寝るよ。時差ぼけしないように、今まで起きてたから眠くて』

『うん。おやすみなさい』

『おやすみ』

昴くんの声がしなくなった。早くに夢で会いたくて、私も寝ることにした。

夢の中にいくと、昴くんのエネルギーはあるものの、昴くんはいなかった。目の前には、大きな舞台。ものすごい迫力のある、パフォ

ーマンス。あ、これ昴くんの夢だ…。そうか。ニューヨークで観たものを、夢で再現してるんだな…。

ドキドキした。興奮して、心臓がばくばくする。これ、私じゃなくて昴くんの感覚だ。同化してるんだ。昴くんはニューヨークで、すごいものをもらって帰ってきたんだな…。

舞台から、ものすごい光が放たれていた。特に中央にいる人から…。女性だった。ものすごく奇麗な…。

光に包まれて、すごく気持ちが良くなった。不思議な感覚だ。この人ももしかして、私や昴くんと同じミッションの持ち主？それとも、知らないで光を放ってるの？

美しい金髪のその女性を、しばらくうっとりと見つめていた。でも、それもまた昴くんの感覚だ…。

ふ…、目が覚めた。なんだか変な気持ちだった。ジェラシーかもしれない。魂の私なら、ジェラシーなんて感じない。でも、人間の私には独占欲がある。

はあ…。これ、ない方がいいのに…。そんなことを思ったら、黒いもやもやが出た。

ああ、自分を否定しても出るんだな～～。昴くんのエネルギーを感じとり、愛しいって思った瞬間に光が出て、黒い霧を消した。

二日後、待ち合わせの時間に、喫茶店で待っていた。

昴くんはサングラスもせず、帽子もかぶらず、普通の格好でやってきた。お店に入ると、店には若い女性もいて、昴くんを見て驚いて

いた。

「ひかり、ごめん。待たせた？」

「ううん」

私の席の前に座ると、その1部始終をその女性が見て、同席していた男性にこそこそ話をしていた。

『いいよ、気にしなくても。なんてったって、俺ら、公認のカップルだし？』

と、心で昴くんは言うと、ウエイターにコーヒーを頼み、

「これ、ニューヨークのおみやげね」

と言って、渡してくれた。

「ありがとう。何？」

袋を開けてみた。

「あ…可愛い」

帽子だった。秋に似合いそうな…。

「ひかりに似合いそうだったから」

「ありがとう」

可愛い帽子で、昴くんは本当にセンスがいいなって思った。着てい

る服もいつも、かっこいい。

「この前、ニューヨークのお芝居の夢、見なかった?」

「あ。見た」

「やっぱり」

「ひかり、その夢の中にいたんだ。気づかなかった」

「ふふ…。夢の中で舞台に夢中だったもんね」

「うん。すごかったんだよ。最後には、ものすごい光を放ってる人がいて」

「奇麗な金髪の女性」

「そう…。すごかった。歌もダンスもすげえうまくて…、奇麗で…。あれは感動した」

「ふうん…。すごいよね。あの光」

「うん…」

昴くんは、しばらく黙って、その人を思い出しているようだった。

私はまた、ジェラシーを感じそうになったが、黒い霧が出る前に、昴くんのことが大好きって思うようにして光を出した。

「ひかり、あの人のこと夢で見て何か感じた?」

「え?」

「俺と同じ派動っていうか、エネルギーを感じなかった?」

「似てるような気はしたけど」

「もしかして、同じようなミッション持って地球に来てるのかも…」

「うん。そうかもね」

「俺らだけじゃなくて、いるのかもね」

「そうかも…」

昴くんは、コーヒーを一口飲むと、またぼ〜〜ってした。何を思っているのか、エネルギーを集中すると、その女性のことを考えていた。

私はなんだか、寂しさを感じた。いつもは私といると、私が何を感じてるか、考えてるか、それだけに集中していたし…。ぼ〜ってしてる昴くんからは、あまり温かさも感じなかった。

もやもや…私から黒の霧が出る。あ!慌てて光を出して消した。ところが、その黒い霧にすら昴くんは気づいていなかった。

『どうにかして、コンタクトれないかな…。やっぱり楽屋に行けばよかったかな。あのエネルギーに集中したら、あの人のことがわかるかな…』

頭の中は、その女性のことでいっぱいだ。私から黒い霧がまた出てくる。でも光が出ない。どんどん霧が出てくる。

「私、帰るね」

コーヒー代をおいて、私は席を立ち、店を飛び出た。

「ひかり？」

後ろから声がしたが、私は振り返らなかった。黒い霧も見られたくなかったし、心も読まれたくなかった。

私は必死で歩いた。黒い霧が出るばかりで、光がまったくでない。昴くんのことを思っても、黒の霧が出るだけだ。なんで？

途中まで早歩きで歩いたが、立ち止り振り返った。昴くんは追いかけてきていなかった。

ズン……。黒の霧が濃くなった。それと同時に、私はものすごい重力を感じた。

追いかけてきてもくれない。昴くんのエネルギーも感じられない。

私は、また必死に歩き出した。自分からも周りからも黒い霧が出ていて、目の前が真っ黒になりそうだった。

足が重い。体が冷たい。光を出すことすら、もう考えられない。どんどん黒い霧が私を覆う。それすら、どうでもよくなる。いけない…。なんか得体の知れない黒いものが、私からどんどん溢れ出ている。

悲しい。寂しい。孤独。私、一人だ…。ズン…。ますます体が重く

なる。心も重くなる。そして狭くなる。

人が邪魔でしょうがない。人混みを避けて、小さな道に入った。そこで、苦しくてうずくまってしまった。

『…り……』

かすかに昴くんの声がする。でも、答えたくない。

『ひかり…』

耳をふさぐ。でも、体の中から聞こえるから、耳をふさいでも駄目だ。

ああ…。もう、呼ばないでよ！私をほっておいて！そう思った瞬間。ズズズン…。もっと重たいものが私にのっかってきた。辺り1面が真っ暗だ。

そして…、その中に人影を見た。

「誰？！」

「俺だよ」

「昴くん…？」

「うん」

影だ…。本当に真っ黒な影だ。影の中に影が動く。

昴くんとは会いたくなかった。いつの間に私を追いかけて来ていたのか…。私は、ふらふらと立ち上がり、その場を離れようとした。だが、昴くんが私の腕を掴んだ。

ゾク…。え?なんで、こんなに冷たいの?

振り返って昴くんを見た。ほとんど真っ暗な中の昴くんは、まったく別人に見えた。

「ほんとに、昴くんなの?」

掴まれた腕からは、いつもの優しいエネルギーが来ない。思わず腕を引っ込めようとしたが、昴くんは離そうとしなかった。

「ああ。俺だよ」

何か、変だ…。私は後ずさりをした。私の後ろの方は、少しだけ明かりが見え、その明かりの中に行こうとした。

ずる、ずる…。少しずつ移動をすると、昴くんも一緒に徐々に明かりの方に来た。薄暗い明かりに照らされた昴くんは、やっぱり昴くんだった。

「なんで疑ってるの?」

昴くんに聞かれた。ああ、心を読んだのか…。

「離して…」

そう言うと、昴くんはようやく腕を離した。それから、にこって微

笑むが、でもいつもの微笑ではない。それに昴くんの周りには、ぼんやりと黒い霧が立ち込めている…。

昴くんの中から出た霧？私はその霧を消そうとしたが、どうやっても、光が出てこない。

「何してんの？」

「え？」

「光を出すってなんのこと？」

「……」

私の心を読んだ？でも、なんでそんなこと聞くの？

「俺はもう、仕事に行かなくちゃ…。駅まで送るよ」

「…うん」

変だ。街を歩いていても、何かが違っている。ネオンサインが街に灯り出し、街灯も照らされた。夜の街に、明かりが灯ったというのにどこか薄暗かった。

それに、今気がついたが、さっきまで見えていた黒い霧が見えなくなっていた。前を歩く昴くんの周りからも、消えていた。私の体も、重苦しさがなくなっていった。

『昴くん』

心で声をかけたが、返事がない。私は昴くんに集中をしてみた。でも、なんにも感じられなかった。

駅に着くと、昴くんは私の方を見て、

「じゃあ…」

とだけ言い、さっさと来た道を帰って行った。ズン…。また、心が冷えた気がした。ものすごい孤独感を感じる。昴くんからの冷たいエネルギーも感じた。なんだろう、これ…。初めてだ。昴くんからのこんなエネルギーは…。

早くに家に帰り、あったまろうと思い、電車に乗った。電車に乗ると、車内で小競り合いが始まった。周りの人は、それを遠巻きにして見ていた。

駅に着きホームに下りると、酔っ払いがサラリーマンにつっかかっていた。それから、改札口に行くと、おじさんが駅員さんを怒鳴っていた。改札を抜けると、女子高生が大きな声で悪口を言い合っているのが聞こえた。その横を通り過ぎると、子どもを怒鳴り散らすお母さんがいた。子供は大声で泣き喚いていた。家までの道でも、高校生どうしが喧嘩をしていて、ものすごく怖かった。

慌てて、私は走って家に帰った。なんだっていうんだ…。なんであんなにも、怖いものを立て続けに見せられたのだろうか。

玄関のドアを開けると、いきなり父親の怒鳴り声が聞こえた。兄と喧嘩をしているようだ。その横で、近所に聞こえるからやめてと、泣いている母がいた。

「どうしたの？」

そう聞くと、

「お前には関係ない」

と、父に怒鳴られた。

「あんたは、部屋にいってなさい」

母にそう言われて、私は自分の部屋に行った。階段の途中から、両親からの光を見ようと目を凝らしたが、何も見えなかった。

バタン。部屋のドアを閉めた。

何かが、おかしい…。ベッドの上に座り深呼吸をして、何も考えないようにした。それから、昴くんのエネルギーを感じようとした。でも、またあの冷たいエネルギーが、私を包み込み身震いがして、慌てて昴くんのことを振りはらった。

「なんで？どうして…？」

自分の体も、冷え切っていることに気がつき、すぐにお風呂に入りに行った。そうだ。きっと、私が冷えてたからだ。そう思って、お風呂でゆっくりとあたたまり、それから昴くんを呼んでみた。

でも、冷たいエネルギーがやってくるだけで、何も声は聞こえなかった。ブル…。その冷たいエネルギーで、お風呂に入っているにもかかわらず私は寒気がした。

部屋に行って、昴くんのブログを開いた。何も更新されてはいなかった。私の小説を見てみると、アクセス数ががくんと減り、感想に、

＞こんなつまらない小説はない。

＞ラストが、がっかりだ。

そんなことが書かれてあった。

「わ、何？これ…」

気持ちが一気に、沈んでいった。

夢でなら、あの昴くんの優しいエネルギーに会えるかもと思い、ベッドに入った。でもなかなか、寝付くことが出来ず、私の頭の中には不安や恐怖がうずまいていた。

このまま、もっと酷い感想がきたらどうしようか。

このまま、昴くんに嫌われたらどうしようか。

なんで昴くんは、あんなに冷たかったのか。

布団の中に、顔までうずめて私は丸くなって寝た。

夢の中には、昴くんは現れなかった。いや、昴くんの夢を一緒にみていたのだろう。昴くんは、ずっとあの金髪の女性を見ていた。その女性も、昴くんを見ていた。見つめあいながら何かを話していたが、私は聞きたくなくて、目を覚ました。

目を覚ますと、私は泣いていた。なんでだろうか…。悲しくて、寂しくて、心に穴がぽっかりと開いたようになり、そのまま私はずっと泣き続けた。

ほとんど寝れずに、朝を迎えた。空は曇っていて、朝だというのに暗かった。

「おはよう」

一階におり、ダイニングで母に声をかけたが無視をされた。兄もおりて来たが、何も言わずに洗面所に行ってしまった。

「あれ？」

なんか、変だ…。そうだ。前に私が引きこもっていたときも、こうやって、みんな声をかけてくれなかったっけ。その頃に戻ってしまったようだ。

ご飯を食べ、支度をしてバイトに向かった。行きの電車でも、また、小競り合いがあった。

嫌な気持ちのまま、私は更衣室に入ると、こそこそと何か私のほうを見て話をしている人たちがいた。なんだろう。前ならそんなの気にならなかったが、妙に気になり嫌な気持ちになった。

事務所に行こうとすると、主任につかまり、

「どこ行くの？星野さんはレジの方に出て」

と言われた。

「はい」

私は、お店の方へと向かった。レジにはすでに葉月ちゃんがいて、

「おはよう」

と挨拶をすると、

「あ、おはようございます」

と妙に、他人行儀な感じで挨拶をしてきた。変だ…。何かが変だ…。レジにいると、お客さんがこそこそと私を見て話をしている。なんだろうか…。

昼の休憩になり、地下の喫茶店に行くとそこへ葉月ちゃんも来た。

「葉月ちゃん」

と、呼ぶと、

「え?!」

と思い切り、驚かれた。

「?」

なんで、そんなに驚くのかと思ったが、葉月ちゃんはぺこってお辞儀をしただけで、別のテーブルに座ってしまった。あれ?なんで…?

バイトが終わり、更衣室に向かう途中斉藤さんに会ったが、挨拶をしても、

「どうも…」

と、軽くお辞儀をされ、さっさと事務所に入って行ってしまった。何かが、変だ。なんだろう?これ…。

帰りの道で、また昴くんを呼んでみたが、あの冷たいエネルギー以外、何も感じられなかった。私は泣きそうになった。どうして…?昴くん…。

アルタの前に来て、大きなスクリーンを見ると、怖いニュースを次々に映していた。人々はそれを見て、口々に怖いわねって言っていた。

ぼ〜〜。しばらくそれを見ていた。なぜか、私までどんどん恐怖を感じてしまい、急いでそこから離れた。私は一人で、どこに行くでもなくぶらついた。

昨日、昴くんとあの喫茶店で別れてから何かが変わってる。追いかけてきてくれた昴くんが、もう変わってしまっていた。なんで…?

黒い霧も見えなければ、光も見えない。どうなっているの…?

考えてもわからなかった。そして、いったいどうしたらいいのかも、わからなかった。

ポン…。いきなり肩をたたかれて、思わずびっくりして、

「わ！」

と大声を出してしまった。振り返ると、

「あ、ごめん。驚かせた？」

と、悟くんが小声でそう言った。

「さ…、悟くん？」

いつもの、クールな表情だ。でも、たたかれた肩はほんわかとあったかさが残っていた。

「……」

なぜかそのあたたかさだけで、私は涙が出てしまった。悟くんはそれを見て、別に驚くわけでもなく、

「ちょっと、どっかでお茶しませんか？」

と、冷静に言った。

「？うん…」

なんだか、改まった感じだったので不思議に思ったが、ついていくことにした。なにしろ、あったかさを久々に感じたので、今はこの人しかいないってそう感じていたから。

近くのカフェに入った。周りの人がみんな悟くんに気がついていたが、悟くんはそんなのおかまいなしで、さっさと席に着いた。

「何飲みますか？」

「コーヒー」

そう言うと、悟くんは私の分も買ってきてくれた。

「はい」

「ありがとう」

悟くんからは冷たいエネルギーも、あったかいエネルギーも感じられなかった。

「ひかりさん…、ですよね？」

「え？！」

なんで聞くの？

「う～～ん。ちょっと今、驚いてる？」

「うん。だって、私のことなら知ってるでしょ？」

「はい。他の次元の俺は…」

「え？」

どういうこと？

「理解しにくいですよね。多分…」

「うん…？」

「ひかりさん、どうやら、違う次元に来てますよ」

「は？」

「っていうか、この次元のひかりさんと、リンクしてるっていうか、同化してるっていうか」

「ええ？」

「あ。俺は、少し高い次元の俺と交信して、知ったんですけど…」

「少し高い次元って…？」

「多分、つい昨日まで、ひかりさんがいた世界の…」

「え？！」

「ひかりさん、元に戻ったっていうか、いや、もしかすると前いた次元よりさらに、低い次元に来てるっていうか…」

「？？？？」

まったく、わけがわからない。

「つまり、前にひかりさんがいた次元で、昴説明してなかったですか？この宇宙には、いろんな次元が、今ここに存在してるって」

「あ、そういえば…」

「低い次元のほうに、来ちゃったようですよ」

「…。さっき、なんて言った？」

「え？」

「さっき、前にいた次元の、昴くん…？」

「ああ。昴に会いましたか？この次元の…」

「……、もしかして、昨日会ったのは…」

「どんな昴でしたか？」

「冷たいエネルギーの…」

「ああ、この次元ですね」

「じゃ、私の知ってる昴くんは？！」

「もう少し高い次元にいますよ」

「どうしたら会える？どうやったらコンタクト取れる？だってあなた、高い次元のあなたと、会話できるんでしょ？」

「チャネリングです」

「じゃ、私もその次元の私と…」

「いえ、ひかりさんの場合はどうやら、この次元のひかりさんと同化してるから、高い次元のひかりさんは、今いないですよ」

「どういうこと？」

「つまり、自分の波動を下げて、ここに来ちゃったんです」

「派動を…、下げて…？」

「たまに感じる、マイナスっていうか、今までと違った感情を持った自分、いませんか？」

「いる…。怖いとか、不安とか感じてる」

「それは、この次元に住んでるひかりさんの意識です」

「…、一緒になってるってこと？」

「はい」

「……。どうやったら、私戻れる？」

「派動をあげたら…」

「どうやったら、あがる？」

「わかりません」

「なんで？」

「俺も、したことないですから」

「……。あなたは、どうやってチャネリング…」

「う～～ん。そういうの、得意分野なんです、実は…。聞いていなかったですか？高い次元の俺から」

「うん」

「そっか…」

「あ、あなたも、もしかして、幽体離脱できる？」

「できますよ。ついでに、いろんな次元の自分とコンタクトも取れます」

「昴くんも、できる？」

「まだ、そこまではできないんじゃないかな」

「あ…。葉月ちゃんも変だった…」

「この次元では、まだ俺とも会ってないです」

「どういうこと？」

「ひかりさんがいた次元とは、ちょっとずつ現実に起きてることが違ってるんです」

「え？」

「ひかりさんの周りも、違ってたでしょ？」

「違ってた。家も、前の家に戻っちゃった。暗くて、みんな話しかけても来ない」

「高い次元で起きたようなことが、起きてないんです」

「…なんで？」

「波動が違うから。この次元でふさわしいようなことしか、起きてはきません」

「じゃ、なんであなたはここにいて、あなたはいろんなことができるの？」

「ここの世界の波動もあげるためです」

「え？」

「いろんな次元にミッションを遂行するために、いろんな俺が来ています」

「わ、わけわからない…」

「そうですか？宇宙船に行きましたよね？そこで、光の人型になりましたか？」

「なった」

「あれは、さらに高い次元のひかりさんです。その高い波動のひかりさんと同化していたんです。今でも宇宙船には、高い波動のひかりさんがいますよ」

「その私と、同化できる？」

「今の波動じゃ、多分無理です。かなりきついですよ」

「幽体離脱も、できないの？私…」

「はい。多分」

「……。この次元の昴くんって…」

「多分、昴もまたミッション持ってますけど、今は思い出してないですね」

「……」

どうしたらいいの？今のこの次元の昴くんって？高い次元の昴くんとは、全然違うの？あの優しくてあったかい昴くんとは…。

「あ。でもね、昨日私の心の声、聞いてたよ。そんなことできてたよ」

「そうですか？じゃ、この次元のひかりさんと、昴はその辺まで、ミッションが進んでいたってことじゃないですか？」

「ここの次元の私？でも、なんの記憶もない…」

「いや、それは感じないようにしてるだけかも…」

「え？」

「そのうちに、思い出すっていうか、わかってくるかも」

「……」

待って。待って…。じゃあ、私…。

「わ、私は、今まで会ってた昴くんには、会えないの？もう…」

「それは、わかりません」

「なんで…？なんで、私ここにいるの？なんで？」

「昨日、かなり負のエネルギーを感じたか、何かしませんでしたか？」

昴くんが、他の女性の事を考えてて嫉妬した。それで…？それでなの？

「多分、昴は、ひかりさんが高い次元のひかりさんと同化してること、知らないはずです。知ってるのは俺だけですから、何かあったらいつでも相談してください」

「ありがと…」

私は思わず、泣いてしまった。悲しさもあったが、ほっと安心したのだ。悟くんがいてくれて良かった。

「じゃ、携帯のアドレスです。これ、名刺置いていきますね。俺、これから取材が入ってるからもう行きます」

「うん。ありがとう」

私は、その名刺を大事に鞄にしまい、店を出て家に向かった。

ミッション2　仲間が集まる

家に着いた。暗く、重苦しい家の中だった。私は、さっさとご飯を済ませ部屋に行った。

部屋に行き、パソコンを開き昴くんのサイトを見た。どうやら昴くん自身でなく、スタッフがレポートを書いてるだけのようだった。

「なんだ…。この次元の昴くんは、ブログ書いてないんだ」

私の小説のことはどこにも、触れていないようだった。その時携帯が鳴った。昴くんからのメールが入った。この次元では、メールのやりとりをしているのか…。

メールには、

＞明日、2時間だけあく。会う？

と書いてあった。なんか、ぶっきらぼうなメールだった。

＞うん。

私もそれだけ返すと、

＞また、メールする。

とだけ、返ってきた。

そうだ。今までの記録は…？携帯の受信のところを見てみると、や

はり、

＞明日は時間ある？何時にバイトは終わる？

とか、

＞忙しいから、無理だ。

とか、

＞明日から、ニューヨーク行くから。じゃあ。

とか、それはもう、愛想もそっけもないメールばかり…。うわあ…。こんなのを私は受け取っていたのか。それから、私から送ったメールも見てみた。

＞わかった。

＞また明日ね。

＞気をつけてね。

そんなメールばかり。この二人って、どんな関係なんだ？恋人ではないよね～～。はあ…。ため息が出た。

あの優しい昴くんに会いたい。どうして、私は嫉妬なんてしたんだろう。どうしてあの時、昴くんの前から逃げたんだろうか。

声をかけてくれたあの時にちゃんと答えてたら、あの世界にとどまることが出来たんじゃないのか。この次元から、あの次元の昴くん

とはつながらないのか…。

悲しかった。今すぐにでも、あの昴くんに抱きしめてもらいたかった。

「会いたいよ～～……」

涙が出た。

「会いに来てよ～～……」

あの次元の昴くんは、今どうしてるの？私はそこにはいないって、悟くんが言ってた。ねえ、じゃあどうしてるの？

会えない悲しさがこみ上げて、涙が止まらなかった。夢の中でも、私は泣いていた。夢の中にもどこにも、昴くんの気配もエネルギーも感じられなかった。

翌日は、バイトのシフトが入っていない日だった。朝から気持ちが落ち込んだまま、部屋でぼ～～ってしていた。すると携帯がなった。昴くんからの電話だった。

「もしもし…」

「あ。俺だけど…」

昴くんの声だ！でも声と同時に、あの冷たいエネルギーがやってくる。声は同じなのに。

「今日、１１時から本読みなんだ。それで、その前の１時間くらい

空いてるんだけど…。会う？」

「…うん」

「ひかりって、なんで悟さんと知り合いなの？」

「え？！」

「悟さんから昨日連絡が入って、ひかりと俺と悟さんとで会おうって…。なんで、知ってんの？」

「……。昨日、会った」

「え？」

「話しかけてきた」

「悟さんから？なんで？」

「わかんないけど…」

「そう。１０時に、新宿のひかりが働いてるビルの地下の喫茶店で会おうって言ってた。仕事先も知ってんだね。悟さん」

「あ…。うん。そうみたい」

「…。じゃ、１０時ね…」

「うん…」

ゾク…。また昴くんから、冷たいエネルギーが来た。重く苦しい、冷たいエネルギーだ。これ、いつだっけ?感じたことがある。

ああ、そうだ。前に緒方さんから感じたエネルギーだ。執着だって昴くんが言ってた。もしかして、それなの?

翌日、私は待ち合わせの5分前に喫茶店に着き、中でコーヒーを飲みながら待っていると、二人してやってきた。

「お待たせ」

悟くんが表情を変えずにそう言うと、私の斜め前の席に座った。昴くんは何も言わずに私の横に座った。

ヒヤ…。座ったとたんに、冷たい空気が昴くんから来た。その空気を包むように悟くんの方から、あったかい空気が来た。あ、もしかするとこの次元の悟くんも、光を出すことが出来るのかもしれない。

「それで…、なんで悟さんとひかりは知り合いなの?」

「この前話したよね。俺、いろんな俺とコンタクト取れるって」

「次元の話?いまいち、わかんないけど…」

「3次元、4次元、5次元、いろんな次元が今このときに存在してて、3次元でもまた、ちょっとずつ次元が違う世界があるんだ」

「そのどの次元にも、俺も悟さんもひかりもいるって言ってたよね?」

「そう。そのちょっと高い次元の俺から、交信してきたんだ。ちょっと高い次元の俺は、ひかりさんと知り合いだった」

「え？じゃ、この次元の悟さんとじゃなくてってこと？」

「うん。だから、昨日までは、俺はひかりさんのことを知らなかった」

「ふうん…。でもなんで、交信なんてしてきたんだ？」

「それを今日、お前に話そうと思って、３人で会うことにしたんだよ」

悟くんの顔は、いたって冷静。それに引き換え、昴くんの顔は疑っているようにも見えた。

「そういえば、お前、ひかりさんと心で会話できるの？」

「いや。そんなことできないよ。なんで？」

「じゃ、ひかりさんが何を思ってるかはわかる？」

「…わかってた。けど、昨日あたりからまったくわからない」

「え？」

「なんか、変じゃない？ひかり…」

昴くんに、そう言われて驚いた。この次元の昴くんも、私が変だって思ってたのか。

「ひかりさんは、今までのひかりさんとは違う。いや、一緒だけど、次元が高いひかりさんと同化してる」

「同化？」

「うん。それも、そっちのひかりさんの意識でいる」

「え？どういうこと？」

「今までの、この次元のひかりさんの記憶がないらしい」

「え？」

昴くんが、驚いていた。

「だから？変だと思った。昨日、光を出そうって思ってたみたいで、なんでそんなことをしてるのかって…」

「え？」

悟くんが聞き返した。

「昨日は少しだけ、心の中読めたから」

昴くんが、そう言った。私はなんだか、悲しくなった。この昴くんは、まったく違うんだな。

「でもなんで、高い次元のひかりがここにいんの？」

昴くんは、今までいた低い次元の私の記憶がなかろうが、そんなのおかまいなしみたいな感じで聞いてきた。この昴くんにとっての私って、どんな存在なんだろう。

「波動が下がるようなことが、あったみたいだよ」

「え？」

私は、何も言えなかった。まさか、嫉妬したからだなんて…。

「どんなこと？」

昴くんが聞いてきたが、私は、

「言えない…」

と、言うのを拒否した。

「また、それ？」

昴くんは、少しいらだった感じでそう言った。

…え？またってどういうこと？

「あのさ、ひかりさん。俺でもいいけど、この次元の昴にも心開いていろんなこと話してみたら？」

「え？」

悟くん、私が思い切り、心を閉じているのに気がついたのか…。

「無理じゃない？ひかりはよくこうやって、心閉じるから。そうするともう、ひかりの内側見ることもできない」

昴くんが、顔をしかめてそう言った。

「まあ、そうぼやくなよ。だんだんと、心を開いていったらいいさ」

悟くんがめずらしく、優しい表情でそう言った。また、あったかいエネルギーが悟くんから来た。懐かしいエネルギーだった。

「じゃ、俺先に出るよ。あとは二人で話でもしたら？」

悟くんはそう言うと、コーヒー代をテーブルに置き店を出て行った。

「高い次元って…、そこにも俺いたんだろ？」

「え…？うん」

「どんなやつ？」

「どんなって…」

なんて言っていいのか、わからなかった。まさか、ずっと優しくてあったかくて…、なんて言えないし…。

「ま、いっか。でもさ、どんな俺だったか知んないけど、多分、俺はそいつとは違うから、なんか期待しても無理だから」

「……」

ものすごく冷たいエネルギーを出しながら、昴くんはそう言った。
ああ、同じ魂だってことすら、信じられない。

「さっき、悟さんのこと見て、嬉しそうじゃなかった？ひかり…」

いきなり、昴くんがそう私に言ってきた。かなり暗い表情で。

「あ……」

多分、あったかいエネルギーを感じたときだ。

「悟さんに惚れたの？」

昴くんから、また冷たい重いエネルギーが来る。それが絡みつく。

「ち、違うよ！だいたい、私が好きなのは…」

と言いかけて、言うのをやめた。好きなのは昴くんだ。でも、この昴くんではないのだから。

「好きなのは？緒方ってやつ？それか、元亭主？」

「違う…」

「じゃ、誰？」

ものすごい勢いで、冷たい空気が昴くんから流れ込んでくる。ゾク…。体の芯が冷えていく感じだ。

「誰でもいいじゃない」

必死でそう言って、その空気を振り払おうとした。

「…なんだよ。せっかくちょっとは、素直になってきたと思ったら、またかよ。高い次元から来てんなら、もっと素直かと思ったよ」

え?どういうこと?いったい、この次元の私とこの昴くんとは、何があったって言うの?

「記憶、ほんとにないの?」

昴くんは、冷たくそう聞いてきた。

「この次元の私の?」

「そう」

「ないよ…」

「ああ、そう…。じゃ、高い次元のひかりさん。教えとくけど、こっちの次元じゃ俺ら、付き合ってるんだ」

「え?!」

驚いた。この次元でもそうなの?!でも、それにしてはなんなんだ。あのメールのやり取りは…。

「っていうか…、俺が勝手に惚れて、やっとひかりも俺のこと、好きになってきたってとこだったけど」

「え?!」

ますます驚いた。私と昴くんとは、逆なんだ。それにしても、この冷たい昴くんを私が好きになったなんて信じられない。

「そんなに驚くってことは、やっぱり、高い次元じゃ俺のことを好きだったわけじゃないんだ」

「それは…」

「ま、いいけど…。でも、とっとと早く、こっちのひかりに戻ってくれない?」

「え?」

「あんたとじゃ、なんか違和感がある」

それは、こっちの台詞だ。いつも、こんな冷たいエネルギーを出されたんじゃ、体がどんどん冷えていく。

「そういえば、高い次元の俺、ニューヨークに行ってた?」

「うん」

「そこで、なんか奇麗な金髪の人に惚れてた?」

「え?なんで?」

「いや、俺もニューヨークに行って、その女性に会ってさ…」

「それで…？」

「本気じゃないよ。まったく。ちょっと仲良くなっただけなのに、ひかりがすごいやきもちをやいて、それで昨日喧嘩した」

「え？」

「それで、追いかけていったら、なんかもうひかりが変だった」

「……」

こっちの次元でも、同じようなことがあったのか。でも、喧嘩？喧嘩は私はしていない。ただ、同じように嫉妬はした。それで、リンクしたんだろうか。

「ま、いっか。じゃ、俺はもう仕事だから」

そう言うと、さっさとレシートを持って昴くんは出て行った。

まったくエネルギーの違う、昴くん。でも、そんな昴くんと私は付き合ってたの？

なんだか、そのまま家に帰るのも気がひけて、そのまま自分の働いている本屋に行き、スピリチュアルのコーナーに行ってみた。

そして、驚いた。ほとんどの本が、２０１２年に、世界は滅びるとしか書いていなかった。

「あれ？こんなのばかりだったっけ？」

いや、次元が違うから、こんな本ばかりが並んでいるのかもしれない。

「星野さん？」

本の整頓をしていた葉月ちゃんが、声をかけてきた。

「今日、バイトない日ですよね？」

「うん。ちょっと新宿に用があったから、ついでに本でも買おうかなって思って」

「こういう本に、興味あるんですか？」

「うん。まあね」

「私もです。このあと休憩なんです。一緒にランチしませんか？」

「え？うん…」

驚いた。この次元でも、葉月ちゃんはスピリチュアルに興味あるんだ。それに、同じようなことが起きてくるんだ。

私はしばらく本を見ながら、葉月ちゃんの休憩の時間まで待っていた。１０分もしないうちに、葉月ちゃんは、お財布を片手に持ちやってきた。

「お待たせしました。行きましょう」

それから、地下のイタリアンの店に入った。そしてパスタを食べながら、葉月ちゃんは話し出した。

「２０１２年に、地球が破滅するかもしれないって信じますか？」

「え？ううん」

「そうなんですか？でも、今そんな本ばかりだし、私怖くて…」

「そうなの？」

「はい。最近、変なことも起きてて…」

「どんな？」

「ＵＦＯ見たんです。それから、声が聞こえてきて。私、変になっちゃったのかな」

わ。まったく同じ体験をしているじゃないか…。

「それで、ある人にみてもらったら、お祓いした方がいいって…」

「はあ？」

「なんか、取り憑いたかもって言われたんです」

「え…？それ、誰に言われたの？」

「占い師です。白河ノエルって人なんですけど。あ、今日会いに行くんですよ。良かったら一緒に行きませんか？」

「白河…、ノエル…？」

「はい。占星術とか、他にも占いが出来るんです」

「そう…。うん、行ってみる」

この次元でも、同じようなことが起きている。だったら、ちょっとそれをたどってみるのもいいかもしれない。ふと、そんな気になり、葉月ちゃんと行ってみることにした。いったい、この次元のノエルさんは、どんな人なんだろうか。

葉月ちゃんのバイトが終わる時間まで、私は映画でも観ることにした。映画は悲恋物語だった。最後に、恋人が死んでしまい、別れ別れになる…。私は、涙が止まらなかった。

「は～～～。なんで、こんなに泣くのかな、私…」

それから、一人でお茶をして時間をつぶした。

5時を過ぎ、本屋のビルの1階で葉月ちゃんと会った。葉月ちゃんと、あの白河ノエルさんのマンションに着くと、マンションの入り口に立っただけで、ゾクッとする悪寒を感じた。

いいのかな？入っても…。葉月ちゃんは、何も感じないようでさっさとマンションに入っていった。

ノエルさんの家は、やはりお香の香りが立ち込めていて、そのうえなんだか薄暗かった。それにノエルさんは全身黒づくめで、立っているだけで威圧感を感じた。

「こんにちは、ノエルさん。バイト先の知り合いがノエルさんに会いたいって言うから、一緒に来ました」

「お待ちしていましたよ。どうぞ」

なんだか、話し方がやけに丁寧で怖い。部屋に通されると、そこにはやっぱり水晶だの色んな石がおいてある。それに、大きな仏壇も。あれ…？こんなの前の次元の時にはなかったな。

「葉月ちゃんのことを、みてみましょう。どうぞ」

葉月ちゃんは、ノエルさんの前に座った。ノエルさんはろうそくに火を灯し、何やらぶつぶつ言い出した。

「やっぱり…。あなた、何か変なものに取り憑かれたみたい。あなたの周りにぼんやりとした、エネルギーみたいなのを感じるわ」

あ…。それって、悟くんのエネルギーなんじゃ…？

「どうやったら、お祓いできますか」

お、お祓い？してもらう気でいるの？

「そうね……」

しばらく、ノエルさんは黙り込んだ。

「本山、行ってみる？」

「本山？」

「私たちの教団があるところよ」

きょ、教団？え～～～～？怪しすぎない？

「そこに行ったら、お祓いできますか？」

「ええ。でないと…」

「何か、悪いことでも？」

「ええ。あなたにさらに何かが、取り憑いてる未来が見えるわ」

え？ちょっと、待ってよ…。

「どこにあるんですか？そこ…」

「週末、私も行く予定。一緒に行く？」

「はい。あ。星野さんはどうしますか？」

「私？！私は別に…」

「あなた…。変なこと聞いてもいいかしら？さっきから気になるわ」

「え？なんですか？」

「水子の霊いるわね」

「え?!」

「子ども、おろしていないかしら?」

「いえ…。あ。でも、流産なら前に…」

「ちゃんと供養した?」

「はい。病院で…」

「病院だけ?駄目ね」

「え?!」

「あなたも、週末一緒に来なさいよ」

「私はいいです…」

「あらなんで?ちゃんと供養してあげないと、そのままあなたに取り憑いて…」

「私の赤ちゃんは、そんなことしません!」

「ふ…。そう思いたいのはわかるけどね。ま、いいわ。そのうち、供養してくださいって言ってくる未来は見えてるわ」

な、何~~?このノエルさん。なんなの?!

「あなたは、チャネリングができるんですか?」

「チャネリング？なあに？それ。私は未来が見えるのよ」

「未来…？」

昴くんが、未来はないって言ってた。いったい、この人どういうつもりで？

「とにかく、今日はもう帰ります。葉月ちゃん、行こう」

私は、葉月ちゃんの手を強引に引っ張り、マンションを出た。

「駄目ですよ～～。ノエルさんの言うとおりにしないと」

「なんで？」

「おっかないことが起きたら、どうするんですか？」

「何も起きないよ。だいたい、何か悪いことが起きるなんて脅す人、信頼しちゃ駄目だよ」

「何言ってるんですか？ノエルさんの言うことは、本当に当たるんですよ」

「それはね…」

それはきっと、未来はこうなると言われて信じて、そんな未来を創ったからだ。多分そう…。

「とにかく、葉月ちゃん冷静になってみて。ね？だいたい今も声聞こえるの？悪いこと起きてるの？」

「今はないですけど。でも、この先…」

「だったら、何も怖がることないじゃない」

いや、その声ってのは、悟くんなんだろうけど…。ああ。悟くんにこのこと、相談しないと…。

「あのさ…。俳優の結城悟て知ってる?」

「はい。知ってますよ。だってうちの本屋でサイン会も開いたじゃないですか?その時、星野さんもいましたよね。私、大ファンです」

「え?そうなの?じゃ、天宮昴くんは?」

「あ〜〜。昴もうちの店で去年、サイン会したけど…。なんかぶっきらぼうで、態度良くなくて好きじゃないです」

「え?!!!」

驚いた。そうなの?この次元だと、そうなの?!

「じゃ、あのさ…。結城悟と会えたりしたら、嬉しいかな?」

「そりゃもう!え?何かあるんですか?」

「うん。ちょっと知りあいなの…」

「結城悟とですか?!」

「うん」

「すご〜〜〜い！」

「今度、会えるようセッティングするから…ね？」

「はい！」

葉月ちゃんの目が、きらきら光った。ああ。良かった。どうにか、二人を会わせることができそうだ。

家に帰り、さっそくもらった名刺の携帯にメールした。すぐに、悟くんから電話が来た。

「もしもし…ひかりさん？」

「悟くん？」

「葉月ちゃんと、俺と3人で会えないかって。なんで？」

「なんでって…。今日ね、白河ノエルって人のところに行ったの。かなり怪しい人で」

「あのインチキ占い師？」

「そう。あれ？何で知ってるの？」

「ああ…。今の俺、高い次元の俺と同化してるんだ」

「え？」

「ひかりさんみたいに」

「波動下がるようなこと、あったの？」

「いや、わざと下げて同化した」

「そんなことできるの？」

「葉月ちゃんも、目覚めたのかと思った」

「目覚めたって？」

「葉月ちゃんと一緒に、派動を下げて来たんだ。多分、こっちの次元の葉月ちゃんの中に、高い次元の葉月ちゃんいるよ」

「え？」

「それで、会おうって言ってるのかと…。でも、そうだよな。それだったら、葉月ちゃんから直接、俺にコンタクト取ってくるよな…。まだ、目覚めてないんだな」

「なんで、二人して？」

「ひかりさんがいきなり消えて、昴も葉月ちゃんもびっくりしてさ。特に昴なんて…」

「昴くんが何？！」

「昴、探し回って。ひかりさんのエネルギーがまったく、感じられ

ないって俺のところに、真っ青になってきてさ」

「うん」

「それで、俺は低い次元の俺とコンタクト取って、ひかりさんに会って確認した。それから、ひかりさんなら、低い次元に行ってるよって昴に話したんだ」

「それで？」

「昴、どうしたらひかりさんをまた、こっちの次元に戻せるかって聞いてきて」

「うん…」

「多分、ひかりさん自身が意識を変えないと来れないだろうって言ったら、じゃ、俺はどうしたら、そっちの次元に行けるのかって」

え？昴くんも、まさか…！

「昴くんも来てるの？もしかして」

「うん。波動下げて来てるとは思うけど…」

「じゃ、こっちの昴くんに会えば…」

「多分、波動の低い昴だと思うよ」

「え？」

「目覚めてなければね」

「どうやったら?、どうしたら目覚める?」

私は気が気じゃなかった。早くに高い次元の昴くんに会いたくて…。

「昴自身が、派動をあげないと…」

「それ、どうしたら…」

「ひかりさんも、協力しないと」

私?

「どうやって?」

「例えば葉月ちゃんの場合は、葉月ちゃんに光を送ることで、葉月ちゃんは目覚めると思うけど…」

「じゃ、私も?」

そうしたら、昴くん目覚めるの?!

「できる?」

「え?」

「今、ひかりさん、光出ないよね?」

「あ…!」

「それも、低い次元の昴に出せるの？」

「え？どういうこと…？」

「その辺、ひかりさん自身がやっていくことだから。俺はあまり、口をはさめない」

「でも、いるんでしょ？昴くん、この次元に来てるんでしょ？」

「この次元の昴の中にいると思うよ。明日、昴と会うようにしてるんだ。ひかりさんと葉月ちゃんも来なよ。夜、１０時過ぎだけど…」

「うん。行くよ。私遅番だから、ちょうどよかった」

「じゃあ、また明日。本屋の地下に駐車場あったよね。車で迎えに行く。昴の家で会うようにしてるから」

「え？うん」

昴くんち…。そうだよね。この次元でも、昴くん一人暮らししてて…。

ああ！それより、こっちの次元に来てるんだ！私は嬉しくて、昴くんのエネルギーに集中してみた。でも、感じるのはやっぱり冷たいエネルギー…。

「まだ、目覚めてないんだ」

ああ…。でもいるんだ！それだけでも嬉しい…！昴くんに会うのを

楽しみにしながら、その日は眠った。

翌日、葉月ちゃんも夜のシフトだった。更衣室でこっそり、今日バイト終わったら悟くんと会わないかと誘ってみると、大喜びをした。

「もう会えちゃうんですか？信じられない！」

「あ。天宮昴くんも、一緒なの。いいかな？」

「え？はい。いいですけど。でも、ちょっとあの人は苦手だな」

そうなんだ。高い次元だったらその逆だったのにな。

１０時になり、地下２階にある駐車場に行くと、もう悟くんが車の前で待っていた。

「ああ。こっちだよ」

手を振って、呼んでくれた。

「わ…。本物！」

葉月ちゃんが、喜んでいた。

「こんばんは。葉月ちゃん」

悟くんは、わざと葉月ちゃんの顔をのぞきこむようにして、そう言った。多分その時、ものすごい光を葉月ちゃんに送っただろう。

「こ、こんばんは」

葉月ちゃんは緊張した顔でそう言ったが、顔を真っ赤にさせて喜んでいた。

「あれ？」

葉月ちゃんが、いきなり不思議そうに首をかしげて、

「前にも、会ったことありますか？」

と、悟くんに聞いた。

「サイン会で会ったじゃない？」

私がそう言うと、

「いえ…。こんなふうにもっと近くで…。なんか今、ものすごく懐かしい感じがして」

「え？」

私と悟くんが、同時に聞いた。

「あ。気のせいですね。会うわけないですよね」

葉月ちゃん、もしかして目覚めかかってるの？

「車に乗って。昴の家に行くから」

「え？昴の家？」

葉月ちゃんが驚いていたが、後部座席に葉月ちゃんを乗せ、私も乗り込んだ。昴くんに会うのが嬉しい。でも怖い。とっても複雑だった。

そういえば、悟くんも葉月ちゃんも、なんでこの次元に来たのかな…。私を助けてくれるためなのかな？

昴くんのマンションに着いた。部屋番号も同じだった。ドアの前まで来たら、悟くんがチャイムをならした。ああ…。来たことを察知してくれることはないんだな…。そう思うと、少し寂しい気もした。

ガチャ…。ドアが開いた。

「よ。昴…」

悟くんは、軽く片手をあげて挨拶をした。

「ども…。どうぞ」

昴くんは無表情に言うと、さっさと部屋の奥に入ってしまった。

「お邪魔します…」

小声で葉月ちゃんはそう言うと、部屋に入っていった。私はドアのカギをかけ、最後に部屋に行った。

部屋は、散らかっていた。その辺には、雑誌がころがっていて、それを昴くんは足でテーブルの下にどかしていた。

「夕飯は？」

悟くんが私たちに聞いた。

「バイトに入る前に、少し食べただけです」

葉月ちゃんが言った。

「冷凍のビザあるから、あっためてくるよ」

昴くんはキッチンに、向かった。ああ…、冷凍か…。こっちの昴くんは、自炊とかしないのかもな…。

「き、緊張する…」

葉月ちゃんが、かちかちに固まっていた。

少しして、ピザや他にも冷凍食品を解凍したものを昴くんは持ってきて、それに冷たいお茶も用意した。

「適当に食べて」

そう言うと、自分もどかってテーブルの前に座った。私は、その横で葉月ちゃんじゃないけど、緊張して硬くなっていた。

「葉月ちゃん、そういえばさ、ひかりさんから聞いたけど、なんか悩み事あるの？」

「え？」

「占い師だっけ？みてもらったんだって？ひかりさんから聞いたんだ。ちょっと怪しい…」

「なんだよ？ひかりさん、ひかりさんって。どうしてそんなに二人は、仲いいわけ？しょっちゅう連絡取り合ってるのかよ」

昴くんが、横から口をはさんだ。

「そうじゃないけど…。いや、ひかりさんは、俺くらいしか相談できないから」

「なんで？俺は？俺にもいろいろと話したらって、この前言ってたじゃん。でも、まったく連絡もしてこなかったよ？」

「だからこうやって、訪ねてきてるだろ？」

「なんで一人で来ないんだよ？ひかり」

昴くんから、またものすごい冷たい空気が来る。ゾク…。体中が冷える。でも、この昴くんの中にいるんだよね？あったかい昴くんが…。私は心の中で、何度も昴くんを呼んだ。

『昴くん、答えて。昴くん、そこにいるんでしょ？』

でも、返事はない。

「この子、誰？」

昴くんは、葉月ちゃんの方を見てそう聞いた。

「私のバイト先の、神野葉月ちゃん」

私はそう答えた。葉月ちゃんは黙っていた。

「なんで、この子も来たの？」

「相談があって…」

「誰に？なんの？」

「いろいろと、悟くんに聞いてもらいたいことが…」

「また、悟さん？！」

私がそう言うと、昴くんが大声を出した。私も葉月ちゃんも、ビクって体を硬くした。

「ひかりは、俺と付き合ってるって教えたよね？何考えてんだよ？いい加減にしろよ！」

「……」

昴くんから、ものすごい冷たいエネルギーが来て、さらにそれが私の体に巻きつく。そしてそのあと、昴くんは信じられない行動をした。

昴くんの隣に座ってた、葉月ちゃんに顔を近づけたと思ったら、いきなり葉月ちゃんにキスをしたのだ。

「え？！」

私も悟くんも驚いてしまった。葉月ちゃんは真っ青になり、

「嫌だ!!!」

と、昴くんの体を押しのけ、ぼろぼろと泣き出した。

「葉月ちゃん!」

悟くんが、葉月ちゃんの肩を抱いた。一瞬真っ青になった葉月ちゃんの顔色が、戻っていった。

「なんで?」

私は、動揺を隠せなかった。今、私と付き合ってると言ったくせに何をしてるの?ものすごい怒りを私は感じた。嫉妬や昴くんに対しての怒り…。

「な、何してるの?昴くん…」

わなわなと震えた。喉が焼けるように熱くなっていた。

「少しは妬いた?嫉妬でもした?」

「え?」

「あの、金髪の女性の話をしたときみたいにさ」

「……」

嫉妬…。そうだ。ものすごい嫉妬だ。嫌だ。そんな自分は見たくない。でも、今はそんなこと言ってられない。自分より、昴くんへの怒りの方が勝っている。

もし、私が黒の霧が見えてたら、私の体から毒ガスのごとく、霧が出ているのが見えただろう。悟くんが冷静に、

「ひかりさん、落ち着いて」

と言いながら、私の方を優しく見ていた。多分、黒の霧を消していたのだろう。それを見て落ち着こうとしたが、なかなか落ち着くことができなかった。

「俺のこと、好きだって自覚できた？」

「え？」

「悟さんの方ばっかり向いてたけど…」

「そのために、こんなことしたの？」

私はまた、怒りが出てきた。

「葉月ちゃんに悪いと思わないの？し、信じられない！」

「ああ。そっか…。悪かったね。あやまるよ」

葉月ちゃんも、信じられないっていった顔で昴くんを見ていた。

「昴、ひかりさん、もう座って」

悟くんが、穏やかにそう言った。私は、震える手を必死で押さえながら、その場に座った。すぐ隣にいる昴くんが、ものすごく憎らしくも思えた。

昴くんも座った。顔を見ると、全然平然としている。

『昴くん。いるの？ねえ、昴くん…、そこにいるの…？』

怒りから悲しみへと変わった。なんで、あの次元の昴くんと、こうも違うのだろうか。下を向くと、涙がこぼれそうで必死で我慢した。

「で？その葉月ちゃんの悩みって？」

昴くんが、しらっとした顔でそう聞いた。

「……」

葉月ちゃんは、何も話す気も失せたようだった。

「俺から話すよ。ひかりさんから、ちょっとは聞いてる」

「ああ、そう。仲いいね。どうせなら悟さんとひかりが、くっついちゃえば？俺と葉月ちゃんが付きあえば、ちょうどいいんじゃね？」

そう言われて、葉月ちゃんは悟くんの方へと体をよせて、明らかに昴くんを遠ざけようとした。それを見ていた昴くんは、少し鼻で笑い、

「冗談だよ」

と軽く、言った。

「昴。その…、嫉妬するのは別にいいけどさ。それだけお前がひかりさんを、好きなんだろうから。でも、ちょっとこれから話すことはまじめな話で、お前にもひかりさんにも関係あることだから、聞いてくれない？」

「……」

昴くんは、ちらっと悟くんを見ただけだった。私のほうが、その言葉を聞き動揺した。嫉妬は私を好きだから…？

…求めるのは本当の愛じゃないんだよ…。

前に昴くんから、聞いた言葉を思い出した。

…でも、嫉妬するひかりのことも、好きだよ。嬉しいよ…

そんな言葉も思い出していた。ああ…。あの昴くんは、いつでも優しかった。いつでも、私をあったかい愛で包んでくれてた。そして、大事に思ってくれてた。

求めたりしていなかった。俺が俺に見返り求めてどうするのさって笑ってた。無償の愛で、優しく包んでくれてた。

ボロ…。涙が出た。止まらなくなった。

「ひかりさん？」

「星野さん、どうしたんですか？」

悟くんと、葉月ちゃんが同時に聞いてきた。

「ごめん。私…」

涙が溢れて、止まらない。隣で昴くんは、冷ややかな表情をしているのがわかった。でも、しばらくすると、

「なんで、泣いてるんだよ？」

とぼそって、聞いてきた。あったかい優しい昴くんに会いたいから。喉までその言葉が出かかった。でも、言うのをやめた。

「昴。この間俺、いろんな次元に俺がいるって話をしたろ？」

「え？」

いきなり、悟くんが話し出した。

「高い次元にも俺がいる。ひかりさんは、高い次元にいたひかりさんが、この次元のひかりさんと同化している」

「ああ…。そのこと」

昴くんは、少ししらけた感じでそう答えた。だが葉月ちゃんは、目を丸くして聞いていた。

「俺も高い次元から、この次元に波動を下げて同化してるんだ」

「え？」

「今は高い次元、この次元、両方の俺が混ざり合ってる」

「そんなことできんの？」

「まあね」

「じゃ、ひかりは？」

「ひかりさんの場合は、この次元のひかりさんは、どうやら影を潜めてるみたいだね」

「なんで？」

「何かショックなことか、表に出たくないような、そんなことがあるのかな？高い次元のひかりさんに、意識を受け渡しちゃってるようだから」

「ショックな…こと…？」

「昴、心当たりあるか？」

「…。この前喧嘩した」

「喧嘩…？」

ちょっと、悟くんは驚いていた。

「ニューヨークで会った金髪の女性の話ばかりしたら、いきなりひ

かりが怒り出して」

「嫉妬したのかな？」

悟くんは、私の方をちらりと見た。なんだか、見透かされてるような気がして私は話し出した。

「それ、私の次元でもあったの」

「え？」

少し、昴くんは驚いていた。

「あ、でも喧嘩はしてない。ただ、昴くんが、ずっとその女性のことばかり考えてて、悲しくなって、その場をさっさと離れて…」

「それで？」

悟くんが、冷静に聞いてきた。

「それから、私からものすごい黒い霧が出てきて…。嫉妬したの。その感情が嫌で醜く思えて、それを昴くんに知られたくなくて、必死で昴くんから離れて…。一回真っ暗闇の中にはいって…。具合が悪くて動けなくなってしゃがみこんでたら、そこに昴くんが来たの」

「ああ…、あの時」

昴くんが、ぼそって言った。

「その時にはもう、低い次元に来てたのか」

悟くんも、つぶやいた。

「昴はひかりさんから、冷たいエネルギーを感じて、心配して追いかけたらしい。でも、どこにもいなくて…。数分したら、そのエネルギー自体が消えたって…」

「私、高い次元から消えたんだね」

「こっちの次元のひかりは？いるんだろ？ここに」

「いるよ。ひかりさんと同化してるから」

「なんで隠れてるの？っていうかさ、あんた、さっさともとの次元になんで戻らないの？」

「え？」

昴くんは、怒っている。

「勝手にやってきて、こっちのひかりにとりついて…。いや、のっとって…」

「昴くん？」

「ひかりは、やっと俺に心開いてきたんだ。俺のことやっと好きになってたんだ。なのに…」

昴くんは、私を睨みつけていた。

ああ…。この次元の昴くんも、この次元のひかりに会いたいんだ。
私が、高い次元の昴くんに会いたいように…。

「ひかりを返せよ。いい加減もといたところに戻れよ」

「昴…。そう簡単にはいかないんだ。それにこの次元のひかりさんは、自分の意思で隠れちゃってる」

悟くんは、いつものクールな感じでそう言った。

「え？」

「葉月ちゃんも来てるんだ。でも、この次元の葉月ちゃんの意識が強くて表に出れない。俺みたいに、混ざり合うのはなかなか難しいんだ」

「わ、わたし…？」

葉月ちゃんが、凍り付いていた。

「そう。一緒に波動下げて来たんだよ」

「どうやって？」

昴くんも、少し驚きながら聞いた。

「黒い霧の多い場所に行って、そこで心を開放してどんどん霧を吸収した。かなり、体も冷えたし気持ちも悪くなったけど」

「本当に、私の中にもいるの？」

「うん。いる。それは感じる」

「……」

葉月ちゃんは口を開けたまま、微動だに動かなくなった。

「あ、そのまま何も考えないで、ただ、俺のことを見ててくれる？
葉月ちゃん」

悟くんはそう言うと、じっと葉月ちゃんのことを見た。数分すると、
いきなり葉月ちゃんの顔色が変わり、

「ええ？！さ、悟くんだったんですか？」

と大声を出した。

「何？どうした？」

昴くんが、驚いていた。

「声…。聞こえてきた…」

葉月ちゃんは、目を丸くしたまま口をぱくぱくさせ、言葉を失っていた。ああ…、悟くんが心で話しかけたんだろうな・・・。

「もうちょっと、こっちに集中してて」

そう言うと、また悟くんは葉月ちゃんを見た。光は見えなかったが、多分ものすごい光を葉月ちゃんに送っているのだろう。葉月ちゃん

の頬がピンク色に染まり、私までゆったりとした気持ちになった。

ガタン！！突然、葉月ちゃんは立ち上がり、

「信じられな～～い！昴くん、何やってんのよ～～～！」

と叫んだ。

「え？俺？」

昴くんは、あまりの勢いで葉月ちゃんが立ち上がって叫んだので、一瞬のけぞっていた。

「星野さんの前で、私にキスするなんて！この次元の昴くんは、いったいなんなの？信じられない！」

「まあまあ…」

悟くんが、葉月ちゃんの肩に手を置き座るようになだめた。

「思い出した？っていうか、目覚めたみたいだね？」

悟くんが、葉月ちゃんの顔をのぞきこんでそう言うと、

「はい。もうばっちり！あ、でもどうやら、この次元の私の記憶も意識も、同時に感じてて…」

と葉月ちゃんは元気に答えた。

「うん。そのうち一緒くたなるよ。一人の人間になれるから。」

「葉月ちゃんなの？あっちの次元にいた…」

「はい！もう星野さん、大丈夫ですよ！悟くんと助けに来たし昴くんだって…。あれ？でも、昴くんは？」

「俺が何？」

昴くんが、変な顔をして葉月ちゃんを見た。葉月ちゃんの変わりようにに、驚いているようだった。

「こっちの昴の意識は、かなり強いみたいだね」

悟くんが、そう言った。

「今、何してたの？悟さん、なんか葉月ちゃんにしたの？」

昴くんが、ものすごく疑い深そうな顔をしながら聞いた。

「俺？うん。葉月ちゃんの心に話しかけて、光を送ってた」

「光を？心で話すって？」

「心で会話できるんだ。俺と葉月ちゃんは。それに、光を送ることもできる」

「何？それ」

また、昴くんは顔をしかめた。

「お前もできるよ。次元の高い世界じゃ、ひかりさんと心で会話してたし光も出してたし…」

「俺が…？」

「そうだよ」

「ああ…、そういえば、ひかりが何を考えてるか、たまに聞こえてくることがあった。でも、このひかりだと聞こえてこない」

「そりゃそうだろうね。お互いが心を閉じあってるから」

「え？」

私と昴くんが、同時に聞いた。

「お互い、なんか閉じあってるどころか、嫌いあってない？そりゃ、心が通じ合うとはとても思えないね」

悟くんは優しい表情をしながらも、けっこうクールに言ってのけた。

私は、昴くんの顔を見た。昴くんも私を見たけど、すぐに視線をそらした。

「無理だよ。ひかりはひかりでも、こんな冷たい空気出すようなやつ好きになれないよ」

昴くんが、悟くんに向かってそう言った。

「冷たい空気？」

私が聞くと、

「隣にいるだけで、ものすごく冷たいのがくる。自覚してないの？」

昴くんが、嫌そうな顔をしながらそう言った。

「私から…？」

驚いた。昴くんからも冷たい空気が来ると思っていたけど、私からも出していたのか。

「黒い霧、出し合ってるからね」

悟くんが、ぽつりと言った。

「さっきからもそうだよ。でも、黒い霧で覆われないのは、一応俺が光を出してるから」

「そうだったの？ごめん、悟くん」

「それだよ！なんで、そう悟さんには素直なんだよ？」

昴くんが、怒った。

「だって悟くんは、優しいしあったかいし…」

「なんだよ？俺は冷たいからか？でもこんな俺でも、この次元のひかりは好きになってくれたんだよ」

「え？」

「ひかりの前でも、俺はこんなだった。だけど、ぶっきらぼうだろうが不器用だろうが冷たかろうが、それでも好きだって言ってたんだよ」

「私が？」

「あんたじゃねえよ。この次元にいるひかりだよ」

「昴…。ひかりさんには、変わんない。そのひかりさんも同じ魂だよ」

「なんだよ、それ。てんで違うよ！こんなに冷たくねえよ！」

「……」

嘘…。そうなの？この次元の私は、この昴くんが好きなの？ドクン…。心の奥で、何かが動いた。ドクン…。昴くんの顔を見た。ドクン…。昴くんに反応している私がいる。

しばらく昴くんを、見つめていると、

「なんだよ？」

と昴くんが、また嫌そうな顔をした。嫌われたくない…。いきなり、そういう感情が押し寄せてくる。

あれ？これ、私…？不思議なことだが、私は心の奥で、そう思っているようだ。

もっと、心の奥にある感情を感じてみようと思って、目を閉じた。静かに、自分の心の方に集中した。その時、ふわ…。昴くんの匂いがした。

あれ?思わず目を開けた。昴くんの顔を見るとまだ怒った表情だったが、昴くんからはいつもの昴くんの匂いがしてきた。

ああ、いつもの昴くんの匂いだ。何で今までこの匂い、気がつかなかったんだろうか。

部屋をぐるりと見回した。そこら中に、昴くんの匂いがあることに気づいた。私は今までそれすら、気づけなかったが、その匂いに包まれていたんだ。

また、目をつむった。懐かしい、心があったかくなる匂いだ。匂いは変わらないんだ…。

「何してんだよ?」

昴くんが、聞いてきた。

私は少し目を開けて、昴くんの手を見た。いつもの、白くて奇麗な手だった。それから腕。筋肉質で、やっぱり奇麗な肌。そして、首、耳、髪。サラサラな黒髪は、いつもの昴くんと同じだったし、長いまつげも、鼻筋も、白い歯だって一緒だ。それに、少し冷たい声だけど、でも声だって…。

じ~~って昴くんを見ていると、さらに昴くんは、変な顔をした。

「何…?何で俺のこと、見てんの?あれ?もしかして、こっちの次

元のひかり？」

「ううん。違う…」

そう言うと、昴くんの顔は一気に落胆の表情を見せた。ああ、一瞬期待したのか…。落胆する昴くんの表情は、あまり見たことがなかったし、怒ったところも嫌がる顔も冷たい表情も…。

ううん、たまにそんな昴くんの顔も見てたと思う。だけどそんな昴くんだって、好きだったじゃないか…。

「……」

私はそのままうつむいて、黙り込んでいた。

「星野さん？」

葉月ちゃんが、声をかけてきた。

「なんでもないの。ごめん。えっと、話を続けて、悟くん…」

そう言うと、悟くんは、

「わかった。今日こうやって集まってもらったのは、白河ノエルって人のことで」

と、話を始めた。私はそれを聞きながらも、隣にいる昴くんに意識を向けていた。

もう、冷たい空気は来なくなっていた。それよりも、いつもの昴く

んの匂いがして、私はだんだんと嬉しくなっていった。

昴くんだ…。隣にいるのは次元が違っていようが、波動が違っていようが昴くんなんだ。

胸がドキドキしてきた。体があったかくなってくる。

「それで、取り憑かれてるって言われたの。でも、それって悟くんのことでしょ?それに、星野さんなんて、水子の霊がいるって言うんだよ」

「え?」

葉月ちゃんの言葉に、昴くんが驚いていた。

「ひかりは、確かに赤ちゃん流産したけど、でも、そんな霊に取り憑かれるなんてこと…」

「そうだよね?ね?星野さん。それはどう考えてもおかしいよね?」

「え?うん。私向こうの次元では、赤ちゃんもう、私の体からいなくなってたし…」

「そりゃ、流産したから」

昴くんがそう言うので、

「違うの。魂だけ、私の中に残っていたの。でも、私がそれに気がついて、赤ちゃんが私にメッセージを残してくれて、それで転生するからって私の体から、離れていったのよ」

と、説明した。

「そうだったんだ」

悟くんが、ぽつりと言った。

「でも、それは高い次元での出来事であって、この次元だとわからないな」

「え？どういうこと？」

私が聞くと、悟くんは穏やかに答えてくれた。

「この次元にふさわしい出来事が起きるんだ。だからもし、波動が低いことが起きるなら、赤ちゃんがあまりよくない霊になって、取り憑くくくこともあるかもしれない」

「まさか！」

私がその言葉を否定すると、悟くんは静かに話を続けた。

「ああ。うん。多分ね、ひかりさんがそんなことが、起きるって思ってなかったら起きないよ。思考が現実化するから。でも、水子の霊が憑いてますよとか、祟りがありますよとか言われるとね、それを本当のことと思い込んで、そういう現実を創ってしまうことがあるんだよ」

「あ、それ、昴くんも言ってた」

「俺？」

「あ、高い次元のほうの昴くん」

「ああ。そう。物知りだね、そっちの昴は…」

昴くんは、少しすねた表情をした。ああ、こういう顔もするのか…。

「じゃ、ノエルさん、嘘言ってみんなを怖がらせてるの？」

葉月ちゃんが、悟くんに聞いた。

「いや…。ノエルさん自身は嘘は言ってないだろうね。何か、低いエネルギー体と交信してて、そこから来る情報を伝えてるんじゃないかな。あっちの次元でも、そうだったでしょ？プレアデス人と交信してると言いつつ、怪しかった。でも本人はいたって真面目。人のためにやってることって、信じ込んでるんだよ」

「それって、1番やっかい…」

昴くんが、ぼそって言った。

「そう、やっかいだ」

「でも、その低い波動のエネルギー体はなんのために？」

葉月ちゃんが、聞いた。

「アセンションを、邪魔するために」

「アセンション？」

昴くんが聞いた。

「そう。次元上昇。地球の次元上昇を助けるのが、俺らのミッション。まだ、思い出さないの？昴」

「俺に、そんなミッションがあるの？まさか！」

「思い出せないみたいだね」

ちょっと、ため息混じりに悟くんは言った。

「それでね、悟くん。ノエルさんがお祓いをしてあげるから、週末本山に来なさいって言ったの」

「お祓い？本山？」

「教団の本山だって」

「げ、怪しい。何それ？」

昴くんが、また変な顔をした。

「週末か…。俺は土曜の夜から日曜の午前中、何でだか知らないけどあいてるな。昴は？」

「俺？ちょっと待って」

昴くんは、携帯を出して、スケジュールを確かめているようだった。

「ああ。俺も、土曜の夜7時から、日曜の12時まであいてる…」

「そうか～。偶然はないって言うからな～」

悟くんが、少しにやって笑ってからそう言った。

「行く気なの？悟くん」

葉月ちゃんが、心配そうに聞いた。

「こういうのはね、普通は避ける。なるべく関わらないけど、でも、向こうの次元でもノエルって人と関わって、こっちでもだ。これって、なんかあるんじゃないかって思って…」

「これも、ミッションの一つなの？」

葉月ちゃんが、ちょっと嫌そうな顔をした。

「うん。多分ね」

悟くんは、少し微笑みながらそう言うと、

「この次元では、地球が2012年に滅びるって言ってる人も多いようだ」

と、今度は真面目な顔をしてそう言った。

「それ、昴くんがそんなことが起きるわけないって言ってたけど…」

「俺が？」

「あ、次元の違う昴くんが」

「ああ」

また、昴くんはすねた顔をした。なんだか、その顔も可愛く見えた。

「起きないよ。でもね、もしそれを信じる人が多くなって、現実的に感じてきたら、そういう現実が創られる可能性はある」

「え？そうなの？」

「うん」

悟くんは冷静だったが、でも、ちょっといつもよりも目が真剣だった。

「もし、その、この次元の地球が破滅したら、どうなるの？」

と、葉月ちゃんがこわごわ聞いた。

「人類は、違う星に移動するかな？そこでまた、３次元の毎日を楽しむかもね」

「以前の、プレアデス人のように？」

私が聞くと、

「そう」

と、悟くんは冷静に答えた。葉月ちゃんが、話に入ってきた。

「それじゃ、特に破滅したからって、大変なことってわけじゃないの？」

「う～ん。どうかな？昔、アトランティス大陸が、沈むような大きな出来事があったけど、それはまあ、地球の1部だったからな…。ま、それでも、宇宙全体に影響はあったけどね」

「影響…？」

葉月ちゃんは、また、顔をしかめた。

「うん。もし、この次元の地球が破滅したら、他の次元の地球にも、何か影響は出るだろうね。どんな影響が起きるかは、予想もつかないけど」

「そうなんだ」

私は、ため息混じりにそう言った。

でも、そりゃそうか…。どの次元にも私はいて、どっかの次元の私が破滅を味わったら、他の次元の私に影響が出ないわけがない…。

「それだから、そういうことが起きないよう、俺らみたいなのがいる」

悟くんが、静かにそう言った。

「それが、ミッションなわけ？」

昴くんが無表情で聞いた。

「そうだよ」

悟くんも、クールに昴くんに向かって答えた。

「俺にもそんなミッションがあるなんて、どう考えても信じられない。さっきから、次元の違う俺が、ああ言った、こう言ったって言ってるけど、それは俺じゃない。俺には関係ないことだよ」

「そんなことはない…。まあ、そう思うのも、無理ないかもしれないけどね」

悟くんは、またクールにそう言った。昴くんは、ちらりと私を見て聞いてきた。

「あんたもそのミッションのこと、わかってるんだ」

「え？…うん」

「ふうん」

と、昴くんは冷めた表情で言った。

「さて、遅くなったから帰るとするかな」

そう悟くんは言って、立ち上がった。

「送ってくけど…、ひかりさんは泊まってくの？」

悟くんがそう聞くと、

「え？！」

と1番驚いたのは、昴くんだった。

「泊まるわけないじゃん。俺らそういう関係じゃ…」

昴くんは、戸惑っていた。

「あれ？そうなんだ。向こうの次元のお前たちはさ、泊まったりしてたし、ものすごい仲が良かったから。こっちもそうかなって…」

「ち、ちげえよ」

昴くんは、かなり動揺していた。

「うん。泊まってく」

私がそう言うと、私の方を見て昴くんは目を丸くした。

「な、何言ってんの？ひかり」

「もう少し、昴くんと話がしたい」

この思いは私なのか、私の中にいるもう一人の私の思いなのかは、わからなかったけど、もっと昴くんと一緒にいたいって、そう思っていたのは確実だった。

「じゃ、俺は葉月ちゃんだけ送ってくよ。それじゃ、おやすみ」

「え？ええ？」

まだ昴くんは戸惑っていたが、さっさと悟くんと葉月ちゃんは、玄関を出て行った。

「洗い物でもするね」

「え？」

私はキッチンに行きさっさと洗い物をしだすと、昴くんは話しかけてきた。

「慣れた手つきだね。もしかして、よくそっちの世界じゃ俺の家に来てた？」

「うん。っていっても、2回くらいかな？泊まったのは…」

「それって…その…」

「え？」

戸惑いながら、昴くんは聞いてきた。

「セックスもしたってこと？」

「あ。うん…」

なんだか恥ずかしくなって、目線を外してそう答えた。

「俺、悪いけど、あんたとはする気ないよ」

「え？」

「こっちの次元のひかりしか、する気ないから」

「あ…。うん」

私は冷たくそう言い放つ昴くんに、ショックを覚えたけど、でも、こっちの次元の私のことをちゃんと思ってくれてるのかって安心もした。

ただもうその時には、私の中で、もう一人の私は目覚めかけてて、

『こっちの次元の私も、ここにいるのにな…』

なんてことを、思っていた。

ミッション3　どんな自分も受け入れる

昴くんが、シャワーを浴びている間、部屋のクッションの上に座りぼ〜〜ってしていた。部屋を見回すと、やっぱり昴くんの匂いがして、次元が違ってもここは昴くんの部屋なんだなってそう思った。

ガチャ…。昴くんがバスルームから出て、髪をバスタオルで拭きながら部屋にやってきた。

両手でゴシゴシと拭いてから、まだ髪から雫が垂れているのに、そのバスタオルを肩にかけ、ドスンとリビングの床にあぐらをかいて座った。髪がボサボサのまま、今度は口につっこんでいた歯ブラシを右手で持って、歯を磨き始めた。

ああ、これ、昴くんがいつもしてる。一緒だ…って思いながら、昴くんを眺めていると、

「何？」

と、歯ブラシを口から出して聞いてきた。

「え？」

「何でさっきから見てんの？」

「あ、ごめん…。気にしないで」

私は、昴くんを見るのをやめた。でも心の奥の私が、昴くんのいろんな表情を見たいって思っていた。

昴くんはまたバスルームに行くと、しばらくして戻ってきた。それからベッドにドスって座ると、今度は足の爪を切り出した。

ああ…。あんなふうに、足の爪切るのか…。て、いけない。また、私昴くんのことを見てるな～～。

目線を外した。それから目をつむり、昴くんのことを感じることにした。不思議とあの、冷たいエネルギーは感じなかった。

「ねえ…」

「え？」

いきなり話しかけられて、ちょっと私はびっくりしてしまった。

「あんたの昴って、そんなに優しいやつ？」

あんたの昴…？なんだそれ。

「優しいよ」

「じゃ、優しいやつが好きなんだ」

「うん。そうだね。そうなるのかな…」

「じゃ、その昴は、あんたのどこに惚れたの？」

「え？」

どこかな…？

「わからないけど…。でもよく、同じ魂だって言ってた…」

「それ、まったくわけわからない」

昴くんは少し顔をしかめて、逆の足の爪を切り出した。

「昴くんの足…」

「え？」

「なんでもない…」

「？」

やばい…。足も奇麗なんだねって、とっても変なことを言いそうになった。次元の高い昴くんなら、私の心で思ったこともお見通しだから、ばれちゃっただろうけど、この昴くんだと心が読まれないから、大丈夫だ…。

次元の高い昴くんなら、きっとこんな時、

『まる聞こえだから』

なんて、心で言ってくるんだろうな…。はあ…。ちょっとそんなことを思ったら、また、あの昴くんに会いたくなって寂しくなった。

「そういう仕草…」

昴くんがまた、いきなり話しかけてきた。

「え？」

「一緒なんだな。この次元のひかりと」

「仕草？」

「髪の先っぽ、指にからめるじゃん、よく…」

「あ…」

どうやら私はいつも、無意識に髪の先を、指でくるくると巻いているようだ。

「昴くんも、一緒の仕草するよ」

「え？」

「やっぱりね、いつもバスルームから、バスタオルで頭ゴシゴシ拭きながら出てくるんだけど、口には歯ブラシつっこんでるの」

「ああ。それ？いつもそうしてるけど…」

「一緒なんだね」

「ふうん…」

「でも、足の爪を切ってるのは初めて見た」

「そう…。それが何？」

「え？」

「それが、どうかした？」

「ううん。ただそうやって、切ってるんだなって思っただけ…」

「……」

昴くんは、またしかめっつらをして、それから切った爪をゴミ箱に捨てると、

「俺、結構疲れてるからもう寝るけど…。あんた、どこで寝る気？」

って聞いてきた。

「え？」

「予備の布団なんてないよ」

「…だよね」

「……」

しばらく黙って昴くんは、こっちを睨みつけてる感じだったけど、

「はあ。しょうがね～な…」

ってため息をついて、クローゼットから冬のかけ布団を取り出して

きた。

「俺、ダイニングで寝るから」

昴くんはかけ布団をダイニングの床に敷いて、その上にごろんと転がった。

「じょ、冗談でしょ？そんな布団で寝たら、背中痛くするよ？それに寒くない？」

「しょうがねえじゃん。他に布団ないし…」

「私、ベッドの端っこで静かに寝るから」

「へ？」

「だから、その…」

「二人で、あのベッドで寝るってこと？」

と昴くんは、すごく嫌そうな顔をしてベッドを指差した。

そんなに嫌がらなくても…。

「うん…」

と私がうなづくと、昴くんは呆れたって顔をした。

「あんた、なんで平気なの？いくら同じ顔してても、俺はあんたの好きな、昴じゃないんだろ？」

「そうなのかな」

「へ？」

「だって、次元が違うってだけで、昴くんに、変わりないでしょ？」

「でも俺はあんたが、この次元のひかりと一緒だとは、思いにくいけど」

「そっか…」

二人して、しばらく黙った。

「わかったよ。勝手にしたら？」

そう言うと、昴くんはベッドに入り込み、ぐるっと壁の方を向いた。

「シャワー浴びたいなら、適当にその辺にあるタオル使って。とにかく、俺は先に寝るから」

「うん。わかった」

タオルのありかは知っていた。タンスを開けると、何枚かタオルが入っていた。やっぱり、そういうのも一緒なんだ。

そのタオルを持って、バスルームに行きシャワーを浴びた。それから髪を乾かし、いつも鞄に入っている歯ブラシセットで歯を磨いた。

それから、そっと部屋に戻ると昴くんの寝息が聞こえた。寝顔はす

ごく穏やかでいつもの昴くんと一緒で、胸がきゅんって切なくなった。

なんで切ないのかな…？この昴くんに、受け入れられてないからかな…？でも私だって、この次元に来てからずっと、こっちの昴くんを受け入れられていなかったから同じかな…。

ああ、昴くん、よく言ってたっけ。俺たちは同じことを、たいてい感じてるよって…。だったら、私がこの昴くんのことも受け入れられたら、この昴くんも私のことを受け入れてくれるのかな？

そっと昴くんの横に、潜り込んだ。ふわ…。また、昴くんの匂いがした。

キュ～ン…。ああ、切なさじゃない、これ…。愛しくって、胸がぎゅってなるんだ。

背中を向けている昴くんの背中に、顔をそっとうずめてみた。その背中のぬくもりも匂いも、背中の広さも全部、次元の高い昴くんと同じだ。

はあ…。愛しいな…。そう思うと、私の心の奥からあったかいものがふわって広がった。ああ、きっと今、光で昴くんを包んでる。その光は見えなかったけど、私はそれを感じた。

「おやすみなさい、昴くん」

昴くんの背中にそうつぶやいて、私は目をつむった。

不思議だった。なぜか、ものすごく心が安らいでいた。変だな…。

次元の高い昴くんに会いたいって思ってたのに、すやすや寝てるこっちの次元の昴くんのぬくもりを、感じてるだけで安心できた。

なんだ…。昴くん、ここにいたんだ。そんなことを思った。

次元が違おうが、冷たかろうが、ぶっきらぼうだろうが、それでも昴くんは、こっちの世界に来たその瞬間からそばにいたんだ…。

涙がこぼれた。ここにいたのにな…。なんで私、嫌がって、嫌ったりしたのかな…。

すう…。昴くんの寝息が嬉しかった。背中に耳をつけると、鼓動も聞こえた。とっても嬉しかった。そして、この昴くんと夢で会えたらいいな…、そんなことを思いながら、私は眠りに着いた。

夢には、昴くんはいなかった。でもどうやら私は昴くんと同じ夢を、見ているようだった。

そこは、なんだか薄暗かった。それに冷たい感じがした。辺りを見回すと、どうやら家の中のようだ。寂しさが心を覆う…。

そこへ、誰かが帰って来た。中学生くらいの女の子だ。

「お姉ちゃん、お帰り」

私が言う。いや、昴くんと同化しているから、昴くんが言ってるんだな。

「ただいま」

とそれだけ言うと、お姉さんはさっさと2階の自分の部屋に行ってしまった。また昴くんは一人で寂しく、テレビを観たりゲームをした。

ふ…。場面が変わる。誰かに手を引かれているが、その人がすごく怒っていた。

「お母さん、ごめんね。今度はちゃんと行くから…」

お母さんなのか…。話を聞いているとどうも、今日の練習をなぜ、さぼったんだと怒っているようだ。

「劇団に払うお金だって、大変なのよ。わかってるの?そのためにお母さん働いてるの、わかってるの?」

つないだ手をぎゅって力強く握って、お母さんは睨みつけるように言う。ほんとうは、もうやめたいのに…。僕、友達と遊びたいのに…。そんなことを心の奥で、昴くんは思っていた。

ふ…。また、場面が変わる。今度は学校だ。何人かの男の子に、

「お前となんて遊んでやんない。早く帰れ!」

と言われていた。

「帰れ、帰れ!」

泣きそうになるのをこらえながら、昴くんはランドセルを背負い、運動場を走って校門をくぐっていた。

しばらくは、泣くのを我慢して走っていたが、そのうちに立ち止ま

ると声を殺して泣き出した。

悲しい…。悔しい…。孤独だ…。寂しい…。心の奥から、そんな感情が湧き上がる。

家に帰っても、また、し～んとしている。

寂しさの中で、昴くんの心が叫んでいた。僕を、愛して！僕を、ちゃんと見て！

そのうちに、心の奥が冷えていくのがわかった。

ふと、目が覚めた。

「どうしたの？」

目の前には、昴くんの顔があった。

「え？！」

「なんで泣いてんの？怖い夢？」

私は泣いていたようだ。昴くんの悲しみや寂しさを一緒に味わい、泣いてしまったんだ。

「それとも、あんたの昴くんに会いたくなった…とか？」

「ううん…」

それなら、もう会えてるし…。

「大丈夫？」

昴くんの声は、少し優しい声だった。

「大丈夫…。ごめんね、起こしちゃったのかな？私」

「いや…、別にいいけど…」

そう言うと、昴くんはもぞって布団に潜り込み、背中を向けた。

「あんたさ、なんかもしかして、辛いこととか過去にあった？」

「え？」

「こっちのひかりはいろいろとあったけど…、同じ？」

「離婚とか、流産のこと？」

「そう」

「あったよ」

「それで…、もしかして今でも、そのことで苦しんでる？」

「…ううん。そのへんはもう、昴くんと一緒に乗り越えたから」

「俺と？」

昴くんは、こっち側を向いた。

「あ、俺じゃないか。あんたの昴とか…」

「その、あんたの昴って変だよ」

「なんで？」

「だって、昴くんは昴くんだもん」

「でも、この俺は、ひかりと一緒に苦しみを乗り越えたりしてないよ。だから、同じじゃない」

「あなたは…、あなたの中に、悲しいとか寂しいとかって感情があるんだね」

「え？」

「ごめん…。泣いてたのは、あなたの夢を一緒に見たから」

「夢？俺の？」

「うん…。あなたの夢に入ってたみたい」

「は？！何それ？そんなことできるわけないじゃん」

「できるよ。いつも、一緒の夢見てたもの」

「じゃ、どんな夢だった？」

「一人で寂しく家にいた。薄暗くて、悲しかった。お母さんに劇団

の練習行かなかったこと、怒られてた。それから、学校ではお友達にいじめられて、悲しくって泣いてた…」

「…俺、泣いたりしないよ」

「泣いてたよ?声を殺して…」

「……」

昴くんは、また背中を向け、

「もう昔の話だ。そんなの覚えてもいない…」

そう、冷ややかに言った。その背中がやけに小さく見えて、私は思わず抱きしめてしまった。

「な…、何してんだよ?!」

昴くんが一瞬びくってして、それから怒ったように言った。

「だって…。すごく寂しそうで…」

「寂しくなんかねえよ」

「でも…」

昴くんは黙り込んだ。私は、そのまま昴くんの背中を抱きしめていた。

「あのさ…、こんなことしてて、あんたの昴怒るんじゃないの?」

「昴くんは一人だよ。次元が違っても、ここにいる昴くんが昴くんだもん」

「だから、俺はあんたの昴じゃない…」

「そんなことないよ」

「違うよ！優しくもないし…。あんただって、はじめ嫌がってただろ？こんな俺…」

「ごめん…」

私はますますぎゅって、昴くんを抱きしめた。

「……」

昴くんはまた、黙り込んだ。それからしばらくして、聞いてきた。

「次元の高い俺は、寂しさとか、そういうの感じたりしてた？」

「全然」

「全然…？」

「うん、なかったよ。どっちかっていうと、私のほうがいっぱい苦しんでて、それを一緒に感じてくれて、それで一緒に浄化してくれた」

「浄化？」

「感情にふたしないで感じてみるとね、浄化されるんだって」

「…感じる？」

「孤独とか悲しいとか…。だから、昴くんもね、そういうの隠さず感じていいんだよ？」

「俺が？」

「うん」

「……」

昴くんは、また黙り込んだ。

「夢の中で、昴くんの心の声が聞こえたの」

「え？」

「僕を見て、愛してって叫んでたよ。お母さんにだったり、お姉さんにだったり、友達にだったり…。そういう気持ちがあったんじゃないの？」

「…俺が？」

「うん」

「……」

今、なんとなくわかった気がした。そうだ。私も離婚してからの3ヶ月、家にこもっていた時に、ずっと心の中でそう叫んでいた。

それは、徹郎や緒方さんからも感じた。孤独で、寂しくて、愛して欲しくて、それを求めていた。だから、緒方さんは私を振り向かせようとか、独占しようとかしていた。それが執着になっていた。

その独占したいって気持ち、感情、エネルギーをこの次元の昴くんからも何度も感じた。それって、愛されたいからだったんだ。

私がずっと、心の奥で、叫んでいたのと一緒だ…。

「昴くん、こっちの次元の私、昴くんのことが好きだったんでしょ？」

「そうだよ」

「それ、すごく嬉しかった？」

「…、そりゃ…」

「それで、ずっと私に愛されていたいって思ってた？」

「……」

昴くんは、何も答えなかった。

「それなのに、私がこっちの次元に来ちゃって、この次元の昴くんを嫌ってて、もしかしてものすごく悲しかったんじゃない？」

「そうだよ…。今頃わかったのかよ…」

昴くんが、ぶっきらぼうにそう答えた。

「だから自分の次元に戻れって、ずっと言ってたじゃんか」

そう言う昴くんからは、冷たいエネルギーは来なかった。この前同じことを言ってたときには、ものすごい怒りのエネルギーを感じたんだけどな…。

「でもね、こっちの次元の私いるんだよ」

「え？」

「私の中に…。感じるよ？」

「どんなふうに？」

「う～ん…。ぶっきらぼうでも、冷たい感じでも、そんな昴くんでも好きだな～って思ってる」

「え？」

「だけど、昴くんに嫌われたくないって思ってて…、昴くんが怒るたびに怖がって、怯えてるみたい」

「怯えてる…？」

「うん。昴くんが好きだから、嫌われるのがものすごく怖いみたい。それで、喧嘩してから昴くんを失うのが怖くって、そんな現実にな

ったら嫌で、現実逃避しちゃってる…」

「現実逃避…？」

昴くんが、くるりとこっちを見た。

「うん。心の奥底にふたして、鍵閉めて閉じこもってる…、そんな感じがする。でも、時々出てきて昴くんにときめいてたり…。だけどまた怒られたりすると、ふって隠れちゃう…」

「そうなの？ああ…。それ、なんとなくわかる…。俺といても、時々心閉ざしてるなって感じてた」

「うん…」

「今は？」

「今は、なんか嬉しいみたい…」

「なんで？」

「だって、こんなに近くにいるから…。今の昴くん、怒ってないし」

「俺が怒るの、怖がってたんだ…」

「嫌われるのが怖いみたい。でもわかるよ、それ。だって、私もそうだったもの」

「え？」

「離婚して、人を信じられなくなって…。恋するのも怖くて、男の人も駄目で…」

「なのに、昴と付き合ってたんだろ？」

「だって、昴くんは優しくてあったかくって、ものすごく大事にしてくれてたから」

「へえ、そう。あんたの次元の俺は、ずいぶんと優秀なんだね」

「……」

昴くんは、ちょっとふてくされた表情をした。ああ、そんな顔も可愛いな…。

「ごめんね…」

「え？何が？」

「……」

昴くんが、ものすごく驚いていた。でもそんなのおかまいなしに、昴くんの顔をそっとなでながら、私は話を続けた。

私は思わず、昴くんにキスをしていた。

「え？！何？！」

「私、ずっとどんな昴くんも愛してるって思ってたけど、条件付で好きでいただけだったかもしれない」

「え？」

「優しくてあったかくって、私を大事にしてくれて、そのうえ私のことだけを見ててくれる…。そんな昴くんを好きだったのかもしれない」

「……」

昴くんは、黙って聞いていた。

「だから、昴くんがあの金髪の女性のことばかり考えて、ものすごく嫌だったの。私のことを考えてくれない、それがものすごく悲しくて…」

「嫉妬だよね？なんでそれが駄目なの？好きなら当然じゃないの？」

昴くんが、そう言った。

「うん…。でも、そんな昴くんも、どんな昴くんも、受け入れるのが愛なのかなって…」

「え？何それ…？」

「高い次元とはいえ、昴くんもやきもちやいたりはしてたけど…」

「あんたの次元の、品行方正な俺でも…？」

「品行方正ってわけじゃないけど…。でもね、昴くんは私がものすごく落ち込んだり、闇に覆われてたり、それこそすべてを恨んでた

り憎んでたりしても、そんな私のことも受け入れてくれてたなって、そう思って…」

「それは俺だって…。こっちのひかりも人を憎んだり、めちゃくちゃ気持ちが沈んでたけど、それでも俺は好きになったけど」

「そうだったの？」

「理由はわからない。でも、初めて会った時から惹かれてたから…」

「どこで会ったの？」

「舞台観に来てた」

「あ。じゃ、一緒なんだ」

「あんたも？そこで、俺と初めて会ったの？」

「う～ん、初めてじゃない。初めて会ったのは、宇宙船の中だったし…」

「へ？」

「幽体離脱して、宇宙船に行っちゃったの。そこで、初めて光の昴くんに会った」

「光の？」

「うん」

「なんだよ?それ、わけわかんねえ…」

「そうだよね…」

「はあ…。ミッションとか光とかアセンションとか、そういうのは俺、まったくわかんないよ」

昴くんは、大きなため息をつきながらそう言った。私は、まだそんな昴くんの顔を眺めながら、今度は昴くんの前髪をあげたり、髪をなでたりしていた。サラサラで、なでていて気持ちよかった。それに、昴くんのおでこも可愛かった。

思わずそのおでこにキスをして、鼻の頭にもキスをした。昴くんはもう何も言わなかったし、抵抗もしなかった。

「なんで?」

「え?」

「なんでそんな優しい目で、俺のこと見てんの?」

「なんでって、えっと…」

ああ、こんな時、心の声を聞いてくれたら楽なんだけどな…。

「…え?」

「え?」

「今、なんか言った?」

「ううん…」

「でも、聞こえた…」

『心の声のほう？まさか…』

「え？心の声？あ…。これだ。また、聞こえるようになってる…」

『ほんと？』

「うん」

そっか…。わ…！なんか嬉しい…。

「心で会話してたんだっけ？その、あんたの次元では俺たち…」

「うん」

「じゃ、もしかして心で思ったことが全部、相手にばれてたり…？」

「うん。何でも聞こえてたみたいで、はじめは恥ずかしかったよ」

「そうだよね…」

「でも、ひかりは俺なんだから、恥ずかしがることないっていつも言われて…」

「え？」

「はじめから昴くんは、私の全部を受け止めててくれたんだな…」

そう言うと、私の目からぼろって涙があふれた。

「……。あんたの次元の昴に、会いたくなったんじゃないの？」

「ううん…。そうじゃなくって…」

「じゃ、なんで泣いてるの？」

「…昴くんって、すごく大事に思っててくれたんだなって、嬉しくなって…」

「変なの。それは俺じゃなくてさ、別の俺だよ。聞いてて、なんかものすごい違和感。ひかりが別の人間のことを好きだって言ってるみたいで、すげえ嫌だ」

「でも、昴くんのことだよ？」

「だから、俺はそんなに素晴らしい人間じゃないよ」

「そんなことないよ」

「そんなことある。もっと俺は情けなくて、てんで相手のことなんて思いやれない。自分勝手で冷たくて、ひがみやすくて…」

「でも、好きだよ？」

「え？！」

「でも、大好きだよ…」

「何言ってんの？あんた、さっき優しくて、あったかい俺だから好きだって…」

「うん…。そうだったけど、今は違うよ？」

「今は違うって？」

「だからね、今のままの目の前にいる昴くんを愛してるよ」

「……、浮気…？」

「へ？」

「だってそうだろ？あんたの昴に悪いって思わないの？」

ああ、もう～～～～。何回言ったら、わかるんだろうか…。

「悪かったな。てんで、理解できないような馬鹿で」

「あ、聞こえてた？心で言ったこと…」

「聞こえてるよ。さっきから」

じゃ、私が高い次元の昴くんでも、ここの昴くんでも、どんな昴くんでも愛してるのが、なんでわからないのかな～。

「……。全部…、俺？」

「うん。そう。全部が昴くん」

「高い次元の記憶なんて、まったくないよ、俺…」

「でも、昴くんは昴くん」

「……。別の人格じゃないの？」

「でも、性格も植えつけられたものだって言ってた」

「誰が？」

「昴くんが…。あのね、昴くんは光り輝く魂で、そこにいろんな観念が貼り付いて、性格が出来上がってるんだって。環境や親の考えや、もっと言うと過去生とかにも影響されてるらしい」

「過去生？はあ？まったくわけわかんない」

「だよね…」

「魂…？じゃ、俺の魂は次元が違っても…」

「まったく同じ魂なの！昴くんはどこにいたって、同じ魂なの。昴くんは昴くんなの」

「…ひかりも？」

「うん、私も。どこにいても、どの次元でも私は私」

「俺の好きなひかり？」

「ここにいる私は嫌い？まだ嫌い？」

「う……」

う…？私も、昴くんの心の声が聞こえるかもって思って、集中してみた。

『好きだなんて言ったら、こっちのひかりに悪い…』

「でもこっちもそっちも、あっちもどっちにいても、私は私だよ。私が好きってことは、結局こっちの次元の私のことも、好きってことだよ？」

「え？」

「あ、ごめん。心の声聞いちゃった」

「俺の？」

「うん…」

『やべ…。変なこと、考えられないじゃん』

「大丈夫だよ。どんなこと考えてても、それでも好きだから」

「え？」

「あれ？これ、高い次元の昴くんが、私に言ってたことか～～」

『どんな俺でも…？』

「うん」

『嫌ったりしない…？』

「うん」

『愛してるってこと？』

「うん！」

『拒否したりしない？』

「……。うん…」

うなづきながら涙が出た。昴くんが愛しくて、涙が出た。

「どんな昴くんでも、大好きだもん。愛してるもの…」

そう言うと、もっと涙が溢れた。どんどん心の奥から、昴くんが愛しいという感情が溢れ出てくる。

パア…。それが光になって、昴くんを包んだ。それから辺り1面に広がって、部屋の外へと広がっていくのが見えた。

『何？これ…』

昴くんが、その光を目で追ってるようだ。

「見えたの?!」

『この光のこと?』

「そう、光…」

「見えたけど、何これ…?」

「私から出た光なの」

「え?」

「昴くんがすごく愛しいって思うと、出るの…」

『すごく愛しい…?』

昴くんが、目を丸くした。

「うん!」

私は、昴くんに思い切り抱きついた。

「え?な、ちょ…」

昴くんは動揺していたけど、昴くんの心臓が早く鳴り出して、ドキドキしてるのが伝わってきた。

『抱きつくなよ!やばいじゃんか…』

昴くんの心の声も聞こえる。それでも、かまわず抱きしめていた。

『げ、限界…。理性ふっとぶ…。いや、駄目だ！俺…、耐えろ！』

そう昴くんは心で叫び、ぱっと私を突き放し、ベッドから立ち上がった。

「悪いけど、隣でもう寝れない…」

そう言うと、部屋を出て行こうとした。

「やだ！」

私は思わず、昴くんの腕を掴んでいた。

「え？」

「嫌だよ。昴くんといたいもの」

「でも、俺は…」

『あんたの次元の俺じゃない…』

「……」

私は何も言わずに、心でただ、昴くんが好きって何度も繰り返した。

「ああ…、もう！わかったよ。俺のことを好きなのはわかったから。でも、このままじゃ俺、やばいよ」

『ひかりを、俺のものにしたくなる…』

いいのに…。思わず、心でそう言うと、

「え?!」

って、昴くんは驚いていた。

『いいって…?ええ〜?でも…、ええ〜〜?』

心の中でも、昴くんは思い切り動揺していた。それから、首をぐるぐるって振ってから、

「あとで嫌だって言っても、遅いからな」

と言い放ち、私の両腕を掴んだ。そして、顔を近づけてキスをしようとした。次元の高い昴くんとは違い、ちょっと不器用な感じで口を近づけてきて、一回鼻と鼻がぶつかった。

『げ〜〜。緊張する〜〜〜』

昴くんの心の声だ。ああ…、次元の高い昴くんとは全然違う。なんだか、そんな昴くんも可愛いって思ってしまって、また私は抱きついてしまった。

『わあ〜〜〜〜〜〜〜!!!』

抱きつかれたまま、昴くんは固まっていた。次の動作にどう移ったらいいんだ。そんなことを考え、そのうちに頭の中をいろんな思考がぐるぐる駆け巡り出し、そのうちに真っ白になったようだ。

ふ…。次の瞬間、あったかい光が昴くんから出た。

『り…』

昴くんからとっても、小さな声が聞こえた。

『あ…』

あ？

『い…てるよ…』

あいてるよ？

『あ…い…し…』

え？

『てるよ…』

あいしてるよ…？

そして昴くんが、ものすごく優しくキスをしてきた。あまりにも気持ちが良くて、私の魂はふわって抜けた。ものすごい光と混ざり合い、開放感を味わいそのまま上昇していく。

あ、昴くんと同化してる…。そのまましばらく、その光に包まれ、気持ちのよさを味わってから体に戻った。

体に戻ると、昴くんは泣いていた。

「今の…何？」

「幽体離脱して、同化しちゃった」

「同化…？ひかりと？」

「そう…」

「すげえ、気持ちよかった…」

「うん」

「それに、あったかかった…」

「うん」

「やべ…。涙、止まんない…」

昴くんの涙を手で拭って、私はまた昴くんにキスをした。優しく、昴くんの悲しみも孤独も涙も全部、包み込むように…。昴くんは、そのまま泣いていた。そして、

『ひかり、なんでそんなに優しいんだよ？』

って、心で言っていた。それから、私の上に覆いかぶさって、昴くんの方からキスをしてきた。そして心でつぶやいた。

『俺、ひかりの事、抱くよ？いい？』

優しい声だった。

『うん、いいよ』

私は、心の中でそう答えた。もう、幽体離脱しないよう、しっかりと魂を体に結び付けておいた。

気が抜けると魂が飛び出るので、心の中でずっと昴くんが好きって私はつぶやいて、昴くんの顔も見て、そしてぬくもりもちゃんと感じるようにしていた。

昴くんは優しかった。次元の高い昴くんと同じように…。昴くんのぬくもりも、キスもエネルギーも、全部が優しくてあったかかった。

昴くんは、心の中で時々つぶやいていた。

『俺、愛されてるんだ』

『俺、一人じゃないんだ』

そのたびに、私も心の中で答えていた。

『うん。愛してるよ』

『うん。私がいつも一緒にいるよ』

そう言って、私はまた昴くんを抱きしめた。

『だって、私は昴くんだもん』

『だって、宇宙は一つだもの…。昴くんは、孤独じゃない。寂しさなんて感じなくても大丈夫なんだよ』

『うん…』

昴くんは、また、涙を流した。

昴くんの全部が愛しかった。自分でも驚くぐらい、心の奥からこんこんと、愛してるって感情が沸く。

私の中から、ものすごい光が出る…。昴くんの中からも、どんどん溢れ出ていた。それが混ざり合い、一つになり、宇宙へと放射される…。その光とともに私たちの魂も同化し、そして次の瞬間宇宙船にいた。

横を向くと、光の人型の昴くんがいた。こっちを見て、優しい光を出していた。

「ひかり…」

「昴くん…」

名前を呼ぶだけで、何もかもが通じ合ったような気がした。この昴くんは、高い次元の昴くんでもあり、低い次元の昴くんでもあり、そしてプレアデス人の昴くんでもあった。

それは私もだ。この瞬間に、この場所に、どんな次元の私もいて、どんな次元の昴くんもいる…。それを感じ取れた。

スクリーンには、地球が映し出された。

「あの美しい地球を、破壊させないよう守ろう…」

昴くんが、そう言った。

「うん。それが、ミッションだね？」

「ひかり…」

「うん？」

「どんな俺も、愛してくれてありがとう」

「昴くんだって、どんな私も愛してくれてる…」

「うん」

「どんな昴くんも愛してるってことは、どんな私のことも、愛してるってことだよね？」

「うん。ひかりは俺だから…」

「じゃあ、どんな人も、どんな地球も、どんな存在も、愛するってことだよね？」

「うん。どんな存在も俺だし、ひかりだから」

「みんなは、一つなんだもんね」

「うん」

私は昴くんと、しばらく美しい地球から来る、愛の波動を感じ取り、また体に戻っていった。

「うわ…。すげえ、人間の体って窮屈」

昴くんが、そう言って体をくねらせた。

「うん。私も、初めて幽体離脱して、戻った時は違和感があったよ」

「…そうなんだ」

「うん」

「あ…」

「え？」

「……」

昴くんは、私のことをじっと見た。それから、私の鼻をつまんで一言こう言った。

「嫉妬してても、どんなひかりも大好きだから、俺からもう、絶対逃げないでね」

「え？！」

「まじで…。生まれて初めての恐怖だった。頼むから、どっかいったりしないでね」

そう言って、昴くんはぎゅって私を抱きしめた。

「昴…くん？」

「ん？」

「昴くんなの？」

「え？」

「あの…昴くんなの？」

「…どの？」

「どのって…」

私は、昴くんの顔をのぞきこんだ。

「俺は俺。あの俺も、この俺もないよ」

「え？」

「ひかりは…、あれ？」

「え？」

「まだ、こっちの次元のひかりと、ちゃんと一つになれてないんだね？」

「わかるの？そんなこと…」

「うん。心の奥にひっそりといる。時々、そっちのひかりの意識を感じるけど…」

「じゃ、昴くんは？」

「こっちの昴もいるよ。わからない？」

「……」

心の声を聞いてみた。でも、

『ひかり、愛してるよ…』

って声しか、聞こえなかった。それから昴くんは、また私をぎゅって抱きしめてきて、

『やべ…。俺、またその気になりそうだ』

って心で言った。

「え？」

「あ、やべ…。今、心の声を聞いてた？」

「う…うん」

「あ…。今のは無し…。そんなに俺、その…、欲求不満じゃないし」

と、慌てていた。あれ…?これはどうも、低い次元の昴くんのようだ。あれれ…?もしや、二つの人格がいるのかな?

「う〜ん。っていうか、そのうち一つになるかな。今はまだ、ちょっと出たり入ったりしてるかも」

「え?」

「だから、高い次元にいた時の俺と、ここの次元の俺…」

「え?そうなの?」

「あ〜〜〜〜〜。なんか、いろんな記憶がいっきに流れ込んできた。わ〜〜。こっちの俺は、けっこうきつい幼少期だったんだ。あ、でももうほとんどが浄化されてる。ひかりのおかげだね」

「え?そうなの?わかるの?」

「うん。だって、一緒に感じて味わってくれたでしょ?」

「うん」

「サンキュー。俺、まじで嬉しかった。ひかり、俺の全部を愛してくれてたから」

「昴くんも感じてたの?」

「そりゃ、ずっとこの次元の俺の中にいたもん。感じるよ」

「でも、表面化してなかったよね?」

「ああ…。うん。なんかこの昴は頑固に、心閉じてたところもあったし…。けっこう窮屈だったな」

「え？」

「う〜〜〜ん…」

昴くんが頭に手をやって、難しい顔をしてから、

「うるせ〜んだよな。こいつ、けっこう本当は嫌なやつなんじゃね〜〜の？」

と言った。あ、これはこっちの次元の昴くんだな…。

ああ…。しばらくは、入れ替わりり立ち替わり、出てくるのかな？悟くんは、なんかあっさりと同化してたし、葉月ちゃんだって、そんなに入れ替わり立ち替わり出てなかったし。

「それはわかんないよ。葉月ちゃんの、一つの面しか見てないからかもしれないから」

昴くんは、私の心の声を聞いてそう話し出した。

「俺だって、二つの人格があるわけじゃなくて、いろんな面の俺が今、出てるだけだ。落ち着いたら、それもそんなに激しく出たりしないと思うけど…」

「落ち着く？」

「次元というか、波動がね…。一つに混ざり合って落ち着くと、きっとそれにふさわしい俺が、表面化すると思うよ」

「……」

ちょっと、わけがわからない…。

「だから、高いとか、低いとかじゃなく、その中間だったり…。だからもしかすると、今までひかりが知ってた俺とも、また違う感じになるかもしれない」

何それ？わくわく。

「なんで、面白がってんの？」

「え？」

「今、わくわくしなかった？」

「あ、うん。だって、また別の昴くんを見れるのかって思って…」

「変なやつ！」

あ…。これは、低い方？

「あ、外明るくなってきちゃった。もう、夜が明けちゃうね」

「うん」

「朝日見ない？昇ってくるところ。あれ、見てるだけでも浄化にな

るんだよ」

「そうなの?!」

「うん」

私と昴くんは、ベランダに出た。

「ひんやりしてるね。寒くない?」

昴くんが、私の肩を抱いた。その瞬間、光で包んでくれたのがわかった。

「あったかいよ…」

昴くんの肩にもたれかかった。久しぶりの、あったかいエネルギーだ。ほわほわ…。心の奥まで、あったまる。

「ひかり…」

「うん?」

「愛してるよ」

「昴くん、ずっとそればかり言ってる」

「だって、本当に愛してるんだもん」

「私も、昴くんの全部、愛してるよ」

「うん」

昴くんと朝日に照らされながら、キスをした。そして、またぎゅうって抱きしめあった。

ミッション4　恐怖を感じる

私は早々と、昴くんの家を出て自分の家に戻った。母はもう起きていた。

「また、薫さんちに泊まってたの？こんな朝早くに帰ってきたら、ご近所の人がなんて言うか」

「え？」

「離婚して出もどりの娘さん、朝帰り？って、言われるに決まってる。恥ずかしい…」

私は、ものすごくその言葉を聞いて悲しくなった。でも、母からは、やっぱり光のほうが出てるのが見えて、

「これからは、気をつけるよ」

と言って部屋に行った。母は、少し驚いているようだった。でも妙なことに私の心の底で、今の自分の行動を否定してる自分がいて、ものすごい違和感を覚えた。

あ…。これ、こっちの次元の私の感覚かも…。

それから着替えをして化粧をしなおし、ご飯を食べて家を出た。

バイト先に行くと、また更衣室で何人かの人がこっちを見て、ひそひそと話していた。嫌な感じだ。そこへ、葉月ちゃんが入ってきた。

「おはようございます」

明るい声だった。そして、レジへと向かう途中、

「こっちの葉月の記憶、思い出したんですけど、こっちでも昴くんと星野さん、週刊誌に載っちゃって、それでいろいろと噂されてるみたいですよ」

と、教えてくれた。

「そうなの？でも前の次元じゃ、とっくにみんなそんな噂しなくなってて…」

「ちょっと時期がずれてたり、起きてることが違うようです」

「そっかあ…」

そんなのまあ、別にいいんだけどね…と思った次の瞬間、また嫌だ…、嫌われたくない…という感情がこみ上げてきた。ああ、これも、ここの次元の私だな…。

その日の昼の休憩中に、昴くんが話しかけてきた。

『今度の週末のことで、悟さんがまた話をしたいって。会える？』

『うん、バイト終わってから会えるけど。でも、悟くんも、昴くんも忙しいでしょ？』

『それが、そうでもないんだよね。ちょっとそのへんも違うみたいだ。あっちの次元よりも仕事が少ない…っていうか、こっちの俺、

かなりのわがままで仕事選んでるみたい』

『え？』

『だから、スケジュールが、びっしりじゃないんだ』

『そうなんだ』

『ま、そういうことだよ、ひかり。じゃ、7時頃俺んち来いよな』

『え？うん…』

なんか調子狂うな。ときどき、こっちの次元の昴くんのエネルギーになるみたいだ。どっちの昴くんも、大好きだけどさ…。

その夜、また葉月ちゃんと昴くんの家に行った。行く途中の電車で、葉月ちゃんが聞いてきた。

「高い次元の昴くんが、目覚めたんですか？」

「うん」

「良かったですね～～。もう、こっちの次元の昴くんには、私がっくりきてましたよ～～」

「でも、その昴くんも、昴くんには変わりないから…」

「そうですけど…。でも、高い波動の昴くんのほうが、私は、一緒にいて安心できます」

「え？」

「波動が高い方が、来るエネルギーが違うじゃないですか…。よりあったかくって、優しくって、安心できる波動ですよ。悟くんも高い波動で、ちゃんと光を送ってくれるから、いつでも安心していられます」

「そっか。そうだよね…」

でも、私はどんな昴くんでも、昴くんといられたらそれで幸せだけどな～～。

マンションに着き、３０６を押すと、

「開けるよ」

て、昴くんの声がした。エントランスを通り、部屋の前まで行くと、

「いらっしゃい」

と、いきなりドアが開いた。ああ、来たのを感じてくれたんだ。

「昴…くん？」

ちょっと、葉月ちゃんが昴くんに警戒した。

「ごめん。なんか、とんでもないこと俺してたよね…」

昴くんは、申し訳ないって顔で謝っていた。

「もう、低い方は出てこないよね？」

「いや、どうかな…。でも、もう混ざり合ってる気もするけど」

「え？じゃ、昨日みたいなこと…」

「しない、しない！」

昴くんはそう言って、私と葉月ちゃんを部屋に通した。

部屋はけっこう、奇麗に掃除してあった。

「今日は、中華ね」

「え？」

「マーボーナスにバンバンジー、それと野菜炒め」

「昴くんが、作ったの？」

葉月ちゃんが、驚いていた。

「うん。あ、ひかり手伝って」

「うん」

キッチンに行くと、いい匂いがしてきた。

「これお皿にのせて。それから、ごめん、ご飯もよそってくれる？」

「うん、わかった」

二人で夕飯の支度を終わらせ、部屋に持って行くと、部屋で悟くんと葉月ちゃんが、笑いながら話をしていた。へえ…、なんか、こんな仲がいいところを見たのは初めてだな。

「わ～～。いい匂い、美味しそう！」

葉月ちゃんが喜んだ。

「じゃ、乾杯ってことで。ウーロン茶だけど」

「うん、かんぱ～～い！」

乾杯をしてから、葉月ちゃんが、

「何に乾杯だったの？」

と聞いた。

「みんなが目覚めたことに…だろ？」

悟くんがそう言った。

「ただ、まだここの次元のひかりが、眠ったままでいるけど…」

昴くんが、少し寂しそうにそう言った。

「どうしたんだろうね？ひかりさんは何か感じる？」

悟くんも気になる様子で、私に聞いてきた。

「時々恐怖や、不安を漠然と…」

「そっか…」

悟くんは、ちょっと何かを考えてるようだった。

「そうとうな闇のエネルギー、持ってるみたいだ。それに、引きずられないようにしないと」

「私？」

「うん。ひかりさんもだけど、昴も…」

「俺？」

「ああ、うん。だって、お前はひかりさんだろ？」

「そっか。そうだよね…」

「昴、ちゃんと気をつけてるか？今にいるようにしてるか？」

「今…？」

「そうだよ。今この瞬間だけが、宇宙とつながる。高い、宇宙と同じエネルギーで俺らはいられるんだ。そうしたら、そうそう闇にのっとられることはない」

「あ、そうだった。なんか忘れてた」

「低い波動の世界にいるから、そういうのも忘れっぽくなってるかもしれないけど、こっちの波動にやられるなよ」

「どういうことなの？悟くん」

私は、なんの話をしてるのかわからず聞いてみた。

「低い波動の中にいると、恐怖や闇に飲み込まれる可能性もあるんだ。うっかりすると、そっちのエネルギーに飲まれて、光を忘れることもある。そうすると例えばね、地球は破滅するぞ…なんて、根も葉もないこと言われても怖くって、信じちゃうかもしれないんだ」

「え？」

「本来のリアルな現実を、見れなくなる。幻想の世界で生きるようになる」

「幻想？」

「マトリックス。本来の俺らは、何？」

悟くんが、私に聞いてきた。

「光…」

「うん、そう。でもそれをすっかり忘れて、幻想の方が現実だと思い込む」

「……」

「波動が低いから、仕方ないといえば仕方ない。それだけ本来の自分、神であり、宇宙であるという自分から遠いところに位置してるからね」

「あ、そっか…。でも今ここなら、そういう次元とか関係ないんだ。今ここは、宇宙とつながってるところだから」

昴くんは、何かを思い出したかのようにそう言った。

「そうそう。だから、今にいろよって注意したんだよ」

「うん。わかった」

「それと、なるべく高い波動のお前でいろよ?」

「え?どういうこと?高いも何も、この次元の俺と同化して混ざってるけど?」

「どんな波動で?」

「どんなって、この次元にふさわしい波動で」

「それじゃ、外側に支配されてるってこと?」

「え?どういうこと?」

「外側が低い波動だから、自分をそれに合わせてるんだろ?でも、それ逆だろ?自分の波動をあげて、創る現実もあげていくのが、俺らのミッションだ。それがアセンションだろ?波動あげてくのがミ

ッションなのに、下げてどうするんだよ？」

「ごめんなさい。私が派動を下げて、この次元に来たから」

「ああ、違う、ひかりさん。この次元に来たのにも意味がある。これも、ミッションの一つだ。それも、かなり重要な…。だからそれはいいんだ。ただね、この次元でも、俺らは高い波動でいないと、こっちの次元に囚われる危険性があるし、この世界の次元をあげるのも役目だから、俺らが波動をあげてないと、意味がないんだ。わかる？」

「うん…」

でも、そうしたら、こっちにいる次元の昴くんは消えちゃうの？

いきなり、悲しくなって私はうつむいた。

「悟さん、じゃ、こっちの波動の俺は消えるの？」

昴くんは私の思いを知り、悟くんに聞いてくれた。

「いや、消えるんじゃない。派動をあげるだけだ。」

「え？」

私が不思議そうな顔をしたのか、悟くんが私に聞いてきた。

「もしかしてひかりさん、こっちの次元の昴が消えたら、寂しいとか思った？」

「ええ?!なんで~~?あんな昴くん」

葉月ちゃんが、ちょっと顔をしかめてそう言うと、

「悪かったな。あんな昴で」

と、昴くんが言った。葉月ちゃんは、びくってして悟くんの影に隠れた。

「まあまあ…。今の低い方の昴だね?」

「低いも何も、俺は俺だよ」

昴くんがそう言うと、

「そもそも、昴って光なんだ。そこも忘れてる?」

と昴くんに聞いた。

「え?いや…」

「環境や親の考えや、世間の考えなんかで、性格が作られた。ものの考え方、行動、言動、そういったものは、本来のお前じゃなくて…」

「幻想、創られた俺、思い込みに過ぎない…だろ?」

「そういうことだ。ここの波動で、創られた幻想のお前でしかない。お前の中にある、孤独感、悲しみ、エゴ、そういったものを浄化させていくと波動はあがるよね?」

「うん」

「ここの次元の昴が波動が上れば、高い次元にいる昴になる。ただ、それだけだ。わかる？ひかりさん」

「うん。なんとなく…」

「消えるわけじゃないんだ。だって、もともと人格だってないんだから。うまくたとえられないけど、そうだな…。幼稚園の昴が、小学生になるようなもんだ」

「ひでえ、俺幼稚園児？せめて、高校生が大学生になるくらいに言ってくれない？」

「……」

悟くんは、少し呆れたって顔をして昴くんを見た。どうやら、また低い次元の昴くんが表面に出たようだ。

「幼稚園児はさ、自分さえよければいいとか思ってるだろ？相手の痛みを知るとか、そういうことをまだわからなかったり、やっぱり行動も幼いだろ？」

「俺がそうだって、言いたいわけ？」

「でも小学生になると、相手の気持ちをいたわったり、自分さえ良ければいいって考え方から、他とのつながりも考えて行動できるように、なったりするだろ？」

「だから、何が言いたいわけ？」

昴くんは、少しむっとしていた。

「すべては一つなんだ。相手は自分なんだ。それに気づいていたら、相手を傷つけたり、ののしったり、自分さえよかったらいいって考えもしないし、競争もないし、孤独感もなくなる。次元の高い昴は、けっこうそういうのわかってて、だから自然と相手を思いやり、光で包むことが出来てたんだ。それが、ミッションだし、ミッションを遂行できてたんだよ。でもお前は？」

「俺？」

「ミッションすら、思い出せなかったお前は？」

「…俺はなんだよ。役に立たないって言いたいのか？」

「そうじゃなくて…。もっと、大人になれってこと」

「え？」

「まあ、人間ぽく言うならね。でも、魂のレベルで言えば、神様に近いお前でいろってこと」

「……」

「人間してるんだから、人間の体験をするのは重要。でもミッションも大切。ミッション、遂行させよう。昴」

「……」

昴くんは、なぜだか黙っていた。

「それに、昴。お前、低い波動でいても、お前の大事なひかりさんを守れないよ」

「え？」

「ひかりさんの中には、まだ、闇の部分がだいぶ残ってる。それ、こっちの低い波動のエネルギーとリンクしやすい。それに引きずられないようにするには、お前が光を送ることが大事になるんだ。低い波動のお前だと、それはできないよ。へたすりゃ一緒に闇に食われる」

「……。ひかりを守る？」

「そう。大事なお前の役目だろ？思い出した？」

「うん…。そっか…。そうだよね」

昴くんの顔つきが変わった。

「でも悟さん、俺はひかりだから、ひかりの中に闇があると、俺もそっちのエネルギーと同化しやすいみたいだ。それで低い波動の俺が、表面化しやすいのかも…」

「だから、今にいろって言ってるんだよ」

「そっか。わかった」

「ひかりさんも、今にいるようにして」

悟くんは私の方を向いて、そう付け加えた。

「うん。わかった」

私がうなづくと、隣にいた昴くんは優しい表情になり、私に向かって光を送ってきた。そして、心の中で、

『ひかり。今にいようね、いつも…。それから…』

『うん、何?』

『もうどんなひかりでも、自分を許すんだよ?裁いたりせず、俺に見られないように隠さなくてもいいんだ。ね?』

『うん』

『多分、多分だけど、そういう思いが、この次元のひかりとリンクして、この次元に引き寄せられたんだと思うから』

『うん』

そう心で言いながら、ずっと昴くんは、あったかい光を送ってくれていた。

「もう、大丈夫そうだな。昴…」

「え?」

「安定しただろ？低い方は、出てこなくなった」

「あ、うん…。ひかりを守るって気持ちでは、一致したみたい。それで低い方の俺も、一緒にひかりに愛を送ってるよ。なんかものすごい愛だ…。低い波動でも、変わらずひかりのことは愛してるみたいだから」

それを聞いて、私は真っ赤になってしまった。

「あれ？反応してる？」

「え？私？」

「うん。でも、こっちの次元のひかりだ。それ…」

「え？そう？」

「うん」

昴くんには、わかるのか…。

「低い波動の昴から、お前が目覚められたのってどうやったの？」

悟くんが聞いてきた。

「ひかりが低い波動の俺も、どんな俺も愛してくれたから…」

「そっか…。なるほどね」

悟くんは、静かに微笑んだ。

「じゃ、俺もこの次元のひかりを愛したら、この次元のひかりは目覚める？」

「う～～ん、そうだな～～。でもお前の場合、どう見ても、どの次元のひかりさんも愛してそうだから」

「うん。愛してるよ」

「多分、ひかりさんの中の何か、闇を癒して浄化しないと、駄目なんじゃないかな…」

と、悟くんが言ったのを聞いて、私は思い出した。

「あ！こっちの次元の昴くんの、悲しいとか孤独とか、そういう感情を私も、一緒に感じて浄化したの。それからだよ？昴くんが目覚めたの」

「そっか…。感情の浄化が大事なんだ」

昴くんが、手をぽんとたたきそう言った。

「浄化か…。それにはその感情を、ひかりさんが感じたりしないとな…」

「昴くんは、夢の中でそれを感じてたの。それに私が同化して、一緒に感じたんだ」

「夢？じゃ、俺もひかりの夢の中で、感じたらいいのか…」

「夢で、ひかりさんが感じてたらね…。でも、それすら嫌がってたら？」

「どういうこと？」

「頑丈に感情にかぎかけて、しまいこんでたら、夢でも感じないよ。多分ね」

悟くんが、冷静にそう言った。

「じゃ、どうしたら？」

昴くんは、少しお手あげだって感じでそう言った。

「そう、先を焦るなよ。忘れたか？今に生きる…。あとは…」

「宇宙に任せる…」

「そうだ。あれこれ考えても答えは出ないさ」

「わかった」

昴くんは、静かにうなづいた。それを見てから、悟くんはみんなに向かって、

「じゃ、この話はもうおしまい。週末のこと決めよう。何時にどこで会うかとかさ」

と言った。

「うん」

それから私たちは、土曜の夜7時過ぎに、新宿の本屋のビルの地下で会う約束をして、悟くんと葉月ちゃんは、帰っていった。

「今夜も、泊まれるの？」

昴くんが、聞いてきた。

「今朝帰ったら、お母さんに怒られちゃった。だから今日は帰るよ」

「そう。なんだ…」

昴くんは、ちょっと寂しそうだった。

「夢で会おうよ。ね？」

「うん。わかった。じゃ駅まで送ってくよ」

昴くんと駅まで歩いていくと、途中でよっぱらいが喧嘩をしていた。駅に着くといきなり恋人どおしが喧嘩してて、女性が泣きながら走って行ってしまった。切符を買ってると、横にいたよっぱらいが私に絡んできた。

怖い！一瞬、恐怖に身を震わせると、昴くんがすっと横に来て、

『大丈夫だよ』

と、心で声をかけてきた。

それから、昴くんも切符を買いホームまで来てくれた。

「なんかこの次元で起きることは、前いた次元と違うね」

と昴くんは、ベンチに座りながらそう言った。

「うん…。なんか怖いよ…」

「こういうのに巻き込まれて、一緒に恐怖を感じないようにしろって、悟さんは言ってたんだろうな」

「うん」

「家まで大丈夫？」

「うん。大丈夫」

電車が来て、私だけが乗った。昴くんは、ホームでずっと手をふってくれた。昴くんからは光がずっと飛び出してて、私を包んでくれていた。

私も、いつでも愛を感じていよう。そして、今に生きていよう。そう思いながら、家に帰った。

家に帰ると、リビングで母がテレビを観ていた。

「ただいま」

私が帰るとかなり、血相を変えて、

「あんた！薫さんちに泊まってたんじゃないの？」

と叫んだ。

「え？何が？」

「テレビよ。夕方のニュースでやってたわよ」

「何を？」

「あんたが、天宮昴のマンションのベランダで、天宮昴と抱き合ってるの…」

「え？！！？！」

「今朝のよ。朝早くから、彼女と抱き合ってる天宮昴って写真が写ってて…」

あちゃ～～。撮られていたか。

「あんたでしょ？どういうつもりなの？」

「ごめん。昴くんのところに泊まってた」

「……」

母はわなわな震えていたが、何も言えないようだった。

「はあ。まいったな…。また、バイト先でいろいろと言われちゃうかな～」

「何のんきなこと言ってるの?家にだって電話かかってきたり、お母さんだって、町歩いてたらこそこそ言われたりするのよ」

「そうなの?」

「あ、あんただって、バイト、クビになるかもってこの前言ってたじゃない」

「え?本当に?私が?」

こっちの次元じゃ、そんな大騒ぎになっちゃうのか。

「なんだって、こんなことするの?あんたは…」

「昴くんって、うちに来たことある?」

「ないわよ!あるわけないでしょ。来たって家に入れさせないわよ」

「え?そうなの?!」

「当たり前でしょ。ご近所の人が見たら、どうするか…」

え〜〜〜〜?ここまで、違うの?前の次元の母は、喜んでたよ。奇麗な顔だとか言って…。父も兄も、賛成してくれたのに。何、この違いは…。

「とにかく、これ以上変なことしないで!」

「わ…、わかったよ」

私はそう言うと、階段を登り部屋に行く途中で母を見た。黒いもやもやが出たり、光が出たり、忙しそうだった。

ごめんね、心配かけてるんだよね…。そう思ったが、また心の奥底から、暗い重い感覚が噴出してくる。ああ、こっちの次元の私、母の言葉で傷ついているのか…。

もっと、もっと、感情を出してしまった方が、楽になるかもしれないのに…。少しの黒い霧が出たかと思ったら、すぐさまぱって消えてしまった。どうして、心の奥底に隠れたまま、出てこようとしないのだろう。

お風呂に入ると、昴くんから声が聞こえた。

『ひかり?聞こえる?』

『うん。聞こえるよ』

『あのさ、今朝の俺たちのこと写真に撮られてて、夕方の番組で、話題もちきりになってたみたいなの知ってた?』

『今、お母さんから聞いた』

『お母さん、どうした?』

『すごい怒ってた。こっちでは、昴くんのことよく思ってないみたい』

『実は、事務所でも…。マネージャーからずっと、連絡がはいって

たのを、俺、携帯の電源オフにしてて、今さっきつながって…。もう、カンカン…』

『なんか、前の次元と違ってるよね』

『うん。でもまあ、こっちの次元の俺はもともと、わがままなやつみたいだから、マネージャーもしょうがないって言ってたけどさ…。ただね』

『ただ？』

『うん。俺が１０歳も年上の女性を、もて遊んでるとかなんとかって…』

『へ？』

『俺の、評判ってどうなのよって…。こっちの昴くん、なんか今までに変なことしたことあるのかなって思ってさ、記憶たどっても、なんもないんだよね』

『そう思われてるだけじゃないの？』

『だろうな。なんてったって、もて遊ぶことができるような、やつじゃないみたいだし』

『そうなの？』

『うん。付き合ってた女性も、いないみたい』

『ふうん』

『ああ、そうそう。そういうこと』

『え？何？私何か、思ってた？』

『うん。じゃ、私が初体験の相手だったのねって…』

『……』

私、そんなこと思ってたの…？

『そうみたい』

あれ？じゃ、高い次元の昴くんは…。は！またこれも読まれちゃう。

今のなしなし！

『ぷ…』

『あ、聞いてた？』

『うん。面白いよね、ひかりは…』

『だ、だって…』

『俺は…』

俺は？ってことは、違うのか…。

『あ、間違い。俺も…』

『え?!』

『い、いいじゃん。だって俺、まだ19だよ。それも女の子といちゃついてる時間も、そうそうなかったんだよ?ずっと、この業界で恋愛だって数少なくてさ』

『わ、わかったよ』

『なんだよ~~。いじめんなよ~~』

『いじめてないよ』

『冗談だよ』

『もう。それより!私、バイトクビになるかもって…』

『え?』

『この次元の私が、心配してたみたい。』

『ああ、そうなんだ。でも、大丈夫じゃない?今のひかりが心配してなかったら、そんな現実創らないだろうし。もし、そうなったら、そうなったときだよ。だってほら…』

『うん?』

『全部、必要で起きるだけだから』

『そうだよね。うん、心配しないよ』

『うん。それじゃ、今風呂でしょ？のぼせたら大変だから、もう交信切るよ』

『うん。おやすみなさい』

『おやすみ』

嬉しいな…。またこうやって、心で会話が出来る。メールや電話でのやりとりじゃなくって…。

『俺も嬉しいよ。ひかり、愛してるよ！』

昴くんから、また声がした。それから、あったかいエネルギーを送ってくれた。ほわ…。何か心の奥から感じた。ときめきと喜びとが、心の奥底から湧き上がってくる。

この次元のひかりも、昴くんからの光を感じているんじゃないだろうか…。それで、喜んでいるのかもしれないな～。

翌日は遅番だったから、しばらく家でのんびりとしていた。８時過ぎに一階におりていくと母が、電話で何か話しこんでいた。

「あ、今起きてきた…」

母は、受話器を私に渡した。

「誰から？」

受け取りながら聞くと、

「徹郎さん」

と母が答えた。こっちの次元では、これから会うことになっているのか、それとも、もう会っているのか。

バシ！

いきなり受話器をほおり投げ、私は階段を駆け上っていた。

あ、あれ…？自分の部屋に入ってから、自分の行動に私は驚いた。

母が、2階にあがってきて、

「あんた、何をしてるの？徹郎さんに失礼でしょ？」

と、ドアをたたきながらそう言った。私は部屋のドアを開けられないようカギをかけ、ベッドの布団の中に潜り込んだ。そして耳をふさいだ。

「聞いてるの？ひかり！せっかくかけてくれたのに…。この前もあんた、電話かけなおさなかったんでしょ？」

「ほっといて！！」

え？私？何で、勝手にしゃべってるの？

「もう、ほっといて！徹郎には絶対に、会いたくない」

私はそう言うと、そのまま声を殺して泣き出した。体はわなわなと震え、喉が痛くなる。苦しくて、苦しくて、どうしようもなくなる。

何？これ…。こっちの次元の私が、表面に出たの？

すう…。あれ…？私…？なんだか、意識がぼんやりとする。どんどん暗く重苦しくなる。窮屈で頭も痛くなる。何？これ…。

次の瞬間、体の中から昴くんの声がしたのに、

『ひかり。ひかり？』

って呼んでいるのに、答えようとしても答えられない。なんで…？

「何？何これ。変な声がする…」

って、私が言ってる。

『ひかり？俺だよ。昴だよ？』

『昴くん？』

『そうだよ。昴だよ？どうした？なんか、冷たいエネルギー感じたから。何かあった？』

『なんで、声がするの？』

『え？何言ってんだよ？』

『怖い！なんで？』

『ひかり？』

それから、どうやらこの次元の私が心を遮断して、昴くんの声を聞こえなくしたようだ。

ああ。私は、この次元の私の意識の表面には、出られないのかな…。

昴くん、私はここだよ…。聞こえない？昴くん。

もしかして昴くんも、こっちの次元に来たときこんなだったの？表面には次元の低い昴くんがいて、奥の方にずっといたの？

この次元の私のエネルギーは、本当に低く、心の中は暗闇が広がっていた。その中にぼんやりと、過去の記憶があった。それが、どんどんよみがえり、一緒に私は苦しみを感じていた。

走馬灯のように、ぐるぐると徹郎との記憶がよみがえった。

驚いた。この次元では、徹郎はお酒を飲むといきなり怒ったり、ものを壊したりしていた。子供が死んだのはお前のせいだと、私は思い切り怒鳴られてもいた。

これじゃ、怖いはずだ。怯えてしまうはずだ。

離婚して戻ってからの記憶は、父と兄がしょっちゅう喧嘩をしている記憶だ。その横で母が泣き、私は部屋で怯えていた。

そんな頃に、薫が時々外に連れ出してくれた。ああ、そこは同じなんだ。

そして、緒方さんに会った。だけど何回か食事をしたきり、会わな

くなっていた。

それから美里に誘われ、舞台を観に行き昴くんに会った。

美里とステージの前で写真を撮っていると、たまたま昴くんが袖裏に来て、誰かスタッフの人と話をしていて、それを美里が見つけて、

「昴くんだ！」

と叫んだのだ。昴くんが会場の方に来て、ぶっきらぼうに、

「ああ。どうも…」

と頭を下げた。美里は大喜びで、握手をしてくださいとねだったけど、

「そういうの、できないから」

と昴くんは、断っていた。私はその横で、すごく奇麗な顔立ちの昴くんに見とれていた。

「……」

昴くんも、黙ってこっちを見た。それから、

「あんた、なんて名前？」

と、聞いてきた。

「私？星野ひかり」

「どっかで会った？」

「え？ううん」

「そっか…。でも、見覚えある顔なんだけどな…」

「え？」

「ああ。そうだ。携帯持ってる？」

「うん」

携帯を出すと、昴くんにその携帯を取られ、勝手に自分の携帯と赤外線通信をしてしまった。

「今度、電話する。それじゃ」

「え？！」

私も美里もただただ驚いて、その場でしばらく呆然としてしまった。

なんで？私？

帰り道、美里は隣で興奮していたが、私は何がなんだかわからず、頭を真っ白にしたまま家に帰った。

そしてその夜遅くに、本当に昴くんから電話があり、突然、

「俺と付き合ってよ」

と言われたのだ。

…どうして、いきなり、私と？

…からかってるの？

…ふざけてるの？

…私、どうしたらいいんだろうか。

…もしかして、こうやって、何人もの人と付き合ってるの？

…そうだ。私に本気で付き合ってって、言うわけがない。

そんなことを、私は一瞬のうちに思っていて、

「からかわないで。もう切るよ」

って、私は昴くんに言っていた。

「からかってないよ」

「じゃ、なんで？」

「付き合ってるやつがいるの？」

「私？」

「そう」

「いないけど、でも私あなたよりも、１０歳も年上よ」

「それが？」

「それがって…」

「そんなのまったく、関係ねえよ。とにかくさ、明日昼の部だけだから、夜めしでも食おう」

「え？！」

「7時、赤坂の駅の改札」

「え？ま、待ってよ。そんなところじゃ目立ちすぎない？」

「別にいいさ。とにかく明日。じゃ」

昴くんはそう言うと、さっさと電話を切ってしまった。うわ…。ものすごい強引さ。

私はどうやら、記憶の再生を見ているようだった。

でも見てるだけでなく、体験も一緒にしている。バーチャルシアター、まさにそんな感じだ。感覚、感情、なぜかその時の匂いだったり、感触までである。

その次の日の夜7時の記憶が、よみがえった。

昴くんが、待ち合わせの場所にやってきた。現れたのは、真っ黒ず

くめの昴くんだった。

「こっち…」

来たと思ったら、いきなり手を引き歩き出した。行った先は、あそこだ。美里と行った、ビリヤードのあるお店だ。

「何か酒でも飲む？」

「ううん。飲まないよ」

昴くんは、ジュースとピザやパスタを頼んだ。

食事をしながら、昴くんは私に質問をあれこれしてきた。仕事は何をしてるのかとか、どこに住んでいるのかとか。そして、食べ終わると、

「ビリヤードしようよ」

と言って、立ち上がった。こっちの私もどうやら、ビリヤードは苦手らしい。ものすごく下手だった。昴くんは、

「そういうときは、こうやって持つんだよ。こう…」

と、私の手を持って教えてくれたり、真横に来て打ち方を教えてくれた。

これ、私の次元では変な男性がべたべた触ってきて、具合が悪くなったよな…。こっちの次元じゃ、昴くんなんだ…。

昴くんは手を触ったり、横にぴたりとくっついたりしたけど、私は特に嫌悪感もなく、それどころか内心、ときめいているようだった。

手、奇麗だな～。横顔も、奇麗だ…。なんか、いい匂いがする。石鹸？

そんなことを思いながら、ドキドキしながらビリヤードをしていた。

しばらくビリヤードを二人でしてから、その店を出た。

「なんか、コーヒーでも飲まない？」

昴くんに誘われてついていくと、あのカフェだった。そう、あっちの次元で写真に撮られちゃった、あのカフェだ。

昴くんと、二人でその店に入りコーヒーを飲んだ。昴くんは帽子もサングラスも外して、そこでのんびりとしていた。

「ふ～…」

と、コーヒーを飲むと、ため息もつく。

「疲れてるの？」

「ううん、なんで？」

「今、ため息」

「ああ。これはなんだろう？なんか、安心したって言うか、ほっとしたって言うか…」

「え？」

「あんた、不思議だね」

「え？私？」

「うん。あ、ひかりって呼んでもいいよね？」

「呼び捨て？」

「いいじゃん。ひかりって不思議だ。一緒にいるとほっとする」

「私が？」

「うん」

そうか。こっちの次元の私といると、ほっとしてたのか…。そりゃ、私と会って、冷たい感じがして嫌だって思うはずだわ…。

「私も…。男の人って苦手だけど、昴くんは大丈夫みたい…」

「え？」

「あ。１０歳も下だから、弟みたいな気がするのかな」

「弟？！なんだよ。それ」

わ…。思い切りすねた。

「ま、いいか…」

そう言うと、昴くんはぼりぼりって頭を掻いて、

「そろそろ出る?」

と言った。そして、駅まで送ってくれてそこで私たちは別れた。

記憶がまたとび、今度はいきなり母親の怒る声が聞こえた。うっすらと、母親の怒る顔も見えてきた。

「この週刊誌に写ってるの、あんたでしょ?」

見ると、カフェで昴くんと二人でいるところを、写されていた。ああ、こっちでも、あのカフェで写真、撮られちゃったんだ…。

「どういうこと?この人、俳優でしょ?」

「うん」

私は、母の声に縮みあがっていた。

「こんな人となんで、あんた付き合ってるの?」

「付き合ってるっていうか…。ご、ご飯食べて、お茶しただけ…」

「なんで、こんな人と?」

「何でって言われても…」

「もう、ご近所に恥ずかしいわ。離婚したと思ったら、こんな若い子と、それも芸能人と付き合ってるなんて…」

私は何も言わず、そのまま部屋へと逃げた。部屋に入るとカギを閉め、布団に潜り込んだ。どうやら、怒られる声が本当に怖いようだった。

そのあとも、次々に昴くんと会っている場面が映し出された。昴くんは、いつもぶっきらぼうだったけれど、特に私が嫌がるようなことともしなかったし、私はどんどん、昴くんに惹かれていってるのがわかった。

どこに惹かれたのかわからない。でも、きっとぶっきらぼうでありながら、いつでも素のままでいる昴くんに、惹かれたようだ。裏表がない。言いたいことは言う。

わがままではあるけれど、昴くんは、自分の言いたいことをストレートに言うので、その辺が私には、惹かれるところだったようだ。

私は、言いたいことが言えずにいた。昴くんがよく、

「ひかりは俺のこと、どう思ってるんだよ」

とか、

「俺は、ひかりのこと好きだよ。はじめっから、好きだよ」

って言う言葉に、戸惑っていた。

私も昴くんが、好きだ。でも言えない。恥ずかしさもあったけど、

怖さがある。何が怖いのか…。どうも、嫌われるのが何よりも怖いようだった。

また、失ったらどうしよう…。そんな思いがいつも、心の奥に広がっている。大切に思うと、失ってしまう。もう大切なものを失うのは嫌だ。

失うくらいなら、はじめから持たないようにしたらいい。そういう思いがいつもあって、昴くんになかなか、心を開けないでいた。

大切なもの。何より1番は、赤ちゃんだ。こっちの次元の私もやっぱり、赤ちゃんを大事に思い、生まれてくるのを心待ちにしていた記憶があった。

流産したときのショックは、こっちでも同じだ。悲しい、苦しい、そして自分を責めていた。殺してしまったのは、私だ…。そう、責めていた。

徹郎のことも、失ったのが辛かった。いくら乱暴までする夫だとは言え、はじめは優しかったし…。浮気もされ、離婚まで言い渡され、そのショックはこっちでも同じだ。こっちの私も、3ヶ月部屋に閉じこもっていた。

その間、両親はほったらかし。兄もほったらかし。たまに聞こえるのは、兄と父親の喧嘩の声。その声に震えながら、私はずっと布団の中にまるまっていたようだ。

私よりも、さらに、さらに、閉じこもっていたんだな。奥深く、闇の中に…。

うらみ、悲しみ、苦しみ、でもこっちの次元の私の1番大きな思いは、自分を裁く心だった。

どうやら、何度か自殺も考えていたようで、部屋には睡眠薬もあった。だがある日、なくなっていた。両親か、誰かが見つけてかたづけたのだろう。

精神も少しおかしかったようで、時々幻聴も聞こえていた。心の奥底で誰かが言うのだ。

「お前が殺した。赤ちゃんを殺した。そんなお前なんか、死んでしまえ」

怖かった。こっちの次元の私の記憶とはいえ、身震いした。こんな声、私は聞いたことがない。こんな声を聞いていたら、そりゃ、心の奥底から出られなくなってしまうかもしれない。

いったい、この声の主は誰?自分なのか…。自分を裁いている、自分の声なのか…。

『ひかり…』

よみがえる記憶が消えかけた頃、昴くんの声がした。

『昴くん?』

『あ、通じた…。良かった。ずっとひかりのエネルギー、遮断されてて、どうしたかと思った』

『うん。今までこっちの次元の私が、表面に出ちゃってたみたい』

『え？そうなの？』

『うん。でもまた心の奥底に、ひっこんじゃった』

『表面に出てたときには、どうしてたの？ひかりは…』

『私？私は、心でこっちの私の記憶を見ながら、一緒に恐怖を味わってたよ』

『恐怖…？』

『うん。幻聴も聞こえてた。怖かった。死んでしまえって誰かが言ってるんだ』

『そっか。今は？聞こえる？』

『ううん。それ、こっちの次元の私の記憶の中だけだから』

『そっか…』

『ね。今、その過去を振り返るから、昴くんも一緒に感じてくれる？』

『うん。いいよ』

私は、今見た過去の記憶を心の中で、再現した。そして、その怖さ悲しみ、苦しみも感じ取った。

『ああ…。かなりきついね、これ…』

『うん』

『でも、こっちの次元のひかりにとっても、昴は救いの魂だったんだ』

『え？』

『一緒にいることで、かなり癒されてたよ』

『うん…。そうかも』

『昴もね。無意識のうちに、二人とも癒しあってたんだ』

『うん…。ぶっきらぼうな昴くんだったけど、とてもほっとできた』

『うん。そうみたいだよね…』

『こっちの次元の昴くんの記憶も、昴くん、知ってるんでしょ？』

『うん。ひかりにまじで、ひと目惚れしてる。それに、一緒にいてすごく嬉しかったみたい。でも、独占欲が強かったし、ひかりがなかなか、自分の気持ちを言ってくれなくて、俺は相当いらだってたみたい。わざと、やきもちやかせてみたり…』

『でも、それ失いたくなくて、それでみたい…』

『ああ。うん。それもさっき、感じ取れたよ。絶望したんだね、こっちのひかりは』

『うん…。愛されることも、拒否しちゃったみたい…』

『うん…』

『癒されるかな～。そんなに重苦しいのに…。ふたして、カギまでしてる感情…。どうなのかな』

『癒されるさ。大丈夫。絶対に大丈夫』

『そ、そうだよね？』

『ひかり、俺がついてるから。低い次元の俺だって、ひかりのことものすごく大事に思ってるし』

『うん』

昴くんのあったかいエネルギーが流れ込み、あたたかいエネルギーに抱かれ安心して、私はバイトに出て行った。

バイト先ではやはり噂になっていて、主任に呼ばれ、

「悪いけど、あなた、お店の方に出るのはやめてくれる？」

と言われた。

「少しの間、事務の仕事して。わかった？」

「はい」

やっぱり、事務の仕事をすることになるんだな～。

そこにいたのはやっぱり斉藤さんで、やっぱりこの斉藤さんは小説を書いていて、でも私も書いているんだよと言っても、なんの反応も示さなかった。

ああ、こっちの次元の斉藤さんは、なんか違ってる…。

バイトが終わると、一人で帰ろうと私はビルを出た。そして目の前に徹郎の姿があり、思い切り驚いてしまった。

ぐるりと背を向け、逃げようとすると、

「待って、ひかり」

と腕を掴まれた。私の体が震えるのがわかる。ああ、ものすごく怖がってる…。

『昴くん、お願い。あったかいエネルギー送ってて…』

心で、そう話しかけるとすぐに昴くんが、

『うん。送るよ。それにもうすぐしたら、仕事も終わるから、すぐにひかりのところに行くよ』

と言ってくれた。

『うん』

昴くんは、なんとなく今の事態を把握したようだ。

「逃げないで、ひかり。話があるんだ」

徹郎が、腕を強く掴んだままそう言った。

落ち着け…。落ち着いて、ひかり。こっちの次元の私。大丈夫。昴くんだって、ついてるんだから。

私はどうにか、心を落ち着けるようにして、徹郎に、

「わかった。わかったから、手を離して」

と言った。どうも、手を掴まれてることがすでに恐怖らしい。

「ああ…」

徹郎は手を離した。そして私は徹郎と、近くのカフェに入ることにした。

ミッション5　最後の浄化

心の奥が、ぎゅうって締めつけられる感じがしていた。こっちの次元の私だ。徹郎を前にして、ものすごく怖がっている…。

「徹郎…。どうしたの？急に会いに来るなんて…」

私は、必死で震える手をおさえながら、徹郎に聞いた。

「ああ…。テレビ観てさ…」

徹郎は、少し話しにくそうにしていたが、話を続けた。

「天宮昴と付き合ってんの、ひかりだろ？」

「うん」

「大丈夫なのか？」

「え？」

「いや…、こんなこと言うのは、あれなんだけど…。遊ばれてるっていうか、あんなのと付き合ってても、ひかりにとって良くないだろうって…」

心の奥から怒りも飛び出す。う…落ち着け、私。

「それを言いに来たの？」

「気になったからさ」

「……」

この場から、今すぐ逃げ出したい。そんな気持ちが沸いてくる…。

「お前、あんなのと付き合って、幸せになれるとでも思ってるのか？」

あんなのって何よ。なんで昴くんのことを、そんなに悪く言うの。あなたの方が、よっぽどどうしようもない…。私が苦しんでたのは、あなたのせいよ…。

頭の中を、そんな考えがぐるぐるとめぐる。そして心の奥底から、また声が聞こえてきた。

『こいつは、敵だ』

え？

『お前を、傷つけにやってきた』

……？

『敵だ』

敵って何？

私の中に、『そうだ。敵だ。私を傷つける敵だ』と思っている私がいる。

ブルブル！その声も、考えも振り払い、

「徹郎は幸せなの？」

と、徹郎に聞いた。

「え？」

「赤ちゃん、生まれたんでしょう？女の子？」

「ああ…」

「名前は？」

「愛って名前だ」

一緒だ。向こうの次元と…。

「可愛い名前だね」

『可愛くない。そんな赤ちゃん、死んでしまえばいい』

え？

『私の赤ちゃんが、死んだように…』

ゾク…。ものすごい冷たいエネルギーが、奥底から突き上げてくる。

それが黒い霧となって、私から出てきた。

「徹郎！」

私はその黒い霧に包まれる前に、徹郎に言うべきことを言おうと思った。

なんとなくだが、こっちの次元の徹郎も、赤ちゃんへの罪悪感や、孤独や愛されたいという気持ちがあるんじゃないのかって、そんな気がしたからだ。

「あのね、もし死んじゃった赤ちゃんに罪悪を感じてるなら大丈夫だから」

「え？」

徹郎は驚いていた。

「徹郎のせいじゃないの。だから、徹郎は奥さんと愛ちゃんと幸せになることだけ、考えてたらいいの」

『何を言ってるの？徹郎なんて、不幸になればいいのよ』

う、うるさい。黙ってて！

私は心の奥から聞こえる声に、そう言ってから、

「赤ちゃんはね、また徹郎の子として生まれ変わってくるから。今度は男の子。だから、徹郎の跡継ぎとして生まれるから安心して。お母さんやお父さんも、そして奥さんも、みんなで幸せになれるから」

「な、なんで、跡継ぎのこと？」

「じゃ、そういうこと。私も昴くんがいて幸せなの。だから大丈夫なの。昴くんは本当に優しいし、大事にしてくれるの」

そう言って私は席を立ち、その場をさっさと離れた。

黒い霧があやうく、徹郎を飲み込む前に…。

『何が、幸せになれる…だ』

また、声がする。

『あいつは、敵だ』

敵じゃない。

『あいつはお前を、不幸にした張本人だ』

違う！

『あいつは…』

うるさい！あなた誰よ？！

『お前だ。お前自身だ…』

私…？

「ひかり！」

新宿駅までの道を歩いていると、目の前に昴くんが現れた。

「良かった、会えて…。わ。どうした？この霧…」

私の周りには、黒い霧が立ち込めていた。その霧を昴くんが、一瞬で消し去った。

「昴くん…」

「真っ青だね。どっかで休もう」

そう言うと、昴くんは私の肩を抱き、近くのカフェに連れて行ってくれた。

「あったかいもの、買ってくるよ」

昴くんはカフェオレを買って、自分のコーヒーと一緒にテーブルに持ってきた。

「はい」

「ありがとう」

「なんか変な声聞こえたけど、あれは何？」

「え？」

「さっき、ひかりのエネルギーが変だったから気になって…。集中してたら聞こえてきた」

「低い、怖い声？」

「そう。徹郎さんに会ってたの？」

「うん」

「それで、どうした？」

「体の奥から変な声が聞こえるし、黒い霧が体からどんどん出てくるから、急いで徹郎に言いたいことだけ言って、別れてきちゃった」

「徹郎さん、なんか言ってた？」

「昴くんはもて遊んでるだけだから、やめろって」

「ええ？！うそ」

「ほんと、言ってたよ」

「なんだよ、それ…」

「ふふ…。思い違いもいいとこだよね」

「…それで、ひかりものすごく怒ってたの？」

「う～～ん。怒ってたのは多分、こっちの次元のひかりじゃないかな…」

「敵だって言ってたのは、ひかりの声じゃなかったよね」

「うん。なんだろう、あの声…、怖かった。気味が悪い。幻聴？」

「いや、もしかすると…」

「え？」

「なんか、低い次元が交信して来てるのかも…」

「交信してる？私と昴くんみたいに？」

「交信っていうよりかは、一方的に話しかけてきてんのかもしれないけど」

「低い次元って？」

「低い次元のエネルギーだよ。何かはわからないけど…。あ、ほら。ノエルさんも、誰かとチャネリングしてたよね？プレアデス人だって言ってたけどさ。こっちの次元のノエルさんは、もっと低い次元の何かとチャネリングしてんのかもしれない」

「怖いエネルギーなの？」

「怖くないよ、別に…。ただ低いだけだ。きっとね」

「低い？」

「うん。こっちの次元のひかりの心にある、低いエネルギーとぴたりと波長があってるのかも。だから、つながっちゃうのかもしれない」

「ええ?じゃ、どうしたらいいの?」

「う〜〜ん。そうだな。ひかりが、そっちの波動に合わさないようにしてたら、大丈夫なのかな〜〜」

「私が?」

「う〜〜ん。ごめん、わかんない。あ、悟さんに聞いてみる?悟さん、確か今日はラジオの生番組あるから、有楽町に行くって言ってた」

「じゃ、これから?」

「うん。10時くらいに入るって言ってたっけ。ちょっと待って」

昴くんは、携帯で悟くんに連絡を取り、少しの時間会えるようにしてくれた。

「ちょっと、ラジオ始まる前に時間取れるって言うからさ、有楽町に移動しよう」

「うん」

それから、悟くんと昴くんと私の3人で会った。

「ごめん、いきなりで…。ちょっと悟さんに聞きたいことがあったから」

昴くんが、そう言って話を切り出した。

「なんかさ、こっちの次元のひかり、低いエネルギー体とつながっちゃってるみたいで…」

「つながる?」

「ノエルさんみたいな感じ」

「引き寄せちゃってるのか」

「うん。それってさ、どうやったら、そのエネルギーに引きずられないですむのかなって思って」

「そうだな…。ひかりさんが、高い次元から来たってことだけでも、けっこう守ってることになるかもな」

「私…?」

「うん。それと、昴も高い次元でいるから…。こっちの次元の昴じゃ、守りきれなかっただろうけど」

「そっか。あ、じゃ、俺らがこっちの次元にやってきたのは、すげえいいタイミングだった?もし来なかったらこっちのひかり、やばかったんじゃないの?」

「そうだね。かなりの闇の中にいて、相当低い次元のものを、引き寄せてたかもしれないから」

「私は?私も3ヶ月間、家に引きこもったけど…」

「昴が、ずっと光を送ってたんだろ？」

「ああ。うん…。宇宙船行って、いろんなこと思い出してからは、ずっとひかりにエネルギー送ってたよ」

「だから、大丈夫だったんだろうな」

「守ってくれてたんだ、昴くん。ありがとう…」

「うん…。あ、でも俺が目覚めるまでは、どうだったのかな？」

「え？」

「ちょうど、俺がひかりのすごい低いエネルギーに影響されて、夢でうなされたり苦しんだりしてた頃…。あの頃は、大丈夫だったのかな？」

「そうだなあ…」

悟くんも、少し考え込んだ。

「まあ、とにかくさ…、こっちの次元のひかりさんを守るためにも、お前は高い次元のお前でいないとな…」

「うん、わかってるよ」

「ひかりさんも光のほうを感じるようにして、闇を感じるようなことがあったら、すぐに光を出すことかな」

「うん…」

「じゃ、俺そろそろラジオの放送の準備しなくちゃ…」

「うん。サンキュ。悟さん」

「ありがとう。悟くん」

私と昴くんは悟くんと別れて、駅に向かって歩き出した。

「なんか…」

「え？」

「うん。なんかね…、ちょっとわからなくなっちゃって」

「何が？」

「うん…」

私はどう表現したらいいか悩んでいると、昴くんが私の心の声を聞いて、

「闇を感じた方が、いいと思ってるの？」

と聞いてきた。

「うん。だって、感じないと浄化できないでしょ？」

「そうだけど…。でも、ものすごい闇のエネルギーを出したらやばいかも…」

「え？」

「ひかり、それでこっちの次元、来ちゃったじゃん」

「うん」

「あ、でもそっか…。そのとき俺が横で光を送ってたら、事態は変わってたかな」

「え？」

「俺、あのときひかりの心の方を見てなくて、霧が出たことも感づけなかったから」

「……」

そうだった。昴くんは、金髪の女性のことばかり考えてて、私から出た黒い霧も見えなかったんだ。

「ごめんね。気持ちがどっか行ってたね。あのとき「今」にいなかった。「今」にいないと、ひかりから出るエネルギーにも気づけないんだな」

昴くんのエネルギーも、感じられなかったっけ…。

「俺が今にいないと、俺のエネルギーもどっか行っちゃう感じ？」

「うん」

「そっか。じゃ、気をつけなきゃ。ほんとに…」

そう言うと昴くんは、私の手をギュって握ってきた。

「今日、帰るよね？」

「どうしようかな…」

「え？」

「明日、バイト遅番なんだ」

「ほんと？」

「あ…。でも泊まったりしたら、お母さんにまた何か言われるかな～。もう、昴くんちに泊まってたことばれちゃったし」

「そっか…」

昴くんが、心でちぇって言ってる。

「一緒に暮らせたらいいのにね」

私が言うと、昴くんも、

「本当だよ。いつも一緒にいたいよ」

って、少しすねた表情でそう言った。

家に帰ると、母がまたリビングのソファーでテレビを観ながら、私

を待っていた。

「お帰り。今日、徹郎さんに会った？」

「うん。会ったよ」

「徹郎さんからさっき、電話があって、あんたにお礼言っておいてって…」

「お礼？」

「なんか、話を聞いて気持ちが楽になったって」

「そう…」

「それから、天宮昴と、幸せにって伝えてくれって言われたわよ」

「え？」

「どんな話をしたんだか、知らないけど…」

「お母さんも、心配しなくてもいいからね」

「え？」

「昴くんは、お母さんが思ってるよりもずっと、優しくてあったかくて素敵な人なの。会ったらわかるよ」

「まだ、１９歳でしょ？」

「でも、しっかりしてるよ」

「会ったらって言われても」

「昴くん、お母さんに会って欲しいって言ったら、会ってくれるよ」

「・・・・・どこで会うの？」

「どこででも…。うちにだって、来てくれると思う」

「だけどそんなこと、近所に知れたら…」

「夜とかなら、近所の人だってわからないよ」

「そう？」

「うん」

「じゃ、今度一回、呼んでちょうだい」

「うん」

「だけどお父さんはなんて言うか、知らないわよ」

「お父さんだって、わかってくれるよ」

私はそう言うと、自分の部屋に行った。

ふう…。どっと疲れが出た。母と話してる間も、心の奥から母に対しての憎しみのような感情が沸いていたし、また声も聞こえだして

いた。

『簡単に許すな…』

って言う声。まったく…。なんなんだろう。どうしてそうも、マイナスで悲観的で、根暗なことを言ってくるのか…。

あれ?でもそういった感情や、言動も、全部一回受け入れてみたらいいのかな?と、そんなことも思ったけど、どうやって受け入れたらいいのかが、わからなかった。

久しぶりにパソコンを開いてみた。小説のランキングを見ても変わってないし、感想も悪評が書いてあるだけだった。

「あ〜〜あ…」

なんか、やる気を失せるな…。なんて思いながら、昴くんのオフィシャルサイトをのぞいてみると、昴くんのじかに書いてあるブログが載っていた。

「あれ?ブログ自分で、始めたんだ」

私の小説を紹介してあり、すごく感動したと書いてくれていた。それに、

＞今、付き合ってる人がいます。愛する人と出会えたことって、奇跡ですよね。大事に思える人がいる、それだけでもう、僕は幸せものだって思います。

と書いてあった。ああ…。昴くんのあったかいエネルギーも、伝わ

ってくる。

もし、このブログや、昴くんが出演するドラマやテレビ、ラジオからも、このあったかいエネルギーがどんどん出たら、この次元も一気にあがっちゃうんじゃないだろうか…。そんなことを、ふと思った。

時計を見たら、悟くんがラジオに出る時間でラジオをつけた。悟くんが話し出すと、優しいあったかいエネルギーを感じた。悟くんも、ラジオを通してあったかい派動を送ってるんだな。聞いてる人たちに…。

ほわ〜ん。どんどん癒されていく。眠気も感じて、ぼんやりしていると、

『ひかり?』

と、昴くんの声がした。

『うん…。何?』

『俺のブログ見た?』

『見たよ。ありがとう、小説、紹介してくれて』

『うん。こっちの次元でも、いろいろとやっていこうと思ってさ』

『うん、そうだよね。あ、そうだ』

『ん?』

『お母さんがね、昴くんを一回、家に呼びなさいって』

『え？何？その展開。すごいね』

『なんで？』

『だって、ものすごく俺のこと、気に入らなかったんじゃないの？』

『徹郎がね、うちに電話をしたらしいの。私と会ったあと…。それで、お母さんに伝言を頼んだらしくて…』

『どんな？』

『昴くんと、幸せにっていう伝言』

『え？』

『それを聞いて、ちょっとお母さん、気持ちが変わったっていうか…』

『すごくない？』

『え、何が？』

『徹郎さんだよ。なんか、お母さんといい徹郎さんといい、もうすでに次元変わってない？』

『そう？』

『あ、ひかりの次元が変わってるから、起きてくることも違ってるのか』

『そうかも…』

『じゃ、早くにこっちの次元のひかりの中から、闇を出した方がいいね。そうしたらもっと、次元があがるよ』

『うん。そしたらもう、低い次元を引き寄せることもないもんね』

『うん…。あのさ…』

『え?』

『こっちの次元のひかり、表面化させられない?』

『え?』

『表面化して感情を出し始めたら、それを俺が浄化することできると思うんだけどな。あ、ほら。こっちの次元の俺の感情を、ひかり浄化してくれたじゃんか』

『うん』

『そんな感じでさ』

『うん。そうだね。いいかもしれないけど。でも、どうやったら表面に出るかな』

『この前は、どうしたら出たの?』

『徹郎が電話してきて、突然私、その電話に出るのを拒否したんだ。ほんと、一瞬にしてこっちの次元のひかりになってたの』

『そっか～～。う～～ん。突然出たのか』

『今日は、徹郎に会ったとき、何度も心の底でこっちの次元のひかりの感情を感じたんだけど、思い切り無視しちゃった。でももしかしたら、低い次元の私の感情を感じたら、入れ替わってたかもしれない』

『じゃ、今度もし感じたら入れ替わってみて。だけど入れ替わる寸前に俺に、心で合図してくれる?』

『わかった。してみる』

『うん。できたら、俺といるときならいいんだけどさ。入れ替わると、多分、俺の声も聞かないようにするだろうし』

『そうだね…』

『あさって、本山に行くじゃん。できたら、その前に浄化できればいいんだけど…』

『その前にって、明日しかないよ』

『そうなんだけどさ。ちょっと、かなりやばいところな気がしてさ。負のエネルギー溜め込んだままそんなところに行ったら、どうなっちゃうかなって想像もつかない。その前に、できたら浄化したいって気がしてならないんだよね』

『明日昴くん、仕事は？』

『午後から』

『じゃ、午前中に昴くんちに、行こうか？』

『うん。そうして』

私と昴くんは、明日会うことにして、交信を終えた。

負のエネルギーは、そのエネルギーを持った事柄や人を引き寄せてしまう。それは、以前美里とビリヤードのあるお店に行き、嫌ってほどわかったことだった。

自分だけでなく、相手の負のエネルギーも、吸い寄せるかのように出させてしまう…。

負のエネルギーは出して浄化した方がいいんだ…。そのとき、悟くんは言ってた。でも今回は、感じないようにしてって言われた。どっちがいいんだろうか。

ううん。悩むのはやめよう。昴くんがいてくれる。大丈夫。もし、こっちの次元の私と入れ替わっても、絶対に昴くんなら助けてくれる…。昴くんを信じよう。

その日の夢には昴くんが現れて、ずっとずっと私のことを抱きしめてくれていた。

翌日、９時には昴くんのマンションに着いていた。昴くんは起きた

ばかりのようだった。

「あ、ごめん。ひかり。今さっき起きた…」

昴くんは、まだスエットでぼさぼさの頭だった。

「ふわ〜〜〜。昨日遅くにさ、悟さん電話くれてさ」

「うん」

「で、こっちの次元のひかりに出てきてもらって、感情を浄化しようと思ってる話をしたら気をつけてって」

「気をつける？なんで？」

「うん。負のエネルギーは似た派動を引き寄せるから」

「そうだよね。それは何度か、体験済みなんだけど…」

「こっちの次元のひかりはさ、低いエネルギーともつながってるじゃん。それ、悟さん、すごく気にしてて…。まさかとは思うけど、水子の霊が本当にいて、その声かもしれないしって」

「まさか！そんなこと…」

「うん。俺もまさかって思ったけど。もしね、こっちの次元のひかりが、水子の霊がいるってことを、信じてるようだったら、そういう現実を作り出してる可能性はあるんだよって…」

「でも、そんな…！この声が赤ちゃんだって言うの？！」

「かもしれないってこと」

「そんな…。私の赤ちゃんが、そんな…」

「悟さんだって、かもしれないって言ってるだけで、本当に水子の霊かどうかはわからないんだから」

「うん…」

「大丈夫！心配することは何もないさ。全部、必要で起きること。うまくいくって」

「そ、そうだよね」

良かった。昴くんは、いつでも明るく前向きに考えてくれるから、私も気持ちをすぐに切り替えられる。

「楽天家だからさ。俺は」

私の心の声を聞き、昴くんはそう言った。

「くす…。そうだね」

こっちの次元の昴くんは、後ろ向きなところがあったけど、今、目の前にいる昴くんは、なんでも肯定的に見れる昴くんだ…。

「さてと。ただ、問題は…」

「え？」

「どうやってこっちの次元のひかりを、表面に出すかだよな～～」

「うん…」

心の奥底を、感じてみた。でも何も感じなかった。昨日のような恐怖を感じると、出てくるのかな。でも昴くんといても、恐怖ってないよねえ…。まさか、昴くんに演技してもらうわけにもいかないし。

「演技？」

私の考えに昴くんが、身を乗り出した。

「え？演技でも、する気なの？」

「うん」

「でも、そんなの見抜くよ」

「そうかな」

「だって…」

「こっちの次元のひかりが怖いことって何？」

「嫌われることか、大事な人を失うこと」

「嫌われる？」

「無理だよ。例えば、昴くんが私のことを嫌いになる演技しても、

演技だってばれる…」

「俺ならね…」

「え？じゃ、他の人にしてもらうの？」

「低い俺…」

「え？」

「低い次元の俺」

「でもそうしたら、昴くんだって、表面に出れなくなって…」

「大丈夫。俺ならもう混ざってる。低くも高くも自由自在」

「え？そうなの？」

「出てきてもらおっか？っていうか、ちょっと今、派動を下げたら変われるよ」

「あ。じゃ、わざわざそんなことしなくても、私の波動を下げたらいいんじゃ…」

「どうやって？」

「どうやってって。えっと…。暗いこと考えたり、昴くんに嫉妬したり」

「じゃ、俺が何？他の人のことでも考えたらいい？」

「う、う〜〜ん」

「う〜〜〜ん」

二人して、頭を抱えてしまった。

「無理かな。最近、ひかりのことしか考えられないんだよね。俺…」

昴くんが、頭を掻きながらそう言った。

「あの金髪の人は？」

「う〜〜ん。なんか、もう顔も忘れちゃってて…」

「そうなの？」

「うん…」

「……」

また二人して、考え込んでしまった。

いきなり昴くんが、

「だから、俺にまかせとけばいいんだよ！」

と、大きな声で言った。

「え？」

出てるエネルギーが違う。今までよりも低い…。

「あ～～～。こっちの次元のひかりが、出てくるようにするには～～」

と、頭をぼりぼり掻きながら、昴くんは言うと、

「ひかり。もう、別れよう」

と唐突に言い出した。

「え？」

「もう、ひかりとは付き合えない」

顔もかなり、怖い表情。でも心の中で、

『こんなこと言ってもな～～』

という声が聞こえてくる。

「うん。そんなこと言い出しても、こっちの次元の私、出てこないと思うんだけど」

「…じゃあ、これは？」

昴くんはいきなり、私の両腕を掴んで、キスをしてきた。

は？これで、出てくるの？私は、昴くん、考えが安易すぎって思っ

ていると、そのままベッドに押し倒された。

だから～～。昴くん。こんなことで、表面には出ないってば…。と、思っていると心の奥底で、何かを怖がってる私がいるのに気がついた。

あれ…？何？なんで怖いの？昴くんなのに。

ギュウ…。痛い。腕、昴くんがさっきから、すごい力を入れて握っている。

昴くんはそう言っても、力をゆるめなかった。

「痛いよ、腕…」

「痛い…」

昴くんは腕をぎゅって掴んだまま、のしかかってきた。

「い、痛いってば！」

腕に力をいれて、振り払おうと思っても、もっと力を入れて握ってくる。

怖い！嫌だ！心の奥底で、私がそう思っている。

あ、これ…。こっちの次元の私だ。どうやったら、入れ替われるんだろう？この怖いって感情に抵抗しなければいいのかな…。

怖い…。それをそのまま、感じてみた。

昴くんは、またキスをしてきた。でも、かなり乱暴なキスだった。
それに、突然着ていたブラウスのボタンが取れるくらい、乱暴に脱がせようとする。

嫌だ。怖い。

体が震え出した。

やだ、やだ、やめて！

心の奥で、そう叫んでいる。心の奥で、こっちの次元の私は怖がってるんだけど、私自身が昴くんの吐息に、ドキってしてる…。

私が昴くんにドキってした次の瞬間、こっちの次元の私がすっていなくなったのがわかった。

「あ！」

と、私が叫ぶと、

「え？」

驚いて昴くんが、体を起こした。

「駄目だ。消えた」

「え？」

「引っ込んじゃった」

「え？」

「だから、今、こっちの次元の私出てきてたんだけど、突然心の奥底に引っ込んじゃった」

「ええ？……。」

昴くんは、力が抜けたって表情をして、

「なんだよ～～。そっか～～」

と、へなへなと私の上に倒れこんできた。そして、掴んでる腕をゆるめて私の腕を見てから、

「あ、ごめん。ひかり。そうとうな力で握ってたみたい。痕ついちゃってる」

って謝った。

「うん。痛かったよ」

「ごめん…」

昴くんは、かなり申し訳なさそうな、情けない顔をした。

「それにボタン、どっかに飛んでっちゃった」

「うそ！どこかな。探すよ。そんでブラウスにつける」

「え？誰が？」

「俺が」

「出来るの？」

「ボタン付け？できるよ」

「……」

「オトメンって今、思った？」

「あ。うん。なんでもできるんだなって…」

「あのさ…」

昴くんはベッドの上や下をのぞき、ボタンを探しながら聞いてきた。

「こっちの次元のひかり、どう思ってたの？」

「え？」

「何を感じてたみたい？」

「怖いって思ってたよ」

「怖い？」

「うん。徹郎に乱暴されてたときの記憶も、よみがえって…」

「それ、けっこう酷い乱暴？」

「ううん。一回ひっぱたかれただけで、あとは、ものを投げられたり怒鳴られたり、ちょっと腕を強く掴まれたりしたくらいだけど。でも、それでも怖かった」

「だろうね」

「その記憶を思い出して、怖くなったんだね」

「波動低くしたら、俺、こんなことしちゃったか～～」

昴くんは、は～～ってため息をして、

「ちょっと、自分でも情けない」

とつぶやいた。

「でも、演技だったんでしょ？」

「そうだけどさ…。ごめんね、ひかりも怖かったでしょ？」

「私？こっちの次元の私じゃなくて？」

「うん」

「別に」

「え？」

「怖くないよ」

「…なんで？」

「なんでって、だって昴くんだし」

「……」

昴くんは、ちょっとあっけにとられていた。

「怖くなかったんだ。こんな俺でも…」

「？」

「俺、かなりやばいって思ってたけど…」

「ふふ…」

「何？なんで笑ったの？」

「なんでもない」

ドキってしたなんて、言えないよ～。

昴くんは私をじっと、黙って見つめた。あ、心読んでるのか…。やばい…。

「うそ！」

「え？」

「ら、乱暴な俺にもときめいてたの？」

ああ…。読まれた…。恥ずかしい…！

「そんな、恥ずかしがらなくても…」

「低い波動だと、私の感じてることとか読めなくなるの？」

「ああ。そういうのも忘れてた」

「え？」

「そうだね。高い波動のときのほうが、簡単に聞こえるみたい」

「ふうん」

じゃ、さっき、私が心で感じた、こっちの次元の私の恐怖は、昴くんにはわからなかったんだ。

「うん」

昴くんが、私の心の声に返事をした。

じゃ、私の気持ちも…。

「うん。わからなかった。まさかときめいてるとは…。じゃ、たまにこんなワイルドな俺のほうがいい？」

「い、いいってば。そういうの考えなくても…。もう～。それより

こっちの次元の私を、表面化させる方法！」

「あ、そっか。う～～ん。悩むな～～」

相当ショックなこととか？それか、怖いこと、それか、えっと～～。
また、二人で悩み出したが、答えは出ない。

「もう、いっか～～。もしかして何かしようとしなくても、ひょいって出てくるかもしれないし」

私がそう言うと、昴くんもにこって微笑んで、

「そうだね」

と、うなづいた。あ～～、悩みすぎて疲れた…。と思いつつ、昴くんにもたれかかると、昴くんは優しく抱きしめてくれた。

「ひかり、大好きだよ」

「うん」

さっきとは全然違うエネルギーで、私を包み込んでくれて、そして優しくキスをしてくれた。

ああ、とろけちゃいそうだ…。

この昴くんの愛を、思い切り感じたら、一気に負のエネルギーなんて、浄化されるのにな～～。

それから、昴くんは出かける準備をして、一緒に近くのファミレス

に行き、お昼を食べそして別れた。
結局は、こっちの次元の私は出てこなかった。
４時になり本屋に行くと、また更衣室で噂されてたらしい。う～～ん、なかなかしつこい。
あ、どうやら心の奥で、嫌がってる私がいる。
更衣室を出ようとすると、一人の若いバイトの子が、
「いい気になってるんじゃないの？昴のブログに大事にされてるみたいなこと、書いてあったからって」
と、私に言ってきた。
「え？」
「でも、あなたみたいなおばさん、昴が本気にするわけないじゃん」
「……え？」
何？この子…。私のいた次元では見たことのない顔だ。その子から思い切り黒い霧が出ていて、あやうく飲み込まれるところだった。
その前に私は、更衣室を出た。
胸の中がむかむかした。
そのまま事務所に向かい、仕事に専念して、今あったことを忘れようとした。

仕事が終わり、事務所を出ようとすると、

「星野さん、小説読んだんですけど…」

と、社員の斉藤さんが言ってきた。

「え？」

読んでくれたんだと、喜ぼうとすると、

「なんか、いまいちですね。文章も幼稚だし、ストーリー展開もわかりにくいし。途中いきなり雑になってたし」

ええ？

「星野さんには、小説なんて、無理だったんじゃないですか？」

ムカ！思い切り頭に来た。うっさい！お前に言われたかないよ！と同時に心の奥で、私って駄目人間だという声がした。こっちの次元の私だ。

さっき、若いバイトの子から言われたときも、ああ、そうだ、こんな年の私が昴くんと付き合ってるなんてみっともない…って思ってた。

かなりの自己否定だ。こっちの次元の私は、相手を怒るどころか、納得して自分を下げてしまうのか…。

「は～～」

重くるしいため息をつきながら、ビルを出た。新宿の駅に行くまでの道のりでは、また喧嘩があったり、悪口が聞こえたりした。あ。次元、下がってる…。

なんか、落ち込んでる。重い…。心の奥にドスンって、錘でも入ってしまったように…。

ドン！いきなり人がぶつかってきた。

「ちょっと、気をつけなさいよ」

ぶつかってきた女性から、怒られた。

「すみません」

なんで謝ってるの？ぶつかってきたのはあっち…。私は謝ってる自分に、情けなくなりながら、ふらふらと駅の改札を通った。

キオスクでガムでも買おうとすると、雑誌に目が行った。雑誌の表紙には、

「天宮昴、１０歳も年上の女性と、交際。いつまで続くのか？」

と書いてあった。

ズズン…。また心が沈む。いつまでって、何…？ああ…。なんか、ものすごく落ち込んでる、私…。

『昴くん…』

心で呼ぶと、すぐに返答があった。

『ひかり？』

『なんか、私のエネルギー、変？』

『うん。なんか重いね』

『やっぱり？なんだか、落ち込んじゃって』

『落ち込むようなことがあったの？』

『うん。今、思い返す』

『ありゃ…。へこむようなこと言われたね。でも気にすんなよ。その若い子は、羨ましいだけだし、斉藤ってやつは、自分の方が優位な立場でいたいだけさ』

『……』

『ひかり？』

『昴くん…。駄目だ。気が重い。どんなこと言われても元気でない』

『え？』

『気休めにしか聞こえない…。私駄目なんだよ。小説だって悪評ばかりで、私自信ない。もう、あの小説消したい…』

『ひかり？どうしたんだよ？』

『それに昴くんとだって、つり合わないって思ってた。バツ一で、こんなおばさん嫌でしょう？』

『へ？』

『もう、別れよう…』

『は？何言ってんの？ひかり？』

『昴くん…』

『何？』

『交信やめる』

『え？なんで？』

『……』

『ひかり？ちょ、なんで？』

『昴…くん、私…入れ替わるみたい…。次元低くなってる…』

『え？』

『もうすぐ、消える…。だから、あとはよろしくね…』

『え？え？』

『……』

『ちょ、ひかり？』

『……』

『ひかり、聞こえてる？』

『何？』

『あ、聞こえてた？良かった』

『また、声？もう、やめて！』

『え？』

『もう、何も聞きたくない！』

『ひかり…』

ブチ…。私は、交信を切った。私はといっても、次元の低い方の私だ。そっちの私が、表面に出たようだ。

思い切り落ち込んだとき、波動が下がったらしい。どうにか入れ替わる前に、昴くんに合図を送ったつもりだが、昴くんは気づいてくれただろうか。

それにしても、いつ入れ替わったのか…。私、かなり根暗なことを考えてたし、昴くんに言っていたけど…。

電車に乗っていると、いきなり携帯がなった。メールだった。

＞ひかり、今すぐに会おう。

昴くんだ。

＞今からなんて無理。

と私が打った。ああ！会わなくちゃ駄目だよ。

＞これからひかりの家に行く。

＞無理だよ。お母さん怒るよ。

＞じゃ、出てきて。近くのファミレスかどっかで会おう。

＞人に見られるから駄目。

あ～～。もう！どうしてこうも、マイナス思考なの？

＞わかった。じゃ、俺のところに来て。絶対に来て。絶対！

＞なんで？

＞とにかく、来て。来てくれなかったら

途中で言葉が途切れていた。何？こっちの次元の私は、ものすごく気になっていた。

行かなかったら、別れるとか？そういうこと…？

ドキドキした。怖くて手が震えそうになった。ああ、そんなにも別れることへの恐怖があるのか。なのに、なんでさっきは別れるなんて言い出したのか…。

＞わかった。今から、電車乗り換えてそっちに行く。

私は次の駅で降りて、電車を乗り換え、昴くんの家に向かった。

行くまでの間に考えてることは、別れ話だったらどうしよう…、怖い…。そんなことだ。どうやらさっき、昴くんに別れようと言ったことは、覚えてないらしい。

不安でいっぱいになりながら、昴くんのマンションのエントランスに入っていった。

ドアの前に来てもドアは開かず、私はチャイムを鳴らした。ガチャ…。ドアを昴くんが開けて、私は入っていった。

どっかで、昴くんのことを怖がってる私もいた。部屋に入り、ふと私は自分の腕を見た。もう、昴くんに握られたところには痕がなかったが、それでもそのあたりを私はさすっていた。

あ。今朝の記憶が残ってるんだ…。

「夕飯は？」

「まだ」

「じゃ、なんか作ろうか？」

「いい。おなかすいてない」

「あ。そうだ。パンがあった。菓子パンだけど食べる？」

「うん」

私は、言葉が少なかった。いや、どうもいつも昴くんといても、このくらいしか話をしないようだ。

「えっと…、コーヒーでいい？」

「うん」

昴くんはコーヒーを淹れてくれて、部屋のテーブルの上に置いた。

「あの…」

私は、おずおずと口を開き、

「なんで、今日呼んだの？」

と聞いた。かなりの勇気を持って、聞いたようだ。

「うん…、会いたかったから」

「でも、今朝も会ったよ」

「え？覚えてるの？」

「うん」

「あれ？ひかり？」

「何？」

「いや…」

昴くんは、一瞬次元の高い私がいるのかと思ったらしいが、私のエネルギーに集中し、違うのを確認したようだ。

「ごめんね、今朝は…。腕に痕、残ってない？」

「うん…」

私はまた、腕をさすりながらそう答えた。

「今朝の俺、変だった。もう、あんなことしないから安心して」

「…なんで？」

「え？」

「なんでいきなり、あんなことを…」

「あ、まじでごめん…」

「昴くん、ぶっきらぼうだけど、ああいうことはしないって思ってた…」

「うん。だよね。ごめん…」

昴くんは、ずっと謝りっぱなしだ。

「あの…」

「え？」

私は別れ話をされるのかと、ひやひやしていた。それに別れる理由は、自分が拒んだからじゃないかとも思っていた。

でも昴くんは、会いたくなったと言ってたのに、それに対しては、まったく何も思わなかったようだ。

「用があったの？」

「え？」

「いきなり、来てって…」

「用？用はないけど。だから、俺はただ…」

「私、まだ…」

「え？」

「まだ、男の人怖くて…」

「あ。うん…」

「……」

私は下を向いて、黙り込んだ。それでも求められたら、どうしたらいいのかを悩んでいた。

「あ！もしかして、そういうことを俺がしたくて、呼んだと思ってる？」

昴くんが聞いてきたが、私は何も答えなかった。

「そういうわけじゃないから安心して。ほんと、違うからさ」

「うん…」

「その…」

昴くんは、少し困っていた。そして、時々私にエネルギーを集中しているようだが、多分私の心の声は聞こえないのだろう。なにしろ、思い切り遮断している。

「私、もしかすると」

「え？何？」

「き、嫌われたかな」

「え？誰に？」

「昴くんに…」

私の心臓はばくばくしていた。もし嫌いだって言われたらどうしようかと、心の奥底で聞くのも怖くて、逃げ出したいくらいだった。なのに、なんで聞いてるんだろうか。

「いや、嫌ってないけど。なんで？」

「こ、拒んだから…」

「え？」

「今朝。嫌だって私…」

「え？そうだっけ？」

「え？」

「嫌だって言われてなかったけど…俺」

「でも、途中でやめた」

「あれは、その…」

昴くんは、頭をぼりぼり掻いて、

「えっと…」

と困っていた。

「私が、嫌がったからじゃないの？」

「うん。違うよ。その…、とにかく今朝はごめん！」

また、昴くんは頭を下げた。

「いい…。もう…」

「え？」

「あまり、謝らないで」

そのまま、俺と別れてくれとか、もうひかりなんて付き合ってられないとか、言われないかとヒヤヒヤしていた。

「あの…。今日バイト先で、若いバイトの子に、変なこと言われて…」

「ああ。それ…」

「え？知ってるの？」

「いや、知らない。なんて言われたの？」

「ブログに私のこと、書いたの？」

「あ…、うん。見てない？」

「うん…。どんなこと書いたの？」

「じゃ、見てみる？」

昴くんは、パソコンを開き見せてくれた。それを読むと、私はかなり驚いてしまった。

「こ、こんなこと…」

「うん」

「本当は、思ってないでしょ？」

「は？」

「言われたこともないし…」

「俺に？」

「うん…」

「そっか。ああ、そうだよね。言ったりしないよね、俺…」

「うん」

昴くんは、また頭をぼりって掻くと、

「でも、これ本音だから信じていいよ」

と、優しく言った。それを聞いても、私は信じられなかった。

「小説のことなんだけど…」

「うん」

「昴くん、紹介してくれたけど、もう消そうかと思って…」

「消すことないよ。周りに何か言われたからって、気にしなくていい。俺も応援するからさ」

「でも…」

「大丈夫だよ」

「でも」

「何？何が怖い？」

「え？」

「何をひかりは、怖がってるの？」

「……」

「嫌われること？非難されること？」

「うん」

「それから？」

「一人になること…」

「そっか…。でも、俺はずっとそばにいるよ？」

「……」

そんなの信じられない。そう私は思った。

「信じられない？」

「うん…」

「なんで？」

「だって、今までも大事な人は、去っていったから…」

「徹郎さん？」

「赤ちゃん…」

「ああ…。そっか」

「……」

私は、心の奥が痛くなっていた。

「でも俺はいる。そばにいる」

昴くんは、ものすごい光を私に向けて放ってくれた。でも、私は心を遮断してて、それすら感じられなかった。

ああ…。昴くんの優しさに気づいてよ。

私は、コーヒーを一口飲んだ。それから、いったいどうしたらいいんだろうかとちょっと困っていた。

「他に、ひかりが怖いことってある？」

「え？」

「大事な人を失うこと以外に」

「…男の人、怖いかな」

「俺も？」

「昴くんは…、今朝みたいなことがなければ…」

「あ、そうだよね。ごめん」

また、昴くんは謝った。

「あ…。そうじゃなくて…」

「え？」

「そういうことが、その…、まだ私…」

「うん。怖いんだよね？」

「うん…」

昴くんは、ものすごく優しい目で私を見ていた。目が合って、しば

らく見つめ合っていたが、私は目をそらした。

「なんか、変だよ？」

「え？」

「昴くん、違う」

「俺？どんなふうに？」

「いつも、もっと…、態度が大きいっていうか…」

「え？」

「ぶっきらぼうな話方したりしてる」

「あ～～～。えっと～～」

昴くんは、困っていた。どうやら低い次元になったらいいか、それともどうしたらいいかを悩んでるようだ。

「ぶっきらぼうで、態度が横柄な俺のほうがいい？」

「え？」

いきなり、昴くんにそう聞かれて私は戸惑った。

「だって、いつもそうだったから。なんで今日は違うの？」

「うん。今日は、その…」

「今朝のことがあったから？」

「え？」

「私に気を使ってる？」

「ああ。うん、そんな感じ？」

「それとも」

「え？」

「もう、最後だから？」

「何が？」

「……」

「何が最後？」

「わ、別れ話されるのかなって、思いながら来たの…」

「…別れ話なんてしないよ。だいたい、さっきも俺言ったでしょ？ずっとそばにいる」

「どうして？」

「え？」

「そんなこと今まで、言ったことなかった」

「なかった？」

「そりゃ、俺のことちゃんと好きでいるのかとか、好きになれとか、そういうことは言ったりしたけど」

「あ、そう？俺ってほんと、態度がでかいね…」

昴くんが、ちょっと苦笑いをした。

「なんか、人が変わったみたい」

「…うん。実はそうなんだ」

「え？」

「っていうか、ちょっとここらで、その…、生まれ変わってみようかな～～なんて」

「どうして？」

「それは、その…、今までの俺って態度でかいし、わがままだし、もう少し大人になろうかって思って」

「何かあったの？」

「…今朝も、ほら…、ひかりのこと怖がらせたし。もう少し大事にしないとって思って…」

「どうして？」

「どうしてって、そりゃ大事な人だし、ひかりのことが大好きだし」

「……」

私は、昴くんの顔をぼ～～って見てしまった。昴くんは、優しい瞳で私を見ていた。

「私…」

「うん。何？」

「嫌われてない？」

「嫌ってないよ。なんでそう思うの？」

「だって、今朝、拒んだし…」

「ああ…。あれは俺の方が悪いんだから、嫌うわけないじゃん」

「嫌になったりしなかったの？」

「するわけないじゃん。なんで？」

「…昴くん、まだ１９だし」

「え？」

「私は１０歳も上なのに…。拒んだりして、あきれたっていうか、

もう付き合う気も失せたかなって…」

「……」

昴くんの目は、点になっていた。

「ま、待って。ひかり…。俺のこと、そんなやつだって思ってた？」

「え？」

「いや、そんなやつって思われても仕方ないか…。俺、ひかりにずいぶんと横柄な態度とってたし、全然大事にしてる感じじゃなかったもんな～」

「……」

昴くんは、少し落ち込んじゃったみたいだ。頭をうなだれてから、また顔をあげて私を見ると、

「でもね、今はちゃんと大切に思ってる。いや、前から思ってたと思うけど、そういうのをちゃんと言えなかったんだ」

「そうだったの？」

「うん」

昴くんは、まっすぐに私を見た。私はその目を見て、妙に照れてしまい目をふせた。すると昴くんは、そっと私の肩を抱いてきた。私は一瞬びくってしたが、昴くんの手が優しかったから、そのままにしていた。

「ひかり…」

昴くんの声は、優しかった。

「え?」

「愛してるよ」

「え?!」

私は、思い切り驚いていた。

「ひかりは?」

「私?」

「うん。俺のこと、どう思ってる?」

「それは…」

「うん」

「それは…」

愛してる、大好きって言いたい。でも、怖い。何が?いつか、離れていったらと思うと…。

「俺のこと、好き?」

「……」

私は、黙ってうなづいた。

「じゃ、愛してる?」

しばらく私は、下を向いたままだったが、昴くんの表情を見たくなり昴くんの顔を見た。昴くんは変わらず、ものすごく優しい瞳で見ててくれた。

ボロ…。大きな涙がこぼれた。ボロボロ…。そのあとからも、涙はとめどなく溢れてしまい、私は自分でも驚いていた。

「ひかり?」

「ご、ごめん。泣くつもりはなかった…」

徹郎は私が泣くのを嫌がった。怖い思いをしても、泣かないように我慢した。泣くともっと怒ったからだ。

だから、昴くんの前でも泣いたら駄目だって、こらえようとした。でも、そうすればそうするほど、しゃくりあげてしまい、泣くのをこらえることは出来なかった。

そんな私のことを、昴くんはまた優しくそっと抱きしめてくれた。私はそのまま、昴くんの体に自分の体をあずけた。昴くんの胸に顔をうずめて、声を殺して泣いた。

「大丈夫だよ」

昴くんは、優しく背中を抱きしめて、

「泣いても大丈夫だよ。我慢しなくてもいいよ?」

と言ってくれた。その言葉で、私はこらえてた思いがどっと溢れ、声をあげて泣き出してしまった。

なんで、泣いてるのかな…?苦しかったのかな…?ずっと、泣くのを我慢したから…?

ずっと、一人で自分の部屋のベッドに潜り込んで、声を殺して泣いてた。

誰かのぬくもりを、感じたかったのかな?こうやって、抱きしめて欲しかったのかな?

ううん…。愛されたかったんだ。ずっと、ずっと…。

「愛してるよ。ひかり」

私の心の声が聞こえたかのように、昴くんがそう言った。

徹郎が怖かった…。もっと優しくして欲しかった。

赤ちゃんが死んだときも、誰かに優しくして欲しかった。

離婚して家に帰ったときも、家族に優しくして欲しかった。

愛されたかった。

愛して欲しかった。

愛していた赤ちゃんを、失いたくなかった。

ずっと、苦しくて、苦しくて、でも、誰もわかってくれなくて…。

「もう大丈夫。俺がいるから。俺のこと信じられる?」

昴くんの顔を見た。瞳には私が映っていた。

「うん…」

「俺のこと、愛してる?ひかり」

「うん…」

パア…。私の中から、ものすごい光が飛び出した。そして、心の奥からどんどん、昴くんが愛しいって感情が沸いてくる。

昴くんからも光が出て、私の光と混ざり合った。それが部屋を覆い、部屋の外へと放たれていく。

『愛してるよ…。ひかり』

昴くんの声が聞こえた。

『私も、愛してるよ…』

そう答えると、昴くんはばっと私の体を離し、私の顔を見て、

「ひかり？俺の声、聞こえた？」
と聞いてきた。
「うん」
「…ひかり？あれ？」
「うん。なんか、こっちの次元の私と同化してて…」
「混ざり合ってる感じ？」
「うん。さっきまでは、心の奥に私いたみたいだけど、今は違うみたい」
「だね…。ひかりのエネルギー、さっきと違う」
「浄化したからかな？」
「うん。すごい光が出ていたよ」
「…昴くん、ありがとう」
「ん？」
「私、昴くんも信じられなくなってて…。きっと、昴くんも私から離れていくんじゃないかって、そう思ってて、なかなか心開けなくて…」
「うん、わかってた」

「でも、昴くんは私のこと、本当に大事に思ってくれてるんだね？」

「うん。だって、俺だから…」

「え？何？それ…」

「あれ？ひかり？」

「あ…。今のはこっちのひかり…。まだ、出たり入ったりしてる」

「ああ。そうか。俺もそうだったっけ」

「どうしたら、落ち着く？」

「う～ん。そうだな。なるべく、派動をあげておくんだ」

「どうやって？」

「愛を感じてるの。つねに」

「愛を？」

「俺の場合は、例えば、なるべく自分の波動が下がりそうになると、ひかりのことを思うことにしてる」

「あ…。光を自分から出すときみたいにすればいいの？」

「ああ。そうそう。光を出してる状態を、いつもしてる感じ。で、愛を感じるようにするの」

「…大変」

「はじめはね。気をつけてないと、ふとした瞬間波動が下がってる。だから、今にいるようにしてるよ、なるべく」

「あ。そっか。それ、悟くんも言ってた」

「これはさ～～、けっこう最初大変なんだ。あれこれ考える癖あるじゃん。人間って…。でも、あ、今だ、今だって、今に帰るようにしてると、だんだんとそういうふうに、してられるようになるんだ」

「そうなんだ」

「ひかりがそばにいたら、簡単なんだけど」

「え？」

「いっつも、ひかりのこと愛してたら、波動が下がることもないからさ」

「そうだね。じゃ、なるべく一緒にいるほうがいいんだよね？」

「そうだね」

「じゃ、私もなるべく昴くんのことを、思うようにして…」

「にゃ～～～！ひかり！」

いきなり、昴くんが抱きついてきた。

「え？何？」

「だって、今までひかりのこと怖がらせないよう、抱きつくのも我慢してたから」

「え？でも、抱きしめててくれたじゃない？」

「そうだけど。こうやって、思い切り抱きつきたかったんだ」

「犬みたい…」

「ええ？どうせ、犬だよ。ワン！」

そう言うと昴くんは、私の胸に顔をうずめてきた。甘えてきてるようだ。しょうがないな～～と思いつつ、頭をなでてあげると、

「ワン！」

と言ってきた。ワン？何が言いたいの？と、心の声を聞いてみると、

『もっとなでて～～！』

と、言っていた。ああ、本当に犬みたいだ。でもそんな昴くんが、ものすご～～く可愛くなった。

ぎゅうって抱きしめて、頭もくしゃくしゃ～～ってすると、昴くんの匂いがして、ますます愛しくなった。

「あ。くす…」

「え?何?」

「今、私の心の声聞かなかったの?」

「あ。うん…」

「こっちの次元の私が、昴くんが甘えん坊でびっくりしてた」

「え?まじで?呆れてた?」

「う〜〜ん」

昴くんが、私のエネルギーに集中した。

『昴くんって、可愛い』

って、こっちの次元の私も思っていた。

「あ…、ガキだって思われた〜〜?」

と、昴くんがすねると、

『こんな昴くんもいるんだ。すごい可愛い…』

って、こっちの次元の私が思っている。そして、愛しくてしょうがないって思っている。

私はまた昴くんを抱きしめて、髪をくしゃくしゃにした。それから、頭にキスをして、またぎゅって抱きしめた。ずっとこうして昴くん

のことを、抱きしめていたいな…。

「じゃ、泊まってく？」

昴くんが、私の声に反応した。

「泊まっていきたいけど…」

「お母さん？」

「うん…。怒るかな～～。う～～ん、でも、電話してみる！」

「今日、泊まるって？」

「うん。昴くんのところに泊まるって」

「え？俺んちに泊まるなんて言っていいの？！」

「駄目もとで…。どうせ、薫の家に泊まるって言っても疑われるもん。だったら、正直に言ってみるよ」

「…」

昴くんは、目を丸くしてこっちを見てた。

？何を思ってるのかな…。心の声を聞いてみた。

『ひかりって、すげ～～～』

え？何が、すごいんだか…？

それから母に電話をした。昴くんのマンションに泊まるって話をしたら、

「何言ってるの？この前も写真に撮られたでしょうが」

と怒られた。でも、私はひるまずに続けた。

「もう、撮られないようにするよ」

「ええ？」

「あんなふうに、ベランダに出たりしないから」

「でも、あんたね…、嫁入り前…、じゃないわね。えっと…」

「今度昴くん、お母さんにも紹介するね。昴くん、家に行ってもいいって」

「あら…。ほんと？」

「うん」

「そう。わかったわよ。でも、朝早くに帰るのはよしてね。いかにも朝帰りって感じで嫌よ」

「わかった」

「マンションの周りも、二人でふらつかないのよ」

「わかってるよ」

そう言うと、母は電話を切った。

「なんか、ＯＫみたい」

「え？」

昴くんは、拍子抜けしたみたいだ。

「ひかりの周り、いきなり変わってきたね」

「うん」

「じゃ、ひかりと明日までいられるね？」

「うん！」

「やっり～～！」

昴くんは、思い切り喜んでいた。

ミッション6　同化する

お腹がすいたから、昴くんが出してくれた菓子パンを食べた。冷めちゃったからって、コーヒーを昴くんは、淹れなおしてくれた。

それから、もうシャワーだけだと寒いからってお風呂も入れてくれた。ほんと、昴くんってすごいわ。いいお嫁さんになる…。

「俺は男だから！お嫁さんにはならないから！」

バスルームから、そう大きな声で昴くんが言ってるのが聞こえた。あ、心を読まれていたか…。

「ひかり、一緒にお風呂入らない？」

「え？」

ドキ…。ちょっと恥ずかしいな…。

「え？でも、シャワー浴びたりしたじゃん、一緒に」

「そうだよね…。あ、じゃ、今のはこっちの次元の私かな？」

「もしかして、俺のこと怖がったりしてるかな？」

「え？」

「今朝の…。そうとう、怖がってたみたいだから」

「あ。あれか～～。う～～ん。怖かったみたいだけど…」

「ああ。まずかったよな～～、あれは…」

「じゃ、一緒にはいるのも、やめとく？」

「やだ！それとこれとは別！」

面白いな～～。時々、昴くんは子どもっぽくなる。

「子供だも～～～ん。１０歳も年下だも～～～ん」

と、口を尖らせて言うし…。ほんと、可愛いな～～。

昴くんと一緒にバスタブにはいると、けっこう窮屈だった。昴くんは後ろから私を抱きしめて、

「もう、浄化されたかな。こっちのひかりの恐怖や、負のエネルギー…」

と聞いてきた。

「うん。あまり、そういうのを感じないけど…」

「声は？」

「もうしないよ」

「そっか…」

昴くんは、私の首にキスをして、

「こっちのひかりの心の浄化するために、俺たち来たのかな」

と、言った。

「この次元に来たのにも意味があって、ミッションなんだよね？」

「うん。全部必然で起きてることだからね」

「明日、本山行くんだよね」

「心配？」

「ううん。心配はないけど…。でも、どんなことが起きるのかなって。それに、どんな人がいるのかな」

「教祖とかがいるみたいだね」

「う…。なんか、やっぱり怖そうかも…」

「悟さんが少し調べたらしい。白河ノエルさんのお父さんが、教祖みたいだ。でも、そんなにやばい教団じゃないらしいけど」

「え？」

「例えばね、何かを高く売りつけてたりとか、高いお金まきあげてたりとか、無理に勧誘したりとかそういうの、まったくないみたいだよ」

「そうなの？」

「うん。集まって、何をするのかっていうと、瞑想っていうか座禅みたい」

「え？それっていいんじゃないの？」

「うん。あとは、お祓いをその教祖がしてくれたり…」

「それ、怖そう」

「でも、神社でもあるじゃない。お祓い…」

「うん。そうだけど」

「ま、ちょっと力のある人みたいだけどね。ノエルさんも、予言が出来たりするって、だいぶ信者には慕われてて、助けを求めてくる人も多いみたいだよ」

「予言を聞きに？」

「それだけじゃなくて、なんかの霊が憑いてるとか、そういうのが見えるって…」

「え？でも…」

「まあ、それが何かまでは、ノエルさん自身はわかってないけどね。だって、葉月ちゃんに憑いていたのは、悟さんの高い波動のエネルギーで、けして悪いものじゃないから。ただ、なんかが見える…ってくらいの能力じゃないかって悟さんも言ってた」

「そう…」

「だから、もしかすると赤ちゃんの魂は本当にいるのかも。それは、感じ取ったのかも。ただ、水子の霊とかじゃなくて、高い次元のときみたく、魂がいるのかもしれない」

「私もそう思うんだ。心の奥にいるんじゃないかって…」

「感じるの？」

「うん。さっき、私が赤ちゃんを失ったことで、悲しんでたでしょ？それを心の奥から、誰かが見てた感じがしたんだ」

「それは、あの怖い声の人じゃなくて？」

「うん。違う感じ…」

「そっか」

「昴くん…」

「え？」

「なんか、のぼせてきたかも…」

「え！ごめん、出よう！」

お風呂からあがると、昴くんはTシャツを着てスエットを履くと、バスタオルを頭にひっかけ、はぶらしを口につっこんだ。それから、

ゴシゴシと頭をバスタオルで拭きながら、バスルームを出て行った。

ああ。やっぱり、あれ、昴くんいつもするんだな～。

私はバスタオルを体に巻いて、ドライヤーで髪を乾かしていた。少しすると昴くんは、バスルームに戻ってきて口をゆすいだ。

それから、

「……。それ、色っぽい…」

と私を見て、昴くんがそう言った。

「え？何が？」

「だって、バスタオルだけでしょ？」

「うん。あ、何か着るものまた貸して」

私は昴くんの家に泊まる時、昴くんのTシャツだったり、パジャマを貸してもらっていた。

「……」

昴くんは、なかなかそこを動かなかった。

「？」

なんで、何か着るものを持ってきてくれないのかな…と思っていると、

「あとで、寝るときに貸すよ」

と、私の心の声に答えた。

「でも、今…」

今、欲しいんだけど、と言おうとすると、私が手にしてたドライヤーを取って、勝手に電源を切りしまってしまった。それから、私の背中に手をまわすと、

「こっち」

と言って、部屋に連れて行かれた。そしてベッドに私を座らせて、キスをしてきた。

うわ…。どうしたらいいんだろう。

昴くんが、キスをしたまま、私の体に巻きついてるバスタオルを取ろうとすると、私は、バスタオルを取られるのを抵抗した。

昴くんが、不思議そうに私の顔を見て、

「嫌？」

と聞いてきた。

「……」

なんて言ったら、いいんだろう…。

「なんで？」

「だって…」

私は表情が固まり、バスタオルをもっと強くぎゅって握った。

「…え？もしかして、こっちの次元のひかりになっちゃってる？」

「……」

そうだ。なんか、昴くんが怖い感じがするし、どうしたらいいのかもわかんなくなってる…。こっちの次元の私が、表面に出てる…。

「怖い？」

昴くんが聞いてきた。私は何も答えられなくて、もっと固まってしまった。

「もう、今朝みたいな乱暴なことはしないよ？」

と昴くんは優しく言ってくれるが、どうにも体がこわばってしまう。

「じゃ、えっと…。ただ、寄り添って寝るだけならいい？」

昴くんが優しくそう聞いてきた。私はこくって、うなづいた。

ごめん、昴くん。本当は、悲しがってない？私が泊まることになって、あんなに喜んでいたのに。

『悲しがってない。こうやって、一緒にいられたらそれだけでいいよ』

昴くんの声が、体の中から聞こえた。あ、交信できてる…。

「なんで？」

「え？」

「どうして、私の中から昴くんの声がするの？」

「ああ…。えっと…。それは俺がひかりだから…。心でも会話できちゃうんだ」

「そうなの…？じゃ、私が思ってることも、聞こえてるの？」

「うん」

「……」

「あ、そんなに恥ずかしがらなくても」

こっちの次元の私は、ものすごく恥ずかしがっていた。

それにしても、同時に二人の人間が、一つの体にはいってるかのようだ。でも、二人じゃなくて、どっちも私なんだよね。

時々、昴くんのことを怖がってるのが、私なのかって錯覚を起こす。

昴くんは、私の隣に寝転がって布団をかけた。それから、私の顔を

優しくなでていた。

こっちの次元の私かな？いや、私の方かな？わからないけど、その優しい手の感触に、とろけそうになってた。ああ、きっと、どっちの私もとろけそうになってたんだ。

目をつむると、もっと昴くんの優しさを感じた。昴くんの匂いも、ぬくもりも全部が優しい。その優しさで安心すると同時に、どんどん心臓がバクバクしていった。これは、怖さじゃない。

目を開けると、昴くんは優しく私を見ていた。

『ひかりって、奇麗だ』

昴くんの声がした。思わず、私は照れてしまった。

『ひかりの目って好きだな…。瞳、ちょっと茶色いんだ』

私の目を見て、昴くんはそう思ってる。

『ひかりの鼻も可愛いな』

ええ？鼻？

『ひかりの口は…、色っぽいよな～』

え？色っぽい？

そう昴くんは心で言ってから、キスをそっとしてきた。優しいとろけちゃいそうなキスだ。

わ…。気持ちがいい。と思った瞬間、魂が抜けた。フワ…。え?何これ。こっちの次元の私が、驚いていた。

『ひかり…。これ、幽体離脱してるんだ』

昴くんの声がした。

『え?』

『それから、俺とひかり同化してるよ』

フワ〜〜〜。どんどん私と昴くんの魂は、上昇していく。それからものすごい光になり、辺り1面のエネルギーと同化する。

ものすごい開放感。どんどん心が広がる…。体が、全部宇宙になっていく。何もかもが一つで、ありとあらゆるエネルギーが自分の中にあるのを感じる。そして、すべてが愛だということも…。

スウ…。自分の体に戻ってきた。窮屈さを感じたが、でも、昴くんのぬくもりも同時に感じて、あったかさに包まれた。

「昴くん、こっちの私、驚いてたよ」

「ひかり?戻ってきた?」

「うん。ごめんね。まだ、コントロールきかない。自分で次元あげたり、下げたりが出来ないみたい」

「大丈夫。そのうちに出来るよ」

「うん」

私は、昴くんの首に両手を巻きつけてキスをした。昴くんも私をぎゅって抱きしめてきた。そして、そっとバスタオルを外して、優しく体にもキスをしてきた。

ドキドキしている私がいる。こっちの次元の私だ。もう、昴くんに怖さは感じていなかった。

昴くんが好き。昴くんを愛してる。次元の違う私も同時にそう思ってて、昴くんに抱きしめられると、胸がきゅんってなって、嬉しくてしょうがないようだった。

昴くんは私に腕枕をしたまま、いつの間にか寝ていた。そっとその腕を外した。それから、昴くんの頬にキスをして、昴くんの胸に顔をうずめて私は眠りに着いた。

幸せだった。夢の中でも、昴くんは私を抱きしめていた。優しく頬をなでてくれたり、キスをしてくれたり髪をなでてくれながら…。

夢の中でこっちの次元の私が、そんな昴くんにずっと甘えていた。愛されることを心から喜び、かたくなに閉じていた心を開放して、愛される喜びを思う存分感じていた。

「愛してるよ。ひかり」

そんな私の心を感じ取っているのか、昴くんは夢の中で、何度もそう私にささやいてくれた。

朝、早めに起きて朝食を作った。そして、起きてきた昴くんと朝食を食べた。それから、昴くんの洗濯物を洗濯して干し終わると、部屋を簡単に二人で掃除した。

「時間、大丈夫？ひかり」

「うん。お母さんにあまり、早くに戻ってくるなって言われてるの」

「何それ。もっと昴くんと、いちゃついてこいってこと？」

「違うよ。朝帰りだってばれるからだよ」

『あ、なるほどね』

昴くんが、心の中で答えた。

昴くんの仕事に行く時間にあわせて、私もマンションを出たが、昴くんはエントランスから、私は駐車場の入り口から出ることにした。

それから、そのままバイト先に行った。

途中、母にはこのまま本屋に行くからと電話を入れた。そのうえ、今日の夜も遅くなるか、帰れないからと言うと、

「何泊、昴くんちに泊まる気？一緒に住み出しちゃうんじゃないでしょうね？」

と怒鳴られた。

「今日は違うよ。ちょっと、遠出するから、帰れるかどうかわから

ないってことだよ」

「どこに行くの？」

まさか、ある教団の本山とは言いにくい。

「葉月ちゃんと温泉。日帰りでは、帰って来れないだろうから…」

「葉月ちゃんてバイトの子？」

「そう」

「温泉？！」

「うん。なんか、山の中らしい」

「そりゃ、泊まってこなくちゃ、大変でしょうが」

「うん」

「いきなりで、泊まるところあるの？」

「うん。大丈夫。旅館とかきっとあるから」

「気をつけなさいよ。女二人だけでいくんでしょ？」

「いや、えっと…。葉月ちゃんの知り合いの女性も一緒」

「泊まる用意してあるの？」

「う〜ん。足りないものは買っていくから」

「そう。気をつけなさいよね」

「は〜い」

そう言って電話を切り、バイトの時間ぎりぎりなので、私は慌てて店に行った。

嘘をつくのは気がひける。でも、本当のことを言ったら心配するに決まってる。

だけど、昴くんが言うように、ずいぶんと母が変わった。私のエネルギーが変わると、こうも変わるものなのか…。面白いな〜。

更衣室に入ると、またあの若い子がこっちに来て何かを言おうとしたが、すかさず葉月ちゃんが私のところにやってきて、

「星野さん。今日、ランチ一緒にしましょうね！」

と明るく微笑んだ。それを聞いて、その若い子は私の横を素通りした。

「あの子、確か司さんっていったかな。昴くんのファンなんですって。でも星野さん、気にすることないですからね！」

と、その子が去ってから、葉月ちゃんが言ってくれた。葉月ちゃんっていう仲間がすぐそばにいてくれるのは、ものすごく力強かった。

事務所に行くと、斉藤さんが私にいきなりＣＤ－Ｒをつきつけて、

「これは僕が書いた小説です。一回、読んでみませんか？」

と言ってきた。

「え？うん…」

私はいきなりで驚いたが、それを受け取ることにした。

「僕は、ずっと小説家になるのが夢でした。星野さんとは、全然違うジャンルですけどね」

「そ、そうなんだ」

ちょっと、次元の高い斉藤さんに比べると、カチンとくるものの言い方だが、ま、結局は自分の小説を読んで欲しかっただけか…と、ちょっとほっとした。

高い次元の斉藤さんの方が、ずっと素直だったよ。うん…。ま、しょうがないか。

昼の休憩になり、葉月ちゃんとランチを食べに、隣のビルの地下に赴いた。

「いつもうちの地下街なのに、どうしたの？」

隣のビルに行きましょうと、葉月ちゃんに言われてついてきたのだが、それも1番奥まっていて、あまりはやってなさそうなお店に入ったので、不思議でしょうがなかった。

「すみません。知ってる人が、なるべくいないところがよくて」

「？何？相談とか？」

「はい」

ランチが運ばれ、それを食べながら葉月ちゃんは話し出した。

「ひかりさんって、昴くんの家に泊まったりしますよね？」

「うん」

「その…。こっちの次元のひかりさん、どうしましたか？」

「え？」

「まだ、目覚めてないって言うか、奥底に潜んでますか？」

「ううん。もう、表面に出たっていうか、今はなんか混ざり合ってるよ」

「じゃ、そのこっちの次元のひかりさんは、嫌がったりしませんでしたか？」

「何を？」

「その、言いづらいんですけど…。昴くんと愛し合うのを…」

「ああ…。う～～ん。なんか怖がってた…」

「それで？どうしたんですか？」

「昴くんがすんごく優しくて、怖くなくなったみたい」

「え？」

「なんでそんなこと聞いたの？何かあったの？」

「いえ、あの…。その…。私も、もうこっちの私と混ざり合ってるんですけど、でも悟くんにキスされただけで拒んじゃうんです。これ私じゃなくて、その時はこっちの低い次元の私になっちゃうみたいで…」

「うん。それで？」

「昨日なんて怖くって、ひっぱたいちゃったんです」

「ええ？あの悟くんを？」

「はい…。もといた次元じゃ、やっぱり私、男の人怖かったじゃないですか」

「え？ああ。うん」

「でも、悟くん優しくてあったかくて、だから、大丈夫だったんです。ほんと、不思議なんですけど。それに、一緒に幽体離脱して宇宙船にも行ったことがあって」

「あ、そうなの？」

「はい…。もう悟くんのことは、全然怖くなくなってて、心も開いてて、悟くんのこと大好きになってたのに、こっちだと駄目なんですよね。なんか、悟くんに申し訳なくて」

「そんな…。悟くんは別に、怒ったりもしてないと思うけど」

「はい。全然気にしないよって言ってくれて。でも、その男の人が怖いって思うこと、いけないことだと思わずに、きちんと味わってって言われました。まだこっちの私には、そういう恐怖感があって、心の奥に負のエネルギーをためてるって」

「そうなんだ」

「はい…。それでひかりさんは、どうなのかなって思って。でも、もう大丈夫なんですね」

「うん…」

「は〜〜〜。恐怖を味わうってのが、どうも…。怖いって思ったら、私それを感じないようにしちゃうのが癖みたいで…」

「わかるよ、それ。隠そうとしちゃうよね」

「はい…」

「でも、大丈夫だよ。だって、悟くんがついてるんだよ？鬼に金棒だよ。あれ？たとえが変かな」

「はい、変です」

「あはははは。そんなにはっきり言わなくても」

「星野さん、なんか、変わりましたね」

「え？何が？」

「なんだか、前よりも明るくなったっていうか、元気っていうか」

「そう？そうかな」

「はい」

私たちはランチを食べ終わり、本屋に戻った。そして葉月ちゃんはレジに、私は事務所に向かった。

そしてバイトが終わると、私の宿泊で足りないものを買うのに、葉月ちゃんは付き合ってくれて、それから、昴くんと悟くんとの待ち合わせ場所へ移動した。

「葉月！」

悟くんが、手をあげて葉月ちゃんを呼んだ。あれ…。いつの間にか、呼び捨てになってるんだな～～。もう、昴くんもそこに来ていた。それから、悟くんの車にみんなで乗り込んだ。

「ひかりさん、もう、こっちの次元のひかりさんと同化したんだって？」

「うん」

「感情も浄化できたって、昴から聞いたけど」

「うん。もう、大丈夫みたい」

「そっか、良かったね」

「ありがと」

悟くんはそう言うと、助手席の葉月ちゃんに今度は、何か話しかけていた。

「ひかり、今日泊まってくことになるかもしれないけど、着替えとかどうした?あのまま、バイトに行っちゃったんでしょ?」

昴くんが聞いてきた。

「さっき、着替えやタオル買ってきたよ」

「パジャマは?」

「あ!」

「忘れた~~?しょうがねえな。俺の貸そうか?」

「え?」

「俺はスエット持ってきたし。念のためにパジャマも持ってきて、良かったよ~~」

「昴くん、気がきく!」

やっぱりいいお嫁さんに…。

「お嫁さんには、ならないから俺」

また、最後まで言う前に、そう言われてしまった。もう、冗談なのに～～。

「なんかおい、後ろの二人は、まるで旅行気分だな」

「え？俺たち？」

悟くんにそうつっこまれて、昴くんはとぼけていた。

「そう、お前たち」

「あははは。いいじゃん！だって、一泊できるんでしょ？」

「うん。ノエルさんから連絡が来て、泊まれる部屋もあるから、泊まっていってって」

葉月ちゃんが、その質問に答えた。

「温泉は？」

昴くんが、うきうきわくわくしながら聞いた。

「ないと思うけど」

そう葉月ちゃんが言うと、

「なんで〜〜。ちぇ」

と昴くんが舌打ちした。

「お前ね、旅行じゃないんだよ」

悟くんが、呆れた声でそう言った。

「いいじゃん。どうせなら楽しもうよ」

「昴はほんと、いつでもお気楽でいいね。っていうか、ずっと高い波動になってるね」

「え？」

「そのお気楽さ、高い波動のお前ってことじゃん。こっちの波動の昴は、後ろ向きだったからな〜〜」

「あ、そう？」

「昴くんて、本当に前向きだよね。いつも明るいし、ご機嫌のときが多いよね」

葉月ちゃんがそう言うと、悟くんが、

「プレアデス人だからな」

と言った。

「え？それ、なんか関係あるの？」

昴くんが、不思議そうに聞いた。

「プレアデス人の特徴。楽しいわくわくすることが好きなんだ。なんでも楽しめるし、楽しいことをすることで、すごい光を出すことが出来る」

「あ、なんかそれ、もろ昴くんかも」

と、私が笑ってそう言うと、

「あ、それって、ひかりさんもそうだからね」

と悟くんに言われてしまった。

「え？私？あ、そっか…」

そうだった。私は昴くんで、そのうえ私もプレアデス人だった。

「じゃ、悟くんと葉月ちゃんは？」

「俺たちの星はもっと、こう、落ち着いた感じなんだ。うまく言えないけど」

「私も～～？」

「うん。葉月もだよ。多分、環境や親の影響で今の葉月になってると思うけど、もともとの性質は俺と似ているはずなんだ」

「ええ？悟くんと？」

葉月ちゃんは、首をかしげた。

「どう考えても、違うと思うけど」

「でも、同じエネルギーは感じるよ。あとね、二人とも強いんだよね」

「え？私がですか？」

葉月ちゃんは、私が言ったことに驚いていた。

「うん。葉月ちゃん、いっつも私を守ってくれて、そういうとき心強いんだ。なんていうか、すごくほっとできるっていうか、私に任せておいてください！みたいな、力強さがあるの。その力強さが、悟くんに似ているよ」

「あ、そうだね。悟さんもそういうところあるもんね。俺なんか、いつも頼りにしてる」

「うん、頼りがいがある」

「え～～？私がですか？」

「次元がプレアデスより高いから、お兄さん的存在なんだろうな～。知らぬ間にそういう関係が出来てるのかもな」

悟くんがそう言うと、

「え？じゃ、私のほうが、お姉さん的存在？」

と葉月ちゃんは、驚いていた。

「そうそう。そういうときって、葉月、慌てないでしょ？どんと構えてる感じ」

「うん。そう、そんな感じがする」

悟くんの言うことに、私は思い切りうなづいた。

「そういう性質なんだ、俺らの星は。慌てないし動じないし…。まあ、だからこんな事態でも動じたりしないけど、昴みたいに面白がることもしないな」

「ず～ん。なんか、俺、ガキだって言われてるみたい」

「ま、気にするな。それが性質なんだよ。そういう天真爛漫さが昴の素なんだから、そのままでいいってことだよ」

悟くんはそう言うと、また黙って運転し出した。

昴くんは、私の手を握ってきて、心であれこれ話しかけてきた。心の中で会話しているから、車内は静かになった。そして、悟くんがラジオをつけた。ラジオからは音楽が流れた。それは、懐かしいメロディだった。

『この歌、映画に使われてた』

『なんの映画？』

『題名、忘れたけど悲しい映画…。最後に恋人と死に別れちゃうの』

『そういうの、多いよね』

『うん。私、過去生思い出したでしょ？』

『うん』

『何度か、死に別れて悲しむ人生送ってたよ。不思議と同じ魂と』

『俺じゃないね。俺らはこの生で、初めてご対面したもんね』

『地球じゃね』

『俺も、何回か大恋愛したよ。別れ別れになって、悲しい思いをして死ぬから、また次の生でその人と恋愛してたんだよね』

『私もだよ』

『誰？もしかして、この生で会ってたりする？』

『わかんない。でも、会ってないと思う。会ったらわかりそうな気もするし』

『そうか…。俺もだな。会ってない気がするよ。ま、同じ時代に生まれるとは限らないし、違う国かもしれないしね』

『うん。でも、会っちゃったらどうする？』

『ひかりこそ、どうする?』

『わからないよ。そんなの会ってみないと』

『俺だって』

そんなことを心で言い合っているうちに、本山に到着した。

「さ〜て、いざ、出陣って感じだな」

と、悟くんが言った。

「…ところで、俺ら、なんの目的があってここに来たの?」

いきなり、昴くんがそう言った。

「ミッションだろ?何をするかは知らないけど。それは、天に任せるしかない」

「そっか…。あれ?もしかして、お祓いはしてもらうの?」

「私はいいよ〜〜。だって、ついてたってのは、悟くんだったわけだし」

葉月ちゃんがそう言うと、今度は昴くんは私に向かって、

「じゃ、ひかりは?」

と聞いてきた。

「私も、別に…。水子の霊なんていないし」

「だよね。でもノエルさんは、お祓いしに来たと思ってるんじゃないの？」

「してもらったら？」

悟くんが、まじめな顔で言いだした。

「え？」

他の３人は、驚いて悟くんを凝視した。

「意味、あるかもよ」

「どういうこと？」

葉月ちゃんが、目を丸くしてそう聞いた。

「必要なことかもよ。なにしろ、全部必然だから」

「お祓いが？」

「受けてみたら？ちょっと面白そうじゃない」

悟くんにしては、めずらしく面白がっていた。

「葉月についてたのが俺で、俺のことを察知したのなら、お祓いしたらどうなるのか、ちょっと俺知りたいな」

「そんな…。もし、なんか変なことにでもなったら」

「大丈夫、俺だったら。それに、ひかりさんや昴がついててくれるし」

「よし、もしなんかあっても、俺らが守る。な？ひかり」

「うん。頼むよ。ひかりさんがお祓いしてもらうときには、俺と葉月で守るから」

「うん」

私も、うなづいた。

「よっしゃ、いざ、出陣だ！」

と昴くんは、車を1番に降りてそう言った。それから、みんな車を降りた。

大きな門があり、そこを抜けると奥に2軒家が建っていた。一つは、大き目の古い屋敷のような…。もう一軒は、わりと新しく建てた感じの家だった。

屋敷の方へ向かって歩いていくと、中から一人の男性がやってきた。

「神野葉月さんですか？」

「はい」

「お車でお越しですか？裏に駐車場があるので、そちらに停めてお

きますよ。カギを渡してもらってよろしいですか？」

「はい。これです」

悟くんが、カギを渡した。

「どうぞ、中にお入りください」

いつの間にか、屋敷の入り口にノエルさんが立っていて、私たちに声をかけてきた。ノエルさんは今日は、真っ白の服だった。ノエルさんに軽く私たちはお辞儀をして、屋敷の中に入った。

「葉月ちゃんが言ってた、この方たちが俳優の方？」

「はい」

「ごめんなさいね、テレビを観ないので、あまり最近の俳優さんに詳しくなくて…。お名前は？」

屋敷の長い廊下を歩きながら、ノエルさんが聞いてきた。

「結城悟です」

「天宮昴です」

「天宮…昴くん？」

ノエルさんは振り返り、昴くんの方を見てちょっと驚いていた。

「え？はい…」

「まあ、これも運命ね。何もかもが、必要で起きてること…。ふふふ」

と、また前を向いて意味深なことを言い、少し不気味に笑った。

『何かな?なんで昴くんのこと見て、あんな不気味に笑ったのかな?』

私が心の中で昴くんに話しかけると、昴くんも、

『なんだろうな…。俺のことは知ってたのかな…。あ、やべ!なんか寒気…』

『え?』

『なんか、冷たいエネルギー感じた。ひかり、感じなかった?』

『あ。ほんと、ゾクってする』

私たち4人は、ノエルさんの案内である部屋に通された。何畳あるかな…。すごく広い和室。ちょっと、壁の色も暗くって怖い感じがする。

奥の襖が開き、そこから男の人が現れた。その人は、藍色の麻のような服を着ていた。

「やあ、いらっしゃい」

すごく物腰が柔らかいが、でも声が低く、威圧感がある。

「私はノエルの父の、白河修造といいます」

「あ、はじめまして」

私たちは順に、自己紹介をした。

「今日は、遠くから来て疲れたでしょう。部屋を二部屋用意しているから、泊まっていってください。明朝、葉月さんとひかりさんのお祓いの儀をすることにしましょう」

「明朝…？」

「朝日が昇るときに行なうと、より効果がありますからね」

と、深い微笑を浮かべながら、白河さんはそう言った。

「お食事は？」

「え？あ…。まだです」

葉月ちゃんがそう言うと、

「では、食堂の方に来て。準備させるとしましょう」

と、ノエルさんが言った。

私たちはその部屋をあとにして、ノエルさんにまたついて行った。

大き目の食堂があり、数人、そこで話をしていた。

「テーブルにかけてて。準備をさせるから」

とノエルさんは、食堂の奥に行ってしまった。私たちは言われたとおりに、テーブルについた。

『はあ…。緊張。おなかなんか、すいてないよ』

私が心でそう言うと、

『え?まじで?俺、はらぺこぺこ』

と、昴くんは言った。え〜〜?緊張してないの?

『してるよ。なんか、ここの雰囲気変だし』

『変って?』

『うん。なんか、変な違和感がある…。低い次元ってだけじゃなくって、ちょっと普通じゃない感じがする』

『え?』

『ひかり、俺のことずっと、好き好き大好きって思ってるんだよ』

『もう〜〜、こんなときにふざけないでよ〜』

『ふざけてない、まじだよ。俺もひかりのことを好きだって思って、光を出すようにするから。あ、ほら見て。悟さんも、葉月ちゃん見ながらすごい光出してる。この低い次元のエネルギーに、やられな

いようにしてるんじゃないかな』

『ほんとだ…』

私も、昴くんの優しいエネルギーを体全体で感じるようにして、私からも同じエネルギーを出した。あったかい光が辺りを覆った。私たち4人を光は包んでいたが、その光は不思議と、他の人たちのところまで行くことはなかった。

『なんでかな?』

『うん…。向こうの低いエネルギーの方が強いのかな。かなり、黒い霧も出てるしね』

『うん…。なんか、私…』

『怖い?』

『ちょっと…』

『大丈夫、俺がついてるから』

昴くんは、そっと手を握ってくれた。同じ状況になっているのか、悟くんもほぼ同時に、葉月ちゃんの手を握っていた。

「あら、仲がいいのね」

そこにノエルさんがやってきて、そう言った。慌てて私たちは手を離したが、悟くんはしれっとした顔で、葉月ちゃんの手をまだ握っていた。

葉月ちゃんの顔を見ると、少し青ざめていた。ああ、もしかして、何か恐怖でも感じちゃったかもしれない。まだ、こっちの次元の葉月ちゃんの感情、浄化されてなかったっけ…。

「今日はじめてここに来る人が、もう一人いるのよ。もうすぐ到着するはず。そうしたら、一緒に食事をしてもらってもいいかしらね」

とノエルさんが、聞いてきた。

「あ…、はい」

葉月ちゃんが答えた。

「その人、私のマンションの方に何回か来て、過去生を見たりしていたの」

「過去生？過去生もノエルさん、見れるんですか？」

「あら、言わなかったかしらね。その人の守護霊に聞いて教えてもらうの。ビジョンも見えるわ。今度見てあげましょうか？面白いわよ」

「面白いって？」

「ふふふ。たいてい、前世でかかわりのあった人と、また今生出会ってたりするの。私とも前世で会ってるかもしれないわね」

「今、見れないですか？」

「そうね。じゃ、葉月ちゃん、ちょっと私のまん前に座ってくれる？」

葉月ちゃんは、ノエルさんのまん前に座った。ノエルさんは一回目を閉じて、もごもご何かを言ってから目をあけて、話し出した。

「前世で葉月ちゃんは、修道女だったわ。私も同じ修道院にいた」

「え？」

「かなり辛いことがあって、修道女になったのね。修道院ではとってもまじめだった」

「それで…？」

「神に一生を捧げて、終えてるわ」

「なんか、寂しい人生…」

「結婚もしたけどね、そのだんなさんが酒乱だったのね。ほとんど逃げて修道院に来た感じだわ」

「え？」

「う～ん。どうやら、そのだんなさんは、今生ではお父さんかな？お父さん、酒乱じゃなかった？」

「はい。お酒飲んで、何回か暴力を受けたことがあります。でも、なんでまた同じこと繰り返してるんですか？」

「因縁っていうのかしらね。そういうのあるのよ。前世であなた、死ぬまでずっと、だんなさんのことを許せずにいて、恨んだまま死んでるの。だから、今生で恨みをはらしたいとか思ったのかしらね」

「恨みをはらす？」

「それでまた、同じような関係性になって生まれた。わざとね。葉月ちゃん、お父さんとはもう離縁してるの？」

「はい」

「でも、恨みをはらすまでは、関係性断ち切れないかもしれないわねえ」

「え？」

「それでかしらねえ。あなたの恨む気持ちが、何か変なものを引き寄せて取り憑いたのかしら。まあ、明日の朝になったらわかるけど」

「わかるんですか？」

「ええ。父なら、取り憑いてる霊もわかると思うわ」

「……」

葉月ちゃんは、黙った。

「白河家の祖先は陰陽師なの。その血を父は受け継いでるのよ」

「え？」

「悪い霊を清める…、そんなことができるの」

「……」

私たちは黙っていた。

そもそも、悪い霊なんか、葉月ちゃんに憑いてるとは思えないし…。
それに、私は葉月ちゃんのお父さんのことも、違った解釈をしていた。今生親子になったのは、もしかするとそんなお父さんのことも、葉月ちゃんが許すってことなんじゃないかって…。

『そうだね』

昴くんが、私の思ってることに答えた。

『許して、愛することだ。なかなか、難しいミッションだけどね』

『うん…』

「あなたも、みてあげましょうか？ひかりさん」

「え？私ですか？」

私は戸惑った。でも私の前に椅子を移動して、ノエルさんは勝手に、目を閉じなにやらぶつぶつ言い出した。そして、目を開けると、

「あなた、前世で子どもをおろしてるのね」

「え？」

驚いた。その記憶は思い出していなかった。

「結婚して間もない頃に…。だんなさんじゃない人との子で、だんなさんがものすごく怒って。それで…」

「え？」

「だんなさんとは政略結婚。でもあなたには、他に好きな人がいた。その人との間にできた子だった。でも、その人と添い遂げることも出来ず、子どももおろすことになって、あなたは、子どもをおろしてから体を壊して、そのまま命を亡くしてて、その相手の人もまた、あなたを追って自殺をしてるわ。なんだか、ものすごい過去ねえ…」

「その、政略結婚した相手って…」

「え？」

「もしかして、今生会ってますか？私」

「いいえ。でも、その好きだった人には会ってるわよ」

え？まさか、昴くんとか？いや、地球で会うのは今生が初めて…。

「今生では結婚をしたわね、無事に…」

「え？！」

「なのに、離婚しちゃったのね」

「…え？じゃ、徹郎が？」

「それに流産した赤ちゃん、前世あなたが、おろした赤ちゃんね」

「……」

「もしかすると、そのときの恨みでもあって、またお腹に宿ったのかしらね。それで、離婚するように仕向けたりとか…」

「そ、そんなことしません！」

「でも、本当なら、前世で添い遂げられなかった分を、今生で結婚までしたのに、離婚することになるなんておかしな話だもの…」

「でも……」

頭の中がぐるぐるしたけど、昴くんが、

『そんなに考え込まないで。この情報も、真実じゃないかもしれないんだから…、ね？』

と、心で言ってくれた。

『え？』

『赤ちゃん、恨んでないよ。高い次元にいたときに、それは感じてたでしょ？』

『うん…』

『大丈夫。愛を感じたくて、ひかりのおなかにきたんだから…。それを思い出して』

『うん』

「さて…。あなた、天宮昴くん…。あ、ご飯できたみたいだけど、もう少し待っててね。あなたのことも、見てみたいのよ」

ノエルさんは、昴くんのまん前に椅子を持ってって、また目をつむった。ぶつぶつ何かを言うと、目を開けて昴くんを見ながら話し出した。

昴くんは、心の中で、

『興味ないのにな…』

と、ぼやいていた。

『興味ないの？』

『ないよ、だって、過去は過去だよ。宇宙は今しかないのに、過去は関係ないでしょ？』

『…うん』

「あなたね、前世で悲しい恋をしてるの」

「…え？」

興味ないと言っておきながら、昴くんは、ちょっと気になった様子

だ。

「大好きになった人と、戦争で引き裂かれてるのよね…」

「そうなんですか…」

「相手の女性は、それは悲しんで、悲しんで…。そのまま病気になってあとを追うように亡くなってる…。来世では、あなたと、絶対に幸せになれるようにって思いながらね」

「……」

昴くんは黙っていたが、心の中で、

『ああ。過去生で何度も繰り返してた相手か…』

とつぶやいた。

『あれ？じゃ、私はもしかして、徹郎と何度も繰り返してたのかな？』

『え？』

「それでね、今生で、会えるようになってるのよ。相手はもう、あなたのことを見つけてる」

ノエルさんのその言葉に、私も昴くんも驚いて、心で会話をするどころじゃなくなった。

「会ってる？」

「いいえ。会っていないけど、向こうはもう気づいてる」

「え？どういうことですか？」

昴くんの頭の中には、クエスチョンマークがいっぱい。

「相手はね、あなた、天宮昴くんが、自分の出会うべき相手だってことを知ってるの」

「……え？」

ますます、昴くんは混乱していた。

「もうすぐ着くわね…」

「え？誰が？」

「その相手の子」

「…え？！」

「さっき言ったでしょ？今日初めて来る人がいるって…。その子よ。私も、その子の過去生や、今生ではあなたが相手だって知ってたから、今日あなたがここに来て驚いたの」

ああ。それで昴くんの名前聞いて、一瞬驚いてたんだ。

「すごいわよねえ。運命としか言いようがないわ」

『す、昴くん？』

『え？』

『相手って…。ずっと、何度も転生しながら、大恋愛をしてた相手でしょ？』

『だと思う』

『……』

『そうじゃないよ、ひかり』

『え？』

『今、その相手が本当の俺の相手で、自分は違ったんじゃないかって思ったでしょ？』

『え？うん』

『でも、俺の同じ魂はひかりだけ。高い波動になって、一つになるのはひかりなんだ。その人じゃないよ』

『……』

『いつからか知らないけど、輪廻の輪の中で何回も、恋愛しちゃう相手になったかもしれないけど、言ったよね？今に生きてたら、その輪廻すら関係なくなるって』

『あ…』

『思い出した?その人とは、輪廻の中でぐるぐるしてて、抜け出せなくなってただけで、でももう俺、そこから抜けちゃってるから、関係なくなってるんだ』

『え?』

『もう、今生ではその輪廻も、断ち切られると思うんだよね』

『…どういうこと?』

「あ!来たわ!珠代さん!」

「ノエルさん、すみません遅くなって…」

小走りに走ってくるその人は、バイト先の若い女性だった。

「あ!司さん?」

葉月ちゃんが、驚いて大きな声でそう言いながら立ち上がった。

「知り合いなの?葉月ちゃん」

「はい、同じ本屋でバイトしてる」

「ええ?まあ、偶然…じゃないわね。必然よね」

ノエルさんはそう言うと、またふふって笑った。

「昴くん…?!それに、星野ひかり…?!」

司さんっていうんだっけか…。昴くんを見て驚いて、横にいる私を見てさらに驚いていた。

「驚いたでしょ？天宮昴くんがここにいて。私も驚いたわ」

ノエルさんはそう言うと、椅子をテーブルの方に戻してそこに司さんを座らせた。

「さ、ご飯にしましょうか。運ばせるようにするわね」

司さんは、まだ、昴くんのことをじっと見ていた。

「わ、私、司珠代といいます…。はじめまして」

そう言うと、少し目を潤ませていた。

「あ…、どうも」

昴くんは、ちょっと困惑した感じで挨拶をした。その場にいた葉月ちゃんも私も、表情が固まっていたが、悟くんは冷静だった。

「葉月やひかりさんと、同じ本屋で働いてるの？」

と、静かにそう悟さんは、質問をした。

「え？はい。わ！結城悟？！」

どうやら、今の今まで、司さんは悟くんの存在に気づいていなかったようだ。

「え?な、なんで?ここに?」

「葉月の付き添いで…。あ、俺たち付き合ってるから」

悟くんが、ものすごく冷静にそう言った。

「ええ?か、神野さんと?」

「昴は、ひかりさんの付き添いだよ」

「……」

司さんは私の方を見て、真っ黒な霧を思い切り出した。それを見ていた悟くん、葉月ちゃん、昴くんがいっせいに私に光を送ってきた。その黒い霧は、すぐに消えてなくなった。

『あ、危なかった…。ひかり、忘れないで。何があっても、俺のこと好きだって思って光を出してねて』

『え?うん』

『これね、もしかすると…』

『え?』

『低い次元での出来事だから、何かが邪魔してるのかも』

『どういうこと?』

『俺らの邪魔だよ。わざと、混乱させようとしてたり…』

『え？』

『だからね、絶対、惑わされないで。ずっと、俺のこと思ってたらいいから。俺も、ひかりのこと愛してるって思ってるから』

『わかった…』

それから目をぎゅってつむって、呪文のように、昴くんが大好き、愛してると心の中でつぶやいた。そして、目を開けて昴くんを見てエネルギーを感じて、また昴くんが好きって心でつぶやくと、パアッと明るい光が私から出た。

その光を見て、昴くんも悟くんも葉月ちゃんも、ほっとした顔をした。あ、葉月ちゃんも見えているのか…。

ご飯が次々に運ばれ、私たちは静かに食べ始めた。食べているときも、ちらちらと司さんは昴くんのことを見ていた。

食べ終わった頃に、ノエルさんがまた食堂にやってきた。

「珠代さん…。さっきね、昴くんの過去生を見てたのよ」

「え？」

司さんは、驚いてた。それから、その先を聞きたそうにした。

「そうしたらね、あなたの前世と同じだったわ」

「……」

珠代さんの目が輝いた。

「じゃ、じゃあ、私が…。やっぱり？」

そのあと、何が言いたかったのか…。私が、昴くんの相手なのね…って？

「あの…」

昴くんは、そこで口をはさんだ。

「悪いっすけど、俺、そういうの信じてないです」

「え？」

司さんは一瞬ひきつった顔をしたが、ノエルさんは表情を変えなかった。

「過去生がどうとかよりも、今、目の前のことの方が大事だって思ってますから」

「ふふふ…。その今、目の前で起きてるじゃないの」

「え？」

意味深な含み笑いを、まだノエルさんはしていた。

「今、目の前にいるのが珠代さんでしょう？」

「いいえ。今、目の前にいるのはひかりです」

昴くんは、まっすぐにノエルさんを見てそう答えた。そのまなざしに、ノエルさんは表情を変えた。

司さんからはまた、黒い霧が飛び出し私に向かってきた。私はひたすら昴くんに集中して、昴くんのことが大好きって思い続けた。黒い霧が、私が放った光でどんどん消えていった。

「でもね、運命は決まってるのよ」

「決まってないですよ」

「いいえ。決まってるの。これはね、因果応報、輪廻転生といって」

「いいえ。そんなのないですよ」

昴くんは、まったく動じずそう答えた。

「あなた、何もわかってないくせに」

ノエルさんからも、黒い霧が出た。顔もそうとう、ひきつらせていた。その霧を、昴くんは一気に消していた。心の中では、ずっと昴くんも、

『ひかり、愛してるよ』

と、言い続けていた。

「まあ、いいわ。明日、父からいろいろと聞くといいわ。さ、今日はもう、休んだらいかが？部屋に案内させるわ」

ノエルさんがそう言うと、女の人が来て、

「こちらです」

と、私たちを食堂から部屋まで、案内してくれた。

2階にあがり、長い廊下を歩き部屋の前に来ると、

「この二部屋をお使いください。お風呂は、一階の廊下の突き当たりにあります」

とその人は言った。

「はい。ありがとう」

私がそう言うと、その人はさっさと廊下を歩いて、一階におりていった。

「ひかり、こっち」

昴くんがそう言って、ドアを開けた。部屋には、ベッドが二つあるだけだった。

「え？昴くんと星野さんで？」

葉月ちゃんが、ちょっと戸惑っていた。

「あれ？だって、葉月ちゃんも、悟さんとのほうがいいでしょ？」

「……」

葉月ちゃんは、固まっていた。

「うん、いいよ、俺と葉月とで」

悟くんがそう言うと、ますます葉月ちゃんは固まった。

「葉月ちゃん、あのさ…。多分、ひかりと一緒の部屋になるより安全だよ」

「あ、安全って？」

葉月ちゃんが、変な顔をしてそう聞いた。

「あ。安全っていうか、安心っていうか…。悟さんとなら、心で会話も出来るでしょ？それに何かあっても、悟さんのほうが葉月ちゃんに光を送れるし、敏感に葉月ちゃんのエネルギーを感じやすいし…。葉月ちゃんのことを守れるのは、やっぱり悟さんなんだ」

「……」

葉月ちゃんは、悟くんの方を見ていた。悟くんは、にこって葉月ちゃんに笑った。多分、心で何か会話をしたんだろうな。

「俺も、ひかりといたほうが、ひかりのこと守れるから…」

昴くんがそう言うと、

「わかった…」

と、葉月ちゃんが言って、もう一部屋のほうに入って行った。

私たちも部屋に入ると、ベッドにごろんって昴くんは寝転がった。

「なんか、疲れたね」

「うん…」

私も荷物を置いて、ベッドに座った。

「……」

『ひかり、あの司って人のことは、気にすることないって』

私の心の中を読んで、昴くんが言ってきた。

「え？うん…」

『あのさ。誰かが聞いてるとは思えないけど、でも念のために、心の中で会話をするようにするよ』

『うん』

『ノエルさんが言ったように、因果応報、過去生からの何かが今生で関係してるとしても、それは、時間の枠の中に住んでいたらっていうのが、前提のことなんだ』

『時間の…枠？』

『幻想の世界だよ。時間ってのは、ないものでしょ？時間のない世界では、因果応報なんて関係ないんだ』

『輪廻もない』

『そうだよ。幻想だ。マトリックスだ』

『うん…』

『俺らは、マトリックスから抜けてるんだ』

『ネオみたいに？』

『ああ、そう。あの映画の主人公のね…。えっと、あの俳優なんていったっけか？』

『キアヌ・リーブス』

『ああ、そうそう。それで、あの黒のスーツ着て黒のサングラスしてる…、なんてったっけ？』

『わかんないけど…』

『とにかく、そいつ、ネオのことやっつけようとするじゃんか。マトリックスから抜け出たやつをさ。どうにかして、また幻想の世界に戻そうと…』

『うん』

『そんな感じ？もしかすると』

『どういうこと？』

『巧妙に、巧妙に、幻想に戻そうとしてるのかもよ』

『ノエルさん？』

『ノエルさんとか、白河さんとか、司って人も』

『グルになって？』

『あはは。多分、自覚はないよ。グルになって打ち合わせもしてないよ』

『…じゃ、どうやって？』

『う～～ん。そういうシステムみたいなのが、きっと作動してるんだ。本当は俺らの中にもある』

『そういうシステム？』

『気をつけないと、そっちのシステムにのっとられ、俺らも幻想世界に逆戻りする』

『なんで？』

『それが、３次元の人間の中にきっと、埋め込まれてるから』

『怖いね…。なんか、ＳＦというか、ミステリーというか、オカルトというか…』

『ああ、ごめん、言い方悪かった。そういうゲームをしてる』

『え？』

『そんなふうにさ、人間創って、神であることも忘れて、幻想世界にどっぷり浸かってる忘却ゲーム。思い出しそうになると、また忘れるように、多分作動するんだ』

『じゃ、いつまでたっても…』

『いや、それがもう、思い出す方向へと切り替わってる。だから俺ら、宇宙船に行ったりしたんだよ』

『でも、そのシステムがあったら…』

『それを、現実見れるよう、スイッチが入れ替わり出してる。だけど気を抜くと、そのスイッチが戻ってしまう…。だから、意識して今にいないと駄目なんだ』

『今に…』

『過去や未来はね、幻想の世界。今だけだよ、リアルなのは』

『そうだったね』

『そう。だから多分、ノエルさんたちはきっとね、幻想世界に浸るシステムが、稼動しちゃってて、なかなかスイッチ切り替われない

んだろうな』

『本当はあの人たちも、マトリックスから醒めるの？』

『うん。と、思うよ。みんなして、思い出すほうへと進むと思うんだよね』

『……』

『多分、いっちゃんああいう人は、この旅というか、ゲームを面白楽しくしようとしたんじゃないのかな』

『どういうこと？』

『ゲームがより、複雑で難しくて、クリアーしにくい方が楽しいでしょ？』

『私は、嫌だな。あまり難しいゲーム、苦手』

『うん。それもいろいろなんだよ。楽しみ方は人によって違うんだよ。きっと』

『違うって？』

『早くに思い出して、人々を導いたりするのが楽しいって魂とか、俺らみたいに、サポートするために地球に来ることを目的とした魂とか、高次元のままの姿でサポートする魂とか、ぎりぎりまで思い出さないで、３次元を楽しみきろうとする魂とかさ…』

『なるほどね』

『うん…。そんななんだよ、きっと』

『じゃ、ノエルさんや白河さんは、もしかすると、ギリギリまでねばって思い出すとか？』

『かもしれないし、一番神から遠い存在に一回なってみて、それから、自分は神であると思い出すのを、楽しむのが好きなのかもしれないし』

『な～～んだ。それだけ？』

『な～～んだって？』

『だって、アセンションを邪魔するとか、低いエネルギーとか言うから怖くなってたよ』

『そうだよ。邪魔をするのを楽しむために、来た魂かもよ？』

『え？』

『邪魔された方が盛り上がるから、いっちょよろしく頼むよ、なんて、俺らが頼んでたりして、実は』

『そうなの？頼んだの？』

『あはは。それは知らない。覚えてない。でも、そのことも忘れてるだけだったりしてね』

『……』

『え？呆れてる？』

『だって、昴くん、能天気すぎ…』

ドンドン！

いきなりドアを、思いきりノックする音がした。ドアを開けると、葉月ちゃんだった。真っ青な顔をして立っていた。

「ど、どうしたの？」

私も昴くんも、驚いてしまった。

「星野さん、やっぱり無理です」

「え？」

「わ、私、怖いです」

「何が？」

「悟くん」

「え？」

驚いたのは、昴くんだった。

「葉月ちゃん？」

この怖がりようは、こっちの次元の葉月ちゃんかも。

「怖くないよ？悟くん、優しいじゃない？」

「怖いです」

そう言うと、葉月ちゃんは震え出した。

「部屋、入る？」

昴くんがそう言ったが、葉月ちゃんは首を振った。

「いやだ！」

「え？」

私たちの部屋に入るのを、拒否している。

隣の部屋から、悟くんが出てきた。

「葉月、ごめん…」

『え？何したの～～？』

私と、昴くんが同時に思っていた。

「俺、何もしないし、もう寝るから安心して？」

『……。何かしたの？』

と、また同時に思っていた。

「違うの！悟くんは、謝ることなんてないの！」

いきなり葉月ちゃんは、そう言って泣き出した。

「葉月ちゃん、大丈夫？」

私は、葉月ちゃんのことをそっと抱きしめると、

「星野さん、私どうしたらいいんですか～～？」

と、私に抱きついてきた。

「葉月ちゃん？」

昴くんも、心配そうにしていた。

「さ、悟くんのすぐそばにいたいんです。隣にいて嬉しいって思ってるのに、いきなり怖くなって、次の瞬間にこっちの次元の私に入れ替わるんです」

「え？じゃ、今は、高い波動の葉月ちゃんね？」

「はい」

「じゃ、低い波動の葉月ちゃんに出てもらわないと」

昴くんがそう言うと、葉月ちゃんは驚いていた。

「そしたら、悟くんのこと、すごく怖がっちゃいます」

「うん。でも、そうしてから、悟さんに愛してもらわないと」

「え？」

「こっちの次元の葉月ちゃんが、悟さんは怖くなんかないんだって、そうわからないと、いつまでたっても、こんなことになっちゃうと思うよ？」

「…そうなんですか？」

「うん…。悟さんのこと、信じてさ…、任せてみたら？」

「はい…」

葉月ちゃんはそう言うと、悟くんの方を向いた。

「とりあえず、部屋に戻ろう？」

悟くんは、優しく葉月ちゃんにそう言った。そして、二人で部屋に戻って行った。

私と昴くんも、部屋に入った。

「大丈夫だよね？」

私が昴くんに聞くと、

「うん、悟さんがついてるから」

と笑った。

「そうだよね…」

それから、二人でタオルと着替えを持ってお風呂に行き、部屋に戻るとベッドに潜り込み、ほとんど同時に私たちは眠りに着いた。

夢の中で、

「あ、寝ちゃった…」

と、昴くんは言って、

「そうとう、俺ら、疲れてたね」

って笑っていた。

「うん。くたくたになってた」

「大丈夫?」

「うん。もう寝ちゃってるし大丈夫だよ。ゆっくり寝れば…」

「じゃ、夢の中なら何をしても、体は寝てるから大丈夫だね?」

「え?」

いきなり何もなかった空間が、昴くんの部屋になり、ベッドに押し倒された。

あ。昴くんの部屋でなんだ…と思っていたら、

「だって、1番、俺落ち着くから」

と昴くんが、言った。そして、夢の中で抱き合って、そのまま夢の中でも寄り添って眠った。

ミッション7　新たな仲間に会う

翌朝、外がまだ真っ暗なうちから、部屋にある電話が鳴った。

「おはようございます」

私が出ると、ノエルさんの声がした。

「あ…はい。おはようございます」

まだ、頭が働かない。いったい何時？

「朝日が昇ると共に、お祓いの儀を行いますから、あと1時間で支度して、中庭まで来てください」

「…はい」

ああ…。お祓いするんだっけ。

「ひかり…？」

昴くんも、目が覚めたようだ。

「おはよう、昴くん」

「え～～？まだ、夜中でしょ？」

「もう朝だよ。あと1時間したら、中庭に来てくださいって。お祓いするみたい」

「お…、はらい？」

あ、寝ぼけてるな…。昴くん。

「眠い…。寝る」

昴くんは、布団を頭までかぶり丸くなった。ま、いっか…。もう少し寝かせてあげよう。

私は着替えをして、洗面所に向かった。顔をそこで洗っていると、悟くんと葉月ちゃんがやってきた。

「おはよう」

まだ二人とも、眠気眼だった。

「あれ？昴は？」

悟くんが、目をこすりながら聞いてきた。

「寝てるよ」

「え？」

「もう少し寝かせてあげようかなって思って」

「優しいな、ひかりさんは。だから、昴がひかりさんに甘えるんだな」

「甘える…？」

私が不思議そうに聞くと、

「甘えてるじゃん、いつも」

と悟くんは言ってから、顔を洗い出した。

葉月ちゃんは、言葉数が少なかった。元気がないのかな、いつもしゃきしゃきとしているのに…。

「葉月ちゃん、元気？」

と聞いてみると、葉月ちゃんは、

「あ…はい」

と、少し恥ずかしそうに答えた。？なんか、雰囲気違わない？

「なんかね、こっちの次元の葉月みたい」

「え？」

「いや、高い波動の葉月もたまに出るけど…。まだ、安定してないんだ」

「ご…、ごめんね。悟くん」

「謝ることないよ。はじめはみんなそうだよ。ひかりさんもそうだったでしょ？」

「うん。昴くんだって、そうだったよ」

「……」

葉月ちゃんは黙ったまま、悟くんの腕にしがみついた。

…？

しばらく悟くんと、葉月ちゃんは見つめあってた。あ、心で会話してるのか。それから、葉月ちゃんは、真っ赤になり下を向いた。う～ん、心でどんな会話をしているのやら…。

「じゃ、部屋戻って、昴くん起こしてくるね」

私は、二人よりも早めに洗面所をあとにした。

あの様子なら、もうこっちの次元の葉月ちゃんも、悟くんのことが怖くなくなったんだろうな～。

部屋に入ると、まだ布団の中で昴くんはまるまって寝ていた。

「さて、どうやって起こそうかな」

心の中で、呼びかけてみた。

『昴くん、起きて』

『起きてるよ』

いや、寝てる。うっすら、いびきも聞こえる。

「昴くん、起きて」

声に出して言ってみた。し〜〜ん。何も返事がなかった。

しょうがない…。布団の先から、少し出ていた足の裏をくすぐってみた。パッ！昴くんが思い切り、足をひっこめた。あれ？ほんとに起きてるのかな？

そっと掛け布団をあげてみると、思い切り無防備な顔ですやすや寝ている…。く〜〜〜！可愛い寝顔だ！

『ひかりも、可愛い…』

え…？昴くんにエネルギーを集中すると、どうも、夢の中で私に話をしているようだ。

しょうがない。布団を思い切りひっぺがすか、それとも…。

『ひかりのキスで、優しく起こされたいな〜〜』

こいつ、本当に寝てるのかな。う〜〜ん、夢の中で私の心の声を聞いてるんだな…。

「昴くん、あ、さ、だ、よ。お、き、て」

と耳のすぐそばで、ささやいてキスをしてみた。し〜〜〜〜ん。起きない…。

『起きないじゃない～～～！』

『起きてるよ。ひかり、愛してるよ』

いや、それは～～、夢だから…。

私は、思い切り掛け布団をひっぺがした。

「昴くん！いい加減、起きて！！！」

「うわ！」

昴くんが、あやうくベッドから落ちそうになった。

「え？え？」

目を覚ました昴くんは、しばらく放心状態。

「あれ？俺、寝てた？」

「寝てた」

「あれ？でも、ひかりにキスしてもらって起きたよ？」

「それ、夢だから…」

「なんだよ～～～。夢の中じゃ、優しかったのに～～。ひかり、怖いよ～」

昴くんが、ひっぺがした掛け布団を私からぶんどり、掛け布団を抱

きしめながらそう言った。

「優しく起こしたよ?ちゃんとキスもしたよ?」

「え?でも、それ夢」

「夢じゃない。それは、本当。だって、昴くん、優しくキスして起こしてって言うから」

「……」

昴くんは、少しだけ黙り込み、

「もういっぺん、その優しく起こすところ再現してみて」

と、甘える声で言ってきた。

「嫌だ!それよりも、早く顔を洗ってきて」

「ちぇ~~~。なんだよ~~。減るもんじゃなし…」

……。悟くんが言ってたのはこれかな?

「何?悟さんなんて言ってた?」

「別に」

すかさず、昴くんは私の心の声を聞き、

「え?俺が、ひかりに甘えてるって?」

って、聞いてきた。

「あ、読まれたか…」

「いいじゃん。甘えたって…」

昴くんは少しぶつくさ言いながら、タオルとはぶらしを持って部屋を出て行った。あ…。髪はボサボサ。よれたスエットのままだ。

『昴くん、着替えて、髪くらいとかしていったら？アイドルなんだからさ～』

『いいよ、めんどくさい』

『だって、誰に会うかわからない』

『あ…』

『え？』

少し、昴くんの心の声が途切れた。

『なんつったっけ？ああ、司さん？会っちゃった。なんか、俺見てひきつってたけど？』

『そりゃ、そんな姿じゃ…』

『え？そんなに酷い？』

『アイドルが台無し…』

『まじ？』

それでも、昴くんは戻ってこなくって、しばらくしてさっぱりとした顔で戻ってきた。

それから、着替えをして髪をとかすと、いつものイケメン昴くんになった。

「ね…」

「何？」

昴くんがベッドに座り込み、何か聞きたそうにしていた。

「俺、寝起き、いつもあんなじゃん」

「うん」

「へたすりゃ、よだれも目やにもついてるし…」

「うん」

「なんで、平気なの？」

「誰が？」

「ひかり」

「？」

「寝癖もすごいしさ…。俺」

「くす…。寝癖、可愛いよ」

「え？」

「しょうがないじゃない。私から見たら、どんな昴くんも可愛いんだから」

「あ…、そう…」

昴くんは、少し照れていた。

私が化粧を済ませた頃、ドアをノックする音がした。

「星野さん、昴くん、そろそろ行きませんか？」

「うん」

葉月ちゃんだった。私と昴くんは部屋を出て、葉月ちゃん悟くんと一緒に一階におりていった。

玄関で靴をはき、外に出た。まだ、外は暗くて肌寒かった。

「寒い…」

葉月ちゃんが、少し震えながら言うと、

「上着貸そうか？」

と、優しく悟くんが、声をかけた。

「ううん、大丈夫」

葉月ちゃんはそう言って、悟くんの腕にしがみついた。

『あれ…。なんか、急接近？あの二人…』

昴くんがそれを見て、心で話しかけてきた。

『うん。こっちの次元の葉月ちゃんも、悟くんのこと怖くなくなったみたい』

『そっか、良かったよね』

『うん。』

中庭がどこにあるんだかわからないままに、なんとなく屋敷の周りをぐるりと歩いていると、

「葉月ちゃん、ひかりさん、こちらよ」

とノエルさんが、手を振っているのが見えた。その横には、司さんもいた。

「おはようございます」

みんなで挨拶をしたが、司さんは黙ったまま。でも、昴くんの横に

すっと並び、

「やっぱりこうしてると、昴くん、かっこいいよね」

と、昴くんに言っていた。

『？こうしてると？何？どういう意味？』

『ちゃんと着替えて、髪をとかしてると…って意味かな？』

『ああ。さっきのぼさぼさの頭に、スエットは冴えないってこと？』

『かも』

『……』

昴くんが、複雑な心境になっていた。

『ま、いいや。別に、どう思われても』

いやいや、一応スターなんだからさ…。

ノエルさんについていくと、屋敷の裏側に出た。そこには、すでに何人かの人が集まっていて、真ん中に白河さんもいた。今日は、上から下まで真っ白だった。

中庭には、大きな板の間が広がっていた。あれだ。能や狂言をするときの舞台のような感じだ。靴を脱ぎ、横の階段からその板の間にノエルさんはあがった。それに続いて私たちも、板の間にあがっていった。

「葉月ちゃんとひかりさんは、前の方に来て。他の人は、後ろで座っててね」

そうノエルさんに言われて、私と葉月ちゃんは白河さんのすぐ横に座らされた。白河さんは、いきなりなにやら唱え出した。

『こわ…』

思わず、身震いがしたが、

『大丈夫。ひかり、俺がいるから』

と、昴くんの声がした。後ろを見ると、昴くんからも悟くんからもすごい光が出ていた。安心して、じっとその場に私は座っていた。体全体で、昴くんのエネルギーを感じながら。

しばらくすると、葉月ちゃんが横でうなだれた。

「葉月ちゃん？」

葉月ちゃんの周りに、黒い霧が集まりかけていた。それを後ろから悟くんが、光を出して消していたが、なかなか黒い霧は消えなかった。

はっ！気がつくと、私の周りにも霧が立ち込めていた。慌てて昴くんのことを思ったが、光が出ても霧がどんどん増えていく。

周りを見ると、その霧に吸い寄せられるように、黒い霧が集まってきていた。ノエルさんや司さんや、他の人からもどんどん黒い霧が

出ていた。

『反応してるんだ』

『え?』

『リンクしてる。黒い霧と、彼らの中にある負のエネルギー…。ひかり、ずっと、俺のことを思ってるんだよ?』

昴くんがそう言うと、また昴くんのエネルギーを送ってくれた。

昴くんが好き…。昴くんを愛している…。何度も、何度も、心の中でそうつぶやいた。だが、黒い霧はどんどん押し寄せてきた。

嫌だ!助けて!!!!怖くなって、私は思い切り、そう心で叫んでしまった。その瞬間、ドン!!!恐怖の念が、心の中からどっと溢れ出たのがわかった。

ブワ…。私の中からも、黒い霧が一気に出てきた。

『やばい、どうしよう』

私が慌てると、昴くんが、

『落ち着いて』

と言ってきた。そうだ、落ち着け…。心を穏やかにして…。目を閉じた。だが心の奥からあの、低い声が聞こえてきた。

『憎い』

何が？

『妬ましい』

え？

『お前がいなければ…』

ゾク…。ものすごい冷たいエネルギーを感じて目を開けると、さすような視線を感じた。その方向を見ると、司さんがものすごい形相でこっちを睨んでいた。

『怖い…』

また、私の中から黒い霧が出た。

ぎゅ！！いきなり誰かが私の腕を掴んだ。見ると昴くんだった。いつの間にか、昴くんは私の横にいた。

下を向いたまま、うなだれている葉月ちゃんの横には悟くんがいて、葉月ちゃんのことをしっかりと抱きしめていた。

「あなたたち、お祓いの邪魔よ。こっちに戻りなさい」

ノエルさんが後ろからそう言ったが、二人はまったく無視をしていた。

私はガタガタ震えていたが、昴くんの手からあったかいエネルギーが入ってくるので、どうにか正気を保てていた。横を見ると、葉月

ちゃんも顔色が良くなってきていた。だが、次の瞬間、

「こっちに来なさい！」

と悟くんと昴くんは、大きな男性二人がかりで私から引き離された。

『怖い…』

昴くんが離れたとたんに、ものすごい不安や恐怖がやってくる。ドスン…。体が重くなる。冷える。くらくらする…。

『助けて、昴くん、助けて』

でも、昴くんの声がしない。

『誰か、助け…て…』

意識が遠くなりそうだった。その時、

『ママ！』

とても懐かしい可愛い声が、体の中から聞こえた。

『ママ！』

また、聞こえる。

『赤ちゃん…？』

『ママ！大丈夫。僕が何があっても守ってるから』

『え?』

『ママのことは、どんな闇のエネルギーが来ても、僕がここにいるからママは大丈夫!』

『え?』

『心の1番奥で、いつも守ってきた』

『…私を?』

『もうすぐ朝日が昇る。朝日を浴びたら、黒の霧は晴れていくよ』

『え?』

『闇のエネルギーが弱まるから』

少しすると辺りが白々としてきた。そして、朝日が昇ってきた。周りに立ち込めていた、黒い霧が徐々に消えていく。

『ひかり…』

昴くんの声も聞こえるようになった。

『昴くん』

『ひかり、良かった、聞こえるんだね?』

『うん』

『大丈夫？ごめん、取り押さえられてて、動けないんだ』

『大丈夫、赤ちゃんが守ってくれてるから』

『ひかりの？』

『そう、こっちの次元の私の赤ちゃん』

『そっか…。それが赤ちゃんの役目だったのか』

『え？』

『きっと、こっちの次元のひかりを守ってたんだ』

『そうだね…』

『ありがとう、赤ちゃん。私のことを守ってくれてたんでしょう？』

私が心で話しかけると、赤ちゃんが答えた。

『闇のエネルギーと、ママ、つながっちゃったんだ。でも、その声にひきずられないよう、僕、必死でママのこと守ってたんだ。ママの心が闇で覆われないように』

そう言うと、心の中でぽわって小さく光っている赤ちゃんのことを、見ることが出来た。ああ、こうやってずっと光り続けて、闇に飲まれないように頑張っててくれたんだな…。

『ありがとう…』

私は、思わず涙を流した。

『ママ、もう大丈夫だね。高い波動のママもいるし、昴さんやママを守ってくれる人がいるから』

『え？』

『あのね。高い次元の僕も、ママがずっと心を閉ざしてたときに、闇に飲まれないよう守ってたの。でも、昴さんがママを守ってくれるようになって、僕の役目は終わったんだ』

『そうだったの？』

『うん。それとね、前世のこと聞いたでしょ？僕、前世でもママのおなかにいたけど、でもね、その時もっとママに愛されたいなって思って、それで、今度もママのおなかに来たの』

『え？』

『それでね、ママ、いっぱいおなかにいる僕のことを愛してくれたから、僕満足しちゃって…』

『…恨んでないの？前世であなたの命…』

『僕は、ママがどんなにそのことで、苦しんだかを知ってるよ。誰よりも知ってる』

『……』

『僕が、苦しめちゃってた。ごめんね。僕、謝りたかった』

『なんで、あなたが謝るの?私のほうが悪いのに』

『ううん、ママは悪くない』

『じゃ、あなただって』

『うん。そうだね。誰も悪くないね。だから、もう謝るのは無しにする』

『え?』

『僕ね、ママにありがとうが言いたい。それとね、大好きって』

『うん』

『こっちの次元でも僕は、またパパの子になるよ。パパのこと、パパの家族を愛して幸せにするの』

『うん』

『ありがとう。ママ』

『赤ちゃん、あなたもありがとう。ずっと愛してたよ』

『うん。知ってた』

『ごめんね、名前もないね』

『いいの。謝るのは無しだよ。じゃ、僕逝くよ』

『え？』

『ママの体から出て、転生する』

『うん』

ママ、大好きだからね…。

最後に赤ちゃんはその言葉を残して、私の体から出て行った。ものすいごく奇麗な光が、太陽の光と混ざり合いながら、空高く舞い上がっていくのが見えた。

「さあ、お祓いの儀を、無事に終えることができた」

白河さんがそう言うと、私と葉月ちゃんの前に座った。もう、白河さんの周りには、黒い霧は立ち込めていなかった。そして、

「恐怖を感じましたか？」

と、とても穏やかにそう言った。

「え？はい」

私と葉月ちゃんは、同時に答えた。

「さて、ノエル。私には、ひかりさんの体にはいっていた魂を見ることが出来た。君は見えたかね？」

「私にはまだ、そこまで力がありません」

「うむ…。では、葉月さんに憑いていたという、魂はどうかな？」

「見えませんでしたが、でも、お二人の今の顔を見ると、もう成仏できたのでは？」

「ははは…。確かに、ひかりさんの中にいた魂はね」

え？見えてたの？本当に…。

「水子の霊ですか？」

ノエルさんが、白河さんに聞いた。

「水子だとなぜ、そう思った？」

「赤ちゃんの霊が、取り憑いてるのが見えたので」

「ははは…。まだまだ青いな。ノエルには、いろんな観念がありすぎる。いろんな占い、まじない、他にも知識を取り入れすぎたんだ」

「え？」

「赤ちゃんの魂が、ひかりさんの中にいたのは確かだ。でもそれは、光輝く美しい魂だよ」

「え？」

「昨日、前世も見えたと言って、私に教えてくれたね？」

「ひかりさんのですか？」

「赤ちゃんの命を絶ったということを…。だからといって、赤ちゃんが恨むという考えはあさはかだ」

「え？どういうことですか？お父さん」

「ひかりさんは、もしかすると、赤ちゃんの魂と会話をしていたんじゃないかい？」

「はい」

「え？」

ノエルさんや、そこにいた人たちが驚いていた。

「どんなことを話していたのか、良ければ、教えてくれないかな」

白河さんは、ものすごく優しい声で聞いてきた。

「あの…。私のことを、ずっと守るのが役目だったと…」

ノエルさんが、ものすごく驚いていた。

「それから、今生でまた、私のおなかにきて私に愛されたかったと…。それで、私が赤ちゃんを愛していたから、満足したんだって言ってました」

「うむ…」

白河さんは、深くうなづいた。

「奇麗な、汚れを知らない魂だった。まさに天の使いだな」

「見えたんですか？」

昴くんが、後ろからそう聞いた。

「見えたよ。ひかりさんの体から出て、太陽の光と混ざり合い天に昇っていくのを」

「光が、見えるんですか？」

「ああ、見える。君たちからの、ものすごく奇麗な光も」

「え？」

私も悟くんも、昴くんも葉月ちゃんも、目を丸くした。

「ノエル。そろそろ君も、目覚めないといけないな～。でも、どうだ？相当、気持ちが楽になったんじゃないかい？」

「え？」

「君の中にいる闇のエネルギーが、浄化されたからね」

「どういうことですか？」

ノエルさんが、不思議そうに聞いた。

「ははは…。お祓いとは言っても、ひかりさんや葉月さんのではない。君や、ここにいる他の人たちの闇のエネルギーを浄化したんだ」

「え？」

また、私たちは仰天した。

「ああ、いやいや…。もちろん、君たちの中にもある、恐怖や不安のエネルギーも、浄化したんだがね。どうかな？葉月さん、君の中からも、たくさんの負のエネルギーが出たんじゃないかい？」

「……」

葉月ちゃんは、目を丸くしたまま黙っていた。

「朝日には、闇を浄化するエネルギーがあるんだよ。それを利用させてもらい、今までもたくさんの闇のエネルギーを浄化してきた。まあ、荒療治ではあるがね」

そう言うと白河さんは、悟くんと昴くんのそばに寄った。

「君たちには、ものすごい光で闇を覆うという、素晴らしい力があり、それが君たちのミッションなんだな…。できたら、ここで私のサポートをしてほしかったが、君たちには、君たちのミッションがあるようだから、引き止めるわけにはいくまい」

「仲間…、ですか…？」

悟くんが、めずらしく動揺していた。

「ああ。君たちとは、どうやら住んでいた星は違うようだがね」

「……」

悟くんは、黙って白河さんのことを見つめていた。

「ノエルもそうなんだが…。彼女はまだ、目覚めていない」

「え?!」

私と昴くんが、同時に驚いた。

「高い波動のノエルなら、もう、目覚めたかもしれないな。なにしろ、こっちの次元と向こうで起きることも、実はリンクしているからね」

「そうなんですか?」

昴くんが、目を丸くしたまま聞いた。

「こちらのノエルが、かなり闇を浄化できた。その影響は大きいだろう」

「……」

「こちらの次元の君たちはすでに、目覚めたね。闇の浄化も済み、もう高い次元の君たちがいなくても、ミッションを遂行できるだろう」

「え？」

４人同時に、聞いた。

「もう、高い次元に戻るときが来た。私がそのサポートをしよう。まあ、急ぐこともない。ゆっくりと朝食を取り戻るといい」

「あの、いろいろとお聞きしたいことがあるのですが」

悟くんが、聞いた。

「なんだね？」

「この次元では、２０１２年に地球が破滅すると言われていますが、それを阻止することもミッションですか？」

「それが私の１番のミッションだよ。君たちの次元ではね、もう、それを信じる人たちもいなくなってる。でも、この次元では、多くの人が信じ込んでいる」

「それは、その…、俺らはしなくてもいいんですか？」

「ああ。こちらの次元の君たちは、もう十分に目覚めているから、彼らがするだろうミッションだ。私もそうだ」

「白河さんも？」

「君たちの次元では、少し違う活動をしている。君たちが戻れば、君たちの次元の私に会うだろう」

「あの…、俺らのこと、わかりますか?その高い次元の白河さん…」

昴くんが、聞いた。

「ははは…。わかるさ。私は色んな次元の私と、つねにコンタクトをとっているからね」

「悟くんみたいだ」

と私が言うと、

「悟くんもまた、高い次元の星の出身だね」

と白河さんは、答えた。

「あの、もう一つ聞いてもいいですか?」

昴くんが、今度は質問した。

「なんだね?」

「俺らが高い次元から来ていること、なんでわかったんですか?」

「君たちの中に、高い波動、低い波動、入り混じっているのが見えたからね」

「え?」

「ああ。もう大丈夫だ。さきほどの浄化で、こちらの次元の君たちも、すっかり高い波動に変わってるよ」

「そうですか…」

「こちらの次元の君たちのことを、心配することはない。もう大丈夫だ。私も彼らとは連絡を取り合い、何かの時には、サポートさせてもらうよ。だから、君たちは安心して君たちの次元に戻りなさい」

「はい」

「向こうの次元の私は、君たちのことをサポートしていく」

「心強いです」

悟くんが、そう言った。

「もう一つ…、あの」

昴くんが、もっといろんなことを聞きたそうにしていたが、でも、控えめに聞いた。

「俺とひかりみたいに、もう一人の白河さんの魂がいるんですか？」

「いや…。君たちのように、分離して地球に来てるわけではないからね」

「え？」

「ははは…。いろんなミッションによって、形態が異なるんだよ。君たちは、男性性、女性性の二つに分かれて、地球に来た。それにも、大いに意味があるというわけだ」

「……」

「ノエル、君が前世を見てあげた、珠代さんだが…」

「はい」

「多分、そうとうな闇のエネルギーを浄化できたと思うが、どうかな？」

「体が、軽いんです…」

司さんは、すっきりした顔で答えた。

「だろうね…。そのうちに、君もミッションを思い出すだろう」

「え？司さんも、仲間ですか？」

悟くんが聞いた。

「ああ。そうだ。君たちのように、そのうち、自分の魂の片割れとも出会うだろう」

「どういうことですか？お父さん」

「ノエル。この地球での前世など、単なる記憶のデータに過ぎない」

「え？」

「あまり、そういうことに囚われていては、真実は見れないんだよ

？珠代さんの過去では、昴くんが恋人だったかもしれないが、過去の話だ。それに彼女には、もっと出会わなければならない相手がいる。ここで、過去にこだわっていたら、その相手に出会っても気がつけず、自分のミッションを遂行するのもできなくなるだろう」

「私の、魂の片割れ？」

司さんが不思議そうに、白河さんに聞いた。

「ああ、そうだ。昴くんと、ひかりさん。悟くんと、葉月さんのようにね。君にもまたいるんだ」

「どこにですか？」

「詮索はしなくても、宇宙がすべてを取り計らってくれる。今回、ここに集まったように。ここにいる全員が、仲間なのだ」

「ええ？！」

私たち、４人はみんな驚いてしまった。

「ははは…。すべては、必然と言うわけだ。うむ…。この世界はなかなか、うまく出来ている。そうは思わないかな？」

「え～～～？……」

昴くんが言葉を失っていたが、途中で笑い出した。

「あはは…。何それ…。じゃ、何？仲間に会って、アセンションの手伝いをするために、この次元に来たの？」

「そうだ、もちろん、そうだ。それ以外のどんな目的があると言うのだ？」

「邪魔してたんじゃなくって？」

「アセンションのかい？そんなことをする意味がどこにあるというのかい？邪魔をする魂などいないよ。すべての魂がつながり、今、アセンションに向かっている。いうなれば、会う人はみな仲間だ。敵など、どこにもいない」

「……」

私たち４人は目を合わせて、それからくすくすと笑い出してしまった。

その光景を見てノエルさんや司さんは、すごく不思議そうな顔をした。でも周りいた、数人の人たちは、優しく微笑んでいた。

「あれ？もしかして、この人たちも…」

「ああ。もう目覚めている。君たちのように、高い次元からこの次元に来たものもいる」

「そ、そうだったのか…。じゃ、そういうこと前もって言ってくれますか？さっき、俺のこと捕まえた人、ものすごく力があって、俺、グーで思い切り殴りそうになってたよ。ああ、殴らなくて良かった」

そう昴くんが言うと、その時に昴くんを抑えてた人が、思い切りがははって笑った。

「まあ、殴っても良かったけどな～。体があってのことだ。それもいい体験だよ。昴くん」

「へ？」

昴くんは、少しあっけに取られていた。そんな昴くんの背中をバンバンたたきながら、

「俺も、プレアデス人だ。君と一緒だ。わっはっは」

と大笑いをした。う～ん…。悟くんが言うように、プレアデスの人はやっぱり、陽気なのかな。

私たちは屋敷に戻り、朝食を取ることにした。昴くんは、さっきのプレアデス人だったという、漆原さんって人と意気投合して、一緒にご飯を食べていた。

私の横には、奇麗な女性が座ってて、その人は漆原さんと同じ魂なのだと言った。私と、昴くんと同じように…。その女性は、流音さんという名前で、名前のように流れるような美しい声で話す人だった。

「私たちは、白河さんに会ってから、使命を思い出したの」

「流音さんと漆原さんは、どこで会ったんですか？」

「信じてもらえないかもしれないけど、町ですれ違って、お互いが一瞬にして惹かれあって」

「え〜〜?すごいですね!」

「それから、もともと私はスピリチュアルなことが興味があって、瞑想もしていたし、彼の方は武道をしていたから、座禅をすることもあって、それで、瞑想や座禅をするところに参加していて、白河さんに会ったの」

「この教団にですか?」

「次元の高い世界では、この教団はないのよ」

「ええ?」

「もっともっと、自由な感じで、白河さんがブログで瞑想や座禅をしましょうって呼びかけてて、それで集まって、みんなでしていただけ」

「じゃ、どうして、この次元じゃ教団を?」

「起こることが少し、違うのね。この次元では、教団や教祖がいるほうが、みんな信じやすいし、それに、ノエルさんのように霊が見えたり、白河さんのようにお祓いができた方が人が集まるの。禅をしましょう、瞑想をしましょうって言ったって、みんな興味ないの。もっと、今の生活をどうにか変えて欲しいって、すがってくる人のほうが多いの」

「だけど、そんな人来ても…」

「そういう人の闇のエネルギーを、朝日で浄化して、そのあとに一緒に瞑想をして、心を落ち着かせていくの。波動があがるから、そ

の人の周りで起きること、その人自身の思考も変わっていくのよね」

「……」

私は、黙って聞いていた。

「だから、こういうのを白河さんは続けてるけど、もう少しこの次元が上がったら教団を廃止して、高い次元みたいに、みんなで瞑想したり座禅組んだり、そういったことをしていこうと思うって言ってたわ」

「あの…。地球が破滅するのをふせぐっていうのは？」

「恐怖を一人一人から取り除く」

「でも…」

「まあ、一人一人にしていったら、何万年もかかりそうよね」

「はい」

「だけど、みんなつながってるから、一人が目覚めると、他の人が目覚める確立も上がるわけ」

「え？」

「波動が上がる人が増えて、あなたたちのように闇でなく、光のエネルギーを出す人が増えだすと、この世界はどんどん変わっていくと思うわ」

「……」

「だからね、地道な活動のようだけど、白河さんのしていることは、多くの魂を目覚めさせるのに役立ってるの」

「そうなんですか」

「だけど、昴くんや悟くんのように、メディアで活躍してる人が、たくさんの光を出すことは、素晴らしいことだと白河さんは言ってたわ」

「そうですよね。私もそう思います」

「メディアは、恐怖の方をあおるからね」

「はい」

「でも、変わるわよ、きっと」

「そうですよね」

「流音」

漆原さんが、こっちのテーブルにやってきた。

「そろそろ帰ろうか？」

「うん」

そう言うと、流音さんは私の方を向き、

「ひかりさんに会えてよかった。あなたが書いてる小説、前にいた次元の時から読んでるの。ぜひ、本にして欲しいわ」

「ペンネームを使っていたのに、わかるんですか？」

「ええ。あなたからの光が、あの小説からも出てるからね」

「え？」

「あら、自分で知らなかった？小説からも光が出ていることを」

「はい」

「ふふ…。そうなの？昴くんのブログからも、すごい光が出てるわよ」

「それは気づいてました」

「じゃ、またいつか、会いましょうね」

「はい」

流音さんと漆原さんは、仲むつましく寄り添い、食堂を出て行った。

その頃、昴くんは司さんと話をしていた。そして、しばらくすると立ち上がり私の方に来た。

「部屋に戻って、帰り支度しようよ」

「うん」

昴くんと部屋に戻り、荷物を詰め込んだ。

「司さん？」

いきなり、昴くんが言った。

「え？」

「さっきから、気にしてるでしょう？」

「私？」

「うん」

「そ、そうかな…」

「ま～～た、そうやって隠そうとする」

「う…、うん」

「浄化されたみたい。すっきりしてたよ」

「え？」

「今までは、俺の恋人は、自分だって思ってたらしくて、それで、ひかりのこと相当憎んでたらしいし、俺に対しての執着もすごかったみたい。でも、朝、そういうのが、まるでなくなっちゃったんだってさ」

「え？」

「朝日で、浄化されたらしい」

「そうなの…」

「それで、自分の片割れとどうやったら、会えるのかって聞いてきたから、何も考えないで、今に生きることだって話をしてたんだ」

「……」

「俺と離れるのは、少し寂しいとは言ってたけど」

「え？どうして？」

「だって何回も何回も、転生を繰り返しては、くっついて離れてしてた魂だからね」

「そっか。じゃ、昴くんも寂しい？」

「いや、俺はもう輪廻から脱してるし、ひかりがいるし」

「……」

「司さんも、片割れが見つかったら、俺のことなんかさっさと忘れんじゃない？」

「そっか…」

「安心した？」

「私は別に」

「いいよ。無理しなくて。ちょっとくらい、やきもちやいてくれても。そんなひかり可愛いし」

「……」

「あはは！まだそういうこと言うと、照れるんだね」

「す、昴くんだって、照れたりするよ？」

「俺が～～？」

「うん。自覚してないの？」

「ぜ～～んぜん」

え～～？そうなの？真っ赤になったりするのに。

「俺が？」

「そうだよ」

「…俺が？」

まだ言うか…。

荷物を持って私たちは一階におりて行くと、もう悟くんと葉月ちゃ

んがいて、白河さんと話をしていた。

「さあ、また中庭に来てもらおうかな」

「はい」

どうやって、この次元から帰ると言うのだろう…。でも、白河さんに任せることにしよう。

白河さんに着いて行き、４人でまた板の間にあがった。そして、白河さんに言われたところに座った。もう、日はだいぶ上がっていて、こうこうと私たちを照りつけていた。

私たちから少し離れた、日の当たらない影に白河さんは入り込むと、そこでなにやら唱えていた。

『ど、どうなるのかな…』

ちょっと不安を感じた。

『大丈夫だよ、ひかり』

昴くんが手を、ギュって握ってくれた。

「ゆっくりと目を閉じて、深く深呼吸をして…」

白河さんにそう言われて、私たちは深呼吸をした。

「日光を思い切り感じて、そのまま、しばらく何も考えないようにして…」

言われたとおりにしていると、ものすごい目を閉じていてもまぶしいくらいの光が、私たちを包み出した。あったかくて、優しい、でも力強い。ああ、これ、白河さんから出てる光だ。

その光と太陽の光が混ざり合い、私たちは一瞬、体全部が光に変わったのを感じた。そして次の瞬間、体が重たさを感じ、座っている感覚や床の冷たさを感じた。

「さあ、もう目を開けてもいいですよ」

ものすごく穏やかに、白河さんが言った。

目を開けると目の前に白河さんが、優しく微笑みながら立っていた。

「…あれ?」

私たちは、しばらくその辺をきょろきょろと見回した。でも、どこも変わっていなかった。

「…?」

「今日はみなさん、仕事ですか?」

「はい」

悟くんが答えた。

「では、もうお帰りになった方がいいとは思いますが。ただ…」

「はい…」

「こちらの次元では、あなたたちは、１０日ほどいなくなっていたので、ちょっと、いろいろとはじめは大変だと思いますよ」

「え?!」

私が驚いたが、

「１０日ですか?ああ、ぴったりだ」

と、悟くんが笑った。

「あれ?じゃ、もう、前の次元なんですか?ここ」

昴くんが、びっくりしながら聞いた。

「そうですよ」

「え?でも、何にも変わってない」

「ははは…。変わっているんですよ。まあ、そのうちわかります。ところで、何がぴったりなんですか?」

白河さんが、悟くんに聞いた。

「低い次元へ行く前に、仕事を１０日ほど、休みますと言っておいたんです」

「ほお…。それは素晴らしい。本当にぴったり１０日目で戻られた

んですね」

「休めたの？忙しかったでしょ？」

私が聞くと、

「うん。俺はインフルエンザ。悟さんなんて、入院するって嘘ついちゃって」

と昴くんは答えた。

「え？だ、大丈夫なの？」

「まあ、なんとかなるさ」

「あれ？私は？何も言わないで、低い次元に行っちゃった」

「大丈夫です。私、おうちに電話して、仕事の研修が１０日間あって、ってお話しました」

「え？」

「すんごい忙しくて、慌てて研修に行ったから、私が変わりに連絡しましたって言ったら、お母さん、信じてくれました」

「あ、ありがとう、葉月ちゃん」

なんて、ナイスなフォローをしてくれたんだろう。

「じゃ、今日までオフってことだ」

「ああ、そうだな」

悟くんと昴くんは、目を合わせた。

「でも、私、バイト…」

私がやばいって顔をすると、また葉月ちゃんが、

「大丈夫です。１０日間、私と二人で、海外旅行に行ってることになってますから」

と、ウィンクをしてそう言った。

「え?でも、急にそんなに休んだりしたら」

「懸賞に当たったって言ったら、行っていいよって」

「ええ?」

そっか。葉月ちゃん、ほんとすごいな…。

「では、もう少しここで、ゆっくりしていきますか?良かったら、瞑想を一緒にするのはどうですか?もう、朝の瞑想の時間は終わりましたが、特別にこれから…」

と白河さんが提案してくれた。

「はい…」

私たち４人は、こくんとうなづいた。白河さんは、このままお待ちくださいと言い残し、館の方に行った。

「なんか、全然変わってないと思ったけど、白河さんが少し違ってた」

昴くんが言った。

「うん、こちらの次元のほうが、穏やかな感じがするね」

悟くんも、そう言った。

１０日間だけだったんだな。もっと、長いことあっちの次元に行ってた気がする。

『寂しいの？』

昴くんが聞いてきた。

『え？』

『低い次元の俺と、会えないのが…』

『そんなことないよ』

「ね、悟さんって、どの次元の悟さんともコンタクト取れるでしょ？俺も出来るのかな」

「ああ、そのうち出来るようになるさ」

「そっか…」

そんなことを話しながら、太陽の光に照らされ、４人でしばらくほっこりとしていた。

ミッション　第2段階終了

白河さんが戻ってきた。その後ろから、ノエルさん、司さんも来た。

「おはよう、葉月ちゃん、ひかりさん」

「おはようございます」

「昴くんと悟くんかしら?はじめまして」

こちらの次元で会ったのは、初めてだもんな～。

「あ。はじめまして。なんか変ですね。低い次元では会っていたから」

悟くんがそう答えた。

「あら、そうなの?私は、そっちの次元ではどうだった?まだ目覚めていない?」

「はい。まだ…」

「そう」

「ノエルさんも、目覚めたんですか?」

「ええ。今朝の瞑想で自分のミッションを思い出したわ」

「今朝の?」

「低い次元のノエルからそうとうな、闇のエネルギーが浄化されたようだな。それで、こちらの次元のノエルに影響が出たのだろう」

白河さんが、静かにそう言った。

「はじめまして。私、司珠代といいます」

「え？あ…」

私も昴くんも、少し戸惑った。

「？」

司さんが、ちょっと私たちの戸惑いを見て、不思議そうな顔をした。

「あの、低い次元で会ってたから」

私が言うと、

「え？そうなんですか？」

と、司さんは驚いていた。

「司さんは、もう目覚めてる？」

「はい。私も今朝の瞑想で…。今朝の瞑想はすごかったんです」

『司さんも、低い次元でものすごい浄化があったからな～』

と、昴くんが心で言った。

司さんの後ろに、若い男の子がいた。多分、昴くんくらいだろう。

「司さんの魂は、彼と同じ魂だった…ということも、今朝わかったんだよ」

白河さんが教えてくれた。

「え？」

私たち４人は同時に、驚いていた。

「昨日、私はここにやってきて…、彼も昨日夜到着して、それで会った瞬間から何かを感じていたんだけど、まさか同じ魂だったなんて、びっくりしちゃった」

「昨日、はじめて会ったの？」

私が聞くと、

「そうなんです」

と司さんは、答えた。

「あの、前世のこととか知ってる？」

私が、司さんに聞いてみると、

「ノエルさんに一回、リーディングしてもらいました。宇宙船にい

て宇宙人だったって言われて、信じられなかったんです。でも、今回の瞑想の会に誘っていただいて、昨日の夜来たんです」

「う、宇宙船…。宇宙人？」

ああ、前世飛び越して、そこまでこの次元のノエルさんなら、見れるのか。あ、そうか、私もそうだったっけ。

「それで瞑想してて、何もかも思い出して。宇宙船にいた頃の記憶まで、思い出して…」

「そうなんだ」

昴くんは、にっこりと笑った。

「良かったです。この地球に来た、同じ魂の彼とこうやって会えて」

「うん。そうだね」

昴くんは、もう一回にっこりと笑った。

それから、白河さんの誘導に従って私たちは瞑想をした。瞑想をしていると、ストーン！いきなり、意識が宇宙に飛んでいった。光の渦の中にいて、光と同化していた。

でも、幽体離脱はしていない。体の中にいながらにして、宇宙とつながる感じだ。

開放感、気持ちのよさ…。どんどん自分が広がっていく。そして、自分が宇宙になる。それから、徐々に、体が自分の体へと収まって

いく感じがした。

目を開けると、周りの人はまだ目をつむっていた。だけど、昴くんは目を開けていた。

『すごかったね』

昴くんが、心で話しかけてきた。

『うん。すごかった』

私も、そう答えた。しばらくぼ〜〜ってしながら、私たちは太陽の光を感じていた。

昼食を食堂に行き食べていると、そこに司さんが来た。

「低い次元で私に、会ってるんですよね」

と、私に聞いてきた。

「え?うん」

「その、どうでしたか?私」

「え?」

なんて答えていいものやら。そこへ葉月ちゃんが、

「同じ本屋でバイトしてたんだよ」

と助け舟を出してくれた。

「本屋？新宿のですか？」

「え？うん」

「私、先週からそこで、バイトしてるんです」

「ええ？」

私も葉月ちゃんも、驚いてしまった。

「それで…、あの…」

葉月ちゃんは、ちらっと昴くんの方を見て、

「私、ずっと天宮昴くんのファンだったんです。昨年のサイン会にも行って、あの本屋でバイトしてたら、もしかしてまたサイン会するかなって…。バイト先決めた動機、不純なんですよ…」

と恥ずかしそうに言った。

「え？」

私と、昴くんが同時に驚いた。

「あの…？もしかして、低い次元でも私ファンでしたか？」

「うん」

私が、そう言うと、

「そうだったんですか…。あ、ここで会えて、私驚いちゃって。すごく嬉しいです」

と、司さんは、にっこりと微笑んだ。その笑顔にはなんの邪気もなく、嫉妬や執着も感じられなかった。

昼食が終わり、私たちは白河さんと挨拶をして、車に乗り込んだ。そして、東京に向かった。

車内は静かだった。葉月ちゃんは、どうやら眠ってしまったようだ。

「葉月さ…」

「え？」

悟くんが静かに話し出した。

「低い次元の葉月もそうだったけど、今までずっと、誰かに甘えたりできなかったみたい」

「……」

「特に男性にね。いつも怖くて、こわごわ接していたみたいだね」

「そうだったんだ」

昴くんが、ぽつりと言った。

「でも、そういうの、あまり見せないからわからなかったな」

私がぼそって言うと、

「頑張ってたんだろうね。でも、やっと安心できるようになったって言ってたよ」

「悟さんといて？」

「うん」

「悟さんに、甘えるの？葉月ちゃん」

「え？ああ。うん。お前ほどじゃないけど」

「俺？俺、悟さんに甘えてる？」

「あはは…。俺にじゃなくって、ひかりさんにだよ」

「え？」

昴くんが、とんでもない声を出した。

「甘えてるじゃん、いつもお前…」

「な、なんで知ってるんだよ～～」

「見てりゃわかるって」

悟くんは、笑いながらそう言った。昴くんは、逆にちょっとすねた

表情をした。

「ちぇ～～、どうせね、甘えん坊だよ」

「あれ？」

私が聞くと、

「え？」

と、昴くんがこっちを向いた。

「その甘えん坊、こっちの次元の昴くんだったんだ」

「え？低い方だと思ってたの？」

「うん」

「まじで？」

「ふふふ…」

「なんだよ？」

『くすくす…。そういえば、前から甘えん坊か～～』

『え？そんな前から？俺？』

『うんうん…』

『ちぇ、なんだよ～。いいじゃんか、甘えたって』

あ、開き直った…。

『ひかり、一緒にいると、あったかいんだ。めっちゃ優しいし、だから俺つい…』

『昴くんも、あったかいよ?』

『じゃ、ひかりももっと甘えたらいいんだ』

『……』

『あ、だからなんで、こういうときに、恥ずかしがるかな?甘えるの恥ずかしい?』

『なんとなくね…』

『いいんだよ、俺に遠慮はしないでも。甘えていいから。俺、そっちのほうが嬉しいよ』

『うん…。わかった』

そう心で言ってから、昴くんの肩にもたれてみた。あったかいエネルギーがどんどんやってくる。そのうち、私も眠ってしまったようだ。遠くで昴くんの声がした。ああ、悟くんと話していたんだ。その会話も、まるで子守唄を聞いてるように、心地良かった。

気づいたら、昴くんのマンションの駐車場だった。

「ひかり、起きた?俺のマンションに寄ってく?」

「うん…」

ぼ〜〜ってしながら、私は目をこすった。

「じゃ、俺、このまま葉月を家まで送っていくから」

葉月ちゃんは、もう目を覚ましていた。

「昴くん、星野さん、お疲れ様でした」

と助手席の窓を開け、私たちに元気に言ってくれた。

昴くんの部屋に行くと、数日、家を空けていたっていう空気が漂っていた。

「なんか、空気こもってるな…」

と言いながら、昴くんは窓を開けた。

「あ、留守電」

電話の留守電が、点滅していた。聞いてみると、どうやらマネージャーさんが、

「実家から戻ったら、連絡ください」

と、何度も入れていたようだ。

「実家に行ってることにしたの？」

「うん。実家で休養してくるってことにしたんだ」

「そう。でも、１０日も休んでたら、確か今ドラマの収録…」

「う～～ん。どうなっちゃったかな～～」

「ええ？」

「ま、どうにかなるって」

にこって笑って、ドスンと、ベッドに昴くんは座った。

「ひかりも、ここ！」

自分の座った横をぽんぽんとたたいて、昴くんはそう言った。私が昴くんの横に座ると、ぎゅ！と抱きしめてきた。

「帰って来たね」

「うん…。なんか、不思議だね」

「え？」

「同じ人たち、同じ場所。でも、次元は違う…」

「うん」

「向こうの次元も、懐かしいな」

「うん」

「……」

「低かったときの俺も、そんなに好きだったの？」

「え？」

「今、思ってたじゃん」

「うん。大好きだったよ…」

「ちょっと、寂しい？」

「ふふ…。昴くんは、昴くん。ここにいるもの」

「うん」

昴くんは、優しくキスをしてくれた。

「このまま、泊まっていくわけには…」

「うん。今日は帰る。親も心配してたら困るし」

「だよね」

「それに、こっちの次元の家族にも早く会いたい」

「そうだね」

「昴くんも、仕事大変だろうけど頑張ってね」

「うん。頑張るよ！」

ギュ…。また抱きしめあって、それから私は、荷物を持って外に出た。

帰り道は、みんな穏やかな表情をしてて、喧嘩をする人もいなければ、小競り合いもなかった。空を見ると、もう夕日に染まりだしていた。

「奇麗だな」

立ち止まって夕日を眺めていると、横を通りがかった親子も立ち止まり夕日を見て、

「お母さん、奇麗だね」

「本当ね」

と、会話をしていた。ほほえましいな…と思いながら、また私は歩き出した。

家に着くと、

「おかえりなさい」

と母が、飛んで来た。

「疲れたでしょう?大変な研修だったんだって?」

「え?」

「ほら、荷物持つわよ。あら、１０日間、こんな荷物で間に合ったの?」

「え…うん。向こうに揃ってたから」

母は、優しかった。母からは、たくさんのあったかい光が出ていた。

リビングに入ると父もいて、

「やあ、おかえり」

と優しく、出迎えてくれた。父からもあったかい光が出ていた。

「広輝はもう、一人暮らしを始めたよ」

「え?お兄ちゃんが?」

「昨日引越しだったんだよ」

「そうだったの」

１０日いないだけで…。

「アパートの住所聞いてるから、今度ひかり遊びに行ってきたら?」

「うん。そうする」

私はリビングで、母の淹れてくれたコーヒーを飲んで落ち着いた。

「あなた、研修行ってたから、知らないかもしれないけど、昴くんがね…」

「知ってる。インフルエンザでしょ？」

「そうなのよ。大丈夫かしら」

「もう、明日から復帰するみたい」

「そうなの？良かったわね。あ、悟くんなんて入院…」

「それも、知ってるよ。でも、もう復帰できるって聞いたよ」

「そうみたいね。１０日間の入院だって言ってたから…」

「あ～～、私、部屋で休むね」

「夕飯できたら呼ぶわね」

「うん」

なんだか嘘ばかりついてて、申し訳なさを感じた。そのとたんに黒い霧が出たから、さっさと退散することにした。

部屋に行き、ぼ～～ってした。それから、こっちの次元での、ミッションって何かな？…と、思っていると、昴くんが、

『今に、生きることだよ、きっと』

と、答えてきた。

『…そうだね』

『うん』

『昴くんと、今を感じながら生きていくよ』

『うん。あ。俺ね、さっき…』

『うん？』

『あっちの次元の俺のこと、呼んでみたんだ』

『え？』

『そうしたら、答えてきた』

『ええ？』

『俺らが去った後、車に乗って帰って来て、ちょうど今仕事の待ち時間だってさ』

『話せたの？』

『うん』

『私は？』

『時間がなくて、途中でひかりと葉月ちゃんは降りて、電車で帰ったみたい。俺と悟さんは、仕事場に直行だって』

『大変そうだね』

『うん。俺は家でのんびりしてるって言ったら、ずるいって言われた』

『あははは…。そうなんだ』

『でも明日から、きっと鬼のように忙しくなると思うって言ったら、ざまあみろだってさ。あいつ、てんで変わってないんじゃないの？』

『ふふ…。面白いね』

『ま、いっか』

『私も、出来るかな』

『出来るよ。やってみたら？』

『うん』

『じゃあね…。俺、眠くなったから、ちょっと寝るよ』

『うん。おやすみ』

『おやすみ…』

と、言ってからすぐに寝たらしい。意識が夢の中へと入っていくのを、感じ取れた。

低い次元の私か…。でもしばらくは、昴くんのエネルギーを感じていたくて、その日は、昴くんのエネルギーを感じるようにしていた。

翌日本屋に行くと、更衣室に入るなり、

「旅行どうだった?」

と、聞かれてしまい、戸惑っていると、

「おはようございます。はじめまして、私、司といいます」

と横から、ずいっと私の前に来て、司さんが丁寧に挨拶をしてくれ、そのうえ、

「いろんなわからないことを、教えて欲しくて」

と強引に私の横にへばりつき、あまり、重要でもないようなことをあれこれ聞いてきた。どうやら、守ってくれているようだった。私が着替え終わると、自分のロッカーの方に司さんは戻って行った。

事務所に行くと、斉藤さんが、

「お久しぶりです」

と言ってきた。あ、ここでも旅行のことを聞かれるかと身構えていると、

「星野さんは、新しい小説に取り掛からないんですか？」

と、質問してきた。ああ、斉藤さんは小説以外、興味を持たないんだっけね。

「そうね…。今のところ、書きたいものもないし…」

「そうですか。でも、ぜひまた書いて欲しいな…。楽しみにしていますから」

「ありがとう」

こっちの次元の斉藤さんのほうが、なんとも素直で可愛いわ。いや、低い次元の斉藤さんも、斉藤さんなんだけどね。

葉月ちゃんは、今日夕方からのシフトだった。私は一人でランチをしようと、地下のカフェに行くとそこに、司さんがやってきた。

「ランチ、一緒にしてもいいですか？」

「うん、いいよ」

「良かった～。私まだ、仲いい人ができなくって」

「そうなの？」

ほっとした顔で司さんが、前の席に座った。

「星野さんは、もうずいぶん前から、昴くんが自分と同じ魂で、魂

の片割れだってこと知ってたんですか？」

「う～～ん、そんなに前でもないかな。６月くらいだから」

「その頃からの、お付き合いですか？」

「そうだったかな」

「前にラジオで言ってた彼女って、星野さんのことですよね？」

「え？うん」

「私、羨ましくって…。あんなふうに思われたら、絶対に幸せだなって思ってたんですよ」

「あ、そうなの？」

そんなことを口にしても、司さんからは黒い霧は出なかった。

「だけど、昨日、わかっちゃったじゃないですか」

「え？」

「私の魂の片割れ」

「ああ、あの男の子」

「はい。星野さんと昴くんほど年は離れてないけど、彼も年下で…。あ、私今、２０歳なんです。それで、彼、寺門陽平くんは１８歳で、大学１年生なんです」

「あれ?昴くんと一緒かな?」

「はい。2歳しか変わらないですけど、でも、話してるてけっこう幼くて…」

「へえ」

「だけど、それがけっこう可愛くて…」

「ふうん」

「あ、昴くんほどのイケメンじゃないですけど、見た目も可愛いし」

「そうだね。もっと若く見えるよね」

「はい。昨日もずっと話をしてたら、すごく気もあって…」

「うん」

「そ、それで!こんなことって、星野さんもあるんですか?」

いきなり身を乗り出して、司さんは聞いてきた。

「何?」

「あの…テレパシー…。陽平の声が聞こえちゃうんです」

ちょっと、声のトーンを下げて司さんは言った。

「あ…。心で会話が出来ちゃうんだ？」

「はい。星野さんも昴くんと？」

「出来るよ」

「やっぱり～～？」

司さんは大声を出し、周りの人がこっちを見た。

「あ、すみません」

司さんは、少し悪かったって顔をしてから、ランチのトーストを食べだした。

「あの…」

少しすると、また話し出した。

「私、もうすでに、陽平のことが好きになってると思うんですけど…」

「え？うん」

「陽平は、別にそういうこと思ってないみたいで」

「…そうなの？」

「なんか、彼女もいるみたいで」

「そうなんだ」

「こういうのって、どうしたらいいんでしょうか？」

「う～～～ん。ごめん。わからないや…。でもそういうのも、全部、陽平くんに聞いてみたらどうかな？」

「なんて？」

「わからないけど、とにかく、ほら。心で会話が出来るなら、なんでも筒抜けだからさ…」

「そうなんですよね。だから、彼女いることもわかったし」

「あ、そうなんだ」

「隠してたんですよ～～。でも心で会話したら、わかっちゃって。そうしたら陽平が、隠し事できないんだなって…。それから、開き直って」

「開き直る？」

「はい。私のことは、別にどうも思ってないってはっきりと」

「ふ～～ん…」

「はあ。先が思いやられるな…」

「でもそんなに未来のことを、思い悩まなくてもいいんだよ。今、この瞬間のことを感じて味わっていたら、それで」

「え？」

「なるように、なってるから」

「そうなんですか～？あ、いろいろとこれからも、教えてくださいね！」

「うん」

なんか、向こうの次元の司さんと違って、素直で可愛いな…。と、思いつつも、何度も昴くんと恋をしていた魂なんだよなって、心のどっかでひっかかる…。あ、こんなこと思ってたらまた、昴くんに何て言われるか…。いや、やきもちやいてくれたほうが嬉しいって言うかな。

でもな…。でも…。でも、なんだろう…？なんだか、自分の思ってることがわからない、釈然としない。

ランチが終わり、仕事に戻った。

今までならけっこういきなり、昴くんが話しかけてくることが多かったけど、今日はないな～。昴くんのエネルギーを感じてみても、思ってることはわかりづらかった。もしかして、本当に忙しくなっちゃってるんじゃないだろうか？

仕事が終わり帰りの電車で、昴くんのエネルギーに集中しても、家に帰り、集中しても声が聞こえてこない。一瞬だけ同化したが、頭の中は台詞でいっぱい。ものすごい集中力で、覚えているようだった。仕事、頑張ってるんだな…。

そう思うと、私も、また小説を書いてみようかっていう気になった。
私もなにか、やっていたいというか、昴くんが頑張ってるんだから、頑張りたいっていうか…。

パソコンを開き、まず、無料小説サイトのランキングを見てみた。
私の小説が1位になり、アクセス数もどっと増え、そのうえ感想もたくさん書かれていた。その中に、こんな感想があった。

＞新しい小説も楽しみにしています。

「新しい小説か…」

ふと、私の頭に浮かんだのは私と昴くんのことだ。アセンションのことを書いた小説…。早速、ワードに書き始めた。不思議だ。また、すらすらと書ける。

もちろん、名前は変えたし、少しずつ状況も変えた。だけど幽体離脱をして、宇宙船に行ったことや、ミッションのことはきちんと書き記した。

夜中も2時を過ぎた頃、小説を書くのを切り上げお風呂に入っていると、

『ひかり、起きてる？』

と、昴くんの声がした。

『うん。起きてるよ』

『何か、集中してた？小説？』

『わかった？』

『うん。次々に文章が浮かんだり、その場面が見えてたね。俺、そういうのも、わかるよになったよ』

『昴くんは、何してたの？』

『さっき、家に帰ってきた。今風呂だよ』

『仕事そんなに遅くまで？』

『うん。撮影できなかった分、思い切り今撮ってる。明日も、6時起き』

『大変…』

『それ、俺らの話だよね？』

『え？ああ、そう。アセンションの…』

『うん。いいかも。小説で発信するのも』

『だよね？そういえば、私の小説からはものすごい光が出てるって、流音さんが言ってた』

『流音さん？』

『漆原さんと同じ魂の女性』

『そうなんだ』

『うん。だったら、また、小説書いてもいいかなって思って』

『うん。いいんじゃないかな。俺らは、とにかく光を出す。それが使命だと思うって、漆原さんが言ってたよ』

『漆原さんたちは、どんな使命があるの？』

『多分、白河さんのサポートをすることなんじゃないかな。今はね』

『ふうん』

『じゃ、また小説書けたら、サイトに載せる？』

『うん』

『そうしたら、また俺のブログで紹介するよ』

『うん、ありがとう』

『ひかり…』

『え？』

『……』

『え？』

『あ。今、寝そうになった。やばい…。もう風呂出るよ。ひかりのエネルギー感じてたら、あったかくって気持ちよくなって寝るとこだった。そんじゃね』

『うん。昴くん、大好きだよ』

『うん。俺も』

ほんとだ…。今にも寝そうな感じだ。大丈夫かな、ちゃんとお風呂から出れたかな?思い切り、心を静かにして昴くんに集中した。あ…、同化したみたいだ。

お風呂から出て着替えて、髪の毛をバスタオルでゴシゴシってして、ものすごい勢いでドライヤーをかけ、でも半乾きのまま、部屋に行くとばったり…。そのまま、ベッドに倒れこんだ。と思ったら、ぐ〜〜〜。寝ていた。

ああ…。髪の毛、きっと朝爆発するよ?と、思った瞬間に、自分の体に意識が戻ってきた。

ブクブク…。あやうい。昴くんのことばかりに集中してて、私のほうがお風呂で、おぼれそうになってた。

「やばい!」

慌てて私もお風呂から出た。着替えてゆっくりと髪を乾かした。ぼ〜〜っとしながら、髪を乾かしていると、時々昴くんの部屋の匂いがした。それから不思議と、昴くんのベッドで寝ているような感覚…。半分同化していたのかな。

それから、私もベッドに入って目を閉じた。そして、あっという間に眠りに着いた。夢の中で昴くんは、私を見つけて、

「ひかり！」

と走って寄ってきた。それから、

「ワン！」

とまた、じゃれついた。

え？え？ええ～～～？なぜか、昴くんのお尻から、犬のしっぽがはえてて、ぐるんぐるんと振り回していた。そのうち、ほんとに、犬になっちゃうんじゃないか…。そんなことを思って、笑ってしまった。

しっぽは次の瞬間、消えていた。それから、私と昴くんは宇宙空間に移動して、そこから地球を眺めた。

「奇麗だね」

「うん、奇麗だ」

私たちは夢で、うっとりと地球を眺めていた。

それから、また3日間であっという間に小説を書き上げた。

昴くんは、めちゃ忙しいらしく、心で会話も出来ないほどだった。でも、なかなかやりがいのある役らしくて、夢で興奮して撮影風景

や台詞を教えてくれた。

昴くんが演じる高校生の男の子は、とってもクール。昴くんとは正反対だねと言うと、

「俺だって、クールじゃんか～～～！」

と、のたまいた。

「クールって言うのはね、悟くんのような」

「ひかり、クールな人のほうが、好みなの？」

「私？私は別に…。昴くんが1番いいけど」

「でしょ？！」

夢の中でそんな話をした。最近昴くんは夢の中で喜ぶと、しっぽがはえて、ぶるんぶるん振る。

「これ、可愛いよね～～」

としっぽに触ろうとすると、

「駄目！犬のしっぽは触ったら駄目なんだよ。知らなかった？」

と、わけのわからないことを言う。

小説はまた、無料の小説サイトにどんどん載せていった。昴くんが、

またブログで紹介したので、あっという間に、アクセス数は増えた。

「今　このときを　愛してる」も、昴くんは雑誌のインタビューで言ってくれて、その雑誌が発売すると、またアクセス数が増えた。

そしてその1週間後に、なんと、

「この小説を、本にしませんか？」

というメッセージが来たのだ。

「昴くん、本にしませんかっていうメッセージきたけど、どうしたらいいの？」

その日の夜、夢の中で聞いてみた。

「出版社は？」

「○○出版だって」

「知らないな～～」

「あ。怪しくないかな？」

「そうだな…。ちょっと、事務所の人とか、周りの人に聞いてみるよ」

「え？」

「ほら、雑誌の編集者とか記者の人とか、知り合いいるし」

「うん」

「本だけじゃなくて、ドラマ化されるかもよ」

「え?!」

「今、現場でも俺、この小説気にいってて、ぜひ読んでみてって、会った人会った人に言ってるんだ。それで、いろんな役者さんや脚本家の人も目を通したみたいで、これはドラマにしても面白いかもってさ」

「ええ?」

「今共演してる人は、映画の監督もしてるんだけど、映画にするのもいいな~、もし映画化するなら、お前主演するか?って、今日聞かれたんだ」

「す、すご~~い!」

「すごいでしょ?」

「……」

「信じられないの?」

「うん。そんなにうまくいっちゃうと…」

「しょうがないじゃん、これもまたミッションなんだから、うまくいっちゃうって」

「そうか…」

「ま、どうなるかはわからないけど、それも宇宙に任せておこうよ」

「うん」

私はその夢で昴くんに、ぎゅって抱きつくと、昴くんも私をぎゅって抱きしめてくれた。

「昴くんの匂いがする。夢でも、匂いがするから不思議」

「そうだね。ひかりも、いい匂いがするよ。石鹸？」

「シャンプーかな？」

「あ、やばいです。その気になりました」

昴くんはそう言うと、いきなり押し倒してきた。それまで、奇麗な海を眺めながら私たちは、話をしていたのに、場面は一気に昴くんの部屋に変わった。

「こういうときには、昴くんの部屋なんだね～」

「うん。１番落ち着く」

昴くんは、夢だとちょっと強引になる。でも私も夢なんだし、甘えちゃえって、思い切り甘えてみた。

「え？ひかり？」

昴くんがびっくりしてるから、

「だって、これ夢だし」

って言うと、

「あ。そうだけど」

と、まだ驚いた顔でいたが、

「でも、甘えてくるひかり可愛いから、現実でも甘えてきて！」

と、ぎゅって抱きしめてきた。ああ…、そんなことを言う昴くんが、めちゃ可愛いんだよね。そう思いながら昴くんの頭をなでると、またしっぽがはえ、ぐるんぐるん振り回っていた。このしっぽ、どんな仕組みになっているのやら…？

日中は本当に、会話が出来ない。思わず心で、何かあると、

『昴くん』

と、話しかけてしまうが、返事がない。

『あ、そうか。忙しいんだっけ…』

オンエアがあるのは、あと1週間後、そうとうな追い込みのようだった。

「はあ…」

ちょっと寂しい。

テレビ欄を見ると、昴くんの名前が何箇所にも出ていた。番宣で出るようだった。リビングで、昴くんが出ている番組を見ていると、

「あら。テレビに出るの、久しぶりよね～～」

と母が、横に来て言ってきた。

「うん。もうすぐ、ドラマ始まるから、今番宣で出てるみたい」

「ドラマ出るの？」

「うん。もうすぐだよ。始まるの」

「楽しみね～」

「うん」

画面の中の昴くん、ものすごく奇麗だ。笑い顔はめちゃ可愛い。ああ…。なんか、ものすご～～く遠い存在のような気もしてしまう。

『大好きだよ～～！昴くん！』

と、心で叫んでみても返事がない。ああ…。寂しいぞ…。かなり…。

その夜、バスタブに浸かりぼけってしながら、きっと昴くんとは会話できないんだし…と思い、低い次元の私に話しかけてみた。どうやったら、いいのかわからなかったが、とりあえず心を静かにし目

を閉じて、

「私…。低い次元の私…」

と声をかけてみた。それを何回か繰り返していたら、

『もしかして、高い次元の私なの?』

と、体の中から声がした。

『そう!私!』

『やっぱり?今、どこ?』

『高い次元で、お風呂はいってる』

『私も、お風呂にはいってるよ』

『え?そうなの?』

じゃ、ここに一緒にいるんだ、次元は違っても…そう思うと、ちょっと嬉しくなった。

『そっちの次元の、昴くん元気?』

『うん。めちゃくちゃ、元気』

『仕事忙しくない?』

『ドラマの撮影で忙しい。会えないけど、夢の中で会えてるんだ』

『あ、一緒だ』

『高い波動の昴くんは、優しい？』

『優しいよ？なんで？』

『うん、こっちの次元の昴くんも、前より優しい。でも、ちょこっと強引。それに…』

『それに？』

『最近、甘えてくる』

『へえ。そっちの次元の昴くんもなんだ』

『時々、情報交換できるといいね』

『うん。しようね。また、コンタクト取るから…』

『うん。じゃ、またね』

プツ…。電話が途切れたかのように、声がいきなり消えた。

ああ。私も違う次元の私と、話が出来たんだな～。嬉しかった。違う次元の昴くんのことも聞けて、嬉しかった。

夢で、そのことを話そうと思っていたら、その日の夢はずっとドラマの撮影をしていた。昴くんの頭の中、ドラマのことしかないな、こりゃ…と思ったけど、けっこうその夢も面白かったから、私は昴

くんと同化しながら楽しんでいた。

それからも、時々、次元の違う私と交信をした。低い次元でも、昴くんと会話が困難になっているので、私と交信している時間が、取れるってことだった。

そして1週間して、ドラマが始まった。一回目から面白い内容だった。半分くらいの内容は、夢の中で昴くんが、何回も見せてくれたのでわかっていたが、きちんと、ストーリーになって見てみると、もっと面白い内容だったのがわかった。昴くんのミッションに近いのだ。

自殺をしようとしていた、同じ高校の女の子、結花を昴くん扮する遠山希一が助ける。かたくなに閉じている彼女の心の声を、希一は超能力を使い聞きだしていく。そして、いじめが原因で自殺をしようとしたことがわかり、誰がいじめをしていたのかを探り当てる。

学校の先生や警察も動く中、希一は単独で、いじめをしていた首謀者の子に会い、彼女の心の声も聞いていく。自分よりも、周りからもてはやされ、注目を浴びていた結花に嫉妬し、根も葉もない噂を流して、回りの女子高生も巻き込み、いじめをしていたことがわかった。

でも、その子もまた親に愛されずに育った、とても孤独な幼少時代を過ごしていて、認められたい、愛されたいという気持ちが、人1倍強かったことを希一は知る。そして、彼女が抱えていた苦しみを知ったうえで、希一は彼女に話しかけ、彼女の心も変わっていく。そして、その子が首謀者は自分だと名乗りをあげる。その子は反省をして、人生をやりなおす第一歩を踏み出すというストーリー。

希一の台詞がとてもいい。

「君だけじゃないんだ。孤独をかかえているのは！みんな、認められたい、愛されたいと思ってる。人を妬んだり、ひがんだりもしている。だけど、どの人も人を愛する心も持ってるんだ。それは、君の中にもあるんだよ」

「君は結花さんが、自殺未遂したことで、そうとう苦しんだね？自分のせいだと…。そこでようやく自分がしてしまった大きな過ちに、気づいたんだね？」

「自分を裁くのは簡単だ。だけど、これからは自分や周りの人を信じたり、愛したりしていかなくっちゃ。それがせめてもの罪滅ぼしだよ」

そんな言葉をかけられ、その女性は泣き崩れ、それを聞いていた親も、自分たちが、放任過ぎたと反省をするという、そんなシーンがあった。

それに自殺を図ろうとした、結花に対しても、

「命を絶対、粗末にしちゃ駄目だ。どれだけ君の両親は、君の事を大事に思ってるかわかってる？」

と、かなりの迫真の演技で、昴くんは言っていた。

「君は、ものすごく価値のある、愛されている存在だ。絶対に、自分の命も人の命も、大事にしなくちゃ駄目なんだ！」

涙ぐんでいた。昴くん、思い切りここの台詞思い入れがあったようで、夢でも何回も言ってたもんな～～。

一回目は、そんな内容。次回は、また別の事件がある。試験の答案用紙が盗まれるという、そんな事件。その犯人を超能力で見つけ出すという、そんな内容だ。

2回目からも、結花は登場する。すっかり希一のことが好きになり、つねにそばにいて、希一のことを助けようとする、そんな役のようだ。

結花役は、今、超売れてる女優。モデルもしてて、背がすらっと高くて足が長くて、ものすご～く可愛い。う～～～ん…。複雑…。もしかして、ラブシーンとかあるのかな。

それにしても、この希一は、超、超クール。高校生とは思えないようなクールさで、最後だけ、熱く語ってはいるのもの、いつもはすごいクール。どうやら、クールなのに情にもろいというか、実は熱いものを秘めているという、そのギャップ差を売りにしようというドラマのようだ。クールな昴くんと、熱く涙ながらに語る昴くんと、両方の昴くんを楽しめるという感じかな。

番宣でアナウンサーが、

「クールな昴くんと、熱い昴くんがこのドラマで見れると聞いたんですが、昴くん自身は、どちらなんですか？」

と聞いていた。

「僕ですか？う～～～ん。両方とも、違うかな」

「え？」

「僕自身は、いつも能天気でおちゃらけてて、クールでもないし、そんなに熱くなることもないですから」

「え？そうなんですか？意外ですね。けっこう年齢のわりには、落ち着いてらっしゃいますよ」

「あ。それは多分、猫かぶってるんです。普段は、こうじゃないですよ」

と、ちょっと笑って言ってた。

そうよね。クールさのクの字もないよね…。ってその時、思ったんだ。それ、もし聞こえてたら、絶対に、すぐまたすねたんだろうな…。だけど、私の心の声を聞いてる暇もないくらい、忙しいみたいだからな～。

すごいのは、その熱く語るときの昴くんから、ものすごい光がテレビの画面から放たれることだ。くるくると光が画面から出たと思ったら、辺り１面を覆う。これは、すごいよ。見てる人を包み込んじゃうよ…。

アセンションのために、このドラマにも出ることになってるんだろうな…。これからも、楽しみなドラマだ。

私の新しい小説「２０１２年　愛と光の地球」も、ものすごい勢いで、アクセス数が増えていった。感想には、

「面白い内容ですね。少しわかりにくいけど、こんなことを考えられるのはすごいと思います」

なんていうのもあり…。半分以上は、ノンフィクションなんだけどな…とも思ったりした。中には、

「アセンションのことが、わかりやすく書いてある小説ですね」

という感想もあり、あ、この人はもしかして、目覚めてる人かな？とも思った。

そんなとき、メッセージが届いた。

＞この小説のように、私も、自分のミッションに気がついちゃったんです。幽体離脱も経験しました。でも、宇宙船には行ってません。ただ、私にも魂の片割れがいるのは、感じてます。どうしたら、その相手と会えますか？

というメッセージだ。私は、返事をするかどうか迷った。もう少ししてから返事をしてみようと、そのまま保留にした。

パソコンを閉じて、布団に潜り込み、うとうととした頃に声がした。

『ひかり…』

『昴くん？』

『ドラマ観た？』

『観たよ』

『どう?俺どうよ?』

『……』

『え?やっぱりクールじゃないって何?どういうこと?』

『私、そんなこと思ってた?』

『今、一瞬…』

『くす…。かっこよかったよ。それに、なかなかいいドラマだね』

『でしょ?俺のあの熱く語るシーンもいいでしょ?』

『くす…』

『なんだよ?さっきから~~。笑ってばかりで』

『良かったよ。感動した。それに、ものすごい光が出てたよ』

『うん。愛を感じながら、台詞言ってたから』

『ふうん』

『え?何?やきもちやいてるの?』

『え?何が?』

『今、思ってたじゃん、あの結花役の子可愛い。ラブシーンあったら、嫌だなって』

『思ってないよ！』

『ちぇ～～。思ってよ。少しくらい』

『そうきたか…』

『え？』

『なんでもない。でも、あの子本当に可愛いね』

『え？そう？』

『思わないの？めっちゃ可愛いじゃない？』

『そうかもね』

あれ？これ、嘘ついてる？って、エネルギーを感じ取ろうとしても、嘘をついてる感じがしない。

『なんで、嘘つかなきゃいけないんだよ？可愛いかもしれないけど、俺、ひかりが1番だから』

『あ、そう…』

『あ～～～～。照れてる、照れてる！』

もう～～～。子どもなんだから～～。

『どうせガキだよ！そんなこと言うんだったら、俺、もう寝ちゃうよ？』

『いいよ、夢でまた、抱きついてくるんでしょ？』

『俺が～～？ひかりでしょ？夢の中じゃ、ひかり甘えん坊だよ。よっぽど、いつもより素直だよね』

『いつも素直じゃなくて、悪かったわね』

『……』

『え？』

今、可愛いって思ってた？

『うん』

『……』

『あはは！また、照れてる～～～すんげえ、可愛い～～！！！』

も、もう～～～、本当にもう寝よう、私。

『夢で会おうね！』

『うん。おやすみ』

と言いつつ、夢の中はまたドラマのセット。ああ、またかって思っ

てると、昴くんがこっちに来て、

「ひかり、愛してるよ」

と、セットの中で、抱きしめてキスをしてきた。あ～～～。昴くん、ドラマと私と、もうごっちゃになってるよね～～。

私に向かって台詞を言ってみたり、いきなり世間話をしてきたり…。ま、いっか～。しばらくは、こういう夢の繰り返しかもしれないな。それだけ、今ハードなんだよね…。

せめて夢の中だけでも、気が休まったらいいなって、昴くんに思い切り光を出して包み込み、ぎゅって抱きしめると、場面がいきなり草原に変わり、草原の気持ちのいい風を二人で感じて、そして昴くんは私の膝枕で寝てしまった。

夢の中で寝るってどうよ…って思ってると、

「ひかり、気持ちいいね。すごく気持ちが楽になる…」

と、目を閉じたまま昴くんはそう言った。良かった…。気持ち、落ち着いたんだ。そのまま昴くんは、私の膝枕で気持ちよさそうに寝ていた。

それからの数週間、昴くんとは会えなかったが、私の周りでいろんなことが起きた。

昴くんが○○出版のことをいろんな人に聞いてくれたのだが、そのことで別の大手の出版社が、「今　このときを　愛してる」を出版

しないかと申し出があり、その話がどんどん進んでいった。

それどころか、昴くんと共演している人が、映画化もしようということになり、そっちの話も進み出した。

本の出版、映画化が同時進行。これはなかなか、すごい展開だった。主人公は昴くん。昴くんの上司役がその、共演者ということにもなっていた。

『ひかり、なんかこの展開すごくない？』

そんなある日の夜中、昴くんが話しかけてきた。

『うん。すごいよね』

『低い次元だと、まだ本の出版が決まったくらいみたいだ。でもひかりの書いた小説、けっこう話題になってるみたいだね』

『昴くんも、あっちの次元の昴くんに聞いたの？私も聞いたんだけど、「２０１２年　愛と光の地球」も、すごいアクセス数になってるらしいよ』

『こっちでも、アクセス数すごいね』

『うん。なんかもう、びっくりだよ』

『ひかりの小説の映画化、来年の春から撮影始まるようなこと言ってたよ』

『ほ、ほんと？』

『本も、春に出るんだっけ？』

『3月って言ってた』

『う～～ん。すごいね！わくわくするね』

『圭介の役なんだよね？』

『そうだよ』

『わ～～～。楽しみだな。昴くんの圭介…』

『あ、そうだ。瑞希の役も決まったよ』

『え？誰？』

『菅原エリカ』

『え？！すごい！私、瑞希役だったら、菅原エリカがいいな～～って思ってた』

『知ってる。だから俺、瑞希役は、菅原エリカさんがいいと思うって、言ってみたんだ。そうしたら、その意見通っちゃった』

『すごいね。確か、今年３０歳くらいだったっけ？』

『ああ、そうだっけ？あれ？ひかりとそんなに変わらないんだ…』

『うん』

『大人っぽいよな～』

『誰が？』

『え？』

『どっちが？』

『えっと～～』

どうせね、私はてんで大人っぽくないですよ。

『あはは…。すねてる？可愛いよね～～』

もう～～～！！こういうのは、聞くな！

『あははは…。そりゃ、しょうがないじゃんか。聞こえちゃうんだもん』

『はあ…』

『え？どうしたの？』

『なんか、このものすごい展開に、ちょっとついていってないの』

『そうなの？』

『う～～ん…。バイトもどうしようかな。なんかね、小説担当の人がついてくれて、何回かゲラ刷して、チェックしてってするらしく

って』

『ふうん』

『けっこう忙しくなるのかな～～』

『大丈夫だよ。でももし忙しいのが嫌だったら、バイトやめてみるっていう手もあるけど…』

『う～～ん』

『きっと、ベストセラーだよ？バイトする必要もなくなるかも』

『え～～？そうかな～』

『万が一、それで食べていけなくても、俺が養ってあげるから』

『いつの話？それ…』

『すぐだよ、すぐ！』

『ふふ…。何万光年もさきじゃないよね？』

『すぐだって！』

『わかった。今年いっぱい働いて、来年やめることにする』

『うん。俺も来年には、２０歳になるし』

『それ、なんか意味あるの？』

『もう大人ってこと！』

『……』

『何？大人になれないって思ってるの？』

『そんなこと思ってないよ～～。多分』

『聞こえたから！昴くん、まだまだ子供なのにって』

『え？そんなこと思ってた？やだな。無意識だ、それ』

『ちぇ～～～。いいよ。べっつに～～～。魂じゃ年齢関係ないし～～！』

くすくす…。

『昴くん、もう1時過ぎたよ。寝なくていいの？』

『寝るよ！』

あ、すねちゃった。可愛いな～～。ほんとに…。

『おやすみ！でもね、言っとくけど、けっこうひかりだって、子供っぽくて可愛いんだよ？』

『…おやすみ！』

昴くんとは、もう何週間会ってないかな…。でも、夢では会えてい

たし、寂しいっていうのはないな～。

『俺は、ひかりに会いたいよ？』

あ、まだ聞いてたのか。

『ひかりは、会いたくないの？』

『会いたいよ。だけど、昴くんのエネルギーは感じられるから、寂しいっていうのはないよ』

『そっか。俺は寝るとき、横にひかりがいてくれたらって思うけどな…』

『……』

『ごめん！困らせた。いつかそういうときが来たら、一緒に暮らせるよね』

『うん…』

『じゃ、本当におやすみ』

『おやすみ…』

一緒に暮らす…。考えるけど、でもどうしてもまだかなっていう気がして…。なんでかな？きっと、昴くんの言うように、一番いい時期に、一緒に暮らせるようになるってそんな気がする。

その日眠ると、昴くんは夢で甘えてきた。

「だって、俺、子どもだし～～」

と、開き直りながら…。

12月、ドラマの収録が無事に終わり、クリスマスは一緒に過ごせた。その日、私と昴くんは丸1日べったりと、昴くんの家で過ごした。小さなクリスマスツリーを昴くんは、買っていた。私はクリスマスケーキと、小さな可愛いキャンドルを持っていった。

夕飯は二人で作った。食べ終わり明かりを消して、キャンドルだけにしてみた。

「なんか、いいね。キャンドルって…」

昴くんがそう言いながら、私のことを後ろから抱きしめた。

「うん…」

昴くんの腕の中は、相変わらず優しいしあったかい。本当に最近、ずっとお互い忙しくて、こんなふうに抱きしめてもらったのも久しぶりだ。

「ひかり、やきもちやいてた?」

「やきもち?」

「結花役の、女優さん」

「ああ…、なんで？」

「ラブシーン、見れなかったでしょ？」

「え？なんで知ってんの？」

「あはは…。その時、同化してた」

「ほんと？」

「うん。オンエアの時間にちょうど家に帰れたから、ひかりにエネルギーあわせて同化したら、なんかジェラシーみたいなのを感じて、テレビ消しちゃったからさ」

「もう～～、そんなときに同化しなくっても」

「へへ…。でも、そんなひかりも可愛いよね」

『昴くんにかかると…』

「そう、どんなひかりも可愛くなっちゃう…」

私の心の声を、読んで昴くんがそう言った。

「それ、私もだけどさ」

「どんな昴くんも大好き…なんでしょ？」

自分で言うか…。ほんとに、もう…。

「ひかり…。愛してるよ」

「うん」

「ひかりは、あんまり言ってくれないよね？」

「え？」

「言葉で、愛してるって」

「心では言ってるよ」

『ひかり、愛してるよ…』

昴くんは、心で言ってきた。

『…あれ？』

『え？』

『ひかりは？』

『しょうがないな～』

『え？何それ～～？』

『くす…』

『最近、俺のことイジメてない？』

『いじめてないよ～～』

『じゃ、なんで愛してるって言ってくれないの？』

あ、すねちゃった…。可愛いな～～。

『やっぱり、いじめてる』

「あはは…。いじめてないってば～～」

思わず声に出して、笑ってしまった。すねてる昴くんを、後ろからぎゅって抱きしめて、

『そんな昴くんも、愛してるってば…』

って心で言った。

『どんな昴くんも、愛してるから…』

もう一回、そう言った。

『ふ～～んだ』

あれれ？まだすねてる？

『全部全部、愛してるってば』

そう心で言いながら、もう一回ぎゅってすると、私の腕をぎゅって握って、

『俺も！！！』

って昴くんが、言ってきた。そして、やっぱりあい変わらず、私たちはお互いのあったかい光に包まれながら、その日眠りについた。夢の中でも、ずっとべったりくっついていた。

私の小説「２０１２年　愛と光の地球」に、「同じような体験をしました。」というメッセージが、何件か入っていた。昴くんや悟くんに、どう返事をしたらいいか相談してみたが、

「ほっておいていいんじゃないの？」

と言われた。

「俺らみたいに、目覚め出す魂が最近多いみたいだよ。他にもそんなブログ書いてる人、増えてきてるし」

「そうなんだ」

「うん。もう、２０１０年になるしね」

そんな話をしたのは、クリスマスも過ぎ年末になり、昴くんも悟くんも葉月ちゃんも休みが取れて、４人でやっとこ会えた日だった。私たちはまた例のごとく、昴くんの家に集まっていた。

「昴は実家に行くの？」

「う～ん、正月は行こうかな…。なんか、別に帰ってこなくてもいいわよって言われたけどさ。悟さんは？」

「俺は帰らないよ。面倒くさいし、親戚中集まるから、ゆっくりできないしさ」

「じゃ、昴くんも悟くんも、しばらくのんびりできるの？」

葉月ちゃんが聞くと、

「うん。葉月もけっこうバイト休み、取れたんだっけ？」

「うん」

葉月ちゃんが嬉しそうに言った。

「星野さんは、もう辞めちゃったんですよね」

「うん。昨日で最後だったんだ」

「寂しいな～。もう、バイトに行っても会えないんですね」

「でも、たまに、ランチしに行くよ」

「本当ですか～！絶対に来てくださいね！珠代ちゃんも、星野さんやめて、がっかりしてましたよ。３人でランチしましょうね」

「珠代ちゃん？ああ…。司さんか」

昴くんが、聞いてきた。

「そう、司さん。こっちの次元じゃ全然違ってて、私仲いいんだ」

葉月ちゃんが、そう答えた。

「司さん、魂の片割れとはどうした？」

「う～ん。あまり、変わらないみたい。恋人に進展するでもなし。でも、心で会話してるみたいだよ」

葉月ちゃんが、そう言うと昴くんは、

「ふうん」

と相槌を打った。

「気になる？昴くん」

って私が聞くと、

「え？なんで？」

とちょっと不思議そうに、昴くんが聞いてきた。

「なんとなく、気になるのかなって…」

「別に…」

『本当？』

心で聞いてみた。

『ひかりも、もう徹郎さんのこと、なんとも思ってないでしょ？』

『うん』

『それと、一緒』

『そっか』

『ただね、幸せでいて欲しいとは、思ってるけどね』

『うん。そうだよね。私も徹郎には、幸せになって欲しいもの』

「昴！」

悟くんが少し驚いた表情で、昴くんの肩をゆすった。

「え？何？」

「お前、低い次元の昴から、今コンタクトあった？」

「いや、ないけど…。今は、ひかりと話してた」

「なんかさ…、やばいことになってるって」

「え？」

「白河さんもノエルさんも、今、やばいってさ」

「低い次元の？」

「うん。こっちに来れるかって言ってきた」

「低い次元の悟さんから？」

「うん」

「待って、俺もコンタクト取ってみる」

昴くんは、静かにうつむいた。私も低い次元の私に、話しかけてみた。

『低い次元の、私…』

その次元に意識を向ける。

『あ！良かった！コンタクト取れて…』

向こうの次元の私が、ほっとした感じで言ってきた。

『助けに来てもらえないかな。できたら、高い次元の昴くんも一緒に』

『どうしたの？』

『闇にノエルさんが、捕まってて…。白河さんも本山から出てこられないし。ノエルさんのこと助けたいんだけど、闇のエネルギーが大きくて大変なの』

『わかった。今ここに、昴くんも悟くんも葉月ちゃんもいるから、みんなで行けると思う』

私がコンタクトをしていたように、昴くん、葉月ちゃんもコンタクトして、同時に同じことを聞いていたようだ。

「すぐに行く？とりあえず俺は、年始7日まで休みだから10日はいられる」

悟くんが言った。

「俺も、10日間はいられるよ」

昴くんが言った。

「私、7日まで休みです」

葉月ちゃんもそう、答えた。

「私は、今度のゲラ出来上がらないとチェックできないし、担当さんも年末年始休むから、多分、7日までくらい大丈夫だよ」

私が言うと、悟くんが、

「じゃ、とりあえず、旅行ってことにしよう。いったん家に帰って、連絡しないといけないところには連絡して、明日の朝、また集まって向こうの次元に出発ってのはどう？」

と提案した。

「OK！」

残り3人同時に、うなづいた。

悟くんが車で来ていたので、私と葉月ちゃんを家まで送ってくれた。

それから母に、

「悟くんと昴くんと、葉月ちゃんがお休みが一緒だったから、明日から旅行に行ってくるね」

と告げた。

「そんなにいきなりで、宿空いてるの？」

「なんか、悟くんの知り合いの旅館で…。さっき聞いたら空いてるって。1月7日頃戻るから」

「え？そんなにゆっくりしてくるの？あんた、小説は大丈夫なの？」

「うん。担当さんも年末年始休んでるから大丈夫。それじゃ、お風呂はいってもう寝るね」

そう言って、私はとっととお風呂に入り、とっとと寝た。

夢の中で、昴くんが、

「何があったのかな？なんか白河さんも、ノエルさんも大変なことが起きたって言ってたけど」

と話しかけてきた。

「うん。闇のエネルギーが大きいって言ってたよ」

「あっちの次元の俺じゃ、たちうちできないから助けに来いって。あいつ、強引にそう言ってたけど…」

「そうなんだ…」

「俺らのミッションだね。これ…」

「うん。そうだね。でも…」

「え？」

「白河さんでも大変なこと、私たちでなんとかできるのかな？」

「それはわからないけど、でも行くしかないよ。仲間、集まって何かをするときなんだよ」

「うん。そうだね」

「悟さんが言うように、こっちの次元は目覚める人が本当に増えてる。このままいけば、２０１２年にアセンションできるって俺、なんとなく確信してるんだ。ひかりの小説も映画化されるし、そうしたら、もっと多くの人に光を届けられる。だから、こっちの次元はもう安定してると思う。だけど、低い次元では、きっとまだ闇のエネルギーが強いんじゃないかな」

「うん。そうかも…」

「大丈夫！心配はいらないって。白河さんも言ってたじゃん。全部がアセンションのために起きることだよ」

「そうだよね」

昴くんは夢の中で、私をぎゅって抱きしめて、あったかいエネルギーをいっぱい送ってくれた。

正直少しの不安はある。でも、これもまたミッションだ。そして、昴くんも一緒に行くのだ…。これから、何が起きるのかは、想像も出来なかったが、何があってもいつも昴くんのことを愛してる…、その気持ちはずっと持ち続けながら、ミッションを遂行するんだ。そんな意気込みでいた。

さあ、明日また、あっちの次元に出発する。何が待ち受けているのだろうか…。

第3部　ミッション1　もっと次元を下げる（前書き）

ここから、第3部が始まります。

第3部　ミッション1　もっと次元を下げる

低い次元で、ノエルさんと白河さんに何かが起きている…。助けに来て欲しい…。そう低い次元の私たちから言われ、私、昴くん、悟くん、葉月ちゃんとで、低い次元へと移行することにした。

ちょうど、私たちは年末年始ということもあり、仕事も休みだった。12月29日の朝、私たちは集まり、ノエルさんのマンションに向かった。こっちの次元のノエルさんが気になったのだ。行ってみたらノエルさんではなく、なんと漆原さんと流音さんが現れた。

「良かった！来てくれたのね。こっちからみなさんに、会いに行こうかと思ってたのよ」

流音さんが、ほっとした顔で私たち出迎えた。

「低い次元の俺らから、コンタクトがあって」

そう、悟くんが言うと、

「じゃ、低い次元に行ってくれるのか？」

と漆原さんが、熱く聞いてきた。

「そのつもりで来ました」

昴くんがそう答えた。

「よし！じゃ、俺らと一緒に行こう。白河さんもノエルさんも行っ

てるから」

「はい」

漆原さんと一緒に私たちは、ノエルさんの部屋にはいった。ノエルさんの、怪しい雰囲気のする部屋を真っ暗にして、漆原さんと流音さんは、なにやらぶつぶつ言い出した。

それに、ＤＶＤも流し、妙な匂いのするお香も焚いた。ＤＶＤからは、真っ黒な霧が出始めた。おどろおどろしい音楽に映像も、思い切り怖い。あ、ホラー映画だ。

うわ～～～。すごい闇のエネルギーだ！体が重くなる。頭が痛くなる。隣にいた昴くんが、ぎゅって手を握ってきた。

辺りは真っ暗になり、ものすごい重圧感を感じて、そしてふっと体がもとに戻った気がして目を開けた。

「もう、低い次元だ」

漆原さんが、そう言った。

「気をつけてね。ここノエルさんの家だけど、ノエルさんが、闇のエネルギーと同化してるから」

「え？どういうことですか？」

悟さんが聞いた。

「こっちのノエルさんの中にある負のエネルギーが、闇のエネルギ

ーとリンクしてて、闇のエネルギーの中に閉じこもってしまってるの」

「ノエルさん、この家にいるんですか…？」

葉月ちゃんが、こわごわ聞いた。

「ええ。1番奥の部屋に閉じこもってるわ…」

廊下の1番奥…、確かに、ドアからも黒い霧がもわもわと出ているのが見えた。

「ど、どうしたらいいんですか？」

葉月ちゃんがまた、こわごわ聞いた。

「光を送ってみてはいるんだけど…」

そう言う流音さんに私は、

「白河さんは？」

と気になり、聞いてみた。

「本山の屋敷から、出られないのよ」

「どうして？」

「とりあえず、ここは彼らに任せて、私のマンションに移動しない？」

流音さんは、私の質問に答えずにそう提案した。

「彼ら？」

昴くんが聞くと、

「ええ。高い次元から、サポートしに来てる魂が他にもいるの。ずっとここにいて、ノエルさんを守ってるわ」

「そうなんですか」

「低い波動の人間だと、闇に囚われる危険があって…。もう、その闇にすっかりのまれてしまった人もいるから」

「え？」

私たち４人が驚いていると、

「さあ、流音のマンションに移動しよう。車を用意したから」

と、玄関から漆原さんが入ってきて、そう言った。

私たちは車に乗り込み、流音さんのマンションに移動した。流音さんのマンションは、そこから１０分もかからないところにあった。

中に入りリビングに通されたが、窓が大きく太陽の光がさんさんと降り注ぎ、とても心地のいい空間だった。部屋には、いくつも観葉植物が置いてあり、すごく奇麗な絵も飾られていた。その絵からも、不思議なあったかい光が見えた。

「この絵…」

私がその絵を見ながら、つぶやくと、

「私が描いたのよ。光が見える？」

と、流音さんが聞いてきた。

「はい」

「この部屋は、闇を浄化するようなものばかりを集めてるから、そうそう闇のエネルギーに、やられることはないと思うわ」

「ノエルさんはなんで、闇に？」

悟くんが聞いた。

「わからないわ…。闇をもう浄化できたと思ってたけど、最近になっていきなり、闇のエネルギーとつながり出して…」

「……」

私たち４人は、しばらく黙り込んだ。

そして、悟くんが口を開いた。

「でも、高い次元のノエルさん、来てるんですよね？」

「ええ。だけど、闇のエネルギーが強すぎて、表面に出られないん

だと思うわ」

「……」

また、４人とも黙り込んだ。

「あ…、さっき、闇のエネルギーにのまれた人がいるって…」

昴くんがそう聞くと、流音さんは少し話すのを戸惑っていた。横で、何も話さず黙っていた漆原さんが、言いにくそうに言った。

「昴、お前にはちょっと辛いことかもしれないけど、司珠代さんなんだ」

「え？」

昴くんが、驚いていた。

「初めはノエルさんを助けるために、あのマンションに来てたんだけど、途中からおかしくなって」

流音さんが、話しづらそうに話し出した。

「おかしくなって…って？」

昴くんが聞くと、

「こっちの次元の昴くんに、いきなり泣き出して抱きついたり…。ひかりさんを、ののしり出したり…」

「ええ？！」

私も、昴くんも驚いてしまった。

「わ、私たちに？」

「あ…」

昴くんが、どうやら、こっちの次元の昴くんの記憶を思い出したようだ。と、同時に私もよみがえってきた。

「なんか、すごい豹変してる…。ものすごい黒い霧も出してた…」

昴くんが、思い出しながらそう言った。

「そうなんだよ」

ちょっと、辛そうに漆原さんが答えた。

「ひかり、そうとう怖がってたね。でもこっちの俺が、どうにか守ってたみたいだけど」

「うん。こっちの次元の昴くん、前と全然違ってた」

「そりゃ、そうだ。ひかりのことは、どの次元でも俺は守るから！」

いきなり、昴くんがそう言った。

「…今の、こっちの昴くん？」

私が聞くと、

「そう。高い次元のひかりだろ？久しぶりだな」

と、にかって笑って答えた。

「今、司さんはどこにいるんですか？」

悟くんが聞いた。

「彼女の家。ノエルさんもなんだけど、具合が悪くなって出られなくなってる」

漆原さんがそう答えた。

「寝込んじゃってるの。熱があるわけじゃないけど、体中冷たくなってガタガタ震えて…。そっちにも、高い次元の仲間が行ってるんだけどね」

「そうなんだ…」

昴くんは、少し心配そうだった。

「じゃ、白河さんも屋敷から出れないのは、体の具合が悪くてですか？」

悟くんが聞くと、

「白河さんは違うわ。もう、高い次元の白河さんも表面に出られてるし…。ただ…」

「ただ？」

「ただ、教団がね、マスコミにたたかれてて…」

「教団が？なんで？」

昴くんが、そう聞くと、

「白河さん、あなたやひかりさんに影響を受けて、ブログを始めたの。２０１２年に、地球は破滅など起きない。すべてが、うそっぱちだ。恐れることはない。そんな内容の…。それが、あっという間に注目を浴びて、本も出版されるってところまでいってたの。だけど、２０１２年に地球は滅びると本を書いてた作家が、白河さんのことも教団のことも、あることないこと並べ立て、テレビで反論しだしちゃってね」

「……」

みんな黙って聞いていた。

「それから、マスコミが教団のことをたたきだしたの。カルト集団だ。危ない教団だって。取材陣が今、本山の周りを囲んでて、毎日報道してる…。それで、出て来れないのよ」

「その、作家って誰なんですか？」

悟くんが聞いた。

「海藤玄って作家だよ」

漆原さんがそう言って、本を自分の鞄から出した。

「これだ。見える？黒い霧が出てる…」

「わ！本当だ。本からも黒い霧が出るの？」

私が驚くと、

「ブログやメール、手紙やＦＡＸだって、エネルギーを出してるんだ。書き手のね」

と、漆原さんは言った。

「すごい恐怖をあおってるね」

悟くんが、その本を見ながらそう言った。

「ちょっと、手にするのも怖い…」

葉月ちゃんが、そう言うと、

「怖がることない。大丈夫」

と漆原さんは、その本をしまいながら言った。

「じゃ、白河さんは、ノエルさんのことを助けるわけには…」

「そうなのよ。今は、本山の中で報道陣からの闇を消すので精一杯なの」

「そっか…。じゃ、ノエルさんのことは、俺らがなんとかしないとならないのか」

「ええ。だからあなたたちを、こっちの次元に呼んだの。こっちの次元の昴くん、あやうく闇にのまれそうになってたし」

「俺が？」

昴くんが、驚いてた。

「司さんから出る闇と、リンクしそうになって…。悟くんと葉月ちゃんで、光を出して守ってたんだけど、ひかりさんも黒い霧に囲まれてたから、ほんと危なかったの」

「そうだったんだ」

「司さんと過去生とはいえ、何度も縁のあった魂だしね。昴くん、引きずられそうになったのよね」

「そんなことがあるんですか…？」

私が聞くと、

「ええ。ただ、高い波動でいられるなら大丈夫」

と流音さんが、安心させるよう私に言ってくれた。

「それで、こっちに来いってかなり、強引に言ってたのか…」

「昴、お前わかってると思うけど、ずっと高い波動でいろよ」

「わかってるって」

悟くんにそう言われて、昴くんは、まかしておけって顔でそう答えた。

「だけど、さっき一回、低い方出てただろ?」

「え?あ。あれはその…。ちょっと油断した。もう、大丈夫だから」

昴くんは、頭をぼりってかきながらそう言った。

「ひかりさんも、高い波動で…、葉月もだ。あまり、怖がったりしないで、なるべく俺に意識を合わせてるんだよ」

悟くんがそう言って、葉月ちゃんを見た。

「うん、わかった」

葉月ちゃんは、悟くんのことを見ながらうなづいた。

「とりあえず、俺ら、何をしたらいいんでしょうか?」

悟くんが、流音さんに聞くと、

「光で包んで欲しいのよ。ノエルさんと司さんを」

と、流音さんが答えた。

「俺と流音も、他のみんなも一緒に光を出す。本当は本山に連れて行って、朝日を浴びるのが1番なんだろうけど、今、いける状態じゃないからな」

漆原さんがそう言うと、

「じゃ、朝が1番、効果的ですよね？」

と悟くんが、言った。

「うん。明日の朝、朝日が昇ると同時に、みんなで光を出せたらいいんだが…」

「わかりました」

「とりあえず、今日はみんなそれぞれの家に帰って、また明朝、集まれるかしら」

「あ、それでしたら、俺がみんなのこと車で拾って、ノエルさんのマンションに行きます」

「悟くん、よろしくね」

「はい」

「じゃ、俺の車でみんなのことを送っていくよ」

漆原さんはそう言うと、先に荷物と上着を持って玄関を出た。

「じゃ、また明日…」

私たちも、流音さんに挨拶をして家を出た。それから漆原さんは、それぞれの家まで送ってくれた。

家に着くと、こっちの次元の母が、

「あら？遅くなるかもって言ってたけど、早かったのね」

とリビングで、テレビをのんびりと観ているところだった。

「うん。あ、でも明日も出かけることになって…。朝早いから、起きなくてもいいよ」

「そうなの？どこに行くの？」

「えっと、朝日を見に…」

「朝日？年の暮れに？初日の出見たほうがいいんじゃない？」

「うん。でも、みんな休みだから、早くから集まるのもいいかなって…」

「そうなの？ま、いいけどね。気をつけなさいよね。最近物騒な事件も、多いんだから」

「うん、わかってる」

こっちの次元では、私のいた次元とはまた違う事件が相次いでいるようだ。次元が違うと、ほんと、起きてくることが違ってくるんだな…。

部屋に行き、パソコンを開いた。私の小説のランキングは、かなり上位にあった。それから、やっと「今　このときを　愛してる」の出版が決まったようで、これからゲラ刷をするようだった。

「こっちの次元でも、今のところは私、忙しくないみたいだな」

あれ？でも、昴くんたちはどうなんだろう？

『大丈夫。仕事の予定、俺も悟さんも、入ってないみたいだから』

昴くんの声が聞こえた。

『昴くん？何してるの？』

『ブログ、書いてた』

『そう』

『ひかりには、うちに来てもらえば良かったかな』

『え？』

『明日、もしうちに帰れたら、泊まってってね』

『うん。でも…』

『心配は無しだよ？ノエルさんも司さんも、きっと大丈夫だから』

『そうだよね』

時々、不安や心配の気持ちが出る。どうも、こっちの次元の私らしい…。

葉月ちゃんは、たまに怖がっていたが、あれも、こっちの次元の葉月ちゃんだろうな。昴くんも、一回こっちの次元の昴くんが出てた。強引というか、ちょっと気が大きいというかなんていうか…。

私の次元の昴くんは、優しくていつも穏やか。楽天的で前向きで、なんでも楽しんでしまう。一緒にいると、楽しいし安心するしほっとできて、でも、それでもときめいちゃうのはなんでかな～。あ～、あの甘えん坊のところも、可愛いんだよな～～…。

『ひかり…』

『あれ？聞こえてた？もしかして…』

『うん、ずっと…』

『…もしかして、照れてる？』

『照れてないよ』

『うそ～。照れてるじゃん！』

『て、照れてないって。ただ、かなり嬉しいけど…』

『あ、そう？』

『そうだ。ブログに、ちょっと書いてみたんだ』

『何を？』

『アセンションのこと。ひかりの小説を読んで、自分も２０１２年に地球が破滅するなんてことはないと思うって』

『え？大丈夫なの？そんなこと書いて』

『うん。やっぱり、白河さんのように発信していかなくちゃ』

『そっか』

『白河さんのブログも見たんだ。確かに攻撃されてるけど、支持してる人もすごく多いみたい』

『そうなの？』

『コメントのほとんどは、応援メッセージだよ。その半分は、ものすごい光が出てるから、多分、高い波動の人が書いてるんじゃないかな』

『こっちの次元に応援に来てる人？』

『うん、だと思うよ』

『私も、小説の感想を読んでるんだけど、そんなに批判的なのはないな～』

『多分、ほんの１部の人たちだね。それをマスコミは、面白く大げさに取り上げたんじゃないかな…。あ、白河さんのことだけどさ』

『大丈夫なのかな…、白河さんの方は』

『うん。とりあえず、俺らは今、ノエルさんと司さんのこと助けなくちゃ』

『そ、そうだよね！』

私たちは、交信を終えた。それから明日に備えて、泊まってもいいように用意をした。

昼食を終え、また部屋に戻ると携帯が鳴った。

「星野さん！今すぐノエルさんのマンションに来てもらえますか？」

葉月ちゃんからだった。

「どうしたの？」

「漆原さんから悟くんに電話が来て、ノエルさんがいきなり消えたって…」

「き…、消えた？！」

私は電話を切ると、すぐに用意をしていた鞄を持ち、リビングに行った。

「ごめん、いきなりみんなで、温泉行く話になって」

「え？」

「急なんだけど、いきなり…、や、宿が取れたって言うから…」

「誰と？」

「みんな…。昴くん、悟くん、葉月ちゃんと」

「あんたそんな人と行って、また写真にでも撮られたら…」

「大丈夫。気をつけるから。じゃ、行ってくる。しばらく泊まってくる」

「え？いつ帰るの？」

「7日くらいかな」

私は葉月ちゃんに、しばらく旅行ってことにしましょうと提案されたように母に言ったが、最近嘘ばかりで申し訳ないと思ってしまい、黒い霧をいっぱい出してしまった。それを慌てて消して、家を飛び出した。

電車に乗り、ノエルさんのマンションまで直行すると、もう葉月ちゃんも悟くんも来ていた。

「あれ？昴くんは？」

「司さんの方に行ってる」

「え？」

「司さんも、異変が起きたらしくて」

「そ…、そうなの？」

「みんな、ノエルさんの部屋まで来てくれる？」

流音さんが、ノエルさんの部屋から出てきてそう言った。

「はい…」

おそるおそる行ってみると、中には3人の人がいて、ノエルさんはいなかった。

「何があったんですか？」

「ものすごい闇に一気にノエルさんが包まれて、そのあと、忽然と消えてしまったらしいの」

「ええ？」

葉月ちゃんが驚いていたが、悟くんは冷静に、

「低い次元への移行ですか？」

と、流音さんに聞いた。

「そのようね」

「低い次元への移行っていうと、私たちがこの次元に来たみたいに？」

「そう…。体ごと、行っちゃったみたい。今頃もっと低い次元のノエルさんと、同化してるはず」

「なんでそんなこと？」

「ものすごい闇に包まれたから、もっと波動が下がったんじゃないかしらね」

「ここにいた人たちは、大丈夫だったんですか？」

「光を出していたから大丈夫でした。でも、その光をまったく寄せ付けないくらいの、ノエルさんは黒い霧に覆われてしまってたんです」

「司さんは？大丈夫かしら」

「昴が行ってます」

悟くんが、冷静にそう言った。

『ひかり！』

「あ、昴くんから、交信が来た」

「なんて？」

流音さんが聞いてきた。

「待ってください、今聞いてみます」

『ひかり、司さんが消えた』

『司さんも？』

『うん。ものすごい闇に包まれてて、光をみんなで送ったけど、いきなり忽然と…』

『ノエルさんと同じだ』

『とにかくみんなで、ノエルさんのマンションに行くから』

『うん』

「あの…、司さんも消えちゃったって。それで、司さんのところにいた人みんなで、こっちに来るって言ってました」

「そう。司さんも…」

「いったい、何が起きてるんだろうな」

漆原さんが、顔を曇らせてそう言った。その時、漆原さんの携帯が鳴った。

「はい。あ、白河さん…」

どうやら、白河さんのようだ。

「すみませんでした。何も役に立てなくて、守れませんでした。え…？」

漆原さんは、しばらく黙り込んで話を聞いているようだった。

「そ…、それは本当ですか？」

顔がどんどん青ざめ、そうとうショックを受けている。どうしたというのか…。

「はい…。白河さんも行かれるんですか？はい…。俺と流音ももちろん助けに行きます。はい。みんなには俺から伝えます。気をつけて…」

そう言うと、漆原さんは電話を切った。

「何か、大変なことでもあったんですか？」

悟くんが聞いた。

「……」

漆原さんは、しばらく黙っていたが、どうやら心で、流音さんと会話をしていたらしい。流音さんの表情もどんどん曇っていった。

「そ、そんなこと…」

驚きを隠せない様子だった。

「何があったんですか？ノエルさんにですか？」

私も聞いてみた。流音さんは、私の顔を見て表情が固まった。

「あの、白河さんも、低い次元に行ったんですか？」

私が聞くと、漆原さんが答えた。

「ああ…。俺と流音もこれから行く」

「じゃ、俺らも行きますよ。葉月と一緒に」

悟くんがそう言った。

「ノエルさん、助けに行きます」

葉月ちゃんもそう言った。だけど、暗い顔をして流音さんは、

「違うのよ。ノエルさんは、助けに行ってるの」

と低い声でそう言った。

「…どういうことですか？」

悟くんも低い声になっていた。

「どうも、低い次元に大変なことが起きたことを察知して、行ったようなの…。ノエルさんのミッションだったのね」

「誰を助けに？」

悟くんが聞くと、流音さんと漆原さんが私を見た。

「…私？」

私がそう聞くと、

「そう…。ひかりさん」

と、二人は同時に答えた。

「星野さんに何か、あったんですか？！」

葉月ちゃんが二人に聞いたが、二人とも黙って見つめ合っていた。

心で、何か会話をしているようだ。

しばらくして、ようやく漆原さんが口を開いた。

「ひかりさん…。驚かないでくれ。とにかく落ち着いて聞いて欲しい」

「はい…」

「この次元よりさらに低い次元では、こことはまったく異なった出来事が起きている。低い次元で起きるのだから、かなり、その…、大変なことも起きる」

「…はい」

「何かの事件に、巻き込まれてるとか？！」

葉月ちゃんがそう聞くと、

「そうだ…」

と漆原さんは、重い表情で答えた。

「事件って…？」

悟くんも、表情が固まっていた。

「ひかりさんが、誘拐された」

「誘拐？！」

悟くんと葉月ちゃんは、同時に声をあげた。

「ある事件に関わって…、いや、当事者ではない。ひかりさんのお父さんのことで、巻き込まれて…」

漆原さんは、話しづらそうだった。

「私の…、父が何かしたんですか？」

「ああ…。どうやらその次元では、会社を経営してて成功をし、その規模を拡大させていってる。他の会社を買収しながら…。そして、ある会社をのっとったんだが、ちょっとあくどいことをして、その会社の社長を、死に追い込んだんだ」

「……」

信じられない。この次元では少し父は怖いが、私の次元では穏やかで、平凡が1番の普通のサラリーマンだ。それなのに…。

「それで？その…、復讐とかですか？」

悟くんが聞いた。

「そうだ。自殺をしたその社長の息子が、さらったらしい」

「それって、相当危険な目にあってるってことじゃ…」

いつも冷静な悟くんが、動揺した。葉月ちゃんは私を見ながら、言葉を失っていた。

「殺されるかもしれない…と白河さんが言ってた」

「え？」

『ひかり？』

『昴くん…』

『どうした？何があった？』

『…え？』

『ものすごい動揺してない？それに、エネルギー低いよ』

『あ…』

『ノエルさんのこと？でも、派動をあげてないと…、ひかり』

『……』

『どうしたの？待って！もうすぐ着くから』

「大丈夫？ひかりさん、真っ青…」

流音さんが、私の肩を抱きながら光で包んでくれた。

「はい。今、昴くんも来てくれるし、大丈夫です…」

私がどうにかそう言うと、ますます漆原さんの顔が曇った。

「まだ、言ってないことがあるんだ…」

そう漆原さんが、言おうとしたが、

「それは、昴くんが来てからのほうがよくない？」

と流音さんが、漆原さんに言った。

「昴に言うのか？」

「言わなくても、ひかりさんに言えば、昴くんに伝わるでしょ？心で会話できちゃうんだから」

「……」

漆原さんの顔がもっと曇る。あの元気で明るい漆原さんが、こんな暗い顔をするなんて…。

私、違う次元で殺されたら、この私はいったいどうなるの…？

『殺されるって…？』

あ、昴くんが、聞いてたんだ…。

バタン！ものすごい勢いで、ドアが開いた。

「昴くん…」

みんなが、いっせいに昴くんを見た。漆原さんの顔は、厳しかった。

「こ、殺されるって、どういうこと？」

昴くんの顔色もよくない。

「低い次元でのひかりさんのことだよ、昴…」

悟くんが、私と昴くんに光を送りながらそう言い、

「とにかく、落ち着いて…。漆原さんが詳しいことを白河さんから聞いてる。今、説明してくれてたところだ」

と、昴くんを落ち着かせた。

「…低い次元？」

「ノエルさんが行った次元だ。白河さんももう、行ってるよ」

「…なんで、ひかりが…？」

『事件に巻き込まれたって…』

『え？』

私が、昴くんに心で今、聞いていたことを再現した。

「ひかりのお父さんが？」

昴くんも驚いていた。

「ひかりをさらったやつ、何の目的があって？」

「昴…、今、俺も低い次元の俺に、状況を聞けた…」

悟くんが、真っ青になりながら話し出した。

「どうやら、俺がその事件のことを知り、低い次元のノエルさんに相談をしたようだ。ノエルさんから白河さんに情報が伝わったらしい…」

悟くんは、冷静な話し方ではあったが、顔色はすぐれなかった。悟くんも真っ青になるくらい、事態は大変なことが起きているのか…。

「俺も、低い次元の俺と交信できる？」

昴くんが聞いた。

「無理だ。」

悟くんがそう言った。

「なんで？悟さんできんのに…」

「俺は、そういうのが得意なんだ。どの次元の俺とも交信できるし、どの次元の俺も、その次元に囚われていない」

「え？」

「多分、白河さんもそうだ」

「…じゃ、俺もすぐに行って、ひかりを助ける！」

「ちょっと待って、昴くん。まだ、話の続きがあるの…」

流音さんがそう言うと、昴くんをリビングのソファに座らせた。

「…流音さん、俺から説明する。詳しいこと、いろいろと聞けたから」

悟くんが、神妙な顔つきでそう言った。

「ひかりは？今は大丈夫なのか？」

昴くんが、いてもたってもいられない状態でそう言った。

「大丈夫だ。今のところは…。まだ、さらわれて間もない」

「さらったやつ、なんの目的で？」

「復讐…」

「それで、なんでひかりを?だったら、ひかりの父親に直接復讐すればいいだろ?」

「多分、推測だけど、1番大切なものを奪って、復讐するつもりじゃないのかな」

「じゃ、まさか、目的は星野さんの命…」

葉月ちゃんは、それ以上言葉を続けられなかった。

「……」

悟くんが黙りこんだ。葉月ちゃんは、悟くんをじっと見た。悟くんに、エネルギーをあわせて会話をしているようだった。

「まさか!」

葉月ちゃんが、真っ青になった。そして、黙り込んだ。

「何?なんだよ?!葉月ちゃんも悟さんも、なんか隠してない?」

「……。ひかりさん…、それに、昴…。気を確かに持って、聞いてくれ…」

悟くんが、重苦しくそう言った。

「……」

ゴク…。怖い…。昴くんは、私のことを見てから手を握ってきた。

『大丈夫、どんなことがあっても、どんな次元のひかりも俺が守る』

昴くんは、そう心で言ってきた。昴くん…。そうだよ。大丈夫。昴くんがいるんだから…。その次元にだって…。

「昴なんだ」

「…え？」

私と昴くんが、同時に悟くんに聞いた。

「何が…？」

昴くんは、もう1度聞いた。

「さらった犯人…」

「…え？」

昴…くんが…？

「あ…はは……。何言ってんの、悟さん。俺がひかりのこと、さらうわけないじゃん」

「昴の父親が、自殺したんだ…」

「……。俺の…？」

「一ヶ月前だ。行方不明になってて、探して…。遺体と遺書が見つかったのは、ほんの2〜3日前。でも、死後一ヶ月はたってるだろうって…。ニュースにもなってた」

「一ヶ月前って…」

「昴の父さん、何かその頃…」

「事故にあった。でも、奇跡的に助かったから、ほんと、かすり傷くらいですんでる」

「この次元の昴くんのお父さんは、一月前、いきなり心臓発作で倒れたのよ…」

「え?」

みんな驚いて、流音さんを見た。

「命はとりとめたわ」

「…他の次元でも、影響が出るってこと?」

葉月ちゃんが聞いた。

「もし、星野さんが、低い次元で死んだら、こっちの次元の星野さんにも、何か…」

「出るだろうね」

悟くんが、冷静に言った。

「……。それより…、今、ひかりがその次元に行ったら、同化したまま死ぬかもしれないってこと…？」

昴くんが、真っ青な顔のまま聞いた。

「そうなるかな…」

悟くんが答えた。

「ひかり…、行っちゃ駄目だ…」

「え？」

「ひかりは、ここにいて…」

昴くんは、震える声でそう言った。

「だけど、ひかりさんと昴が行かないことには、その次元の二人を救えないよ」

悟くんが、そう言った。

「……」

昴くんは、言葉を失った。しばらく黙り込んで、

「俺…も…？」

と小さな声でつぶやくように聞いた。

「そうだ。昴も行かなくちゃ」

「…俺、ひかりに手をかけるかもしれないんだろ…？」

「そうだな。だから、それをお前が…」

「そんなの…、冗談じゃない…。そんな場面に居合わせられない…。俺…」

昴くんは、泣きそうだった。ガタガタ震えながら、体を丸めていた。

「だから！お前が低い次元のお前の中から、阻止するんだよ。他に誰がそれをできるんだよ？」

「……」

昴くんは、頭を抱えた。昴くんの心は、恐怖でいっぱいになってる。こんな昴くんは初めてだ。

「昴！派動を下げるな！」

悟くんが、珍しく声をあらげた。

「お前が、高い波動でいないと、助けることなんてできないんだぞ！」

『わかってる…、わかってるけど…』

昴くんは、心でそう言った。でも、声が出ないようだった。しばら

く昴くんは下を向いたまま、手を震わせていた。

『俺が…？俺が、なんで…？』

ずっと昴くんは、それを心の中で繰り返していた。そしてようやく、

「なんで、俺、なんで、そんなこと…」

と悟くんの方を見て、声に出して聞いた。

「それも、ミッションだ」

「ひかりを、殺そうとすることが…？」

昴くんは、わなわな震えながら悟くんにそう言ってから、

「冗談じゃない。そんなのがミッションだなんて…。なんの意味があるって言うんだよ？！」

昴くんは、とうとう怒鳴り出した。

「わかんねえよ。でも、アセンションのためだ」

悟くんも、辛そうな表情をした。

「アセンションのために、なんで俺が、ひかりを殺そうとするんだよ…」

昴くんは、泣き出した。

「意味ねえよ。そんなこと…。俺はひかりを愛するために、地球に来てるんだよ。なのになんで…」

ギュウ…。

「ひかり？」

私は、昴くんを抱きしめた。昴くんの苦しみも、悲しみも辛さも、痛いほど伝わってきた。

「大丈夫だから」

私が言うと、昴くんは驚いた顔をした。

「昴くんは、絶対、どの次元でも私を愛してくれる」

「……」

「私だって、どの次元でも昴くんのことを愛すると思う」

「ひかり…？」

「私、行くよ。どんな昴くんでも愛して、光で包みに行くから」

「駄目だよ、ひかり…」

「嫌だ。低い次元の昴くんのこと、殺人犯になんてしたくない。それに…」

「……」

「それに昴くん、きっとものすごく苦しんでる…」

「俺が…？」

私は、もう一回昴くんのことを抱きしめた。

「私が、昴くんを守る！」

「ひかり…」

昴くんも、ぎゅって私を抱きしめた。

「わかった…。ひかり、俺も行くよ…。それで、絶対にひかりに手をかけないようにする。絶対にひかりを守る」

「昴、ひかりさん。俺らも行く。みんなで行って、二人に光を送る。どんなことがあっても、二人を守る」

悟くんも、力強くそう言ってくれた。

「じゃ、すぐに行こう。一時の猶予もない」

漆原さんはそう言うと、ノエルさんの部屋へと移動した。私たちも、後に続いた。私の手を握っていた昴くんの手は、震えていた。

『ひかり…。愛してるよ』

『私も愛してるよ』

『ずっと、いつでも、俺はひかりを愛してるよ…』

『うん…』

ギュウ…。昴くんは、つないだ手に力を入れた。

ノエルさんの部屋を締め切り、変な匂いのお香を焚く。暗いＤＶＤもかける。それから、どんどん黒い霧が発せられた。辺り１面が真っ暗闇に覆われていった。

苦しくなる、重くなる。どんどん体が冷える。闇に覆われ、意識も消えそうになる。そのとき、昴くんが私を抱きしめ、キスをしてくれた。優しくて、あったかいキスだった。

『愛してるよ、ひかり…。愛してる…』

昴くんの声が、フェイドアウトしていく。

フッ…。意識が一瞬途切れた。ズン…。一回思い切り暗く、重い空間に落とされた気がした。でも次の瞬間、意識が戻った。目を開けると、目の前に昴くんがいた。

ああ…。良かった、昴くんいる…。そのうえ、昴くんはまだ、私にキスをしていた。なんだ…、まだ、高い方の次元にいるのか…。

と思った次の瞬間、ものすごい冷たいエネルギーが、昴くんから流れ込んだ。

え…？波動が、違う？それに、思い切り腕を強く掴まれていた。辺りを見回すと、そこはノエルさんの部屋じゃなかった。そして私は、足をばたばたさせて、抵抗していた。

あ、あれ…？私の意志で動いているわけじゃない…。必死で体を動かし、抵抗をしている。でも、上に昴くんが乗っていて身動きが取れない。

「いや…だ…」

私がそう言っても、昴くんは黙っている。

「やめて…」

必死で、泣くのをこらえながら、私が言う。

「お前、もうすぐ結婚するんだろ?」

え?私が?誰と?!

「なんてったっけ?長田建設の息子の名前…。徹郎だっけ?」

て、徹郎?こっちの次元では、私、徹郎とまだ結婚してないの?

「はは…。どうするんだろうな、花嫁、誘拐されて。お前の父親も、その徹郎ってやつも」

「……」

私は何も言わずに、体をこわばらせた。…。ものすごく苦しかった。泣くのを必死にこらえていたが、喉が痛い。グ……。涙が出そうになる。

私は横を向いた。涙が頬をつたった。悲しい。苦しい。色んな感情が交差する。こっちの次元の私の心を、そのまま感じてみた。

お父さんが、どうして…?

自分の父親のしたことを、信じられなかった。ワンマンで、自分の

ことも支配してきた父親だった。でも、昴くんのお父さんを死に追いやるようなことをしたなんて…。

まだ、私の頭の中は混乱していた。怖さと、申し訳なさと、父のしたことをまだ受け入れられない気持ちと…。

そのとき、携帯が鳴った。昴くんは、ベッドから降りて、横にあったテーブルの上の携帯を取った。

「もしもし…」

昴くんは、すごく低い声で電話に出た。

「いろいろ準備してくれて、ありがとうございます。…え？はい。そうですよ。いますよ、ここに。まだ、生きてますけど…」

ゾク…。昴くんから黒い霧が出る。こっちの次元の私は、それを肌で感じものすごく怯えている。今なら、ベッドから跳ね起きて逃げられるか…。窓は一箇所。ドアの前に昴くんが立っていて、ドアからは出れないかもしれない。

そっと、ベッドから起き上がろうとした。でも、なかなか体が思うように動かない。硬直しているし、部屋が寒いのでかじかんでもいる。

ドカ！私が動こうとしてるのを昴くんが見て、私の横に座り込み、私を押さえ込んだ。

「逃げようって思っても、無理だからな。ここは、山の中で、周りに家もない。助けを呼んでも誰も来ないし、車もない」

昴くんは、冷たい口調でそう言った。それからまた、携帯を耳に当てた。

「悟さんに迷惑はかけません。ほっといてくれてかまわないです」

悟くん…？電話の相手は悟くんなの？私は、なんとか表面に出たかった。でも、こっちの次元の私のほうが表面に出てて、何もすることが出来なかった。

こっちの次元の私は、怯えながらも、部屋を見回していた。部屋にはベッドが二つある。寝室のようだ。木で出来ているこの家は、コテージのような作りになっているのかもしれない。

何しろこの家に着いて、この部屋に入るまで、私は目隠しをされていたようだ。それに、昴くん以外の誰かが、運転をしていた。女性だった。

なんとなく私は、ここまで着く間のことを思い返していた。その回想を私も一緒に見ていると、どうもその女性というのは、珠代ちゃんのようだった。声が珠代ちゃんの声だったし、それに昴くんが、

「珠代は、家に戻れ」

とこの家に着いて、私をこの部屋に押し込んだあとに、言っていたのだ。

「昴はどうするの？私もここにいる」

「お前まで犯罪者になることない。いいから、帰れ」

「でも…」

「いいから、言うこと聞けよ！」

昴くんが声をあらげて、珠代ちゃんは車に乗り、去っていったようだった。

…こっちの次元では、珠代ちゃんと昴くんは、もうすでに出会っているんだ。それも、親密な関係なのかもしれない…。

回想では、どうやら私は朝、仕事に行くまでの道で、いきなり誰かに腕を掴まれ、車に乗せられていた。それは、昴くんのようだった。何も言わずに目隠しされて、そのまま車が発進した。

発進してから、昴くんが、

「あんた、星野ひかりだろ？」

って聞いてきた。

「誰…？」

「俺？天宮昴…」

「天宮…」

私は、血の気が引いた。２日前、天宮建設の社長の遺体が発見されたとニュースを見て、父の会社と合併した会社だったので、驚いたばかりだった。

「親父、自殺したの知ってる？」

…自殺…。

「あんたの父親に殺されたようなもんだよ」

「え？」

「知らないの？あんたも、星野建設に勤めてるんだろ？」

「……」

「自分の父親がしたこと、知らないでいるの？」

「……」

お父さんが何を？

「裏で手を回して社長の座から引きずりおろして、それどころか、親父から全部を取り上げ、死に追い込んだんだ」

まさか…。

「知らなかったの？はは…。めでたいね」

……。

「俺の親父みたいに、他にもあんたの親父に騙され、利用され、つぶされたやつは大勢いるんじゃないの？」

お父さんは確かに、ワンマンだ。人を人と思わないような、そんなところもある。私だって、会社が大きくなるための駒に過ぎない。

「恨まれて当然だよね。よく今まであんたの親父、生きてたよね。誰かに殺されてもしかたがないようなこと、してきただろうに」

殺される…？

「でもさ。本人死んだらそれでおしまいじゃん。だけど、あんたの親父の大事にしてるもんを一つずつ、つぶしていったら、ずっと苦しむことになるよね。そっちのほうが復讐になるよね」

復讐…？

そのあとは、ずっと無言が続いた。どこに向かってるのかもわからず、ものすごい不安の中で、私は怯えながら車に乗っていた。腕をずっと掴んでる、昴くんの手は冷たく感じられた。

なんとなく山道を進んでいるような、そんな感じがしていた。そして、しばらく舗装されてないような道を車が走り、止まった。

「降りろ」

先に昴くんが降りて、私を引きずり降ろした。そこから、力づくで家の中に連れられ、部屋に押し込まれた。

一緒にいた女性（珠代ちゃん）が車で去ってから、昴くんは私をベッドに押し倒して、目隠しを外した。そしていきなり、キスをしてきたのだ。そこに、私がこっちの次元にやってきたようだ。

朝からの出来事を思い出し、これから私はどうなってしまうのか、ものすごい不安に駆り立てられた。

さっき電話で、「まだ生きてる」みたいなことを言ってなかったっけ…？私、殺されるの…？

ゾク…。恐怖で、体が震えた。すぐ横で、電話をしながら私を押さえ込んでいる昴くんから、ものすごい冷たいエネルギーも来て、さらに体が冷えていく。

「それじゃ、もう切ります。もう電話もかけないでください。電源切りますから」

昴くんはそう言うと、本当に携帯の電源を切っていた。

「さて…。どうするかな」

昴くんは、私を見ると口先に微笑を浮かべた。

「あんたの親父に、なんて言ってやろうか…。まだ、さらわれたこと、知らないでいるんだろうしな」

「……」

ものすごい冷たいエネルギーだ。昴くんの体から黒い霧がどんどん出てくる。

「身代金でも、要求するか？」

「……」

「はは…。そんなのいらないけどな」

昴くんの笑い声も、不気味に感じた。

「どうやったら、1番あんたの親父は苦しむと思う？」

「……」

「結婚できなくなったら、長田建設との合併もパアになるのか？」

「……」

「あんたが殺されるのと、めちゃくちゃにされるのと、どっちが親父さんは苦しむわけ？」

「……」

私はひきつっていた。怖さがピークにきていたかもしれない。昴くんの顔は、恐ろしかった。

「あんたは、どっちがいい？」

泣きそうになったが、必死でこらえた。でも体は震えるし、涙が勝手にこぼれてきた。

「怖い？」

「……」

「怖いんだ…、はは…」

昴くんがまた、黒い霧を出しながら不気味に笑う。

私は体をこわばらせた。何も言葉に出来なかった。昴くんのことも見れなかった。恐怖でどうにかなりそうになっていた。

誰に助けを求めたらいいのか。誰も浮かばない。それに、もしかしたら、助からないんじゃないのか…、そんなことが頭をよぎる。

お父さんは私が、会社に出勤していないことを不思議に思ってくれるか。車に乗せられたところを、誰か目撃していないのか。誘拐されたことを、誰か知ってる人はいないのか？

ガタガタ体が震える。体温がどんどん下がっていくのがわかる。怖い…。私の中からも、さっきからずっと黒い霧が出ている。部屋中が霧で覆われている。

それに、昴くんの後ろに真っ黒な影が見えた。陽炎のように、ゆらゆらしている。ものすごい不気味な影だった。その影に昴くんはまるで、操られているようにも見えた。

「どうした？決まった？」

「…え？」

「どっちがいい？」

どっちって…。殺されるのと、めちゃめちゃにされるのっていうこ

と…？

「俺さ、別にいいんだ。このあと、死んじまおうがなんだろうが…。俺の人生なんてもうどうでもいいんだ」

ゾク…。なんでそんなに捨て身なの？

「どうせ、俺の人生なんて、ろくなもんじゃないしな」

私は、すっかりこっちの次元の私と同化していた。一緒に恐怖体験をしてしまっている。なんのためにこの次元に来たのか。それは、昴くんを守るためじゃなかったのか。

昴くんの人生を狂わせたらいけない。昴くんを犯罪者にもできない。昴くんを守らなくっちゃ！

だけど表面に出てるのは、こっちの次元の私だ。それも、恐怖でものすごい黒い霧を出している。それが、昴くんから出る黒い霧と合わさる。

いけない。光を出して、昴くんを光で包まなきゃ。昴くんに取り憑いているかのような、あの黒い影も、光で消さなくっちゃ…。

だけどどうやっても、私の意志では体を動かすことは出来ないし、言葉も出ない。それに、光も出せなかった。

どうしよう…。昴くん！心で聞いてる？高い波動の昴くんも、ここにいるんでしょ？一緒に来てるよね。今、こっちの次元の昴くんの中にいるんだよね！

心を静かにして、昴くんを呼ぶ…。でも、聞こえない。こっちの次元の私は、思い切り心を閉ざしている。

昴くん…。ただ、私は昴くんのエネルギーを感じようとした。だけど、冷たいエネルギーを感じるだけだ。

昴くんを抱きしめて、光で包むことは出来ないのか…。

昴くん、愛してるよ。この次元の昴くんだって、どんな昴くんだって…。

きっと、心を闇に占領されている。お父さんが死んだことで、闇しか感じられなくなっている。その心の中は、ものすごい悲しみや、憎しみでいっぱいになり、昴くんはきっと苦しんでいる。その思いを浄化したい。光を当てて…。

「結婚なんて、できなくさせてやろうか？」

「……」

「あんたのだんなになるやつ、どうするかな」

「……」

「どうすると思う？」

わからない。私だって、2回しか会っていない…。こっちの次元の私がそう思っていた。

え？たったの2回？

ふっと、その時のことを思い出していた。一回目は父に連れられて、食事に行ったときに会った。その次は、いきなり結納の席だ。

そう、はじめに食事に行ったときに、お前の婚約者の、長田徹郎さんだと紹介されたのだ。私は驚いていた。この年になるまで、ずっと父親に結婚もしなくていい、ずっと家にいたらいいと言われていたのだ。

兄が父の会社を継ぐことにはなっていた。私はその経営のサポートをするため、留学をしたり経営学も学ばされた。結婚することはもうないだろうと、自分も思っていた。

恋愛もしたことがなかった。私の人生のすべてが、父の会社のために注がれていた。でも、まさか結婚まで父の会社のため、いや、父の欲望のためと言ってもいいかもしれない。そのために、結婚までしなくちゃいけないなんて…。

私の人生はなんだったのか…。父の人形か…？そんなことを思い返し、悲しくなった。そのうえ、今は、父のしたことの報いを私が受けている。

いったい、私ってなんなんだろう…。悲しくて、情けなくて涙が出た。それは、ずっと押さえていた恐怖や、いろんなものと混ざり合い、止まらなくなった。嗚咽もあげて、泣き出してしまった。

昴くんは、しばらく黙って私を見ていた。

「ふん…。そんなにだんなになるやつが、大事？」

え？

「めちゃめちゃにされて、結婚できなくなるのは、そんなに悲しい？」

「……」

「そんなめに合うくらいなら、死んだ方がまし？」

「……」

何も言えなかった。何も言えず、私は泣いていた。

「でも、それじゃ面白くないよね。死ぬ方がましなら、生きてもらおうかな」

え？

「生きて、苦しんでもらわないと、俺の復讐にならない」

「……」

「あんたが、何より1番苦しむこと…。それが俺の復讐になる」

昴くんからまた、ものすごい黒い霧が出る。

「それが、あんたの親父の苦しみにもなるだろ？なにせ、大事な一人娘が不幸になるんだ。それもどん底の…」

大事な一人娘なんかじゃない。私だって、父にとっては一つの駒で

しかない。

「……。私…」

私はやっと、言葉を口にした。

「結婚相手のことが、好きなわけじゃない…」

「え?」

「…父に勝手に、決められた相手だから」

「政略結婚?」

「……」

私は黙って、うなづいた。

「はは…。あんたもみじめだね。好きでもない相手と結婚させられるの?」

「……」

「じゃ、結婚できなくなったら、やっぱりあんたの親父には、痛手なわけだ」

「……」

「あれ?でも、あんたにとったら好都合?好きでもないやつと、結婚しなくてもすむ」

「……」

「でも、どっちにしろ、好きでもないやつに、あんた、めちゃめちゃにされるんだよ？」

「……」

また、私は凍り付いていた。やばい…。一瞬、一緒に怖がってしまった。真っ黒の影に、私の体までのみ込まれるところだ。

心の奥の奥で、私はまた、

「昴くん、愛してる」

とつぶやいた。心の奥まで、闇に占領されないように…。

めちゃめちゃも何も、私なら昴くんが何をしても、大丈夫だろう。でも、こっちの次元の私だったら話は別だ。男性と付き合った経験もなく、それなのに、いきなり誘拐した相手とだなんて、そりゃショックを超えている。それなら死んだ方がましって、心のどこかで思っている。何とかして、表面に出れないものか。

ガタガタ震えながら、私はまた泣き出していた。

「あはは…。そんなに怖い？」

昴くんがまた、冷たく笑う。

「ま、いいや。時間はたっぷりとある。そのうちに、あんたが誘拐

されたことも、あんたの親父が気づくかもな」

昴くんはそう言うと、ベッドからおりて部屋を出て行った。

部屋の外からカギをかける音がした。この部屋のドアは、外からカギがかかるようになってるようだ。

私は、体中の力が抜けて、腑抜け状態になっていた。頭の中では、今だ、逃げなくちゃ！と考えている。でも、体がまったくびくともしない。

あまりの怖さで、動けなくなっている。腰を抜かした状態とでも言おうか…。そんな感じだ。

どうしようか…。そうだ、携帯！テーブルの方を見たが、昴くんが携帯を持って出たようだ。

ガタガタ震えは止まらなかった。真冬の山の中だ。寒いのは当たり前だ。ベッドの中に入ろうかどうしようか考えたが、入ってしまったら、逃げられないんじゃないのか…。

窓の方を見た。小さめの窓だが、私一人ぐらい出れそうな気もした。少し高い位置に窓はあったが、テーブルを窓の下にもって行けば、どうにかなるかもしれない。

体を必死で、動かした。震えながらも、どうにかベッドからおりることが出来た。

音が出ないよう気をつけながら、テーブルを動かした。そして、窓の下にテーブルを置くと、その上にどうにか乗った。それから窓の

カギを開けようとしたが、ものすごく堅くて、なかなか動かなかった。

「動いて…」

そうつぶやきながら、まだ震えてる手で、私は必死で動かそうとした。

そこに、ガチャガチャ…。ドアのカギの音が聞こえた。

あ！大変！どうしよう！とっさにテーブルから飛び降りようとしたが、もうドアが開いて、昴くんが部屋に入ってきてしまった。

「何してんだよ？！」

ものすごい形相で、私の方に向かってくる。

怖い！殺される？

あまりの怖い形相で、私は縮み上がった。テーブルの上でかたまっていると、私の腕を思い切り掴んで、昴くんが引きずり降ろそうとした。でも、私は必死で抵抗した。

ものすごい力で、昴くんが腕を掴む。

「痛い！」

私はその力に負けて、昴くんの方に引きずられたが、あまりにものすごい勢いで昴くんが引っ張ったから、テーブルから転倒した。

ゴツン…。鈍い音がした。そのあと、フワ…。魂が体から抜けた。
あ、幽体離脱してる…。

眼下に私の体が横たわっていた。ぐったりとしていて、びくともしない。

昴くんが、

「おい！」

と、私の体を揺さぶっていた。だが、ぐにゃぐにゃと動くだけで、意識がまったくない状態だった。

「私、死んだの？」

こっちの次元の私が、つぶやいた。

「違うよ。幽体離脱、魂が抜けただけ」

私がつぶやくと、こっちの次元の私は驚いていた。自分の中から自分の声がするのだ。そりゃ驚くだろう。

「もう私に任せて。昴くんを怖がったりしなくても大丈夫だから」

そう私は言って、また体に戻った。ギュ…。一瞬、窮屈さを感じた。

「おい！」

昴くんが、まだ体を揺さぶっていた。パッと目を開けると、昴くんは少しほっとした顔つきをした。

もしかして、こっちの次元の昴くんは、本気で私を殺そうとか、何かをしようなんて思ってないんじゃないのか？そのとき、なんとなく私は思った。

「いた…」

思い切りぶつけたらしい。頭にたんこぶができていて、ズキズキした。これ、階段から転げ落ちたときにも、感じた痛みだな～～。

「こっちに来い！」

昴くんは、私をまたベッドに連れて行き、布団をはがし私を寝かせた。それから、

「ロープで手でも縛っておく？それとも、手をベッドの端につないでおく？」

と私の顔に思い切り顔を近づけて、脅してくる。

「……」

私は、表面化していた。さっき魂が体に戻った時から、私の意識の方が前面に出たのだ。

私は、昴くん！！！と叫びたい衝動に駆られるわ、抱きつきたいわで、うずうずした。

昴くんからは、相変わらず、冷たいエネルギーがきていた。それに、黒い霧もどんどん昴くんから出るし、部屋中を覆っていた。

昴くん、愛してる…。心でつぶやく…。フワ…。私から光が出た。

目の前にある昴くんの目を、じっと見つめながら、また、私は心でささやいた。

昴くん、どんな昴くんだって、愛してるよ…。愛しくてしょうがない。心の奥底から、昴くんが好きだって、愛しいって感情が沸いてくる。そのたびに私から、ものすごい光が飛び出す。

それが辺り1面を覆う。闇がどんどん消えていく。昴くんのことも包み込み、私自身も包まれ、がたがた震えていた体が、ほんわかあったまる。

「怖くないのか?」

「え?」

「それとも、また逃げられるとでも思ってるのか?」

「…?」

「なんで、そんな目で見てんだよ?さっきまで、怯えて震えてただろ?」

ああ…。目つきが変わっちゃってるのか…。そりゃ、しょうがないよ。だって、怖くないもの。どんなにすごんでも、脅しても、昴くんには変わらない。まるで、俳優天宮昴が、名演技でもしてるとしか見えない。

「…頭打って、おかしくなったか？」

「そうかもしれない…」

私は、思わずそう言った。

「そうかも…？どういうことだ？」

「もう、怖くないから…」

そう言うと、昴くんが一回私のことを、思い切りにらんだ。それから、荒く私の腕を掴むと、冷たいキスをしてきた。

冷たいエネルギーが来る。だけどそれすら、私から出る光で、あったかいエネルギーに変化する。昴くんから出る黒い霧も、どんどん光で包まれ消えていく。

昴くんが顔を上げ、私のことをじっと見た。

「本気で、怖がってないのか？」

「怖くないよ、もう…」

昴くんの目を見つめながら、私はそう言った。昴くんは、まゆをしかめた。そして、

「本当に、人が変わったかのようだな…」

とつぶやくと、起き上がりベッドからおりた。

あれれ…？離れちゃうの？まだ、抱きしめてもいないし、抱きついてもいないし…。私は、そのまま昴くんのことをじっと見つめていた。

昴くんは、テーブルをもとの位置に戻した。

「この窓は、たとえ開いたとしても、半分しか開かないようになってる。あんたでも出るのは無理だ。あきらめるんだな」

そうだったのか…。

「もう、逃げようなんてしないから」

「……」

昴くんは黙って、私を見た。

「もしかして、それ、演技？」

「え？」

「そうやって、安心させようっていう演技か？」

「違うよ」

「は…。ま、いいけどね。どっちにしろ、逃げられやしないから」

そう昴くんは言うと、また部屋を出て行こうとしたが、

「待って！トイレ！」

と私は、ベッドから立ち上がった。

さっきからの冷えで、トイレには行きたかったが、あまりにも恐怖を感じてて、それどころじゃなかったようだ。

昴くんは、黙って私の腕を掴んで、部屋の外へと連れ出し、左にあるドアを指差した。

「逃げようとしても、トイレのドアは格子もあって、絶対出れないからな」

そう言い放つと、昴くんは逆の方へと行ってしまった。

トイレから出て、寝室に戻るか昴くんが行った方に行くか、ちょっと迷っていると、昴くんがやってきた。手にはトレイと、その上にパンと水が乗っかっていた。

「寝室に戻れよ」

昴くんにそう言われて、寝室に戻った。部屋に入ると、ベッドの横のテーブルに昴くんは、トレイを置いた。

「そこ！」

昴くんに指を指されて、ベッドに私は座った。もう一つのベッドに昴くんは座ると、パンをおもむろに食べ出して、

「食えよ」

と私に言った。

「うん…」

私もパンを取って、食べだした。

本気で、復讐をしようと考えたのかな…。本気で殺そうとしてたわけじゃないよね…。何も言わず、もくもくと食べてる昴くんに、エネルギーを向けても、冷たいエネルギーが返ってくるだけだった。

それと、もう一つ気になることがあった。それは、昴くんの背後にある黒い影だ。さっきよりも、私の光で小さくなっているものの、まだ昴くんの後ろでうごめいていた。

なんだろう、あれ…。何か生き物のように、うごめいていて不気味だった。

それにしても、本当にこのコテージには、私と昴くんの二人っきりなんだな〜〜。

「……」

昴くんのことを、しばらく見つめた。黙って昴くんはパンを食べ、時々水を飲んだ。

その横顔は、私が知ってるいつもの昴くんと、なんにも変わっていなかった。奇麗な横顔で、ほくろの位置も、まつげの長さも変わらない。色白で奇麗な肌で、黒いサラサラな髪だけが茶パツだったが、あとは全然変わらなかった。

昴くんの匂いも同じだ。首も、喉仏も、肩の線も…。

私がじっと見つめているので、昴くんが、変な顔をしてこっちを見た。

「食えないか。こんな状況じゃ…」

「ううん。食べるよ」

お腹もいきなりすいてきた。きっと、体が安心したからだ。

パンを食べ終わると、昴くんはトレイを持って、部屋を出てから部屋のカギをかけた。

「あ〜〜あ」

カギなんてかけなくてもいいのにな。それより、そっちの部屋でも昴くんと一緒にいたい。

ごろんとベッドに横になったが、寒いから、布団の中に潜り込んだ。寒いな〜〜。暖房ないのかな〜〜。

布団の中でまるまって、あったまっているうちに、どうやら疲れがどっと出たのか、寝てしまっていた。

どれくらい寝ただろうか…。目が覚めると、すぐ横のベッドに昴くんが横たわっていた。

「あ…。寝てた?私…」

「よく寝れるよね。あんた…」

「だって、ものすごく疲れてたみたいで…。お腹いっぱいになって、眠くなったかな？」

「……」

少し呆れたって顔で、昴くんは見た。さっきから、昴くんからまったく、冷たい波動も黒い霧も出ていなかった。

「もう夜だ。あんたの親父、あんたが会社にも出てこないし、家にも帰らないし、あたふたしてるんじゃないの？」

「…どうかな？」

「どうかなって？」

私は、こっちの次元の私の記憶を探った。

「今日はお父さん、１日会議だから。私が会社に出てるかどうかなんて、まったく気にも留めない」

「箱入り娘だろ？あんた、いつも父親に監視されてたんじゃないのか？」

「…昔は…。今は兄が監視する役目かな」

「へえ。じゃ、その兄貴ってのが、あんたがいなくなって、騒いでるんじゃないの？」

「…兄は、仕事納めで取引先を回ってる」

「じゃ、明日か…。さすがに無断で外泊したら、あんたの両親、黙ってないんじゃないの？」

「多分。でも、警察沙汰には絶対にしない」

「なんで？」

「そういうのを世間に知られないようにするから。会社のイメージダウンだし」

「……」

「部下とかに調べさせたり、探偵を一回雇ったこともあった」

「いつ？」

「私が、父に内緒で、学生のとき付き合おうとしたら」

「それで？」

「相手を脅して、付き合えなくなった」

「はは…。あんたの父親って、最悪だな」

昴くんは、冷たくそう言って笑ったが、すぐに黙り込み、

「じゃ、あんたは、親父のロボットかなんかなわけ？」

と、私に聞いてきた。

「うん…。ずっと私は、父の人形でしかなかった。娘とかって意識もなければ、人間とも思ってないかもしれない」

「…最低だな」

昴くんはそう言うと、少し顔を曇らせ、私を同情の目で見た。

「昴くんは…？」

「昴くん…？なんだよ、その呼び方」

「ごめん。でも、他に呼び方わからなくて」

「……。まあ、いいけど。で…、何が？」

「昴くんの家族…」

「…親父一人で、こつこつと大きくした会社だよ。母親も事務を手伝ってた。姉貴も今までその会社で働いてた。俺だけだ、反発したのは…」

「反発？」

「親父の会社なんて、継ぐ気もしなかった。俺は俺でやりたいことがあって、家も高校卒業と同時に飛び出した。それっきり帰らなかった」

「……」

「親父と最期に会ったのは、今年の6月…。俺のアパートに突然来て、帰って来いと怒鳴られて喧嘩した。俺は、親父の会社を継ぐ気はない。俺のやりたいことをするって、そう言ったら、好きにしたらいいが、家に戻れってさ…。だけど、戻らなかった。それが最期…」

昴くんから黒い霧が出た。顔も苦しそうにゆがんだ。私は、昴くんのことを思い切り、光で包み込んだ。

「あの頃からもう、親父の会社、やばかったんだ。家も担保に入れられて…」

「……」

「それでも、親父は必死だったっておふくろが言ってた。自分の会社のっとられないよう、家族や社員のために、いろいろと駆けずり回って…」

そうだったんだ…。

「俺だけ、そんなの知らずにのうのうとしてた。夢をおいかけ、のん気にフリーターなんてして、気取ってた」

昴くんから、またものすごい黒い霧が出てくる。それをまた、一気に光で消す。

「まさか、まさか、親父が自殺するなんて…」

昴くんは、言葉を詰まらせた。それから、小さく肩を震わせた。泣

くのをこらえているみたいだった。

しばらく、昴くんは黙っていた。そんな昴くんのことを、心で愛してるってつぶやきながら、光で包んでいた。

「なんでこんなこと俺、あんたにしゃべってるんだろ…」

「……」

苦しいなら、泣いてもいいよ。そう言ったら、どうするかな。でも疑うかな?また…。だけど、昴くんは本当に苦しそうだった。

父親が自殺をした悲しみや、ショック。自分が父親や家族をほっぽっておいたという罪悪感。私の父親への恨み。色んな思いが交差して、心がつぶれそうにもなっていた。

私はそっと、昴くんの方に手をのばしてみた。

「何?」

「……」

まさか、手をつないでとも言えないし、つないであげるとも言えない。だけど、その手にじかに触れて、あったかいエネルギーを送りたい。

「私が、昴くんが寝てる間に、逃げたらどうする?」

「もう、逃げないんだろ?」

「もし、気が変わったら？」

「……」

「手…、昴くんの手と、つなげておけば…？」

「え？」

「……」

昴くんは立ち上がり、部屋を出てすぐに戻ってきた。手には短めの細いロープを持っていた。それを自分と私の手にくくりつけ、離れないようにした。

「お前って変なやつ。こういうの自分から言う？」

「逃げようとしてないのに、勘違いされて、怒られたら嫌だから…」

「ああ…。それで？」

ふんって昴くんは、鼻で笑った。

私の左手と、昴くんの右手が、ロープでギュって結ばれていた。そのまま、昴くんはベッドに入り込み、私たちは寝ることにした。

心の中でもう一回、昴くん愛してるってささやいて、昴くんのことを見つめた。昴くんの手に、あったかいエネルギーが流れていくのを感じた。昴くんのことを光が、包み込む。

昴くんは目を閉じていた。顔がみるみるうちに、ピンクに染まる。

ここに来たときには、昴くんの顔は青白かった。

良かった…。体がきっと、あったまってきてるんだ…。

目を閉じた昴くんのことを見つめた。昴くんは、5分もしないうちに寝息を立てた。きっと、昴くんも疲れていたに違いない…。

おやすみ…。昴くん。大丈夫…。絶対にすべてが、うまくいく。私が昴くんのことを、守るから…。

ううん、白河さんもノエルさんも、悟くんもいる。みんなで守るから…。

昴くん、愛してるよ…。昴くんに心の底から、湧き出てくる想いを、手から送り出す。昴くんが光で包まれていく…。

昴くんの手も、あったかくなり、私も安心してそのまま眠りに着いた。

夢の中で、昴くんは何かに怯えていた。黒い霧が昴くんを取り囲み、低い声が聞こえていた。

「お前のせいだ」

「お前が悪い」

その声の主はわからないが、以前、私も聞いたことがある。何か得体の知れない、低いエネルギーの波動からの声だった。

その声を聞き、昴くんは怯えていた。小さな子どものように…。そ

して、

「ごめんなさい」

と謝って泣いてみたり、耳をふさいでみたり、とっても辛そうだった。

私はそっと、夢の中で昴くんを抱きしめた。泣いて怖がっていた昴くんが、私の腕の中で安心しきった顔をした。

「大丈夫だよ。誰も昴くんを責めたりしない。それに、誰も昴くんを傷つけたりしない」

そう言って、私は昴くんを優しく抱きしめる。昴くんは、しばらくそのまま、私の腕の中に抱かれていた。そして夢の中でも昴くんは、安心しきって寝ていた。

ピ…ピ…ピピ…。鳥のさえずりが聞こえた。目を覚ますと、窓から太陽の光が入ってきていて、眩しかった。

隣を見ると、すでに目が覚めてたらしく、昴くんがこっちを見ていた。

「おはよう」

思わずにこっと微笑み、昴くんにそう言うと、ものすごく変な顔をされた。

ああ、そっか…。ここ低い次元の世界だった。なんか、高い次元にいて、すぐ隣に昴くんがいるのかと思っちゃった。

手はまだ、ロープが巻いてあり、昴くんの手と私の手はつながっていた。私は知らない間に、昴くんの指に自分の指をからませながら寝てたようだ。それ、たまに高い次元でも一緒に寝るとき、してたしな～～。それが安心するんだよね。

「これ…」

そう言って、昴くんはつないだ手を上に少しあげた。

「え？」

「もしかして、作戦？」

「なんの？」

「こうやってたら、俺があんたに手が出せない…とか…」

「え？」

「寝込み襲われないようにっていう、そういう作戦？」

「……」

片手がふさがったくらいでも、どうにでもなるでしょうに…。

「ま、いいけどね…。時間ならたっぷりあるし」

昴くんはそう言うと、ロープを外した。それから起き上がり、ドアを開け、

「顔でも洗うか？」

と聞いてきた。

「うん。トイレにも行きたいし…」

ほんと言うと、お風呂にも入りたかったんだよね～～。それは無理かな…。

昴くんは、違う部屋へと入っていった。多分、キッチンやダイニングがあるんだろう。

私はトイレに行ったあと、トイレの横にある洗面所で顔を洗った。旅行先のホテルについてる、袋に入った歯ブラシが置いてあったので、それをちょっと、借りて使わせてもらった。

それから、のびをしながら寝室に戻ろうとすると、もう一個のドアを開けて、昴くんがまた、トレイに朝ごはんを並べて出てきた。

それを寝室のテーブルに置くと、ベッドにどかって座って、食べだした。私も昴くんの横に座り、食べだした。

「こっち…？」

「え？」

「座る場所…、なんでここ？」

昴くんが、少し変な顔をして聞いてきた。

「あ…、ああ。そっか。ごめん」

私はもう一つのベッドに座り、食べることにした。いつもの癖かな。昴くんのすぐ横に座ってしまう。

昴くんは、しばらく妙な顔で私のことをじっと見てから、また朝ごはんを食べだした。朝ごはんといっても、ベーグルにハムがはさんでるだけ。それと、ペットボトルの水。

こりゃ、痩せられるかもしれないな～～。と思いながらぱくついていると、

「あんた…。変なやつ」

とまた、昴くんがまゆをひそめて私を見た。

「え？」

「誘拐犯と一緒にいるんだよ？なんでそんな落ち着いてるの？」

「……」

そうは言っても、昴くんだから。

「ああ、そっか。俺が何もしないだろうって、たかをくくってるわけ？」

ああ…。それもあるかな。あまり、闇のエネルギーを出さなくなっているし。って、それは私が光で包んじゃうからか。

「そういうわけじゃないけど…」

私はとりあえず、そう言ってみた。

「でも、もう少し危機感、感じた方がいいと思うよ」

「…え？」

「あんたが行方不明になったって、もう騒がれてるだろ？」

「……」

「どれくらいの間、ここにあんたをおいとくか考えてない。俺の気分次第だ。いつ殺されてもおかしくないし、俺の親父みたいに、死後1ヶ月して発見なんてこともあるかもしれない。遺書でも置いとけば、自殺をしに山に来たって思われるかもな」

「自殺？」

「結婚を嫌がっての自殺。これ、いい考えだと思わない？」

昴くんからは、まったく黒い霧が出ていなかった。どうやら、本気でそんなことを思っていないようだ。

「それとも、半年くらいここに俺といる？お腹でも大きくなって、戻るってのどう？もうおろせやしないし、あんたの父親も婚約者も、どうするだろうね？」

「……」

怖がらせようとしてるようだが、まったく冷たいエネルギーが来ない。それどころか、今日は妙な顔や、まゆをひそめていても、あったかいエネルギーが時折やってくる。もしかして、高い波動の昴くんが目覚めかけてるのかとも思った。

朝ごはんが終わると、昴くんは、それを片付けようともしないで、私を見ていた。

「変な夢を見た…。手、つないだりしてたからか…」

「え？どんな夢？」

「俺が、子どものようになってて、あんたがいて…」

「それで？」

「それだけ…」

きっと同じ夢だ。

昴くんはまだ、私を見ていた。じっと見たまま、何かを考えてるようだ。こんな時に、心の声が聞こえたらいいのに…。

しばらくすると、昴くんはトレイを持って部屋を出て行き、ドアにカギをかけた。

「さむ…」

私はまた、ベッドに潜り込んだ。どうやら、寝室には暖房がないよ

うだ。

小さな窓から、朝の光が差し込んでいた。ああ、あの光でも昴くんは、浄化されたのかもしれない。どんなに口では怖いことを言っても、黒い霧は出てこなかったから。

昴くんは、すぐに戻ってきた。

それから、私の寝てるベッドにドカッて座った。

「あんたの親父にさ、あんたのことをさらったって、連絡しようか迷ってるんだよね」

「え？」

「知らされるのと、何も知らされないのでは、どっちが苦しむと思う？」

「知らされない方？」

これは知らせたりして、昴くんが誘拐犯だとばれたら困るっていうのと、警察に下手に連絡されたら嫌だからだ。

「そうだね。俺の親父も行方不明になって探しまくって、その間も気が気じゃなくて、家族全員おかしくなってた」

「……」

また、昴くんから黒い霧が出てきた。お父さんのことになると出るんだな。それに反応するかのように、昴くんの後ろの影も大きく膨

らむ。

私は、昴くん愛してるって何度も心でつぶやいて、光を出した。

昴くんはグィっていきなり、私の顎を持ってキスをしてきた。乱暴なキスだった。それから私の体に乗っかり、全体重を乗せてくる。

「泣き叫ぶ？助けを呼ぶ？」

私の目を見ながら、そう聞いてくる。私は黙って、顔を横に振った。

「なんで？誰も助けに来ないから？」

昴くんから、また黒い霧が出る。私はそれを光で消す。私の光と、太陽の光が同化する。部屋中が光で覆われる。昴くんからの黒い霧も、後ろの影もどんどん小さくなる。

昴くんは、また私の目をじっと見つめていた。その瞳には私が映っていた。昴くんの目に映っている私は、昴くんのことを思い切り優しく見つめていた。

「なんで？」

「え？」

「なんでそんな目で見てんの？昨日もそうだった。夢の中でもだ」

「…どんな目？」

「まるで、愛しい人でも見るような目」

「…うん」

「え？」

「昴くん…」

「え？」

愛してるよ…。心でそうつぶやいて、思わず私からキスをした。フワ…。ものすごい光が、私から飛び出す。きらきら眩しい。それにあったかい…。

「…？！」

昴くんがびっくりした目で、上半身を起こして私を見た。私はそっと、また昴くんを引き寄せ、またキスをした。昴くんのことをどんどん、光が包み込んで行く。昴くんは、しばらくそのまま動かなかった。

昴くんが私を見る目が、違っていた。来るエネルギーも違う。私が出すあったかいエネルギーを、そのまま返してくれる。

昴くんの頬をなでた。それから髪も…。そしておでこ、鼻、そっとなでていく。そのたびに、私の中から愛しいっていう気持ちが沸き起こり、光が溢れ出す。昴くんを包みこむ。

昴くんの頬をなでている手を、昴くんはぎゅっていきなり掴んだ。それから、私にキスをして首筋にもキスをしてきた。昴くんは、何かを求めるかのようにキスをする。何か心に空いた隙間を埋めるよ

うに、どうしようもない空しさを埋めるように…。

私は抵抗しなかった。心の奥に潜むこっちの次元の私が、抵抗をするかとも思ったが、ずっと心の奥底に隠れたままだった。

昴くんに心の中で、ずっと愛してるよってつぶやいた。そのたびに、光が出て昴くんを包む。昴くんの心を愛でいっぱいに、光でいっぱいに満たすように…。

愛しいな…。昴くんのすべてが、愛しい…。昴くんをぎゅって抱きしめる。愛しさで、光が溢れ出す。部屋を包んだ光が、部屋から宇宙空間へと放射される。

愛してる…。愛してる…。心で何度もつぶやく。

一瞬同化した。昴くんの心は、愛で満たされていた。空いた隙間も空しさも消え、今は愛で満たされている…。

昴くんは、しばらく私のことを抱きしめたまま、動かなかった。私もぎゅって昴くんに抱きついていた。

そのうち昴くんは、体を起こして私に布団を掛けると、服を着てドアにカギもかけず、部屋を出て行った。

「……」

私はしばらく、昴くんのぬくもりの余韻に浸っていた。目を閉じると、部屋中に昴くんの匂いがして、エネルギーが残っていて心地よかった。

それからしばらく昴くんを待っていたが、昴くんがまったく戻ってくる気配がなかったので、私も服を着て、そっと部屋を出てみた。

廊下の奥にあるドアが、開かれたままになっていた。そこに行ってみると、キッチンとダイニングテーブルがあり、その横にあるソファに昴くんは、腰掛けていた。そして、じっとテレビを観ていた。観ていたというよりも眺めている感じだった。

私はそっと、昴くんに近づいた。

「あんたのこと、ニュースではやってないね…」

昴くんが、ぼそってそう言った。

「……」

私は黙って、昴くんのすぐ横に座った。

「ここさ…、別荘だったんだ」

「え?」

「よく、家族で来たよ。っていっても、俺が中学生までの話だけど」

「そうだったんだ…」

「今はうちのものじゃない。もう少ししたら、壊されるってさ」

「……」

「壊される前に、誰も使わないんだったら、使ってもいいよな…」

そう言うと、ふって昴くんは笑った。私にじゃなく、別の誰かに話しかけているかのようだった。

そっと、昴くんの肩にもたれかけてみた。昴くんは、黙ってそのままの姿勢でいた。でも、優しいエネルギーが私を、包みこむのがわかった。

「…あんた、ほんとに今まで、男の人と付き合ったことなかったんだ…」

昴くんが、テレビの方を観ながらそう言った。

「うん…」

そうみたいだ…。こっちの次元の私は、本当に恋愛もしなかったし、結婚なんてまったく考えていなかったようだ。

「親父の言いなりの人生、むなしくない？」

「うん…。そうだね、むなしいよ」

こっちの次元の私が、心の奥底にかかえてた感情だ。

「あんたも、あんたの親父の被害者なのか…」

「……」

「そんなに会社をでかくすることって、大事かな。成功することっ

て、そんなに大事なことか？」

「え？」

「家族を家族とも思わない。娘をもののように扱う。全部、自分の成功のための道具」

「……」

本当にそうだ。いったいこっちの次元の父にとって、幸せってなんなんだろうか。成功か、会社を大きくすることか、名誉か、地位か…。

「俺の親父もそうだ」

「え？」

「そりゃ、家族を養ったり、社員を養ったりしなくちゃいけなかっただろうけど、初めは小さな規模の会社だったんだ。それをでかくしようって、家にもほとんど帰らないで、働くようになって…。一回、体も壊してぶっ倒れた。だけど、退院したらすぐに復帰してまた、働いて…。わかんないよな。その頃には、家族でどっかに行くなんてことも、なくなってたよ」

「何が1番、大事だったんだろうね」

「……」

昴くんは、しばらく黙り込んだ。

テレビでは、いろんなニュースを報道していた。どれも暗く重苦しいニュースばかりだった。

その中で、気になる名前が出てきた。「海藤玄」だ。あ…。ここに来る前の次元で、白河さんをたたいていた作家だ。

ニュースを見ていると、どうやら、何かの宗教の教祖らしい。今、活動を制限されていて、山の一角に追いやられていると、キャスターが話していた。昔私がいた次元でも、似たようなことがあったな…。

私がそのニュースに、くぎつけになっているのを昴くんが気がつき、

「こいつ、ちょっと危ないよな…。あ、俺もそうとう危ないけど…」

昴くんは、ぼそってそう言った。

「……」

心で、そんなことないよってささやいて、昴くんを私は優しく見つめた。その私を横目でちらっと見て、

「今は、落ち着いてるけど…」

と、昴くんは言った。

「落ち着いてる…？」

「ああ。声もしないし…」

「声？」

「なんでもない。こっちの話」

ああ…。夢の中で聞いた、あの怖い低い声かな…。幻聴みたいなものが聞こえてたのか。でも、きっとそれ、低い次元のエネルギーとつながってたんだ。

昴くんの後ろに巣くってた、闇のエネルギーはもう、ほとんど消えていた。

昴くんは、チャンネルを回した。年末の特番で、お笑いタレントが出ている番組ばかりをしていた。それをどれも、昴くんは観ないで、結局はまたニュースにチャンネルを移していた。

昴くんの横顔を見ていると、昴くんに憑いてた憑き物が、取れたかのようだった。顔つきもエネルギーも、まったく違う。昴くん自身も、なんだか力が抜けた感じで、ずっと無防備にぼ〜〜っとしている。

「もう、部屋のドアにカギかけないの？」

私がそう聞くと、

「え？」

と、何を聞かれたのか、本当にわからなかった様子で聞き返してきた。

「部屋、出て行くときにカギかけてかなかった」

「ああ…。だって、逃げないだろ?逃げようともしないで、俺のところに来たじゃん」

「うん…」

しばらくまた、昴くんが黙った。

「なんで、逃げないって思ったの?」

私は、気になり聞いてみた。

「え?」

また、ぼ〜〜ってしていたようだ。

「なんで?」

「なんでって、そりゃ…」

「?」

「……」

言葉に詰まっているようだった。昴くんは話すのをやめて、いきなり私のことをぎゅって抱きしめてきた。私も、昴くんの背中に腕を回し、ぎゅって抱きしめた。昴くん、愛してるよって心で、つぶやきながら。

「これだから…」

「え？これって？」

「あんた、俺のこと、抱きしめてくるじゃん」

「？」

「よくわかんないけど、俺のこと怖がってもいないし、嫌がってもいないし、それなのに逃げたりしないだろ？」

「うん…」

私はそのまま、昴くんのことを抱きしめていた。

「変なやつだよな…。とことんあんたって…」

「え？」

「ま、いいけどさ」

抱きしめられるがままになりながら、昴くんはそうつぶやいた。

それから二人で、ぼ～～ってテレビを観てる合間に、お腹がすいてきて、私は冷蔵庫にある材料で、お昼ご飯を作った。ご飯をダイニングのテーブルに運び、二人で昼ご飯を食べた。ダイニングはストーブがあり、あったかかった。

どれくらい、このまま、昴くんとここで過ごすことになるのか…。まったく予想もつかなかったし、これから先のことも、予想がつかなかった。

でも、もう昴くんは大丈夫…。そう私は勝手に思い込んでいた。

あの闇のエネルギーが実は、昴くんの影に身を潜めていただけで、昴くんから闇のエネルギーが浄化されない限り、そのエネルギーも消えないんだということを、そのとき私は感じることもなく、ただ、その時にある安らぎに身を任せていた。

昴くんは、食べ終わるとお皿を片付け出した。

「私が、洗うからいいよ」

私がそう言うと、昴くんは黙ってソファに移動した。私はキッチンで洗い物を終えて、昴くんの隣に座った。ベタ…と、はりついて。昴くんは、またそのままにしていた。

時々、外から鳥の声がした。リビングの大きな窓からは、木々が見え、木漏れ日が差し込んでいた。今日はいい天気なんだな…。

テレビをつけて、昴くんはまたぼ〜ってしていた。

「もうすぐ正月なんだな…。なんか、そんな気まったくしてなかった」

「うん」

「うちじゃ、正月も何もないな」

「昴くんのお母さんやお姉さん、どうしてるの？」

「喪にふしてる。昨日葬式だったから」

「お通夜は…？」

「一昨日…」

「昴くん、出たの？」

「出たよ。おふくろはずっと泣いてた。親父の会社にいた連中が、葬儀をいろいろとすすめてくれた」

「……」

「俺、ここ一ヶ月、夢でうなされてた」

「え？」

「親父が死んだことなんて知らなかったけど…。行方不明になってからだな」

「どんな夢？」

「ただ、誰かに責められる…。そんな夢」

ああ、昨日見た夢みたいな、そんな夢なのかな…。

テレビの中のお笑いタレントたちが、わいわいにぎやかにする中、昴くんの表情はまったく変わらず、それどころか、テレビではなく、もっと遠くを見つめているようだった。

ギュ…。なんだか、昴くんが遠くに行ってしまう感じがして、私は思わず昴くんの手を握った。

「何？」

昴くんが、聞いてきた。

「……」

私は黙ったまま、昴くんの指に私の指をからめた。昴くんは、顔を私に近づけて、それからそっとキスをしてきた。私は、もう一回昴くんにキスをした。

「あんたさ…、男性経験ないのに、キスはうまいんだな」

昴くんが、ぼそってそう言った。

わ…。なんかいきなり、恥ずかしくなった。高い次元の昴くんなら、今の私の恥ずかしいっていう思いを察知しちゃって、心で、ひかり、照れてる?!ってからかってきただろうに…。

そうだ…。高い波動の昴くんも、この次元の昴くんの中にいるはずだ。きっと、今もこっちの昴くんの心の奥底で、私を感じたり、この状況を味わっているはず。

昴くんの腕にもたれかかり、昴くんの指をギュウって握り、心で言ってみた。

『昴くん、聞こえる?』

でも、何も聞こえなかった。

「あんたさ…、もしかして…」

「え?」

こっちの次元の昴くんが、話しかけてきた。

「俺に、惚れたの？」

「……」

ものすごく、まじめな顔で聞いてくる。

「えっと…」

これは、もう惚れたと言ったほうがいいのかな。

「…うん」

私はこくって、うなづいた。

「なんで？」

「え？」

なんでって聞かれても…。

「なんでかな…」

私には、なんて答えていいかわからなかった。どんな次元の昴くんも、どんな昴くんも、愛してるから…なんて言っても、きっと通じないだろうし。

「俺、女いるよ」

「え?!」

女…?昴くんの口からそんな言葉が飛び出すとは…。

「…こんなことになって、別れるしかないだろうけど」

「運転してた人?」

「…ああ」

やっぱり、珠代ちゃん…。

「別れるの…?」

「あいつの人生まで、狂わせられない。運転を頼んだことも、失敗だったかもって思ってる」

「なんで?」

「共犯って思われるかもしれないだろ?」

「……」

私はまた、ぎゅって昴くんにしがみついた。

「犯罪者になんてさせないから」

「え?」

「昴くんのこと…」

「何言ってんの？あんたをさらったのは、事実だろ？」

「行方不明になっただけ。さらったかどうかは、誰も知らないんだよね？」

「珠代と、悟さんは知ってる」

「悟さんって？」

こっちの次元では、どういうつながりがあるのか気になり、聞いてみた。

「いろいろと、俺が族にいたとき世話になった人で…、今も仕事でお世話になってる」

族…？ええ？！

「クラブで俺、働いてる。たまにそこで、歌も歌ったりしてるんだ」

「そうなんだ」

「歌手が夢だった」

あれ？俳優じゃなくって…？

「悟さんは、そのクラブのマネージャー」

「そう…」

「悟さんが俺を裏切ることはないよ」

「信頼してるんだね」

「悟さんも、似た経験してるから…」

「え？」

「まあ、悟さんの場合は、親父さんがしてもいない罪をなすりつけられて、会社首になったんだけどさ」

「それで？」

「一回は、親父さん、どっか蒸発しちゃって…。ホームレスになっちゃったみたいだ。だけど、その間悟さんが働いて、家族の面倒をどうにかみてて…。2年位して親父さんが戻ってきて、今は親父さんも働いてるし、悟さんも働いてるから、家族も大丈夫だって言ってた」

「そう…」

「だから、俺の親父が行方不明になったときも、ホームレスにでもなって、ちゃんと生きてるさって言ってくれてたけどさ」

「……」

「死体で見つかって…。葬儀がバタバタと進んで…。警察が来たり、いろんなことがここ2日間であって…。その間、悟さんもずっとそばにいてくれてたけど…」

「うん」

「あんたさ…、あんたの親父の会社のホームページに載ってるよな。それ見てさ…」

「……」

「あんたの兄貴と、どっちさらうか迷ったけど、野郎だと抵抗されたら、敵わないかもしれないからさ」

「……」

「死体で見つかって、自殺だってわかって…。遺書もあったんだ。それ見て、おふくろも姉貴も、星野建設の社長のせいだって…。俺がいなかった時に、いろんなことがあったのを姉貴から聞いてたし、絶対に復讐してやるって思って…」

ブワ……。昴くんから、いきなり黒い霧が立ち込めた。ギュ…。昴くんを抱きしめ、その霧を消した。

昴くんは、手が震えていた。わなわなと、その時のことを思い出して震えたようだ。私の方を見ると、いきなり、昴くんは乱暴にキスをしてきた。

「昴くん…？」

それから、落ち着きを取り戻したように、抱きしめてきた。

「俺…、もうどうでもいいや…」

「何が？」

「俺の人生」

「なんで？なんでそんなに投げやりになるの？」

「疲れたよ。この一ヶ月くらいで、ものすごく…」

「……」

私は何も言えなかった。

「本当に、あんた殺して、死のうかとも思ってたけど…。もう、俺の人生終わりにしてもいいかって思ってたけど…」

「……」

私はぎゅって、昴くんを抱きしめ背中をなでた。

「あんたとこうしていようかな。ずっと…」

「え？」

「どのくらい、こうしていられるかわからないけど、許される時まで」

「いいよ…」

「え？」

昴くんは、私の顔を見た。

「いいよ。一緒にいる」

だって、そのために来てるし…。

「俺と…、ここで？」

「うん。昴くんといるよ」

私はもう一回昴くんのことを、抱きしめた。昴くんは、無言で抱きしめられていた。少し肩が震えていた。ずっと、不安や恐怖、悲しみ、罪悪感と戦ってきたんだろうな…。

その日、ずっとソファに二人で、くっついて座っていた。昴くんは時々、ぽつりぽつりと自分の話をした。どんな子ども時代を過ごしてきたかとか、悟くんとの出会いとか…。

悟くんに対しては、本当に信頼があるようで、悟くんのことを尊敬もしているようだった。

たまに、お笑いタレントのねたでくすって笑った。

『あ…。今、笑った』

笑い顔が見れて、私は嬉しくなった。笑顔はいつもの、可愛い笑顔だ。

不思議だった。とてもゆるやかに時間が流れていた。ただ、時折昴

くんは、苦しそうな表情をした。どうも、何かをふと思い出すようだった。そのたびに私は、光を放った。光で昴くんを包み込み、抱きしめた。

抱きしめると、されるがままだった昴くんが、私の背中に腕を回して、昴くんも抱きしめてくれるようになった。昴くんの鼓動を感じた。ぬくもりも感じた。高い波動の昴くんと、何も変わらなかった。

夜になり、部屋が暗くなると昴くんは電気をつけた。

「お風呂、入れてくるよ」

昴くんはそう言うと、リビングを出て行った。私は何を夕飯作ろうかと、冷蔵庫を開けた。でも、あまり食材はない。缶詰とか、カップラーメンとかはある。冷凍庫には冷凍食品が少しだけ、入っていた。

「夕飯、どうする？」

昴くんに聞いた。

「冷凍のもんでいいよ」

「うん。それしかないもんね」

仕方なく、冷凍食品を解凍したり、いためたりして夕飯を作った。

この食料品で、いったい何日持つのかな…。ふとそんなことを思ったが、でもきっと全部がうまくいくはずだとそう思い、悩むのはやめにした。

昴くんとダイニングテーブルについた。なんだか、一緒に暮らしているかのような気がした。昴くんと暮らしたら、毎日がこんな感じなんだ…。

「昴くんは、一人暮らしなの？」

「ああ。でもたまに、珠代が泊まりに来てた」

「……」

いけない…。私、今嫉妬した。黒い霧が出て慌てて、それを光で消した。どうも、どの次元にいても、珠代ちゃんのことで、私は割り切れない思いをしてしまう。

昴くんは、もくもくとご飯を食べた。それからさっさと立って、食器を洗い出した。

「私するよ」

「いいよ」

昴くんは、なんだか口数が少ない。

「俺、なんて呼んだらいい？」

「え？」

「あんたのこと、なんて呼べばいい？」

「ひかりでいいよ」

「ひかり？」

「うん」

昴くんにひかりって呼んでもらって、嬉しくなった。

洗い物を終えると昴くんは、

「風呂はいってくる」

と言って、とっととリビングを出て行ってしまった。私も自分の使っていた食器を洗って、片付けた。それから、ぼ～っとソファに座って、テレビを観ていた。一人でそこにいるのは、なんだか寂しかった。

『あ～～あ。一緒にお風呂入っちゃえば良かった。でもそんなこと言ったら、驚かれるだろうな』

昴くんのエネルギーを感じてみた。部屋にはまだ、昴くんのエネルギーが残っていて、私を包み込んだ。

しばらくするとスエット姿の昴くんが、頭をバスタオルでゴシゴシと拭きながらリビングに入ってきた。昴くんは、やっぱり口に歯ブラシをつっこんでいる。

ああ…。この次元でもそうなんだ。思わず私は、嬉しくて笑いそうになった。

「何？」

口につっこんだ歯ブラシを手に持ち、昴くんが聞いた。

「ううん…。私も入ってきていい？」

「着替え俺の持ってく？」

「え？」

「ちょっと待ってて」

昴くんは寝室に向かい、また戻ってきた。

「はい」

昴くんは、バスタオルとパジャマを持って来てくれた。

「あ…。下着はないよ。男物でよけりゃ、貸すけど」

「え？」

「風呂場、乾燥室になるんだ。風呂上がる時に洗って干せば、すぐに乾くと思うけど」

「…じゃ、そうする」

私はバスタオルと、パジャマを持ってバスルームに行った。そしてバスタブにゆったりと入り、くつろいだ。

高い波動の昴くんは、どうしてるのかな…。どうやったら、表面に出るかな…。だけど、まだまだここの次元の昴くんを癒す必要があるのかもしれないな…。そんなことを考えながら。

お風呂から上がり、下着を洗ったのを干して体を拭いていると、いきなり昴くんがバスルームに入ってきた。

「わ！何？」

驚いてバスタオルで、体を隠すと、

「やっぱ、パジャマ着なくていいよ」

と言い、強引にリビングに連れて行かれた。

「え？」

リビングの絨毯の上に、あったかそうな毛布が1枚おいてあった。

「これにくるまってたら、あったかいよ」

「裸…で？」

「洗濯したもん、乾くまで」

ああ…。そういうことか…。

昴くんも毛布に、一緒にくるまってきた。

「寒くない？」

昴くんが聞いてきた。

「大丈夫…。この部屋あったかいし」

本当にリビングは、暖房がきいててあったかかった。

「じゃ、俺も裸でもいいかな…」

「え？」

昴くんは、いきなり服を脱ぎ出した。それから毛布の中で、私に抱きついてきた。

昴くんは、高い波動の昴くんのように優しい。でも時々、何かをむさぼるように、乱暴にもなる。心の中で、まだいろんな思いが交差しているのかもしれない。

「俺、もう何もかも忘れたい」

「え？」

「何も、考えたくない」

昴くんは、はき捨てるかのようにそう言った。

「いいよ。考えなくても…。何も考えなくていいよ…」

私は、昴くんを抱きしめながらそう言った。大丈夫、絶対に大丈夫だから…。そう心の中でつぶやきながら。

きっと何もかもが、いい方向へと進んでいる。宇宙の流れに任せていたらいいんだ…。

毛布にくるまりながら、しばらく二人でテレビを観た。時々、昴くんは私の髪にキスをしたり、首筋にキスをした。なんだか、高い波動の昴くんがすぐ横にいる感じがした。

それから、しばらくすると昴くんは、

「もう、寝ない？」

と聞いてきた。

「うん。眠くなったね」

昴くんは、毛布を持って立ち上がった。

「毛布にくるまったまま、寝室に行くよ」

「え？うん…」

そのまま、二人で移動した。途中で毛布のはしっこを踏み、転びそうになると、昴くんが片手で私のことを支えた。

「あはは…。転ぶかと思った」

そう言って、昴くんの腕に掴まった。

寝室に行き、私はすぐベッドに潜り込んだ。

「ベッドの布団、まだ冷たい」

そう言うと、昴くんも潜り込んできた。

「あ、昴くん、あったかい…」

ぎゅって昴くんに抱きついた。

「…俺ら、変だよね」

「え？なんで？」

「だって、誘拐犯と、誘拐された被害者だよ？」

「そうだっけ」

「そうだっけって…、昨日は、あんたものすごく怖がって怯えて…」

「あんたじゃなくて、ひかり…」

「あ…、ああ。ひかり…」

「そうだね。変って言えば変だね。でも、こうやってめぐり会う、運命だったのかもしれないよ？」

「運命？そんなの信じるの？」

「運命は、信じてる。宇宙が書いたシナリオ」

「宇宙？」

「全部、うまくいくように」

「…それは信じたくない」

「え？」

「こんな、悲惨なことが起きてるのに、それがうまくいってるとか、絶対に考えられない」

そっか…。そうだよね。だけど、これも昴くんのミッション…。

「ひかり…、もし、家に戻れたら結婚する？」

「しない。それに、戻らない。ずっと、昴くんといる」

「…俺と？」

「昴くんのそばにいたいから」

「……」

昴くんは、ぎゅって私のことを抱きしめた。私も昴くんを抱きしめた。部屋中が光で、覆われた。そして、昴くんの鼓動を聞きながら、私は眠った。

その日の夢では、昴くんは私といた。でも、時々苦しそうに顔をゆがめた。

「うるさい…」

何かに向かって昴くんは、言う。

「もう、俺に指図するな」

「もう、終わりにさせてくれ」

「ひかりは、殺せない」

「ひかりは…」

昴くんはそう言って、私を見てぎゅって抱きしめた。

「もう、殺せない。もう、離したくない。ずっとここにいて。ひかり…」

昴くんは、体を震わせてそう言って、もっと私のことを強く抱きしめた。

何か、聞こえているのだろうか…。また、あの低い次元の声なのか…。なんて言って来てるのだろう。私のことを殺せとか、そういうこと?

私も昴くんを抱きしめた。そして、光で包み込んだ。

「ひかり…。すげえあったかい」

昴くんは、そう言うと涙を流した。きっと、ずっと苦しくて、仕方がなかったはずだ。いったい、昴くんは泣けたのだろうか?もしか

して、それもずっと、我慢しているんじゃないだろうか？

目が覚めた。鳥のさえずりもなく、部屋に光も差し込んで来ていなかった。し～～ん…。ただ、静けさが部屋全体を覆う…。布団から足がはみ出ると、かなり冷たい空気を感じた。

昴くんは、まだ寝ていた。私はそっと、ベッドからおりて、昨日床にほっておいた毛布にくるまった。そのまま窓の方に行き、外を覗いた。

「雪…？」

そうか。それで、音がしなかったんだ。雪は、しんしんと降っていた。

「ひかり？」

「昴くん、起きた？雪だよ」

「雪…？」

私はまた、ベッドに潜り込み、

「どうりで、寒いと思った」

と言って、昴くんに抱きついた。

「雪か…」

昴くんは、ぼそってつぶやいた。

「ね…」

「ん？」

「ご飯、どうする？」

「え？」

「食料、足りなくなるかも」

「ああ。そっか…。あれじゃ、足りないか…。車もないしな。どうするかな…」

「珠代さんが、乗っていったんだよね？」

「ああ…。また、珠代、呼ぶか…」

「え？」

それは嫌だって、一瞬思ってしまった。

「駄目だな。あいつにもう、何か頼むのは…」

「……」

「悟さんに頼むか…」

「車？」

「うん。それか、食料…。もう来なくていいって言っちゃったけど」

「でも、来てくれるかな?雪だし…」

「このくらいの雪なら大丈夫だと思うけど…。電話してみるよ。とりあえず朝ご飯くらい、どうにかなるよね」

「うん」

昴くんは、裸のままベッドから出ると、

「うわ!まじ寒い!」

と言いながら、寝室を出て行った。私はそのあとから、毛布にくるまって、リビングに行った。

昴くんは、昨日脱いだスエットをすぐに着ると、ストーブをつけた。私はバスルームに行き、乾いていた下着を着て、昨日脱いだ服を着た。

リビングに戻ると、昴くんがベーコンを焼き、それをベーグルにはさんだのをテーブルに置いていた。それから、コーヒーを淹れてくれた。

朝ごはんを終えると、私はさっさと食器を洗い出した。昴くんは携帯を持ってきて、電源をいれ、電話をかけだした。

しばらくすると、相手が出たようだ。

「あ、俺っす…」

悟くんかな？相手は…。悟くん、高い波動の悟くんだよね。どうしてるのかな。心配してるのかな…。

「すいません。勝手なこと言って申し訳ないんですが、食料、なくなってきてて…」

昴くんがそう言うと、しばらく黙り込んだ。悟くんが何か言ってるようだ。

「生きてますよ…」

昴くんが答えた。私のことかな…。

「はい…。車はないです。珠代が乗っていったから…。え？珠代ですか？知らないですよ。来てないし…」

珠代ちゃん？いないの…？

「はい…。悟さん、来れるんですか？仕事は？あ…。もう正月明けるまで店、休みなんですね…」

悟くんが来るの？

「俺なら大丈夫です…。はい…。え？おふくろが…？はい…。あ、すみません」

しばらくまた、昴くんが黙った。

「わかりません、いつまでいるかは…」

また、しばらく黙り込む。

「いいえ…。悟さん、一人ですよね…？あ、そうだ。星野建設、なんか動きありましたか？」

お父さんのこと？

「え？警察には連絡してないんですか？探偵？」

探偵？探偵を雇ったのか…。

「はい…。俺のこと？かぎまわってるんすか？珠代は？まさか、いなくなったのはそれで…？え？はい。わかりました。じゃ…」

昴くんは、電話を切った。

「探偵動き出したみたいだ」

「珠代さん、いなくなったの？」

「珠代の家には、帰ってないらしい…」

「そう…」

嫌な予感がした。

「悟さんが食料揃えて、午後いちにでも来るってさ。ひかり、寝室に隠れてる？」

「え？なんで？」

「いや、なんでって特に理由はないけど…。ただ、ここで二人でのほほんとしてるの見たら、かなりびっくりするだろうなって思って」

「悟さんが？」

「ああ…。いや、いいんだけど。なんか、ひかりは生きてるのかとか、今、どうしてるのかとか、ちゃんと食べさせてるのかとか、あれこれ聞かれたから」

それで、生きてますよって答えてたのか…。リビングで二人でのほほんとしていた方が、悟くんが安心するだろうと思ったけど、

「寝室にいたほうがいいのかな。だったら、そうするよ」

と、昴くんの言うとおりにしようって思って、そう言った。

「車の音がしたらでいいけど…」

「うん」

ソファにまた二人で座り、べったりとくっついた。

「昨日は昴くん、変な夢見た？」

夢を覚えてるか、気になり聞いてみた。

「多分、またうなされたかも…。覚えてないけど」

「そう…」

「俺、なんか寝言でも言ってた？」

「ううん…」

「……。おふくろがさ」

「うん…？」

「俺のこと、探してたみたい…。いきなり葬式終わったら、いなくなったから」

「それで…？」

「悟さんが、自分の家に来てるって、言ってくれたみたい」

「そう…」

「悟さんには、すげえ迷惑かけてるよな…」

「……」

大丈夫だよ。悟くんは、きっと昴くんを助けるために必死で動いてくれてるはず…。そう心で、ささやいた。

「ひかり…」

「うん？」

「なんだか、たまに俺、変な声が聞こえるんだ」

低い次元のエネルギー…？

「俺の声だと思う」

低いエネルギーの声が…？

「ひかりのことを呼んでる。それに、ひかりのことを絶対に守れって聞こえる」

……！昴くんだ。高い波動の昴くんの声だ。

「俺の声だ。でも、頭の中っていうか、体の中から聞こえる。こうやって、ひかりの隣にいて、ひかりのことを感じてると、ひかり、愛してるって…」

「……」

昴くん…！

「あ、こんなこと言ったら、かなり俺、変か…。前は、すんごい低い声で、ひかりを殺せって聞こえた。星野建設の娘、親父を殺したやつの娘、殺せって…」

「……」

「俺、もしかして、変になってるのか？」

「え？」

「統合失調症ってやつ…？幻聴ばかり聞こえる」

「ううん。違うと思うよ…。低い声が誰の声で、何の目的があるかはわからないけど、多分、昴くんの心にある負のエネルギーに引き寄せられた、低いエネルギーだよ」

「何？それ…」

「同じ波動のものを、引き寄せちゃうの…。今は、聞こえないの？」

「いや、ほんとに、たまに…。こいつは、憎む相手だとか…。そんな声をかき消すように、ひかりを守れって声もする」

ああ…。もしかして、時々顔をしかめてたのは、声がしてたから？

「変だよね…」

「ううん。大丈夫。私だって、そんな時あったし」

「え？」

私じゃないか…。低い次元の私だ。時折、お前なんか死んでしまえって声がしたりしていたもんな…。

「ひかりも？」

「でも、大丈夫だから」

私はそう言うと、昴くんのことを抱きしめた。

昴くんは本当に、表情が穏やかになってきていた。優しい目で私を見ることもあった。低いエネルギーの声は、もうしなくなったのか…。ずいぶんと、闇のエネルギーが浄化されたんだろうか。

私は、私の腕を昴くんの腕に絡ませたり、手をつないだり、時々キスをしたり、抱きしめたりしていた。すると、昴くんが私の後ろから私を抱きしめて、首筋にキスをした。あ…、これ、高い次元でも、昴くんがよくしてたことだ。

「そろそろお昼にする？もうすぐ12時になるよ」

私がそう言うと、昴くんは私を抱きしめていた腕をゆるめた。

「ああ…。うん」

私が立ち上がり、キッチンに行こうとすると、いきなり玄関のドアを思い切りたたく音がした。

「悟さんかな…」

昴くんはそう言うと、玄関のドアを開けに行った。

「昴！大変だよ！」

「珠代？」

珠代ちゃん？

「家に帰らなかったのか？」

「帰ったんだ。でも、家の前に変な車があって、どうも、私が帰って来るのを待ってるみたいで…。だから、そのまま私、悟さんのところに車で向かったんだ」

「え？でも、悟さん、珠代がいなくなったって言って…」

「悟さんの家に行って、声をかけようとしたら、悟さん、警官といたんだ」

「……。まさか…」

「本当だよ。それで一緒の車に乗り込んだ。悟さん、裏切ったんだ」

「そんなわけない…。朝、電話したら何も言ってなかった」

「電話？それで悟さんは？」

「こっちに向かってる」

「やばいよ、昴。逃げよう。警官連れてくる気だよ」

「……」

「今なら、逃げられる」

「あいつは…？」

「星野の娘？連れてって山の中に、捨ててくりゃいいじゃん」

「……」

「昴！のん気に考えこんでる暇なんてないよ？」

「わかった。連れてくる。ちょっと待ってろ」

会話は全部聞こえてた。悟くんが警官と？どうしてだろう…。もしかして、私が危ない目にあってるとでも思って、警官を連れてくる気なのか…。

「ひかり」

リビングのドアを開け、昴くんが入ってきた。

「なんでここのいんの？逃げられたらどうすんの。寝室に閉じ込めるんじゃなかったの？」

昴くんの後ろから、珠代ちゃんが顔を出し、私を見てそう言った。

「待ってろって言っただろ？」

「だって…」

「寝室に閉じ込めなくても、逃げられやしないよ」

昴くんがそう言うと、珠代ちゃんは目隠しをポケットから取り出し、私の方に歩いてきた。

「珠代。勝手なことするな」

昴くんが止めた。

「なんで？」

「いいから。車に先に行ってろよ」

「嫌だ」

「え？」

「昴、この女と1日一緒にいたんでしょ？」

「……」

いきなり珠代ちゃんは、昴くんに抱きついた。

「珠代？」

「こんな女、ここにおいてけばいいじゃん。二人でどっかに逃げようよ」

「……」

昴くんは、黙って珠代ちゃんのことを突き放そうとしたが、珠代ちゃんは昴くんの首に腕を回して、キスをした。

ブワ……。私からものすごい黒い霧が飛び出た。昴くんにくっつかないで。離れて！心でそう叫んでる。

いけない…。黒い霧は二人めがけて飛んでいく…。

昴くんが、珠代ちゃんにそっけない態度を取ったからか、珠代ちゃんも、私に嫉妬していたからか、珠代ちゃんからもものすごい、黒い霧が出ていた。それと私からの黒い霧が合わさり、辺り一面を覆い出した。

いけない！光を出そうとしても、出てこなかった。

黒い霧は、昴くんの後ろに隠れてた闇のエネルギーとリンクしたのか、どんどん膨れ上がり、昴くんをそのエネルギーが包み込んだ。

「う…」

昴くんが、苦しそうな顔をして、うつむいた。

「昴。この女と何かあったんじゃないよね？」

珠代ちゃんは、昴くんの腕を掴みそう聞いていた。

「この女は、わかってるよね？昴の父親殺したやつの、娘なんだよ？」

「……」

昴くんは、うつむいたまま黙っていた。

「こんなやつ、山でのたれ死んだらいいんだ。昴の親父さんが、そうされたみたいに…」

「親父…」

昴くんの声が、ものすごく低かった。言葉を発すると、昴くんから黒い霧が飛び出た。

「復讐するんでしょ？私も手伝うから」

「……。そうだ…。復讐…、復讐するために、俺はここにいるんだ」

昴くんが、おかしい…。顔は青白く、声も別人のようだ。闇のエネルギーにのっとられてる…？顔つきも違う。

昴くんの後ろで大きくなった黒い影が、ゆらゆらと揺れる。今まで身を隠して、出るチャンスをうかがっていたのか…。光が消え、闇に覆われるのを、ずっと待っていたのか…。

「昴くん！」

私はそう叫んで、心で昴くん愛してるってつぶやいた。私から光が出る…。でもたちまち、闇に覆われる。

強い…。どうして？

珠代ちゃんだ…。珠代ちゃんの中の負のエネルギーも、リンクしてる…。さっきから珠代ちゃんの中からも、どんどん黒い霧が出る。

昴くんは、じりじりと私に近づいてきた。顔はまったくの別人に見える。

「親父は、あんたの父親に殺されたも同然だ…」

「あんたも、報いを受けるべきだ」

「復讐なんだ。これは…」

「当然の報いだ」

昴くんは低い声で、そうつぶやきながら私に寄って来る。

昴くん…！愛してるよ…。

お願い…。目を覚まして…。闇のエネルギーに負けないで…。小さな声でそう言ったが、昴くんの表情はまったく変わらなかった。

昴くんが私の首を、両手で掴んだ。ものすごい黒い霧を出している。そして、昴くんが指に力を入れる。

ググ…。…！苦しい！！！

昴くんの顔がゆがむ。黒い霧が昴くんを覆い、昴くんの顔まで、もやがかかる。

昴くん！昴くん！！！！！

『やめろ！』

いきなり、体の中から声がした。

『ひかりに手をかけるな！！』

昴くんの声だ…。昴くんの手がゆるんだ。そして、顔を思い切りしかめ、苦しそうにしている。高い波動の昴くんが、止めてくれたの

…？

バタン！！！その時、リビングのドアが、思い切り開いた。

「やめろ！昴！！」

悟くんだ。悟くんが飛び込んできて、昴くんを思い切り殴った。昴くんはその反動で、思い切り床にたたきつけられた。

「ゴホ…、ゴホ…」

私は力が抜け、その場にしゃがみこみ、咳き込んだ。

「ひかりさん、大丈夫？」

悟くんが私のことを、支えてくれた。

「す、昴くんは…？」

昴くんのすぐ横に、警察官の制服を着た漆原さんがいて、昴くんのことを押さえ込んでいた。

「昴を離して！」

珠代ちゃんが、漆原さんにくってかかろうとしたが、

「向こう行ってろ！」

と腕で、はらわれてしまった。

昴くんは、ぐったりとしていた。気を失ってるようだった。

「す、昴くん…。昴くん！」

私は立ち上がり、よろよろと昴くんに近づいた。

「ひかりさん、危ない！昴のそばに行っちゃ駄目だ」

悟くんに、止められたが、

「やだ！離して！」

と悟くんの腕を振り払い、昴くんのそばに駆け寄った。

「ひかりさん、昴は何をするかわからない。危険だ」

漆原さんが昴くんを押さえ込んだまま、そう言った。

「悟さん、裏切ったの？！」

珠代ちゃんが、泣きそうになりながらそう叫んだ。悟くんも漆原さんも、それに何も答えなかった。

「昴くん、昴くん！」

私は漆原さんの横から、昴くんの顔を覗きこんだ。昴くんは、まったく意識がないようだった。

打ち所が、悪かったんじゃないよね…。

「気を失ってるだけだ」

漆原さんがそう言っても、私はまだ昴くんを呼んだ。そして、漆原さんを必死で昴くんから、離そうとした。

「ひかりさん、駄目だ。こっちに来るんだ」

後ろから悟くんまで、私のことを止めに来る。

「やだ。昴くん、目を覚まして！」

「ひかりさん！」

悟くんに力づくで、昴くんから離されそうになった時、

「いて…」

昴くんが目を覚ました。

「昴くん！」

「昴！」

私と珠代ちゃんが、同時に叫んだ。

「昴、大丈夫？」

珠代ちゃんも、昴くんに駆け寄ったが、

「来るな」

と漆原さんが、珠代ちゃんを制してしまった。

私は悟くんの腕を思い切り振り払うと、昴くんに抱きついた。

「昴くん、大丈夫?」

「ひかりさん、危ない!」

漆原さんと、悟くんが止めに来た。しばらく、昴くんは頭をおさえて痛がっていたが、私の顔を見てから、ぎゅっと私の両腕をつかんできた。

「昴!やめろ!」

漆原さんが昴くんを、はがいじめにした。悟くんが私を昴くんから離した。

「ひかり!」

昴くんは、漆原さんの腕の中でもがきながら、

「ごめん…ひかり。大丈夫だった?苦しくなかった?」

と、私に聞いてきた。

「昴…くん?」

「首、苦しくなかった?」

昴くんは泣きそうな顔をしている。

「漆原さん、大丈夫だ。昴、高い次元のほうだ」

悟くんが、私の手を離してそう言うと、漆原さんも昴くんのことを離した。昴くんは慌てて私の元に来ると、私の首を見て、

「あ…。赤く痕になってる…」

と、辛そうに言った。

「昴くん…なの？」

「ひかり。ごめん…。なかなか表に出れなかった」

「昴くんなのね？」

私は、また昴くんに抱きついた。

「昴？どういうこと？」

珠代ちゃんが、漆原さんに腕を掴まれたまま、こっちを見て聞いてきた。

昴くんは私のことを抱きしめながら、思い切り光で包み込んでくれていた。

「高い次元の昴なんだな、良かった」

漆原さんは、ほ〜〜ってため息をつきながら、そう言った。

「次元？なんのこと？なんでその女と抱き合ってんの？昴！」

「珠代ちゃん、君、まだ、表に現れてないの？」

悟くんが、珠代ちゃんに聞いた。

「そうだ。悟さん、裏切ったの？警官連れてきたりして…。昴のことは、絶対に警官になんか渡さない！」

珠代ちゃんがそう言って、すごんだ。

「大丈夫だよ…」

昴くんが、まだ私を抱きしめながらそう言った。

「え？」

「漆原さんは、俺の仲間だ」

「警官が？」

「警官してるとは、思わなかったけど…」

「え？！」

珠代ちゃんは、驚きを隠せないようだった。

昴くんはやっと立ち上がり、私のことも立たせてくれた。それから、頬に手を当てて、

「まだいてえ…。ひっくり返って打った頭も痛いけど、こっちの方が強烈だった」

と言って、悟くんの方を見て、

「悟さん、顔はやめて…。俺の商売道具だから」

と笑った。悟くんは、

「何言ってんだよ！あほ！」

と言いながら、昴くんの肩を軽く抱いていた。

「闇にのまれる前で、良かったな」

そう悟くんが、小声で昴くんに言うと、

「…やばかったです。悟さんたちが来てくれて、ほんと助かりました」

と昴くんも、小声でそう言った。

「珠代ちゃん。多分、この状況を把握できないと思うけど…、その、俺より悟さんに説明してもらった方がいいかな？」

昴くんが珠代ちゃんにそう言うと、珠代ちゃんは、きょとんとした顔をした。

「……。なんのこと？」

「そうだね。説明するよ。でも、その前に一服させてくれる？車思い切り飛ばしてきたし、なんも朝から食ってないし…」

悟くんが、脱力した感じでそう言った。

「ああ。はい。なんか、用意しますか？」

昴くんが聞くと、

「ああ、適当でいいよ」

と、悟くんは漆原さんと、ダイニングの椅子に腰掛けながらそう答えた。

「昴、こいつ大丈夫なの？」

珠代ちゃんが、漆原さんの方を見てそう聞くと、

「漆原さんなら、大丈夫だよ。昴のこと捕まえにきたわけじゃないから」

と悟くんが答えた。

「でも…」

「誘拐したってのも、ばれてない。いや、昴疑われてて、探偵が動いてるけどね。俺の店にも来たみたいだ。珠代ちゃんの家にも行ったみたいだね」

「うん…。あれ、探偵なの？」

「星野建設の社長が雇った…」

「疑われてるのに、大丈夫なの？」

珠代ちゃんが、心配そうに聞いた。

「う～ん…。どうにかね。でも、ここがばれるのは時間の問題かも。ここまで、やってくるかもしれない」

「え？」

昴くんは、キッチンからダイニングの方にやってきて、悟くんに聞き返した。

「昴、食料頼まれたけど、持って来てないよ。ここ、昼飯食ったら、すぐ出よう」

「どこに逃げるの？」

珠代ちゃんが聞いた。

「白河さんのところ」

「白河さんって？」

「警視総監だ」

漆原さんが、答えた。

「やっぱり、昴のこと捕まえて、警察に連れて行く気なんだ！」

珠代ちゃんがそう叫んだと同時くらいに、私と昴くんも、

「警視総監?！」

と叫んでいた。

「この次元じゃ、白河さん、警視庁にいんの。そんで、いろんなあくどい組織をつぶしてってるみたい」

漆原さんが教えてくれた。

「へ〜〜〜〜」

昴くんは、目を丸くしながらそう言った。

「じゃ、漆原さんも同じ理由?」

「いや、そういうわけじゃない。この次元の俺はまだ、目覚めてもいなかったし」

「でも、高い波動の漆原さんになってるんでしょ?」

私が聞くと、

「ノエルさんと白河さんとで、光を当ててくれたからね」

と漆原さんは言った。

「葉月も、流音さんも、もう表面化してるよ」

悟くんが付け加えた。

「そうなんだ。あれ？じゃ、俺だけがもしかして…」

昴くんがそう言うと、

「ひかりさんも、早くに表面に出られたんだね」

悟くんは私にそう聞いてきた。

「昨日、テーブルから落ちて、頭打って、幽体離脱を一瞬してから…」

「あ。俺と同じパターンだ」

昴くんがそう言った。

「テーブルから、落ちた…？」

悟くんが、聞き返してきた。

「うん。窓から逃げようとして、見つかって捕まって…」

「昴に？」

漆原さんが、今度は聞いてきた。

「そう…」

「ごめん…」

昴くんが、すまなそうな顔をした。

「でも、そのおかげで、私が表面に出られたから」

昴くんにそう言うと、昴くんは目を細めた。

「昴くん、止めてくれたでしょ？」

「え？」

「声、聞こえたの。ひかりに手をかけるなって…」

「ずっと、言い続けてた。心の奥底からずっと…」

昴くんは、私のことを抱きしめてそう言った。

「昴？」

珠代ちゃんが、黒い霧を出した。

「どうしたっていうの？ねえ！」

「とにかく食べよう。珠代ちゃんには車の中で、説明するよ」

悟くんがそう言った。みんなで、ありあわせのものを食べると、すぐに悟くんの車に、乗り込んだ。

「本当に、警察に連れて行くわけじゃないよね？」

珠代ちゃんは助手席に乗せられ、運転席の悟くんに聞いていた。

「信じていいよ」

後部座席から昴くんが、珠代ちゃんにそう声をかけた。

車は発進した。そのときにはもう雪も止み、道路にもそんなに雪は積もってはいなかった。悟くんは運転しながら、珠代ちゃんに次元の話をしていた。珠代ちゃんの中にも、高い次元の珠代ちゃんがいると言っても、珠代ちゃんは、まったく理解できていなかった。

昴くんに私は、ずっともたれかかっていた。昴くんは、ずっと私の手を握り締め心の中で、

『ひかり、愛してるよ』

と繰り返した。

「ひかりさん…、昨日、逃げようとしたあと、大丈夫だった？」

漆原さんが、私に聞いてきた。

「うん」

「この次元の昴に、なんかされなかった？」

「え？」

「さっき、部屋に飛び込んだときには、首を絞めようとしてたところだった。今までも、殺されかけたんじゃないの？」

「ううん」

「部屋に監禁されたりは…？」

「昨日は、寝室のドアにカギかけてたけど…」

「それだけですんだの？」

「うん」

「良かった。気が気じゃなかった。俺と悟くんは、どうやったらうまい具合に、この次元の昴を本山に連れて行けるか、ずっと悩んでてさ。携帯の電源は切られるし…」

「本山？」

昴くんがそう聞いた。

「そうだ。高い次元と同じ場所にあるし、この次元でも、白河さんの先祖代々陰陽師なんだ」

「でも、白河さんは違うんだ」

「ああ。ノエルさんがあとを引き継いだらしい」

「ノエルさんが？」

「この次元でもノエルさんは、なんかの力があるみたいだよ」

「へえ…」

昴くんは、漆原さんと話をしながらも、ぎゅって私の手を握り締めたままだった。

『昴くん、心の奥にいたんだよね？』

『いたよ。なかなか表に出られず、やきもきしてた』

『でも、起きてたことは、見えてた？』

『うん。全部』

『そうだったんだ』

『ひかり。俺のこと愛してくれてたね？それで、思い切り光で包んでくれて、こっちの俺も変化できた』

『うん。でも、珠代ちゃんに嫉妬して、黒い霧出しちゃった。なんでこうも、私嫉妬深いのかな』

『責めることないよ』

『うん』

「ひかりさん、体大丈夫？」

ふいに、今度は悟くんが聞いてきた。

「え？」

「昴に酷い目にあってたとかない？殴られたり、蹴られたり…」

「してないすよ、俺」

「お前じゃないよ。こっちの次元の…」

「だから、してないってば」

「ああ。そっか…。お前、こっちの次元の昴の中にいたんだもんな。ずっと、見えてたんだ」

「うん」

「そっか…。良かった。じゃ、ひかりさん、特に何もされなかったんだ」

「……」

私が黙ると、悟くんは、バックミラーでこっちを見ながら、

「あれ？なんで無言？」

と聞いてきた。

「え？」

私は、なんて言ったらいいものか、悩んでしまった。

『言えば～～？こっちの次元の昴と、いちゃついてましたって』

昴くんが、そう心で言ってきた。

『まさか。言えるわけないじゃない』

『じゃ、こっちの昴に犯されました』

『あのね～～。そうじゃないじゃない』

『じゃ、愛し合ってました～～』

『もう～～～～！』

『この次元のひかりってさ、男性経験ゼロ…』

『そうみたいだね』

『俺が初体験の相手…』

『みたいだね』

『俺らの次元じゃ、立場逆だよねえ…』

『だから…、何？』

『いや、別に…。ただ、なんか不思議な感覚がしただけ』

『ふうん…』

『いや～～ん、エッチ～～』

『え？何を唐突に？！』

『乱暴にされても、ときめいちゃうひかりって、エッチ』

『ななな、なに言ってんの？！』

『あはは…』

『もう～～～～！アホ～～！』

心でそう言って、昴くんの手をつねった。

「いて！」

昴くんが、声に出してそう言ったので、悟くんと漆原さんが同時に、

「どうした？」

と聞いてきた。

「いや、ひかりがね…」

「昴くん？」

「いや、ひかりがさ…」

「昴くん！」

「ひかりさんがどうした？」

『昴くん、変なこと言わないでよね！』

『言わないよ』

「ひかりさんが、どうした？」

漆原さんがまた、聞いてきた。

「ひかり、すげえからさ」

「昴くん？」

何？何を言おうとしてるの？

「こっちの次元の俺も愛してくれて、光で包んでたから、こっちの俺、復讐する気も失せたんだよね」

「でも、それをするために、私この次元に来てたし…」

私がそう言うと、

「そっか…。だよね。心配より、ひかりさんと昴のこと、信頼すべきだったね」

悟くんが、そう言った。

「そうだな。」

と、漆原さんもうなづいた。

こんなことを話しているのに、なんで珠代ちゃんは静かなのかと思ったら、寝ていたようだ。きっと、昨日も一睡もできなかったんじゃないかな…。

昴くんのこと、本気で愛してるのかもしれない。心配で、しかたなかったのかも。昴くんを助けたい一心で、雪の中車でここまで来たのかもしれないな…。そう思うと、少しいじらしくも思えた。

ミッション4　闇を浄化

本山に着いた。車が止まると、珠代ちゃんが目を覚ました。

「着いたよ」

悟くんがそう言った。

屋敷の中から、ノエルさんと葉月ちゃんが現れた。車の音が聞こえたようだ。

「星野さん!!」

葉月ちゃんが、そう大きな声で言いながら走ってきた。私が後部座席のドアを開けて顔を出すと、

「星野さん!無事だったんですね~~!良かった~~!」

と抱きついてきた。

昴くんが、車から降りると、

「昴くん、高い次元の方?」

と、ノエルさんが聞いてきた。

「はい、そうです」

「そう…。良かったわ」

ノエルさんは、とても静かに微笑んだ。これは、高い次元のノエルさんの表情だ。

「昴くん。ひかりさん。それに珠代さん、よく来たね」

白河さんが、ゆっくりと屋敷から出てきてそう言った。

「白河さん…」

白河さんの表情も穏やかで、光を出して包んでくれ、とても安心できた。ただ珠代ちゃんだけが、戸惑ってしまっていて、昴くんにべったりとはりついていた。

「本当に、ここ大丈夫なの?」

青ざめた顔で、昴くんにそう聞いていた。

「大丈夫だよ。みんな仲間だから」

「仲間?じゃ、星野建設の娘は?」

珠代ちゃんがそう言いかけたときに、ノエルさんが、

「珠代さん、まだ低い次元のあなたなのね」

と、珠代さんの方を向いてそう言った。

「低い次元って何?」

「まあ、いいわ。さ、みなさん中にどうぞ」

ノエルさんはまた、静かに微笑み、私たちに中に入るよう促した。
珠代ちゃんは相変わらず、昴くんにべったりとくっついたままだったが、不思議と嫉妬心は起きてこなかった。昴くんは、そんな珠代ちゃんに話しかけるわけでもなく、だからといって、拒否するわけでもなかった。

屋敷の中は、とても静かだった。静寂さがあたり1面に漂っていた。

「静かですね…」

それを昴くんも感じたのか、そうノエルさんに聞いた。

「年末ですもの。訪れる人もいなくて…」

「ああ…、そうですよね」

昴くんは、静かにそう答えた。

大きな和室にみんなで入ると、そこには流音さんもいた。

「ひかりさん、良かったわ。無事だったのね」

流音さんは、私を見てほっとした顔をした。

「昴くんも落ち着いてて、高い波動の昴くんなのね」

流音さんの言葉に、昴くんはこっくりとうなづいた。

「やっと、みんな揃いましたね」

白河さんがそう言って、腰を下ろした。私たちもその場に、座った。相変わらず、昴くんにひっついたままの珠代ちゃんは、落ち着かないように部屋を、きょろきょろと見回していた。

「さて、昴くんとひかりさんは、ミッションを一つクリアーしたと思いますが、でも、まだこちらの次元のあなたたちの、負のエネルギーが浄化されたわけではないようですね」

ノエルさんが、私たちを見ながらそう言った。

「はい。自分の心の奥に、闇のエネルギーが潜んでいるのがわかります」

昴くんが、そう答えた。

「昴？なんのこと？」

「珠代ちゃん、俺、今この次元の昴じゃないんだよ…。えっと、つまり君が知ってる俺じゃないんだ」

「？何言ってんの？昴じゃないって？！」

「高い次元から来てるんだ。俺、今はそっちの方の俺が表面化してる」

「高い次元の昴？」

珠代ちゃんはなかなか、理解できないようだ。

「私たちがいた次元の珠代さんも、来てるはず…。珠代さんの中にも、高い次元の珠代さんがいる」

流音さんが、そう言った。

「え？そうなんですか？」

葉月ちゃんが聞くと、

「ああ…。俺と一緒に、低い次元まで下がってきたから」

襖をそっと開けて、奥の部屋から珠代ちゃんの魂の片割れの、陽平くんが入ってきてそう言った。

「陽平くん？あなたも来てたの？！」

私が驚いてそう聞くと、

「うん…。俺はもう、今朝、朝日を浴びて目覚めたんだけど…」

と陽平くんは答えた。

「こっちの次元の陽平くんは、何をしてる人なの？」

葉月ちゃんがそう聞くと、

「大学行ってます。親父が白河さんと知り合いで、俺の親父も警官してます」

と陽平くんは答えてから、珠代ちゃんの方に歩いていくと、

「この次元じゃ、昴さんの彼女なの？」

と唐突に聞いた。

「誰？あんた…」

珠代ちゃんは答えずに、逆に聞き返した。

「珠代さんの魂の片割れ…」

「私の魂の片割れ～～？！」

「あ…。そういえば、ノエルさんが言ってたっけ。珠代さんは昴さんと、過去生何度も恋愛してたって。それで、この次元でも恋人なんだ」

陽平くんは、冷静にそう言ってから、

「あ、でも高い次元じゃ、珠代さんと昴さん、付き合ってもいないよね。それどころか、俺に惚れちゃってたよね？なんで？」

と言った。顔は冷静だが、どうも昴くんにひっついてるのにやきもちを妬いているのか、黒い霧が時々、陽平くんから飛び出していた。

「あんたに惚れた？冗談でしょ。私には昴がいるのよ」

そう言うと珠代ちゃんは、昴くんの腕にしがみつき、

「昴、こいつら変だ。それに警官ばっかじゃないか…」

と、不安を隠せない様子でそう言った。珠代ちゃんからも、黒い霧が出ていた。

「珠代ちゃん…。大丈夫だから、安心して」

昴くんが、優しくそう言って光を放った。昴くんにエネルギーを集中すると、昴くんの心の声が聞こえた。

『大丈夫…。大丈夫だから…。珠代ちゃんの負のエネルギーも、きっと浄化できる』

そう言った後に、

『俺の中にもいる…。それが何か低い次元のエネルギーと結びついてる…。そうとう低い闇のエネルギーだ…』

と、ちょっと辛そうに心の中でつぶやいていた。あの昴くんの背後で、うごめいていた闇のエネルギーか…。

『え?』

『…?』

『俺の後ろにうごめいてた?』

『あ、私の思ってること聞こえた?』

『うん…』

『こっちの次元の昴くん、影が後ろにいたんだよね。なんか、引っ付いてる感じで…』

『そっか。それかな…』

昴くんは感じてるんだ…。

『こっちの俺、時々変な声がする、幻聴じゃないかって言ってただろ？』

『うん』

『多分、そいつだ』

『私も聞いたよ。低い怖い声…』

『ああ…。ひかりのこと殺しそうになったとき、その闇のエネルギーに心支配されそうになって…。どうにか、俺が光を出して、こっちの俺に心の奥から話しかけて…』

『うん。昴くんの声、聞こえたよ』

『ひかり…』

『え？』

『この前、別の次元に行った時のこと覚えてる？』

『うん』

『その次元のひかりや俺が表面に出て、それで負のエネルギーを感じて浄化したよね』

『うん。そうだったね』

『この次元でも、そうしないと駄目なんじゃないかな…』

『うん。きっとそうだよね』

『俺、ちょい不安で…』

『え？』

『俺、またひかりに手をかけたらどうしようかって、かなりびびってて…』

『でも、こっちの次元の昴くん、そんな気まったくないよ？』

『わかってる。だけど、闇のエネルギー感じたらやばいんだ』

『だけど、昴くんが心の奥にいてくれるじゃない？』

『うん…』

『昴くん、私昴くんのこと信じてるよ』

『え？』

『こっちの次元の昴くんのことも、信じてるよ』

『ひかり…』

『大丈夫だよ。ね？』

昴くんと見つめあった。昴くんは、黙ってこくってうなづいた。

その様子を見て、何かを感じたノエルさんが静かに、

「珠代さん、こっちでお話しない？」

と珠代ちゃんに近づいた。

「え？」

珠代ちゃんは、昴くんの影に隠れようとしたが、

「行っておいでよ。俺なら大丈夫だし…」

と昴くんに言われて、ノエルさんに手を引かれ部屋を出て行った。

「さて…」

白河さんが、穏やかな表情で私たちを見た。

「何か二人で話をしていたようだが…、何かを決意したのかな？」

「はい」

私たちは同時に、そう答えた。

「こっちの次元の俺らが表面に出ないと、負のエネルギーを浄化できないから、それを実行しようって、ひかりと決意してました」

昴くんは、本当に心を決めたようだ。白河さんを、しっかりと見つめながらそう言った。

「うむ…。君たちなら大丈夫だと、私は信じてるよ」

白河さんは穏やかに微笑み、そして立ち上がり襖を開け、隣の部屋へと移動した。

「だ、大丈夫なんですか？こっちの次元の昴くん、そうとう危ないって悟くんから聞いてますけど」

葉月ちゃんが心配そうに、聞いてきた。

「大丈夫。危なくなんかないから」

私がそう言うと、

「葉月…。俺らも信じよう」

と、悟くんが葉月ちゃんにそう言った。そのあとしばらく、二人で見つめあっていた。心で会話をしてるんだろうな…。葉月ちゃんが、こくんとうなづいた。

「だけど、すぐそばで二人を見守っているし、光をずっと送ってるから」

悟くんが、私たちにそう言ってくれた。

「ありがとうございます」

昴くんがそう言って、ぺこって頭を下げた。

「どうやってこっちの昴くん、表面化するの？」

私が聞くと、

「簡単だよ。ちょっとでも波動下げたら、出てくる。さっきから俺が不安を感じると、チェンジしそうになって、おさえ込んでたんだよ、ずっと…」

それでなんだか静かだったし、落ち着いてたんだ…。

『うん…』

「ここで、いきなりチェンジはまずいかもな」

漆原さんが、そう言ってきた。

「え？どうしてですか？」

昴くんが聞くと、

「俺なんか、警察官のかっこうしてるし、怪しむだろう？」

「二人でいたほうが、落ち着くかもしれないってことですか？」

「でも、二人っきりにするなんて…」

流音さんが、ちょっと不安げな顔をしてそう言った。

「平気です」

私は、きっぱりとそう言いきって、

「昴くん、部屋に行こう」

と、私は立ち上がり昴くんの手を握った。

「え？うん…」

昴くんも立ち上がり、私のあとに続いた。

「何かあったら、大声で叫べよ。ひかりさん。すぐ飛んでいくから」

悟くんがそう言ってくれた。

「はい。でも大丈夫です」

そう言って私たちは、その部屋を出た。

昴くんと、前の次元で泊まっていた部屋に入った。そこへノエルさんが来た。

「ひかりさん、着替えないでしょ？持ってきたわ。昴くんは？」

「俺は、別荘から持ってきてます」

「そう？じゃ、ひかりさんの分だけ置いておくから。それから探偵のことだけど、その中にも仲間がいるの。だから安心して。確かに昴くんは疑われてるけど、いろんな錯乱を起こすように、その人がしてくれてる。連絡が入ったけど、あの別荘にもまだたどりつけてないようよ」

ノエルさんがそう言って、にこって笑い部屋を出て行った。

「なんか、スパイみたいだね」

「うん。俺らの仲間、どこにでもいるんだな～～」

「ふふ…」

「何？」

「だって、この次元じゃ白河さん、警視総監なんだよ。なんか不思議で…」

「そうだね。漆原さんは警察官だしね。ま、あの体格じゃ、警察官でもやっていけるよね。十分に…」

「うん。それから！こっちの次元の昴くんなんて、暴走族にいたんだから！」

「うん。だけど、歌手になるのが夢だったんだよね」

「だよね。なんか、面白いね」

「うん」

昴くんと、ベッドに腰掛けながらそんな話をしていた。

「はあ…」

昴くんがため息をついた。

「ひかり」

「ん？」

「愛してるよ…」

「うん。私も」

そう言うと、昴くんは優しくキスをして抱きしめてくれた。

「波動…、下げるよ。ひかり…」

「うん」

私はこくんとうなづいた。昴くんは、静かに目をつむった。何かを感じるままにしているようだった。

昴くんとエネルギーを合わせようとすると、

「ひかり…。ひかりは波動俺に合わせちゃ駄目だ」

といきなり、言われてしまった。

「え？」

「負のエネルギー、感じてるから…。ひかりまで感じたら、黒い霧を二人で出すことになるよ。ひかりは俺が入れ替わったら、これから出す黒い霧消して」

「わかった…」

昴くんはもう一回目をつむり、静かになった。昴くんから、黒い霧が出た。ブワ…。辺りを覆う負のエネルギーだ。昴くんの影がゆらりと揺れる。今まで高い次元の昴くんだったから、姿を隠していたのか。

昴くんが目を開けた。

「ひかり…？」

私を見て、そして、

「俺…？！」

と、青ざめた。あ…。低い次元の昴くんだ。私は彼を抱きしめ、愛してるって心の中でつぶやいた。光が私から一気に飛び出し、黒い霧を消していった。

「ここは？」

辺りを見回して、昴くんが聞いた。

「そうだ！悟さんが警官連れてくるって。それから…」

昴くんは、いきなり頭をおさえた。

「いって…」

え？でも、さっきまで、高い次元の昴くんは痛がってなかった。

「……」

昴くんは、頭をおさえたまま、一点を見つめていた。

「……。俺…」

「昴…くん？」

「……」

昴くんは、今度は自分の両手を見て、

「ひかりのこと、殺そうとしてた…」

とつぶやいた。

「それは…！」

「あの時、声がした。なんかに自分がのっとられたみたいになって…」

「そう…。闇のエネルギーに。でも、昴くん止めた…」

「体の中から、ひかりに手をかけるなって声がした」

「……」

昴くんは、私の方を向いて、

「ひかりは、大丈夫だったのか？首…」

と聞いてきた。

「うん。もう大丈夫」

「悟さんが来て、俺、なぐられて…、気を失ってたのか？」

「うん」

「それで…、ここは？気を失ってる間に、連れてこられた？警察かどっかじゃないよな…」

辺りを見回しながら、昴くんが聞いてきた。

「うん。ここは、悟くんの知り合いの人の家なの」

「知り合いって？」

「陰陽師…」

「陰陽師？なんだよ？それ」

「昴くんに憑いてる闇のエネルギーを、祓ってくれる…」

「…闇？」

「何かが、憑いてるみたいだから…」

「…まさか、親父？」

「お父さんの声なの？」

「あの時…、ひかりを殺そうとしてたときは、親父の声がしてた」

「…！」

昴くんのお父さんが…？いや、そう断定はできない。それはわからない…。

「ひかり…」

「え？」

「ごめん」

「大丈夫。私は大丈夫だから」

「なんで？」

昴くんは、切なそうな顔をして聞いてきた。

「俺、殺そうとしたのに、なんで大丈夫って言えるんだよ？」

「あれは、昴くんじゃないもの」

「でも…、怖い目にあったのに？」

「私、昴くんを愛してるもの」

「え？」

「昴くんを愛してるの」

「…俺を？」

私はぎゅって昴くんを抱きしめた。

「愛してるよ」

もう一回昴くんにそう言った。昴くんを光が包んだ。

「ひかり…。なんで？なんでこんな俺のこと…」

「理由なんてないよ」

「……」

昴くんも、ぎゅって私を抱きしめてきた。

「俺も、ひかりが好きだ」

「……」

「理由なんてない。好きなものは好きだ」

「うん」

惹かれあうのは当然なんだ。だって同じ魂だもの。

私たちはしばらく二人で、そのまま抱きあっていた。

「ひかり」

昴くんが、そっと私から腕を離して、私の顔をのぞきこみ、

「そのお祓いとかってやつしてもらったら、もう、俺が闇にのっとられることはなくなるのか？」

と聞いてきた。

「昴くんの心の中にも、もし負のエネルギーがあったら、どうかな…」

「俺の心の中に？負のエネルギーって？」

「負って言うか、闇って言うか…。悪いことじゃないの。誰にだってある。憎しみ、恨み、私だって持ってた。ううん、きっと今でもある」

こっちの次元の私は、父のことを憎んでいる…。

「恨み…」

昴くんが、一瞬暗い顔をして黒い霧を出した。

「それを、心の底に溜め込んでたら、なかなかその負のエネルギーを浄化できないの」

「浄化？どうやったらいいんだ？」

「感じて…。それから…」

「恨みを感じる…？そんなことしたら、またひかりのこと…」

「大丈夫。私が、昴くんに光を送ってるから」

「光を送るって？」

「闇ってね、光で包み込んじゃうと、消えちゃうの」

「どうやって、光で包むんだよ？」

「こうやって…」

私は昴くんを、ぎゅって抱きしめ、

「愛してるよ。昴くん」

と、ささやいた。光が私から飛び出し、昴くんを一気に包み込んだ。

「ね？あったかくない？」

「あったかい…」

「今、光で包んでるから」

「なんでそんなことできんの？」

「教えてもらったの」

「誰に？」

「ある人に」

「ある人って？」

「光を出して、人を包み込むことができる人に…」

「……」

昴くんは、私に抱きしめられたまま、黙り込んだ。

「俺の中きっと、闇のエネルギーだらけだ」

「え？」

「恨みや、憎しみでいっぱいだ」

「大丈夫。それでも、大丈夫…」

「そんな俺なのに、なんで…」

「そんな昴くんでも、愛してる」

昴くんは、また私の顔をのぞきこむと、

「なんで？こんな醜い俺でも？」

って聞いてきた。

「醜くない。どんな昴くんも、昴くんには変わりないもの」

「……」

昴くんが、目を細めた。それから、うつむいた。

「ね…。昴くんは、お父さんに対して、ものすごい罪悪感があるんじゃない？」

「え？」

昴くんが、顔を上げた。

「思い出させるようで、辛いかもしれないけど…。でも聞かせて。昴くんはお父さんのこと、どう思ってたの？」

「……」

昴くんは、少し考え込んだ。

「素直に、思ったことをそのままで、いいよ？」

「…親父は、会社のことばっかりになって、家にもあんまり帰ってこなくなって…」

「うん…」

「たまに帰ってきても、俺に文句ばかり言ってた」

「うん」

「それから、暴走族に入った。親父とは、会えば喧嘩ばかりになった」

「……」

「族は、悟さんの影響もあって抜け出した。それから、悟さんの店で働くようになって、歌手になる夢も持って…。だけど、それも全部親父に反対された。頭来て、喧嘩して、家飛び出して…」

「うん…」

「…俺、親父のこと嫌いだった。恨んでたよ。衝突ばかりで、なんで俺のこと何も、わかってくれようとしないのかって…」

「……」

「……、なのに……」

「え？」

「憎んでたし、嫌いだったくせに俺…」

「うん…」

昴くんは、いきなり声を詰まらせた。それから、うつむいて肩を震わせた。昴くんの組んだ手の上に、ぽたりと涙が落ちた。

「なんか…、わかったんだ」

「え？」

「親父は、家族をないがしろにしてたわけじゃない。俺のことも、嫌ってたわけじゃない」

「……」

「だけど、どうして死んだりしたのか…。生きてたら、やり直しいくらでもできたのに…」

「うん…」

昴くんは、また言葉に詰まって、ポロポロと涙を流した。

「やべ…、みっともない」

「何が？」

「こんなに泣いて…」

「どうして？泣いてもいいのに…」

「みっともねえよ」

「大丈夫だよ？泣いたっていいし、弱くてもいいんだよ？」

「……」

「もしかして、ずっと泣くのを我慢してたんじゃないの？」

「……」

昴くんは、もっと顔を伏せてしまった。

「辛かったのに、ずっと、我慢してたんじゃないの？」

「俺より、辛かったのは親父だろ？」

昴くんが、そう答えた。

「昴くんだって、辛かったでしょ？」

「……」

昴くんは、ぎゅって涙を拭くと、

「辛いより、悔しい…」

とぽつりと言った。

「え？」

「何より1番悔しいのは、親父がなんで生きることを、選ばなかったかってこと」

「うん…」

「もっと、家族や、回りの人間に頼っても良かったのに」

「そうだよね…」

「一人で抱え込んでさ…、死んじまってさ…。でも、結局は家族にこんなに悲しい思いを残していった」

「うん…」

昴くんの目からまた、涙がこぼれ落ちた。私も、一緒に泣いてしまった。

「悔しい。なんの力にもなれなかった俺も悔しい。勝手に死んじまった親父も、悔しい。死に追いやった、星野のやつも…」

ブワ…。また、黒い霧が飛び出る。昴くんを抱きしめ、心で愛してるって言うと、光が出てその霧を一気に消した。

「ひかり…」

私の胸の中に、昴くんが顔をうずめた。

「ん？」

昴くんは、何も答えなかった。そのまま、声を殺して泣いていた。

ギュ…。また、昴くんを抱きしめた。昴くんは、肩を震わせて泣いていた。

どのくらい時間がたったのか…。わからなかったが、そのまま私は昴くんを抱きしめ、光で包んでいた。

「ひかり…、あったかい」

昴くんが、ぼそって言った。

「……」

「人のぬくもりって、こんなにあったかいんだな」

「…うん」

「俺、愛されてるんだな。ひかりに…」

「うん。愛してるよ」

「愛されるってすごい…」

「え？」

「なんか、すごい…」

「すごい？」

「こんな俺でも愛してくれて、受け止めてくれるって、すげえな…」

「……」

「はじめてかもしれない」

「……」

「いつも、否定ばっかりされてたから…」

「でも、珠代さん…」

「珠代は、俺のこと愛してるっていうより、求めてばっかりだった」

「求めて？」

「愛されることを、求めてばっかり…。俺と同じだよ。俺も珠代に求めてて、でも満足できなくて、珠代も一緒。だから、どっかで空っぽだった」

「…空っぽ？」

「満たされてないんだ。だけど、今はなんでかな…。すげえ、満たされてる感じがしてる」

「……」

昴くんのエネルギーが、すごく安定してる感じがした。

「すげえな。ひかりって…」

「すごくないよ。ただ、昴くんのこと愛してるだけだよ？」

「……」

昴くんは、黙って私を見つめると優しくキスをしてきた。

「これ…。何？」

「え？」

「自分の中から、湧き出てくる…」

昴くんの中からどんどん、光が出ていた。

「見えるの？」

「え？何が？」

見えてるわけじゃないのか…。

「湧き出てくる、あったかいもの？」

「うん。湧き出て、満たされて…」

「心からこんこんと、沸いてくる感じ？」

「うん…」

「それが、光。それが、愛してるっていう感情…」

「これが光？もしかして、俺も光を出してる？」

「うん」

「見えるの？」

「うん…」

私がにこって微笑むと、昴くんは少し不思議そうな顔をした。

「それ、それがね…、本来の昴くんなんだよ」

「え？」

「昴くんも、光で愛なんだから」

「どういうこと？」

「昴くんの存在はね、光で愛なの」

「何…、それ？」

「ふふ…。わからなくてもいいや」

私は昴くんを抱きしめると、また光を放った。昴くんが、愛しい…。愛しくて、しょうがない…。昴くんが抱えている、苦しみも、悲しみも、悔しさも、恨みも、憎しみも、すべての感情も含めて、昴くんを愛しいって思った。

その瞬間、驚いたことが起こった。昴くんの後ろにいた影が、すうって消えていき、どんどん光に変わっていくのだ。

昴くんには、見えてはいなかった。だけど、その光から声が聞こえてきたのは、昴くんも感じ取っていた。

「…なんか、声がする」

「……」

私は昴くんにエネルギーを集中させた。私もその声を、聞くことが出来た。

『昴…。すまなかった』

もしかして、本当に昴くんのお父さん？

『昴には、辛い思いをさせてばかりだった。だけど、これだけは信じてくれ』

『親父なのか…？』

『昴…、そして家族みんなを、愛していたよ。とても大事な存在だった』

『親父？』

『それに気がつくのが、遅かった。もし気づいていたら、お前たちをおいて、死んだりしなかった。お前たちを、守って愛して生き抜くことを選んだのに』

『親父…』

昴くんは、涙をいっぱい目にためていた。

『昴…。不思議だ。今は、恨みも憎しみも感じない』

『……』

『とても、安らかな気持ちだ…。もう、昴、復讐なんて考えるのはよそう』

『ああ。親父…』

『昴。もう、すんだことだ。すべてを許そう。すべてを水に流そう』

『ああ…』

『誰かを恨み、憎しむことは、自分を苦しめることになるんだな…。すまなかった。お前に復讐させようとしていたのは俺だ。そうやって、お前のことを苦しめてしまった』

『……。俺は、親父のために何もしてやれなかった…』

『そんなことはないよ…。お前が生きて幸せでいてくれたら、それだけでいい』

『親父…』

『昴。ありがとう…。そして、昴、お前の魂の片割れの彼女にも、お礼を言って欲しい…』

「俺の魂の片割れ？」

昴くんが、驚いた顔をして私を見た。

『そうだ。彼女の愛が、私の苦しみを消し去ってくれた。おかげで、こんなにも安らかだ…。さあ、もう行くよ』

『どこへ？』

『光の中に…。そこで、いつでも、お前を見守っている…』

『光の中って？』

『光の中だ…。光は、お前でもあるんだよ。だからお前の中に、俺はいつでもいるんだ』

『俺の中に？』

『いつでも、愛してるよ…。昴…』

『親父…』

昴くんの後ろにいた、光がフワって上空に浮かび上がり、そのまま部屋を光で覆いつくし、そして上昇していった。

『親父？』

「昴くん。もう、光の中にいったよ…」

「え？」

「お父さん、浄化された。ううん。昇天したって言った方がいいかな…」

「ひかり、なんでそれ知ってるんだ?」

「昴くんにエネルギーを合わせて、お父さんの声、聞いてたから」

「あ…。俺の魂の片割れって…」

「うん。私と昴くんは、もともと一つの魂だもの」

「……」

昴くんはずっと、目をまんまるにしたままだったが、しばらくすると、

「親父…、消えたの?」

と、つぶやいた。

「ううん…、光になったんだよ…」

「……」

「もしかすると、違う人生を送るのかもしれない」

「え?」

「転生して…。でも、もしかすると、もう、転生しないかもしれな

いし、わからないな…」

「闇のエネルギーって親父だったのか？」

「…うん。でももう、闇じゃなくなったから」

「ひかりに礼、言ってくれって言ってた…。ひかりが、苦しみを消し去ったって…」

「私は昴くんの中にある、どんな感情も愛しいって思ったんだ…。昴くんの中の負のエネルギーを光で包んだとき、お父さんの闇のエネルギーまで、光で包んだのかもしれないね」

「俺のどんな感情も、愛しい…？」

「うん…」

「……」

昴くんは、また目を丸くして、それから抱きしめてきた。

昴くんは、そして泣き出した。心の中で昴くんはずっと、お父さんに愛されてたことを喜んでいた。そして、自分も本当はお父さんのことを、愛してたってことも知り、ずっと泣き続けていた。

しばらくして、昴くんが口を開いた。

「ひかり…」

「ん？」

「すごく不思議だ…。親父が言うように、今、俺とっても気持ちが落ち着いてる」

「うん。わかるよ、それ…」

「わかる？」

「うん」

「こんなに泣いたの、生まれて初めてだ」

「……」

「すんごい情けない。こんなに泣いて…。それでも、ひかりは愛してくれてるんだ」

「うん。愛してるよ。情けなくなんかないよ。泣いていいんだもん…」

昴くんを私は、抱きしめながらそう言った。

トントン…。ドアをノックする音がした。

「はい…？」

私が答えたと同時に、昴くんは、ぱっと私から離れた。

「ひかりさん。夕飯の用意ができました。良かったら食堂に来て」

流音さんの声が、ドアの外からした。

「はい。行きます。ありがとうございます」

そう言うと、そのまま流音さんは、一階におりていったようだった。

「昴くん、食べられる？お腹すいてる？」

「うん…。けっこう、すいてる…」

「じゃ、食堂行く？」

「顔洗いたいな…」

「下に洗面所があるの。先に寄って顔洗っていこうよ。あ、タオル持ってかなくちゃ」

「うん…」

昴くんは、鼻も目も真っ赤だった。

一階におりて行き、昴くんが顔を洗うのを待って、それから一緒に食堂に向かった。中に入ると、悟くんと葉月ちゃんがもう来ていた。それから、私服に着替えた漆原さんと、流音さんがいた。

「さあ、こっちに座って」

ノエルさんが、食堂の奥から出てきて、私たちにそう言った。

「はい」

私が先に席に着いた。昴くんは、少し戸惑いながら座った。

悟さんの顔を見て、昴くんはぺこってお辞儀をした。それから、漆原さんの方をなんとなく見ていた。みんな、黙っていた。昴くんのエネルギーを、感じ取ろうとしているようだったが、漆原さんが、

「昴、何事も起きなかったのか？」

と、ニカって笑ってそう言った。

「え？」

昴くんが、びっくりしていた。

「あれ…？」

漆原さんが、ちょっとまゆをひそめ、

「こっちの次元の昴…か…？」

と聞いてきた。

「なんですか？それ…」

昴くんは、不思議そうに聞いた。

「あ。いや、こっちの話だ…。あ、昴くん。心配はいらないからな。今は、警官の勤務時間も終えてるし、まあ、一市民みたいなもんだから」

「……」

それを聞いて、流音さんがちょっと変な顔をして漆原さんを見ると、

「昴くん、安心してね。みんな、あなたのことを心配して、いえ、守ろうとしている仲間だから」

と優しく微笑んで、そう言った。

「仲間…？」

「浄化のために、ここに呼びました」

ノエルさんが、昴くんの後ろに立ってそう言った。

「はい、ひかりに聞いてます」

昴くんは、振り返りそう答えた。

「ひかりさん…」

ノエルさんが、私に向かって、

「昴くん、闇のエネルギーが感じられないんだけど…、もしかしてもう、浄化された？」

と聞いてきた。

「はい…。闇が消え、光に変わりました」

私がそう言うと、みんなの顔が一瞬驚いていた。

「だからか…。すっかり昴から感じるエネルギーが変わってて、一瞬高い波動の昴かと思ったよ」

「なんですか?その…、高い波動の俺って?」

昴くんが、また漆原さんに不思議そうに聞いた。

「いや…」

漆原さんが、言葉に詰まった。

「夕飯が冷めてしまうわ。話は、夕飯のあとにしましょうよ」

ノエルさんが、優しく微笑みながらそう言った。それからみんなで、夕飯を食べだした。食べながら、悟くんが昴くんに話しかけた。

「昴、本当にすっきりした顔になったな」

「え?」

「憑き物が取れたみたいに…」

「はい…」

昴くんが、静かにうなづいてから、

「あの…、ありがとうございました」

と悟くんに、お辞儀をした。

「何が？」

「悟さんが、ぶっとばしてくれなかったら、俺、ひかりに何をしていたか…」

「ああ…。ギリギリセーフだったな」

「はい…」

昴くんは、お腹がすいたと言ってたけど、あまり箸が進んでいなかった。

みんなが食べ終わった頃、白河さんがやってきて、

「やあ、昴くん…。闇のエネルギーはもう、浄化されたようだね」

とにっこり微笑んで、そう言った。

「はい…」

昴くんは、少し緊張しながら答えた。

「ははは。そんなに緊張するな。君を逮捕もしなけりゃ、訴えもしない」

「あなた…は？」

昴くんが聞くと、

「警視総監だよ」

と漆原さんが答えた。

「え?!」

昴くんが、ものすごく驚いていた。

「け…、警視…?」

白河さんは、昴くんのすぐ横に椅子を持ってきて、そこに座ると話し出した。

「安心したまえ。私もノエルも、そして漆原くんも、悟くんもみんな、君を助けるためにここに来た」

「…助けるためって?」

「ひかりさんのことを、殺すのを阻止するのと、犯人になるのをふせぐためだ」

「俺が…?でも、もう誘拐…」

「いや、誘拐はしていない。君も、ひかりさんも、ここにこうしてやってくるためだったんだ」

「でも…」

「大丈夫だ。君には使命がある。それをこれから、遂行しなければならない」

白河さんの顔は、真剣だった。

「使命…？」

「それについては、詳しくあとで話そう。それよりも…だ」

白河さんは、私の方を見ると、

「君のお父さんが、君を探しているのは事実だ。警察にはまだ知らせていないが、もし、見つからなかったら、知らせる可能性もある。そこで…」

「はい」

「家出をしていた…っていうのは、どうだろうか？」

「家出？」

「こっちの次元のひかりさんは、もうすぐ結婚だとか？」

「はい。そうなんです。でも、嫌がってて…」

「それを理由に…、というのはどうかな」

「はい…」

「ひかり？こっちの次元のって…、何？」

昴くんが、私に聞いた。

「昴、俺から説明しようか？」

「悟くん、私から説明するから大丈夫」

私は、悟くんにそう言った。

「あ…、そういえば、悟さん、珠代は？」

昴くんが、食堂を見回してそう聞いた。そういえば、珠代さん、いない…。

「陽平くんといる」

悟くんが答えた。

「陽平って誰？」

「……」

悟くんが、どう答えたらいいかを迷っていた。

「それも、私から説明する」

私がそう言うと、昴くんは私の顔をじっと見た。

「部屋に戻って、落ち着いて話すよ。あ、でもその前に、お風呂入らない？私、ゆっくりとあったまりたいな」

いろいろと話す前に、気持ちを落ち着けたかった。

「ああ。うん」

昴くんはそう言うと、私と一緒に席を立ち、食堂をあとにした。みんなは、静かに私たちを見届けていた。

ミッション5　光で包む

昴くんといったん部屋に戻り、お風呂場へと向かった。男風呂、女風呂と分かれていて、そこで私たちは別れた。

お風呂に入っていると、あとから葉月ちゃんも入ってきた。けっこう大き目のお風呂なので、余裕で3人くらいは一緒に入ることが出来た。

「昴くん、すごく派動が変わりましたね。驚きました」

「うん…」

ゆったりと、お風呂に入りながら、少しだけ昴くんに集中してみた。なんとなくエネルギーは感じるものの、やっぱり昴くんの声までは聞こえなかった。

「高い波動の昴くんは、全然出てこないんですか？」

「うん。出てきてないよ」」

「そうなんですか…」

「葉月ちゃんはこっちの世界で、何をしてるの？」

「私は、普通にフリーターしてます。ただ、精神的に安定していない時期があったようで、カウンセリング受けたりしてて、それでどうやら、ノエルさんと知り合ってたみたいで…」

「へえ…。そうだったんだ」

「私が、こっちの世界に来たときには、ノエルさんのマンションにいました。流音さんもいて、流音さんは、ヨガのインストラクターしてて、私は流音さんにヨガを習っているみたいです」

「そう…」

「私たちがこの次元に来るちょっと前に、ノエルさんは目覚めてて、こっちの次元の私たちを自分のマンションに呼んだようです」

「じゃ、流音さんも、葉月ちゃんもすぐに目覚めることが出来たの？」

「はい。あ…、本山に来てからですけどね。こっちに着くと、すぐにノエルさんに本山に連れてきてもらって…。今朝の朝日で、目覚めることができたんです」

「悟くんは？」

「悟くんは来る前から、こっちの次元の悟くんと交信してたし、すぐにこっちで目覚めて、昴くんの行動を見守っていたようですよ」

「そう」

「悟くんと心で会話してましたけど、昴くんが星野さんのこと、殺そうとしてたこと聞いて、私、本当に心配して」

「ごめんね、心配かけて」

「いえ…。でも、心配よりも信頼すること、それが光が出せることだったねって、あとで悟くんと話したんです。悟くんもめずらしく、心配していたようで…」

「うん。だけどそれだけ、私と昴くんのこと思ってくれていたからだよね。ありがとう」

「いいえ…。本当に、良かったです。ほっとしました。これでもう、安心ですね」

「まだ、こっちの次元の私の中の負のエネルギーが、浄化されてないんだけどね…」

「あるんですか？」

「うん…。父親に対してが、1番強いかな。あと多分、昴くんのことも怖がってるかもしれない」

「え？」

「すっかり息を潜めてて、心の奥底からなんとなく感じるだけだけど、時々、恐怖や怒りを感じるんだ」

「それは、こっちの星野さんに表面に出てもらうしか…」

「うん。昴くんに浄化してもらうしかないよね」

「はい、そうですね。でも高い次元の昴くんなら、絶対に大丈夫ですよ」

「うん。私もそう思う。…私、そろそろ出るね」

と私は言い、湯船からあがった。それから私は髪を乾かし、お風呂場を出て部屋に戻った。

昴くんはもう部屋にいて、ベッドに横になり、うとうとしている様子だったが、私に気がつき目を覚ました。

「あ、寝てたの？起こしちゃった？」

「いや…、ちょっとうとうとしてただけだから」

「疲れてるんじゃない？」

「お風呂が気持ちよかったから、なんか、眠くなっちゃって…」

そう言って目をこすった仕草は、高い波動の昴くんとまったく同じで可愛かった。

「すんげえ、安心してるからかな。ほっとしちゃってるんだ…」

「そう、良かった」

本当に昴くんは、安心しきった子どものような、そんな顔つきをしていた。

「あ、だけど、高い波動だの次元だのってのは、まったくわからない。なんなの？それ…」

「うん。説明するね。でも本当は、体験した方が早いんだけど…」

「体験？」

「幽体離脱とか。いろいろと…」

「何それ？！」

「私、こっちの次元の私じゃないんだ」

「…？！」

昴くんは目を丸くした。

「こっちの次元の私はね、心の奥底でひっそりと隠れてるの…」

「は？どういうこと？」

「う～～ん…。魂は同じなんだけど、波動が違うんだよね」

「…？」

昴くんは、まだきょとんとした顔をしている。

「この宇宙にはね、いろんな次元があって、それがいまここっていうこの空間に同時に存在してるの」

「…？」

「そのいろんな次元の世界に、私はいるんだ」

「いろんな次元に？っていうことは、何人ものひかりがいるってこと？」

「う～～ん…。みんな私なんだけど、エネルギーの振動数って言うのかな、波動がね、ちょっとずつ違うんだよね」

「高いとか、低いとか言ってたよね。ここは低い次元ってこと？」

「うん」

「低いとどうなんの？高い次元とどう違うのさ？」

「起きてくることも、違ってくる。例えば苦しみ、憎しみ、攻撃的、悲しみ、自己否定…、そんなものって、低い波動なんだよね」

「うん…」

「高い波動は、喜び、愛、感謝、笑い、許し、支えあう、協力、信頼…、そういう波動」

「許し？」

「うん」

「親父、もう許そうって言ってた…。あれ、もしかして波動が変わったから、親父も恨むことから、許せるようになったのか？」

「うん。きっと、そうだと思う」

「なんとなくわかるよ。恨んだり苦しんでるのって、なんかエネル

ギーが滞ってるような、マイナスって感じするもんな…」

「うん」

「じゃ、ひかりのいる高い波動の世界は、戦争だの、いじめだの、苦しんだり、悲しむようなことがないってこと？」

「あるよ。まだまだ。だけど、徐々に目覚めてる人が増えてきてる」

「目覚める…？」

「うん。本当は、みんなが一つで、み～～んな愛の波動なんだってことに気づく」

「え？」

「もともとはね」

「？」

「きっと、昴くんも思い出すときが来るよ。それに、昴くんミッションあるし…」

「ミッション？」

「使命」

「なんの？」

「アセンションの」

「何それ？」

「次元上昇だよ。地球ごと、派動をあげるの」

「はあ？！」

また昴くんの目は、まんまるになった。

「そのアセンションとかってことに、どんなことを俺はするわけ？」

「う～～ん。なんだろうね。でももう、ミッションの一つはクリアした気がするよ」

「ええ？俺何もしてねえよ？」

「そう？闇のエネルギー、浄化させたじゃない」

「え？！」

「あれは大きいよ。昴くんの闇のエネルギーが、昴くんから放たれてるのと、昴くんから光が放たれるのでは、そうとう違うと思うんだよね」

「ええ？たった一人の波動が変わるだけで？」

「うん。そりゃ、大きいよ」

「……」

昴くんはしばらく、口をあんぐりと開けていた。

「じゃ、ひかりは高い次元からこっちに来たのって、やっぱミッションのため？」

「うん」

「俺のこと愛してるってのも、ミッションだから？」

「違うよ。同じ魂で、惹かれあうのは当然なの」

「同じ魂？！」

「うん。これは、体験してみないとわからないよね」

「体験…て？」

「同化するとわかるよ」

「同化…？」

「うん」

「どうやって？」

「う～～ん。どうしたらいいのかな～～？」

「何それ…。わかってないんじゃんか」

高い波動の昴くんとなら、すぐに同化できるけど、この昴くんとだ

とどうなのかな～～。

「こっちの次元のひかりにも、ミッションはあるってこと？」

「うん。きっとね」

「あれ？じゃ、高い次元には、高い波動の俺がいるってこと？」

「うん。一緒にこの次元に来てるの」

「え？今どこにいんの？」

「昴くんの中に」

「え？！」

「昴くんの体の中から、ひかりに手をかけるなって言ってたの、あれ、高い波動の昴くんなんだ」

「え？」

昴くんは、仰天していた。

「ま、待って…。俺の中に別の俺がいんの？多重人格？」

「違うよ。波動の違う昴くんだけど、昴くんには変わりないから」

「？？？」

昴くんは、ますます目を丸くした。

「いろんな次元の私がいるように、いろんな次元の昴くんがいるの」

「その…、高い波動の俺のことを、ひかりは愛してた？」

「うん」

「…俺より？」

「昴くんも、高い次元の昴くんも、昴くんなの。全部の昴くんを愛してるの」

「…わかんないよ、それ」

「だから、同じ魂なの。どの次元でも昴くんって存在には変わりはしないの」

「ひかりも？」

「うん」

「……」

「私、昴くんを守るために来たの」

「え？」

「私はこっちの次元で、昴くんにさらわれて危ないって白河さんから聞いて、それで昴くんを犯罪者にしたくなかったし、きっと苦しんでると思って助けに来たの」

「俺を？」

「うん」

「白河って、警視総監…」

「私の次元だと違うんだ。白河さんもいろんな次元にいて、白河さんはいろんな次元の白河さんと、コンタクトが取れるの」

「……」

昴くんはまゆをしかめて、聞いていた。

「あ、悟くんもだよ。それで、この次元の私と昴くんのことをいろいろと聞くことができた」

「……」

「だからね、白河さんも、悟くんも漆原さんもノエルさんも、みんな仲間なの。みんなで、高い次元から、私たちを守るために来てるの。だから安心なの」

「俺らを守る…。さっきも、言ってたっけ。その、白河さんって人が」

「うん」

「みんな、高い波動なのか？」

「うん」

「…ひかり、殺されるかもしれないってわかってて、来たのか？」

「絶対に昴くんは、そんなことしないって信じてたから」

「でも俺…」

ギュ…。私は、何も言わずに昴くんを抱きしめた。昴くんも、抱きしめ返してくれた。

「高い次元の俺は、ひかりのことを守るために来てるんだ…」

「うん」

「だから、ひかりに手をかけるなって、声がしたんだ」

「うん」

「そっか…。それも俺なのか…。高い波動でも低くても、俺はひかりを愛してるんだ」

「…この次元の私も、昴くんのことを愛すると思う」

「え？」

「でもまだ、心の奥で怖がってるけど」

「どうしたら、怖がらなくなる？」

「昴くんからの愛を感じたら、きっと変わると思うよ」

「…でも、心の奥に引っ込んだままなんだろ？」

「うん」

「それで俺の愛、感じられたりすんの？」

「多分、無理かな。あ、少しは感じてるよ。でも、まだ…。それに、こっちの次元の私には、負のエネルギーもあるし。それも浄化しないと…」

「俺のときみたいに？感じる、味わう…、だっけ？」

「うん。それを昴くんが光で包んであげると、浄化できるんだ」

「俺が？どうやって？」

「愛してるって思うと、光が出るの」

「……」

昴くんは、ちょっと困ったって顔をした。

「俺にできんの？」

「私のこと愛してる？」

「愛してるよ」

「じゃ、大丈夫」

「でも、ひかりのことは愛してるけど、こっちの次元のひかりのことは…」

「この次元の私も、私だよ?」

「そっか…。ああ、そうなんだけど…」

昴くんは黙り込んでうつむき、頭をぼりって掻いた。しばらくして、

「わかった…。やってみるよ。ひかりが俺にしてくれたように」

と私を見てそう言った。

「……」

大丈夫かな?高い波動の昴くんじゃなくて…。それにこっちの次元の私、どうやったら出てくるのかな。

昴くんは、自分の波動を下げていった。黒い霧を出して…。でも、それをすぐに私が消したから、大丈夫だけど、この次元の昴くんはどうなんだろうか。黒い霧を見ることも、まだできないよね。

お〜〜い、高い波動の昴くん、そろそろ出てきて。あれ?そういえば、闇のエネルギー消して、そうとう高い波動になってるんだから、高い波動の昴くんと混ざり合ってもいいんじゃないの?もう…。

心を落ち着けて、昴くんの声を聞こうとした。だけど、やっぱり聞こえてこない。こっちの昴くん、まだ、心閉じてるのかな。

「ひかり？」

「え？何？」

「なんでずっと、黙り込んでたの？」

「えっと…、どうやって、こっちの次元の私に、表面に出てもらおうかなって考えてて」

「ああ、そっか…。あれ？でも、俺は高い波動の俺じゃねえよ。なのになんで、ひかりは高い波動のひかりなわけ？」

「頭打ったとき、入れ替わったの」

「頭？」

「テーブルから落ちたでしょ？」

「ああ！あんとき！そういえば、あのあと別人のようになって…。それでか～～！」

「うん」

「じゃ、また頭を打ってみるとか。って、駄目か…」

「うん。頭打って幽体離脱して、それで入れ替わったから」

あ、そっか。じゃ、昴くんが頭を打てば、高い次元の昴くんが現れる…。いや、わざわざそのたびに頭打ってたら、身が持たないよね。

あとは幽体離脱…。あ、愛し合ってるとフワって、たまに魂が抜けるときがあったっけ。でも、こっちの次元の昴くんとは、魂抜けなかったな。だけどあの時にはまだ、闇のエネルギーがあったし今なら違うかも。

「……」

昴くんのことを、じっと見つめていると、

「え？何…？」

昴くんは少し、戸惑っていた。昴くん、私のこと愛してるのは本当だろうけど、やっぱりまだ、閉じてるところがあるのかな。

「高い次元ではね、心で会話が出来たの」

「え？何それ！すげえ。超能力者じゃん」

「違う、違う…。同じ魂だから、わかっちゃうんだ」

「同じ魂…」

「私と昴くんはもともと、一つの魂だったけど、それを分離してこの世界に来てるんだ」

「分離？？」

「悟くんと同じ魂なのは、葉月ちゃんで、漆原さんは流音さん。そして珠代ちゃんの魂の片割れは、陽平くん」

「ああ。それでさっき、そんなようなこと言ってたのか…」

「うん。それでね、同じ魂だから、心で思ってることもみんな通じちゃうんだ」

「通じる？」

「相手に、聞こえちゃうの」

「え？じゃ、隠し事もできない」

「うん。全部筒抜け…」

「……」

昴くんは、両方のまゆをしかめて、ええ？って顔をした。

「そんなの困るって、思った？」

「え？俺の心の声、聞こえちゃってんの？！」

「ううん。聞こえてないよ。でも、そんな顔今してたよ」

「あ…」

昴くんは、やべえって顔をした。

「昴くんの心の声は聞こえない。まだ閉じてる…よね？」

「閉じてるって？」

「うまく説明できないけど、あまり、心を知られないようにしてる？」

「そりゃ、考えてることなんて、ひかりにわかっちゃったらやばいじゃんか」

「どうして？」

「どうしてって、その…」

「どんな昴くんでも、大丈夫なのに」

「いや、やばいって…」

「何が？」

「何がって言われても、やばいから言えないんじゃん」

「昴くん…」

私は、昴くんの頬に手を当てた。昴くんは、一瞬ビクってした。

「え？」

「愛してるよ…」

「うん…」

「……」

昴くんの目をじっと見つめた。

「…あ、…俺も、愛してるよ…」

昴くんは、少し戸惑いながらそう言った。私はそんな戸惑ってる昴くんに、キスをした。

「ひかり…」

「え？」

「その…」

「何？」

「いや、まじな話してんのに、駄目だよな。やっぱ…」

「駄目って何が？」

昴くんは、私の両肩を掴んで、

「今…、俺ひかりのこと、抱きたいって思ってっけど…」

と、躊躇しながら聞いてきた。

「……」

そっか…。そんなこと思ってたから、やばいって言ってたのか…。

「くす…」

思わず笑うと、

「え？なんで？なんで笑ってんの？」

と、昴くんは慌てて聞いてきた。

「ううん…。昴くん、可愛いなって思って」

「か、可愛い！？」

昴くんは、ちょっと馬鹿にされたって顔をして、少しむくれてしまった。

「ごめん」

昴くん、心の声が聞こえなくても、けっこうわかりやすいな…。そんなことを思っていると、ドスン…。いきなり、ベッドに押し倒された。

「もう、聞かねえ」

「え？」

「抱いていいかなんて聞かねえ。嫌だって言っても、知らねえ俺…」

あ…、相当今の、怒っちゃったのかな。

「でも昴くん、一つお願いが…」

「聞かねえよ」

昴くんは、私の首筋にキスをしてきた。

「だけど、もし、もしね…。こっちの次元の私が表面に出てきたら…、その…」

「……」

昴くんは、一瞬顔をあげた。

「怖がるかもしれないから…」

「……」

昴くんは、そのまま私をしばらく見つめていた。そして、ものすごく優しい表情になった。

「俺、そうしたら無理強いしない。ちゃんと、優しくするから」

「……」

「それに…」

「え…？」

「まじで、ひかりが嫌がったら、ちゃんとやめる。ひかりのこと大事にする…」

昴くんはそう言って、優しくキスをしてきた。

「俺、ひかりのこと、すんげえ大事だから…」

昴くんの声も、優しかった。

昴くんが、私の指に指を絡めてきた。昴くんの指先からも、優しさを感じることが出来た。キスをするたびに、昴くんからものすごい光が出て、私をどんどん包み込んでくれた。

高い波動の昴くんなの…？いや、違う…。だけど、もしかしたら、心の奥から高い波動の昴くんも、一緒に光を出してくれてるのかもしれない。

髪をなでる指も、キスも全部が優しい…。

「ひかり…」

「ん…？」

「愛してるよ」

「うん…。私も、愛してるよ」

私からも、すごい光が放たれる。そして、光と光が混ざり合う…。

あ…。魂が抜けて、一つになってる…。昴くんが、心の中で感じていることが伝わってくる。すごい開放感、気持ちがいいって感じてる…。

二人の魂が一つになって、光に包まれる。すべてのエネルギーと同化する。一つになる。どんどん広がって、そこは無限の静寂な世界になる。

私、俺…、宇宙と一つだった。そこは、ものすごく広い空間…。何もない、でもすべてがある…。

スウ…。そして、体の中に魂が戻った。

昴くんは、涙を流していた。

「ひかり…」

「…ん？」

「俺とひかりが同じ魂だっての、わかった」

「うん」

昴くんはそう言うと、私をギュって抱きしめた。

「今、ものすごい光の中に、行ったよね？」

「うん」

「そこにさ…、親父がいた」

「え？」

「親父の存在を感じたんだ」

「うん…。お父さん、光に還って行ったんだもん…」

「じゃ、いつでも俺の中にいるんだ」

「うん」

昴くんは、また涙を流した。昴くんの頬を流れる涙に、私はキスをした。

「ひかりも…、こっちの次元のひかりも、あの光を体験したら大丈夫だよ」

「え？」

「俺が保障する。すべての愛を感じられる。不安も恐怖も消える」

「うん、そうだよね」

「大丈夫。いつでも、こっちの次元のひかりが出てきても、俺が光で包みこむから…」

「昴くん、光が見えるの？」

「見える。俺からもひかりからも、放たれてる。今も…」

「うん…」

昴くんのことを、ギュって抱きしめた。昴くんも、ギュって抱きしめてくれた。

『昴くん、愛してるよ…』

『俺も…』

「あ！声、聞こえたの？」

「うん。聞こえた。すごいね…これ」

「うん」

私たちは、布団に潜り込み、昴くんは腕枕をしてくれた。私は思い切り昴くんにひっつき、

『昴くん、大好き！』

って心で、何度も言っていた。

「なんか、照れる…」

昴くんは、少し顔を赤らめていた。

「え？なんで？」

「心に直で、ひかりの大好きって声が聞こえて…、なんかさ…」

本当に照れているようだった。

「ふふ…」

「何？」

「高い波動の昴くん、自分が照れてること認めないんだもん。この次元の昴くんの方が、素直だなって思って…」

『それは、ひかりも一緒じゃんか』

「あれ？」

「あ…、俺？え？勝手に今、なんか…」

「体の中から聞こえたよね？」

「うん」

高い波動の昴くん？

『そうだよ』

「ええ？俺？！」

昴くんは、焦っていた。

「まだ、混ざり合ってないの？」

『まだね。でも、こうやってひかりに声、届くようになった』

『ずっと、いた？』

『いたよ』

昴くんは、体の中から聞こえる声に、少し戸惑いながらも、耳をすませて聞いているようだった。

「ひかりのこと、すげえ大事で、愛してるってのは同じだね」

昴くんは、そう優しく言った。

「え？」

「なんか、そういうの感じるよ」

「うん…」

「ひかり。こっちの次元のひかり、表面に出せる？」

「え？」

「俺、こっちの次元のひかりの闇のエネルギー、浄化したい。俺がひかりにしてもらったように」

今の昴くんなら、きっと大丈夫だ。

「うん。光で包み込む」

「わかった。あ、でも今いきなり表面に出てきたら、絶対驚くよね。いきなり、裸で一つの布団にはいってたら…」

「あ。そうか…」

「こっちの次元のひかりは、テーブルから落ちたところから、記憶がないと思うの。あそこから、入れ替わったから…」

「昨日の昼間だよね」

「うん。まだ昴くんに殺されるかもって、怖がってると思う」

「だよね…」

「服着て、それから、こっちの次元の私に出てもらう」

「簡単に出来んの？」

「わからない。低いエネルギーを感じたら、入れ替われるかもしれない」

「低いエネルギー？」

「黒い霧、出すかもしれない。私が入れ替わったら、昴くん、光でその霧を消してくれる？」

「どうやって？」

「私のこと、心で愛してるって思ってくれたらきっと、光が出るから」

「わかった」

私はベッドから出ると、こっちの次元の私が昨日着ていた服を着た。それからベッドに横になり、まず深呼吸をした。

「…入れ替わってみる」

そう昴くんに言い、心の中で、

『昴くん、あとのことはお願いね…』

と、高い次元の昴くんにも話しかけた。

『大丈夫だよ。ひかり』

昴くんが、答えてくれた。

私は、心の奥のひかりの感情を感じてみた。父への恨み、昴くんへの恐怖、絶望感、罪悪感、いろんな負の感情が入り混じっている。黒い霧がどんどん出て、私を包み込む。

ふっ…。ふと私は、目を覚ました。視線の中に昴くんがいて、恐れおののいて、いきなり起き上がり硬直した。

「あ…」

声が出ないくらい、恐怖を感じた。フワ…。体が冷え切っていたのに、あったかくなった。昴くんが、光を出して包み込んでくれているようだった。

昴くんの表情は柔らかで、優しいまなざしで私を見ていたが、こっちの次元の私にはそんな様子を感じることも出来ないくらい、余裕がなかった。

ここ、どこ…？辺りを見回した。いた部屋と違うことだけは、わかっていた。部屋には電気がついていて、窓にはカーテンが閉まっている。夜なのか…。

私はそうだ…。テーブルから落ちて頭を打ち、気を失っていたんだ。その間に部屋を移動したのか、それとも場所を移動したのか…。

どっちにしても、状況は変わっていない気がした。目の前には昴くんがいて、他に誰もいない。部屋には、ベッドが二つあるだけで他に何もない。

「頭打って、気を失ってたんだ…」

昴くんが、そう言ってきた。

「……」

私は少し体を後ろにずらしながら、昴くんを見ていた。何をされるのか…。気を失っていたときには、どうしていたのか…。恐怖で頭が、いっぱいになる。

「……」

昴くんは少し顔を横にかしげて、優しく私を見てるんだけど、こっちの次元の私は、その優しさに気づくことも出来なかった。

「えっと…」

昴くんは、頭をぼりって掻いた。あ、ちょっと困ったときにやる昴くんの仕草だ。何を話していいか、考えているようだ。

「そんなに、怖がらなくても大丈夫だよ…」

昴くんの言葉が、不自然に聞こえてもっと怖くなる。

「ここ…、どこ？」

私はやっと、言葉を発することが出来た。

「知り合いの人の家」

「知り合い？」

「大丈夫。そんなに怪しいところじゃない」

何を言われても、私は安心ができなかった。体がこわばり、震えも来る。でも、その次の瞬間あったかいものに包まれる。昴くんがきっと光をずっと、出し続けてくれてるんだ。

「今…、夜なの？」

「うん」

「…私、ずっと気を失ってたの？」

「うん」

「……」

私はまた、部屋をそっと見回した。ドアと窓…。ここは2階なのか、

1階なのかもわからない。

「あ。ここ2階だから、窓から出たら大変だよ」

昴くんに、言い当てられびっくりしていると、

「逃げること、考えなくても大丈夫だから」

と昴くんは、優しく言った。なんだか、昴くんの感じが違うことに、私はようやく気がついた。

「俺、もう、復讐するのやめたから」

「え？」

「もう、やめたんだ」

「……」

私は、昴くんが信じられないことを言うから、耳を疑っていた。そんな私を昴くんは、ただ優しく見守っていた。

「なんで…？」

「え？」

「どうして、そんなに変わっちゃったの…？」

「うん…」

昴くんは少しうつむいて、髪をかきあげると、何を言おうか考えていた。

「ある人にさ…。俺の中にある、闇のエネルギー浄化してもらったんだ」

「闇の…？」

「俺、親父の霊が憑いてたんだ…」

「え？！」

「俺の、心にある闇のエネルギーと、引き合ってたんだ」

「……」

私は、昴くんがあまりにも突拍子もないことを言うので、驚いていた。

「だけど、その闇のエネルギーを光で包んでくれて、親父の霊も昇天できたんだ」

「……」

何を言ってるんだろう？

「親父も、もう許すって言ってた。俺ももう、復讐なんか考えていない」

「……」

まだ、耳を疑っていた。もしかして、これは幻想か夢なのか…。

「殺そうとも思ってないし、ひかりの人生をめちゃめちゃにするなんて、もう思ってない」

「じゃ、私、帰れるの？」

「…帰りたい？」

「え？」

「もうすぐ結婚、するんだよね…？」

「……」

結婚…。そうだ。家に帰ったとしても、好きでもないまったく知らない人と結婚しないといけないんだ。

「結婚したいの？」

昴くんに聞かれて、何も言えなくなった。結婚したくない。私の人生は、父親のものでもないし、もう父の人形でいるのも疲れた。

「したくないけど…、父には逆らえないから。しょうがない…」

「なんで？嫌だって言えばいいじゃん」

「父の会社、私が結婚しないと、大きくなれないし…」

「ひかりは物じゃないだろ?会社をでかくするための、道具でもないだろ?」

「……」

昴くんが真剣な顔をして、そんなことを言うから、また私は面食らっていた。

「やだよ…」

それでも、私は昴くんに話をしだした。

「もう、父の人形でなんかいたくない。でも…、私にはどうにもならない」

「……」

昴くんは、少し考え込んでいた。それから、

「え?」

と言うと、いきなり後ろを向いてしまった。

「う〜〜ん…。どうやって…?」

昴くんが、一人でぶつぶつ言っていたが、そんなことよりも、私は結婚をどうしたらいいのかって悩んでいた。

昴くんがこっちを向くと、いきなり私のそばに来て、ギュって抱きしめてきた。

「え?!」

私は、驚いてしまった。一瞬頭が真っ白になり、そのあと一気に怖くなり、思い切り昴くんを払いのけた。

「…何?」

今までのはもしかして、油断させるための演技?でもそのあと、払いのけたことを後悔した。いきなり豹変したりしないか…。

昴くんはまたそっと優しく、私に両手を回してきた。

「……」

私は逃げたらいいのか、このままじっとしていた方がいいのか困惑した。

昴くんは、そっと抱きしめて、どうやら、光を思い切り出してくれてたようだ。体がどんどんあったまっていった。優しく抱擁をしているだけなので、私はじっとそのままでいた。

「俺の中には、いろんな闇のエネルギーがあったんだ」

昴くんが、静かに私を抱きしめながら話してきた。

「だけど、1番の恨みは、親父に対してだった」

「…え?」

「親父が、俺ら家族を残して死んでしまったこと、悔しかった…。でも、そんな思いを隠してないで、感じたんだ」

「……」

「そんな感情を、一緒に感じてくれた人がいたんだ。俺が苦しんでても、悲しんでても、悔しがってても、すんごい弱くても、それでも、俺のありのままを受け止めてくれた」

「……」

その人って誰なんだろう?私が気を失ってる間に、何かがあったんだ。ここは、その人の家なんだろうか。その人は、安全な人なんだろうか。

「それで…、俺に憑いてた親父の闇のエネルギーまで一緒に、浄化された。そうしたら、親父はもう復讐しようとか考えなくなって、すべてを許すって言ってさ…」

「お父さんって、もう亡くなってるのに…」

「うん。でも、声がしたんだ」

「お、お父さんの?」

「闇だったのに、すげえ光に変わって昇天していった」

「……」

そんなことが本当にあるの?じゃ、この人はお父さんの霊が憑いて

たから、あんなに怖かったの？

「ひかりの中にもあるよね。闇のエネルギー…」

「私に？」

「お父さんのこと、憎んだり、恨んだりしてない？」

「……」

私から黒い霧が出た。

「もし、恨んだり、憎んだりしてたとしたら、それでもいいんだ」

「え？！」

「そんな思いを、いけない感情だと思わないで。ただそれを感じてみたら、それでいいんだ」

昴くんの口調は、すごく優しかった。目を見ると、穏やかで澄んでいて優しくて…。あ…。昴くん、高い波動の昴くんだ。いつの間にか入れ替わってる…。ああ、そっか…。さっき、後ろを向いて一人で話してたあれ、高い波動の昴くんと話していたんだ。それから、きっと入れ替わったんだな…。

「……」

こっちの次元の私はまだ、困惑していた。昴くんの目が優しくあったかいことを感じて、こんなにも昴くんが変わってしまったことに、困惑していた。

「あ…、あなたが変わったのも、その闇のエネルギーを浄化したからなの？」

「うん」

「その、浄化してくれた人に私も会ったら、私の中の闇のエネルギー、消えるの？」

「いや…、その人には会えないよ。だけど、俺がする」

「え？」

「俺が、浄化できるから」

この人が…？そんなことできるの？

「ひかりの中の闇を浄化できたら、きっと、お父さんも変わるよ」

「え？」

「ひかりの周りが、きっと変わっていく。ひかりの中にあった闇のエネルギーが、低い波動の出来事を創りだしていたんだ」

「どういうこと？」

「引き寄せるんだよ。同じ派動の人だったり、出来事を」

「私が…？」

「うん。俺も親父を憎んでた。ひかりもお父さんを憎んでた。そういう思いが、引き寄せあった」

「じゃ、私の闇がなくなったら、結婚とか、お父さんの会社の犠牲になることもなくなるの？」

「うん。きっとね…」

昴くんは、にこって微笑んでそう言ってくれた。

私は、まだどこかで、昴くんのことを信じきれていなかった。あまりにも変わってしまったので、これはもしかして、私が見てる夢なんじゃないのかって、そんなことを思っていた。

私が疑っているのを察知した昴くんは、また優しく、

「信じられない？」

と聞いてきた。

「……」

私は、小さくうなづいた。

「じゃ、ためしに、やってみようよ」

「え？」

「闇のエネルギー、浄化してみよう…。ね？」

昴くんの人懐こい目に、私はもっと困惑した。信じていいの…？この人、なんでこうも、純粋な目をしてるの？そんなに闇のエネルギーを浄化すると、変わってしまえるの？

「わかった…」

騙されてるかもしれない。でも騙されたと思って、やってみてもいいかもしれない。

「でもどうやって、浄化するの？」

「そうだな。とりあえず感じたこと、思ってることをどんどん話してみて」

「え？」

「お父さんのことでもいいし…。結婚のこと、今までのひかりの人生のこと、俺のことでもいい。なんでもいいから、今、頭に浮かんできたこと、そのまま言ってくれたらいいよ」

「あ…、あなたに？」

「そう」

「……」

まさか、この人が怖いなんて、そんなことは話せない…。私は何を話したらいいのか、考え込んでしまい、黙り込んでしまった。

「今も俺のこと、怖い…？」

「……」

私は、ちょっと視線を合わせないようにして、うなづいた。

「そりゃそうだよね。相当怖かったよね…」

昴くんは優しい声だったけど、顔はすまなそうな顔をしていた。その表情を見て、また私は驚いていた。

「あなたは、これからどうするの？」

「え？」

「私を誘拐なんてして、それがもし、警察に知れて捕まったりしたら…」

「ああ…。う～～ん。ほら、波動がもう変わってるから、起きてくることがまったく違ってくるんだ。だから、俺、警察につかまることもなければ、悪いことは何も起きないと思うな」

「え？なんで？」

「まあ、その辺はまた、あとで話すよ」

「……」

私はだんだん、この人のことがわからなくなっていた。まるで別人に見える…。でも、同じ人だよね。

「お父さんのことは？小さい頃はどうだった？」

「どうって…」

私は、小さい頃どうだったかを思い返していた。

兄がいて、母がいて、父がいて、食卓について、みんなで笑ってご飯を食べていた。まだ、今とは違う家に住んでいた。

父のことが大好きだった。父はよく、肩車をしてくれた。それから、一緒に公園に行ったり、一緒に動物園に行ったり…。休みの日には、お弁当を作って、みんなで出かけた。小学校に上がる前の話だ。

それが、ある時を境に変わってしまった。家も引っ越した。もっと大きな家だったが、なんだか冷たい感じのする家だった。

父の会社がどんどん大きくなり、父はほとんど家にも帰らなくなった。休みの日にどこかに連れて行ってくれることも、まったくなくなった。

それから、兄と私は英才教育が始まった。いろんな習い事をさせられた。中学受験をして、兄はずいぶんと遠い学校まで通っていた。

兄は、父の会社を継ぐことが決まっていた。そのことに兄はまったく抵抗しなかった。それどころか、一代で会社を大きく広げた父を、尊敬もしているようだった。

でも、私は違った。父が家に帰らない日が増え、母がまず変わってしまった。家には、お手伝いをする人が来るようになり、母も家にいない日が多くなった。

家族がすれ違い出した。父と母は、あまり会話をすることもなくなった。家庭内別居と言っても、いいかもしれない。

それからだ。父は、私のことをうるさく監視し始めた。私のためと言いながらも、門限、交友関係、習い事から、趣味…。とにかく、うるさく言うようになった。

初めて好きになった人は、高校1年のときだ。先輩から声をかけられ、家まで一緒に帰ったことがある。だが、それを父の秘書に目撃され、翌日から行き帰りは、その秘書が車で送迎をするようになった。

学校、塾、習い事、それ以外は、家から出ることもできなくなった。

高校を卒業後、1年間留学をした。そのときは解放されるかと思ったが、意外にも勉強の方が大変で、遊んでる暇もなく、学校と家の往復の生活だった。

そして日本に帰ると、大学生活が始まったが、ここでもまだ監視つきだった。

うんざりだ。私はいつ父から、解放されるのか…。恋愛をしても、相手に裏から手を出し、私の前から去っていくように仕向けてしまう。

結婚なんてしなくていい。兄の仕事のサポートさえしたらいい。父の口癖だった。

私はもう半分くらい、自分の人生をあきらめていた。だけどそれで

もいつか、父から解放される日が来るんじゃないのか…。お金を貯めて、どこか遠くに逃げるか、外国にでも…。

そんなことを思いながら、過ごしていた。それが、いきなり結婚をしろと言って来たのだ。ずっと、結婚なんてしなくていいと言ってきてたくせに…。

思い返しながらも、私は何度も黒い霧を出していた。それをきっと、昴くんは消していてくれた。

「結婚なんてしたくない…」

ブワ…。また、黒い霧が出る。

「いつか自由になれるって思ってた。でも結婚なんてしたらもう、自由になれない」

「自由って、お父さんから?」

「そう…」

「何で今まで、ずっと言いなりだったの?」

「一回家を飛び出したことがある。でもすぐに見つかって、連れ戻された」

「家出?」

「うん。父のもとへ連れ戻され、私はもう嫌だって言ったの。父の会社の犠牲になりたくないって。でも、犠牲なんかじゃない。私の

幸せを1番に考えてるって、父はそう言って…」

「…そうなんだ」

「幸せを考えてるなら、なんで、言いなりにさせようとするんだろう。でも、もう何を言っても無駄だってわかった」

「それであきらめたの？」

「ううん。お金を貯めていつか家を飛び出して、アメリカにでも行こうかって思ってた。あっちに留学してたときの友達いるし」

「アメリカか…」

「だけど、結婚なんてしたら、そんな計画もパアになる…」

「結婚はしたくないって言ったの？」

「言った。でも、やっぱり何も聞き入れてくれなかった」

「……」

「私の人生って、なんなんだろう。父の人形、ロボット…。私の意志なんて誰も、尊重してくれない」

「……」

「私、愛されてないよね…」

「え？」

「父にも、母からも…」

「どうかな。俺もそれを感じてたけど、親父、俺のこと愛してるって言ってくれたよ」

「言ってくれたの？それだったら、いいじゃない」

「うん…。昇天してくちょっと前にね」

「え？」

「親父の魂が話しかけてきてくれて…。そんときに言ってくれた」

「生きてるうちにじゃなかったの？」

「うん…」

「……」

私は、どう言葉をかけたらいいか、わからなかった。

「俺、嬉しかったよ」

「え？」

「俺も、親父のこと好きだったんだって、そんとき思った。好きでもないどうでもいいやつなら、恨んだり憎んだり、愛されたいなんて思わない」

「……」

「ひかりもきっと、お父さんのこと好きなんだよ」

「私が？」

「お父さんだって、今は会社を大きくするためだけに燃えちゃって、家族をないがしろにしてる。でも、本当は家族が大事なんだ」

「まさか」

「本当は、家族のために働いてたんだ。だけど、成功し出して、お金や地位や成功ってものに、目がくらんだんだよ」

「……」

「俺の親父もそうだった。はじめは家族のために、少しでも大きな会社にしようって、頑張ってた」

「私の父もそう…」

「会社が成功し出して、家族より会社のことばかりを、考えるようになったんだ。きっとね」

「……」

「だけど、きっと俺の親父みたいに、ひかりのお父さんも本当は、家族が1番大事だって、そのことに気づくときが来るよ。今は、そこが見えてないんだ。それだけだ」

「……」

私は、なんでかわからなかったが、涙が出ていて止まらなかった。

「俺の親父、もし家族が1番って思ってたら、自殺なんかしなかった。そのうえ、死んでもなお家族より、恨みや憎しみにとらわれてた」

「……」

「だけど、闇のエネルギーが消えて、やっと何が1番大事だったかを思い出せたんだ」

「……」

「俺は親父が死んでから、親父の存在の大事さに気づいた。ずっと、反抗ばっかしてたけど、やっぱり愛してたんだ。愛してたから、愛されたかった。だから、俺や家族をほっぽって、会社のことばっかりになった親父に、こっちを向いて欲しくて、暴走族に入ったりして暴れたんだ。そうしたら、向いてくれるって思ってたのかもしれない…」

「……」

私はそれを聞いて、自分のこととだぶらせていた。

私も父が好きだった。家族がだんだんとばらばらになって、悲しかった。父に嫌われたくなくて、ずっと愛されていたくて、父の言うことをはいはいって、聞いていたのかもしれない。

父の期待に添えていたら、父が私を見ていてくれる…。だから、言いなりになっていたのかもしれない。父を失いたくなくて…。

「…私もお父さんのこと、好きだった。だから愛されたくて、嫌われたくなくて、言うことをきいてたんだと思う」

「そっか…」

こくんって私はうなづくと、また涙がポロって流れた。

「辛いのは、愛されたかったからだったんだ…」

「じゃ、それ、本人に言わなきゃ」

「え?」

「俺の親父は、もう死んじゃった。そういうこと話したくても、もう話せない。だけど、ひかりの親父さん、生きてるじゃん」

「そんなこと言ったって、わかってくれるわけない」

「わかってくれなくてもいいじゃん。わかってもらうために言うんじゃなくて、ひかりが素直に思ってること言えば、それだけでもいいんじゃないの?」

「……」

「父親のことが本当は好きで、だから言うこと聞いてきた。愛されたくて、ずっと会社の犠牲にまでなってきた。だろ?」

私は黙って、うなづいた。

「それ、言ってさ…、すっきりさせたらどうかな？」

「すっきり？」

「心の中を」

「……」

昴くんは私のことを優しく見つめて、私の言うことを待っていた。

「言えるかな…？」

「言えるよ」

「聞いてくれるかな？」

「大丈夫だよ」

「うん…」

私はうなづいてまた、涙をポロポロと流した。涙が止まらず、どんどんこぼれ落ちていく。ヒック…。思わず、しゃくりあげた。昴くんは優しく、私を胸に引き寄せ髪をなでてくれた。

「泣いちゃっていいんだよ。我慢する必要なんてないんだから」

昴くんは優しく、耳元でそう言ってくれた。昴くんの髪をなでる手は、優しかった。それに声も、ぬくもりも。

私はまるで子どものように、声を出して泣き出してしまった。昴くんは、その間もずっと髪をなでたり、背中を優しくなでてくれていた。

泣きながら、私は不思議でしょうがなかった。気を失う前まで、あんなに怖くって、逃げたくってしょうがなかったのに。今は、その人の胸の中で泣いている。それも、安心して…。

ミッション6　愛を感じる

泣きやんでも、私はそのまましばらく、昴くんの胸の中にいた。昴くんの匂いが、やけに懐かしく感じられ、どんどん心が落ち着いていく…。なんでだろうって、私はずっと思いながらも、その胸の心地良さに、なかなか昴くんから離れられないでいた。

「ひかり…？」

昴くんが、ささやくように私の名前を呼んだ。その声を聞き、私はしかたなく昴くんからそっと離れた。

「落ち着いた？」

昴くんが、私の顔をのぞきこみながら聞いてきた。その目を見ると、やっぱり優しくてあったかくて、懐かしい思いがした。

私は、涙を手で拭った。これからどうやって父に会い、自分の気持ちを話したらいいのか…。そんなことを考えようとするのだが、それよりも今は、昴くんのあったかさに触れていたかった。

「私のこと、ひかりって呼んでるんだね…」

「え？ああ…。うん。駄目かな？」

「ううん…。私はなんて呼んだらいいのかなって思って」

「え？昴くんっていつも…」

「いつも？」

「あ！いや、なんとでも…。昴でも、昴くんとでも…」

昴くんは、慌ててそう言った。

「じゃ、昴くんって呼ぶ。私よりずっと年、下なんだよね？」

「ずっとじゃないよ。１０歳だけだよ」

「１０歳も？」

「そんなに離れてないでしょ？」

「……」

私は黙り込んだ。それから、車の運転席にいた女性のことを思い出していた。

「運転してた人、あなたの彼女？」

「ああ、珠代ちゃんのことか…。えっと、そうなるのかな…」

「……」

彼女なんだ、やっぱり…。私の心が、なぜか重苦しくなった。黒い霧を出していて、どうやら昴くんがすぐに、光で消してくれたようだ。また、気持ちが軽くなったような気がした。

「なんで…？」

「え？」

私は、昴くんにいきなり、なんでって聞かれて焦っていた。

「なんで彼女かって聞いてきたの？」

「ううん…。なんとなく気になったから」

「そう…」

昴くんは、そう言うと少しうつむいて頭を掻くと、

「でも、もう別れるよ」

と、ぼそって言った。

「え？なんで？」

「うまく説明できないけど、珠代ちゃん、あ、珠代とはさ、違ってたんだ」

「…何が？」

「お互いが、なんていうか…、足りないもの埋めるためにいたっていうか…。求め合うばっかりで、愛し合ってはいなかったっていうか…。やっぱ、うまく言えない」

「それで、別れるの？」

「…うん。付き合っていけないなって、そう気がついたし。それに…」

昴くんは、何かを言いかけてやめてしまった。私はその続きをしばらく待っていたが、昴くんが、なかなか話さなかったから聞き返した。

「それに？」

「いや…、なんでもないよ」

昴くんはものすごい優しい目をして、私を見てそう言った。

私は昴くんの話を聞いていて、複雑だった。人を好きになるって、付き合うってどういうことなんだろう。足りないものを埋めあい、求め合うのは違うんだろうか…。それに、どうしてそういうことに気がついたんだろう。

「好きじゃなかったの？」

「え？」

「その…、珠代さんのこと」

「好きだったよ」

「好きなのに、別れるの？」

「うん」

「……」

私はもう、それ以上何も聞けなくなった。こっちの私は、恋愛経験はほとんどしたことがなく、昴くんの言うことが、理解できなかった。

好きになるって、どういうことかな…。異性を愛するって、どういうことなんだろう…。それに、愛されるってどんなことなのかな…。

しばらくうつむいて、私は考えていると、昴くんの私をじっと見る視線が気になり、顔をあげた。昴くんは、やっぱり優しい目で私を見ていた。

この人は、もともとこんなに優しい人なのかな…。珠代さんって人にも、優しかったんだろうか…。お父さんのことがなかったら、こんな形じゃなく、もっと早くに出会ってたら違ってたのかな…。

しばらく、昴くんと見つめあっていたことに気がつき、なんだか気恥ずかしくなり、私はまた下を向いた。

早くに出会ってたとしても、何もないかな…。１０歳も離れてて、環境も違ってるだろうし…。

「あ…。もう、こんな時間なんだ」

昴くんは、ベッドの脇にある小さな机の上の時計を見て、そう言った。私も時計を見ると、１１時を過ぎていた。

「そうだ。さっき、ノエルさんがひかりに服貸してくれた…。あれ？どこやった？ひかり」

「え？」

「あ…。いや、なんでもない」

ノエルさん？貸してくれた服…？

昴くんは、ベッドの掛け布団をどかしたり、枕の下をのぞいたりしていた。

「あ、あった。ひかりのお尻の下」

「え？」

慌ててその場を離れてみると、私の座ってたところにフリースの上着と、ズボンがたたんで置いてあった。

「それに着替えて、寝るといいよ」

昴くんはそう言うと、にっこりと微笑んだ。

「うん…」

私はうなづいたが、昴くんがベッドに座ったまま、こっちを見ているので着替えられずにいると、

「あ…、俺、邪魔？」

と昴くんは、聞いてきた。コクン…。私は黙って、うなづいた。

「ごめん。じゃ、廊下出てる。あ、ついでにトイレでも行ってこようっと」

と言いながら、昴くんは部屋の外に出て行った。

私は着替えをして服をたたみ、ベッドの脇にある椅子の背もたれにかけた。それから廊下に出て、昴くんを呼ぼうとした。

ドアを開けると、長い廊下があり、昴くんがどこに行ったのかわからなかった。

…トイレってどこだろう?きょろきょろとしながら、廊下を歩いていると、いきなり一つのドアが開いた。

「あれ?どうしたの?ひかりさん」

まったく知らない人が話しかけてきて、こっちの次元の私は驚いていた。

「あの、トイレどこなのかわからなくて…」

「トイレ?一階だよ」

「あ、どうも…」

私は、この人誰なんだろう。昴くんの知り合いなんだろうけど、いったいどういう関係なんだろうって気になっていたが、ぺこってお辞儀をして、その場を去ろうとした。だが、

「ちょ、待って!昴は部屋にいんの?」

と、腕を掴まれてしまった。

「いいえ…」

「ひかり…さん。星野建設の娘さんの、ひかりさんだよね?」

「…はい」

「あ・・・。そっか~~。えっと~~。ちょっと昴が帰ってくるまで、ここで待ってて」

「なんでですか?」

「いや、その…。昴に君のこと、どっか行かないよう見ててって頼まれてさ…」

「……」

頼まれた?仲間なの?私が逃げないよう、監視してる?……。私は、辺りを見回した。ここはどこなんだろう。ものすごく静かで、他に人の気配もないような気がした。廊下は長く、廊下の先は真っ暗だった。

突然、怖くなった。今までの昴くんのことすら、信じられなくなってきた。

「部屋に戻ります」

「部屋?じゃ、一緒に行くよ」

「だ、大丈夫です…」

こんな知らない人に部屋に来られて、もし部屋に一緒に入ってこられたら…。怖い…。また、体が冷たくなった。

「ひかり？」

昴くんの声が、暗い廊下の先から聞こえた。

「漆原さん、どうしたんですか？」

「昴…。お前、高い方？」

「はい」

「そっか…。ああ、良かった。いや、ひかりさんが、トイレどこかって聞いてきたんだけどさ…。ほら、ここで迷子になっても大変だし、昴戻ってくるまで、待っててって言って…。お前、どこに行ってたんだよ、ひかりさん、一人置いて…」

「すみません。トイレに行ったあと、一階の廊下でノエルさんに会ったから、ちょっと話をしてて」

「そっか…。あ、ひかりさん、悪かったね。引き止めて…」

「……」

私はその人から腕を離してもらっても、まだ警戒していた。昴くんのことすら、なんだか怖くなっていた。それに、ノエルさんって？

「ひかり、安心して。この人見かけ怖いけど、怖い人じゃないよ」

「昴！見かけ怖いってどういう意味だよ？」

「あはは…。だって、でかいじゃん。そりゃ、漆原さんに腕掴まれたら普通怖いって」

「ひっで～な。これでも俺、こっちじゃ善良な警察官だよ？」

「警察…？」

「あ…」

漆原さんはしまったっていう顔をしたが、昴くんはそんなのおかまいなしに、

「そ。漆原さんは、おまわりさんなんだ。だから、大丈夫」

と笑って言った。

「で、でも。昴くん、誘拐犯に…」

「ああ…。う～～ん。説明がややこしいっていうか、難しいんだよな～～」

昴くんは、また頭をぽりって掻いた。

「ま、とにかく部屋に戻ろう。あ、ひかりもトイレか。案内するよ。こっち」

昴くんは、とっとと廊下を歩き出した。私は慌てて、そのあとをついていった。

「ど、どうして、警察の人がいるの？ここ、どこなの？」

「ここは、白河さんって人のお屋敷」

「白河？」

「うん。白河さんの先祖は、陰陽師なんだって。で、それを白河さんの娘さんが今、継いでるんだ。それが、ノエルさん」

「陰陽師って…？」

「う～ん。俺もよくわかんないんだけど、ま、悪い霊とかをお祓いしたりしてるのかな？」

「じゃ、その人に昴くんも、お祓いしてもらったの？」

「え？」

「お父さんの霊…」

「違うよ。俺のこと愛してくれてる人にだよ」

「……。珠代さん…、じゃないよね？」

「うん。違うよ」

「そんな人が、ここにいるの？」

「いるよ」

昴くんが、そう言いながら私を優しく見た。

「あ、ここ、女性用のトイレ。場所覚えてね」

「え？うん」

「もう少し行ったところに、食堂があるんだ。ほら、電気ついてる…。俺、あそこにいるからさ」

「うん」

そう言うと、昴くんはさっさと歩いて行ってしまった。

私はトイレから出て、その明かりのついてる部屋に向かった。中に入ると広い食堂で、昴くんが誰かと話をしていた。白髪交じりの、６０代くらいの男の人だ。

「やあ、ひかりさん」

その人が私に向かって、話しかけてきた。

「……」

私は思わず、その場に立ち尽くした。

「あ…。心配いらないよ。さっき話した白河さんだ」

「陰陽師の…」

「白河さんは、陰陽師じゃないけどさ」

「……」

白河さんっていう人も、とても優しい表情で私を見ていた。

「安心しなさい。もう昴くんは、君を危険な目にはあわせたりしない」

「……」

この人も、昴くんの闇のエネルギーが消えたことを、知ってるんだろうか…。

「さて、明日の朝は早い。そろそろ寝ないといけないな」

そう言うと、その人は「おやすみ」と私と昴くんに言い、食堂を出て行った。

「じゃ、俺らも部屋に戻る？」

昴くんはそう言うと、食堂を出た。私もあとをついていった。

「明日の朝日が出る前に起きるから、けっこう早起きになるよ」

「なんでそんな朝早くに？」

「お祓い、その時間にするんだ。朝日が昇ると同時に」

「お祓い？」

「そう。浄化」

「そうしたら、私の闇のエネルギーも消えるの？」

「うん」

「……」

部屋に入ると、昴くんはドスンとベッドに横になった。

「あ～～。疲れた」

そう言ってから、布団に潜り込んで、

「ひかりも、疲れたでしょ？」

と聞いてきた。

「私は…、気を失っていたし…」

「あ。そっか…。どっか、具合悪いところはない？」

「大丈夫」

私はそっと、昴くんの隣のベッドに入った。昴くんのほうを見ると、優しくこっちを見ていた。

「ここ、大きな屋敷なんだね」

「うん…」

「でも、あまり人いないの？」

「年末だからだって。いつもは、もう少しいるみたい」

「そう…」

「明日の朝には、みんな集まるんじゃないかな。今この屋敷にいる人が…」

「どんな人がいるの？」

「みんな、優しいいい人だよ」

「……」

「あまり、心配しなくていいよ。全部がうまくいくようになってるから」

「全部が？」

「うん」

昴くんは、また無邪気に笑った。

「さっき…、求め合ってばかりで、愛し合ってなかったって言って

たよね？」

「ああ…、うん」

「それ、どういう意味？」

「う～～ん。俺、求め合うんじゃなくて、与え合うのが愛し合うことだと思ってるんだ」

「与え合う？」

「それから、信頼や支えあったり…、そういうこと」

「そうか…。うん、なんかわかるような気がする」

「そう？」

「さっき、愛してくれた人に、浄化してもらったって言ってたけど、その人も明日朝来るの？」

「うん」

「どんな人？」

私はなんだかとても気になり、聞いてみた。

「どんなって。そうだな～～。う～～ん…」

しばらく昴くんは、考えこんでから、

「どんな俺でも愛してくれて、俺のこと丸ごと、光で包み込んじゃう…、そんな人」

と、優しく言った。

「……」

そんな人がいるんだ。

「それ、お母さんとか、身内じゃなくて？」

「うん、違うよ」

「その人に会ったから、もしかして別れるの？」

「え？」

「珠代さんと…」

「うん、そうかな…」

「その人のこと、昴くんも愛してるの…？」

「うん。愛してるよ。ものすごく…」

「……」

「その人の全部を愛してるよ。その人が俺の全部を愛してくれるように」

「全部…？」

「そう、全部、まるごと」

「……」

私は聞いていて、苦しくなった。そんなにも愛してる人がいるんだ。ギュ…。胸がやけに苦しい。嫉妬だ。羨ましくてしょうがない。そんな人がいることが羨ましい…。私にも、そんな人がいたらいいのに…。

黒い霧が出る。

ああ。違う…。その人が羨ましいんだ。昴くんにこんなにも愛されてて…。そんなことを感じてる自分に気づき、昴くんのことを好きになってることに気がついた。

自分でも信じられなかった。私を誘拐した人だ。殺そうとした人だ。だけど、それはお父さんの霊のしわざだった…。本当のこの人は、すごく優しい。純粋で、とってもあったかい…。

どんどん惹かれていってた。この人の、ぬくもりも、笑顔も、瞳も…。

私はしばらく、昴くんのことを眺めてから、また苦しくなり反対を向いた。

「…ひかり？」

昴くんが、優しく聞いてきた。

「もう、寝るね」

私がそう言うと、

「え？うん…。おやすみ」

昴くんはもう、しゃべるのをやめた。私はしばらく黙っていたが、どうしても気になり昴くんに話しかけた。

「昴くん…」

「え？」

「私がここにいていいの？」

「なんで？」

「その、昴くんのこと愛してる人が、そばにいなくてもいいの？」

「…どうして？」

「私がここにいて、その人嫌がらない？」

「嫌がったりしないよ。そりゃやきもちやきだけどさ」

「……。だけど…」

「ひかりは心配しなくていいよ」

「……」

心配じゃない…。私がその人の立場だったら、絶対に嫌だろうなって思ったんだ。

「ひかり、こっち向いて」

「え？」

「なんか、顔が見えないと、ひかりがどんな表情してるのか、わからないから」

「……」

私は、どうしようか少し迷ったが、また昴くんの方を向いた。

「ひかりは、今まで好きになった人いたんでしょ？」

「うん。でも付き合ったことはない。付き合おうってなっても、お父さんに阻止されてたから」

「そうなんだ…。じゃ、結婚相手には、会ったことあるの？」

「2回だけ」

「2回？たったの？」

「そう…」

「どんな印象だった？」

「嫌じゃなかった。でも…、結婚をしたいとは思わなかったし…」

「じゃ、結婚はまだしないとしても、その人と付き合ってみる気は？」

「……」

なんで、そんなことを聞くんだろう。私はしばらく黙り込んだ。そして、

「…どうして？」

と聞いた。

「え？」

「どうして、そんなこと聞くの？結婚した方がいいと思ってるの？」

「思ってないよ。ただ、会ってどう思ったのかなって…」

「……」

昴くんは、きっと誰にでも優しいんだ。ずっと優しく私を見てるのも、もともとの性格からなんだ。私を特別に思ってるわけでもないし、私を愛してくれてるわけでもない…。また、胸がぎゅって締め付けられた。これ、何…？

「どうしたの？」

「え？」

「なんか、苦しそう。どっか、具合悪い？」

「ううん…。ただ…」

「うん」

「胸が苦しいだけ」

「え？大丈夫なの？心臓？」

「ううん…。違う」

昴くんはベッドからおりて、私のおでこを触って熱を測ったり、顔をのぞきこんだりした。その優しさに、また胸が苦しくなった。

「平気だから、あまり優しくしないで」

「え？」

「それ、勘違いする」

「勘違いって？」

「優しくされたことなんて、そんなにないから私…。私のこと好きなのかって、勘違いするからやめて」

「……え？」

昴くんは、私の顔のすぐそばで、私の顔を見て驚いていた。

「愛してる人、いるんでしょ？その人に悪いし…。私なら、もう逃げようとも思ってないし、その人のところに行っていいから」

「……」

昴くんは、髪をかきあげ困った顔をした。

「本当に、いいから…」

私はそう言うと、涙が出そうになっていた。

「…ひかり。それ…、本心？」

「なんで…？なんでそんなこと聞くの？」

「だって、顔、辛そうだから」

「そう。辛いから、もう出てって」

「辛いって、なんで？」

「優しくされると、苦しいから」

「どうして…？」

「どうしてって…。さっきも言った。勘違いしちゃうから」

「俺のこと、もしかして好き？」

「……！」

私は、いきなりそんなことを聞かれて、ものすごい動揺した。顔が真っ赤になったかもしれない。思わず反対側を向いた。

「…好きなの？」

昴くんは、もう一回聞いてきた。

「おかしいのはわかってるよ。誘拐されたのに…。でも、本当のあなたは、優しいしあったかいし…。だけどそれは全部、私のことを思ってじゃないんだよね…。あなたにはだって、愛してる人がいるんだもの」

「……」

昴くんは、黙っていた。

「これ、違うんでしょ？求めるのは愛じゃないんでしょ？だから、これも…」

「俺のこと、好きなの？」

また、昴くんは同じことを聞いてきた。

「求めるのは、好きってことじゃないんでしょ？」

私はまだ、反対を向きながらそう言った。

「ねえ…」

昴くんは私の顔を思い切り、のぞきこんできた。

「こっち向いてくれないかな。表情が見えないよ」

「……」

私は、顔を隠したかった。きっと、嫉妬やら気恥ずかしさやらで、変な顔をしてる。

「見ないで…」

「なんで?」

「だって…」

「ひかり…?」

私は、布団に潜り込んだ。それから、涙が出てきた。それも、しゃくりあげてしまい、泣いてるのが昴くんにばれてしまった。

「泣いてるの?ひかり?」

「……」

何も言わずに私は、泣いていた。

「……」

昴くんは黙って、私のベッドの脇に座ったままだった。
そしてしばらくすると、昴くんは布団の上から私を、抱きしめてきた。
「やばい…」
「……？」
やばいって…？
「ひかり、俺のこと好きなんだよね？」
それがやばいの？
「こんな俺だけど、好きなんだよね？」
こんな俺って？
「泣いちゃってるのも、俺のこと好きだからだよね？」
……。そうだ。好きで苦しいからだ。
「…顔見せてよ」
「駄目…」
「なんで？」
「泣いてるから…」

「泣いててもいいよ」

「……」

私はそっと、顔を布団から出した。

「あ。ほんとだ。鼻も目も真っ赤だ」

そう言うと、昴くんは私の鼻にキスをした。

「え?!」

私は、思い切り驚いてしまった。昴くんの目も、キスも優しくて、もっと胸が締め付けられた。

「俺も、好きだよ」

「え?」

「ひかりのこと」

「嘘」

「嘘じゃない」

「でも、好きな人いるんでしょ?」

「うん」

「じゃ、なんで私にも好きだなんて言うの？」

「…だって、ひかりだから」

「え？」

「俺が愛してるのは、ひかりだから」

「……」

一瞬、何を言われたのかわからなかった。

「私、あなたの闇のエネルギー、浄化なんてしてない」

「してくれたんだ…」

「…いつ？」

「気を失ってる間…」

「どういうこと？」

「高い波動のひかりが…」

「高い波動？」

「そうなんだ。ひかりは、いろんな波動の…、いろんな次元にいるんだ」

「…？」

何を言ってるのか、まったくわからなかった。

「ひかりは、どんな俺も愛してくれてる。俺も、どの次元のひかりも愛してるよ」

「…次元って何？」

「3次元、4次元、5次元。いろんな次元がある。そのどの次元にも俺がいて、ひかりもいる」

「…どういうこと？」

「俺、ちょっと高い次元の昴なんだ。途中で入れ替わった」

「ええ？」

「あ、こっちの昴も、波動変わってるから安心してね。もう、闇は浄化されてる。こっちの昴も、ひかりのこと愛してるから」

「？」

「どんな次元の俺も、ひかりを愛するように、どの次元のひかりも、俺のこと愛してくれるんだね」

「…？」

「あ…、それは俺、信じてたよ。ひかりも言ってた。どの次元の私も、昴くんを愛するからって…。でも、いつ好きになってくれるんだろうって、ちょっと思ってた。なにせ俺、誘拐してきたわけだし」

「……」

昴くんの言ってることが、さっぱりわからなかった。

「あ…。わかんない？言ってること」

「うん…」

「そっか…。じゃ、高い次元に行ってみる？一気に」

「え？」

「俺と同化して」

「同化？」

「高い高い次元では、俺ら一つの魂なんだよ」

「一つの魂？」

「それが、分かれて地球に来てる」

「……」

あまりにも突拍子もないことに、私は開いた口がふさがらなくなっていた。

「だから、一つになる体験したらわかると思う。いろんな次元に自分がいることも、俺と一つだったことも、それから、俺がひかりを

愛してることも」

「…体験？」

昴くんは、そっと私に優しくキスをしてくれた。あったかい、優しい、とろけるようなキスだった。そして私を優しく、見つめる。そして、髪をなで、頬をなで、またキスをする。

涙が出そうになった。なんでこうも、優しいんだろう。あったかいんだろう。

「ひかり、愛してるよ」

昴くんが耳元で、ささやく。その声を聞いても、胸がきゅんとする。愛されてる…。なんでか、確信がもてる。それも、ものすごい愛で包みこんでくれてる。それが体全体で感じられる。

フワフワ体が浮いてるようになる。体中があったかいもので、包まれている。私の心からもどんどんあったかいものが、溢れ出してくる。

昴くんが、好き…。心から、聞こえてくる。昴くんを愛している。体中で私はそう言ってる。

昴くんのぬくもりも、匂いも全部知ってる。なんでだか、そう感じる。昴くんの髪をなでてみた。それから頬にも触れてみた。この感触も知ってる。

ものすごく愛しい。愛しさでいっぱいになり、涙が出る。また、昴くんがキスをしてきた。優しく、優しく、何度も。

フワ…。気持ちがいいって思った瞬間、体が本当に宙を浮いた。ううん。体はベッドの上にある。私の体の上には、昴くんがいる。私はさらに、その上に浮かんでいる。

「ひかり、このまま宇宙船まで行くよ」

昴くんの声がしたと思ったら、ものすごい光に包まれた。どんどん体が、ううん、意識が広がっていくのを感じた。どこまで私なのかわからなくなる。

あったかい優しい、広い空間。満たされ、幸せで、愛が溢れ出す。そして、ものすごい光に包まれながら、一気にどこかに魂が飛んでいった気がした。

気がつくと、宇宙船のようなところに私はいた。

「そうだよ、宇宙船だ」

声がして横を向くと、光の人型が私に話しかけて来ていた。

「昴くん…」

私は、思い出していた。この宇宙船にいたことも、自分のミッションも。

「ひかりも思い出した?」

「え?」

「俺も思い出した。全部を…。俺ら、あの低い次元に行ったのは、ミッションのためだった。親父の死も、ひかりのお父さんのことも、全部がシナリオに書かれてて、計画通りだった。すべてが、アセンションのための計画通りのことだったんだ」

「うん。思い出した。低い次元でのミッション。そのために、高い次元からも応援に行った」

「これからもあるね…。あの低い次元でのミッションは、まだクリアになってない。そのためにも、俺らは闇を感じ、憎しみを知り、あんなにも恐怖や苦しみを味わい、そしてその闇を光で包み込み、愛し合うことを経験したんだ」

「うん。そうだね。どれもこれも、ミッションのうちだったね」

「親父の魂も、ひかりのお父さんの魂も、一役かってくれたんだ」

「うん」

「みんな、愛の魂だね。俺らに愛を体験させるために、いてくれる光の魂だ」

「うん…。みんなね…」

「みんな俺らだ。みんなで、地球が上昇するために、協力し合ってる。みんなで、地球を光と愛へ導いてるんだ」

「うん。一見悪者のように見えても、その魂も、愛の魂だね」

「戻ろう。この地球を愛で包み込もう」

「うん…。闇も光で包もうね。愛で包もうね…」

「うん。ひかり…」

私たちは、一気に体の中に戻ってきた。

「……」

こっちの次元の私は体に戻ると、昴くんの顔をただ眺めていた。

「ミッション…」

私はつぶやいた。

「うん…」

昴くんは、だたうなづいた。

「私、すごく派動を下げて、この次元に来たんだ」

「俺も…」

昴くんも、こっちの次元の昴くんになっていたが、しばらくすると、また高い波動の昴くんが表面に現れた。

「ひかり、思い出した?」

「うん…」

「それで、朝日を浴びれたら、闇のエネルギーはしっかりと、浄化できるね」

「昴くん…」

「ん？」

「ありがとう」

「え？何が？」

「愛してくれて」

「それはひかりもだよ。俺のこと愛してくれた」

「……」

私は思わず、昴くんに抱きついていた。

「あれ？ひかり、もしかして…」

『ううん。まだ、表面には出てないの』

『でも、心で会話できる』

『うん。ようやく心開いたから』

「この声もしかして、高い波動の私なの？」

「そうだよ」

「高い波動の私が、昴くんの闇を浄化したのね？」

「うん」

昴くんは、私がいるベッドの布団に潜り込んできた。

「こっちで俺も寝よう…。いいよね？」

「うん…」

「明日早いから、もう寝ようね。ひかり」

「うん。おやすみなさい」

「おやすみ」

昴くんは腕枕をしてくれた。私は昴くんの胸に顔をうずめた。ものすごい安堵感。あったかくて、心地いい。昴くんの胸に抱かれていると、どうしてこんなにも落ち着くのか…。

昴くんの鼓動が嬉しくて、嬉しくて、胸に耳を当てて、私は眠りについた。その夜、ぐっすりと眠ることが出来た。こんなにも安心して眠ったのは、どれくらいぶりだろうか。

翌朝、まだ窓の外が暗いうちから、電話が鳴り昴くんが電話に出た。

「あ。おはようございます」

昴くんがものすごく眠そうに、そう言った。

「はい、起きます。はい…」

そう言うと、昴くんは受話器を置き、また布団に潜り込んだ。

「…起きないの？」

「んあ？」

「今、起きますって…」

「んん…」

昴くんは、私に抱きついてきた。

「もう少し寝る～～。ひかり、あと5分、こうしてて」

「え…？」

「ひかりの胸、あったかい」

昴くんは、私の胸に顔をうずめた。

わあ！どうしよう！！！私は思い切り、戸惑い固まってしまった。

「……」

昴くんはしばらく、私の胸に顔をうずめていたが、

「あ！ひかり？」

と、いきなり顔をあげた。

「どっち？」

「え？」

「ひかり、こっちの次元のひかり？」

「うん…」

「あ！そうか…。やべ、寝るところだった。いつもみたいに、甘えちゃってた」

「甘えるって…？」

「いや、もう、起きなくちゃね。お祓いあるもんね」

そう言うと、昴くんは、ガバってベッドから跳ね起きた。

「えっと、着替え…。いや、先に洗面所…。いや、よれたスエットで、その辺うろつくなって前にひかりに言われたから、着替えから先…」

「そんなこと私言ってたの？」

「ああ。うん。アイドルなんだから、気をつけろって」

「あ…、アイドル？！」

「あ！そっか。こっちの次元じゃ、俺、芸能人でもなんでもないんだ。じゃ、よれたスエットでも、髪が爆発してても、いいんじゃんか。じゃ、ちょっくら、このまま顔洗ってくる。ひかりも顔洗いに来なよね。一階だから」

「え？うん」

昴くんはそう言うと、タオルと歯ぶらしを持って、さっさと出て行ってしまった。

「…アイドル？芸能人？」

いきなりそんなことを言われて、私は驚いていた。

洗面所に行くと知らない人がいて、

「星野さん、おはようございます」

と、元気に挨拶をされた。その横にも知らない男の人がいて、

「あ、ひかりさん、おはよう」

と私の方を向いて、言った。

「お、おはようございます」

この人たち、私のこと知ってるの？

「昴、今日、早いじゃん」

「ん～～。だって、ひかりに甘えられないから」

「え？なんで？喧嘩？」

「ちゃうよ。ひかり、まだ、こっちの次元のひかりなんだ」

「ああ。それで、甘えられないわけ？あははは」

「笑うところ？そこ…」

そんな会話を聞き、そうか、高い次元では、私に昴くんは甘えてたんだってことが判明した。

優しくて、あったかくて、純粋で、甘えん坊なの？やっぱり、１０歳も下だからかな…。

部屋に戻ると、

「じゃ、ひかり。着替えて行こうか？」

と、言ってきた。

「着替えるから、向こう向いてて」

「え？あ…、そっか」

高い次元の私たちは、愛し合ってるんだよね。でも、私はまだ…。

昴くんは、後ろを向きながら着替えをして、着替え終わると私に聞いてきた。

「もう、着替えた？そっち向いても大丈夫？」

「うん」

そう言うと、昴くんはこっちを向いて、

「じゃ、行こう」

と私の手をひいた。

「あの…」

「え？」

「昴くん、私に甘えてたんでしょ？」

「え？」

「高い次元で」

「う…、う～～ん。まあね」

「私にも、いつもと同じように接して」

「え？！」

「ね…？」

「うん。わかった」

そう言うと、昴くんは少し考え込み、

「でも、いつもと同じように、本当に接していいのかな？」

と聞いてきた。

「え？どうして？」

「俺、いっつもひかりにべったりくっついてたよ。年がら年中いちゃついてたから、そんなで本当にいいの？」

年がら年中、いちゃついてた～～？あまりのことを聞かされて、私は驚き、そのまま目が点になっていた。

「あ…。やっぱり、びっくりしてる。で、そんなで、いいの？」

「え…、え…？」

私は、戸惑ってしまった。いちゃつくって、どういうこと？それすら、恋愛経験がないからわからない。

「いいの？」

「…うん」

私が言い出したんだから、駄目とは言えなくなっていた。

「了解！」

昴くんは、すごく嬉しそうににこって笑った。

「じゃ、まず朝のハグとキスからね？」

「そ、そんなことしてたの？」

「してた。してた」

『してないよ』

体の中から声がした。

『あ、ひかり、聞こえてた？』

昴くんの声もした。

『もう～～～』

「え？してないの？」

こっちの次元の私が、昴くんに聞くと、

「してたってば」

そう言うと昴くんは、ギュってハグをしてきて、唇に軽くキスをした。

「……」

なんだか照れてしまい、そのままうつむいていると、

「あれ?不服?」

と聞いてきた。

「え?」

「こんなキスじゃ不服?」

「ううん。そんなこと思ってな…」

言い終わる前に、もう一回キスをしてきた。今度はかなり長く…。

私は、思い切りドキドキしている。

「って…、あんまりいちゃついてる時間ないんだよね。もう行かないと…」

昴くんはキスをやめて、そう言ってきた。

「…うん」

私はまだぼ~~ってしたまま、昴くんに手を引かれ、部屋を出て一階におりていった。

「あ、おはようございます」

玄関に行くと、何人かの人がそこにいた。昨日会った漆原さん。今朝会った人、それに知らない人。

「おはよう。昴くん、ひかりさん。寒いね~~」

誰だろう、この女の人は。

「昴！」

後ろからいきなり、昴くんのことを呼ぶ人がいて、走ってきて昴くんに抱きついた。あ、この声、もしかして運転してた人？珠代さん…？

「あ…。びっくりした…。珠代ちゃん、おはよう」

「珠代！」

そのあとに、また知らない若い男の子が来て、

「何、昴さんに抱きついてるんだよ？昨日説明したじゃんか」

とちょっと、きつい口調でそう言った。

「だって、私が付き合ってるのは、あんたじゃなくって昴なんだよ」

珠代さんはそう言うと、キッと私のことを睨み、

「あんたさ、ずっと昴といんの？」

と言ってきた。

「え？」

こっちの次元の私は、びっくりしていた。

「昴は私の彼だから。あんたは昴のお父さんを殺した男の娘で…」

「珠代ちゃん」

昴くんが、珠代さんの言うことを止めた。

「それ、もうすんだ話だ」

「え？どういうこと？」

「ノエルさんや陽平くんから、話を聞いてない？次元のこと、ミッションのこと、いろいろと…」

「聞いたけど、納得できない。その女が昴の魂の片割れで、私はこの陽平ってのと同じ魂でなんて」

「……」

昴くんは黙っていた。

「それに、私たち、ずっと過去生でも恋人だったって」

珠代さんがそう言うと、

「ああ…。そんな話も聞いたんだ」

昴くんはちょっと戸惑いながら、そう答えた。

「前世でも恋人だったんでしょ？だから、今生でも恋人で」

「だけど、俺が愛してるのは、ひかりだよ？」

「なんで？この女は…」

「俺とおんなじ魂なんだ」

「そんなの…！」

「珠代さん。落ち着いて」

また、知らない人が来た。

「ノエルさん。でも…」

珠代さんがまだ、何か言いたそうにした。ああ、この人がノエルさん。

「さあ、みんなで移動しましょう。今日はかなり冷えるわね。みなさん、あったかくしてきてる？」

ノエルさんは、優しくそう言って先に歩き出した。私は、昴くんについて歩いていたが、昴くんの腕にしっかりとしがみついていたのは、珠代さんだった。

こっちの次元の私は、困惑している。そして、べったりとくっついてる珠代さんに嫉妬してる。黒い霧が出る。これ、こっちの次元の私？それとも、私？

ふと、昴くんが私の方を見た。

『ひかり、愛してるよ』

そう心で話しかけてきて、光を出し霧を消した。

『なんで、昴くんの声も聞こえるのかな…』

こっちの次元の私が、疑問に思った。

『同じ魂だから。なんでも通じ合うんだ』

昴くんは、前を向いて歩きながらそう言った。そして、

「珠代ちゃん、陽平くんといたほうがいいよ」

と言い出した。

「え？どうして？」

「君がもし、闇のエネルギーに覆われて、苦しい思いをしてたら、それを一緒に感じ取れるのは、陽平くんだけだ」

「昴は？昴は一緒に感じてくれないの？」

「俺には無理だ。俺が感じ取れるのは、ひかりだけだ」

「なんで？」

「わかるよ、そのうち」

「……」

「珠代ちゃんのこと、浄化するために陽平くん来てるんだ。その陽平くんに心閉ざしてたら、駄目だよ」

「でも…」

「陽平くん…。あ、もう陽平って呼んでもいい？確か、同じだよね？年」

「え…。はい」

「いいよ、タメ口で。俺のことも昴って呼んで。で…。珠代ちゃんのこと、陽平に任せるから。俺、ひかりのこと守らなきゃならないし」

「あ…うん、わかった」

陽平くんは、珠代さんのすぐ横に来た。

「珠代ちゃんから、黒い霧が出たら、一気に光で包んであげて。やり方は…」

「ノエルさんから聞いてるから、大丈夫」

「そっか…」

昴くんはそう言うと、珠代さんの腕を自分の腕から離し、私の方に向き、私の手を掴んだ。

「ひかりは、ちゃんと俺のそばにいなくちゃ」

そう言うと、グィって私を引き寄せ、しっかりと肩を抱いた。

「……」

珠代さんから、ものすごい黒い霧が出た。それを隣にいる陽平くんが光を出して消していた。

『黒い霧と、光…』

『見えるの？』

『うん。さっきから…』

『そっか。もうすぐ同化できるね』

『え？同化って何？』

『わかるよ。そのうち』

屋敷をぐるりと歩くと、中庭に出てそこに広い板の間があった。そこに全員があがり、前の方に私と昴くん、そして、珠代さんが座った。珠代さんからちょっと離れたところに、陽平くんが座っていた。

「さて、そろそろ日の出だな」

白河さんが白装束の格好で現れそう言うと、なにやらぶつぶつと唱え出した。その隣で、ノエルさんも唱えていた。

寒い…。体から、黒い霧が出てきた。昴くんは、私の手をぎゅって握ってきた。そして、光を出してくれた。

『大丈夫。ずっと隣にいるから安心して』

昴くんは優しく心で、そう言ってくれた。スウ…。心が安らぐ…。ものすごく安心できた。

それからまた、黒い霧が飛び出る…。体が冷たくなる。重くなる。苦しくなる。ギュ…。昴くんが私の肩を抱いてくれた。でも、体が震えるくらい冷たくなる。

ブワ…。ものすごい霧が飛び出た。昴くんの隣にいる珠代さんからも、黒い霧が出る。

「う…」

昴くんが、少し苦しそうな顔をした。私と、珠代さんの黒い霧に昴くんまで覆われていた。それでも、昴くんは光を出した。

私も昴くんをギュって抱きしめた。昴くん、愛してる…。体の中から声がする。ギュウ…。昴くんを両手で包み込む。そしてまた、愛してるって心でささやく。私からも光が出る。どんどん放出されていく。

だんだんと空が明るくなってきた。朝日が昇ってくる。

「珠代！」

珠代さんを見ると、ぐったりとうなだれていた。珠代さんのことを

しっかりと、陽平くんが抱きかかえていた。陽平くんから、すごい光が出る。

「大丈夫だ。陽平…。もう朝日が出てきてるから」

昴くんは、陽平くんにそう話しかけた。

パア……。朝日が板の間を照らし出す。それと同時に、黒い霧がどんどん消えていった。

私は、昴くんを抱きしめていた。昴くんも私をしっかりと、抱きしめてくれていた。昴くんのぬくもりと、朝日がすごくあったかく感じられた。

「珠代…、大丈夫か?」

珠代さんはうなだれていたのが、ようやく起き上がり、

「もう、大丈夫…。苦しくなくなった」

と小さな声で、陽平くんに言った。

「ひかり…?大丈夫だった?」

昴くんが私をまだ、抱きしめながらそう聞いた。

「うん」

私は、昴くんの腕の中の心地よさを感じながら、そう答えた。

「珠代さん、どうですか？」

ノエルさんが聞いた。

「なんだか、すっきりしました。ものすごく苦しかったのに…。なぜか、一気に…」

「浄化できたようですね。陽平くん、大丈夫？あなたもだいぶ、珠代さんの闇のエネルギー感じてたでしょ？」

「あ…、はい。でも、なんとか持ちこたえて」

「そう…」

ノエルさんは優しく、微笑んでうなづいていた。

「私の闇のエネルギーを、一緒に感じちゃうの？」

「そうだよ」

珠代さんに聞かれて、陽平くんはうなづいた。

「俺ら、同じ魂だから、同じこと感じちゃうんだ。だから、珠代が苦しかったら、俺も苦しくなるし…」

「じゃ、さっきも相当…？」

「うん」

「……」

珠代さんは、しばらく黙って陽平くんを見ていた。

「だけど、光で闇を消してたよ?俺」

陽平くんが、珠代さんにそう言った。

「昴じゃないんだ。珠代と一緒のこと感じて、心で会話したり、一緒にミッションを遂行するのも、俺なんだよ」

陽平くんは、珠代さんにそう説明して、

「昨日も言ったよね?それ」

と付け加えた。

「なんか、まだわからないけど、でも…」

珠代さんは、私と昴くんを見ると、

「昴じゃないんだね…」

と小さな声で、つぶやいた。

「さあ、そろそろ移動をしよう。食堂で朝ごはんの用意をしている」

白河さんがそう言って、板の間をおりていった。

「はい」

私たちも次々に板の間をおり、屋敷の方へと向かった。昴くんはずっと、私の手を離さなかった。少し歩く速度を遅くして、みんなの最後になるように、昴くんはゆっくりと歩いた。

『ひかり…』

昴くんは心で、話しかけてきた。

『愛してるよ』

昴くんから、また光が飛び出した。そしてそっと、私の髪にキスをした。なんだかくすぐったくて、照れてしまった。

「照れてる？もしかして」

「え？」

「なんでわかるの？」

「わかるよ。そりゃ何でも」

「そ、そうなの？」

「うん」

そう言うと、昴くんはギュって肩を抱く。

「やっぱ、ひかりって可愛い」

「ええ？！」

１０歳も下の昴くんにそんなことを言われて、私は思い切り戸惑った。

「年は関係ないって」

「え？思ったこと、わかっちゃうの？」

「なんでもわかるって言ったでしょ？」

「なんでも？」

「そう、なんでも」

昴くんは私の顔をのぞきこみ、

「大丈夫。どんなひかりも愛してるから」

と、にっこりと無邪気に笑って言った。

ミッション　第3段階終了

食堂に着き、みんなでご飯を食べだした。食堂はあったかくて、指の先がかんじかんでいたのが、だんだんとあったまってきていた。

私と昴くんが並んでご飯を食べていると、そこにノエルさんが来た。

「ひかりさん…。昴くんが闇で覆われそうだったとき、光を出して包み込んでたわね？」

「え？私がですか？」

「それ、多分、高い波動のひかりです」

昴くんが答えた。

「私の体の中から、昴くん愛してるって聞こえてきて、私、昴くんのこと抱きしめてて…」

「そう？じゃあ、高い次元のひかりさんなのね」

私は、こくんってうなづいた。そう、私だ。私が心で昴くんにずっと、愛してるって言い続けた。それを感じて、こっちの次元の私は昴くんのことを抱きしめたんだ。

「お父さま。もう、次のミッション、遂行できるんじゃないかしら」

ノエルさんが、そう白河さんに言った。

「ノエル…。焦らなくてもいい。1番ベストなときに、そうなるようになっている」

白河さんはそう、穏やかに言った。

「次のミッション？俺らのですか？」

昴くんが、ノエルさんに聞いた。

「そのために、この次元に君たちはきたんだよ」

白河さんが、変わりに答えた。

「私も、ノエルもここにきたのには、わけがある。すべてが、シナリオどおりに進んでいる」

「はい。それ、昨日ひかりと宇宙船に行ったときに感じました。全部が、ミッションのうちだったって」

「宇宙船に一緒に行ったの？」

ノエルさんがそう聞いた。

「じゃ、もう高い波動のひかりさんが現れても」

「はい。でも、もう同化してきてますよ」

「ノエル…。もう一つクリアにしておくことがあるんじゃないかな？」

「え？お父様、どういうことです？」

「この次元のひかりさんは、昴くんに誘拐されてるんだ。今、行方不明になり、ひかりさんのことをお父さんが必死で探している」

「あ…。そうでしたね。それはまだ、解決してないんですね」

「もう、ひかりさんや、昴くんが闇のエネルギーを浄化したから、事態ががらりと変わるだろう。それも、こちらの次元のひかりさんは、昴くんのことを信頼しきって愛しているようだから、何もかもうまくいくとは思うが、だが、私たちも協力しないとならないことは、たくさんあるはずだよ」

「はい、お父様」

「昴くん、犯罪者になって、捕まったりしないですよね？」

私は、いきなり心配になって聞いた。

「警察に、父は知らせてないとは思います。でも、周りが変だってことに感づいたら、わからないです。昴くんが疑われてたりしてないですよね？」

「疑われてるのよ」

ノエルさんが、静かにそう言った。

「え？」

私は、動揺した。もし、昴くんが捕まったりしたらどうしよう…。

「安心しなさい。警察にはまだ、連絡は入ってないようだ。それにもし、連絡が入ったとしてもどうにかなるだろう」

白河さんがにっこりと、微笑んだ。

「白河さん！」

そこへ、漆原さんが走ってやってきた。

「今、署の人に確認しました。どうやら、星野建設の社長…、あ。ひかりさんのお父さん、警察に連絡をしたようです」

「え？」

私は仰天した。

「でも、そんな…。私がいなくなったこと、公に知られたりしたら、会社の名誉に…」

「いや、公表したりしないはずだ。なにしろ、誘拐された可能性も、考えるだろうしな。よし、私も仕事に戻ろう。連絡は、いつでも取り合えるようにしてくれ。あとノエル、探偵の中にいるものに様子を聞いてくれ。それから、漆原くん。警察の中の仲間にも連絡を」

「あの…、仲間って？」

私が聞くと、

「いろんなところにいるのよ、高い次元から来てる仲間が…」

と、ノエルさんがそう言った。

「だから、安心して。それにお父様は、警視総監だから」

「ええ?!」

私は、思い切り驚いてしまった。

「星野さん、知らなかったの?」

誰かに、そう聞かれたが、

「こっちの次元のひかりは、まだ、そういうこと知らないんだ」

と昴くんがそう答えた。昴くんを見ると、なにも慌ててる様子もなく、ひょうひょうとしていた。

「あの…、昴くん?」

「え?何?」

「心配じゃないの?」

「何が?」

「だって、警察にうちの父、知らせたって」

「?それが?俺、警察に知らせたら、殺すなんて脅しもしてないし。あはは…。ひかり、心配しなくても、俺、ひかりのこと殺したりし

ないから」

「そ、そうじゃなくって！昴くんが、警察に捕まったり」

「え？俺が？なんで？」

「だって…」

「大丈夫だよ、心配しなくても。こんだけ仲間もいるし、悪いことは起きないよ。ま、それがミッションの一つなら別だけど」

昴くんは、のんきにそんなことを言ってから、

「あれ？まさか、ノエルさん、それが次のミッションだったりしないっすよね？」

と聞いていた。

「ええ。捕まったりしたら、ミッション遂行できないわ。だから、捕まるようなことは絶対にないから、安心して」

「はい！」

昴くんは、にっこりと微笑んだ。この、絶対大丈夫という、確信はいったいどこから来ているんだろう。

「心配してもしょうがない。それより、部屋に戻ってさ…」

「え？」

『いちゃついてる方がよっぽど、地球のためになるよ』

と、心で続きを言ってきた。

『い、いちゃついてる方が？』

私も、心で返事をした。

『そう。さ、戻ろう、あとのことは、白河さんに任せよう』

『でも…』

『いいから』

昴くんは私の手を取り、さっさと歩き出した。

「昴くん。いいの？」

「何が？」

「だって、ノエルさんや白河さんに任せたままで」

「俺らが出来ることは何もないよ。今はね。そうだな、心配をしないってことが1番、俺らが出来ることかな」

「……」

こっちの次元の私には、いまいちピンとこなかった。何もしなくてもいいの？どうして、みんなは私と昴くんのために、動いているの？

部屋に入りドアを閉めると、昴くんは、

「それは、みんなのミッションだからだよ」

と、私の心の声に答えた。

「え？」

「みんなで地球がアセンションするミッションを遂行してるんだ。もう、俺らは、自分がしたいことでなく、すべての存在がすべてのために動くことを、実行してるんだ」

「だったら、私たちも」

「今はないんだよ、俺らのすることは…。だけど、ちゃんと俺らがしなくちゃならないことは、起きてくるから」

「起きてくる？」

「そう。今は、まず心配しないこと。心配は負のエネルギーなんだ。黒い霧が出る」

「え？そっか」

「うん。白河さんやノエルさん、漆原さんを信じること。信頼のエネルギーは光だよ」

「うん、わかった」

昴くんは、ベッドに腰掛けると、

「ひかりはここ」

って、昴くんのすぐ横に私を座らせた。

「いつものひかりと同じように、接していいって言ったよね？」

「え…？うん」

「じゃ、遠慮なく、そうさせてもらいます」

「え？」

「あはは…。なんか、びびってる？」

「だ、だって…」

いちゃつくってこともわからないし、男の人と付き合ったこともないし…。

「ああ、そっか。付き合ったこともないのか」

あ…、私が考えてること、わかっちゃうのか。

私は慌てた。思ってることが全部通じちゃったら、かなり恥ずかしい。

「恥ずかしくないって」

「ま、また聞こえてるの？」

「うん。全部聞こえちゃう」

え〜〜〜〜!!!!どうしよう。もう、何も考えないようにした方がいいのかな。

「くす…」

え?笑われた?!

「あはは…。ひかり、可愛い。なんていうか、そういうところ、全部に共通してるよね」

「共通?」

「どの次元のひかりも、そういうところあるからさ」

「え?そうなの?高い次元の私も?」

「うん」

昴くんは、にっこりと優しく微笑んだ。

これ…。この笑顔にずっと、まいってる私がいる。どうしてこうも、無邪気に笑えるんだろう。

「……」

昴くんが、少し照れた顔をした。

「え？俺が？」

「え？」

「俺、照れてないよ」

「……」

でも今…。

「照れてないって…」

そうなの？

「ひかり、今日って何日だっけ？まだ、年明けてないよね？」

「え？うん…」

「ひかりを誘拐したのが、２９日だろ？」

「うん。仕事納めの日だから。だから今日、３０日」

「いや、ひかり丸１日以上、気を失ってたから、今日、３１日。あ、大晦日だ」

「え？１日気を失ってたの？」

私は驚いていた。

「うん。その間、高い波動のひかりが表面に出てて、こっちの次元

の俺の闇、浄化してくれたから」

「……」

そうだったんだ。

「まったく、その時の記憶は残ってない？」

「うん」

「思い出せない？」

「え…？うん…」

「そっかあ…」

「今、昴くんって高い次元の方なんだよね？」

「俺？うん、そうだよ」

「じゃ、こっちの次元の昴くんのときの記憶、ないんでしょう？」

「あるよ」

「え？」

「心の奥から見えてたし、感じてた」

「そうなの？じゃ、私はなんで？」

「心閉じて、奥深くに眠ってた…、からかな？」

「私が？」

「うん」

「……」

私はまた思い返そうとしたが、やっぱり記憶はなかった。

『じゃ、高い次元のひかりが、こっちの次元の俺と、愛し合ったのも覚えてないんだ』

「え？」

昴くんの心の声がして、聞き返した。

「あ。聞こえちゃった？」

「ど、どういうこと？」

「う～～ん。安心して。こっちの次元の俺に、犯されたとかじゃないから…」

「？？？」

ど、どういうこと？愛し合ったって？え？でも、体は私なんだよね…？

こっちの次元の私は、頭が真っ白になっていた。

「うん。体はひかりで、心は高い次元のひかりで。魂は一緒なんだけど、その…」

「え?え?!」

私は思い切り、動揺した。じゃ、私…、私もう…。

『あ…そっか。ひかりって男性経験なかったんだ』

知ってたの?あ…。ばれちゃったの?

「え?だって、自分で誰とも付き合ったことないって言ったじゃん?」

「あ…」

…だから、昴くんのぬくもりとか、髪とか、頬とか、覚えがあるような感じがしたの?

「そうかも。でも、高い次元のひかりの感覚と混ざってたのかもしれないし…」

「高い次元では、私と昴くん…」

「うん。だから、思い切りいつも、いちゃついてたって言ったじゃん」

「……」

い、いちゃつくって…。

「あ。そっか。いちゃつくってのが、わからないのか…」

昴くんは、ちょっと首をかしげて考えてから、

「ま、いっか。そのうちにわかるよ」

と言って笑った。それから、そっと私を抱きしめた。

ドキ！私の胸が高鳴った。

どうしよう…。ドキドキして、どうしていいかわからなかった。

『うそ…』

昴くんの声が聞こえた。

『え？』

『いや、ひかりの反応が、すごい新鮮だなって思って』

え…？

『わ。なんだか、こっちまで緊張する』

昴くんはそう言うと、私の髪を優しくなでた。それから、私に優しくキスをしてきた。胸がまた、きゅんってする。昴くんは優しくそのまま、ベッドに私を寝かせ、首筋にキスをする。

怖い…。いきなり私は、怖くなった。

『怖い？俺が…？』

昴くんは、心で聞いてきて顔を上げた。

『ううん…。昴くんがじゃなくて…』

きっと、男の人を知らないからかもしれない。どうしていいかがわからなくって怖い…。緊張する。体がこわばる。

『ひかり、愛してるよ』

昴くんが、光で包み込んでくれた。ホワ…。体があったまっていく。それから、優しくキスをしてくれた。

フワ…。体が、空中に浮いてるかのように軽く、そして気持ちがいい。光にどんどん包まれる。心が愛で満たされていくのがわかる。

昴くんの目を見た。優しかった。

「昴くん…、なんでそんなに優しい目をしてるの？」

思わず私が聞くと、

「ひかりも、優しい目をしてるよ」

と昴くんに、言われた。

「私も？」

「うん…。俺のこと、優しく見つめてるよ…」

私が…？

昴くんのことを見つめた。ああ…。そういえば、心の奥からあったかいものが溢れ出てくる。そうして、私から光が飛び出す。愛しい…。昴くんが、すごく愛しい…。

胸がドキドキしてるのに、心が満たされる。昴くんに触れられたところが、脈を打つ。そして、昴くんの全部が愛しくなる。目も、髪も、鼻も、唇も、ほくろも、指も、耳も、腕も…。

私も、そっと昴くんに触れてみる。そのたび、私から光が溢れ昴くんを包み出す。

人を愛するって、こういうことなんだ…。愛されるって、こういうことなんだ…。

心が、ものすごく広がって、宇宙空間のように無限に広がって、開放されていく。体も、心も、昴くんと一体になっていく感覚がする。

「ひかり…。愛してるよ」

昴くんが優しく、耳元でささやく。その声も、愛している。私と昴くんの光が、混ざり合いながら、どんどん広がる。部屋から外へ、どんどん光が放たれていく。

「見える？」

「え？」

「光が見える？」

昴くんが、私に聞いた。

「うん…。ものすごく奇麗できらきらしてて、あったかい…」

「ね？だから言ったでしょ？」

「…？」

「俺ら、いちゃついてるのが、地球のためになるって。こんなすんごい光が、地球を覆うんだ。影も、闇も、光で包み込んじゃうよ」

「そうだね…」

私は光を見ていた。どんどん部屋から宇宙空間へと、広がっていく光…。すごい…。愛し合うとこんなにも奇麗で、あったかい光が放たれていくんだ。

「愛はね。宇宙本来のエネルギーだから」

「…愛が？」

「幽体離脱したときに、感じたでしょ？」

「うん。ものすごい光になった」

「そう。あの光、あれが俺らの本当の姿。愛のエネルギーだよ」

「私たちの姿…。それも、存在すべての…だよね？」

「うん。みんな愛なんだ」

「……」

私は感動して、泣いていた。父も昴くんのお父さんも、この光なんだ。そう思うと嬉しかった。

「ひかり…。お父さんのこと、許せる？」

昴くんが、私に優しく聞いた。

「うん。お父さんのこと、愛してるもの…」

「うん…。きっと、それがひかりのミッションだね」

「え？」

「まだ、こっちの次元のひかりが表面に出てるのは、それが、ひかりのすることだからだと思うよ」

「私のミッション？」

「愛で、お父さんの中にある闇のエネルギー、包み込もう」

「…うん」

私は、涙を流しながらうなづいた。昴くんもきっと、一緒に光で包

んでくれる。そう確信していた。

『うん。ひかりと一緒に、光を出すよ』

『ありがとう…』

『え？』

『だって私の父は、昴くんのお父さんのことを…』

『こっちの俺はもう、それも全部許してるから。それも、ひかりが愛と光で俺と、親父を包みこんでくれたから親父も俺も、許せることが出来たんだ。だから、今度は俺の番。俺が手伝う番だよ』

『うん…』

昴くんと、しばらく布団に潜り込み、抱き合っていた。昴くんは私のおでこや、鼻や頬やあごにキスをしてきた。そして、後ろから抱きしめ、髪や首にキスをしてくる。

『わあ…、昴くんのキス攻めだ…』

私は、キスをされるたびに、ドキドキと胸を高まらせていた。

『だって、ひかりの全部が愛しいんだもん』

昴くんが、心でそう言った。その言葉に、また恥ずかしいような嬉しいような、照れくさいような気持ちになった。

『ああ…。大変、とけちゃうかもしれない。私…』

『え?とけちゃう?』

『ああ。これも聞こえちゃってるんだ…』

私はきっと、真っ赤になった。

『うん。耳まで赤いよ』

『わあ…』

すんごく恥ずかしくなった。

トントン…。

「昴…」

「悟さん?!」

「話あるんだけどいい?」

「あ…。ちょい待って!もうちょい待って!」

昴くんは、慌てて布団から出て、服を猛ダッシュで着ながら、

『ひかりは待っててね。俺、廊下に出て話してくるから』

と心で私に言い、ドアをそっと開け部屋を出て行った。

私は、そっと脱いだ服を布団の中に引き寄せ、布団の中で着るとべ

ッドを抜け出た。

『なんの話かな…』

話し声はしなかった。ベッドに座ったまま、私は昴くんが戻ってくるのを待っていた。

ガチャ…。昴くんがドアを開けた。

「ひかり…。あ、服着た?」

「うん」

「漆原さんから連絡入ったって」

「うん…」

私は少し不安になった。すると、黒い霧が出てしまった。

「あ…。どうしよう…」

昴くんは、その霧を光で消して、

「大丈夫、心配しないで。漆原さんがもう少ししたら、戻ってくる。そうしたら、車に乗って警察行こうって」

「警察?ど、どうして?」

「警察にお父さんが、ひかりが行方不明だと届出をした。それで、すぐにひかりの居場所がわかり、警察で保護した。そこに、お父さ

んが迎えに来る…っていうシナリオなんだってさ」

それなら、昴くんが誘拐したことにはならない！

「うん。家出ってことになってる」

「家出？」

「ひかり…、結婚が嫌だったり、お父さんの人形でいるのは嫌だって言ったろ？それをきちんとお父さんに言うチャンスだよ」

「……」

言えるだろうか？

「言える。それも、お父さんのことをちゃんと、愛してるって気持ちをもったまま、言える」

「え…？」

「もしそこで、憎しみや、恨みを持ったまま言ったら、お父さんには伝わりにくいかもしれない。でも、もうひかりの闇のエネルギーは浄化されてるし、大丈夫。ひかりのお父さんだって、本当は愛の存在なんだから」

「うん」

「愛じゃない存在なんて、この世界にいないからさ」

「うん…」

昴くんはにこって微笑んで、それから、私の上着を持ってきてくれた。

「はい…。俺は一緒に行けないけど」

「え?昴くん、来れないの?だって、光を送ってくれるって…」

「う〜ん。白河さんがね、さすがに俺が一緒にいたら、まずいだろうってさ。ひかりのお父さんのせいで、自殺した天宮の息子が一緒にいるのはおかしいって。俺、たたでさえ疑われてるから」

「そ、そうだよね…」

そりゃ、そうだよ。一緒にいたりしたら、昴くんが連れ去ったって思われちゃうかもしれないじゃない。

「わかった。私、行ってくる」

「うん。遠くにいても光を送る。それに、もし何かあったら、俺、すぐに魂で飛んで行くから。ね?」

「うん…」

私は、昴くんのあったかいエネルギーを感じて、安心した。

私は上着を着ると、昴くんと一階に行った。玄関には、悟さんって人やノエルさんがいた。

「ひかりさん。大丈夫よ。あなたなら、お父さんの闇のエネルギー

も消せるわ。あなたの中にいる高い次元のひかりさんも、心の奥から光を出してくれる。それに、昴くんは遠くからでも、あなたのことを感じて、光を送れる。私たちも光を、ずっと送っているからね」

ノエルさんが、私にそう言ってくれた。私は、黙ってうなづいた。

「あ。漆原さんの車が来たわ」

ノエルさんがそう言うと、玄関を出て行った。私と昴くんもあとに続いた。

「ひかり…。大丈夫だからね。漆原さんもそばにいるし、白河さんもいてくれるそうだから」

「うん…」

私もにこって微笑んで、昴くんにハグをした。

「行ってくるね。そして、必ず昴くんに会いに戻ってくる」

「うん。待ってるよ」

昴くんは、優しく私の髪にキスをした。

私は、漆原さんの車に乗り込んだ。運転席には知らない警察官がいて、助手席にも誰かが乗っていたが、

「みんな、高い次元の人だから大丈夫だ。安心して」

と漆原さんが、言ってくれた。

「じゃ、漆原さん、ひかりのこと頼みます」

昴くんはそう言うと、私の乗った車のドアを閉めた。バタン…。昴くんの顔を見ると、すごく澄んだ優しい目で、私のことを見つめながら、

『ひかり、愛してるよ』

と心で言って、光を送ってくれた。

『昴くん、私も…』

私からも光が飛び出した。

車は発進した。私は昴くんの姿が見えなくなるまで、昴くんのことを見ていた。昴くんは、ずっと手を振っていた。

…見えなくなると、いきなり不安が襲ってきた。まるで、親を見失った子どものように。でも次の瞬間、声がした。

『大丈夫。俺ならいつも、ひかりといる。ね?俺のこと、感じられるでしょ?』

『昴くん!』

私はほっとした。本当だ…。昴くんのエネルギーを、じかに感じることが出来る。

『行っておいで。お父さんのこと、まるごと愛で包みこんでおいで

ね』

昴くんの優しい、あったかい派動を感じた。

『うん、昴くん』

私はそう心で言うと、安心して背もたれによっかかり、ほっとため息をついた。

「昴と心で、会話が出来るの？」

漆原さんが聞いてきた。

「はい、できます」

「そうか、じゃ安心だ。昴、きっといつでもひかりさんと、いてくれるよ」

「はい」

漆原さんも、優しく微笑んでくれた。本当にみんな、優しいあったかい人ばかりだ。一緒にいて、安心できる。やっぱり、波動が高いからなのかな…。

車はどんどんと山道を下り、そして、高速に乗っかりスピードをあげた。車は警察の車で、時々無線から声がした。

「星野ひかりさんを、無事、保護しました」

助手席の人が、そう無線で連絡をした。その返事が返ってきて、し

ばらく応対が続いた。

「さて、わかってるよね？白河さんから言われたことを、守って対処してくれ」

漆原さんがそう言うと、運転していた人と助手席の人が、同時に、

「はい」

と答えた。

車は警視庁に到着した。私は漆原さんに、背中を押されながら警視庁に入っていった。そのあとを、助手席の警察官が続いた。

そのままエレベーターに乗り込むと、最上階へとエレベーターは昇った。

「白河さんがいるから。ひかりさん、初めて会ったようにちょっと演技してくれる？そこに、お父さんもいるはずなんだ」

「え？お父さんも？」

「警視総監に、じかに会いに来て、多分、今回のことを内密にして欲しいと頼んでるんじゃないかな」

「父は、そんな力があるんですか？」

「まあね。だけど、内密にも何も、無事保護されたんだし何もないと思うけどね」

「お父さん、私が家出したって信じてるんですか？」

「信じてると思うよ、前にもあったって言ってたとか」

「はい。その時には本当にすぐ、見つかってしまって連れ戻されたんです」

「じゃ、今回も家出だって、信じてるんじゃないかな」

「……」

私は、不安でドキドキしていた。

『昴くん』

『うん？』

『聞こえてるの？』

『聞こえてるよ。大丈夫。安心して』

『でも、私、演技なんてできるかどうか』

『白河さんに任せるんだよ。大丈夫』

『うん』

父の顔がまともに見れるだろうか…。父は嘘を見破らないだろうか。いろんな不安が私の頭の中をよぎるが、そのたびに、いや大丈夫って自分に言い聞かせた。私の心には、高い次元の私だっているんだ

から…。

エレベーターが着いた。漆原さんが、先に歩いて誘導してくれた。

「ひかりさん、大丈夫だから」

漆原さんは、小声でそう言った。

漆原さんはあるドアの前で立ち止まり、ノックをしてドアを開けると、

「星野ひかりさんをお連れしました」

と言いながら、お辞儀をした。

「入りたまえ」

白河さんの声がした。私は、漆原さんに背中を押され部屋に入った。

大きな窓ガラスの前に、テーブルとソファがあり、そこに腰掛けていた父が立ち上がった。父の隣には、兄もいた。それに、父の秘書も…。

「ひかり…」

父は、少し声を震わせ私を呼んだ。

「ひかり！お前なんでまた、家出なんか！」

兄が私の方に、早歩きで向かってきながらそう言った。

「まあまあ、お兄さん。落ち着いて」

白河さんが、そう言って席を立った。

「星野さん、無事で何よりですよ。無事で見つかったことが、1番じゃないですか？」

白河さんはそう言うと、私を父の前の席に座らせた。

父は立ち上がり、白河さんに、

「いや…。内密に動いて探してくれて、本当に感謝しています」

と頭を下げて言った。

「今回は、家出かどうかもわからなかったわけですから、あまり騒ぎ立てるのは良くないと、われわれも判断しました。昨今、あまりいいニュースは聞きませんでしたからね」

「はい…。でも、もし誘拐なら、犯人からの何か連絡が入ると思ったんですが、1日以上待っても来なかったものですから、白河さんの方に連絡を入れたわけです」

「いや、良かったですな。誘拐でなくて…」

「はい。私も逆恨みをされることも多いですから。本当に今回は心配しました」

「心配してたの？お父さん」

「当たり前だろう?それも、一ヶ月後に結婚を控えてるんだぞ、大事な…」

兄が私にそう言った。私は、父に向かって、

「私のことが、心配だったの?それとも会社?」

と聞いた。

「ひかり、そんな子どものようなことを言うもんじゃないぞ」

兄がまた口をはさんだ。

「私はお父さんに聞いてるの」

「ひかり…。私も同意見だ。お前の軽はずみな行動は、子どもじみてる」

「……」

私は黙り込んだ。黒い霧が飛び出てるのに気がつき慌ててしまうと、隣から漆原さんも、白河さんも光を出し消してくれた。

「まあ、みなさん、座りましょうや…。そうだ。お茶でも入れてくれるよう、頼んでくれないか?漆原くん」

「はい」

漆原さんはそう言うと、すっと静かにドアを開け、部屋の外に出て

行った。

「星野さん。私にも娘がいます。ひかりさんよりも少し年上の…。やはり、大事な娘ですよ」

「そうですか。白河さんにもいらっしゃるんですか」

「もし、うちの娘が家出をしたら、やはり探して連れ戻すでしょう。そして1番にすることは、家出の原因を聞くことだと思いますよ」

「…原因ですか？」

「原因がなくて、家出をしますか？」

「……」

「ひかりさんをお見受けしたところ、良識のある大人の女性と思えます。その方が家出となると、よほどのことではないですか？」

「白河さん、これは私たちの問題です。あまり、口をはさんでいただきたくないな」

「ですが、こうやって内密に探すのも、われわれも苦労したわけです。見つかって、はい、引き渡しましたでは、なかなかすまされないことですよ。小さな迷子を見つけたわけではないですからね」

「お礼はきちんとします」

「いや、それは受け取れません。ただ、こんなことが2度とないように、話し合われたらどうですか？こんなことを言うのは、なんで

すが、家出をするという年齢でもないでしょう。もう、大人です。何を行動するかもひかりさんが判断し、決定をしていい年齢ですよ？家を出て一人で暮らす、仕事を変える。結婚相手を自分で選ぶ…。すべて、ひかりさん本人が選択できる年齢でしょう」

「白河さん、私の家は、普通の家ではない」

「と言いますと？」

「会社を大きくするためには、娘の協力も得なくちゃならない」

「ほお…。娘さんは、会社の犠牲になってもいいと？」

「犠牲？何をおっしゃいますか？娘の幸せにもなるんです。私は、娘にあった、娘が幸せになる相手を見つけてあげたんですよ」

「あなたが？娘さんが選んだのではなく？娘さんの意思はどうなるんですか？」

「私の言うことをきいていたら、幸せになるんです」

「ロボットですか？」

「白河さん、言っていいことと、悪いことがありますよ。だいたいそんなこと警察が、あれこれ言うことではないのではないですか？」

兄が、父と白河さんの会話に入ってきた。

「そうですね。私が言うことではありませんでした。きちんとひかりさん、あなたから言うことですよ」

白河さんはそう言うと、私を優しく見て光を出してくれた。

『ひかり。ちゃんと、お父さんのこと愛してるって、光を出しながら言うんだ』

昴くんの声がした。

『自分の思いを、きちんと言うんだ』

『うん』

『俺も、光を送ってるから』

『うん…』

私は、昴くんからのあったかいエネルギーを思い切りそのとき感じて、胸が熱くなった。

「お父さん、私、結婚しない」

「ひかり？何を言ってるんだ。そんなことになったら、会社はどうなるんだ」

「今まで、ずっと我慢してた。したいこともしないで、恋愛だってしないで、会社のため、ううん、お父さんのために尽くしてきた。でもそれはずっと、お父さんに愛されたくてしてきたことだったの」

「…え？」

「私は子どもの頃、お父さんとお兄さんとお母さんと、動物園に行ったり遊んだりしたことが、1番幸せだった。あの頃に戻りたかった。あの頃のお父さん、大好きだった」

「……」

父も兄も、何も言えずにいた。

「お父さんのことが、大好きだった。だから嫌われたくなかったし、愛されたかった。だから、ずっといい子でいた。そりゃ、途中で家出もしたし反発もした。だけどまた戻ってきたのも、お父さんや家族を愛してたから。犠牲になってたのも愛してたから…」

「…ひかり？」

父は、驚きの表情を隠せないでいた。兄も同じだった。

「私、でもお父さんに愛されてないってそう思った。いつまでたっても、お父さんにとって私は人形なんだ。駒でしかないんだって。結婚も会社のためにするなんて、耐えられなかった。もう、何もかも嫌になって飛び出したの」

「……」

父は、黙って私を見ていた。私は涙を流しながら、話を続けた。

「わ、私が、もし死んでたらどうする？」

「死ぬ？」

「結婚も何もかも嫌になって、自殺してたら？」

「…まさか、そんなに愚かな娘だと思ってないよ」

「愚かって何？お父さんは、私のこと愛してるの？」

「…もちろんだ。だから今まで、ずっと…」

「何をしてくれたの？愛してくれてた？本当に大事に思ってくれてた？」

「もちろんだ…」

「自分のものって扱ってなかった？人形か、ロボットみたいに」

「ひかり！私はいつでも、お前や広輝のためを思って、頑張ってきたんだ。会社も広げ、大きな家に住み、いろんな勉強をさせ、留学までさせてあげた」

「そんなの私、望んでない。私はお父さんやお母さんと、一緒にいられることが幸せだった」

「そんなことで、幸せは得られない」

「ううん。十分、幸せだった。小さな家だって関係ない。そこで家族で笑いあって、一緒にいられて、それが1番の…」

「ひかり！父さんが頑張ったから、お前は贅沢が出来たんだぞ。父さんは、一代であんなに会社を大きくして」

そう兄にまで言われて私は、

「人のことを、死に追いやってまで？」

と、思わず、昴くんのお父さんのことを言ってしまった。言ってから、すごい黒い霧が出ていることに気がついた。でも、またすぐに白河さんが、光を出してくれた。

「失礼します」

漆原さんと婦人警官が入ってきて、お茶をテーブルに置いていった。それから、婦人警官が出て行き、漆原さんは何かを、白河さんに耳打ちしていた。

「うむ…」

白河さんは、小さくうなづいた。

「あ、失礼。気にしなでください。まあ、このご時世、いろんな事件がありましてな」

と、まるで他の事件の事でも話しているかのような、そぶりを見せた。でも、多分違うだろう。

「何が幸せかは、その人それぞれかもしれませんな」

白河さんは、落ち着いてそう言って、

「ですが、何が1番自分にとって大事だったかは、なくならないとなかなかわからないものです。それを失う前に気づけるかどうか…。

そこだと思いますけどね」

と続けた。

「……」

父は、黙って白河さんを見ていた。

「先ほど、ひかりさんが言ってましたね。もし死んでいたらどうしたか…。これがもし、誘拐だとして、ひかりさんの命がなかったら、あなたはどうしていますか?」

「……」

父は、しばらく黙って、

「許せないでしょうな。相手のことが…」

と憎憎しく言った。

「まあ、相手のことはおいておきましょうよ。それよりも、ひかりさんに対してはどう思いますか?」

「……」

「ひかりさんに、会いたくても会えなくなるわけです。もう、この世にいないわけですから。どうしますか?」

「どうも何も…」

父はそう言うと、ぐったりと肩を落とした。それから、少し宙を見つめた。

「…白河さん。あなた、娘さんの命が危ないとか、消息を絶たれたことがありますか？」

「いえ。ないですね」

「じゃあ、わからないでしょうな。その時の気持ちは」

「私は体験していませんから…。でも、そういった家族には会ってきましたよ。いろんな事件がありますからね」

「みなさん、子どもが死んで、正気でいられないんじゃないですか？」

「まあ、そうですね」

「ひかり。さっき、死に追いやったっていう話をしたね」

「うん…」

「自殺をしたのは、彼が弱かったからだ。私のせいでもなんでもないと、私は思っていたよ。いや、今もそれは変わらない」

「でも、実際にお父さんが…」

「確かに、彼は会社を手放した。でも、彼には家族もいた。それも捨てて、命を絶った」

「……」

「だが、彼の家族はどれだけ傷ついて、どれだけ私を恨んだか…。ひかり、お前がいきなりいなくなって、絶対にこれは彼の家族の仕業だと思った。探偵を雇ったら、昴って息子も消息を絶ったと連絡をしてきたから、彼がお前を誘拐したんじゃないかってね」

「……」

やっぱり、昴くん疑われてた。

「父親が自殺して、お前をさらうなんて逆恨みだ。だがもし、それでお前が殺されてたら、私はその息子を許さないだろう。同じように殺すかもしれない。正気ではいられないだろう。精神をおかしくしてるかもしれない」

「……」

「白河さん、わかりますか？たったの3日です。でも、生きた心地なんてしなかった。この私の気持ちが」

「…星野さん、失礼した。本当に失言でした」

白河さんは、頭を下げた。

「ひかり、父さんは、ずっと眠ることもできなかったんだぞ。お前が殺されてやしないか。電話があるたび、脅迫電話じゃないかって、僕だって恐れおののいていた。警察に知らせるのも、もし知らせたことが犯人にわかったら、それで殺しやしないか…。そりゃもう気が気じゃなくて、こうやって、白河さんに頼みに来たのも、決死の

覚悟だったんだ」

兄は、真剣な表情でそう言った。

「ひかり…。お前は私に愛されてないと思ってたと言ったが、愛さないわけはない。お前は大事な私の娘だ」

「……」

初めてそんなことを聞いた。

「……」

父はうつむいて、両手で顔を覆った。そして、

「ふう……」

と、長いため息をつくと、

「お前にとっての幸せは、家族が一緒にいることか…」

と小さく、つぶやいた。

「1番大事なものは、なくなってわかると言いましたね？白河さん」

「はい、言いましたよ」

「失う前に気づくかどうかだとも言いましたね」

「はい…」

白河さんは、深くうなづいた。

「私は、失いそうになって気がつきましたよ。そう…。家族です。娘の命です。今回、身にしみてわかりました。ただ、無事に帰って来てくれたら、もう1度娘に会えたら、そんなことばかりを思いました。冷たい体で帰ってきたりしないでくれ。あったかい、血の通った娘に会わせてくれ、そう神にまで祈りましたよ」

「お父さん…」

私は父の言うことを聞き、泣いてしまった。

「ひかり…」

父も目を真っ赤にさせていた。

「生きていてくれるだけで、本当はもうそれだけでいいんじゃないですか？」

漆原さんがそう言った。

「僕はいろんな事件を担当し、お子さんに亡くなられた親御さんも見てきました。みなさん、決まって言うのは、生きていてくれるだけで、それだけで良かったのに、そんな言葉です。特に自殺をしたお子さんの親御さんは、たくさんのことを求めすぎた、もっと、わかってやればよかった、もっと認めて、愛せば良かったって言ってます」

「そうだな…」

父は、下を向きながらそう答えた。

「父さん…」

兄は、何かを言いたそうにしたが、あとの言葉が続かないようだった。

「ひかり、結婚は嫌か?」

父が小さく聞いてきた。

「私、自分で結婚相手は選ぶし、人生も自分で選択していきたいの」

「そうか…」

父はそう言うと、しばらく黙り、

「じゃあ、ひかり、お前は何をしていきたいんだ?」

と聞いてきた。そんなことを父が聞いたのは、きっと私が生まれて初めてだろう。

「私は…、私は苦しんでたり、悩んでる人の何か、役に立てる仕事がしたい」

「…え?」

「それが何か、わかってないけど…。でも、この世界から、苦しみをなくしていきたいの」

「そんなことを考えていたのか？」

「ううん。つい最近思ったこと。自分がいろんなことを体験して、そう思ったの。優しさや、あったかさ、光や愛に触れたら人は変わる、そんなことを体験したから…」

「優しさや、あったかさ？」

「そう」

「お前、家出をして、どこに行ってたんだ？」

「ある人に会って…。その人から、たくさんのことを学んで…」

「誰だ？」

「それは言えない。でもその人たちと、何か人のためになることをしていきたい」

「ボランティアか？」

「わからない…」

「そうか」

父は、腕組みをすると、

「お前はお前で、人生をどう生きるか、ちゃんと考えたんだな」

と、そう言った。

「お父さん、家を出ることと会社を辞めること、許してくれる?」

私は思い切って、そう言ってみた。

父はしばらく黙って、私を見ていた。それから静かに口を開け、

「ちゃんと、生きて幸せになってくれるなら、それだけで満足だよ」

と、少し微笑みながら言った。

「父さん?本当にいいのか?じゃ、長田建設との合併は…」

兄が驚いて、父に聞いた。

「長田建設の社長にも、徹郎くんにもひかりの意思を伝えよう。もし、それで合併の話がなくなっても、それは仕方のないことだ。」

「父さん!?」

「こんなやり方をしないでも、会社を存続させることは出来るはずだよ、広輝。お前にそろそろ託そう」

「え?」

兄が驚いていた。

「ひかり…。時々は家に戻りなさい。そして、元気な顔を見せなさい。もし、疲れた顔をしていたり、病気にでもなっていたら、すぐ

に連れ戻す。いいね？」

「はい」

父は、ものすごく穏やかな顔をしていた。

「お父さん、ありがとう…。それから、お父さんのこと私大好きだから。遠く離れていたとしても、大好きでいるから」

私はそう言うと、父に向かって光を出した。その光はものすごく輝き、部屋中を包み込んだ。

「私も、ひかりのことを愛しているよ」

父の言う言葉から光が発せられ、私の光と混ざり合っていた。

父はそっと、私を抱きしめると、

「さあ、広輝、そろそろ行くとするか」

と言って、白河さんに深くお辞儀をした。それから、部屋のドアを開け、

「そうだ。お母さんは、お母さんの実家にいる。そこで、お前のことを心配して寝込んでるよ」

「え？！」

「行って、顔を見せて安心させてあげなさい」

と言い、部屋を出て行った。

「ひかりさん、よくお父さんに光を出し、包みこんであげられたね」

白河さんが、私の肩に優しく手を置き、そう言ってくれた。

「はい。ですが、先に父の方が、自分の思いを言ってくれたから…」

「昴くんと、ひかりさんの闇のエネルギーを浄化し、派動をあげたから、起きてくることも高い次元でのことになったんだよ」

「高い次元？」

「愛だ。ひかりさんのお父さんは、愛を感じ、それをひかりさんに伝えたんだ」

「はい…」

私は、思わず涙を流した。

『ひかり、良かったね』

昴くんの声がした。

『うん。昴くん、私、お母さんに会ってから、本山に戻るね』

『うん。待ってるよ』

昴くんはそう言うと、また、あったかいエネルギーを送ってくれた。

私は漆原さんの車で、母の実家に行った。母に会うと、母は泣いて、私を抱きしめた。

「ひかり、もう、こんな心配はかけないでちょうだい」

母にそう言われ、私は泣きながら謝った。そして、父に言ったことと同じように、会社も結婚することもやめ、人のために役立つことを、これからしていきたいと告げた。

母は、それに対して反対もせず、よくそれをお父さんに言えたわね、良かったわねと、そう言ってくれた。

「時々、お母さんにも会いに来るからね。私のことは心配しないでね」

そう言って、母の実家をあとにした。漆原さんは、本山に車を走らせてくれた。

「ひかりさん、本当に良かったね」

「うん…」

私はすがすがしい気持ちになっていた。そして、もうすぐまた、昴くんに会える喜びでいっぱいだった。

車が到着した。その音で、昴くんが屋敷をとび出してきた。

「ひかり！おかえり！！」

私は急いで車から降り、走ってくる昴くんのもとへと駆けて行った。
そして、昴くんに思い切り抱きついた。

「昴くん、ただいま」

今朝、別れたばかりなのに、しばらく会えていなかったような、そんな感じもして、昴くんに会えてものすごく嬉しかった。

昴くんは、私をギュって抱きしめたまま、

「良かったね、ひかり。わかってもらえて、本当によかったね」

って優しく言ってくれた。それから昴くんに肩を抱かれて、屋敷の中に入っていった。

大広間に行くと、そこにはノエルさんたちがいて、

「おかえりなさい。父から連絡が来てました。よかったですね」

と優しく出迎えてくれた。

「はい、ありがとうございます」

「雨降って、地固まる…かな？」

悟くんがそう言った。

「さあ、これで、次のミッションに移れますね」

ノエルさんが、私と昴くんにそう言った。

「次の？」

「そう。多分、あなたたちが1番の適任です」

「え？」

私と、昴くんは同時に聞き返した。

「闇を光で包む…。闇すら愛せるあなたたちでなければ、できない使命です。逆に言えば、闇を光で包むことがあなたたちの使命だったんです」

「闇を光で包む…？」

「闇と戦っては、闇は消えません。逆に拡大してしまうでしょう。火に油を注ぐようなものです。闇を消すには、光で包むことです。それは、あなたたちなら、理解できると思いますよ」

「はい…。そういう経験は、十分しました」

昴くんが、真剣なまなざしでそう言った。

「そう。今までの体験も、これからのミッションのために起きていたこと…」

「はい。それもわかります」

「父が言ってました。1番のタイミングで来る。焦ることはない。これから起きてくることを、そのまま受け止め、ミッションを遂行

してください。それまでは、くつろいでいてください」

「はい…」

私と昴くんは、立ち上がり部屋に戻った。

「ひかり…」

「え？」

「何が起きても、すぐ近くに俺はいるよ。そして、いつでも、どんなひかりも愛してるよ」

「うん。私も、昴くんのこと全部大好きだよ」

私はそう言って、昴くんにキスをした。

「あれ？ひかり？高い次元のひかり？」

「うん。なんか、混ざり合ったみたい。いつの間にか…」

「そう…。そっか。ミッションをクリア出来たんだね。それで、混ざり合ったのかな？」

「…昴くん」

私は昴くんに抱きつくと、

「ん？何？」

と昴くんは、優しく聞いた。

「大好き、大好き、大好き！」

私はそう言って、ギュって抱きしめた。

「え？」

昴くんは、ちょっと驚いてから、

「う。うん。俺も…」

って言った。

「あ、昴くん、照れてる？」

「俺？照れてないよ」

「うそうそ～。照れてる。耳、真っ赤だよ？」

「これは寒かったからだよ」

「なんで～～？なんで、自分が照れてることを、認めないかな。素直じゃない～～」

「うっせえや。ひかりも素直じゃない～～。こっちの次元のひかりの方がずっと可愛いや」

「ふ～～んだ。こっちの次元の昴くんだって、もっとクールでした」

「あ、そう？クールな方がいいなら、こっちの次元の俺になってやろうか？」

「じゃ、私も、こっちの次元の私になるよ」

「んじゃ、せいのでなる？」

「いいよ！」

「せいの！！」

私は少し、心の奥にひっこんだ。こっちの次元の私は表面に現れた。

昴くんは、ちょっと表情が変わった。

『変わったの？』

『変わったよ。ひかりは？』

『私は、ひっこみました～～』

そう心で言うと、表面に出た昴くんは、

「あ～あ。しょうがねえな。高い次元の俺らって、まるでガキだね」

とクールに言い、

「こっちの次元の昴くんなの？」

と、こっちの次元の私はちょっとびびっていた。

「ひかり、大丈夫だよ。取って食いやしないから」

昴くんはそう言うと、そっとキスをして、

「ね？優しくするからさ」

と、もう一回優しくキスをしてきた。こっちの次元の私はそのキスに、ドキドキしていた。

『ほら、こっちの次元のひかりの方が可愛い』

『わ～～るかったわね』

「喧嘩はいいから…。ちょっと、黙っててくれる？うっさいよ」

この次元の昴くんに、言われてしまった。

私も昴くんも、静かに黙った。それから、表面に出ていた彼らと混ざり合い、

「やっぱり、どんな昴くんも大好き」

と私が言うと、

「俺もだよ。ひかり。どんなひかりも可愛いや」

とまたキスをして、昴くんはそう言った。

さあ、次のミッションは、どんなことが起きてくるのか…。でも、

私たちは二人一緒なら、何が起きても怖くない、そんなことを思っていた。

そして、いきなりその日の夜、事件は起きた。私の次元では、こんなこと映画かドラマか、マンガの世界での出来事だ。闇からの宣戦布告とでも言おうか…。

２０１２年に向けて、本格的にこの次元では、変動が起き始めていた。白河さんは、警察に泊まり込むことになり、漆原さんも呼び戻された。

ノエルさんは、私たち全員を呼び、瞑想をみんなでして心を鎮めた。

「今から、起きてくることも、やはりシナリオにあったことでしょう。これすら、アセンションのために起きていることだと思っています。なので、みなさん、動揺しないでください」

「はい…」

「この次元での出来事は、他の次元に影響されます。この次元の闇のエネルギーが浄化されるならば、他の次元の闇も、浄化されていくでしょう」

「……」

ノエルさんは、とても穏やかな表情だった。

「戦うのではなく、包み込む…。私たちは、愛と光の存在ですから」

「はい…」

すべての人の、心の中にある闇…。それが開放され、光に包まれる時がやってきたのだ。恐怖のようにも見えて、それも、浄化されるためのもの…。

さあ、昴くんと、光と愛で包みに行こう。私たちのミッションを遂行しに行こう。愛と光の地球へ、導くために…。

第４部　ミッション１　潜入（前書き）

ここから、第４部の始まりです。

第4部　ミッション1　潜入

私は母の実家から漆原さんの車に乗り、本山に戻ってきた。昴くんに迎えられ、二人で抱き合った。そして、次なるミッションを遂行するときが来ていることを、なんとなく感じていた。

ノエルさんや他のみんなと共に、夕飯を食べた。食堂はなごやかなムードに包まれていた。私も昴くんも、こっちの次元の私たちとすっかり混ざり合い、なるべく高い波動の私たちでいるようにした。いつの間にか、珠代ちゃんも高い次元の彼女が目覚めていて、陽平くんと楽しそうに嬉しそうに会話をしていた。

夕飯が終わり、昴くんが悟くんと話をしている間に、珠代ちゃんは私の横に来て、

「星野さん。こっちの次元で私、いろいろと怖い思いさせてしまって、すみませんでした」

とあやまってきた。

「え？ううん。全然あやまらなくってもいいんだよ」

と言ってもまだ、珠代ちゃんは申し訳なさそうな顔をしていた。

「それよりも、陽平くんとすっかり打ち解けたみたいだね？」

と言うと、珠代ちゃんの顔つきがぱっと変わった。

「そうなんです。陽平、こっちの次元で私と昴くんが付き合ってた

のを知ってから、ちょっとやきもちっていうか、嫉妬をしてしまって、それで、私のことを好きだって自覚したって言ってくれて」

「え？そうなの？」

「私が闇のエネルギーにのまれて、低い次元で消えてしまったっていうことを陽平が知って、慌てて助けに来てくれたみたいで…。いつの間にか私って存在が、大きくなってたってことにも気づいたって言ってました」

「そう。良かったね。珠代ちゃん、陽平くんのこと好きだったんだもんね」

「はい…。嬉しかったです。それに、こっちの次元の私も、気持ちが変わっていったんです」

「え？」

「陽平が、一緒に苦しみを味わってくれて、それなのに私のこと守ってくれようとしたり、光で包んでくれようとしてくれたのを知って、すごく心が満たされたっていうか、安心できたっていうか…。嬉しかったみたいです」

「そう…。良かった…」

私は心底ほっとした。珠代ちゃん、良かったねって心からそう思っていた。珠代ちゃんの顔は、すごく穏やかだった。そこへ、陽平くんが来て、

「珠代、そろそろ部屋に戻らない？」

と聞いてきた。

「うん」

珠代ちゃんは嬉しそうにうなづくと、私にぺこってお辞儀をして、陽平くんと食堂を出て行った。

「なんか、良かったですね…」

横で私たちの会話を聞いていた葉月ちゃんが、こっそりとそう言ってきた。

「うん…」

「もうすぐ年が明けるね。みんなで一緒にカウントダウンでもする？」

漆原さんが、私たちの席の方に来てそう言った。

「あ。いいですね。それ！」

葉月ちゃんが、嬉しそうにそう言った。

「昴くん、悟くんもどう？みんなでカウントダウンして、新年のお祝いをするっていうのは？」

と、ちょっと離れた席で話し込んでいた昴くんと悟くんに、漆原さんが声をかけた。

「え？」

二人同時に、少し驚いていた。

『みんなでか～。俺、ひかりと二人でカウントダウンしたかったんだけどな…』

昴くんが、心の中でそうつぶやいた。

『でも、みんなでお祝いするのもよくない？』

私が心でそう言うと、

『う～～ん。だけど、二人で抱き合って、新年を迎えたかったんだけど…』

『え～～？』

『え～～って、何それ？あ。呆れてる？あ。俺のことエッチって思ってる？！』

『思ってないよ～～』

『思ってたじゃん』

『そ、そうかな。思っちゃったかな…？』

『ふんだ。いいよ、別に…』

あ、またすねた…。

その時、食堂の電話が鳴った。ノエルさんが電話に出るとしばらく話して、

「漆原さん！父から電話。すぐに署に戻ってくれって」

と、だいぶ慌てた様子でそう言った。

「え？なんかの事件ですか？」

「ええ。とにかく、電話に出てくれる？」

「はい」

漆原さんは、ノエルさんから受話器を受け取り話し出した。

「どんな事件ですか？」

と悟くんが聞くと、

「予告状…。メールで届いたらしいの」

とノエルさんが言った。

「予告状？ってなんの？」

昴くんがそう聞いた。ノエルさんは少し顔をひきつらせ、

「それが…、無差別殺人の…」

と答えた。

「ええ?!」

私たち、そこにいた全員が驚いてしまった。

「む、無差別殺人って…?テロか何か?」

「２０１２年に、地球は滅びる。地球は、われわれ人間のことを怒り嘆いている。神がとうとう私たちを、裁くときがきた。それまでにも、各地でいろんなことが起こるだろう。今度の無差別殺人も、神の怒りの現われなのだ。そして、２０１２年には、地球全部が破滅するだろう」

漆原さんが、電話を置いてそう言った。

「え?何言ってるんですか?漆原さん」

昴くんが驚いてそう聞いた。

「今、白河さんから教えてもらった。そういうメールが届いたんだそうだ」

「どこに?」

「警視庁にだ」

「それが予告状?」

「ああ…。一回目の予告状」

「一回目？」

「１０分ほどしてまた、メールが来たらしい。それには、近いうちに無差別殺人が起きる。とだけ、書いてあったらしいんだ」

「……」

私たちは、息を飲んだ。

近いうちにって、いつ…？それも、どこで…？

こんなこと映画やドラマの中のことみたいで、現実に起きたりするの？私は、信じられなかった。

「これが、まさか次のミッション…」

昴くんが、ぼそって言った。

「そうなのよ。昴くん。実は、メールは今までにも届いていたの」

「え？」

「でも、こういった内容は初めて。今までのはただ、２０１２年に地球は滅びるとか、われわれは地球を救う救世主だとか、そんな内容のものだったの」

「それ、誰からなのか、わかってるんですか？」

「ええ…。父は、これは海藤玄がいる教団だろうって言ってるわ」

「海藤玄…」

「そう。この次元より高い次元では作家で、父のことを落としいれようとしていた人よ」

ノエルさんは、少し暗い表情でそう言った。

「あの、黒い霧の出ている本を書いてた、作家ですよね」

葉月ちゃんがそう言った。

「ええ…」

ノエルさんは、うなづいてから続けた。

「でもね…、もっと高い次元では父の親友なの」

「え?!」

私たちはみんな、思わず驚いて声をあげた。

「ただ、ここ数年病を患ってて…。どうも、低い次元で闇のエネルギーとひかれあってるから、その影響が高い次元でも出ているんじゃないかって、父が言ってたわ」

「……」

私は、驚きを隠せなかった。次元が違うと、そんなにもいろいろと起きてくることが違うのか…。いや、それは私も体験済みじゃない

か…。

だけど、高い次元の白河さんは辛くないだろうか。高い次元では親友なのに、この次元でも、ちょっと高い次元でも、まるで敵同士になってしまってるなんて…。

『それ、見えてる世界での話だよ、ひかり』

『え?』

昴くんが心で話しかけてきた。

『魂では多分、仲がいいんだ。だから敵になったり、悪役演じて、この世界に何かを起こそうとしてる』

『起こす?』

『アセンションのためにね』

『わざわざ、そんな恐ろしいことをしてまで?』

『俺だってかなり危なかったよ?ひかりのこと、殺しかけてたんだから』

『そうだけど…、でも…』

「ひかりさん、昴くん、いよいよミッションが遂行されるときが来ました。今回の相手は相当な闇のエネルギーを抱えています。でも、父はその闇を浄化したいんです。それが出来たら、高い次元の海藤さんは、病から救われるでしょう。それだけでなく、地球もかなり

の闇のエネルギーを浄化できると思います」

「はい…」

昴くんは神妙な顔つきになり、大きくうなづいた。私はそれを聞き、正直戸惑った。いや、怖くなっていた。私たちにそんなミッションを、遂行できるのか…。そんな力がいったい、あるのか。

『ひかり…。俺だって、明日のこともわからない。だけどね…』

『ミッションなんだよね』

『うん。きっと宇宙の力が働く。絶対に大丈夫だ』

昴くんはそう心で言いながら、私の手をぎゅって握った。私も強く握り返して、

『そうだね…』

とうなづいた。

漆原さんはすぐに、署に戻った。食堂にいた全員に緊張が走ったが、ノエルさんが、

「みなさん、私たちは愛と光で闇を包み込んでいきましょう。闇と戦っては、火に油をそそぐようなものですから」

と穏やかにそう言った。みんなは、黙ってうなづいた。

とりあえず、署に戻った漆原さんや、白河さんからの連絡を待つこ

とにして、私たちはそれぞれの部屋へと戻っていった。

「ひかり、なんかカウントダウンしてる場合じゃなくなっちゃったね…」

昴くんが部屋に入ってから、そう言った。

「何をしていったらいいのかな…、私たち」

「まったく見当もつかないけど…。だけど、流れに任せておこうよ」

「うん」

昴くんはそっと私を抱きしめて、

「大丈夫。大丈夫だよ、ひかり」

と耳元でささやいた。

「うん…」

私は、ぎゅって昴くんを抱きしめた。

「ひかり、今、宇宙船に行ってみない？」

「うん」

私たちは、抱き合いながら同化した。そしてそのまま、体を抜け宇宙船へと一気に飛んだ。宇宙船には、美しい地球が映し出されていた。

「奇麗だね」

「うん」

「一緒に、光を送ろうよ」

私は黙ってうなづいた。そして昴くんの魂と一つになり、地球へ光を送った。地球はその光で、包まれた。

私たちは、すべての存在と一つになり、そして無限で、静寂な大きな意識になっていた。そこに在るのは、愛…。愛のエネルギー。そのエネルギーを、すべてで感じ取り、私たちは自分の体へと戻ってきた。

「宇宙と一体化してたね、俺ら」

「うん。すごい愛のエネルギーを感じた」

「愛そのものになってたよね。いつも、この愛のエネルギーを感じながら、ミッションを遂行しようよ、ひかり」

「そうだね…。昴くん」

また、私たちは抱きしめあった。きっと、大丈夫。だってその、海藤玄って人もまた、愛の存在だから…。私も昴くんも、そう同時に思っていた。

静かな夜だった。お屋敷に人があまりいないこともあったが、みんなが自分たちの部屋に戻り、固唾をのんで待っていた。

そして、２０１０年が明けた。時計の針が１２時を回ったとき、昴くんが心で、

『あ、新年が明けたよ』

と言ってきた。

『うん、でもなんだか、おめでとうって言いにくいな』

「そんなことないよ、ひかり。絶対にすべてがいい方向に向かってるんだ。だから、おめでとうでもいいんだよ」

「そうだよね」

「ひかり、明けましておめでとう。今年もよろしくね」

昴くんはそう言うと、にっこりと微笑んだ。最高の笑顔を見せてくれた。

「うん、おめでとう。今年もよろしくね」

私もそう言うと、昴くんがキスをしてきた。

「抱き合いながらのカウントダウンは無理だったけど、二人だけで、新年明けるときを迎えられちゃったね」

って昴くんは、ちょっといたずらっぽい目つきでそう言った。

その時、部屋の電話が鳴った。

「はい」

すぐに昴くんが出た。顔つきはいきなり変わり、真剣な表情だった。

「はい、わかりました」

「どうしたの？」

「ノエルさんが、上着着て荷物もって、食堂に集まってくれって」

「……」

いよいよ、私たち動き出すのかな。

昴くんと食堂に行くと、次々にみんなが集まってきた。

「漆原さんから連絡が来たわ。どうやら、教団にいる仲間から連絡が来たようです」

「教団に、仲間？」

悟くんが驚いて聞いた。私もびっくりした。

「ええ。今、３人の仲間が高い次元から来ています。ところが、この次元での意識が強いようで、一人しか目覚めていません」

「そうなんだ。あ、じゃ、その３人ってのは高い次元では仲間なんだ」

昴くんがそう言うと、

「…お子さんたちです」

とノエルさんが言った。

「え？誰のですか？」

悟くんが聞いた。

「海藤さんのお子さんたちなんです。お父様がご病気で、低い次元のお父様の闇を浄化できたら、病気も治るかもしれないって、低い次元にやってきているの」

みんな、黙って聞いていた。

「1番上のお子さんだけ女性。今、目覚めたのは1番年下のお子さんで、確か、まだ22歳くらいだと思うわ」

「あの、その人たちもやっぱり、ミッションを持ってるんですか？」

私が聞くと、ノエルさんは、

「ええ」

とうなづいた。

「下のお子さんは、あ、名前は海藤夏樹くんといいます。父のしていた座禅の会に来て、すぐに目覚めたわ。それから、2番目のお子さんの海藤春彦くん、彼のことを夏樹くんが連れてきて、彼もまた

目覚めた。最後に来たのは、1番上のお子さんの海藤冬美さん。やはり一回の座禅だけで、目覚めた。とても高い波動の兄弟よ。お父様の海藤玄さんは、目覚めてはいないけど、すごく温厚な優しい方」

ノエルさんが説明をしてくれた。

「そんな家族が、この次元だと教団を？」

葉月ちゃんがそう言うと、

「俺だって、この次元じゃ、ひかりを誘拐したりしたよ」

と昴くんが言った。

「え？あ…。そうか…」

葉月ちゃんはそう言うと、黙り込んだ。

「この次元の彼らの意識が、強いんですか？」

悟くんがノエルさんに聞いた。

「ええ。２０１２年、人間に天からの罰が下る。それを信じ込んでるようなの。そして、その神の仕事を自分たちがしているんだと、この次元の海藤玄さんは言ってるわ」

「……」

私たちは黙っていたが、それぞれが、心で会話をしてるようだった。

昴くんも、私に心の中で話しかけてきた。

『ずいぶんと、思い込みが激しいみたいだね』

『え？』

『幻想にどっぷりとつかりこんで、何が幻想で何が真実かも、見失ってる』

『幻想…』

『自分たちには使命があるって、そこは気づいてると思うよ。でも、まったくその使命を思い出せてない』

『そうなんだ…』

『あ、いや、待てよ』

『え？』

『アセンションのためにすべてが起きてるなら、やっぱり使命を遂行してるのかな』

『待って…。だって地球は破滅もしないし、天は人間を裁いたりしないよ』

『そうだよ。それが幻想だ。そういうことすべてが、幻想でしかないんだってことを、多くの人が知らなくっちゃいけないんだ。そのために起きてることかもしれない』

『どういうこと？』

『宗教ってさ、海藤玄の教団だけじゃなくって、けっこう神が人間を裁いたり、こういうことすると、救われないですよとか、地獄に落ちますよとか、自分の子孫に返ってきますよとか、いろんな脅しがあるでしょ？』

『脅し？』

『そう。怖がらせて、信仰させようとする。でも、そんなのまったくないんだ。だって、神はっていうか、宇宙はさ、どんな俺らも受け止めて、まるのまま愛してくれてるんだから。それはね、無償の愛なんだ。こうだからいけないとか、こうしないと裁くとか、そんな見返りなんて求めちゃいない。自分を信じようが、信じなかろうが、そんなこともどうでもいいこと。どんな人もまるごと包み込み、愛してるんだから』

『そっか…』

『それに、そういう無償の愛の存在なんだよ、みんな』

『だって、私たちって、宇宙そのもの…』

『そ。大いなる存在なの。みんなね。み～～んな一つの大きな意識』

『じゃ、神が罰を下すなんて、自分が自分に罰を下してるようなもので』

『うん。そうなんだよ。そんなこと絶対、したりしないのにさ』

「話の続きをしてもいいかしら」

ノエルさんが、私たちが心で会話をしている間黙っていたが、口を開いた。

「あ、はい」

みんな、うなづいた。

「夏樹くんからの連絡ではね、いきなり、多くの人がいるところはねらわないようなの。その前に、天からの罰をみんなに知らしめるために、前触れって言うのかしらね。そういうことをするようなのよ」

「多くの人がいなくても、まさか、死人が出たりしますか？」

悟くんが聞いた。

「……」

ノエルさんが、しばらく黙ってから、

「かもしれない…。それをどうにか、阻止しようって父も、そして夏樹くんも動いてるわ。もうすでに」

「どうやって？」

「まず、春彦くんと冬美さんが目覚められるよう、今日の朝日を二人に浴びさせるって夏樹くんが言ってたわ。それから、無差別殺人をしそうなところを、夏樹くんが父に教えてくれたから、もう警察が配備についてるわ」

「じゃあ、俺らは何をしたら？」

「教団に行って欲しいの」

「教団に？」

「夏樹くんと会って、協力して阻止して欲しいのよ」

「ど、どうやってですか？」

「４人くらいは潜入して欲しい。それから残りの人は、警察の方に協力して欲しいの」

「…４人で潜入？」

「夏樹くんが、よく友達や知り合いを、教団に勧誘して連れていってたみたいで…。あ、こっちの次元の夏樹くんだけどね。それで、夏樹くんと年が近い人が、夏樹くんの友人のふりして潜入して欲しいのよ」

「俺、行きますよ」

悟くんが言った。

「じゃ、私も」

葉月ちゃんがそう言うと、

「俺も行きます。」

と、陽平くんも手を挙げた。

「じゃ、私も！」

珠代ちゃんも手を挙げたが、同時に、昴くんも手を挙げていた。

「じゃ、5人で潜入してくれるかしら」

「え？」

ノエルさんの言葉に、私は驚いた。

「昴くんも行くの？」

「うん」

昴くんはうなづいた。

「じゃあ、私も」

「ひかりさん、今回は夏樹くんと年の近い彼らに行って貰いましょう」

ノエルさんがそう言った。

『い、嫌だよ。昴くんと離れるの…』

『大丈夫、俺ならいつでも、ひかりにエネルギー合わせてるから』

『でも、手の届くところにいて欲しいの』

『心配？』

『そうだよ、心配だよ。すぐそばにいなきゃ心配だよ、不安だよ』

『大丈夫だよ、ひかり。全部うまくいくから』

『でも…』

「その無差別殺人、実行するのはいつなんですか？」

悟くんが聞くと、

「明後日よ」

とノエルさんが言った。

「明後日？じゃ、今日入れて、３日だけしかないってこと？」

「ええ。明後日の夕方の予定」

「……」

しばらく私たちは黙っていたが、

「わかりました。絶対に阻止しましょう」

と悟くんが、真剣なまなざしでそう言った。

不安だった。昴くんがそばにいない。昴くんにもし、何かあったらどうしようか。すぐそばで、昴くんのことを守りたい。

『大丈夫だよ、ひかり。悟さんたちもいるんだから』

『でも…』

でも、潜入っていったい何をするの？

「潜入ってことは俺ら、信者になりすますってことですか？」

昴くんがノエルさんに聞いた。

「ええ。夏樹くんの勧誘を受けて、教団に入ったってことにする予定よ」

「5人も？」

「ええ。そのくらい、いきなり入ることはめずらしくないようよ」

「そうなんだ…」

昴くんが、少し驚いていた。

「でも、こんな時期で、怪しまれないですか？」

悟くんが聞いた。

「夏樹くんたちは、教祖の子供でしょ？信者も一目置いてるの。けっこう今までも勧誘を成功させて連れてきてるし、怪しむ人はいな

いと思うわ」

「ノエルさん、なんでそんなことまで知ってるんですか？」

葉月ちゃんが、聞いた。

「夏樹くんや、お父さんから聞いてるから。私もね、今教団に入ったりしたら、疑われないかってそう思ったのよ。でも、夏樹くんが絶対大丈夫だって」

「そうですか…」

悟くんが、静かにそう答えた。

「夏樹くんが、朝日が昇る前には会いたいって言ってたわ。これから明け方までに、向こうの本部に着くよう、ここを出てくれる？」

「はい」

「あなたたちに光を出してもらって、それと同時に朝日を浴びることで、冬美さんと春彦くんも目覚めると思うわ」

「はい」

5人はうなづいた。

「じゃあ、悟くん、車を出してくれる？」

「はい」

悟くんはそう言うと、車のキーを上着のポケットから出した。

「本部の地図を、夏樹くんからパソコンで転送してもらったの。それを印刷したわ。これよ」

ノエルさんが悟くんに渡した。

「はい、わかりました」

「それじゃあ、気をつけてね」

「はい」

5人は荷物を持って、玄関に向かった。

『昴くん…』

『大丈夫！安心してて、ひかり』

すごく不安だ。でも、不安は黒い霧を出す…。それをすかさず、昴くんが光で消してくれた。大丈夫。昴くんなら、大丈夫…。私は必死でそう思った。

玄関で5人は、

「行ってきます」

と言って、暗い外へ出て行った。

「さあ、残りのみんなにも、いろいろとしてもらうことはあるわ」

ノエルさんはそう言うと、指示を出し始めた。

「ひかりさんと流音さんには、漆原さんと共に行動して欲しいの。警察にいる仲間が、もう集まってる」

「はい」

「今回、無差別殺人が起きるだろう場所に、もう彼らは行ってるわ。相手側がどう動いてくるかを見張ってる」

「場所はどこなんですか？」

「高級レストラン」

「え？」

「ホテルの最上階にある」

「なかなか人が出入りできないんじゃないですか？」

「そうよ。もしかしたら、お客として来るのかもしれないし、従業員が教団の仲間かもしれない」

「……」

「ひかりさんと流音さんには、ホテルに泊まってるお客として行って欲しいの」

「はい」

「今日、昼に行ってみてくれる？ホテルの従業員に仲間がいるわ。それに警察が潜入もしてる」

「はい…」

私と流音さんは、同時にうなづいた。

「私はここにいて、夏樹くんたちからの連絡を待ちます」

「じゃ、私とひかりさんも、そろそろ出たほうがいいですよね？」

「ええ。途中で漆原さんと落ち合っていろいろと、打ち合わせをしてね。連絡を取るのは、流音さん、任せるわ。心で漆原さんと交信してくれる？」

「はい。わかりました」

「車は、榊さん、運転していって。彼女たちを漆原さんと合流させたら、いったんまた、ここに戻ってきてくれる？」

「はい」

榊さんというのは、私と同じくらいの年の男性で、この次元でノエルさんの手伝いをしてる人だ。高い次元の榊さんがこの次元に来ていて、もう目覚めている。

「じゃあ、すぐに行きましょうか」

流音さんがそう言った。

「はい」

私は鞄を持った。そして、駐車場に向かった。

『昴くん…』

呼んだけど、返事がなかった。昴くんのエネルギーに合わせてみると、緊張感が漂っていた。ああ、昴くん、緊張しているんだ…。

私と流音さんは、車に乗り込んだ。そして榊さんがすぐに発進させた。

「漆原さんが、交信してきたわ」

流音さんが言った。

「まず警視庁の方に来てくれって。そこで白河さんから話があるそうよ」

「はい。じゃ、警視庁に向かいます」

榊さんがそう返事をした。

車内に緊張が走る。私も榊さんも流音さんも黙っていた。流音さんは、漆原さんと多分、話をしてるのだろう。

「ひかりさん…」

「え?」

「漆原さんがね、昴くんのことは心配ないって」

「え？」

「悟くんもいるし、それに夏樹くんっていうのは、かなりの高い波動の持ち主で、どうも、悟くんと同じ星の出身みたいよ」

「そうなんですか…」

「うん。だから安心して、自分のミッションを遂行して欲しいって」

「自分のミッション？」

「ホテルの泊り客としての潜入。もしかするとそこで、教団の誰かと会うかもしれないし…。何があるかはわからないけど、黒い霧を見たら光で消す。それだけは忘れないで。だから、いつでも光を出せる状態でいてくれって漆原さんが言ってる」

「はい」

そうか。私には私のミッションがあるんだ。うん、しっかりしなくっちゃ…。

「あの、私が昴くんのこと心配してるの、わかったんですか？」

「さっきね、昴くんが出て行くとき、ひかりさん、黒い霧を出してたでしょう？それで、漆原さんにそのことを今、心で話してたの」

「大丈夫ですよ。俺、二人のことをずっと見てましたけど、すごい

光で闇を包み込んでしまう力を持ってる人たちだなって、感心していたんです」

榊さんがちらりと、バックミラーで私を見ながらそう言った。

「お二人の光なら、どんな闇にも負けませんよ」

「ありがとう」

そうだよね…。

『ひかり・…』

『昴くん?』

『今どこ?』

『車の中、これから警視庁に行くの』

『え?どうして?』

『白河さんが話があるって。それからホテルのお客として潜入する』

『ホテル?どこの?』

『明後日、無差別殺人をする予定になってるホテル』

『だ、大丈夫なの?』

『うん。流音さんと行くから。漆原さんもいるし、もう警察の仲間

が潜入してるんだって』

『そっか。わかった。でも絶対に明後日までには、阻止するからね』

『うん…。昴くんは今、どこ?』

『もうすぐ、着くみたい。つい今しがた、ノエルさんから電話があって、夏樹さんと合流する場所教えてきてくれた』

『そう…』

『ひかり、何かあったら、すぐに俺に言ってきて。わかった?』

『うん』

『じゃあね』

『うん。気をつけてね』

……。昴くんの声がしなくなった。

明後日というと1月3日だ。まだお正月気分で、みんなゆっくりしている頃だ。ホテルに泊まり、レストランで食べる客ってどんな人たちなんだろうか。

それから1時間して、私たちは警視庁に着いた。入り口で漆原さんと合流して、最上階に向かった。

「やあ、ひかりさん、流音さん」

白河さんの部屋に通されると、白河さんが待っていた。

「こんばんは」

「こんな夜中に呼んですまないね。少しは休んで欲しいから、早めにホテルにチェックインできるよう手配は済んでいるよ」

「すみません」

「その前に、ちょっと打ち合わせをしておきたくて呼んだんだが…」

「はい」

「ホテルに潜入してもらうのは、ホテルの従業員か、泊り客に教団のものがいないかを、探って欲しいというのが1番の目的だ。それは今も、何人かの仲間が潜入して見てはいるが、今のところ見つかっていない」

「どうやって、探るんですか?」

「黒い霧を発してるかどうかだ。それから、彼らはきっと実行する前に、店に必ず様子を見に来ると思う」

「探り当てることが、できるでしょうか?」

「うむ…。なんとも言えないが…。だが、ここにリストがある」

「リスト?」

私が聞くと、

「夏樹くんから教団の信者のリストをもらっていてね。顔写真も載っている。丸がついているのが、今回、関わってるものたちのようだ。夏樹くんも、現場で誰が動くかは把握できていない。それを指揮してるのは、海藤玄本人らしい。夏樹くんは、本部でその後の対策を練ったり、本部での指揮をとる役目らしい」

「……」

「今回のレストランでの指揮をしてるのは、海藤玄だが、春彦くんも手伝っているらしいから、彼が目覚めたらかなり情報を得られるんだが…」

「そうですね。じゃあ、朝日が昇れば、ずいぶんとことが進むんじゃないですか？」

漆原さんがそう言った。

「うむ。彼らが目覚めてくれたらな…」

「……」

私たちは黙り込んだ。それは、昴くんたちに任せるしかない。

「じゃあ、漆原くん、そろそろ流音さんたちをホテルまで、送ってくれたまえ」

「はい」

漆原さんはうなづくと、私と流音さんを連れて部屋を出た。

「流音、ここから車ですぐだから、ホテルに着いたら少しでも寝るといいよ。レストランは昼、ビュッフェをしている。その時間にゆっくりとレストランで昼食をとるといい」

「わかったわ」

「ひかりさんも、ゆっくり休むんだよ？」

「はい…」

漆原さんにそう言われて、私はうなづいた。

ホテルに着き、チェックインを済ませ、私と流音さんは部屋に向かった。流音さんとは同室だった。

「警察の動きは、私が漆原さんと交信してわかるし、本部の様子は、昴くんからひかりさんに教えてもらえるわね」

「あ、そうですね。じゃ、もしかして、いろんな場所と交信できるよう、私と流音さんがここに潜入するようになっていたんでしょうか？」

「そうね。もしかすると、ノエルさんや白河さんはそのつもりだったのかもしれないわね」

「そうか…」

「でも、きっと宇宙がそういうふうになるよう、流れを作ってくれたのよ。だから、何も心配することはないわ。私ね、きっと海藤玄

さんも、お子さんたちによって、闇のエネルギーを浄化するんじゃないかってそう思ってるの」

ベッドに腰掛けて、流音さんが優しい表情でそう言った。

「はい。そうですよね。そのために高い次元から来てるんですもんね」

「そう…。それにね、あなたと昴くんの光は、榊さんも言ってたけど、ものすごい光なのよ。あれで包み込んだら、絶対に浄化できると思うわ」

「はい」

「でも、心配は黒い霧を出す…。これって、昴くんがひかりさんを殺そうとしたとき、みんなで心配しちゃったじゃない？それでわかったのよね。心配は何も生まない。ううん、闇を生むかもしれない。だけどね、信頼は光を出す…。だから、みんなのことを信頼していましょうね」

「はい」

「海藤玄さんのこともよ。彼も本来は、愛と光の存在だものね」

「はい」

そうだ。宇宙船に行って、昴くんとそんな話をしたっけ…。

「さて、休みましょうか？お風呂はどうする？」

「はい、あったまりたいから、入ってきます」

「私は昨日夕飯の前、早い時間に入っちゃったの。だから、ひかりさん入ってきて」

「はい。じゃ、流音さん、もう休んでてください」

「ええ。ありがとう、そうするわ」

私は、バスルームに向かった。バスタブにお湯をため、それからゆっくりとつかって、体を洗ったりした。

『昴くん、聞こえる？』

『聞こえるよ。今、どこ？』

『ホテルに着いたの。今、部屋にいる。お風呂から出たら、少し休もうって思ってる』

『そうか、そうだね。休んだ方がいいね』

『昴くんは？』

『夏樹さんと合流できた。もう本部に来てるよ』

『どんな感じなの？』

『まだ、海藤玄には会ってない。だけど、夏樹さんのお姉さんに会った。教団にようこそって、部屋に案内された』

『部屋？』

『男部屋と女部屋があって、葉月ちゃんたちとは別れた。でも、常に悟さんと陽平が、葉月ちゃんたちと交信してる』

『そう…』

『夏樹さんが冬美さんに、朝日の出る前に瞑想をして、意識を高めようって提案をした。冬美さんもそれを了解したし、春彦さんもそれに参加するよう、冬美さんから話してくるらしい。多分、海藤玄も来ると思うよ』

『気をつけてね。黒い霧にやられないようにね。あ。その時私も、こっちから光を送るから、ちゃんと私に心で合図してね』

『わかった。5時半から始めるって言ってた。あと3時間はあるから、ひかり、休んで。俺も悟さんたちと、仮眠とるからさ』

『わかった。じゃあ、もうお風呂出るから、すぐに寝るよ』

『夢で会おうね』

『うん』

私は、急いでお風呂を出た。流音さんはまだ、起きていた。どうやら、漆原さんと交信していたようだ。

「流音さん、私、5時半頃起きて、昴くんに光を送ることにしたので、流音さんはゆっくりと寝ててください。あ、目覚ましをかけちゃうけど、いいですか？」

「ええ。いいわよ。気にしないで」

「はい」

「朝日が昇ると同時に、浄化ね？」

「はい。うまく冬美さんと春彦くんを、朝の瞑想に来るよう、夏樹くんが誘ったみたいです」

「そう…。うん！大丈夫よ。信頼していましょう」

「はい」

すべてはうまくいく。そういうふうになってるんだから、心配はいらない。私は自分に言い聞かせた。

それから、目覚ましをセットして眠りに着いた。

夢の中で、昴くんが私をいきなり抱きしめてきた。

「ひかり」

「昴くん」

「信じようね、全部を。みんなアセンションのために起きてることだから。ね？」

昴くんは私の中にある、不安に気がついているんだろうな。

「大丈夫…」

昴くんが、またぎゅって私を抱きしめた。

「うん…」

私も昴くんを抱きしめた。

ミッション2　仲間の目覚め

目覚ましが鳴り、すぐに私は目を覚ましてベルを止めた。流音さんは寝ていた。窓の外はまだ、真っ暗な様子…。あまり寝ていないのにもかかわらず、頭が冴えていて、すぐにベッドを出て、行動することが出来た。

顔を洗い、また部屋に戻って、ベッドに入ると寝てしまうかもしれないから、コーヒーを淹れて、小さなテーブルに置き、その前にある椅子に座った。

『昴くん……』

心の中で呼んでみた。

『ひかり?起きた?』

『うん。今さっき』

『俺も、さっき起きたところだよ』

『みんなは?』

『うん、一緒に起きた』

『すぐに行くの?』

『うん、行くよ。顔も洗ったし』

『そう…』

『あ、夏樹さんが呼びに来た』

しばらく昴くんの声が聞こえなくなった。

「おはよう」

「あ、流音さん、起こしちゃいましたか？」

「ううん。なんとなく目が覚めて…。ひかりさんがこれから、昴くんに光を送る間、私はひかりさんに光を送るわ」

「え？」

「なんとなく、それが私の役目のような気がして」

「はい。ありがとうございます」

「あ、私もコーヒー飲もうかしら」

「じゃ、淹れましょうか？」

「いいわ。自分でするわ。ひかりさんは昴くんにエネルギーを合わせてて」

「はい」

流音さんがコーヒーを淹れてテーブルに置き、私の前の椅子に腰掛けた。

『ひかり』

『昴くん』

『東を向いてる大きな部屋に来たよ。窓が大きくて、開けるとすごい開放感のある部屋だ。その窓側に座って、みんなで朝日を浴びる準備をしてる』

『夏樹くんや、他の兄弟の人もいるの？』

『まだ…。あ、今来たよ。1番後ろから来たのがきっと、海藤玄だ』

『……』

昴くんが、少し苦しそうにしてるのがわかった。

『ん…。かなり黒い霧を出してるんだ…』

私は昴くんにエネルギーを集中して、光を送った。

『サンキュー』

昴くんはそれを感じ取ったようだ。流音さんは、黙って私に光を送ってくれていた。流音さんの光で、私はほかほかあったかくなった。

『誰かそばにいるの？』

『流音さんが私に光を送ってくれてるの』

『そっか…。ありがたいね』

『うん』

『これから、みんなで座って朝日を浴びるって…。夏樹くんが指揮をとってるよ』

『うん』

『あ…、空がだんだんと明るくなってきた。俺、冬美さんと春彦くんと、海藤玄に光を送るから、ひかり、俺と同化できる？』

『うん』

私はもっと昴くんのことを感じた。フワ…。魂が抜けた。昴くんのもとへとすぐに飛んで行った。そして同化した。

昴くんから光が出ている。それに合わせて、私も光を出した。昴くんからものすごい光が放たれた。それが当たり1面を包む。そこに日の光も混ざり合い、悟くんたちの光も混ざり、光がどんどん大きく拡大して、そのまま地球を包むくらいになった。

黒い霧が瞬く間に消えた。ストン…。自分に魂が戻ってきた。

しばらくして、昴くんが話しかけてきた。

『あ…。なんか、目覚めたみたい』

『誰が？』

『冬美さんと、春彦さん。夏樹くんと目配せしてた…』

『海藤玄は？』

『だいぶ、闇のエネルギーを浄化したと思うけど…。どうかな…』

「ひかりさん、戻ってきた？」

流音さんに聞かれた。

「はい」

私がそう答えると、流音さんは優しく微笑んだ。

『ひかり…』

『ん？』

『夏樹さんが、これから入団するための儀ってのを俺らにするから、その部屋に案内するって。ちょっと、交信切るよ』

『うん。わかった』

『じゃ、ひかり、何かあったらすぐ、俺のこと呼んでね』

『うん』

昴くんが一瞬、すごいあったかいエネルギーをくれて、交信を終わらせた。

「はあ…」

そのあったかいエネルギーで、体がすごいリラックスできた。わ、私緊張してたのかな。

「ひかりさん？」

「あ…。昴くんと交信終わりました」

「そう、どうだったの？」

「はい。冬美さんと春彦くん、どうやら、目覚めることができたようです」

「そう！良かったわ。これで、阻止できるかもしれないわね」

「はい」

「じゃあ、も少し休まない？」

「はい、そうですね」

私たちは、またベッドに入った。安心したのか熟睡をしてしまい、目が覚めたら１０時を過ぎていた。流音さんはもう着替えを終え、いすに座って携帯を見ていた。

「わ…。もうこんな時間」

「ひかりさん、起きた？時間なら大丈夫よ。１１時からランチのビュッフェが始まるみたい。私先に行って、客として潜入してる仲間

とラウンジで会ってくるわ。いろいろと話を聞いてから、ビュッフェに行くから、ひかりさんも11時頃に来て」

「はい、わかりました」

流音さんは、部屋を出て行った。私は顔を洗ったり、髪をとかしたり化粧をして着替えた。

11時10分前、昴くんが心で話しかけてきた。

『あ。ひかり?寝てた?』

『うん…。寝てるのわかった?』

『うん。わかったよ。疲れてたんだね』

『昴くんは?』

『あのあと、入団の儀ってのはやらなくてさ、夏樹さんや冬美さん、春彦さんと打ち合わせしてたんだ』

『じゃ、みんな目覚めたの?』

『うん。ばっちり。それで、春彦さんが、今回ホテルでテロをするメンバーを教えてくれて、それを漆原さんのパソコンに転送した。顔写真もついてて、ホテルに潜入してる仲間がチェックしてるって』

『そっか』

『今回は、たった3人で実行するようなんだ。一人はどうやら、客

としてもうホテルに泊まってる。あとは、当日レストランの客でやってくるみたい』

『もう、泊まってるの？』

『名前も偽名使ってるし、わからないけど、ホテルの受付の人なら顔見てるだろうし、チェックしてもらってるってさ』

『そう…』

『流音さんは？』

『さきにラウンジに行った。仲間と会って、情報聞くって。それからもうすぐしたら、レストランで落ち合って、ランチをするよ』

『そう…。そのとき、もしかすると、下見に来る可能性あるね』

『春彦くんから連絡してもらって、中止にはできないの？』

『そこまで、春彦さんは権限ないみたい。そういうのを決定してるのはお父さんだって言ってたよ。だけど、なんとかやめさせるよう、説得するってさ。光を今も送ってるしさ』

『そう…。うまくいくといいね』

『うまくいくよ、絶対に』

『うん…。あ、私もう、レストランに行くね』

『うん。気をつけてね』

『うん』

私は部屋を出て、エレベーターに乗った。私が乗った階の次の階で、男の人が乗ってきた。その人は階のボタンに手をのばしたが、最上階が押してあったので、そのまま手を引っ込めた。

その時、携帯の電話が鳴った。

「ひかりさん？もう部屋を出た？」

「はい、今エレベーターに乗ってます」

「そう、部屋に電話したら出なかったから。あのね、今から写メール送るわ。ここの泊り客で潜入してる人のデータを、春彦くんから送ってもらったから」

「はい…」

「名前は偽名を使ってるわ。ホテルの人に聞いても、その顔はわからなかったって…。何か変装をしていたかもしれないのよ」

「そうなんですか」

「いったん、電話を切るわね。写メールの顔覚えてくれる？レストランに来る可能性高いから」

「はい」

「どうもね、実行は明後日だけど、その前の準備を今日からするよ

うなこと、海藤玄が電話で連絡してたようなの。とにかく、今送る。じゃあね」

私は電話を切って、メールが来るのを待った。

はっ！その時に、ものすごい黒い霧に包まれていることに気づいた。横を見ると、男の人がものすごい形相で私を見ていた。流音さんの声が聞こえてた？

もしや、この人……。

その人は、上着の内ポケットに手を入れた。何を出すのか警戒したら、携帯電話だった。そのとき、私の携帯にメールが来た。後ろを向き、こっそりと写メールを見た。

ああ…。予想的中…。この人だ！！！

「もしもし、あ。原田です」

その人が、誰かに電話をした。そして、いきなり私の腕を掴み、私の携帯を取り上げた。

「痛い！」

ものすごい力で腕を捕まれ、思わずそう言ってしまった。

「やっぱり…。お前、何者だ？警察か？」

私の携帯に、その人の顔写真が出てて、その人がものすごい黒い霧を出しながら聞いてきた。のみ込まれる！光を出せなかった。体が

冷たくなった。

バン！その人は、エレベーターのボタンを思い切りたたいた。

ガタン…。エレベーターが止まった。電気もパチパチと消えそうになったが、また明るくなった。

「もしもし、計画が誰かからもれて、警察にばれてます」

その男が電話の相手にそう言った。

「はい…。あ、さっき、春彦さんの名前が出てた」

聞かれてた…。

「おい、お前、春彦さんから聞いたのか。春彦さんは、裏切ってるのか？！」

「……」

私はどんどん体が冷え、苦しくなっていて、声も出せなかった。

「もしもし！春彦がなんだって？」

電話の向こうから声がした。

「教祖。春彦くんが裏切って、情報を警察に流しています」

やばい。ばれた！海藤玄に…。どうしよう！

『昴くん！』

答えがない。私がこんなエネルギーだから、届かないの？

「すみません、計画が失敗です。もう、警察がホテルに潜入しているようです。でもここで断念はしません。命に変えてもやり遂げます。ただ、春彦さんには罰を…」

春彦くんが危ない！どうしたらいいの。携帯も取り上げられた。ああ、早くに昴くんに連絡…。

『昴くん！！』

『ひかり…？』

『聞こえる？』

『かすかに…。どうした？エネルギー低いよ？』

『あ…』

男が、持っていた鞄の中から箱を取り出した。その箱を開け、中からスプレーを取り出すと、私と自分めがけて何かを散布した。私はそれを思い切り、吸ってしまった。

「う…」

喉が苦しい…。

『ひかり？どうした？声聞こえないよ…。ひかり…？』

昴くんの声が、遠のいていく。頭がくらくらする。目の前が白くぼやける。

「あんたは道連れだ。運が悪かったな…」

男がそう言うと、ズルってそのまま倒れこんだ。

『昴…くん…』

私は昴くんのエネルギーを感じた。そして一瞬昴くんと同化して、昴くんのエネルギーを吸収して体に戻った。

意識が少し戻ってきた。私は男から私の携帯を取って、流音さんに電話をした。男はもう、意識が朦朧としているようだった。

「ひかりさん?まだエレベーターなの?」

「あの…、エレベーター止まってます。警察呼んでください。それと、エレベーターの中危ないから、人をどこかに非難させてください」

「危ないって?」

「同じエレベーターに教団の人が乗ってて、何か撒いたんです。何かはわかりません。男は、気を失ってます」

「ひかりさんは大丈夫なの?」

「わ、私ももう…、朦朧としてて…」

「え?」

「……」

私は、床にしゃがみこんだ。力が抜け、もう意識も消えかけてた。

『昴くん…』

昴くんも危ないかもしれない…。そう思って、昴くんにエネルギーを集中させ、昴くんのもとへ魂を飛ばした。フワ…。一瞬で昴くんと同化した。

『ひかり?』

昴くんをすぐ近くに感じた。同化したあと、幽体離脱した私は昴くんのすぐそばにいた。

『大丈夫?ひかり…。エネルギー変だった』

『昴くんと同化したら、もうあったかくなったよ。それより、春彦くんが危ないの!』

『え?』

『すぐに春彦くんのところに行って!海藤玄にばれたよ。春彦くんが警察に情報を流してたこと』

『なんで?』

『あとで説明するから、早く行って！』

『わかった』

不思議と昴くんのことが見え、昴くんのすぐそばに私はずっといることができた。

「春彦さん、夏樹さん！」

昴くんは走って、ある部屋にと入っていった。そこには、春彦くんと夏樹くんが悟くんと一緒にいた。何かを打ち合わせているようだった。

「ひかりから交信が来て、春彦さんが警察に情報流したこと、海藤玄さんにばれたって」

「え？どういうことですか？」

夏樹くんが聞いてきた。

「詳しくはわかりませんが…」

バタン！その時部屋のドアが思い切りあいて、海藤玄が入ってきた。

「やあ。何の打ち合わせかな？」

「新しく入団した彼らに、いろいろと教団のことを説明していたんですよ」

春彦くんがそう答えた。

「春彦。お前はそんなことをしてる場合ではないだろう？それに、お前のする仕事ではない。今すぐ、私の部屋に来なさい」

「僕もお父さんに話があったところです」

春彦くんがそう言うと、

「僕も一緒に行きますよ」

と夏樹くんが言った。

「夏樹、お前はいい」

と海藤玄が言うと、ドアの外から、

「私も話があるのよ、お父様」

と冬美さんが言った。

「幹部としての意見か？」

「いいえ。子どもとして、大事なお話があるんです」

冬美さんは真剣な顔でそう言った。

「なんだ？今こんな大事なときに何の話なんだ？」

「今だからこそ、お話しなくちゃいけないことです」

今度は、春彦くんが、真剣な顔をしてそう言った。

「僕たちも一緒に行ってもいいですよね？春彦さん」

悟くんがそう言うと、春彦くんは黙ってうなづいた。

「なんで、彼らが？」

海藤玄がそう聞いても、誰も何も話さず、そのままその部屋を出て、廊下を静かに歩き出した。

『ひかり、まだそばにいる？』

『いるよ』

『なんで、ばれたってわかったの？』

『ホテルに泊まってた教団の人が、海藤玄に電話してそう言ってたから』

『それを聞いたの？』

『うん』

『どうして、ばれたの？』

『流音さんと私のやりとりを聞かれたの』

『え？…それで、ひかりは大丈夫なの？』

そのとき、海藤玄の部屋に着き、

「入りなさい」

と海藤玄がそう言った。海藤玄の部屋に入り、ドアを冬美さんが閉めた。

「他の信者の人には聞かれたくないので、誰も通さないでください」

冬美さんがそう、海藤玄に言うと、

「…わかった」

と海藤玄がうなづいた。

「では、まず私からいろいろと、春彦に聞きたいことがあるんだが」

「…はい？」

「原田から電話があった。計画が警察にもれていたので、今回のテロは失敗だと」

みんながいっせいに顔を見合わせた。

「では、実行はされなかったんですね？」

「……」

海藤玄は黙っていた。

「お父様？」

冬美さんがけげんな顔で聞いたが、海藤玄は、

「それよりも、原田が言うには春彦が裏切ったと…。警察に情報を流していたのはお前だと」

海藤玄から出る黒い霧はあっという間に、部屋中に広がっていったが、そこにいた全員がいっせいに光を出し、消してしまった。

「原田さんはなぜ、そんなことを言って来たんですか？」

「状況はわからない。ただ、そう言って連絡がとだえた」

「……」

春彦くんは、夏樹くんと黙って目を合わせていた。

「計画は失敗した。でも命に変えても、やり遂げる。それが最後の言葉だ。もしかすると、その場で例のものを開けたのかもしれない」

「ど、どこでですか？ホテルの部屋ですか？」

「…わからない」

「大変だ！連絡！昴くん、確か君、ホテルに泊まってたひかりさんって人と、交信できるよね？」

「はい。ひかりなら、ここに来てます」

「え？」

「俺のそばに飛んできてます」

「魂が？」

「はい」

「じゃ、状況を把握していないのか？」

『ひかり。ホテルではどうなってるの？わかる？』

『わからない。すぐに昴くんのところに来ちゃったから。今、戻って様子見てくる』

私はすぐに体に戻ろうとした。体のすぐ上まで戻ることが出来たが、体に入ろうとしても、はじき飛ばされてしまった。

『なんで…？』

『ひかり？』

『入れないの…』

『なんで？』

『わからない。体から拒否されてるみたい』

『え？どういうこと？』

私の体はぐったりとしてて、顔は真っ白だった。

エレベーターの外が、さわがしくなった。何人かの救護隊員がエレベーターを開け、私と男をエレベーターから降ろした。救護隊員はみな、防護服と言うのだろうか、宇宙服のようなものを着ていて、私と男も、全身ビニールのような袋に入れられた。

それから、エレベーターの中に転がっていたスプレーの容器を注意深く箱に入れると、エレベーター内の空気を調べ出した。

あの容器に入っていたものは、いったいなんなんだろうか。

そして、最後にエレベーター内を消毒し始めた。

ホテル内の人たちは、無事に安全なところに行けたんだろうか？流音さんは？

私は幽体離脱したまま、一部始終を見て、また昴くんのもとへと戻った。

ちょうどその時、夏樹くんの携帯が鳴った。夏樹くんは、携帯をちらっと見た。それから、一瞬春彦くんを見て、そして電話に出た。

「はい、夏樹です」

そう言いながらドアの外に行ってしまった。

「おい。誰からだ？」

海藤玄が、夏樹くんを呼びとめようとしたが、冬美さんに制されて

しまった。

「お父様。私たちの話と言うのは、テロのことです」

「え？」

「お父様、これから話すことは、なかなか信じてもらえないかもしれませんが、聞いてくれますか？」

「……」

海藤玄はあまりにも冬美さんが真剣な表情だったからか、黙り込んでしまった。

「私たち3人は、もっと高い次元から来ました」

「次元？」

「この世界にはたくさんの次元が、まったく同じ空間に存在しています」

「うむ。それはなんとなくわかる。低い次元には、悪い霊がいるだろう」

「高い次元の私たちは、低い次元の私たちと同化しています」

「同化だと？」

「はい。今朝の朝日を浴び、高い次元の私たちは目覚めました」

「どういうことだ?」

「低い次元の私たちの意識ではなく、今は高い次元の意識でいるんです」

「…なぜ高い次元から来たんだ?」

「お父さんを救うためです」

今度は、春彦くんが話し始めた。

「高い次元の世界のお父さんは、ずっと病気です。日に日に弱まっています。それが低い次元の影響があるからだと、最近知りました。そして、僕たちは低い次元のお父さんの闇のエネルギーを、浄化しに来たんです」

「ははははは」

海藤玄はいきなり、笑い出した。

「闇のエネルギーだと?私は神の仕事を変わってしているのだ。闇のエネルギーなど私にはない」

「いいえ」

春彦くんは、はっきりとそう言った。

「春彦!お前は私のことが信じられないのか!」

「高い次元から来たからわかります。地球は滅びたりしないし、神

は人間を裁いたりしません」

「な、何を言ってるんだ？」

「お父さんこそ、それは幻想なのだと、早くに気づいてください」

ずっと、昴くんも悟くんも春彦くんも冬美さんも、光を出し続けていた。そこへ、暗い表情の夏樹くんがドアを開け、入ってきた。

「昴くん…。そこにひかりさんがいるって言ったよね？」

「え？はい」

「今も？」

「はい、ずっとそばにいますよ。感じますから」

「ひかりさんね…。エレベーターで原田さんと一緒にいたんだ」

「え？」

「そこで、多分、電話を聞かれた。そして原田さんは、レストランでの計画をやめて、自害する覚悟で、スプレーを散布した…」

「え？！」

冬美さんと、春彦くんが同時に驚いていた。

「エレベーターで？」

そう春彦くんが聞き返した。

「もう二人とも、病院に運ばれている」

「ひかりさんも?」

悟くんがそう聞くと、

「うん。二人とも意識はない…。すごく危険な状態だって…」

「……」

昴くんは呆然としていた。そして、

「でも、ひかり、ここにいてすごくエネルギーも高いよ?」

とそう言った。

「…体が危ないから、魂が抜けてるんじゃないのかな?」

夏樹くんが冷静にそう言った。

「もしくは、魂が抜けてるからってことは?」

悟くんがそう言うと、

「それより、早くに抗生剤を打たないと!」

と冬美さんが大きな声でそう言った。

「は！そうだ。６時間以内に、抗生剤打たなきゃ！」

春彦くんも、顔つきが変わった。

「何？ひかりは何を吸ってしまったの？」

昴くんが慌てた。それ、私も聞きたいところだ。

「あるウイルス…」

「え？」

「人工的に作り出したもの。吸うと、朦朧として意識がなくなる。それから、６時間放置していると命が、危ないのよ」

「え？！」

昴くんも悟くんも、ものすごく驚いていた。

「父さん！早くに抗生剤を！」

夏樹くんがそう叫んだ。

「原田さんも危ないんだよ？」

春彦くんもそう言った。

「いや、出すわけにはいかない。原田は覚悟を決めていたんだ。それに、これが初めの災いとなる。これから徐々に、天の罰が下っていくんだ」

そう海藤玄が言うと、昴くんがものすごい勢いでつっかかった。

「あんた、ばっかじゃね～の！何が天の罰だよ？あんた何様なんだよ？ひかりの命が危ないんだよ。でも、まだ助かるんだ！抗生剤よこせよ！」

「昴！」

昴くんからは、ものすごい黒い霧が発せられた。悟くんは昴くんの肩を掴み、光を思い切り送った。

「悟さん…」

「落ち着けよ。お前が怒っても何も変わらないんだよ」

「…でも…、ひかりが……」

『私なら、大丈夫だよ？昴くん。ここでこうして昴くんのそばにいる』

『ひかり……』

昴くんは今にも、泣き出しそうだった。そして、心の中は後悔の念でいっぱいになった。

『どうして離れたりしたんだろうか。俺よりずっと、ひかりの方が危険だったんだ。なのに、そばで守ってやれなかった。どうして俺、いつもこんなバカなことするんだろう…』

昴くんから黒い霧が出る。それでも昴くんはやめなかった。

『ひかり…。俺、ひかりがいなくなったら…』

ものすごい恐怖が、昴くんの心を覆う。

『いなくならないよ。私は昴くんだよ?体が消えたって、私は消えない』

『嫌だ…。ひかりが死ぬのなんて…』

『死なない。こうやっていつも、昴くんのそばにいる』

『嫌だ!俺は生身のひかりといたい!』

『でも、体は仮の姿でしょ?』

『わかってる。だけど、嫌なもんは嫌だ!』

昴くんは、声を殺して泣き出した。

「お父様!お願い。人を死に追いやることなんて、私たちにはしてはいけないこと。それに、天の罰なんて初めからありえないことなのよ」

冬美さんも、目に涙を浮かべてそう言った。

「父さん!いい加減気づいてくれよ?」

夏樹くんもそう言った。海藤玄は黙っていた。

私は光を出して、昴くんを包んでいた。昴くんの体を包み込み、

『昴くん、大好きだよ…』

とささやいた。

昴くんはまだ泣いていた。心の中は悲しみ、後悔、怒り、憎しみ、いろんな感情が交差していた。そして、昴くんの中からどんどん、黒い霧が溢れ出ていた。それを私は、光で包み込んだ。

「……。海藤玄さん…。この世界は滅びたりしない。地球も宇宙も、人間を裁いたりしない。逆にいつだって、愛してるんだ…」

昴くんは少し落ち着いたらしく、海藤玄に向かってそう話し出した。

「それこそ、幻想だ。今まで人間は何をしてきた?地球をどれだけ痛めつけてきた?地球は悲鳴をあげている。それが私には聞こえる」

海藤玄は、そう昴くんに答えた。

「聞こえない!聞こえてるのは、あんたが創りだしてる幻想だ。それが闇のエネルギーなんだよ!」

昴くんからまた、黒い霧が飛び出した。

「昴!」

悟くんがまた、昴くんに光を送り、霧を消した。

「怒りのエネルギーを出すな。高い次元のお前でいろよ。お前まで闇にのまれるぞ」

「……」

昴くんは黙った。でも、まだ心の中で、いろんな感情が出てきていて、黒い霧を出し続けていた。それを私は光で包み込んだ。

『昴くん…』

『ひかり…』

『同化して』

『え?』

『今、宇宙船に行こう』

『……』

昴くんは私にエネルギーを合わせた。フワ…。私たちはすぐに宇宙船に着いた。

「ひかり」

光の人型の昴くんは、落ち着いて私に声をかけた。

「昴くん。もう、大丈夫だね?」

「ああ…。魂の俺なら」

「昴くん、思い出して、私たちのミッション」

「闇を光で包む」

「そうだよ。闇に闇を出しても、何も変わらない」

「そうだね…、ひかり」

昴くんは私を抱きしめた。そして私たちは、同じ光になった。

「昴くん、私の体が消えたって、私は昴くんといるんだよ?」

「うん…」

「だって、私は昴くんだから」

「ひかり…」

「昴くん、愛してるよ。永遠に愛してるよ」

昴くんは体に戻った。私も昴くんのすぐそばに戻ってきた。

ミッション3　闇を光で包む

昴くんの魂が体に戻ると、昴くんはとても穏やかな表情になっていた。

『ひかり、海藤玄に光を送るよ』

『うん』

私と昴くんは同化して、ものすごい光を海藤玄に送り出した。その光は部屋全体をあっという間に包み、そこから外に飛び出し、地球全体をそして、宇宙までも拡がっていった。

海藤玄に、私は心で話しかけた。

『恐れるものは何もないの。裁くものも何もない。はじめから私たちは大いなる宇宙に愛されて、護られて、受け入れられてる』

もっと昴くんの体から、光が飛び出した。

『宇宙は私たちを、裁いたりしない。だって、すごく大事で、愛すべき存在だから』

海藤玄の顔つきがだんだんと、柔らかくなっていく。

「神はいつだって愛してくれてたし、いつだってそばにいたんだ。いや、俺らすべての人は、その宇宙の1部なんだよ」

昴くんが優しくそう言った。

「宇宙の1部…？」

海藤玄が聞き返した。

「そうだ。みんながだ。どんな存在もだ。だから、あなたは俺なんだ。みんな一つなんだ」

「……」

海藤玄は黙っていた。

「みんなみんな、宇宙の1部だ。みんな一つだ。例外なく、どの存在も宇宙に愛されてる存在なんだ。みんなで、一つの命なんだよ」

昴くんはあったかく、優しい声でそう続けた。それからまた、私と一緒に光を送った。海藤玄は、目を閉じた。私たちの光を感じ取っているようだった。

そして、海藤玄の魂がフワって体から抜けた。海藤玄の魂が、光と同化しものすごく輝いた。ほんの一瞬で海藤玄の魂は、体に戻った。

海藤玄の表情は、穏やかだった。

「今、光になっていた」

「はい。見えました」

夏樹くんがそう言った。

「見えたのか？」

「はい…。父さん、すごく奇麗な光でしたね」

「……」

海藤玄は、ものすごく感動をしているようだった。しばらく言葉も発しなかった。そして目を閉じ、しばらくして、ゆっくりと目を開けた。

「春彦。原田が泊まっていたホテルの部屋に、抗生剤がある」

「ホテルの部屋にですか？」

「そうだ。セキュリティボックスに入れたと原田が言っていた。３本用意していった。それをすぐに原田と、ひかりさんに打つといい」

「はい！」

夏樹くんが携帯ですぐに、漆原さんに電話した。

「漆原さん！抗生剤の場所わかりました。原田さんが泊まってた部屋です。偽名を使ってたんですが…」

「野上志郎という名で泊まっていた。」

海藤玄が、夏樹くんにそう言った。

「野上志郎です。…はい。その部屋のセキュリティボックスの中です。…はい。６時間以内に打たないとならないんです」

夏樹くんは、慌てた声でそう言った。

「ひかりさん、エレベーターには何時にいましたか？」

『１１時頃』

私の声を聞き、昴くんが

「１１時です」

と答えた。

「じゃ、夕方の５時までです。漆原さん、お願いします！」

夏樹くんは電話を切った。その横でいきなり昴くんが、真っ青な顔をして座り込んだ。

「昴？大丈夫か？」

悟くんが昴くんを抱えた。

「すみません。いきなり力が抜けて…」

昴くんのエネルギーが、下がっていく。体が冷たくなってるのがわかる。私は昴くんを光で包んだ。

「ひかりさんの状態が悪いと、お前にも影響が出るんだ」

「ひ…、ひかりの？」

私の…？

『ひかり、今、俺に光を送ってるよね？』

『うん』

『もういいから。ひかり、自分の体に戻って…』

『え？』

『俺がひかりのそばに行く。俺がひかりに光を送るから』

『駄目だよ、昴くん。休んでないと』

「悟さん、ひかりのところに行こう。直接、光を送りたい」

「わかった。葉月たちも一緒に行ってもらおう」

「私たちも行くわ」

冬美さんがそう言うと、夏樹くんが車のキーをポケットから出しながら、

「姉さんと兄さんはここにいて。テロを中止することを、父さんと一緒に信者の人に伝えてくれ」

と言った。

「わかった…」

春彦くんはうなづいた。

「じゃあ、すぐに行こう！」

夏樹くんと、悟くんは昴くんのことを抱えながら部屋を出た。

「ひかりさん、俺の声聞こえてる？ひかりさんは今すぐに、体に戻ったほうがいい。魂が抜けてるだけでも、体は弱まってると思う」

悟くんが私に話しかけてきた。

『でも、さっきはじかれた』

『もう一回行ってごらん…』

『うん。わかった…』

『ひかり…。愛してるよ』

『私も…』

昴くんにもう一回光を送り、私は自分の体へ魂を飛ばした。だが、体に入ろうとしたが、やっぱりはじかれて入れなかった。

私は病院にいた。原田さんは隣の部屋にいて、二人とも隔離されていた。すぐ横の検査室のような場所で、多分私たちの血液だろう、検査をしている人がいた。それから、病室の前には、流音さんと白河さんもいた。

そこへ、父と兄がやってきた。

「白河さん、ひかりの命が危ないってどういうことですか…？」

父が聞いた。

「ニュースは見ましたか？」

「テロですか？」

「そうです…。ひかりさんは、その犯人と同じエレベーターに乗っていました」

「……。ウイルスと聞きましたが…」

「はい。感染力も弱く、空気中でもすぐに死滅してしまうウイルスだとわかりました。ですが、いったん体に入ると、体の中の機能を弱らせ、６時間で機能を停止してしまうくらいの力を持っています」

「まさか、ひかりの体にそのウイルスが？」

「吸ってしまったようです…」

「ひかりは！？ひかりは助かるんですか？！」

父は思い切り動揺して、白河さんの肩を両手で掴み揺さぶった。

「６時間って…、そのウイルスをやっつける薬はないんですか？」

兄は、真っ青だった。

「あります。今、こちらに運ばれてくるところです」

「え？じゃあ、ひかりは助かるんですか？」

「命は、助かります」

「命？」

「後遺症は、残る可能性もあると、医者が言っていました」

「後遺症…？」

父は、がっくりしていた。でも兄は、

「父さん、命は助かるんだよ！」

と父を励ました。

そこに徹郎が来た。それに、母も来た。

「ひかり、ひかりは…？」

「母さん。大丈夫だ。ひかりなら、助かるよ」

兄が母の肩を抱いた。

「徹郎くん…？」

父は徹郎がいるので、驚いていると、

「ニュースを見ました」

と徹郎も青い顔をして、そう言った。

「え？」

「ひかりさんの命が危ないというのを見て、いてもたってもいられなくなり…」

「報道しているのか？ひかりのことを」

「星野社長はそれを見て、こちらに来たのでは？」

「いや、白河さんから連絡があって来たんだ。少し前にホテルでテロがあり、泊り客や従業員らが非難をしたと言うのはニュースで見た」

「そうだったんですか…。星野建設の娘のひかりさんが、犯人と同じエレベーターに乗っていて、何かウイルスを吸いこみ、命が危険な状態だと、報道されていたんです」

「どういうことだ、何も聞いてない。そんな勝手なことを！」

「すみません、星野さん…。ひかりさんのことは報道を控えるように、申していたんですが…。どこかからもれたようです」

白河さんが、すまなそうにそう言った。

「父さん、そんなことよりも、ひかりが助かるよう祈っていようよ」

「そうよ、あなた…」

母は震える声で言った。

ああ…。ごめんね、お母さん。こっちの次元のお母さんは体が弱まっているのに。

母と兄からは光が飛び出したが、父はずっと黒い霧を出していた。心配と、それから犯人への怒りなんだろう。

「犯人は、あの海藤玄が教祖の教団員ですか？」

「はい」

白河さんはうなづいた。

「…あの教団が怪しいのは、警察はわかっていたはずだ！なんでもっと、早くにあの教団をとっつかまえない？」

「テロを阻止できたんです。ひかりさんのおかげで」

「え？」

父も兄も、驚いた表情をした。

「本当は、あのホテルの最上階のレストランで、無差別殺人が実行されるところでした。それを、阻止するためにわれわれは動いていました。ひかりさんは、われわれの協力をしていてくれました」

「ひかりが?!」

「申し訳ありませんでした。私たちの不注意です」

「ふ…、不注意って、そんなですまされるか！」

父からもっと、黒い霧が飛び出した。

「白河さん！抗生剤です！」

そこに漆原さんが、飛び込んできた。

「待ってたぞ！すぐに医者のところへ持って行ってくれ！」

「はい」

漆原さんは、検査室に飛び込んだ。

「これで、ひかりは助かるのね?」

母は弱々しい声を出した。

「大丈夫ですよ」

徹郎が母の肩を抱いた。兄と父は、私の病室のまん前で手を合わせ、目をつむった。きっと、祈っていてくれてるんだ。彼らから、すごい光が飛び出した。母も目をつむった。母からも、徹郎からも光が飛び出し、私に届いていた。

私と原田さんは、抗生剤を注射された。体に戻れるかと思い試して

みたが、まだ入れなかった。

『どうしてかな…』

『ひかり…？』

『昴くん？』

『体に戻れた？』

『戻れないの』

『え？』

『はじかれてしまうの』

『どうして？』

『わからない』

『抗生剤は？』

『今、注射で打ったよ』

『そうか…』

『昴くんのエネルギー、低いよ。苦しそう、大丈夫？』

『ああ…。悟さんやみんなが、光で包んでくれてる…。ひかりは？大丈夫なの？』

『私の体も、大勢の人から光で包んでもらってる』

白河さんと流音さん、それに漆原さんは、ものすごい光を私に送っていた。母や父、兄も、光を出していた。それは祈りの光だった。

『ひかり、同化できる？俺にエネルギー合わせられる？』

昴くんが、弱々しい声でそう聞いてきた。

『うん…』

『俺のエネルギー低いし弱いよ。それに合わせて…』

『わかった』

私は昴くんのエネルギーを感じ取ると、そのエネルギーに自分のエネルギーを合わせた。

ズン…。重い…。それにかなり苦しい。こんなエネルギーだったんだ。昴くん、すごく苦しくない？

そして、同化した。私は悟くんが運転してる車の中で、ぐったりしてる昴くんを感じた。

『ひかり…？』

昴くんが私のエネルギーに気がついた。

『昴くん、すごい苦しそう』

『大丈夫、でもこれがひかりの体のエネルギーなんだ。きっと魂のひかりだと、エネルギー高すぎて、体と引き合わないんだ』

『え？』

『それで、はじかれちゃってる…。いい？この低いエネルギーを維持したまま、もう一回体に入ってみて』

『わかった』

私はそのまま、すぐに体へと魂を飛ばした。

スッ…。今度は何の抵抗もなく、体に入った。だが、入ったとたん、ものすごい冷たさや、息苦しさ、気持ちの悪さを感じた。

『苦しい……！』

『ひかり？』

『昴くん、体に戻れたよ…』

『良かった…。今、光を送るよ。ひかりのそばにもすぐ行くから。あと３０分くらいで着くって…』

『うん、待ってる…』

昴くんは光を送ってくれたが、昴くんも弱まってるのに大丈夫なんだろうか？

重い目を私は、開けてみた。

「ひかりさん?!」

防護服を着て、病室に入ってきていた流音さんが、私の目を見た。

「先生!ひかりさんが目を開けた!」

「何?」

防護服を着た医者が、隣の検査室から入ってきた。そして、私の目に光を当ててみたり、脈を測ったりした。

「星野さん、声、聞こえてますか?」

私はこくんとうなづいたが、首を動かすとものすごい頭痛がした。そして、顔をゆがめると、

「話せますか?」

と聞かれた。

「は…」

何かを話そうとしたが、喉が焼けるように痛かった。それに、目を開けているのも辛い。私は、もう一回目を閉じた。

「まだ、意識が朦朧としているのでしょう」

医者はそう言うと、1度病室を出た。

「良かった…。ひかりさん、本当に…」

流音さんの声は、泣き声だった。ああ、泣いてるんだ。続いて、看護士が来て、血液を採取していった。

「ひかりさん、お父様やお母様がいらしてるのよ。今、先生がひかりさんが目を覚ましたこと伝えていると思うわ。それに、昴くんもこっちに向かってる。安心してね」

私はうなづきたかったが、少しでも頭を動かすと頭痛がするので、できなかった。

『昴くん』

『ひかり？』

『目を覚ましたの、私…』

『…どう？気分は？』

『頭が痛い…。それに喉が焼けるように痛い』

『無理はしないで、また休むといいよ。でも、俺さっきよりも、だいぶ楽になってるよ。抗生剤が効いてきたのかな』

『うん…。なんか、朦朧としてきた…。寝るね』

『うん、わかったよ』

昴くんの声が、遠くに聞こえたかと思った次の瞬間、思い切り昴くんのエネルギーを感じた。あ、昴くんも眠ったんだ。夢の中で昴くんと同化してる。

「ひかり」

「昴くん」

昴くんと体が離れて、それから、思い切り抱きしめあった。

「良かった。ひかり、間に合ったんだね」

「うん」

私は、さっき白河さんが言ってた、後遺症のことを夢の中で思い出していた。

「後遺症残るの？」

「わからないって」

「そっか…。いや、絶対に大丈夫だよ」

昴くんはそう言うと、もう一回抱きしめてくれた。私は昴くんの腕の中で、思い切り安心した。心がゆったりとして、気持ちよかった。

「あ…。もう車着くよ。だから、起きるね」

「うん…」

昴くんのエネルギーが消えた。そして私も、目を覚ました。目の前には、兄と父がいた。

「ひかり…。もう、ウイルスが死滅してるから大丈夫だって、お医者さんが言ってたよ」

兄が優しく私に言った。

「ひかり…」

父が涙を浮かべて、私のことを見た。その後ろから、母も泣きながら私の名前を呼んだ。

「あ…」

声を出そうとしたが、出なかった。喉が痛いし、声がかすれる。

「無理するな、ひかり」

兄がそう言った。

「ひかりさん、大丈夫かい？」

徹郎だった。

「……」

少しだけ、私はうなづいた。さっきより頭痛は治まっていた。

「ひかりさん」

白河さんと、流音さん、漆原さんも病室にいた。みんなものすごい光を私に送ってくれてて、あったかかった。

「君たち、なんだね！」

病室の外から、大声が聞こえた。

「ひかりさんの友人です」

あ、悟くんの声…。昴くんもいるの？

「ひかり！！」

思い切り病室のドアが開くと、昴くんが飛び込んできた。

「君たち、誰の許可があって…」

医者が後ろからそう言うと、

「彼らは、私の知り合いだ」

と白河さんがそう言った。

「ひかり！」

昴くんは、父や兄を押しのけ私の横に来ると、私の手を握り締めた。

そしてものすごい光をだし、私を包み込んでくれた。

ああ…。すごいあったかい。

悟くんも、葉月ちゃんも、陽平くん、珠代ちゃんもいて、みんな光を出してくれていた。

「……、父さん、こいつ…」

兄が真っ青な顔をした。

「え?」

「天宮昴…。それに、この女は昴の女で…」

兄がそう言うと、父も母も顔色を変えた。

「天宮昴だって?天宮建設の社長の息子か?」

父はそう言うと、

「白河さん、知り合いだって言いましたね?どういうことですか?」

と白河さんに聞いた。

「今はそんなことよりも、ひかりさんのことが1番ですよ」

白河さんは落ち着いたまま、そう答えた。だが父は、思い切り動揺していた。

「この男も、今回の事件に関係してるんじゃないのか?こんなところにのこのこと現れて、ひかりのことを殺そうとしてるやつじゃないのか?危険なやつだとしたら、今すぐここを出て行け。いや、白

河さん、こいつを捕まえてください」

「そういうわけにはいきませんよ。彼は唯一、ひかりさんとコンタクトが取れますから。今、ひかりさんは話すもの困難な状態だ。でも、心で彼は会話が出来るから、ひかりさんの今の状態をわかってあげられるんですよ」

「心で、会話だって?!」

白河さんの説明に、父も兄も変な顔をした。

「とにかく、この病室に人が多すぎる。一回出て行きましょう。ここは、彼らに任せて」

「まさか!私は父親ですよ」

「…では、星野さんの家族と、昴くん以外は出て行くとしよう。ああ、悟くんと流音さんには残ってもらおうか。サポートもして欲しいからね」

そう言うと白河さんは、みんなを連れて出て行った。

ドアを出る前に、葉月ちゃんと珠代ちゃんは、泣きながら、

「星野さん、頑張ってね。私たち光を送ってるからね」

と言って、出て行った。

『ひかり…。苦しい?』

昴くんが、手を握り締めながら聞いてきた。

『だいぶ、楽になった…』

『ほんと?』

『うん。ありがとう、昴くん』

「なぜ、ここに天宮建設の息子が?」

父がそう言うと、ようやく昴くんは父の方を向いた。それから、反対側にいる流音さんの方を向いて、

「ひかり、だいぶ楽になってきたって」

とそう言った。

「ほんとう?ひかりさん。どこか痛かったり、具合悪かったりしない?」

「喉、焼けるように痛いから声出せないんだって」

昴くんがそう言った。

「なんでわかる?」

父がそう聞くと、

「心で会話が出来るんです」

と昴くんは答えた。

「心で？今さっき、白河さんもそんなことを言っていたが、そんなことができるわけがない」

「できるんです」

「お前は何か？超能力でもあると言うのか？」

馬鹿にした顔で父が聞くと、

「ないですよ、ひかりの声しか聞こえません」

と、昴くんは真剣な顔で答えた。

「じゃあ、今、ひかりは何を考えてる？」

兄がそう聞くと、昴くんが私に心で話しかけてきた。

『ひかり？』

『…父や兄に言っても、わからないかもしれない。でも、そんなことどうでもいいの。それより、昴くんは大丈夫なの？』

私は昴くんの体の方が気になり、そう聞いた。

『え？』

『もう、エネルギー高くなってきた？』

『うん。もう大丈夫だよ。今、同化するから、俺のエネルギーをひかりにあげるから』

そう言うと、昴くんは私と同化した。体中があったまっていく…。

『ひかり…。喉、本当だ。焼けつくように痛いね…』

『感じたの？』

『うん、同化して…。意識もまだ、ちょっと朦朧としてるね。それに、頭痛もまだ…。吐き気もあった。大丈夫？相当辛いよね』

『でも、楽になってるよ』

昴くんはずっと、光を出して私を包んでくれてた。

「おい！」

父が、昴くんの肩に手をかけた。

「あなた、やめてください」

母がそう言って、父を止めた。

「見ててわかりませんか？彼を見るひかりの表情…。とても安心して、柔らかい表情をしてる。さっきまでとは、大違いだわ」

母が、そう言って私の顔を見た。

「私は彼を信じます。ひかりと心で会話できるなら、ひかりも安心

よね?だって伝えたいことが伝えられる人が、ここにいるんですもの」

母は、優しい表情でそう言った。

「しかし…」

父はまだ、何かを言いたそうにしたが、

「さあ、もう出ましょう。私たちのできることは、病室の外で、ひかりの回復を祈ることだけですよ」

母はそう言うと、兄と父を連れて出て行った。

「良かった。彼らからどんどん黒い霧が出て、なかなかこの部屋を光で満たせなかった」

悟くんがそう言った。そして、悟くんと流音さんからも、ものすごい光が飛び出した。

『ひかり、愛してるよ』

昴くんは心の中で、ずっとそれを繰り返していた。だんだんと喉の痛みが消えていった。頭痛や吐き気も治まってきた。

『昴くん、もうだいぶいい』

『え?』

『すごく楽になった』

『ほんと？』

『本当…』

『ああ、そうだね、顔色もよくなってきた』

『うん。体もあったかいよ…』

『……。良かった…』

昴くんが、心底ほっとしていた。

「ひかり、楽になったって」

昴くんが悟くんと、流音さんにそう言った。

「よかったわ。顔色もよくなったし、もうだいじょうぶね」

『昴くん、原田さんは？』

『大丈夫、夏樹くんが光を送ってる』

『そう…』

誰も死んでほしくない。原田さんだって、本当は愛と光の存在なのだから。

『そうだね…』

昴くんが心で答えた。

白河さんが入ってきた。

「どうだい？ひかりさんの様子は？」

「はい。もうだいぶよくなってきています」

昴くんがそう答えた。

「昴くん、君も大変だったんじゃないかい？同じ魂なんだから影響があっただろう？」

「はい。でも今は、俺も楽になりました」

昴くんは私の手をずっと握ったまま、そう話していた。

「ひかりさん、少し休みなさい。順番で、ここでひかりさんを見守ろう。光を常に出し、光を絶やさないようにしながら…ね？」

「俺がここにいます」

「昴くんも休みなさい」

「いえ、大丈夫です」

「白河さん、二人にさせてあげましょう？」

流音さんはそう言うと、私と昴くんに目配せをした。

「そうか…」

白河さんもうなづくと、流音さん、悟くんと一緒に病室を出て行った。

『ひかり、少し休もうか…。俺もなんだか眠くなってきた』

『うん』

『夢で抱き合おうね？』

昴くんはそう心で言うと、椅子をベッドの横に持ってきて座り、それからまた私の手を握りしめた。昴くんの目は優しかった。昴くんのあったかい光に包まれて、私はすぐに眠りに着いた。

夢の中で、昴くんは私を抱きしめていた。そして、私を優しく光で包んでいた。そのまま、私たちは宇宙船に行った。そこから青い地球を見ていた。

「奇麗だね」

「うん」

昴くんとそれ以上、何も話さなかった。ずっと抱きしめ合っていた。

しばらくすると、昴くんは私の髪にそっとキスをして、

「ひかり…。生きることを選択してくれてありがとう…」

と、ささやいた。

「え？」

「ひかりがもし死んだとしても、いつも一緒にいるのはわかってた。けど、やっぱり、ひかりが必要なんだ」

「……」

「人間の俺には、まだ必要なんだ。いや、ずっと必要なんだ」

「うん」

昴くんは、優しくキスをしてきた。

「こうやって、ひかりを感じていたい…。体がなかったら、感じられない」

「うん…」

「ひかり、俺、人間でよかったって、今回ほど思ったことないよ」

「え？」

「ひかりのぬくもりや、あったかさや、声や、いろんなものを感じられる」

「うん…」

「まだ、人間楽しもうよ、ね？」

「うん…。私も、昴くんに抱きしめられるのが好き。このぬくもり大好き。だから、もっと人間でいたいって思うよ」

「ほんと？」

「うん」

「じゃあさ。どの次元でももう、一緒に暮らしちゃおうよ」

「え？」

「この次元の俺らも、高い次元の俺らも」

「うん…」

「ひかり、夢の中なら、体に負担かけないよね？」

「え？」

いきなり場面は、昴くんのマンションの部屋になった。そこでベッドに、二人で横になっていた。

「それとも、夢の中でも影響出ちゃうかな？」

昴くんはちょっと、心配をしていた。

「大丈夫…」

私がそう言うと、昴くんは優しくキスをしてきた。

体全身で、昴くんのぬくもりを感じた。夢なのに、そのぬくもりはすごくあったかくて、心地良くて昴くんの匂いも感じられて、安心して私は泣いてしまった。

「ひかり？」

「あ…。なんだか、嬉しくて…」

「うん」

昴くんはすごく優しい表情で、微笑んだ。そしてそっと、抱きしめてくれた。最高で最上の、優しい抱擁だった。昴くんの体全部から、光が出て私を包み込む。その光に私は溶けていく。

これ…、宇宙の愛だね。宇宙そのものだね…。

昴くんの愛は、無償の愛で、宇宙の愛そのものだね…。

「ひかりの愛もそうだよ」

「…うん」

また、涙が溢れた。これは、歓びの涙だ…。

ミッション4　命の大事さを知る

私が目を覚ますと、昴くんも同時に目を覚ました。

「ひかり、どう?調子は」

「うん…。あ、もう声が出る…」

「でも、かすれてるね。すごいハスキーだ。そんな声もいいね」

「ええ…?」

『もう、昴くんたら…』

『医者か看護士さん、呼んでくる?』

『ううん。まだ、昴くんとこうしていたいな』

『夢の中でも抱き合ってたのに?』

『そ、そうだけど…』

その時、病室のドアをノックする音がした。

「漆原だけど、入っても大丈夫?」

「はい」

昴くんが答えてくれた。ガチャ…。ドアを開けて、漆原さんとその

後ろから、父と兄が入ってきた。

「ひかり、漆原さんと白河さんから事情を聞いた」

「え？」

「父さんにはまだ、次元というものがよくわかっていないが、お前のことを助けるために、いろんな人が次元を超えてここに来たこと、そして、お前が人を助けるために犠牲になったこと、そんなことを聞いた」

「……」

「お前は、父さんが知ってるひかりじゃないのか？」

「ううん。私は、私…」

私は、もう混ざり合っていた。そしてすぐにこの次元の私になった。

「声、辛そうだな」

「でも、さっきよりは平気…」

「高い次元のお前が、この次元のお前を助けに来たと、白河さんから聞いた。そうなのか？」

「うん。私だけじゃない。高い次元の白河さんも、流音さんも、漆原さんも、そして昴くんも…」

「天宮昴…、君はこの次元の…」

「あ、今は違います。高い次元の俺です」

「君は、ひかりを助けに来たのか？」

「はい」

「そうか…。この次元の君なら、私のことを憎んでいるから、こんな穏やかじゃないだろうな」

「そんなことないです。この次元の俺は、もう星野さんのこと許しています」

「許す…？」

「はい、ひかりのおかげです。」

「ひかりのおかげだって？」

「ひかりが、ものすごい光でこの次元の俺を包んでくれて…」

「光で…か。それも白河さんから聞いたが…。ひかりの体が回復したのは、君が光で包んでいたからだと言っていた。そうなのか？」

「俺だけじゃないです。白河さんや、流音さん、それに悟さんも…。それから星野さんやひかりのお兄さん、お母さんも光を出していました」

「私がか？」

「ひかりが助かるよう、祈ってましたよね？あの時、すごい光が出ていました」

「そうか…。私からも光が出るのか…」

「はい」

「…私を許していると言ったね？」

「はい」

「そうか…。今回のことはどうだ？ひかりをこんな目にあわせた犯人や、海藤玄のことは…。私は腹が煮えくりかえっている」

「海藤玄に光を送ったのは、ひかりですよ」

「え？」

「海藤玄は、もう無差別殺人などしないでしょう」

昴くんの言葉に続き、私も口を開いた。

「お父さん…」

「なんだ？ひかり…」

「恨んだりしないで。恨んでも何も生まれないから」

「え？」

「私は、光で包み込むために来たの。昴くんのことも、海藤玄のことも…」

「…だが、ひかり、それで命を落としそうになったんだぞ」

「だけど、みんなが助けてくれた。守ってくれた」

「だが…」

「お父さん。恨むより、許す…。憎むより、愛する…。その方がずっと難しいかもしれないけど、でも、その方がずっと自分のためにも、みんなのためにもなるの」

「ああ、ひかり…。お前の言うことはわかってる。頭では理解できるが…」

「私、お父さんのことも大好き」

「私もだ、ひかり」

「私、その気持ち、誰にでも持っていたいんだ」

「……。ひかり、お前はすごいな…」

「ううん。お父さんだって私のこと、本当に愛してくれてるでしょう？」

「……」

父は黙ってうなづいた。

「それと同じ…。それをどんな人に対しても、同じ気持ちでいたい、それだけ…」

「そうか…」

父は黙って、しばらくうつむいていたが、

「わかった。お前がそう言うなら、恨むのも憎むのもやめよう。昴くん…」

父は昴くんの方を向き、

「ひかりのことを頼んだぞ」

と真剣な表情で言った。

「はい」

「私は、これから記者会見がある」

「記者会見？」

「今回のことが報道された。星野建設の娘の命が危ないということも…。犯人に対して、どう対処するかなど、いろんなことを聞かれている。それに対しての会見だ」

「……」

「心配するな。お前がテロを止めたことを話そう。たくさんの命を

救ったことや、お前のことを助ける人たちがいたこと…。そして、犯人に対しての処置は何も、考えていないことも」

「お父さん…」

「お前の命が助かった、それだけでもう父さんは満足だ。それは、お前が家出をしたときも同じだった。お前の命がどれだけ大切か、お前の存在が父さんにとって、どれだけ大事だったか、それがわかったんだよ」

「すみません」

いきなり、昴くんがあやまった。

「え？」

「あ！いえ…。なんでもないです」

昴くんは慌てて、首を横に振った。

「もしかして、ひかりの家出に君も何か、関わっていたのか？」

「ずっと一緒にいてくれたの。それで、昴くんは守ってくれてた」

昴くんの変わりに、私が答えると、

「そうか…」

父はそれ以上何も言わなかった。

「じゃあ、父さんは行くよ。広輝は母さんのことを送っていった」

「お母さん、体大丈夫？」

「大丈夫だ…。お前は自分の体を回復させることだけ、考えなさい」

「うん」

「徹郎くんも、もう帰ったよ。ひかりのそばにずっと昴くんが寄り添って、ひかりが安心してるのを見て帰っていった。彼はどうやら、ひかりのことを好きだったようだがな…」

「え？」

私と昴くんは、同時に驚いた。

「いや、結婚のことは断った。彼もちゃんとそれを、わかってくれた」

「それで、会社は？」

「大丈夫だ。結婚とは関係なく合併する。安心しなさい。それじゃあ、ひかり、また夜にでも見に来るから」

「うん。ありがとう」

父は静かに病室を出て行った。

『ひかり、良かったね』

『うん』

『疲れた？』

『ううん、大丈夫…』

昴くんは、手を握って思い切り光を送ってくれた。手から昴くんのエネルギーが注ぎ込まれた。あったかかった。

「ひかり、記者会見の様子、見る？」

「え？」

「テレビ、どっかから借りてこようか？」

「うん。見たいな」

「待ってて」

昴くんはそう言うと、病室を出て行った。

この次元の父は本当に変わった。高い次元の父と同じような、穏やかさがあった。こうやって、どの次元の人も、だんだんと変わっていくんだな。愛の波動へと変わっていくんだ…。

「ひかり」

しばらくして、昴くんが戻ってきた。手には、片手で持てるくらいの大きさのテレビを持っていた。

「これ、小さいテレビ、白河さんが貸してくれた」

そう言って、昴くんはベッドの脇の小さなテーブルにテレビを置いた。

「葉月ちゃんと珠代ちゃんが、すごく心配してたみたい。ひかりもう、本当に良くなったって言ったら、安心して泣いてたよ」

葉月ちゃんと、珠代ちゃんが？

「ここに呼んでも大丈夫？」

「うん」

「じゃ、呼んでくる」

昴くんが病室を出ると、すぐに葉月ちゃんたちと戻ってきた。

「星野さん…」

葉月ちゃんは泣いていた。それから、珠代ちゃんも。

「良くなったって聞いて…」

「うん。もうだいぶ良くなったよ」

「良かった…」

「ありがとう。みんなが光で包んでくれたから…」

私も涙ぐんだ。そうしたら葉月ちゃんは、もっと泣き出してしまった。

「私、信じてました。絶対大丈夫って…」

「ありがとう…」

私も、泣いてしまった。昴くんが言うように、私は生きることを選択して本当に良かった。私の命をこんなにも、大事に思ってくれてる人がたくさんいるんだ。

『そうだよ、ひかり…』

昴くんも、涙ぐんでいた。

『昴くん、私ってすごい幸せなんだね』

『え?』

『だって、こんなにみんなに愛されてる』

『ひかりはいつだって、愛されてるよ?』

『そうだね』

『それに、ひかりはいつだって、みんなのことを愛してるでしょ?』

『うん。だって、それが宇宙そのものだから』

『うん』

「ひかりさん、昴。会見始まったようだよ」

悟くんも病室にやってきて、そう言った。

「え？早くつけなくちゃ…」

昴くんは慌てて、テレビをつけた。父が、記者に囲まれ、座っていた。その横には、白河さん、それから私のことを診てくれていた医師もいた。そして、兄も父のすぐそばにいた。

「星野さん、まず娘さんの容態を教えてもらえますか？」

「それは私の方から、説明します」

医師が話し出した。ウイルスは感染力が弱いこと。空気中では生きられないこと。それから、私と原田さんはもう抗生剤を打ち、安定してきたということ。

「今回のテロの犯人は、やはり海藤玄の教団員ですか？」

それに対しては、白河さんが説明をした。

「ホテルに警察も潜入し、捜査していたと伺いましたが…」

「テロの予定は、1月3日でした。ところが計画を断念し、原田氏が自害をする覚悟でエレベーター内で散布して、そのエレベーターに乗り合わせた星野ひかりさんが、ウイルスに感染しました」

白河さんが説明をした。

「星野さん、娘さんは今日ホテルに泊まっていたと言うことですが…。たまたまホテルに泊まっていて、このような目にあわれて、今の心境は？」

「……」

父はしばらく黙っていた。

「星野さん。コメントをお願いできますか？」

「大事な妹を、こんなめに合わせられたんです。父も、そりゃ言葉に出来ないくらいの思いを抱えていますよ」

兄が横からそう言った。だが、父はとても穏やかな表情で、マイクに向かって話し出した。

「さきほど、ひかりに会いました。すっかり体の方も良くなってきているようです」

写真がいっせいに撮られ、画面がフラッシュで光っていた。

「ひかりは、確かに犠牲になりましたが、でも、多くの人の命を救ったことになります。最初の計画通りにテロが起きていたら、きっともっと多くの犠牲が出ていたと思いますから」

父は、本当に穏やかに話していた。横で兄が、驚いていたが…。

「私は…、犯人を恨みましたし、教団も憎みました。でも、ひかりはまったく憎んでも恨んでもいませんでした。そんなことをしても

何も始まらないと、そう言われました」

「ひかりさんがそう、おっしゃったんですか？」

一人の記者が、手を挙げたと同時にそう発言した。

「そうです。ひかりがです。ひかりは、憎むことよりも愛すること、恨むことよりも許すことの方が、難しいけれども、その方が、自分のためにも多くの人のためにもなると、そう言いました」

「……」

みんな、黙って静かに聞いていた。

「頭では理解できます。でも、そんなの理想でしかないとも思いました。ですが…」

しばらく、また父は黙り込んだ。

「星野さん。天宮建設の社長の自殺をどう思いますか？」

一人の記者が手を挙げずに、そう発言した。

「発言するときには、手を挙げていただけますか？」

司会がそう言うと、

「はい！」

ある記者が手を挙げた。

「はい。どうぞ」

指されて、その記者が質問を始めた。

「天宮建設の社長は、あなたが死に追い込んだと、天宮建設の社員が言っていますが…。あなたも結局は、恨まれるようなことをなさっていたんですよね？」

「それは、今の事件と関係ないことです」

兄がそう言ったが、記者は、

「星野さん。質問に答えてくれますか？」

と、兄のことはまったく無視をしていた。

「天宮社長の家族には、申し訳ないことをしたと思っています」

「では、死に追い込んだ…、そのことを認めるんですね」

「それは今回のテロとは、無関係ですよ」

白河さんも、大きな声でそう言ったが、

「天宮昴くんという、天宮建設の社長の息子さんに会いました」

と父は、話し出した。

「星野さん？」

白河さんが、少し動揺している。

「彼は今、ひかりのそばにいます」

「え？」

会場全体が、驚いていた。

「彼が、私に言いましたよ。私のことはもう恨んでいないし、許したと…」

「……」

会場が、ざわめきたった。

「彼の表情は穏やかでした。目も純粋で…。本心を言ってるのがわかりました。彼は、ひかりのことを守ってくれ、救ってくれました」

まだ、会場はざわついていた。

「だけど、彼は憎き敵の娘の星野ひかりを、どうして守ったり救ったりしたんですか？」

ある記者がそう聞いたが、

「話をテロの方に、戻しませんか？」

と白河さんが中断させた。

「しかし、さっきからつじつまの合わないことばかり言ってますよ」

その記者は、引き下がらなかった。

「ひかりも、彼も、どんな命も大切だとそう言っています。私も、ひかりの命が危ないとわかったとき、本気でひかりの命の尊さを感じました。それはどんな親だろうと、きっと感じることです。原田という男にも、両親がいるかもしれない。その両親にとっては、大事な命ですよ」

「人殺しですよ？」

「そうです。でも、命です」

父は、ひるまなかった。

「では、原田氏や海藤玄氏のことを、星野社長は訴えるつもりはないと？」

「警察に任せますよ」

「しかし、大事な娘さんの命をですね」

記者はまた、反論してきて、ひるむ様子はなかった。

「それよりも、天宮昴くんにも話が聞きたいですね。本当は星野ひかりさんの話も、じかに聞きたい。状況や、今の体の状態や…。それは可能ですか？」

他の記者がそう言うと、

「まだ病室から出るのは無理ですね」

と、医師は固い表情でそう述べた。

「では、いつか可能ですか？」

と記者が聞いた。

「ひかりをこんな場に、出させるつもりはないですよ。話でしたら、私がしましょう」

父は、断固として譲らないという態度で、そう言った。

『ひかり、俺、行ってくるよ』

『え？』

昴くんはテレビを見ながら、心で話しかけてきた。

『そうしたら、記者も納得するだろ？』

『でも』

『大丈夫。この会見、病院の一階でやってるんだ。すぐに行けるから』

『うん…』

昴くんは、すぐに病室を出て行った。

「昴くん、どこに行ったの？」

葉月ちゃんが聞いてきた。

「記者会見の会場」

「え？」

葉月ちゃんも珠代ちゃんも驚いていたが、悟くんは冷静だった。

「昴なら、大丈夫だよ」

悟くんは、葉月ちゃんと珠代ちゃんにそう言った。

しばらくテレビを観ていると、白河さんと記者のやり取りが行なわれていた。そこに、いきなり昴くんが現れ、白河さんは驚いていた。

「昴くん？」

父も驚いていた。

「あ、すみません。テレビ観てて、俺、いえ僕も行った方がいいかと思いまして…」

「誰ですか？」

一人の記者が、手を挙げて聞いた。

「僕は、天宮昴です」

会場がまた、ざわめきたった。

「天宮建設の社長の息子さんですよ」

父が、穏やかにそう言った。

「あの…、さっき、星野さんが言ってたこと、本当です。僕はもう、父のことで恨んでもいないし、憎んでもいません」

「……」

いきなり昴くんがそう言い出したので、記者の人たちはあっけにとられていた。

「それに、僕がひかりさんのそばにいて、ひかりさんのことを守っていたのも事実です。ひかりさんは僕にとって、大事な存在ですから」

「え？どういうことですか？」

一人の記者が手を挙げながら聞いた。

「ひかりさんは、俺が、あ、いえ、僕が、星野さんのことを許せるように、サポートしてくれました」

「サポート？」

何人かの記者が、聞き返した。

「憎んだり、恨むよりも大事なことがあるということ、恨みは自分自身を苦しめるだけだということ、それを教えてくれました」

「……」

みんな黙っていた。

「ひかりは…、本当に誰であろうと大事に思い、愛することが出来る、そんな心の広い人です。だから、今回の事件も、原田氏のことも海藤玄のことも、許しています」

『昴くん、それは昴くんもなのに…』

そう心で言ったが、何も返事はなかった。昴くんは緊張もしていたし、すごくその場に集中しているようだった。

「ひかりは、今、まだ完全に回復したわけではないんです。話すことがやっとできるようになりました。でも、体を起こすことも、もちろん立ち上がることもまだできません」

「何か、後遺症が残るようなこともありえるんですか?」

「それはまだ、わかりません。でも徐々に回復はしています。ただ、今は絶対に安静が必要です。もし、会見をしてもいいと彼女が思うなら、彼女の体が、本当に回復するまで待ってください」

「昴くん、ひかりが会見をだと?」

『うん、いいよ。出来るようになったらしてもいいよ』

私がそう言うと、昴くんにそれは聞こえていたようだ。

「はい、してもいいって言ってます」

昴くんはすごく小声で、父にそう言った。昴くんはまた、記者の方を向いた。そうすると、ものすごい光を放った。白河さんもそれを見て、すぐに光を放ち、会場全体が光で包まれた。

「では、ひかりさんが回復をしたら、もう一回記者会見をするということで、今回はこれでお開きにさせていただきます」

司会を担当していた人がそう言った。また会場がざわめいた。

「まだ、質問があったのに…」

と記者が言ったが、まず白河さんがさっさと立ち上がった。それから昴くんの肩にぽんと手を置き、白河さんは昴くんに何か、耳打ちした。そして、さっさと会場から、父も兄も昴くんも姿を消した。

10分もしないうちに、昴くんは病室に戻ってきた。みんな昴くんが戻ってきたので、ほっとした。

「昴くん」

「ひかり、テレビ観てた?」

「うん」

「会見、本当に平気だった?俺、勝手なこと言っちゃったかなって、あとから思ったけど」

「うん、大丈夫」

「そのときには、俺もいるからね」

「うん。ね…、最後、白河さん、なんて昴くんに耳打ちしたの？」

「ああ…。来てくれて助かったって」

「そうなんだ…」

「はあ…。緊張した。どうも記者会見とか、ああいう記者に囲まれるのは苦手…。あ、あれだ。ひかりと写真撮られて、囲まれてからのこれ、トラウマかな」

「でも、光を思い切り出してたね」

「うん。記者のみんなが、黒い霧を出してたから。あれはなんだろうな、疑いの黒い霧かな？」

「記者会見の場では、いつもあんなだよ」

悟くんはずっと黙っていたが、そう昴くんに話しかけた。

「そうなんだ…」

昴くんは悟くんの方を見た。

「昴くん、いきなり記者会見に出ちゃうから、びっくりしちゃったよ」

葉月ちゃんが、ちょっと笑ってそう言うと、昴くんは今度は葉月ちゃんの方を向き答えた。

「ああ…。うん。なんか、いてもたってもいられなくなって…。星野さん、困っていたから」

「でも…、昴くんのお父さんの敵なのに、よく行けたよね？」

珠代ちゃんが昴くんに聞いた。

「こっちの次元じゃそうだけど、高い次元では、俺、ひかりの家で一緒にご飯食べたりしたんだよ。すごくあったかい優しい人でさ…。ね？ひかり」

昴くんは珠代ちゃんに笑顔でそう答え、私に向かって聞いてきた。

「うん。父も母も兄も、すぐに昴くんと打ち解けてたよね」

「この次元でだって、そうなれるって思うよ。ひかり、この次元でお父さんに光を送って、闇のエネルギー浄化したよね？」

「うん」

「あれでもう、ひかりのお父さん、かなり波動あがってると思う」

「そうだな…」

悟くんが静かにうなづいた。

「これから、海藤玄や夏樹くんたち、どうなるのかな？」

葉月ちゃんがそう言うと、悟くんがそれに答えた。

「心配はしなくてもいいよ。警察に捕まるようなことになるかもしれないけど、ちゃんと全部がうまくいくようになってるから」

「うん。そうだよね。ね、悟くん、この次元でのミッションは、もうすぐ終わるのかな？」

「どうだろうね？」

と、悟くんが少し首をかしげて答えた。

「今日って元旦なのよね。なんだか、そんな気がしない」

そう珠代ちゃんが言った。

「珠代さんは、家、平気なの？帰らないでも」

と葉月ちゃんが聞いた。

「こっちの次元の私は、ほとんど家に帰ってないみたいで…」

「え？じゃあ、いつもどこに？」

「昴くんちとか…」

「え？！」

ちょっと葉月ちゃんが驚くと、

「この次元じゃ、恋人同士だったんだもんな～」

と悟くんがつぶやいた。

「あれ？そういえば、陽平くんは？」

葉月ちゃんが聞くと、

「一回家に帰ってから、また来るって。お母さんがテロもあって、心配して電話してきたんだ。顔見せにいって、安心させるからって言ってた」

珠代ちゃんがそう答えた。

「葉月ちゃんは、大丈夫なの？」

私が聞くと、葉月ちゃんはにっこりと笑った。

「うん。こっちの次元でも、旅行に行くって親には言ってあるから」

さすが、いつも葉月ちゃんはぬかりない…。

「昴、お前お母さんに連絡した方がいいぞ。さっきの記者会見を見たかもしれないけどさ、きっと心配してる」

「え？ああ…。うん。ちょっと電話してくる」

昴くんは少し慌ててそう言うと、病室を出て行った。

「悟くんは？」

「俺？もう親もまったく干渉してこない。どの次元でも一人で気楽に暮らしてるし」

「そうなんだ…」

「ひかりさん、だいぶ調子よくなってきたみたいだね？」

悟くんにそう言われて、

「うん。喉の痛みも消えたし、すごい早さで回復してるみたい」

と答えた。本当に自分でも驚くほど、元気になっていた。

「会見、その分なら早くにできそうだね」

悟くんは、ちょっと微笑みながらそう言った。

「うん…。それが済んだら、この次元でのミッションもクリアかな？」

「体がしっかりと回復したら…かな。どっちにしろ、7日までみんな、この次元にいられるんだし、ゆっくりしたらいいよ」

「うん、ありがとう。悟くん」

ガチャ…。昴くんが戻ってきた。

「どうだった？お母さん」

悟くんが聞いた。

「思い切り、泣かれました。俺が、この事件に関わってるんじゃないかとか、俺がひかりのこと、殺そうとしてた張本人じゃないかとか、もう、そんな悪いことばっかり思ってたらしくて」

「まあ、半分は当たってるけどな～」

「あ。そういえば、そうっすね。なんか、忘れてたけど、俺が誘拐したんだもんな…」

「昴くん？」

低い次元の昴くんになってる。お母さんと話すのに、エネルギー下げたのかな。

「え？下がってた？」

「うん、今…」

「あ。もう戻ったから」

昴くんはにこって笑った。

「よく、星野社長を許せたね。きっとお父さんも天国で喜んでるって、泣いてた…。おふくろも姉さんも、もう、星野社長のこと恨んでないってさ。俺が復讐しようとしてるんじゃないかとか、俺まで死んだんじゃないかとか、気が気じゃなかったみたいで、もう、恨

みも何も消えちゃったって。とにかく俺が、無事ですんごい安心したって、もう大泣き…」

「そりゃ、そうだよね…。私のお父さんだって、命が無事だっただけでも、本当に良かったって泣いてたし…」

「命か…」

悟くんがそうつぶやくと、その場にいる全員がしばらく、黙り込んだ。

昴くんがぽつりと言った。

「俺ら、体は死んでも、魂は死なないよね…」

「でもさ、死ぬってどんななのか…。いや、生きるってどういうことかの方かな？死と生があって、初めて生きること体験できるのかなってそう思った」

「うん、それが知りたかったのかもな…」

悟くんが答えた。

「俺、この次元の親父が自殺して、すごく苦しかった。自分から命を絶つなんて、やっぱりしちゃいけないことなんだって、本当にそう感じたよ」

みんな、うなづいた。

「ひかりが死ぬかもしれないってときも、体がなくなったって、ひ

かりはすぐそばにいる。それどころか俺と魂一緒になっちゃうかもしれないって、それもわかってるんだけど、ひかりが死ぬのは嫌だった。理屈じゃないんだ。悲しくて、ひかりのこともっと、感じていたいって思ってて…」

「私は、昴くんのそんな思いや、お父さんやお母さんの思い、それに、みんなが必死で助けてくれた、そういうのをじかに感じて、自分だけの命じゃないって、すごく感じたんだ」

私がそう言うと、葉月ちゃんと珠代ちゃんは涙ぐんだ。

「私だって、ひかりさんに生きてて欲しかったです…」

葉月ちゃんは、泣くのをこらえながらそう言った。

「ありがとう。私一人の命じゃないよね…」

「うん…」

昴くんも、目を真っ赤にさせていた。

「それにさ、俺らの体って、多くの命でできてるしさ」

悟くんが、ふいにそんなことを言いだした。

「多くの命…」

昴くんがそのまま、繰り返した。

「肉も、魚も、米も野菜も、全部命だよ。それを食べて俺らは生き

てるんだ。それらの命が、俺らの細胞になってる。だから命の結合体って言ってもいいかもしれない」

「そうだね…」

葉月ちゃんがうなづいた。

「それ、すごいね…。それに酸素や水や、俺ら、いろんなもののおかげで生きてるんだな…」

昴くんも、感動しながらそう言った。

「うん。全部、つながってる。俺らの命は俺らのものじゃない。全部のものなんだ。だから、命を粗末にしちゃいけないって思うし、もっと大事にしなくちゃいけないって、本当に最近思うよ」

悟くんが、こんな話をするのはめずらしかった。

「それにさ、ひかりがウイルスでやられてたとき、俺も、体おかしくなったじゃん。あれで思ったんだ。俺の体、俺だけのものじゃないし、俺が体調崩すと、同じ魂のひかりにもすごい影響出ちゃうんだなって…。だから、もっと自分の体いたわって、大事にしなくちゃいけないなってさ」

「ひかりさんにだけじゃない。色んな次元のお前にも影響出るだろうし、いや、みんなつながっているんだから、すべての命にも影響出るのかもな…」

「え？」

「だって、全部で一つの命だろ？」

悟くんが昴くんにそう言うと、

「あ。そうか。そうだよね…」

と昴くんもうなづいた。

「じゃあ、これからは、自分の命もすべての命も大事にするように、みんななっていくんじゃないかな？」

昴くんがそう言うと、みんなうなづいた。

「大事にしなくちゃね。それに命に感謝だね。そのおかげで、俺ら生きてるんだから」

悟くんの言葉が、身にしみた。私は、自分の命が消えたとしてもいいって、そんなふうにどこかで思っていた。でも、ちゃんと「生きる」ってこと、しっかりと考えなくちゃいけなかったんだな…。

『うん。それ、俺も思ったよ…』

『昴くんも？』

「俺さ、この次元に来て、思い切り生きるってことを考えさせられたよ。死ってものを身近に感じて、生きるってことがどれだけ素晴らしく、どれだけ大事かってさ…」

昴くんの言葉に私はうなづきながら、

「それに、すべての命がどれだけ、大事かも…ね？」

と付け加えた。

「本当だね…」

葉月ちゃんは深くうなづいた。その横で、珠代ちゃんは泣いていた。

「珠代ちゃん？」

私がびっくりして聞くと、

「こっちの次元の私が、泣いてるんです…。ひかりさんの命を大事にしようとしなかったこととか、自分のことも、全然大事にしていなかったこととか…。いろんなことを感じて、泣いてる…」

「そっか…。いろんな大事なことに気づけたんだよね。良かった」

昴くんが優しく微笑んだ。

「俺ら、ミッションを遂行しながら、本当にいろんなことを学んでるよね」

悟くんがぼそってそう言うと、

「え？高い次元の星から来てる悟さんでも、まだ学ぶことあるの？」

と昴くんが驚いていた。

「あるよ。そりゃあ、いろんなことを体験するために、この地球に

いるんだしさ」

「そっか…」

昴くんはまだ、驚いた顔をしていた。

「こういうこと、元の次元に戻ったら、俺、ブログやインタビューとかで、言っていこうって思うんだ」

昴くんが、みんなに話しだした。

「そういうのも、ミッションの一つのような気がする」

「うん。私も、小説の中で書いていくよ」

私が言うと、悟くんも、

「俺もブログでも、書いてみるかな」

と、ぼそってつぶやいた。

「まだ、もとの次元に戻ってもやることはたくさんあるね」

昴くんは悟くんを見ながら、にこって笑いながらそう言うと、

「まだまだ、ミッションは続くだろうね」

と悟くんもにこって笑った。

ミッション5　自分を愛することを知る

病室に漆原さんと、流音さんが来た。それに夏樹くんも一緒だった。

「ひかりさん、どう?」

流音さんが私に優しく聞いてきた。

「はい、だいぶよくなりました」

「あら、本当ね、声も出てきたし、顔色もいいわ」

流音さんは、ほっとした表情だった。

「ひかりさん」

夏樹くんが近くに来て、

「原田さんも、目を覚ましました。気を失ってどうやら、幽体離脱を経験したらしくて、すごい光に包まれ、自分は本当は宇宙そのもので、愛そのものだったって、気づいたって言ってましたよ」

「本当?」

私はすごく嬉しかった。

「ひかりさんに謝ってくれって…。もし、何か後遺症が残るようなことがあったら、責任を取るって」

「え？どうやって？」

昴くんが隣から口を出した。

「お金は持っていないから、経済的に援助をするのは難しいけど、でも、何かの形で責任を取りたいって…。あ、星野建設の社長令嬢だって言ったら、経済的な援助は必要ないかなって言ってましたけど」

「……」

私が黙っていると、夏樹くんは少し笑いながら、

「結婚とか、そういうことでしょうかね？でも、ひかりさんには、すごくひかりさんのことを愛して守って、寄り添ってる人がいるから大丈夫って言っておきました」

「そうだよ。原田さんが責任取ることなんていっさいないよ。あるとしたら、地球を愛と光で包むことをこれからしていくってことかな」

昴くんも、笑ってそう言った。

「さあ、ひかりさんもだいぶよくなってきているし、そろそろみんな、本山に戻るとするか？」

漆原さんが提案した。

「そうね。さっき、ノエルさんがこちらの状況を教えてって言って来たの。記者会見はテレビで観ていたみただけど、ひかりさんの様

子が知りたいって。本山から光をみんなで送って、ひかりさんのそばには、昴くんにいてもらいましょうって言ってたわ」

「……」

みんなしばらく黙っていた。

「ここにまだ、いたいんですけど…」

葉月ちゃんが、小さな声でそう言った。

「でも大勢いたら、ひかりさん、疲れない？」

「いいえ、そんなことないです。みんないつも光を出してくれてるし」

「そう。じゃあ、泊まれる場所を探しましょうか？あ、私のマンションだったら、何人か泊まれるかしら」

「大丈夫ですよ。都内に俺のマンションあるし、葉月はそこに来たらいいですし」

悟くんがそう言うと、

「私も、自分の家に帰ります」

と珠代ちゃんが言った。

「そう？それなら、夜までここにいる？」

「はい。あ、ひかりさんが疲れるなら、病室の外のベンチにいます」

「わかったわ。私と漆原さんも、あなたたちにすぐ合流できるよう、自宅で待機しているわ」

「はい…。ありがとうございます」

葉月ちゃんが頭を下げた。なんだか、私のために葉月ちゃんがそうしてくれるのが、すごく嬉しかった。

「じゃあ、私たちはこれで」

流音さんと、漆原さんが病室を出て行った。

「俺も、一回教団に戻るよ。原田さんのことは、白河さんに任せてあるから」

と、夏樹くんもそう言うと、病室を出て行った。それと同時くらいに、陽平くんが病室に入ってきた。

「陽平！」

珠代ちゃんが嬉しそうに、陽平くんのそばに行った。

「ごめん、遅くなって…。テレビでさ、会見見てたよ」

「もう、家には帰らないでもいいの？」

珠代ちゃんが聞くと、

「うん。本山に行こうと思ってるけど」

「え？」

「ノエルさんの手伝いもあるし」

「じゃあ、私も…」

珠代ちゃんは、陽平くんのそばにいたいんだろうな。

「珠代ちゃんは、陽平くんと本山に戻って」

と私が言うと、珠代ちゃんは嬉しそうにうなづいた。そして二人で出て行った。

「４人になったね」

葉月ちゃんがそう言うと、

「なんか、この４人ってのが、１番落ち着くかも」

と昴くんが笑った。

「うん、私も」

私も、そう言った。

「椅子、あと二つ借りてくるよ」

昴くんはそう言って、病室を出て行った。

「ひかりさん…」

悟くんは、なんだか神妙な顔つきになって、

「こっちの次元に来て、本当にいろいろとあったけど大丈夫？」

と聞いてきた。

「え？」

「いや、ひかりさん、無理してないかなって思って…」

「うん。大丈夫だよ？」

「俺ら、一回外れようか？ひかりさん、昴と二人の方が、落ち着くんじゃない？」

「そうだよね…」

葉月ちゃんも、うなづいて、

「私と悟くんは、廊下のベンチにいるよ。そこから光を送ってるから」

とそう言ってくれた。

「うん。じゃ、お言葉に甘えて…。ちょっと、休もうかな」

私がそう言うと、二人ともにっこりと微笑んで、病室を出て行った。

「あれ？どしたの？」

ちょうど椅子を抱えた昴くんが、ドアの外にいたようで、

「ああ、ひかりさん、疲れてるようだから、休ませてあげようと思って。俺らもなんか、飲み物でも買って、喉潤してくるよ」

悟くんが昴くんに、そう言っていた。

「あ。うん、わかった」

昴くんは、椅子をドアのそばに置き、私のそばに来た。

「ひかりは？何か飲める？水でも持ってきてもらおうか？」

「ううん。大丈夫…」

「そう…」

昴くんは、ベッドの横にある椅子に座った。

『ひかり、疲れた？』

『うん、ちょっと…』

『じゃ、休んで。俺、ここで見守ってる』

『昴くんも寝ないの？』

『…うん、そうだね。じゃ、俺も寝ようかな?』

『うん、夢で会おうね』

『うん』

私は昴くんが手を握ってくれたから安心して、すぐに眠りに着いた。

でも、夢の中に昴くんはいなかった。だけど、声だけ聞こえた。きっと昴くんは起きてる…。寝ている私に話しかけてる…。

『ひかり…』

優しい声だ。

『良かった…。ひかりが生きてて本当に…。こうやって、ひかりのぬくもり感じられて、俺、まじで嬉しいよ』

昴くんは泣いているようだった。

『ひかり…。愛してるよ。めっちゃ、愛してる。ひかりの存在、命、すげえ大事だよ…』

昴くんの声が、胸に染みてくる…。昴くんは寝ている私の顔を、ずっと見ているようだった。

『ひかりの顔、こうやって見れて嬉しい…』

『ひかりの手にこうやって触れていられて、めちゃ、嬉しい』

『ひかり、息してる…。それがすげえ嬉しい』

昴くんの声を聞きながら、私は夢の中で泣いていた。

昴くん・・・!!!私も同じだ。昴くんに触れることが出来て、昴くんのぬくもりを感じられて、すごく嬉しい。大事だ。めちゃくちゃ、大事だ。すごくすごく大事で、かけがえのない存在だ。だから、もっと、一緒にいるときを大切にしたい。

いつか、私の体も、昴くんの体も朽ち果てるときが来るだろう。でも、そのときまで、こうやって寄り添って、ずっと大事に思っていたい。感じていたい。愛していたい。一緒に、今を生きていたい…。

フワ…。いきなり夢の中で、昴くんが後ろから抱きしめてきた。それから私の首筋にキスをした。

「昴くんも寝ちゃったのね?」

「うん。ずっと、ひかりの顔見てたけど、そのうち寝たみたい。俺…」

「昴くん、大好きだよ」

「うん、知ってる」

「愛してるよ」

「うん、知ってる」

「ずっとそばにいるね…」

「うん…」

昴くんはぎゅって、私を抱きしめた。それから優しく、長いキスをして、私の髪をなでながら、

「生きてて、良かった…」

と涙ぐみながら、そう言った。

目が覚めたら、昴くんの姿はなかった。天井を見つめていると、涙が頬をこぼれ落ちた。あ…、私、もしかして、寝ながら泣いてたのかな?

ガチャ…。ドアが開くと、昴くんが入ってきた。

「ひかり?起きた?」

「うん」

「ご飯食ってきたんだけど、あ、起きたこと医者に言ってくるね。点滴打つって言ってたから」

「うん」

昴くんはまた、病室を出て行った。昴くんも疲れてないのかな。きっとほとんど寝ていないはず。

医師と看護士が入ってきた。それから、脈を測ったり、熱を測ったりして、点滴をして出て行った。

昴くんは少ししてから、入ってきた。

「今、医者に聞いたら、すごく良くなってきてるって。でも、まだ安静にしててくださいってさ」

とにっこりと笑いながら、昴くんは言った。

「昴くんは？」

「あ、俺のこと心配したでしょ？大丈夫だよ、若いし…」

『え～～？私が年だって言いたいの？』

『あはは…。そうじゃないけど。でも、ひかりとちょこちょこと寝てたし、大丈夫ってこと。それと、夜はここに、簡易ベッド設置してくれるって。そこで、俺寝るから安心して』

『え？そんなじゃ、昴くん、大変じゃない？』

『あれ？俺にそばにいて欲しくないの？』

『ううん。いて欲しいよ』

『でしょ？だったら、素直にそう言ってね』

『う、うん…』

昴くんに、軽くおでこをつつかれてしまった。

『原田さんも、良くなってきてるの？』

『うん、だいぶよくなったみたいだよ』

『そう、良かった』

『今日は、やけに長い1日だったね』

『うん…。今、何時なの？』

『夜の8時過ぎたよ』

『そう…』

『ひかりは、まず点滴から栄養を取るんだって。それで、胃や腸が受け付けるようになったら、お粥から食べられるようになるってさ』

『…そうなの？』

『え？もっと他のもの食べたかった？』

『うん…』

『あはは！食いしん坊だね』

昴くんに笑われてしまった。

『もうちょいの我慢だよ。退院できたら俺のマンションに行こうね。なんか美味しいもの作るから。何がいい？』

『あの、和風スパ！美味しかったな』

『あれ？あんなのでいいの？すげえ簡単なんだよ、あれ』

『いいの。あれ、美味しかったもの』

『うん、わかった』

昴くんは、優しく微笑んだ。その笑顔が、すごく嬉しかった。

『俺の笑顔、そんなに好き？』

今の私の感じたことを、悟ったらしい。

『うん、大好き。すごくあったかい気持ちになるの』

『ふうん。俺がひかりの笑顔が好きなのと一緒か。あ、でも、ひかりのすねてる顔も好きだし、それから…』

『え？！』

『え？』

『今のイメージしたの、わかったよ』

『ええ？何？俺、何をイメージした？今…』

『自分でわかってないの？』

「いや、その…」

昴くんは慌てたのか、声に出してそう言った。

『エッチ』

と私が心の中で言うと、

『い、いいじゃんか！色っぽいひかりも好きなんだよ！悪い？』

と開き直っていた。あ、なんだか、いつもの昴くんに戻った。

『いつものって何？どんな俺だよ？』

『内緒』

『……。ガキっぽいって今、思ったね？』

『あ、ばれた…』

『なんだよ～～～！どうせ、ガキだよ』

くすくす…。私が笑うと、おでこにキスをしてきた。

「その笑い方好き。ひかり、本当に元気になったんだね？」

昴くんはまた、すごく優しい表情になって、優しくそう言った。昴くんの優しい目が、すごく嬉しかった。ああ…。見つめられるだけで、溶けそうだな…。

「あはは…。また？溶けちゃう？ひかり、すぐに溶けちゃうんだも

ん。まいっちゃうよ、俺」

昴くんは照れながら笑った。

『照れてないって…』

と、私の心の声に、また反論した。

…幸せだ。昴くんと二人きりで会話をする…、この時間がすごく幸せで、あったかい。

それにしても、この次元に来て、何日過ぎたのかな…。

『２９日に来たんだよ。今日元日。だから、まだ４日』

『それだけ？もう、すごく長い時間が経ったような気がする』

『そうだね。いろんなことあったもんね』

『うん』

『俺が誘拐して、ひかりに乱暴しようとしたり』

『う、うん…』

『ひかりを襲ってみたり、犯してみたり…』

『してないって！そんなこと』

『でも、殺そうとはした…』

『うん。そうだったね…』

『ひかりはそんな俺でも、光で包んでくれてた』

『昴くんだって、私のこと守ろうとしてくれてたよ?』

『うん。俺の父親の魂もひかりが、救ってくれて…。それから、本山に行って、朝日を浴びて…。ひかりは、お父さんに会って…。お父さんことも、光で包みこんだ…』

『うん…』

『無差別殺人を阻止しようと、俺は信者になりすまして、ひかりは、ホテルの泊まり客として、ホテルに潜入して…』

『なんか、聞いてると、映画のヒロインにでもなってる気分だよ。ミッションインポッシブルとか…』

『トム・クルーズ主演の?俺、もしかして、もとの次元に戻ったら、そんな役できるかな』

『トム・クルーズ?う〜〜ん。どうかな』

『俺には、無理って今、思ってなかった?』

『思ってないってば〜〜』

『いや、心の奥底から聞こえてきた…。ちぇ〜〜』

くすくす…。昴くん、本当に可愛いな～。

『いいけど！可愛いって思ってても！』

あ、またすねた…。

「そうだ、ひかり。海藤玄さんが、警察に出頭したらしいんだ」

「え？」

いきなり、昴くんが声を出して話したので、私も思わず声を出しだ。

「信者の人には責任もないし、子どもたちはテロを防ごうと自分を説得してくれた。子どもたちのおかげで、目が覚めた。子どもたちには、何の責任もないし罪もないって、そう言っていたらしいよ」

「それ、白河さんと打ち合わせとかしたの？」

「いや、海藤玄さん本人の意思だ。それに、地球が破滅するなんていうことは絶対にないし、天が罰を与えることも、絶対にありえないってそう言ってたらしい。海藤玄さんの発言は、即、ニュースでも発表されたみたいなんだ」

「そうなんだ…」

「しばらくは、このニュースで、正月の特番もなくなっちゃうかもね。あ、テレビつける？今もやってるかも」

「ううん。いい…。なんとなく、海藤玄さんの顔は思い浮かぶ。あ、そうか。さっきね、起きる寸前の夢、海藤玄さんが出てきたの」

「え？」

「あれ？昴くんがテレビ観てた？」

「うん。食堂にあったから、観てたけど…」

「じゃ、昴くんと同化してたのかな？穏やかな表情で、話をしてたよね？」

「うん。光を出しながら、話してたよ…」

「そう…」

「夏樹さんは、高い次元に戻ったみたい」

「そうなの？」

「こっちの次元の夏樹さんとコンタクト取れるから、夏樹さんだけ、先に戻ったようだよ」

「高い次元の海藤さんはどうなの？容態…」

「うん。まだ、それは連絡来てないからわからないけど…」

「そうか…」

昴くんは、私の髪の毛の先を、昴くんの指にくるくる巻きつけ遊んでいた。

「何してるの？」

「え？」

「私の髪で遊んでるの？」

「ああ。これ？ひかりがたまにしてるじゃん。どんななのかなって、やってみたかったんだよね」

「……」

変なの…。

「いいじゃん！」

「じゃあ、髪を伸ばしてみたら？」

「ひかりの髪じゃなきゃ意味はないの」

「なんで？」

「ひかりの髪でしてみたかったの！」

ふうん…。変なの…。

『いいんだよ！』

「こっちの次元の昴くんは、アイドルにはならないのかな？」

「さあ？歌手の夢は捨ててないみたいだけど…」

「歌手でデビューをするのもいいね」

「うん…」

まだ、昴くんは私の髪で遊んでる。

「ひかりの髪って、少し癖あるの？」

「うん…。伸ばすとね、ちょっとね」

「へえ…。そうなんだ。まっすぐだと思ってた」

「昴くんはまっすぐでしょ？サラサラなのに、この次元の昴くんは、茶髪だからサラサラじゃないね」

「ああ。うん、けっこう傷んでるよ」

「高い次元だと、髪の毛、大事にしてるの？」

「え？」

「サラサラでしょ？」

「う～ん、今はね。でも、役によって、染めたり、メッシュ入れたりすると、やっぱ、傷んでたよ」

「ふうん…」

昴くんの顔をじっと見た。この次元の昴くんの顔も奇麗だよな～。

「ひかりも奇麗だよ？」

「そう？でも最近、しわとかシミとか…」

「あはは！そういうの、気にするの？」

「気にするよ～～」

「それでも奇麗なのに…。ひかりってさ、しゃべったりすると、ずいぶんと幼いんだなって気がするけど、黙ってたたずんでる姿とか、大人だよね」

「おばさんってこと？」

「違う、違う！大人な女性ってこと。セクシーだし、知性的でもあるし…。なんていうのかな、俺らの年齢じゃ多分、ぐっときちゃうよね」

「何？それ～～」

「大人な女性にあこがれるそんな、年齢なのよ、俺の年は…」

なんじゃ、そりゃ…。

「でも、それ黙ってたらの話なんでしょ？」

「そうそう」

ちぇ～～～。

「ちぇ〜〜?俺の口癖だよ?それ」

あ!本当だ。やだ!うつってるよ。

「なんで嫌なんだよ。いいじゃん、別に」

「え〜〜」

「ガキみたいになったって、思わなかった?今」

「お、思ったかな?」

「ふんだ。でもね、言っとくけどひかりだって、けっこう子どもっぽいところあるんだからね!」

「……」

それで、黙ってたら、大人って言ったのか…。

「そういうことだよ」

そういう子どもっぽいところも、好きなんじゃないの?

「そうだよ。そういうひかりもめちゃ好きだよ」

昴くんは、半分、開き直ってる感じでそう言った。

「だけど、セクシーなひかりも好きだよ。たまに、ほんと、ぐっときちゃうんだよね」

「……」

「わかんないの？自分では…」

「わかんないよ」

「自覚ないの？」

「ない」

「髪、指でくるくるしてるときとか、なんか、色っぽいよ。そういうの、自覚しててやってるんじゃないの？」

わざとしてるってこと？まさか！

「自分の色気に気づいてないの？」

「だから、わからないってば。色気なんて私、ないよ」

「……」

昴くんは、心の中で、うっそ～～って言ってた。

「だけど、昴くんも色気あるんだよ？それ、自覚してないでしょ？」

「俺？ないない。たまに写真で色気あるポーズとかさせられるけど、あれはあくまでも、作りもんの色気だし」

「ほ～ら。自覚ない」

「俺が色気…？あ、前にも、そうひかりが思ってたことあったね」

「うん。例えば、昴くんの鎖骨…」

「あ！いい、いい。言わなくてもいい」

「また、照れちゃう？」

「…じゃ、俺も言おうか？ひかりの色っぽいところ」

「え？」

私はひるんでしまった。

「うなじ…。俺、よくキスするでしょ？」

「うん…」

「すげえ、色っぽくって、たまらなくなるんだよね。それでつい…」

「えええええ？」

恥ずかしくなって、思わずうなじを隠した。

『ぶ…。今、隠したって意味ないって…』

と昴くんに笑われた。

「それとね、唇…。たまにキスをねだってることない？」

「ない！」

「うそ！」

「ない～～！！！」

「うそだ～～」

「……」

ないと思う。でも、キスしたいなって思ったとき、そう見えちゃってるの？

「あはは！うそうそ！だいたい、ひかりがキスをしたがってるのなんて、心で聞こえてるってば」

もう～～～！！！！

「それから、目も、すんごい色っぽいときあるんだよね」

「もういい！」

「え？まだいっぱいあるのに。足とか、スカートはいてるとき、組まれるとやばい」

え～～？

「それに、下向いたときの目とか、それから、指絡めてきたときとか、えっと～～…」

「もういいってば！」

そうか…。私が昴くんのどこに色気を感じるかっていうのを聞いてて、昴くんが抵抗するのが、わかったよ。

「でしょ？」

「うん…」

『あと、胸がけっこう開いてるセーター、めっちゃやばいっす』って…、心で言ってても、聞こえるのよ～～。昴くん！

『ああいうの、誘ってるの？』

『え？』

『なんか、挑発してるときある？』

『ない』

『絶対にない？じゃ、あれは？赤い下着…』

「わ～～～！もういいから！」

『でも、それだけは聞きたかった』

『昴くんの心の声で、今までそういうの聞いたことない』

『うん、そういうの思ってるときには、ちゃんと閉じてたし』

「ずるい！なんでそういうの出来ちゃうの？っていうか、隠してたのね！なんでも筒抜けだとか言いながら、自分は隠したんだ！」

「え？いいよ。聞こえるようにしても。でも、きっと、ひかりの方が困るよ。男のいろんな本音なんか、聞こえたら…」

「ええ？」

「ひかりもたまに、うっすらと、閉じるでしょ？本当に、知られたくないとき、閉じてるの知ってるよ。」

「え？」

「なんか、エッチなこと考えるとき、無意識に俺から気をそらすっていうか、閉じるよね」

「…無意識だから、わからない」

「ふ～～ん、でもね、そういうことだよ」

「じゃ、なんでもかんでも、筒抜けじゃないじゃない？」

「…今度からは、筒向けにしてみます」

「え？！！！」

「それでいい？」

「え?!!!!」

「あはは!やっぱり困ってるじゃんか」

「……」

だって、ええ?どんなことよ。男の本音…?

「やっべ~~!今日の下着すげえ、セクシー!なんでこんなのつけてんの!とか…」

「い、いらない。そういうのは、聞こえなくてもいい」

「でしょ?」

は、恥ずかしい~~~。思い切り恥ずかしい。あ、でも…。

「え?!やっぱりそうなんだ!」

「何?何が聞こえちゃったの?」

「…え?無意識に思っちゃった?」

「え?何~?」

「だから、勝負下着だってこと、ばれてるのかなって、さっき…」

「わ、私思ってた?」

「うん」

『キャ～～～～！』

あははは…。昴くんは、思い切り笑った。

「おっかしい！ひかりってやっぱり、幼いよね。見た目と全然違うんだもん」

え～～。もう、何よ～～。

「あはは…。駄目だ、腹いてえ。そっか、勝負下着なんだ。良かった」

え？なんで良かったなの？

「だって、いつでもあんなにセクシーなのつけられてたらさ、他のやつといるときもそうなのかなって」

「他のやつ～～？昴くん以外となんて、私一緒にいないじゃない」

「でも…。バイトの時とか…」

「していかないよ。派手なのもセクシーなのも。だって、更衣室で着替えるし…」

「…ふうん。そういうのばれたりするの？」

「え？」

「今日、彼氏と会うのかしら…なんて思われたりしちゃうの？」

「わかんないよ。人がどう思ってるかなんて。私だったら、周りの人がどんな下着つけてるかなんて、見ないようにするけど」

「そうなんだ…」

「や、やめようよ、こんな話…」

「うん…」

ああ…。もう…、まいった…。そっか。そういうこと昴くんってあまり考えてないから、考えないんだって思ってたけど、なんだ～～。何気に、ちゃんと聞こえちゃまずいことは、隠してたんじゃない。じゃあ、な～～に？誰か他の女性を見てて、色っぽいなって思ったりとかそういうもの、隠したりしてたわけ？

「……」

あ、返答がない。なんで？

「隠してないよ！思わないし！」

昴くんはちょっと、慌ててた。

あるんだ…。

「ない！」

そういえば、この前の彼女役の…。

「ない！」

まだ、何も言ってないのに…。

「ないものは、ない！」

怪しい…。

「あのね！俺、けっこうね…」

「うん」

「……」

「何？」

何も言わなくなったから、昴くんにエネルギーを集中してみた。

「わかった。白状する…」

昴くんが顔を真っ赤にさせてそう言った。…なんだ、やっぱり他の人見て、色っぽいとか思ってるんだ。

「そうじゃなくて、俺、思い切り、ひかりにメロメロなの！」

「…は？」

「だから、他の女性の事思ってるほど、余裕ないんだよ」

「…え？」

「えって…もう、わかってくれないかな…」

「へ…？」

「それ、からかって遊んでる？」

昴くんが上目遣いで私を見た。

「ううん。本当にわけわからない…」

「だから・…。俺、この次元じゃ違うけど、高い次元じゃひかりが、初めての相手だし…」

「え？」

それがどう関係あるの？

「大ありだよ。っていうかさ…。ああ。もう！だからさ…」

昴くんは髪をぼりぼりって掻いて、それから前髪をかきあげながら、

『ひかりにこれだけ夢中になってるのに、なんで他の人のこと見れたりするんだよ』

と心で言って来た。

「え？」

「わかった？」

「……？」

「わからない？」

「…うん」

「だ～～か～～ら～～～！！！」

昴くんは、はあってため息をついた。あきれ果てているようだ。

「ああ、もういいや…。じゃあさ。全開にします。そうすりゃわかるでしょ？」

「え？」

「俺の思ってること、全部、見せるから」

「い、今さらっていうか、今頃っていうか…」

「ひかりも隠しちゃ駄目だよ？」

「え？」

「たまに、隠すでしょ？あれ、なしね…」

「う、うん」

何かな？隠してるのも、無意識だから。

「それ、そういうのも、なしね」

ああ、難しいよ～～。だって、無意識だから。

トントン…。ドアをノックする音がして、

「ひかりさん、昴」

と悟くんの声がした。

「悟さん？」

昴くんがドアを開けに行った。

「ひかりさん、寝てる？」

「起きてるよ」

「あのさ、俺と葉月、そろそろ俺のマンションに行くから」

「うん」

「ひかりさん、明日また来ます」

悟くんが私の方を向いてそう言うと、悟くんの後ろからひょこって葉月ちゃんが顔を出して、

「星野さん、ゆっくり休んでくださいね」

とそう言ってお辞儀をした。

「ありがとう…。気をつけてね」

そう言うと、二人ともにこって微笑んで、ドアを閉めた。

「悟さん、この次元じゃ有名人じゃないし、思い切りいちゃついて、帰るんじゃないのかな～」

「え？」

「腕組んで歩こうが、キスしてようが、写真に撮られることもないしさ」

「そうだね…」

でも、人前でいちゃつくイメージないけどな…。

「わかんないよ。そんなの…」

「そ、そうかな・・・。」

そうか・・。昴くんが実はエッチなこと思ってるってのも、想像つかなかったし。

「そ、そういうのは、いいからさ・・・。」

昴くんがまた、真っ赤になった。

「あ、そういえば会見だけど、明日には無理だろうから、明後日、3日にすることになりそうなんだけど、ひかり、それまでに立てるかな？」

「わかんないけど…」

トントン…。またドアをノックする音がした。

「失礼しますね」

看護士さんだった。

「そろそろ消灯の時間です」

「え？ああ。そっか。病院は早いんですよね」

「ええ…。それで、寝る前に…。あの、男性の方はちょっと、病室出ててくれますか？」

「え？あ…はい」

昴くんはドアを開けて、出て行った。

「まだ、立てないからトイレにも行けないですよね？」

「はい…」

「何か、感覚ありますか？」

「え？」

「トイレに行きたいっていう感覚…」

「ないです」

「そうですか…。でも、とっておきますね」

「はい…」

ああ。こういうの、赤ちゃん流産したときあったっけ。しばらく安静で、1日、ベッドに横になってて、トイレ行けなくて…。

こっちの次元の私には、体験してないことか…。不思議だな。次元が違うと、体験も違ってくる…。

「それじゃ、ゆっくりと休んでくださいね。あ、簡易ベッド、すぐに運びますから」

「はい…」

看護士さんは出て行った。

昴くんはしばらく戻ってこなかった。何をしてるのかな…。エネルギーを集中してみた。そうしたら、誰かと話をしてるみたいだった。昴くんと同化してみた。

「はい…。そうですよね」

誰とかな?昴くんの声はするんだけど…。

「わかりました。覚悟はしています。でも、それって、ここの次元のひかりだけですか?」

私のこと?

「高い次元では？…ああ。そうですよね、もどらないとわからないですよね。はい…」

誰とだろうか…。いったい、私の何？覚悟って？

5分くらい、昴くんは戻らなかった。ちょっとエネルギーが下がってる気がした。もう1度昴くんに集中すると、

『ひかり、今戻るよ。ごめん…』

って心の中で声がした。

ガチャ…。ドアが開くと、昴くんでなく、簡易ベッドを運んできた看護士さんだった。ベッドを設置すると、

「おやすみなさい」

と言って、出て行った。

昴くんは少しして、戻ってきた。

「ひかり…」

昴くんの声が、ちょっと低かった。

「どうしたの？」

「隠してもひかりには、ばれちゃうだろうから正直に言うよ」

「え？」

「後遺症…、出るかもしれないって。今、白河さんと話してたんだ」

「……」

白河さんとだったんだ。

「うん…。可能性高いって」

「どんな後遺症？」

「わからない…」

「そっか…。それで、高い次元でも？」

「それも、わからない。だけどこの次元でだって、高い次元でだって、俺はひかりのこと守ってくよ」

「……」

「迷惑なんて思ってない！そんなの気にするな」

「私、今、そんなこと考えてた？」

「また、無意識だった？ひかり、俺に遠慮したり、悪いって思ったりしなくていいんだよ。どんなひかりも愛してるし、どんなひかりでも俺が守っていくし、そばにいるし…」

「…うん」

私は思わず、泣いてしまった。

「ひかり？」

なんで泣いたかはわからない。昴くんの思いを強く感じたからなのか、それとも、悲しいのか…。ただ、ただ、涙が止まらなかった。

昴くんは黙って、私のことを優しく抱きしめた。心では、ずっと、愛してるよってささやいていた。

少しして私が泣き止むと、昴くんは、

「もう消灯だよね。俺も寝るね」

と、簡易ベッドに潜り込んだ。

「おやすみ、ひかり」

「おやすみ、昴くん」

私は、昴くんに愛のエネルギーを送った。昴くんもあったかいエネルギーを、送り返してくれた。それから、目を瞑った。

そしてすぐに眠りに着いたが、眠りの中で私は、すごい恐怖や不安にとりつかれた。看護士さんの言葉を思い出した。

「トイレに行きたいっていう感覚、ありますか？」

なかった。まったく感じられなかった。それに足…、感覚がない。夢の中なのに足も動かせず、それどころか、自分に足があるかどう

かもわからなくなっていて、ものすごい不安に襲われた。

私、歩けない。下半身の感覚がない…。怖い…。

もし、このままだったら私、昴くんと一緒にいたら、お荷物になるんじゃないの?昴くんに迷惑、かけたくない。

「ひかり!迷惑なんて思ってないよ」

突然昴くんが目の前に現れて、そう言った。昴くんも眠りに着いたんだ。そして私の夢に現れて、そう言ってくれたんだ。

だけど、駄目だ。昴くんが優しくそう言ってくれても、怖さが消えない。

一生、このまま歩けなかったら?もし昴くんと暮らしても、昴くんの自由を奪うことにならない?

「ひかり!」

昴くんはこれからももっと、もっと大きな俳優になるのに、足手まといにならない?

「ひかり!もうやめよう!」

私は、ボロボロに泣いていた。心が沈んだままだった。昴くんは私をギュって抱きしめてきた。あったかかった。

ふと、昴くんの言葉を思い出した。さっきまで、昴くんとめちゃくちゃ、幸せだった。

「俺、思い切り、ひかりにメロメロなの！だから、他の女性のこと思ってるほど、余裕ないんだよ」

「ああいうの誘ってるの？なんか、挑発してるときある？」

「今度からは筒抜けにしてみます」

そんなことを言ってる昴くんを、次々に思い出していた。でも、もう昴くんと抱き合うことも無理かもしれない。昴くんのそんな気持ちに、応えることも無理かもしれない。

悲しい…。めちゃくちゃ、悲しくて涙が止まらない。

「ひかり…」

昴くんは私を優しく抱きしめてきた。そして夢の中で、足が動かず座り込んでいる私をそっと、立ち上がらせた。そのまま、昴くんが私の両手を取ると、

「ダンスしよう？」

って笑って言った。

「ダ…、ダンス？」

いきなりで私は驚いた。

「そう、ソシアルダンス。踊れる？」

「踊れないよ」

「じゃ、こうやって、揺れてるだけでもいいや」

昴くんは、片手を私の背中に回した。

「ダンスなんて昴くん、踊れるの？」

私は泣きやんで、そう聞いた。

「踊れない。でも、夢でならできるかと思って」

「え？何それ…」

「あはは。やっぱり無理かな」

「……」

昴くんの胸の中に顔をうずめた。それから、昴くんの動きにあわせて、揺れてみた。

音楽が鳴り出した。

「これ、なんの曲？」

昴くんが聞いた。

「美女と野獣」

「え？俺が野獣ってこと？」

「ふふ…。違うよ。私、この映画大好きなの。美女と野獣がお城のホールで踊るの。そのときの音楽」

「ああ、だからここ、お城のホールみたいなんだ」

踊っているその場所は、まさに映画の美女と野獣に出てくるホール…。大きな窓からは、星空が見えて奇麗だった。

「ひかり、ね？」

「え？」

「足、動いてるよ」

「あ…」

「夢の中じゃ、動くんだよ」

「……」

「もし、後遺症があって、下半身が動かなくなっても、こうやって夢の中でなんでもできるよ」

「うん…。踊れるね」

「うん。踊れるし、サバンナでライオンとかけっこだってできる」

「しないよ、そんなこと～～」

「あはは…」

昴くんは笑ってから、私のことをぎゅって抱きしめると、

「それに、セックスもできる」

って小さな声で、ささやいた。

「不思議だけどすごくリアルに感じられるから、起きてるときと変わらないよ」

「でも、夢は夢だよ」

「大丈夫。俺だったら夢の中でも、ひかりと抱き合えたらそれで満足」

「でも…」

「なんなら、今もしてみてもいいけど？」

「え？」

「こうやって、踊ってる方がいい？」

「……」

昴くんの目を見つめた。すごく優しかった。

「だからね、俺に迷惑かけるとか思わないで。足手まといになるなんてこと絶対にないから」

「だけど…」

「俺ね、俳優なんていつやめたっていいんだ」

「よくないよ！」

「いいんだよ。ミッションのためにしてたことだと思うし。だけど、1番のミッションはひかりといることだよ」

「……」

「ひかりを愛して、感じて、共に生きることだよ。そうしないと、すんげえ光も出せない。だから、闇を浄化も出来ない」

「でも…」

「それが1番の俺らの、ミッションでしょ？」

「うん」

「……。ひかり…。俺から離れていこうとしないで…」

「え？」

「俺、ひかりのこと失いたくないよ…」

「……」

昴くんは、泣き声になっていた。

「もしさ、もし逆の立場ならひかりどうする？」

「え？」

「俺が感染して助かって、でも後遺症が出て、車椅子とかで生活をするようになったら…」

「昴くんのそばにずっといる」

「でしょ？」

「だけど、私は…」

「俳優じゃないしって今、思った？」

「だ、だって昴くんには、たくさんのファンの人が…」

「もし、本当に本当に俺のことを、思ってくれてる人なら、俺の気持ちを尊重してくれると思うけどな」

「……」

「もし、それで俺のことが嫌になったって言うなら、それはそれでいいよ。それに、俳優やめなくちゃならなくても、それもそれでいいんだ」

「でも、昴くんの夢」

「夢なんかないよ」

「未来…」

「今しかないんだよ?この宇宙には…」

「そ、そうか…」

「そうだよ。今、この時が1番大事なんだ。それが続くだけだよ。ずっとね」

「……」

昴くんの目をもう一回見た。私が映っていた。今、昴くんの前には私がいて、私の前には昴くんがいる。

「そう、それだけだ」

昴くんがそうつぶやいた。

「今、目の前のことが、1番大事なんだよ…、ひかり」

「うん…」

私の目からは、涙がこぼれ落ちた。それを昴くんが優しく指で拭ってくれると、

「もう、ひかりは…。なんで、犠牲になろうとするのかな。自分の命も、自分の体も、自分の心も、感情ももっと、全部を大事にしてよ」

「うん…」

「ひかりはね、俺なんだ。だから、ひかり自身を大事にするってことは、俺を大事にするってことでもあるんだよ？」

「そうだよね…」

「俺のこと愛してる？」

「愛してるよ」

「じゃ、ひかりのことも愛してね。ひかりは俺だから」

「うん…」

私はうなづくと、昴くんにぎゅって抱きついた。昴くんも抱きしめてくれた。そして髪に優しくキスをしてくれて、また、優しくダンスを踊り出した。

「今日は、こうやって、踊ってようか？」

「うん…」

ずっと、美女と野獣の曲が響いた。その中で私たちは、静かに踊っていた。

ミッション6　愛の力を示す

翌朝目が覚めた。隣を見ると、まだ昴くんはすやすや寝息を立てて、眠っていた。私は、自分の足を動かそうとしてみたが、何も感じられなかった。

「……」

一瞬、いろんな不安がよぎった。でも、もうよそう…。起きたことを受け入れる、そして、前を向いて歩いていく。昴くんが一緒にいてくれるんだ。私は、一人じゃないんだ…。

その時に、なんとなくトイレに行きたくなった。すぐにナースコールをして、看護士さんを呼んだ。

「どうしました?」

看護士さんはすぐに来てくれた。

「あの…、トイレ行きたくて…」

と静かに言ったが、昴くんがいきなり飛び起きた。

「俺!俺つれてくよ」

だけど、看護士さんは、

「いえ、大丈夫ですよ。今、車椅子持ってきますね」

と、一回病室を出ると、すごい早さで戻ってきた。

「さあ、こちらに移って下さいね」

肩を貸してくれたが、下半身がまったく動かず、どうにか腕の力だけで動こうとすると、昴くんが来てひょいって抱き上げ、車椅子に乗せてくれた。

「あら…。意外と力あるんですね」

看護士さんが、昴くんに驚いていた。

『意外は余計…』

昴くんは、心の中でぼそって言うと、

「だから、俺に任せてくれて大丈夫です」

と看護士さんに言ったが、

「いいえ、トイレでは、やはり女性がついていないと…。ここで待っててください」

と言って、看護士さんは車椅子を押して、病室を出た。

「トイレに行きたいって感覚が、戻ってきたんですね。よかったです」

そう言いながらトイレに着くと、また、せいの!で便座に座らせてくれた。こういうのも、自分の力だけでできるようにならないと…。

私はそんなことを思っていた。

トイレから病室に戻る廊下で、看護士さんは、

「あの若い方は、弟さんですか？」

と聞いてきた。

「いいえ…」

「もしかして、恋人…？」

「はい」

看護士さんはその答えに、

「そうなんですか！素敵な優しい方ですね」

と羨ましそうに、そう言った。

病室に戻ると、昴くんはぽつんと椅子に座っていた。それからすぐに立ち上がり、私を抱きかかえ、ベッドに寝かせてくれた。

そのあと、しばらくするとまた看護士さんが来て、熱を測ったり脈を取ったりして、点滴を打たれた。

「今日は検査をして、調子がいいようなら、お粥をお昼に持ってきますね」

「はい」

看護士さんは病室を出て行った。

「昴くんもおなかすいたんじゃない？朝ご飯食べに行ったら？」

「うん…。まだいいや…」

昴くんはまだ、ぼ～ってしていた。眠いのかな？

「あ～～。顔洗ってくる…。なんか、まだ目、覚めてないかも、俺…」

そう言うと、病室を出て行った。昴くんも、疲れているんじゃないかな…。一回、自分のマンションに戻って、休んだ方が良くないかな？

『ひかりのそばにいたいから…』

昴くんの声が聞こえた。それから昴くんは、すっきりした顔で戻ってくると、手に、缶コーヒーを持っていた。それを一気に飲んで、

「あ～～。目、覚めた！」

とにこっと笑った。

その日の午前中は、いろんな検査があった。昴くんや、途中で来てくれた悟くんと葉月ちゃんは、私にずっと光を送ってくれていた。

午後、お粥を食べ、なんだか調子がよくなってきた私は、病室で昴くんや、悟くん、葉月ちゃんと話をしていた。

「あ…」

またトイレに行きたくなり、すぐに看護士さんを呼んだ。

「俺がついていくのに」

昴くんに言われたが、やっぱりトイレでいろいろと手伝ってもらうのには抵抗があって、そんなことを思っていると、

『わかったよ。でも、そんなことで恥ずかしがったりしなくていいよ?もし、一緒に暮らすようになったら、俺がサポートしていくことになるんだから』

と、昴くんは心でそう言ってきた。

『うん…』

昴くんは車椅子にまた、私をひょいと乗せてくれた。軽々と抱き上げるので、また驚いていると、

「ひかり、すごく軽いよ。痩せたんじゃない?」

と言ってきた。ああ、そうかもしれないな…。

看護士さんに押してもらって、病室を出た。

昴くんは、もういろんなことを背負う覚悟をしてるのかな…。私の方が、全然そういう自覚がないのかもしれない。そんなことを思いながらトイレに着き、またせいの!で便座に座らせてもらおうとし

たとき、私の足が勝手に動いた。いや、勝手じゃない。私の意思で…。

「あ！動く！」

私も看護士さんも、びっくりしてしまった。

「戻ってきてるんじゃないですか？」

看護士さんがそう言った。

「え？」

「足の感覚です。ちょっと軽くたたいてもいいですか？」

ももや膝を、看護士さんがたたいてきた。

「あ。あります、感覚！」

軽くたたかれただけだから、痛みはなかった。それから自分でも、たたいてみた。ああ…。感覚がある！もう一回、動かしてみた。動かせた。

『昴くん！』

『え？』

『足、動いたよ！』

『本当に？』

『うん！』

嬉しくて思わず、昴くんに報告した。

病室に戻ると、私は自力でどうにかベッドの方に動こうとしたが、そこまで足に力が入らなかった。

「無理はしないでくださいね。これからゆっくりと、リハビリをしていきましょう」

看護士さんは優しくそう言ってくれて、それから病室を出て行った。

「ひかりさん、足、動かせなかったの？」

悟くんが聞いてきた。

「うん…。感覚もなかったの」

そう言うと、葉月ちゃんは驚いていた。

「後遺症が出るかもって言われてたんだ…」

「だけど、もう、感覚あるんですよね？」

葉月ちゃんが聞いてきた。

「うん、徐々に戻ってきてる…」

「そうですか。良かった…」

どこまで戻るかもわからないし、やっぱり何かの後遺症が出るかもしれないが、それでも、少しずつ感覚が戻ってきてるのが嬉しかった。

「そういえば、記者会見のことだけど、明日の予定をずらしてもらった方がよくないかな？」

悟くんがそう言ったが、

「私なら大丈夫。車椅子で行くことになるけど…」

と私は、答えた。

『無理はしないんだよ。ひかり…』

『うん、わかってるよ』

それから、葉月ちゃんと悟くんは、マンションに帰っていった。

その日は、夕方に父と兄と母がお見舞いに来てくれた。すっかり顔色も良くなった私を見て、3人ともほっとしていた。

「足も動くようになったから、明日からリハビリをするの」

と言うと、さらに喜んでいた。

明日の会見は11時になるらしい。その時には、兄も父も横にいれくれるし、昴くんも一緒にいてくれるって言ってくれた。会見ではどんなことを聞かれるかわからないが、私はただただ、光を出して

いようと決めていた。昴くんがそうしていたように…。

夜は昴くんに車椅子を押してもらい、トイレに行ってみた。便座に座るのは自分ではまだ無理で、昴くんに手伝ってもらったが、そのあとは自力で全部出来た。

「なんだ。全部手伝ってあげたのに」

と、昴くんは帰り道にそんなことを言った。

「エッチ」

と言うと、

『え〜〜!なんで?!なんでそうなるんだよ〜〜!!!ちぇ〜〜!』

と、心で思い切り、すねてしまった。

病室に戻ると、またベッドに抱きかかえて寝かせてもらった。

「私、こんなに甘えてていいのかな」

「え?」

「昴くんにずっと、甘えてる…」

「甘えてる?違うでしょ」

「え?どういうこと?」

「支えあってる…」

支えあってる?だけど私、何も昴くんにしていないよ…。

「でもね、ひかり…。俺はひかりのそばでこうして、ひかりのために何か役立ってること、嬉しいんだよ」

「…え?」

「嬉しいの。これって与え合ってるんだよね」

「何を…?」

「何をかな…。わかんない。うまく言えないけど…、愛をかな?」

「愛を…?」

「ひかりばかりが、俺に甘えてるとか、俺が大変な思いをしてるとか、ちょっとそんなこと感じてたでしょう?」

「え?うん…。そうかな」

「でも、それ、そんなことないからね。俺、ひかりのそばで、こうしてひかりのために何かしていられるの、嬉しいんだ。喜びになってるんだ」

「……」

私は、胸がいっぱいになって、泣きそうになった。

「支えあったり、与えあったりしてるんだよ?けして、一方通行のものじゃない。だから、安心して俺に、いろんなこと助けてって言っていいんだ」

昴くん…。昴くんの愛を本当に感じる。ものすごく感じる…。優しくて大きくて、私のことを丸ごとすっぽりと包み込むような、そんな大きな愛を…。

「昴くんは宇宙だ」

「え?」

「だって、広いし大きいし、あったかいし、安心するし…」

「うん」

「昴くんの愛を感じると、胸がいっぱいになる。嬉しくて感動する」

「…俺だってひかりの愛を感じると、感動するよ」

「……」

「それが愛なんだよね」

「うん…」

昴くんと指を絡めた。

「ひかり。それがきっと、俺ら、人間の本来の姿なんだよね…」

「私たち、光の人型にならなくても、本来の愛の姿になっちゃってるんだね？」

「うん。もう、この地球で…。人間の姿で…」

「……」

私たちは、しばらく感動していた。すべてと溶け合い、自分が消えていた。そこにあるのは、大きなあったかい愛だった…。

『人って、素晴らしいね』

『え？』

『支えあったり、愛しあったり、与えあうって、なんか、すごいなって思ってさ』

昴くんが心で言ってきた。

『うん』

『これを、すべての人に体験してもらいたいな…。あ、体験も何も、実はみんな愛そのものだから、思い出して欲しいなって言うほうがぴったりくるかな…』

『うん、そうだね』

『俺らが光を送ることで、みんな思い出すよね？きっと』

『うん』

『それが、ミッションだもんね』

『うん…。これからもしていこう、昴くん』

『…ね？言ったでしょ？俺』

『え？』

『ひかりとこうやって、愛し合ってること、それはもう、ミッションなんだ。ひかりと一緒にしていくことなんだ。だから、俺ら、離れちゃ駄目なんだよ』

……。本当だ…。

二人でしていくミッションだから、この生で出会った。二人でしていくことだから、この地球には、半分に分かれてやってきたんだね。

『そうだよ』

『うん、そうだね…』

私たちは同化した。そのまま、宇宙船に飛んでいった。二人の光の人型になり、しばらく黙って、地球を見ていた。

「俺とひかり、いろんな苦しみや悲しみを味わったけど、でも、その代わり多くの愛を知ることが出来たよね…」

「うん。いっぱいね」

「今までの苦しみも、愛を知るためだった。無償の愛を…」

「愛の存在で在ることを思い出して、感動したかったのかな」

「うん…。自分ってなんだろうかって、それを思い出す旅だった。長く感じたけど、でも一瞬だった。いつも今しかなくて、今ここで起きていたこと…」

「うん」

「永遠にね…」

「地球に住むすべての存在、すべてが、愛…」

「うん」

「愛しいね」

「うん…」

地球を昴くんと、光で包んだ。どんな存在も愛しく感じられた。昴くんが愛しいのと一緒で、どの存在も愛しく、かけがえのない存在だってそう感じた。

そしてまた、体に戻ってきた。

「ひかり、明日の会見は、絶対に大丈夫だね?」

「うん。もう大丈夫。ずっと光を出すことが出来るよ」

「うん…。隣で俺も光を出すよ」

「二人で、地球を光で包もうね」

「うん…」

昴くんと愛をいっぱい感じながら、その日は眠りについた。

翌朝、早くに目を覚ました。私は顔を洗って、髪をきちんととかし、化粧もした。それから、着替えを父が持ってきてくれたので、着替えもして車椅子に座り、１１時になるちょっと前に会場に向かった。

父と兄、昴くん、そして白河さんと一緒だった。昴くんは心でずっと、

『ひかり、大丈夫だよ。愛してるよ』

と言いながら、光を送ってくれていた。

会場の後ろには、漆原さん、流音さんも、葉月ちゃんと、悟くんもいてくれてて、光で私を包んでくれたり、会場に光を送ったりしていた。

記者会見が始まった。

「星野ひかりさん、車椅子ですが、まだ立ち上がることや歩行は、困難なんでしょうか？」

「はい。今日、これからリハビリがあります。少しずつ足を動かせるようにはなっているので、あとはリハビリをしていく予定です」

私は、光に包まれているからか、すごく穏やかな気持ちのまま、答えることができた。

「犯人の原田も回復に向かっているんですか？」

「はい。ひかりさんほどではありませんが、意識もはっきりとして、話すこともできます」

医師がそう答えた。

「原田はこの事件のことについて、どのようなことを言っているんでしょうか？」

「そのことに関しては、また、別の時に…」

司会がそう答えた。

「それよりも、星野ひかりさんに質問はありませんか？」

「はい！」

一人の記者が手を挙げた。

「長田建設の御曹司との婚約を破棄したと聞きましたが、今回の事件での後遺症が原因ですか？」

「いいえ。今回の事件の前から、婚約は破棄していました」

「え？どういうことですか？詳しく聞かせてもらえますか？」

「……」

私はちらりと父を見た。父は、

「ひかりの意思を尊重しました」

と静かに答えた。

「では、ひかりさんが、結婚を嫌がったと…」

「嫌がったと言うよりは、その…、私にはしたいこともありましたし、大事な人もいましたから」

私がそう答えると、

「大事な人？それはお付き合いをしている方がいるということですか？」

と他の記者が手を挙げて言った。

「はい。そうです」

私はきっぱりと答えた。

「その方と言うのは…。もしかすると、天宮昴さん？」

「はい。そうです」

もう一回私は、きっぱりと答えた。会場が一瞬、ざわついた。

「すみませんが、事件とは関係のないことですので、この件の質問は終了させていただきます」

司会がそう言ったが、

「関係ありますよ。天宮昴さんは、ずっとひかりさんのそばにいて、守っていると聞きましたが、お二人は恋人だってことですね。それでなんですね？」

「はい」

また、私はうなづいた。

「どこで、知り合ったんですか？」

…それは困った質問だ。

「そういったことは、関係ないことですから。他に質問は？」

司会の人は、助け舟をつねに出してくれる。それに光も出している。きっと、高い次元からきている仲間の人だ。

「では、犯人の原田、そして海藤玄について、ひかりさんはどのように思っていますか？」

他の記者が手を挙げて聞いてきた。

「恨みもありませんし、憎んでもいません…」

私はそう答えた。

「海藤玄が、警察に出頭したのはご存知ですか？」

「はい」

「自分の罪、過ちを認めたようですが、それについてはどのように思われますか？」

「良かったと思っています。お子さんたちが彼を説得して、気がつかれたと聞きました。お子さんたちは、本当にお父さんのことを愛していたんですよね…」

「警察にいろんな協力をしたり、情報を流していたのは、海藤玄のお子さんたちだったというのも、ご存知ですか？」

「はい」

「ひかりさんも警察に、協力していたというのは本当ですか？」

「はい」

「それで、自分の命が犠牲になるところでしたが、それはどう思われていますか？」

「多くの命が犠牲にならず、本当に良かったと思っています」

「ご自身が、死ぬところだったのかもしれないのにですか？」

「はい…」

「……」

一瞬、会場全体は静まり返った。

「でも、私の命のために、たくさんの人が動いてくれましたし、私は家族からものすごく愛されていたことも、それに昴くん…、あ、天宮昴さんからも大事に思われていたことも、友人からも大事に思われてたことを知り、自分の命の重みを感じました」

「…命の重みですか？」

「はい、私だけの命ではないとそう、痛切に感じました」

「と言いますと？」

「私の命は、多くの人に支えられ、守られ、生きてきたんだと実感したんです。だから、自分の命を粗末にしたり、軽々しく死を考えたりしてはいけないって、ものすごくそれを感じました」

「命の大切さですか？」

「はい…。今回のこの事件について、きっと多くの人がテレビの前でご覧になっていると思います。海藤玄さんも言ってたことだと思いますが、私も、地球は破滅などしないし、天が罰を与えることなんてないと思っています。それに、人が人の命を奪うことも、人が自分の命を絶つこともあってはならないと、そう思っています」

「……」

会場はまた、静まり返った。

「命って、ものすごく大事です。私たちの体も、命でできてます。命を食べて、生きてます。だから、自分だけの体でもないし、自分だけの命でもないんです。多くの命の結晶です。ものすごくそれは、大事にしなければならないものであって、尊重するべきものだと思います」

「……」

まだ、会場は静かだった。

「それと、私はものすごく愛を感じました」

「愛ですか？」

一人の記者が聞き返した。

「はい。愛です。家族からの愛、友人、それに、たくさんの人の…。自分は愛されているんだということを、感じました。それに、自分の死を身近に感じることで、私もまた、家族や周りの人をどれだけ大事に思ってて、愛していたかも知りました」

「それは、恋人の、天宮昴さんのこともですか？」

「もちろんです」

私は大きくうなづいた。

「彼がいなかったら…、こうやって生きてるかどうか…」

そう言うと、私の目から思わず涙がこぼれ落ちた。

「生きることを選択できたのは、彼のおかげです」

「生きることを選択と言いますと？」

「彼が、私のことを本当に大事に思ってくれて、それに応えたいと思いました」

「……」

会場はまた、静まり返った。

私と昴くんからは、ものすごい光が出ていた。それに悟くんたちの光も混ざりあい、会場全体はずっと、光で満たされていた。

みんなの顔は、穏やかだった。

「それで、体もどんどん回復しているんですか？」

ある記者がそう言った。その人からも、光が出ていた。あ、仲間かもしれない。

「はい。そうです。彼の愛のおかげです」

「愛の力ですね。海藤玄が今回、テロをやめたのも、子どもたちの愛の力でですね。愛が、ウイルスも、そして、テロも消し去ってしまったわけですね」

「はい」

「戦うのではなく、愛することで、みな、いい方向に流れて行った…ということですか？」

その人は、明らかに仲間だ。その人が話すたびに、すごい光が飛び出してくる。

「はい、おっしゃるとおりです。負のエネルギーに戦いを挑んでも、負のエネルギーが大きくなるばかりです。でも、愛のエネルギーは、負のエネルギーを消してしまうくらい、大きくすごい力を持っているんです…」

「愛のエネルギーと負のエネルギーですか？そんなものは目に見えないものです。どう解釈すればいいですかね？」

一人の記者が黒い霧を出しながらそう言った。その霧を消しながら、

「人を心から愛し、信じたらきっとわかります。目に見えなくても感じられます」

と私が言うと、その記者は黙りこんだ。

「私は、いっぱい愛を感じました。愛の力ってすごいです」

「人を許すこともできます」

昴くんがいきなり、話に加わってきた。

「俺、いや、僕は本当は、父の遺体が見つかった時、ひかりのお父

さん、星野さんを恨みました。どう復讐してやろうかって思ってました。でも、ひかりに会って、愛されて、憎みや恨みからは何も生まれないことも、愛や許すことは、自分を救ってくれることも知りました。だから、今は本当に穏やかな気持ちなんです」

「本当にその通りだな…。私はひかりが死ぬかもしれないとわかった時、どれだけひかりの存在が大事かを知りました。ひかりを失う前に、気づけて本当に良かった。それまで、会社の存続のため、成功のためにだけ生きてきたが、それよりもずっと大事なものが、この世にはあることを知りましたよ」

父も、話し出した。

「天宮昴くんが、本当に私のことを許しているのがわかります。彼はすごいと思いますよ。それに、ひかりも…。自分でも不思議ですが、はじめ、原田や海藤玄のことを許せなかった…。それが許せた瞬間から、自分の中の苦しみが消えてしまった…。救われてしまったんです。これが愛の力なんですね」

父の声は穏やかだった。

会場全体は、不思議な空気に包まれていた。あったかくて、優しくて、穏やかで…。みんなの顔は優しかった。優しい目で話を聞いていた。

「愛は地球を救うという、そんな文句がありましたね…。まさに、そうかもしれない。戦ったり、封じ込めたり、権力でもって、制したりすることではない…。従わせたり、奪ったり、罰を下したり、裁くことでもなく、ただ愛すること…。これだけがもしかしたら、地球を、人類を、すべての命、存在を救うことができるのかもしれ

ないですね…」

白河さんが、すごく穏やかに優しくそう話した。また、会場は静まり返った。

「質問がないようですから、記者会見は終了します」

司会がそう言うと、私の車椅子を昴くんが押してくれ、他のみんなと会場から去った。どこからか、拍手が聞こえた。記者からだった。驚いたことにそのあとも拍手は続き、なかなかなりやまなかった。

午後、病室に戻ると、どのチャンネルでも私の記者会見を映していた。「異例の記者会見」とキャスターは紹介していた。

「すごい、ひかり、有名人じゃん！」

「ええ？有名人になんてなりたくないよ」

昴くん、悟くん、葉月ちゃんとでテレビを観ながら、そんな話をしていた。

父と兄、母は、会見が終わると、私にリハビリ頑張ってねと言って、帰っていった。

「会場全体を見ていたけど、すごい光だったな…」

悟くんがそう言った。

「うん…、すごかったよね」

葉月ちゃんも、うなづいた。

「記者の中にも光を出してる人がいたの」

私が言うと、

「ああ、仲間だね。白河さんが記者の中にも仲間がいるって言ってたよ」

と悟くんが教えてくれた。

「司会の人も？」

「うん。今日の司会の人は仲間だ」

「すごい…。いろんなところに仲間がいるんだ」

昴くんが驚くと、

「目覚めてる人が本当に増えてるんだ。高い次元でいきなり目覚めて、この次元にサポートしに来ている仲間、本当に多いんだよ」

「へえ…」

私も昴くんも驚いていた。

「高い次元に戻ったら、２０１２年を待たなくても、アセンションしちゃってるんじゃないの？」

昴くんがそう言うと、

「そうかもな…。目覚めの連鎖、起きてると思うから、２０１２年までには完璧に地球の波動は上がってるだろうね」

悟くんは穏やかにそう言った。

「そうしたら俺ら、すべてのミッションクリア？」

「うん」

昴くんの質問に、悟くんはうなづいた。

「それから、私たちどうなるの？」

葉月ちゃんが聞くと、

「どうなるのかな？選択できるのかな？」

と悟くんが言った。

「え？どういうこと？」

私が聞くと、

「光になるのもよし、高い次元の星に移行するもよし、もといた星に戻るのもよし…。このまま、地球にいるもよし…。それとか、もっと低い次元の星に行って、またアセンションのサポートをするのもよし…」

「……」

悟くんの話に、私も昴くんも黙り込んだ。でも、心で会話をしていた。

『そっか…。選択肢はいくつもあるんだ…』

『それも宇宙に任せてみる？』

『ひかりはどうしたいの？』

『このまま地球にいて、昴くんと一緒にいたいな』

『本心からそう思ってる？感じてる？』

『当たり前じゃない』

『やっぱり？そうだよね、俺もそう思ってたから…。そういうのって、同じこと思うようになってるよね』

『昴くんもそう思うんだね？』

『それに、高い次元になった愛と光の地球に、住んでみたいと思わない？』

『思う…。それを今度は体験してみたい』

『だよね？』

『うん！』

「私と悟くんは、このまま地球で楽しみたいよね？」

葉月ちゃんがいきなりそう言った。

「うん、高い次元の地球も面白そうだし」

「あ、俺らも、今そう心で話していたところ」

「じゃ、２０１２年後も、よろしくってことで」

悟くんがそう言うと、

「でもまだ、２年もあるよ！」

と昴くんが笑った。

「あはは…。そうだな。気が早いか！」

悟くんが珍しく、大笑いをした。みんなで笑いあうと、きらきらした光が飛び出しダンスをした。

「ひかりさん、リハビリの時間です」

看護士さんが呼びに来た。

「あ、じゃ俺ら、もう帰るよ」

悟くんと葉月ちゃんが、そう言うと病室を出て行った。

「車椅子、俺が押していきます」

昴くんは、ひょいとまた私を抱えて車椅子に乗せてから、そう言った。

「はい。じゃお願いしますね」

看護士さんはにこりと微笑みながら、そう答えた。

「会見見ていましたよ…。素晴らしかったです。お二人は本当に信頼しあってるし、愛し合ってるんですね」

看護士さんの言葉に、私たちは照れてしまった。

『なんだよ、ひかり。そこで照れるなよ!』

『昴くんも照れているじゃないよ!』

『照れてないって…』

もう、いつもそうやって、認めないんだから…。

昴くんが見守る中、リハビリが始まった。昴くんからは、すごい光が飛び出てて私を包み込んでいた。それに、時々同化した。

『きついね…。相当痛い。ひかり、大丈夫?』

私と同化したとき、感じ取ったようだ。

『うん。大丈夫…』

そう答えた。

その日から、毎日リハビリをした。そのおかげで、杖をついて歩けるほどまで回復できた。

会見の模様はＹｏｕＴｕｂｅでも流され、世界中の人が見た。そして各国の報道番組でも、「愛の記者会見」と紹介された。ＹｏｕＴｕｂｅのコメン欄には、私に対して励ましの言葉や、感動したという感想が書かれていた。

私の記者会見の画像からは、いつもものすごい光が飛び出ていて、それはきっと、世界中でこの会見を見ている人たちを、包み込んだだろう。

そうして、この次元も、どんどん高い次元へと移行していくんだろう…。

ミッション7　高い次元に戻る

1月6日。私は、無事退院した。遺症はやはり、残ってしまった。左足を引きずるようになったことと、運動をするのは困難になるだろうと言われた。

早く歩くことも難しい。だが、昴くんがいつも手をつないで、隣で歩く速さをあわせてくれて、私をつねに守ってくれていた。

退院するときに、両親と兄が来てくれた。それから、昴くんとこれからは、人のために何かをしていきたいから、白河さんの娘さんのいるお屋敷に行くと言うと賛成をしてくれた。

「ひかりのことを頼んだよ、昴くん」

父に言われて、昴くんは真剣な顔つきで、

「はい」

と答えていた。

「それから、昴くんの家族のことは心配しないでもいい。経済的な援助はさせてもらうよ」

「え？でも…」

「償わせてくれ…。な？」

「…はい。ありがとうございます」

父の顔は、本当に穏やかだった。

「ひかり、たまには顔を見せに来てね」

母に言われた。

「うん。お母さん、体に気をつけてね」

私は、母を優しく抱きしめてそう言った。私と昴くんは、その間ずっと、この次元の私たちになっていた。

「じゃあ、行くね」

私が言うと、昴くんが私の手を引いて歩き出した。この次元の昴くんもまた、すごく優しくて、あったかいエネルギーを手から送ってくれていた。

退院するときには、お世話になった医師、看護士さんがみんなで見送りに来てくれた。そして、花束をくれた。その場面を写真に撮られたり、テレビ局も映しに来ていたが、そんなに騒動にもならず、終始私も昴くんも、一緒にいてくれた白河さんや、漆原さんも光を出していた。

その後テレビや、週刊誌にずっと昴くんが寄り添っている写真が写っていたが、どのコメントも、

「愛が奇跡を起こした」

と書いてあった。昴くんはどの写真でも映像でも、優しい表情で私

を見ていて、私はすっかり昴くんを信頼しきっているそんな表情だった。あとで、それを見て、二人して照れてしまったんだけど…。

退院してすぐに漆原さんに、車で本山まで送ってもらった。本山に到着すると、ノエルさんと珠代ちゃんがお屋敷から出てきた。

「ひかりさん」

ノエルさんは優しく微笑んで、出迎えてくれた。

「良かったわ、回復して。本当に良かったわ」

ノエルさんの目は、潤んでいた。

「星野さん！すごく元気になったんでんすね」

珠代ちゃんも喜んでいた。

「ありがとう。みんなで光を送ってくれてたでしょう?ずっと、感じてたよ」

私が珠代ちゃんに言うと、珠代ちゃんは嬉しそうにうなづいた。

悟くん、葉月ちゃん、そして陽平くんもお屋敷から出てきた。

「おう！一足先に来てたよ」

と、悟くんが昴くんに言った。昴くんは、にこっと微笑んで答えたが、でもずっと私の手を取り、私が歩くのを支えてくれていた。

お屋敷に入り、大広間に行くと多くの人がいて、

「ひかりさん、退院おめでとうございます」

と声を揃えて言ってくれた。

「え?!」

私も昴くんも驚いてしまった。

「みんな、仲間よ」

ノエルさんが優しく微笑みながら、そう言った。漆原さん、流音さんもいた。記者の人、会見で司会をしてくれた人、他にも知った顔が何人かいた。こんなに多くの人が、仲間なんだ。

「高い次元でどんどん目覚めて、こっちの次元の応援に来てくれた人もいれば、この次元で目覚めた人もいるの」

「すごい…」

私も昴くんも、なんだか感動してしまった。

「会見、すばらしかったです。見てて感動して、泣いちゃいました」

珠代ちゃんがそう言った。周りのみんなも、うなづいた。

「さあ、車に乗って疲れたでしょう?ひかりさん、少し休んで。夜はみんなで、退院祝いしましょうね」

ノエルさんがそう言うと、

「はい、じゃ、俺、ひかりを部屋に連れて行きます」

と昴くんは、私の手を引き歩き出した。

「昴くん、ひかりさん、明日の朝、父が戻ってくるわ。そうしたら、高い次元に帰りましょうね」

ノエルさんが私たちの背中に向かって、そう言ってきた。

「はい」

私も昴くんも立ち止まって、ノエルさんの方を振り返ってうなづいた。それから、ゆっくりと階段を登り、部屋に行った。

部屋に入ると、ベッドに私は座った。

「ひかり、疲れたでしょ？」

「うん…」

「少し寝ようか？夕飯までにはまだまだ、時間があるし」

「うん。そうする」

私はベッドに潜り込んだ。昴くんは隣のベッドに座って、私の顔を見ていた。

「なあに？」

「うん…。なんか、いろいろとあったなって思って」

「そうだね。この次元に来て、１０日くらいしか経ってないのにね」

「うん」

「昴くんも疲れた？」

「うん…。あ、いや、俺は平気だけど」

昴くんは少し、ぼんやりとしていた。昴くんに集中すると、お父さんのことを考えていた。

『この次元の父さんのエネルギーっていうか、存在を感じるんだ』

『え？』

『すごく穏やかで、すごく優しくて、すごく喜んでいるような気がする』

『…良かったね』

『うん…。きっと、ひかりのお父さんのこと許して、ひかりのお父さんもすごく穏やかになって…。それに俺の家族を援助してくれるって言ってたでしょ？あれで、父さんすごく安心したみたいな気がする』

『うん、きっとそうだね』

「俺さ、ひかり…」

昴くんは私を見ながら、ぼそって話し出した。

「え？」

「今回のことで、本当に思ったことがある」

「何？」

「どんな大変なことも、辛いと思うことも、苦しいと思うことも、やっぱり、心配しなくても大丈夫だってこと」

「…うん」

「すべてが、愛につながってた」

「そうだね…」

「みんな、みんな、どんな存在も愛だった」

「うん」

「ひかり…」

昴くんは私のベッドの方に来て、私にキスをした。それから優しく頬をなぜながら心の中でつぶやいた。

『すんげえ、ひかりが愛しいよ』

『私も…』

そしてもう一回、キスをした。

『じゃあ、もう寝てね。ゆっくり休んで。ひかり…』

昴くんはそう心で言って、あったかいエネルギーを送ってくれた。
ほんわかあったかくなり、私はすぐに眠りに着いた。

昴くんと出会ってから、まだ7ヶ月しかたっていない。不思議だ。
もっと長い間、昴くんと一緒にいる気がする。

「そりゃそうだよ、ひかり。だって俺ら、地球に来る前から一緒にいるし、もともと同じ魂だもん」

昴くんが夢に現れてそう言った。

「あ、そうか。そうだよね」

「うん」

それからなんとなく、5月の幽体離脱をしたときからのことを、私は思い出していて、それがビジョンで現れていた。

「俺がひかりのことを知ったのは、もっと前だよ」

「私が、離婚してから3ヶ月家にこもってた頃でしょ?」

「うん」

「体に変化もあったの？」

「うん。ぐったりしたり、やる気なくしてたり、変な夢見てうなされてたり…」

「そうだったんだね…」

「鬱になったかと思ったんだ。ちょっとその頃、仕事もハードだったしね…。それである日、本当に具合が悪くなって、体も思うように動かなくなって寝込んでたら、急に魂が抜けちゃって…」

「幽体離脱したの？」

「そう。光に包まれたと思ったら、あの宇宙船にいた」

「そうだったんだ」

「あ、そういえば俺、思い出したんだ。あのとき、俺だけだったように感じてたけど、ひかりいたんだよね」

「宇宙船に？」

「うん。光の人型にはなってなかったけど、俺と同化してたんだ」

「私が？私の魂がってこと？」

「いや…。高い次元のひかりが…。つまり、プレアデス星人のひかりっていってもいいかな」

「……」

「ほら、どの次元にも俺はいて、ひかりもいるから」

「じゃ、宇宙船にいるときの私たちは、あの次元の私たちと同化してるのね？」

「うん」

「そうか…」

「そこで自分のミッションも、ひかりのことも思い出した。そしてひかりのエネルギーを感じて、ひかりの夢の中にいったり、魂になってひかりのそばにいったりしていたんだ」

「その頃、私は昴くんのファンになってて、昴くんのことを画面や、写真で見ていたのね？」

「うん」

「昴くんにあの頃から癒されてた…」

「そりゃそうだよ。だってあの頃から俺、ずっとひかりに光を送ってたんだから」

「ありがとう、昴くん…」

「いいよ…。俺、あの頃からひかりのこと、すごく愛しかったんだよね。ひかりって存在そのものが、嬉しくて…。だから光を送ることは、歓びになっていたよ」

「昴くん…」

夢の中で昴くんを抱きしめた。

「あ、やばいっす。俺、その気になりました」

くす…。

「あれ?今、笑った?」

「だって…、なんか昴くんらしいなって思って」

「何?それ!」

「あはは…」

私が笑うと、一気に場面が昴くんのマンションになり、

「いいよ。そうやって笑ってても、俺、勝手に押し倒しちゃうからさ」

と、昴くんはすねた顔でそう言った。

「昴くん!」

私は思い切り、昴くんの首に手を回して引き寄せると、

「私も、その気になっちゃった」

と言って、キスをした。

「え？え？」

昴くんは少し焦っていた。

『ひかり、夢の中だから？』

「え？」

「なんか、積極的で、俺、ちょっと焦る…」

くす…。

「あ、なんで笑うの？」

「だって…」

昴くん、すんごく可愛いんだもん…。

そして昴くんと、夢の中で抱き合った。夢の中で抱き合ったあと、そのままベッドで昴くんの腕枕で寝ていた。夢の中なのに、昴くんのぬくもりや匂いを感じて、すごく幸せだった。

突然、電話のベルが鳴って、夢の中で驚いてそして目が覚めた。

「あ。電話鳴ってる…」

そう言うと、昴くんは隣のベッドで寝ぼけながら起きて、

「はい…」

と電話に出た。

「あ、夕飯の時間？あれ、ほんとだ。はい…。今ひかりと行きます」

昴くんはそう言うと、受話器を置いた。

「は～～。なんか、夢の中でも俺ら、寝てなかった？」

「うん…」

「あ、そうだそうだ。激しく抱き合っちゃったから、夢の中でも疲れちゃって」

「ええ？そんな激しくなんて…」

私が真っ赤になると、

「あはは！ひかり、真っ赤だ！」

と昴くんは思い切り笑った。

それから私がベッドから出ると、また、手をつないでくれた。

「じゃ、下に行く？」

「うん」

昴くんに手を引かれて、ゆっくりと階段を下りて、私たちは食堂に行った。食堂には、大勢の人がいて、私たちが入り口を入るといっ

せいに、

「おめでとう！」

と拍手で出迎えてくれた。

「さ、ここに座って」

と流音さんに言われて、席に着いた。各テーブルには、鍋が用意されていて、もう、コップにビールやジュースが入れられていた。

「ひかりさんと昴くんは、ジュースでいいのかしら？」

「はい」

私たちがコップを手に持つと、みんなもコップを手にした。

「さあ、ひかりさんが無事に退院できたことを祝して、乾杯しましょう。乾杯！」

ノエルさんがそう言うと、みんなが、

「乾杯！」

といっせいに、声をあげた。私は嬉しくて、涙がこみ上げて来た。

思えば、本当にこっちの次元に来てからハードだったな…。

一口、ジュースを飲むと、

「俺、腹ぺこぺこ！ひかり、食おう、食おう！」

と、昴くんは嬉しそうにそう言った。

周りを見ると、みんな嬉しそうだった。葉月ちゃんと悟くんも、珠代ちゃんと陽平くんも、流音さんと漆原さんも…。みんなから光が飛び出し、きらきらとダンスをしていた。

『奇麗…』

その光を見て、そう思っていたら昴くんが、

『本当だ…。すごく奇麗な光だね』

と、心で言ってきた。

『これから、こんな光ばかりを見ることになるのかな』

『そうだね。だんだんと黒い霧よりも、光を見るようになるんだろうね』

『うん…』

食堂全体が光に覆われ、あったかくて、優しくて、そして楽しい気持ちになった。

きっと、地球全体がこうなっていくんだ…。どんどんこんな空間が、こんな場が広がっていくんだろうな…。そう思うと、嬉しくて、涙がこみ上げて来た。

『昴くん、これからも地球を光で包もうね』

『うん、そうだね。ひかり』

私たちはその日、心ゆくまで楽しんだ。

翌朝、太陽が昇る前に起きて、外の板の間にみんなで集まった。

「おはようございます」

板の間にはもう、白装束姿の白河さんがいた。

「おはよう。さて、これから少し高い次元へと帰って行きましょうか」

「白河さんもですか？」

昴くんが聞いた。

「そうです。ノエルも一緒にですよ」

「こちらでのミッションは、すべて完了ですか？」

「この次元の我々が、あとのことはしていきますよ。この次元のあなたたちと共にね」

白河さんは優しくそう言った。

「もうすぐ、日が昇る…。では、みんな、光をお互いに出し合いましょう」

白河さんは、なにやら唱え出した。同時にノエルさんも唱え出した。
そして、辺り1面光に包まれ、朝日も浴びると、私たちは一回光と同化した。

す～～……。だんだんと体に魂が戻り、床の冷たさを感じ、自分の体重や、冷たい空気も感じた。

「戻ってきましたね…」

目を開けると、そこに夏樹くんがいて、私たちはびっくりした。

「夏樹くん?もっと高い次元に行ったんじゃないの?」

流音さんが聞くと、

「はい。戻りましたよ。俺はこの次元の夏樹です。高い次元の俺から、みなさんのことを迎えに行って欲しいといわれ、ここに来たんです」

「なんで、今日戻ってくると知ってたの?」

私が聞くと、

「私が、低い次元の夏樹くんに連絡しておいたのよ」

とノエルさんが言った。

「そうです。もっと高い次元でもあなたたちが戻ってくるのを、待っていますよ。すぐに戻りますか?」

「…ええ」

ノエルさんがそう答えた。

「あの！」

昴くんが夏樹くんの方を向いて、

「この次元の夏樹さんのお父さんは、どうしているんですか？」

と質問をした。

「はい…。すっかり穏やかになりました。白河さんのことをたたいていましたが、自ら、２０１２年に地球は破滅しないと発言して、白河さんの言うことの方が正しいのではないかと、そう思いなおしたと、メディアでも発表し、みんなを怖がらせるような本を出したことを詫びて、白河さんをたたいたことも詫びたんです」

「じゃ、もう白河さんの教団は…」

「はい、もうここも静かになりました。カメラマンも、レポーターももう来ていないですよ」

「そうだったんだ。良かった」

「夏樹くん、私たちが不在の間、教団を守っててくれてありがとう」

白河さんがそう言うと、

「いいえ。とんでもないです。みなさんのおかげで、父の体も回復したのですから、このくらい当然のことです」

と夏樹くんは答えた。

「え？」

私たちが、聞き返すと、

「高い次元の父の病気、すっかりよくなったんです。いきなり元気になって、医者たちも驚いてるようですよ」

夏樹くんはすごく嬉しそうに言った。

「そうだったの。よかった…」

私は心底、ほっとした。

「この次元の父も、本当に変わりました。低い次元で父が変わると、こんなにも違う次元の父も、変わるんですね」

「良かったわね、本当に」

ノエルさんは、優しく微笑みながらそう言った。

「さあ、夏樹くん、もうお父さんや兄弟のもとに、戻ってくれたまえ。私たちが戻ったから、教団の方はもう、大丈夫だ」

白河さんがそう言うと、夏樹くんは首を横に振った。

「いいえ…。俺もここで、手伝わせてください」

「え？」

「高い次元の俺も、白河さんのお屋敷で、瞑想の会のお手伝いしています。この次元でも、何か手伝いたいんです」

「そうか。ありがとう、夏樹くん」

白河さんが、穏やかにそう言った。

「この次元ではそろそろ、教団を解散しようと思っている。そして瞑想の会を開いていこうかと思っているんだよ。それを手伝ってくれるか？」

「はい。もちろん、喜んでお手伝いします」

夏樹くんがそう言うと、ノエルさんも白河さんも優しく微笑み返した。

「では、そろそろ、高い次元に戻るとするか？」

「はい…」

また、白河さんとノエルさんが、唱え出し、光を思い切り出した。私たちもお互いが光を出し合って、光で包み込んだ。

朝日もその光と同化した。一瞬、その光になった。それからまた、すっと体に戻ってきて、重力を感じた。

「おはようございます。待っていましたよ」

夏樹くんの声がまたした。目を開けると、そこには、夏樹くん、春彦くん、冬美さん、そして、海藤玄さんの姿があった。

「玄さん！」

白河さんが海藤玄さんのもとに歩み寄り、

「元気になったそうだね。良かった」

と手を握りしめていた。

「ああ。君や、子どもたちのおかげだよ…」

海藤玄さんはそう言うと、深く頭を下げた。

「良かった…。本当に良かった…」

白河さんは、目に涙を浮かべていた。その隣で、冬美さんも涙を流していた。

「話は全部、夏樹たちから聞いた。ひかりさん…」

海藤玄さんが私に、声をかけてきた。

「はい？」

「すまなかったね…。低い次元の私は、とんでもないことをして、あなたを苦しませたようだ」

「いいえ。大丈夫です」

私はそう言って、昴くんの手を掴み立ち上がった。

「体に、後遺症が残ったと聞いたが…」

海藤玄さんは、すまなさそうな顔でそう聞いてきた。

「ちょっと足をひきずるくらいなんです」

と私が言うと、

「ひかりさん、ちょっと一人で歩いてみない？」

とノエルさんがそう言った。

「え？はい」

私は昴くんの手を離し、歩き出だした。

「あ、あれ？」

すごく足が軽い。普通に歩ける。

「やっぱり…」

ノエルさんは、微笑みながらそう言った。

「え？どういうことですか？」

昴くんが、ノエルさんに聞くと、

「低い次元では後遺症が残ってしまったけど、この次元では関係ないと思うわ」

「え？」

「さっきの、ここよりも少し低い次元でも大丈夫だと思う」

ノエルさんはそう付け加えた。

「じゃ、この次元のひかりには、まったく後遺症は残ってない？」

昴くんがノエルさんにまた、聞き返した。

「そうよ。ね？ひかりさん、普通に歩けるでしょう？走ることもできるんじゃないかしら」

「……」

私はその場でジャンプをしてみたり、屈伸をしたりした。そして板の間から階段をおり、靴をはくと、辺りを軽く走ってみた。

「全然大丈夫です！ノエルさん！」

と私が大きな声で言うと、板の間にいたみんながいっせいに、

「ひかりさん、良かった！」

と声をあげた。昴くんは走って寄って来て、私に抱きついた。

「ひかり！」

「昴くん…」

嬉しかった。でもどこかで、低い次元で後遺症が残った私のことを思うと、心底喜ぶことはできなかった。それは昴くんも、同じように感じていたようだ。

「ひかり、低い次元のひかりのことは、その次元の俺が、全身全霊込めて守っていくから…。ね？」

「うん…」

抱きしめながら、昴くんがそう言ってくれた。

私たちは、食堂に移動した。そこにはもう、朝食の用意がされていた。みんなで朝食をとった。それから、夏樹くんや、春彦くんの車に乗り込み、みんなそれぞれの家に帰っていった。

私は、私の家まで送ってもらった。私が車を降りる時、

「ひかり、あとでまた会おうね」

と昴くんが言った。

「うん。それと、夏樹くん、送ってくれてありがとう」

「はい。また本山に方に来てください。いつでも待ってますから」

と夏樹くんはにっこりと微笑みながら、頭を下げた。車は発進した。車を見送ってから、私は家に入っていった。

「おかえり！」

母が玄関まで走って、出迎えてくれた。

「ただいま」

母の笑顔を見たら、すごくほっとした。低い次元の母は、少し顔色も悪く痩せていた。でもこの次元の母は、ふっくらとしてて顔色もいい。後ろから父も顔を出し、

「おお、ひかり、おかえり。旅行はどうだった？」

とにっこりと笑いながら、聞いてきた。

「あ、おみやげ、忘れた」

と言うと、

「ははは。まあいいさ。ひかりが無事に元気に帰って来たんだ。それだけで…」

と父は、笑った。ああ…。私は思わず、涙がこぼれそうになった。

もし、私が低い次元で死んでたら、この次元の私もいなくなってたんだ。帰ってくることはできなかったんだ。そうしたら、父も母もどれだけ、悲しんだだろうか…。そう思ったら、胸がいっぱいにな

った。

私、本当に元気に生きて、戻ってくることが出来てよかった…。ごめんね、そしてありがとうね、お父さん、お母さん…。心で私は二人に、そう言って、光を放った。父からも母からも、奇麗な光が出て、私を包み込んでいた。

それから自分の部屋にいき、パソコンを開いた。私の小説はすごいことになっていた。「今このときを愛してる」も、「２０１２年愛と光の地球」も、毎日何万という、アクセスがある。

＞本が出版されると聞きました。楽しみにしています。

とか、

＞映画化されるんですね。天宮昴くんが主演なんですね。すごく楽しみ。圭介役にぴったりですよね。

など、そんな感想が多かった。

この次元でも、すごいことが起きているんだな…。

『ひかり、今日、午後会えない？』

昴くんが心で聞いてきた。

『うん、会えるよ。何もないもの』

『俺、明日から仕事なんだ。夜だけなんだけどさ…。だから、泊まっていかない？』

『え？

『駄目？』

『旅行から帰って来たのに、いきなりもう泊まってきたりしたら…』

『怒られちゃう？』

『怒られないけど…。今日は家にいて、こっちの両親といたいな…』

『そっか…。わかった』

『でもこれから、行くよ？』

『うん。待ってるよ』

私は、着替えをして一階に下り、母が淹れてくれたコーヒーをゆっくりと飲んだ。それから、

「ちょっと出かけてくるね」

と言うと、

「あら、疲れてないの？大丈夫？」

母が私にそう聞いてきた。

「うん、大丈夫…」

私はそう答えて、昴くんのマンションへと急いだ。

ちょうど、昴くんの家に着いたのは12時頃。玄関を入ると、いい匂いがした。

「和風スパ。作ったんだ」

昴くんがそう言って、にこって笑った。

「あ、覚えててくれたの？私が食べたがってたのを…」

「もちろん」

昴くんはそう言うと、私をダイニングの椅子に座らせた。それから、スパゲッティとサラダを持って、テーブルに並べだした。

「ひかり…。あのさ…」

昴くんも椅子に座って一緒に食べだすと、昴くんが話しかけてきた。

「何？」

「一緒に暮らさない？」

「……」

私は何も答えなかったが、昴くんは私の気持ちを察していた。

「うん。俺も…。俺も、ひかりといつも一緒にいたいって思ってた。だから、一緒に暮らそうって言ったんだ…」

そうだ。私も同じ気持ちだった。だからなんだか、すごくそう言っ

てくれて嬉しかった。

「昴くん…」

「うん？」

「愛してるよ」

「俺もだよ」

「昴くんと、新しい地球でも生きていきたい」

「愛と光になった地球で、でしょ？」

「うん」

「それまで、まだ少しあるよ。その間は俺ら、ミッションがあるんだよ」

「うん。光で闇を包む…」

「そう。それにはさ、俺ら一緒にいていちゃついてるのが、1番なんだから。ね？」

「うん」

私は、にこって笑ってうなづいた。

その日の夜は、家に兄も戻ってきて、親子みずいらずでご飯を食べた。

「私ね、昴くんと一緒に暮らそうかと思ってるの」

私は唐突に、そう言い出した。でも、父も母も兄も驚かなかった。

「そうか…。籍はいいのか？」

「え？」

「結婚は考えてはいないのか？」

父がそう聞いてきた。

「うん。まだ…」

「そうか…」

父は、うなづいた。そして何も言わずに、お酒をくいっと飲むと、

「ひかりが幸せでいるのが、１番だから…」

と優しいまなざしでそう言ってくれた。母も兄も、反対しなかった。

そして、

「さあ、ひかりも飲む？」

とお酒をついでくれた。私もおちょこに一杯だけ、もらって飲んだ。

ひさしぶりの我が家と家族…。ものすごく心があったかくなり、私は幸せをかみしめていた。

低い次元の両親も兄も、私を愛してくれてた。そして私も、家族を愛していた。どんな次元にいても、愛しくて大事な存在だ。感謝の気持ちもいっぱいになり、私は思わず泣いてしまった。

「あら、やだわ、この子ったら泣き上戸なの？」

母は笑ってそう言ったが、目には涙が浮かんでいた。

お風呂に入り、昴くんを呼んでみた。

『ひかり？』

『あのね…。昴くんと一緒に暮らしたいってそう言ってみた』

『ご両親に？』

『うん。そしたらね…』

『うん…』

『思い返すね…』

私はその時の記憶を思い返した。

『そっか…。なんか、嬉しいね。俺まで感動しちゃった』

『うん…』

『あ、そうだ。さっきさ、母さんから電話があって…』

『え？』

『正月に家に帰ってきもしないでって怒られた。で、明日仕事行く前に、顔見せてくる』

『うん』

『ひかりも来ない？』

『え？私？』

『両親に紹介しておきたくて…』

『う、うん』

ちょっと、どきまぎしてしまった。

『あはは、大丈夫だよ。うちの両親だって、ひかりと付き合ってるのは知ってるよ』

『でも、１０歳も年上だよ？』

『関係ないよ。そういうことあまり、気にしない親だからっていうかさ、うちも母さんの方が年上だよ？』

『え？そうなの？』

『うん。４歳上だったかな』

『たったの？』

『だけど、年上は上だから、同じだよ』

そうかな…。

『大丈夫だから！じゃ、新宿駅で待ち合わせね。わかった？朝早いよ。8時の電車だよ』

『うん。場所はまた教えて』

『うん。それじゃおやすみ』

『おやすみなさい』

わあ…。いきなり昴くんのご両親に会うことになった。わあ。ドキドキする。

そして、思い出した…。ああ、低い次元では、昴くんのお父さん亡くなったんだ…。昴くんはどんな気持ちなんだろうか…。

ミッション8　一緒に暮らす

翌朝早くに、目を覚まし、朝食を作っていると母が起きてきた。

「あら、早いのね」

「うん、いきなり山梨の昴くんの実家に、行くことになって」

「え?!」

母がものすごく驚いていた。

「昴くん、今日実家に行ってくるんだって。それで、ご両親に会って欲しいって言うから」

「あ。あらまあ。じゃ、あなた、何か手土産でも持っていかなくちゃね!」

「ああいいよ。新宿駅で何か買うから」

「そう?何時の電車?」

「8時。新宿駅のホームで待ち合わせ」

「それじゃ、早くに食べて出ないとね」

「うん」

母は、コーヒーを淹れてくれた。私は朝ごはんを済ませると、すぐ

に支度をして家を出た。

駅の待ち合わせ場所に着くと、そこに全身黒づくめの昴くんが、悠然と歩いてやってきた。

「おはよ、ひかり」

昴くんは、小声でそう声をかけた。

「おはよう」

私も小声で答えた。

「免許取ったら、車で行くのにね…って、車がないか」

昴くんはそう言いながら、自販機で缶コーヒーを2本買った。それから、来ていた電車に乗り込んだ。

「8時ちょうどのあずさなんだね…」

と私がそう言うと、

「うん、それが？」

と、昴くんはぼけっとした顔で聞いてきた。

「あ、いいの。知らなかったらいいの、いいの」

と言いつつも、私の頭の中は「狩人」の「あずさ2号」が流れていた。

「これ、5号だよ」

昴くんが言ってきた。

「だからいいってば…」

そう言ってもまだ、昴くんはきょとんとした顔をしていた。

8時ちょうどに、電車が動き出した。

「なんかさ、ひかりと電車で旅って言うのもいいね」

昴くんは嬉しそうだった。

窓の外の景色を見たり、缶コーヒーを飲みながら話をしたりして、あっという間に山梨についた。

改札を出ると、

「昴！」

と、手を振っている人がいた。

「あれ、俺の母さん」

昴くんが教えてくれた。わあ。ご対面だ～～。

「朝早くから、迎えに来てもらっちゃって悪いね～」

と昴くんが言うと、

「何言ってるのよ～～。みずくさいわね」

と、お母さんは笑った。それから私を見ると、

「この人があんたの彼女…？」

と聞いてきた。

「うん。星野ひかりさん」

昴くんがそう言うと、

「ひかりさん、よろしくね」

と昴くんのお母さんは、にこって笑った。

「はい。よろしくお願いします」

私はカチンコチンに固まり、お辞儀をした。

「そんなに緊張しないで～～。ささ、車に乗ってね」

「はい」

昴くんのお母さんは明るい人だ。昴くんの無邪気で明るいところは、お母さん似なのかな？顔も似ていた。

『うん、俺どっちかっていったら、母さん似だってよく言われる』

『やっぱり？』

「父さんは元気にしてた？」

昴くんはお母さんに聞いた。

「父さんね～～」

「え？どうしたの？何かあった？」

「変な夢を見たって言ってね…。とにかく今日、あんたが帰ってくるって知ってから、話があったからちょうど良かったって言って。変って言えば、変ね…」

「どんなふうに？」

「だから、変な夢を見たとか、その夢の昴は彼女と一緒にいて光を出すんだとか、わけのわからないことを言うのよね…」

「え？」

私と昴くんは、同時に驚いていた。その夢って、まさか、低い次元で起きたこと…？私も昴くんも、お父さんに会うのが、ドキドキしてきていた。

１５分くらい車を走らせただろうか。昴くんの家に到着した。

車を降りて家に入ると、

「ただいま～～！」

と昴くんは大きな声を出した。その声で猫が2匹飛んできた。あ、夢で見た、にー坊とかっちゃん。か、可愛い～～！！！昴くんの足にかっちゃんがじゃれつき、にー坊は私の足のそばで、くんくんしていた。

にー坊を昴くんはひょいと抱き上げ、ほほずりをすると、

「ただいま！」

と、にー坊に嬉しそうに言っていた。

「にゃ～～」

にー坊も嬉しそうに鳴いた。

「さ、ひかりさん、上がって、上がって」

お母さんにそう言われて、私は家に上がった。

「お邪魔します」

歩き出すと、今度はかっちゃんが私の足にじゃれついてきた。

「あれ？さすが、かっちゃん。ひかりの足にじゃれつくとは…」

『どういうこと？』

『こいつ、知らない人にはなつかないし、寄り付かないんだよね。

でも、ひかりから俺と同じ波動感じてるんじゃないの？やっぱ、動物って敏感なのかもな』

『そうか…』

「お父さん、昴、帰って来たわよ」

とお母さんは、奥の方に向かってそう叫んだ。

「やあ、やあ、おかえり、昴」

奥の襖が開き、お父さんが顔を出した。すごく優しそうな、温厚そうな顔つきだった。

「あ…、ただいま…」

昴くんは一瞬言葉を失い、それから声を出したっていう感じだった。

『なんか、ちょっと、嬉しい』

『え？』

『低い次元では、もう、父さんの姿も見れないじゃんか。でも、ここじゃ会えるんだもん。嬉しいよ』

『そうだよね』

『めっちゃ、抱きつきたいくらいだ』

『抱きついちゃえば？』

『ま、まさか！』

昴くんは心でそう言うと、黙ってリビングの方に入っていった。昴くんの家は、外から見ても大きいが中も広かった。

「ゆっくりできるのか？昴」

昴くんのお父さんが聞いてきた。

「ううん。夜仕事だから、とんぼ帰りするよ」

「なんだ、泊まらないの？」

お母さんががっかりしていた。

「でも、昼ごはんは食べていって。たくさん作ったから」

「うん」

お母さんは、リビングを出て行った。

「父さん、母さんから聞いたけど、変な夢を見たって？」

「ああ。それがな、お前とひかりさんが出てきて、お父さんに向かって光を出してくるんだ。そりゃもう、まぶしい光でな…。その光を浴びたら、すんごい気持ちが良くなって、ふわふわ宙を浮くような気持ちになって、父さん、そのまま成仏しちゃったっていう変な夢だよ」

「そうなんだ…。あ、でも父さんはこうして生きてるわけだし…」

「ああ、ああ。そりゃそうだ…。だけど、やたらとリアルな夢だった」

「へえ…」

昴くんは、それ以上何も言わなかった。

お昼になり、みんなでご飯を食べた。それまでは、昴くんの部屋に二人でいた。昴くんの部屋は、勉強机や本棚、ベッドが置いてあり、昴くんがここで暮らしていたままになっているようだ。

昴くんの部屋も、昴くんの匂いがした。本棚にはマンガが並んでいて、それからゲームやＤＶＤも並んでいた。それらを見てると、ついこの前まで普通の男の子だったんだなって、そんなことを感じた。

それから、子供の頃からのアルバムを見せてもらった。どれもこれも可愛くて、全部をもらっていきたくなった。

『やばいな～～、もう』

「何が？」

昴くんが心の声を聞き、聞いてきた。

「だって、赤ちゃんの頃から、めちゃ可愛い！」

「俺？」

「うん」

「そうかな」

「中学生の頃、もてなかった？」

「どうかな。もう芸能界にいたから、それでちょっともててた時期もあったけど」

「へ～～」

「でも、やっかむやつもいて、いじめにあったんだ。それで気づいた。俺、有頂天になってるっていうか、天狗になってたかなって。それからは、勉強も運動も部活もやったし、委員会も参加した。仕事の量は減らしたんだ」

「なんで？」

「う～～ん。中学生を満喫したいってのと、もっと友達欲しくなって…。それから、やっかむやつとも仲良くなった」

「すごいね～～」

私が感心してそう言うと、

「え？何が？」

昴くんは、きょとんとしていた。

「だって、昴くんて前向き。プラス思考だよね」

「そうかな？」

「自覚無し？」

「能天気なんでしょ？どうせ」

「ふふ。そういうところもあるけど、でも、ちゃんと自分に起きたことを受け止めて、自分のためにしてるところがすごいって思うよ」

「そりゃそうだよ。自分のために、すべてのためになるようなことしか、起きないんだから」

「そういうの、子どもの頃からわかってたの？」

「いいや、まさか！そんなふうに思えるようになったのは、宇宙船に行ってからだよ」

「ふうん…」

「でも、なんとなくは知ってたのかもね」

「そうだよね」

アルバムをめくると、昴くんが女の子と二人で写っていた。

「あ、これ、女の子とツーショット」

『やべ…』

心の声が聞こえちゃった。別にやばいことないのに。

「あ、聞こえた？」

「うん。彼女？」

「うん。初めて付き合った子」

「奇麗な子だね。大人っぽい」

「そう？」

「今、どうしてるの？」

「さあ？」

「中学の同級生でしょ？この辺に住んでるんじゃないの？」

「高校卒業してすぐ、東京出たようなことは聞いた。でも、詳しくは知らないよ」

「ふうん」

昴くんと付き合ってたなんて、今頃自慢してたりして。

「それはないかな」

「え？なんで？」

「俺、ふられたし」

「え～～～?昴くんが?!」

「うん…。女の子とどう付き合っていいかわからなかったから、部活ばっかりやってたら、なんか怒っちゃって、3ヶ月でふられた」

「たったの?」

「うん」

「……」

「今、呆れた?」

「ううん…。そのあとは?誰かと付き合わなかったの?」

「芸能人と…」

「え?!」

「映画で、相手役だった子と…」

「そうなの?いつ?」

「高2の時だよ」

どの映画だろう…。

「いいじゃん、もう過去の話しだし」

「それは長く続いたの？」

「半年くらい」

「そんなもの？」

「うん。お互い忙しかったし、あんまり会えなくて、向こうに俺以外に好きな人できて…」

「また、ふられたの？」

「う～～ん。俺もその頃、他にいいなって人がいて」

…昴くん、実は、ほれっぽい？

「あ…。役でさ、恋人役するとどうしても、もしかして好きかな～～って勘違いをお互いしちゃうんだよね」

「え？」

「そのあとに好きになった子も、ドラマで恋人役だったの。で、お互い、好きあってるかもって、デートしたりして…。だけど、ドラマ終わって二ヶ月もすると、あれ？なんか違うかなって…」

「そんなものなの？」

「うん」

「ふうん…」

中学の卒業式の写真、まだまだ幼い感じがした。

「昴くんって、ここ最近だよね。ぐっと大人っぽくなったの…」

「ええ？いつもガキ扱いしてるじゃんか」

「そんなことないよ。大人っぽいし、セクシーだし…。まだ、この頃は少年らしさが混じってるって感じだよね」

「中学生だもんな～」

「高校の写真はないの？」

「ああ。俺のマンションだ」

「なんだ～。じゃ、今度遊びに行ったとき、見せて」

「遊びに？もう、俺んち来るんでしょ？」

「え？」

「一緒に暮らすじゃんか」

「あ、そっか」

「ベッド、もともとセミダブルにしておいて良かった」

「なんで、セミダブルにしてたの？こういうのを予想してたとか？」

「ちげえよ。シングルってすごく小さいから、あんまり寝返りとか

うてないかなって思ってさ」

「私と寝たら、狭くなるよ。いいの？」

「いいの！べったりくっついて寝るのがいいんじゃん！」

昴くんは思いっきり、嬉しそうに笑った。いや、にやけた…。

「え？にやけてた？俺…」

「うん…」

昴くんとそんな会話をしながら、アルバムを見てて、お母さんからご飯よって呼ばれた。ダイニングに行くと、たくさんのご馳走が並んでいた。

「さ、食べてね」

「いただきます！」

昴くんは嬉しそうに食べだした。

「これ、どれも俺の好物」

と、口にいっぱいほおばりながら、そう言った。お母さんの作ったご飯は本当に美味しくて、やばいって思った。

『何が？』

『私、こんなに料理できないよ？』

『いいよ。別に』

でも、一緒に暮らしても、こんなに美味しいもの食べさせてあげられない。

『いいって。ひかりが作るものならなんでも、美味しいって』

……。昴くんの方が上手かもしれない。

『なら、俺が作ってあげるよ』

あ～～もう、そうやって、優しい言葉を言うから私…。

『何？』

『甘えちゃうんだよね…』

『甘えてもいいのに？』

『……。そっか』

『そうだよ。甘えてもいいんだよ？』

『うん』

心でそんな会話をしながら、ご飯を食べた。

お腹いっぱいになり、二人でしばらくお父さんとリビングで話をした。昴くんは、お父さんを見る目が、嬉しそうだった。そうだよね

…。低い次元では、悲しい思いをしたんだもんね。

お父さんは、昴くんのドラマの話や、今度の映画の話を聞きながら、時々助言をしていた。きっといつも、こんななのかな…。

そして3時になり、またお母さんに車で送ってもらった。

「ひかりさん、またいつでも遊びに来てね」

お母さんがそう言って、にっこりと笑った。

「はい…。ありがとうございます」

「じゃ、昴、体に気をつけて。仕事頑張ってね」

「うん。じゃね…」

昴くんは、そう言ってその場を去ろうとしてから、また、すぐにお母さんのもとに駆け寄り、

「あ、言い忘れてたけど、これからは、急に俺んちにやってくるのはやめてね」

と小声で言った。

「あら、なんで？いないときがあるから？」

「いや、俺、ひかりと暮らすことにしたからさ、一応来る前には連絡いれて」

「あら、まあ、そうなの？」

お母さんはかなり驚いていたが、

「そ、それは事務所の人には？」

「内緒…」

「あら…。わかったわ。じゃ、私も誰にも言わないでおくわ」

お母さんは目配せをしながら、そう言った。

「サンキュー。そんじゃ、また、そのうち休みができたら来るね」

「はいはい。じゃあね。ひかりさん、昴をよろしくね」

「はい…」

お母さんは、にこにこしながらしばらく私たちに手を振ってくれていた。

帰りの電車では、昴くんはなんとなく静かだった。

「いいお母さんとお父さんだね」

「うん」

「仲いいんだね」

「うん」

「？」

昴くんに集中してみると、なんだか感動しているようだった。

「あ…。父さんに会えて、なんか嬉しかったのと…」

「うん」

「ひかりと暮らすこと、あっさり認めてくれて嬉しかったのと…」

「うん」

「家族っていいな…ってなんだか今、そんなこと感じてたんだ」

「私も…。昨日の夜、みんなで夕飯食べててそう思ってた」

「やっぱり？」

「また、うちにも来てね。お母さんもお父さんも喜ぶと思うよ」

「うん…」

昴くんは私の顔を優しく見てそう言うと、

「低い次元でも、家族と幸せにやってるんだろうな…」

とつぶやいた。

「うん、きっとね…。私ね、どの次元にいても、家族を愛してたよ」

「ああ。俺も…」

そう言って、私たちはしばらく黙った。私は昴くんの肩にもたれてみた。昴くんは優しいエネルギーで思い切り包んでくれて、あったかかった。

新宿に着いた。昴くんはそのまま仕事場に直行をして、私は家に帰った。家に入ると、母が玄関に飛んできて聞いてきた。

「ひかり!どうだった?昴くんのご両親」

「うん、お母さんは明るくて、お父さんは優しい人だったよ」

「そう…。あんた、嫌われたりしてないでしょうね」

「う、うん。多分大丈夫だと思うよ」

「良かったわ~~」

そんな、お母さんが心配したり、ほっとしなくても…。

「これでもう、大丈夫ね」

「何が?」

「いつ籍を入れても」

「い、入れないから」

「結婚する気はまったくないの？」

「今のところはね」

「昴くんは？」

「まだ、１９歳なんだよ？」

「そうよね～～。若すぎだわよね…」

そうだよ。ほんとにもう…。結婚なんて、関係ない。ただ一緒にいたい。それだけだもの。結婚とか、入籍とか、そういうものに縛られたくない、そんなことすら思ってしまう。

その日、昴くんは仕事で相当、集中しているようだった。お風呂に入り、私は低い次元の私にコンタクトしてみた。

『高い次元の私？』

『そう…。声聞こえた？』

『うん』

『どう？そっちの次元』

『今日、昴くんが実家に行くって言うから、一緒に行ったの』

『え？同じだ』

『本当？じゃ、結婚の話も出た？』

『け、結婚？』

『出ない？』

『うん』

『そうか～～。あ、昴くんのお父さんに会って、なんだか二人で感動した』

『え？』

『もっと低い次元では、昴くんのお父さんは亡くなっていたから』

『うん。この次元の昴くんも、感激してたよ。お父さんに会えたこと』

『うん。もっと家族を大事にするって、昴くん言ってたよ。それで結婚の話になったの。結婚したら、ひかりも俺の家族なんだなって…』

『そうか…』

『だけど、２０歳の誕生日を迎えてから考えるって。今は、一緒に暮らそうって言われた』

『あ、そっちの次元でも？』

『うん』

『そっか…。あ、もっと低い次元の私ともコンタクト取れるのかな？』

『わからないけど、試してみたら？』

『うん、やってみるよ』

私は、そのまま少し派動を下げて、私を呼んだ。

『誰？』

声がした。

『高い次元の私！』

と言うと、相当驚いていた。

『こんなふうに、話ができるの？』

『うん。出来るのよ。どう？その後』

『本山で、ノエルさんから瞑想を教わったの』

『そう。昴くんも一緒？』

『うん…。しばらくは、ここで泊まることになると思うけど、そのうち、昴くん仕事見つけて、二人で暮らそうって』

『そう…』

『高い次元の海藤玄さん、元気になったの？』

『なったよ。すごく元気に…』

『良かった』

『昴くんのね、お父さんに今日会ったよ』

『え？どこで？幽体離脱して、魂で会ったの？』

『ううん。こっちの次元のお父さんは生きてるから…』

『あ、そうか…。昴くん、どうしてた？』

『感激してた。嬉しそうだったよ』

『そう…。良かった』

『昴くんは、元気？』

『うん。あ、高い次元の私も、足、ひきずってるの？』

『ううん。なんの後遺症もないよ』

『そう…』

私は複雑だった。

『あ、私のこと、気にしないでね。昴くんが本当に優しくて、自分の足が不自由なことも、時々忘れちゃうの』

『…うん。昴くん、本当に優しいもんね』

『うん、だからね、私は今、すごく幸せ』

『そうだよね』

『これからも、時々コンタクトとってね』

『うん。わかった。じゃあね。お風呂だから、もう出るね』

『うん』

私は低い次元の私と、交信を終えた。お風呂を出て、ベッドにドスンと横になった。これから、私はゲラ刷りが待っている。それから、本が出版されたら映画化だ。

忙しくなるのかな…？だけど、いつもやっぱり未来ではなく、いまここにいよう。今この瞬間をしっかりと受け止め、味わっていこう…。

その日の夢の中では、昴くんは猫とじゃれていた。そのあとお父さんも出てきて、昴くんに光を送っていた。このお父さんは、もしかしたら低い次元のお父さんの魂かもしれない。

私は昴くんの夢の中で、昴くんと同化していた。

「ひかり！？」

いきなり昴くんが、猫と遊ぶのをやめて私を呼んだ。私は昴くんの

体から離れた。

「なあに？」

「あ、良かった。いた！」

昴くんは嬉しそうに私に抱きついて、しっぽをぐるぐる振り回していた。

「このしっぽは、犬だよね？」

「ワン！」

「猫じゃないよね」

「ニャア…」

え？いきなり昴くんのしっぽは、猫のしっぽに変わった。面白いな～。

「ひかり…」

「ん？」

「今日も昨日も、俺、一人でベッドで寝てるじゃんか」

「うん」

「低い次元では、１０日間、まるごと一緒だったじゃんか」

「うん」

「二日間だけでも、寂しい…」

「え？」

「早くにうちに来て」

「うん。わかったよ」

昴くんは私がそう答えると、また、しっぽをぐるぐる振り回し、私に抱きつく…。

「愛してるよ。ひかり」

ってそうささやきながら。

朝起きると、ポストに分厚い封筒が入っていた。

「あ、来ちゃった」

ゲラ刷りの原稿だ。さあ、これを1週間でチェックしなくちゃ…。

それと同時進行で、私は昴くんの家に、自分の持ち物を運び始めた。と言っても、当面着る服や、化粧道具や、パソコンや、そんなものだけだったが…。

そして1週間後、昴くんとの生活が始まった。昴くんはドラマの出演が決まり、夜遅くに帰宅した。私はもう合鍵を作っていて、昴くんの部屋で待っていた。

『ひかり！いる？』

昴くんの声がした。

『うん、いるよ。昴くんはどこ？』

『タクシーでもう帰るところ』

『おなかはすいてない？』

『すいてる！』

『じゃ、何か食べる？雑炊か、おにぎりか…』

『おにぎり？』

『うん。あ、焼きおにぎりとか…』

『うまそう！』

『じゃ、作っておくね』

『うん！』

昴くんは、ものすごく嬉しそうなエネルギーを送ってきた。あ、本当にものすごく喜んでる…。

『ただいま！』

昴くんはどうやら、マンションについたらしい。そして、それからあっという間に、玄関にたどり着いた。走ってきたのかもしれない。

『ひかり！』

私が玄関を開けると、

『ただいま～～！』

と心で言って、抱きついてきた。

『おかえり』

私も心でそう答えて、ドアを閉めた。

「ひかり…」

昴くんはいきなりキスをしてきて、また抱きついた。

「す、昴くん、とりあえず、靴脱いで部屋入ったら？」

「うん！」

昴くんは慌てて靴を脱ぎ捨て、私に張り付いたまま、部屋に入ってきた。

「すげえ…。なんか、新婚みたいだ！」

「ええ？」

昴くんがいきなり、そんなことを言うから笑ってしまった。

「あ！焼きおにぎり！」

昴くんは、リビングのテーブルに置いてあった焼きおにぎりを、嬉しそうにほおばった。

「ああ。手も洗ってない～～」

「ほふほふ…。熱い」

「焼いたばっかりだもん。やけどしないでね」

『もう、やけどした…』

ええ？ほんとにもう…。そういうところは、子どもなんだから。

昴くんは満足すると、お風呂に入りにいった。一緒に入ろうと言われたが、もう、一人で入っちゃったよって言ったら、ものすごくがっくりしたらしい。肩を落としてバスルームに向かっていった。

だけど、すぐに機嫌が直ったらしく、バスルームから鼻歌まで聞こえた。

あいかわらず、やっぱりバスタオルで頭を拭きながら、バスルームからやってきた。口には歯ブラシをくわえてる。

そして歯を磨き、髪を乾かすと、横で昴くんをぼ～って眺めてた私に向かっていきなり、抱きついてきた。

「お待たせしました〜〜」

「お、お待たせ？」

「うん。待ってたでしょ？」

「え？」

「え？じゃなくって…。ひかり、ご飯を待てって言われた犬みたいだったよ」

「ええ？どういうこと？」

「俺のこと、ずっと、じ〜〜って見てたじゃん」

「ち、違うよ！それはただ、なんとなく、その…。昴くんと一緒に暮らせる喜びをかみしめてたんだよ」

「うん。それで〜〜、思い切り抱き合っちゃおうって思ってたでしょ？」

「え？思ってないよ」

「また〜〜。そうやって、すぐに隠す」

「え？」

「心の声、聞いてたよ。俺ずっと」

「え？な、何思ってた？私」

「昴くんの髪って、やわらかいんだよね…とか、昴くん、なんだかちょっと胸板厚くなったかな…とか」

う…。思ってたかも。

「昴くんの鎖骨奇麗だよね、とか。指も奇麗だな…とか。そりゃもう、聞いてて恥ずかしくなるようなことばかり…」

「え～～！そ、そんなの…。いつも思ってるし、前にも言ったじゃない。私」

「そう…。で、早く抱きしめて欲しいな…って」

「そ、それは思ってない！」

「……。思ってたよ…」

「……」

お、思ってたかも…。

「あはは！真っ赤だ、ひかり！」

そう言うと昴くんは、キスをしてきた。それから顔をあげると、

「ひかりってほんと、可愛いよね」

って、めちゃくちゃ、熱いまなざしで見ながら言ってきた。でもきっと、私も負けないくらい熱い目で昴くんを見てただろうな…。

昴くんはドラマの収録が始まり、すごく忙しくなりだした。他にも、写真集の仕事、ＣＭの仕事など、続いて入るようになった。帰りも夜中だったり、朝がた近かったりする日もあった。

私は昴くんが遅い日は、寝ずに原稿をチェックしながら待っていた。昴くんは寝てていいのにって言ってくれたが、私は昴くんが帰って来るのを待っていて、「おかえり」って言いたかったし、それに同時にベッドに潜り込んで、眠りにつきたかった。

それに、先に寝てていいよって言いながらも、私が起きて待ってて玄関で出迎えると、昴くんは抱きついてきて、

「ただいま。ひかり～～」

って、いつも喜んでいた。そして、疲れきっていたとしても、やっぱりべたべたにくっついたまま、眠りにつく。私は、そんな昴くんをいつも、光で包み込んでいた。

昴くんは家にいても、台本を読んだり台詞を覚える時だけは、真剣そのもので、その時の集中力はものすごいので、話しかけられないほどだった。

「すごいね、その集中力」

と、ひと息ついてる時に言うと、

「ひかりもじゃんか。小説の原稿読んでる時のひかり、話しかけられないオーラ出てるよ」

と言われてしまった。ああ、自分のことは、気づけてなかったな。そういえば、私が原稿を読んでいる時、昴くんは絶対に話しかけてこなかったっけ。

そんな時、昴くんは黙ってコーヒーを淹れて、テーブルに置いてくれて、昴くんが台本読んでる時には、私がコーヒーを淹れ、そっと置いたりしていた。

だけど、台本を読んだり、原稿をチェックしたりしないですむ日は、めちゃくちゃいちゃついていた。

一緒にお風呂も入る。一緒にご飯も作る。べったりくっついてテレビも見るし、私は昴くんの足の爪を切ってあげたり、耳掃除もしてあげたり…。

昴くんは私の膝枕で、ぐっすり寝てしまった時もあった。しばらくその寝顔が可愛くて、そのままにして眺めていたが、さすがに足がしびれて、起きてもらった。

どんな昴くんも愛しくて、可愛くて、見逃したくないと思う。

昴くんの洗濯物を干したり、たたんだりしてて、それがめちゃくちゃ愛しくなり、ギュって抱きしめたりする。そんな私を見て、昴くんが後ろから抱きしめてきたことがあった。

『そういうの、めちゃ可愛いんだよね』

って心で言いながら。昴くんはほとんど心の中を全開にしてて、私はよく真っ赤になっていた。そのたびに笑われた。

だって、本当に、度肝を抜くようなそんなことを思ってるんだもの…。

「しょうがないじゃん。男なんだから、俺も…」

と言われるけど、聞こえるのがいいのか悪いのか、考えものだ。

「隠してたのずるいって言ってたの、ひかりでしょ？」

「そうだけど」

恥ずかしさで、どうしようってなると、また、昴くんに笑われるんだよね…。

「あはは。ひかり、可愛い～～！」

って…。私もなるべく全開にしてるけど、たまに、

『あ、これ聞かれてたら恥ずかしい』

って思っちゃうことがあって、でも、そんなのも聞かれてて、

『もう、聞こえちゃってるから』

って昴くんは心で言って、また笑う。あ～あ。まいっちゃう。全部ばれちゃうし、全部、昴くんに笑われてしまう。

だけど、昴くんが調子が悪い時や、無理をしてる時も、口であまり昴くんは言わないから、心を全開にしてくれてるおかげで、そうい

うのがわかり助かった。

そんな時は、いつもの倍光で包んだり、食事に気をつけたり、昴くんがゆっくりと休養ができるように配慮が出来る。それは、私が具合が悪い時も一緒で、昴くんがすぐに察知するから、

「あ。ひかり、今調子悪いんだね。ゆっくりしてていいよ」

って言ってくれる。

二人して、風邪気味でダウンした時は、早々と薬をのんで寝て、夢の中でじゃれあった。

「こういう時に、一緒の夢を見れるっていいよね」

昴くんは、夢の中ではしゃぎながら言ってきた。

「うん。夢の中じゃ、風邪も関係ないしね」

はしゃいでる昴くんはいつも、しっぽがはえている。そしてぐるんぐるん振りまわっている。

「ひかりもしっぽ、はやしてみたらいいのに」

ってにこにこしながら言ってくるけど、どうしたらしっぽなんてはえるんだか？

「夢なんだから、なんだってできるじゃんか」

そうだけど…。ま、いっか。しっぽがはえてる昴くんが可愛いから、

それはそれで。

季節が冬から春に変わりかけた頃、

「そろそろ出版だっけ？」

カレンダーを見ながら、昴くんが聞いてきた。

「うん。３月２８日に出版だよ」

「映画の撮影も始まるよ。台本も出来上がったんだ」

「見たい！」

「いいよ。はい」

昴くんは鞄から、台本を出してきた。

「ラブシーン、けっこうあるんだよ」

「え？そうなの？」

「え？そうなの？じゃないよ。ひかりの小説を忠実に台本にしてるんだよ？ひかりの小説、けっこうラブシーン多いじゃん」

「そうだっけ？」

「うん。あ、キスシーンとか、そういうのだけどさ」

「そうだよね。ベッドシーンってなかった気がする。なんだか、書くのが恥ずかしかったし」

「え？それでなかったの？」

「うん」

「そっか。うん、ベッドシーンはないよ」

「昴くん、台本読んだの？」

「帰りの車で読んだだけ。今日もらったんだもん」

「そっか…」

「製作発表、もうすぐあるけどさ…。ひかりどうするの？」

「何が？」

「プロデューサーや、監督から何も聞いてない？」

「製作発表に出るかどうか聞かれた。でも、名前も顔もふせておいてもらうってことにしたから」

「そっか…」

「ペンネームの空野いのりで、ずっといくよ」

「うん、わかった」

「楽しみだな。製作発表。テレビで見れる？」

「どうかな。ワイドショーとかでやるかな」

「ワイドショーか…。苦手だな」

「ひかりテレビ見ないもんね」

「うん…。どうもね、暗い話題とか、駄目なんだ」

「黒い霧出るしね…。だけど、前よりかずっと減ってるよ。気づかない？」

「そうなの？」

「悟さんも言ってた。メディア関係者も、どんどん目覚めてるって。瞑想の本が今度出版されるって言ってたよ」

「瞑想の？」

「白河さんのこともその本に、載るらしいよ」

「え？すごいね！」

「うん」

そっか。目覚めてる人、本当に多いんだ…。

「俺のドラマは観たよね？」

「観たよ。もちろん。すんごい光だしてたよね」

「うん。また、内容もすごかったからさ」

そうなんだよね。昴くんが出演したドラマ、2時間の特番だったんだけど、けっこうすごい役柄だったんだよね。

内容は普通の、ヒューマンドラマなんだけど、昴くんは、交通事故で車椅子の生活をすることになった女の子のお兄さんの役。

主役はその女の子なんだけど、お兄さんが運転してた車で事故を起こして、女の子は足が不自由になっちゃう。その妹のために、懸命にお兄さんが尽くして、かたくなになってた、女の子の心がだんだんと開いていくっていう、そんなドラマで、家族愛がテーマになってるドラマなんだよね…。

「あれ、泣いたよ～～」

「え？ほんとに？」

「うん。ボロ泣きした」

「へへ…。俺の演技すごいしね…」

「主役の子、うまかったよね」

「そっち～～？俺じゃなくて～？」

「あはは。うそうそ。昴くんもすごくいい演技してたってば」

「なんだよ、ちぇ～～。とってつけたようなその褒め方…。まあ、いいけどさ～～。ほんとに歩美ちゃんは上手だから」

「歩美ちゃんって呼んでるの？」

「うん」

「今、高校生なの？あの子。」

「うん。高校1年生だっけな」

「ふ～～ん…」

「…やきもち？」

「ち、違うよ！」

「あれ？素直じゃないね。今、一瞬、俺が歩美ちゃんに惚れたらどうしようって思ってたじゃん」

「お、思ってない…よ。多分」

「あはは！無意識か～～」

「思ってた？私…」

「うん、聞こえたもん」

うそ～～…。

「でも、俺ほら年上好みだし、安心して。なんか、ほんとの妹みたいな感覚しかないから」

「う〜〜」

「何？そのう〜〜って…」

なんだか、いつも私ばかりが妬いてるみたい。

「え？」

「なんでもない」

そう言って目をふせてると、昴くんは抱きついてきて、

「すねてるひかりも、めちゃ可愛い」

って言って、キスをしてきた。ああ…、もう。昴くんにはかなわないよ、ほんとうに…。昴くんのキスで、私はすぐにメロメロになっちゃう。

それも昴くんにみんなばれてる。私の表情を見て、私の心の声を聞いて、昴くんはにやけるんだよね、いつも。

『にやけてる？俺？』

『うん、思い切り』

『まじで〜〜？』

『まじで…』

『そ、そうか。気をつけよう、これから』

『なんで？』

『にやけ顔は、やばいっしょ？』

『ふふ、別に…』

『え？』

『どんな昴くんも、可愛いし』

昴くんは真っ赤になった。

そんなこんなで、一緒に暮らしだしてもうだいぶ立つのに、私たちはいまだに、いちゃいちゃしている。

それから4日後、製作発表が行なわれ、ワイドショーでその様子が流れた。昴くんは、めちゃかっこよかったし、相手役の菅原エリカはすごく奇麗だった。

昴くんはその日の夜中、家に帰ってくるなり、

「観た？ワイドショーでやってたでしょ？」

といきなり、聞いてきた。

「うん。かっこよかったよ。昴くん」

「ほんと？」

「うん。なんだかもう、圭介ぽかった」

「まじ？うん。ちょっとなりきってみた…。なんてね」

「菅原エリカ奇麗だったね」

「うん。なんか、何話していいかわかんないんだよね、いつも」

「そうなの？」

「うん。俺、すごい子ども扱いされてるし」

へえ。わかってるんだ。

「何を？」

「え？」

「俺はガキだってこと？」

「え？私そんなこと思ってた？」

「思ってたよ！今のは思い切り思ってたでしょ！」

「え？そうかな～。無意識だ」

『ずっこい、無意識って言えばすむと思ってる…』

「子どもっぽいところが、可愛いのに。その辺をわかってないんだよ、きっと」

「……」

昴くんはまだ、すねていた。

「昴くん！もしかして、菅原エリカに気に入られたいの？」

「別に！」

「じゃ、いいじゃない。子ども扱いされてもなんでも」

「いいけど！」

すねてる昴くんの背中を、思い切り抱きしめた。

「あ、そうだ。明日さ、俺、ラジオ出るんだよね。言ってたっけ？」

「ううん」

「エリカさん、ラジオ番組あるんだ。それにゲストで出る」

「生？」

「うん。だから聞いててね。いっぱいひかりに愛を送っちゃうから」

「うん」

「へっへ～～」

「何？そのへっへ～～って。あ、もしかして、エリカさんとラジオ出れて喜んでる？」

「え～？俺の心の声、聞いてないの？」

私は黙って、昴くんに集中した。そうしたら、

『また、ひかりのことといろいろ、ばらしちゃおう』

って言ってた。

「だ、駄目だよ！もう。誰が聞いてるかわからないんだよ？」

「べっつにいいじゃんか、誰が聞いてても」

「駄目。一緒に暮らしてることとか、ばらしちゃ駄目だからね」

そう、私たちが一緒に暮らしてることは、事務所の人にだってまだ、隠してるんだから。

「はいはい。そのへんはちゃんと内緒にしておきます」

昴くんは、そう言うとぐるりとこっちを向いて、抱きしめてきて、

「ひかりがずっと抱きしめてたから、その気になりました」

って言って、押し倒してきた。

ああ。それ、夢の中の昴くんじゃない…。

『いいの。夢でも現実でも、その気になるんだよ』

そして私たちは抱き合って、また魂で同化して、ものすごい光を出し地球を包み込んだ。そして体に魂が戻ると、昴くんはにっこりと笑って、

「今日のミッション、終了」

と言った。そうだね…。私たちが愛し合うとすごい光を放って、地球を包み込んじゃうもんね…。

翌日の深夜０時ジャスト、菅原エリカのラジオ番組の放送が始まった。

すぐに昴くんは、ゲストで登場した。

「『今このときを愛してる』の映画で、ご一緒している、天宮昴くんがゲストで来てくれました」

菅原エリカのラジオは初めて聞いたが、声まで大人な女の人で色っぽい。

「こんばんは。よろしくお願いします」

昴くんの声だ。なんだか、緊張しているようだ。

「こんばんは～～。今日も撮影あったけど、お疲れ様でした」

「はい。お疲れ様です。エリカさん、すごいですね。撮影の合間に、この時間にラジオしてるんですもんね」

「週一回だし。そんなに大変じゃないのよ」

ああ、なんだか確かに、話し方がお姉さんっぽい感じだ。

「そうかな。俺、撮影終わったら、すぐ家に帰って寝ちゃいますよ。バッタンキュ～～って」

あ、それは本当だ。ハードな撮影だと、昴くんはお風呂に入って出て、即行寝てしまう。ただし、夢の中ではめちゃ元気で、抱きついてくるけど…。

「バッタンキュ～？あはは…。それはきっと、若い証拠ね」

「ええ？そうですか？」

昴くんは、ちょっと返答に困ってるようだった。

「昴くんは、どう？今度の役…。圭介と昴くんって、どうなの？似ているの？」

「そうですね。似ているところもあります。ちょっと能天気っていうか、おちゃらけちゃうところとか」

「え？そう？現場では、そんなでもないよね。けっこう真剣で、いつも静かで」

「あ…、初めだからまだ、猫かぶってます」

「あら、そうなの～～？ふふふ。じゃ、本性が出るのが楽しみね」

「エリカさんはどうなんですか？瑞希と似てますか？」

「まったく正反対かも」

「え？そうなんですか？でも見た感じは、ぴったりかなって思いますけど」

「性格は全然違う。私、人見知りもしないし、いつでも強気だし、好きな人が出来たら、どんどんアプローチしちゃうし」

「肉食女子ですか？」

「そうね。そうかもしれない」

「意外ですね」

「そう？大人しく見えた？」

「いえ。でも、自分からどんどんいくタイプには見えませんでした」

「そう？あの瑞希って私が思うに、作者の空野いのりさんに似ているんじゃないかしらね？」

「え？どうしてそう思うんですか？」

「空野いのりさんが、今書いてる小説も読んでるんだけど、その主人公の女性も瑞希に似ている。きっと、自分がモデルなんじゃない？」

『うん。するどい』

昴くんの心の声がした。

「昴くんは、瑞希みたいな女性タイプ？」

「え？俺っすか？はい、そうですね」

「年上の彼女いるんだよね～～。私とあまり年、変わらないんじゃない？」

「はい」

「そんな年上だと、甘えさせてくれるのかな？」

「ああ…。はい」

「あら？間があったけど…」

「いや、あの…。俺、いや僕は、なんか相当な甘えん坊らしくて」

「あら、そうなの？」

「いつも子どもっぽいとか、ガキだって言われてます」

『言ってる？私…！？』

「そういうところが、その人は好きなんじゃないの？私は、ちょっと年下の人苦手だけど」

「え？」

「自分が甘えたい方だから」

「あ。ああ、そうなんすか」

「じゃ、昴くんは甘えてきたりされるのが、苦手なんだ」

「いいえ。甘えてきてくれたら、嬉しいっす。すごく」

「え？そうなの？」

「あ…。たまになんすけど、甘えてくるから…。そういうとき、けっこう嬉しくて」

「そうなの。彼女甘えたりするんだ」

「たまにです」

「ふうん。でもいつもは、大人な感じなのね？」

「いいえ。まったく」

「え？」

『え？！！何を言う気？』

「子どもっぽいですよ、たまに俺よりも…。やきもちやきだし、すねるし…。そういうところが可愛いんですけど」

『昴くん～～～！何を言い出すのよ～～～！！！！！』

「わあ。そうなの？聞いててこっちが赤面だわ」

「あ、すみません。つい…」

「そろそろ、映画の話に戻るけど…。もし、昴くんがこの圭介みたいに、自分がもうすぐ死ぬかもしれないってなったら、どうする？」

「そうですね。う〜ん、一緒かな？」

「え？」

「俺も、愛してる人と、今っていう時を思い切り生きますね」

「別れるよりも、共に生きるほうを選ぶ？」

「はい」

「もし、逆だったら？」

「立場がですか？それでも一緒です。共に生きます。愛してる人と絶対に、離れたりしません。一緒に喜びも、悲しみも、苦しみも全部を、共有して、愛して生きていくと思います」

そう昴くんが言うと、ラジオからものすごい光が飛び出してきた。
それはすごい勢いで、辺り1面を包み込んだ。

「昴くんって、すごいのね」

「え？何がですか？」

「そういうのを言い切ってしまうところがよ」

「そうですか？え？エリカさんは違うんですか？」

「私は苦しんだり、悲しんだりは嫌かな…」

「だけど本当に愛してたら、どんな相手も愛すと思うし…、共にいたい、ずっといたいって思いますよ、きっと…」

「そんな相手に会ってないんだわね、きっとまだ…」

「うん、そうかも」

「昴くんは会ってるんだね」

「はい」

「それじゃ、圭介の思いは、昴くん思い切りわかるんだ」

「そうですね。だけど一回圭介は、瑞希のもとを去ろうとするじゃないですか」

「うん。自分の命が短いと知ってね」

「俺、あれはしないと思います」

「え？どうして？」

「う〜〜ん。きっと、そうだったら、素直に言うと思うんですよね。自分の命がもう長くないって」

「それで？」

「それでも相手を愛してて、ずっと愛してて…。ただ、もし、俺が一緒にいることが相手を不幸にすることなら、離れます」

「え？」

「でも、相手も俺と一緒にいることを選んでくれるなら、一緒にいます」

「……」

「相手に何も言わず、相手の思いも聞かず、勝手に別れるようなことはきっとしません」

「どうして？好きな人を苦しめるかもしれないのに？」

「もし、逆の立場だったら、俺、絶対に打ち明けて欲しいって思うんですよね」

「……」

「俺、命が短いってことを知っても、それでもそばにいて愛していくと思います。相手が黙って去ったりしたら、そっちの方がつらいですよ、きっと」

昴くんがそう言うと、すごい光が飛び出した。私は、なんだか感動してしまった。涙が思わず溢れ出てきた。

「きっと、相手もそう思うんじゃないかって、そんな気がします。黙って去ったりしたら、きっとつらいですよ」

「そうか。すごいね。すごい信頼関係って言うか…」

「はい。すんげえ、愛し合ってるから、俺ら…」

また、昴くんからものすごい光が飛び出した。

「それ、今お付き合いしてる人とってことよね？」

「え？はい…。あ、すみません。また話がそっちにそれた…。えっと、映画ですね！今、撮影進んでて、夏に公開になります。あ、主題歌も決まったんですよね？」

「そうそう。素敵な曲。挿入歌は小説の中にも出てくる、ＨＡＮＡＢＩ」

「はい。いい歌ですよね」

「じゃあ、その曲を今、かけましょうか？」

「はい。お願いします」

「では、ミスターチルドレンで、ＨＡＮＡＢＩ。お聞きください」

ＨＡＮＡＢＩが流れた。この曲を聴いてたときに、ちょうど小説を書いてて、ぴったりだなって思ったんだよね…。

『ひかり？俺の声聞こえる？』

『聞こえるよ』

『ごめん、なんか思い切り、すごいこと俺言ってたよね？』

『顔から火、出たよ』

『俺も！思い出して、今、顔あっつい…』

『あはは！昴くんでも照れるの？』

『う…。そりゃ、まあ。その…。あ、エリカさん話しかけてきたから、またね』

歌が終わるとＣＭになった。ＣＭあけに、すぐまた昴くんが紹介された。

「今日のゲストは、天宮昴くんです」

「こんばんは」

「ここらか聞いた方、もう大変ですよ！昴くんは、ずっと彼女とのこと、のろけっぱなしなんです」

「ああ！すみません。もうしません」

「あはは…。いいんだけどね。一人身の人にはつらいかな」

「え？そうなんですか？」

「彼女が羨ましいわ」

「えっと…」

昴くんは困った感じで黙ったが、その間にも光を思い切り出し、エリカさんから出た黒い霧を一気に消した。

「そうだ。空野いのりさんは、実名も顔もふせてて、私たちも会ったことがないんだけど、昴くんの好みのタイプなんじゃない？どうする？もし会っちゃったら」

「え？そうですね。多分、俺の好みかもしれないですよね」

「そうしたら、どうする？好きになったりしない？」

「う、う～～ん。どうするかな？わからないっす」

昴くんは、心の中では、

『ひかりだもん。好きに決まってるじゃん』

って言ってたけど、困った振りをしていた。

「あれれ～～？そんなことで動揺してたら、これ、もし彼女が聞いてたら、妬くんじゃないの？」

「ああ…。あはは…」

昴くんは笑ってごまかしていた。

「さて…、あんまりのろけてばかりだから、ちょっといじめてみました。でも、これで喧嘩はしないでね。それも私のせいにはしないでね」

「あはは。大丈夫っす。喧嘩したことないから」

「え？」

「あ…。喧嘩っていうか、すねたりってのはありますけど、どっちかが、すぐに折れる…。あ、違うか。どっちかがすねると、それも可愛いって言って、喧嘩にならない…」

「わかった！ストップ！もういい。のろけはたくさんです。さ、もう帰ってもらいましょうか！ファンの人も、たまらないかもよ。そののろけ…」

「あ…。すみません」

昴くんは本当に、申し訳なさそうにそう言ってた。

「今日のゲストは、天宮昴くんでした。まだまだ彼女とアツアツの…。まだ、撮影始まったばかりだし、これからもよろしくね」

「はい」

「頑張っていい映画にしていきましょう」

「はい、よろしくお願いします。あと、ぜひ、すごくいい映画なので、楽しみにしていてください」

「そうよね、昴くん一押しの小説だったんだものね。台本読んだけど、泣ける感動の映画です。楽しみにしててくださいね。では、天宮昴くんでした～」

そしてまた、ＣＭにいった。そのあともずっと、ラジオは続いたけど、昴くんが心で話しかけてきた。

『ひかり～。今からタクシーで帰る』

『うん。お疲れ様』

『帰ったら即行、風呂はいる』

『あっためておくね』

『そうしたら、即行、寝る』

『ふふ。バタンキュ～でしょ？』

『で、寝たらひかりとめっちゃ、愛し合う』

『……』

ほんとにもう～～…。そういうことろが、子どもっぽい？甘えん坊なところ…？まあ、いいんだけど、そういうところも、可愛いから。

『でしょ？』

『でしょって何？自分で言うかな、もう～～』

ふ…。昴くんの声が消えた。エネルギーを集中すると寝てた。タクシーに乗り、寝てしまったようだった。

『ひかり～…。ただいま～』

３０分して、すごい眠そうな声が聞こえた。

『おかえり』

そう言って、私はドアを開けに行った。昴くんは眠そうな目をこすりながら、玄関に入った。

「風呂、入ってくる」

昴くんはそう言うと、お風呂に入りに行った。あまり長いときには、気をつけてないと寝てるときがある。この前も、バスタブの中で、ぐーすか寝ていたことがあった。

よく今まで一人暮らしで、大丈夫だったねって心で言ったら、一人だったから、その辺は気をつけていたって返答があった。どうやら、私と一緒に暮らすようになり、ものすごい安心感があるらしい。

お風呂からあがると、いつものように歯ブラシを口につっこみ、バスタオルで頭をゴシゴシしながら部屋に来て、ぼけ〜〜ってしながらしばらく歯を磨いていた。何を考えてるんだろうと思って、意識を集中したら、まったく真っ白けだった。

あ、なんにも考えてないんだ…。少しして、

『ね、眠い…』

って声と、それから、

『ああ。俺、ラジオですごいこと言ってたよね…』

って声がした。

「うん、赤面ものだったよ」

って言うと、昴くんはすっくと立ち上がり、口をゆすいで戻ってきて、

「おやすみ」

と、ベッドにうつ伏せで倒れこんだ。

「髪、全然乾いてないよ！風邪ひいちゃうよ」

「乾かして～～」

しょうがないな～～。

ドライヤーを持ってきて、昴くんをベッドに座らせ乾かしてあげると、半分くらい乾いたところで、

「も、駄目…」

と言って、倒れこんだ。そして、すぐにグ～～って寝てしまった。

相当、疲れてるようだ。撮影、ハードなのかな…。半乾きだと、翌日、本当に髪がすごいことになってるんだけどな～。

私も、昴くんの隣に潜り込み、眠りに着いた。

「ひかり。今寝たの？」

夢の中で昴くんは、海を見ていた。

「うん。ここ、江ノ島？」

「うん。高校1年の時にね、来たんだ。撮影でさ」

「観たよ、その映画。サーフィンの映画だよね」

「うん。また、ここで撮影があるんだ」

「『今このときを愛してる』の撮影でしょ？」

「そう、圭介と瑞希が、デートする場面」

「ふうん」

「俺、この撮影終わったら免許取るから、そうしたらドライブに来ようね」

「うん」

「あ～～。なんか潮の香りがする。それに、風も気持ちいいね。夢なのにね」

「うん」

「ひかり」

昴くんが抱きついてきて、キスをした。

「わ！こんなところで…」

「え?でも、夢じゃん」

ああ…。そうか…。

「あれ?昴くん、髪の毛濡れてない?」

「あ。半分しか乾かしてないから」

「でも、これ夢だよ」

「あ~~、そうか。なんで夢なのに、髪濡れてるかな?」

「ふふ…。変だよね~~」

昴くんはそのまま、私を押し倒してきた。

「あれ?部屋じゃないの?」

「え?」

「だって、いつもこういう時は昴くんの部屋にならない?」

「うん、でも今日は海、気持ちいいからここでいいや」

えええ~~?!思わず、私は慌ててしまった。

でもその時、どこからともなく、ボーダーコリーが走ってきて、それを見た昴くんが、

「あ！クロ！」

って言って、追いかけていった。「今このときを愛してる」に出てくる犬だ…。ああ、また、映画と夢と、ごっちゃになってるなあ…。

昴くんは思い切り早く犬と走り回り、楽しそうだった。そして、息をまったく切らすこともなく戻ってきて、

「犬もいいね。猫も可愛いけどさ」

って満足そうに笑った。

3月28日、本が出版されると同時に、すごい売れ行きであっという間に1万部を超えた。

その後、「2012年　愛と光の地球」も出版が決まり、担当者がつき、早速ゲラ刷りが送られてきた。

「これ、けっこう苦手…」

何度もチェックをするんだけど、たまに寝ちゃう時がある。

昴くんは、その頃撮影に追われていた。私の小説は、桜だったり、若葉だったり、初夏の海だったり、そんな場面があって、桜の時期や若葉の公園の場面を先に撮影したり、そのあとに海の場面を撮ったりして、順番が逆転していることもあり、けっこう昴くんは大変なようだった。

出会いのシーンや、はじめにデートをするシーンを撮る前に、出産

や出産目前のシーンを撮らないとならない。気持ちの持ちようだったり、入れ方だったり、そういうのがすごく難しいようだった。

でもそういうのも、すごい集中力でこなしていくようで、その集中するパワーを使い果たし、疲れきって家に帰ってくるのだ。そんな時には、もうヘロヘロで甘えてくる。

「ひ〜〜か〜〜り〜〜〜〜。一緒に風呂入って〜〜」

疲れてるんだから、一人でゆっくりと入りたくないのかなって思っていると、

「髪、洗って」

と甘えてくる。もう、3歳児か！君は〜〜って思いつつも、洗ってあげてしまう。それから、爪を切ってあげたり、耳掃除をしてあげたり。

昴くんは、気持ちよさそうにして眠気眼だけど、台詞を覚えないとならない日は別だった。お風呂に入って出てくると、顔を思い切り洗い、苦そうな濃いコーヒーを飲んで、

「お、ぼ、え、る、ぞ！」

と気合を入れ、リビングにどっかと座り込んで黙り込む。

声もかけられない…。その集中力はすさまじく、こりゃ、こんな集中力で撮影してたら、力使い果たすのも無理はないって、本当にそう思う。だけど、そんな昴くんを見ているのも幸せで、その横で私はしばらく、ぼ〜〜ってしている。

眺めていても、みとれていても、まったく昴くんの目には映らないようで、私に関係なく台詞を覚えている。

でもしばらくして、伸びをしたりコーヒーを飲むと、私のことを見て光を送ってくる。

「ひかり、俺といちゃつけなくて、寂しい？」

「え？ううん。なんで？」

「なんだ～。ちぇ。嘘でもそこは、寂しい、昴くんのばかばかばかって言ってくれなきゃ」

と笑って言う。

「え～。もう、いいから、続き覚えたら？」

「なんだよ、せっかくひかりとの会話を楽しもうと思ってたのに」

「それは嬉しいけど、でも、私は昴くんのこと、見ていられるだけで幸せだから」

そう本心を言うと、昴くんは少し顔を赤くして、

「そっか…。そうだよね」

って言って、また台本の方に集中し出した。

昴くんのオーラを感じて、昴くんの匂いを感じて、昴くんの息遣い

を感じられたら、それだけで、本当に満足だ。昴くんといるその空間は、めちゃくちゃ、幸せな空間だった。

7月、梅雨が明ける前、映画が公開になった。

公開前に試写会があり、昴くんはその日、舞台挨拶をした。その日私と葉月ちゃん、それに珠代ちゃんも、昴くんが試写会に招待してくれて見に行った。

昴くんが登場すると、会場からものすごい声援。挨拶をしても、ものすごい黄色い声…。

「すごい人気だよね」

と葉月ちゃんが言うと、

「本当だね。でもわかるよ。昴くん、めっちゃかっこいいもの」

と珠代ちゃんが言った。

確かに…。舞台で挨拶をして、手を振る昴くんは、今日おしゃれなスーツ姿。もう年齢も20歳になり、大人っぽくなっていた。いつもの子どもらしさがなく、セクシーさも出てかっこよかった。

その横で、菅原エリカもまた色っぽかった。

「菅原エリカも奇麗だよね～～」

葉月ちゃんがそう言うと、

「でも、絶対に星野さんと昴くんの方が、お似合いです」

と珠代ちゃんが言った。

舞台挨拶はあっという間に終わり、それから映画が始まった。昴くんたち出演者も、1番前の席に座り、試写会を見ていた。

途中から、鼻をすする音が聞こえ出した。隣に座ってる葉月ちゃんや、珠代ちゃんも泣いていて、目にハンカチを当てていた。私も我慢していたけど、途中からボロボロ泣いてしまった。ああ。私が書いたストーリーだと言うのに…。

だけど、俳優陣の演技も脚本もすばらしく、特に昴くんの自分の死を知って、がくぜんとするところや、瑞希に嘘をついて、あとで苦しむ姿は胸が痛くなった。

菅原エリカの演技も素晴らしくて、何度も何度も涙を誘われた。

ラブシーンはさすがに、直視できなかったけど、嫉妬ではなくて、こんなふうにいつも昴くんにキスされてるのかなって思ったら、思い切り恥ずかしくなって見れなくなった。

映画が終わると、ものすごい拍手。なかなかなりやまなかった。私も思い切り、拍手をした。

出演者が、舞台の前でこちらを向き頭を下げて、監督からまたお礼の言葉があり、それから主演の昴くんからも一言と言われて、

「あの、実は映画全部を見たのは、僕も初めてです。感動しました。

泣いちゃいました…。皆さん、拍手をありがとうございます。もし良かったらまた、映画館に足を運んで観て下さい」

と、笑いながらそう言った。すると、また会場中から拍手と黄色い声。

「昴くん、かっこよかった～」

とか、

「感動して泣いたよ～～」

とか、そんな声援が飛んだ。

昴くんは、もう一回ぺこって深くお辞儀をして顔を上げると、にこにこしながらみんなに手を振った。ものすごい光も飛び出してて、会場が光で覆われていた。

映画からもすごい光が飛び出していた。昴くん、いつでも光を出して、すべてを包み込んでいるんだな。私も見習わないとな…。って思っていると、

『ひかりもすごい光、出してるよ』

って声がした。昴くんの方を見ると、私の方を見てにこって笑った。

「ひかりさん、今、心で会話してたでしょ？」

と隣で、葉月ちゃんがつついてきた。

「え？なんでわかるの？」

「見つめあって笑ってたら、わかりますって」

葉月ちゃんにそう言われて、なんだか照れくさくなった。

「今度、映画館にも悟くんと観にいきますね」

「え？悟くんと？」

「今日は仕事でどうしても、来れなかったって。すごくこの映画、悟くんも楽しみにしてるんですよ」

葉月ちゃんが、そう言ってくれて嬉しかった。

会場を出ると、試写会を観た人たちが、

「良かったね～～。私、また観にいこう」

なんて会話をしていた。みんな、映画感動したんだな…。嬉しいな…。

映画が公開されるとすぐに、薫や、美里がメールをくれた。

＞観たよ。素晴らしい映画だね。本も買って読んだけど、ひかり、すごいわ。

＞昴くん、いい演技してたね。映画、泣いちゃったよ。

それに兄からも、徹郎からも、緒方さんからもメールが来て、映画、

素晴らしかったと書いてあった。

ノエルさんから電話も来た。あの映画は、ものすごい光を出していて、多くの闇のエネルギーを浄化していますね…。そんなことを言ってくれた。

昴くんは、映画のキャンペーンで、日本中を回ったりテレビで宣伝したり、しばらく忙しかった。でも、どこでも昴くんは光を出していて、それが画面から飛び出し辺りを包み込んでいた。きっと映画館もいつも、光で満たされているんだろうな…。

映画はものすごいヒットをして、あっという間に、ランキングの1位になっていた。テレビでもCMが流れ、ポスターも貼られてて、どこにいてもいつでも、昴くんの顔を見れるほどだった。

公開から1週間して落ち着いてきて、昴くんは1日オフが取れた。前々から、白河さんが本山の瞑想の会に、参加しませんかって誘ってくれていたので、その日、二人で行くことにした。

久しぶりに、みんなと会う。昴くんと私は、漆原さんの車に乗せてもらい、流音さんも一緒に本山に行った。途中、漆原さんと流音さんも映画を観たという話になり、車中は盛り上がった。

「すごいね、あの映画は。昴からの光がとにかくすごい」

漆原さんは、すごいを連発していた。

「あの映画を観た人も、ひかりさんの本を読んだ人も、あっという間に闇を浄化できちゃうんじゃない？ひかりさんの本も、すごい光が出てるわよね」

流音さんがそう言ってくれた。

「感想が俺のブログにも、ひかりの小説のサイトにも書かれてるんですけど、けっこう今に生きるようにしていますっていうコメント、多いんですよね」

昴くんがそう言った。

「今に生きる…。それが大事だもんな。あの小説も映画も、そのメッセージが強い」

漆原さんがそう言うと、

「それに、無償の愛よね。相手のすべてを受け入れ愛す…」

流音さんがそう付け加えた。

「あ、そういったコメントも多いです。圭介と瑞希のような、恋愛がしたい。すべてを愛し、受け入れられるような、そんな相手と出会いたいって…」

私がそう言うと、

「俺のブログには、昴くんと彼女みたいな恋愛がしたいって、コメント書かれてるよ」

と、昴くんはちょっと嬉しそうに言った。

「ああ、菅原エリカのラジオ番組、聞いてたよ。昴がゲストで出て

たやつ。お前思い切り、のろけてたよな～。あはは…」

漆原さんが笑いながらそう言った。

「でもね、そのたびにすごい光が飛び出てたわよね」

流音さんもそう言うと、笑っていた。

「う～～ん。なんで、のろけちゃうのかな。俺…。でも、光が出てるんだから、いいよね？」

昴くんが少し照れくさそうにそう言って、私の手を握ってきた。

『のろけてるつもりはないんだよね。ただ、本当のこと言ってるだけなんだけどさ』

昴くんは心で私に話しかけてきた。

『ふふ…。そうだよね。でも、やっぱり聞いてて、恥ずかしかったよ～』

『そう？』

『でも、ああいうこと、普通にみんなが話すような、そんな時代になるんだよね』

『ああ、そうそう。そうなるって思うよ、俺も』

昴くんはにこって微笑んで、私を見た。

本山に着き広間に行くと、たくさんの知った人がいて、私たちは喜んだ。夏樹くん、春彦くん、それに冬美さんもいた。珠代ちゃんと、陽平くんも来ていた。白河さんやノエルさんとも久々の再会だった。

「いらっしゃい。待っていましたよ」

白河さんが優しく出迎えてくれた。

「ひかりさん、昴くん、映画観ましたよ」

夏樹くんが、話しかけてきた。

「すごいですね、あれは…。ものすごい光が出てて、観てる人の闇を包み込んでしまう」

「うん。僕も観たけど、感動しました」

春彦くんも大きくうなづきながら、そう言った。

「ありがとうございます」

昴くんはぺこって頭を下げた。

「ひかりさんの『２０１２年　愛と光の地球』も、もうすぐ出版されるんだそうだね」

白河さんが聞いてきた。

「はい。今、印刷しています。８月頭には出る予定です」

「そうか…。楽しみだね」

「白河さんも、瞑想の本出版されるんですよね？」

昴くんがそう聞くと、

「うん。前に瞑想の本に、ここが紹介されてね…。それから、大手の出版社が本を出さないかと言ってきた。瞑想の会に来る人も、目覚める人も、本当に増えたんだよ」

と白河さんが答えた。

「白河さんのブログもすごいですよね。毎日、1万以上のアクセスがあって」

「今日も、多くの人が来ているよ。さあ、そろそろ中庭に移動しようか」

白河さんにそう言われて、私たちは中庭へと移動した。

板の間には、もうすでに数十人の人が座っていた。私たちも、板の間にあがりみんなで座った。白河さんが何かを唱え、それからしばらくすると、ものすごい光に包まれた。

私はその光と同化して、そのうちに自分という意識が消えてなくなった。そこには、ただ広がる世界…。

辺りはしんと静まり返っていて、その空間のすべてを同時に感じていた。ものすごく冴えていて、空の色、辺りの匂い、中庭にある木の緑、空を飛んでいく鳥、隣の人の呼吸、自分の心臓の音、すべて

が感じ取れた。

私はいなかった。でもすべてが私だった。そう…、分離感がなくなり大いなるひとつになっていた。

その時、どこからともなく声が聞こえてきた。

『地球の波動が変わりましたね』

私の声だった。

『あなたには、選択することが出来ますよ。高い次元に戻り私と同化して光になることも出来ます。そして、そのまま地球で、ひかりとして、生きていくこともできます』

『…あなたは、高い次元の、私？』

『はい。そうです』

私のこの次元よりも、もっと高い次元の私からの呼びかけだった。驚いた。初めてだ…。

『ひかり。あなたが感じたこと、体験したことを、私も一緒に体験し、感じていました』

『え？』

『素晴らしい愛の体験でしたね。その愛を知るために、あなたは、地球に行きました。そして、愛をすべてに送り、包み込み、地球を愛の星へと変化させていきました』

『はい。それが私と昴くんのミッションでした。あ、じゃあ、もうミッションクリアですか？』

『いいえ』

『まだなんですね？』

『まだでもないし、クリアでもありません』

『どういうこと？』

『あなたは、もともと愛と光の存在で、愛と光を送り出していました。つねに』

『え？』

『いまここで、つねに、そして永遠に…。はじめからミッションが遂行されていたといえば、遂行されていましたし、そんなミッションはなかったといえば、なかったのです』

『え？』

『あなたは、もともとそれをしていたのですから。そしてこれからも、ずっと』

『……』

『あなたは、本来のあなたに戻っただけですよ。ひかり…』

『本来の私に？』

『ええ。そしてこれからも、ずっとあなたでい続けるでしょう』

『愛と光の私？』

『ええ』

『……』

ミッションはつねに遂行されてる。これからもずっと。ううん。ミッションも何も、私がその愛と光そのものなんだ。だから、もともとミッションなんてない…。

『そうです、ひかり』

『地球も愛と光そのもので、宇宙も愛と光そのもので、今まで変わったこともなければ、これからも永遠に愛と光なんですね』

『そうです。つねにいまここで、あなたも、すべての存在も愛と光です。それ以上もない、それ以下もない。すべてが愛と光です』

「……」

そうか…。ずっと、幻想を見ていたんだ。今までの苦しみも、悲しみも、出来事も、すべてが幻想だった。

今この時に、創り上げた幻想の中にいた。だけど、本当の真実の私たちの姿は、愛と光だった。そうじゃない存在など、いないのだ。

一回も苦しみの中や、哀しみの中にいたこともない。そんな存在になったこともない。それはすべてが、幻想だったんだ。

『そうです。ひかり。すべてが幻想です。夢の中にいたのです。すっかり目覚めましたね』

『はい』

『目覚めたうえで、もう1度聞きますよ。あなたは、地球で生きることを選択しますか?』

『はい。目覚めた意識で、愛と光の存在として、愛と光の星で生きます』

『どうぞ、新しい波動の地球で、生きることを楽しんでください。私は、あなたと共に、それを体験します』

『はい…』

ストン…。意識が完全に戻ってきた。目を開けると、隣にいた昴くんが同時に私の方を向いた。

『今、高い次元の俺の声がして』

『私も』

『ひかりも?』

『うん。地球で生きることを選択しますかって聞かれた』

『それで？』

『新しい波動の地球で生きるって答えたよ』

『俺もだ』

『ミッションも、はじめからなかったって言われた』

『俺もだよ。もともと愛と光の存在で、もともと俺らは、愛と光を送っていた。そういう存在なんだって』

『幻想だったんだね。すべてが…』

『うん』

『これからは、目を覚ました状態で、この地球で楽しもうね』

『愛と光の存在、そのものでね』

『うん…』

私たちは、宇宙そのものだ…。愛そのものだ…。光そのものだ…。

それはどの存在もそうだ。例外などどこにもいない。

すべてが私で、すべてが愛だ…。

それを感じたら、私も昴くんも泣いていた。

今までも、宇宙だと感じた。すべてが私だって感じたけど、この地

球で起きていたことはすべてが幻想であり、私たちがみんなで見ていた、夢だったと知った。

そして、リアルな、真実の世界は…。無限に広がる、宇宙……。それが私たち……。

大きな意識。愛の意識…。それが、私たち……。

さあ、これからもまた、新しい波動の地球で、素敵な夢を紡いでいく…。

大きな愛の意識のままで、素敵な愛を体験していこう…。

愛を体験することが、宇宙の望みなのだから……。

エピローグ

もうすぐ、２０１２年になる。

私と昴くんは、宇宙船に来ていた。そんな私たちに、声が聞こえた。

『高い次元のひかりと昴…』

私と昴くんの声があわさって聞こえてきた。

『はい…』

私たちは一つの光になり、そう答えた。

『この宇宙船もまた、幻想ですよ』

『え?』

『高い次元のあなたたちが、創りだしたものなのです』

『……』

私たちは、それを思い出していた。今この時に、私たちは、たくさんの次元で、多くのものを生み出す。

そしてそれは瞬時に消えていく。

泡のようなものだ。とてもはかない。瞬時に創り、瞬時に消える。

だけど、創り出すものは常に完璧だ。最高の今を創りだし、最高の

今を体験している。

それがどれだけ、素晴らしいことで、どれだけの奇跡で、どれだけの価値があるもので、どれだけ愛に包まれ、どれだけ感動することか…。

それを私たちは、つねにしているのだ。愛しきものをつねに創造し慈しみ、愛で包み込む。

すぐに消えるはかないものだからこそ、丹精こめて創り上げ、命を吹き込み、慈しむ。それが宇宙の意識なんだ。

そして、地球で生きている私は、その宇宙の意識が、命を瞬時瞬時に吹き込んでくれている、とても、とても、価値のある存在なんだ。

宇宙に愛され、慈しまれ、尊きもの、愛すべきものとして、つねに生まれている。今この時に、今、ここに…。

だから、私は、愛さずにはいられない。この世界にあるすべての存在を…。すべての意識を…。命を…。

だって、それは私であり、私という大きな宇宙意識が創り出した、愛しきものたちなのだから。

それをすべての存在が思い出したら、私たちはどうなるのか…。

地球は本当に愛と光の星になるだろう。

そこで、紡いでいく夢の世界は、がらりと変わるだろう。戦争も、争いも、飢えもない。差別も、憎悪、嫉妬、苦しみ、悲しみもなく

なるだろう。

だってすべてが、愛しきものなのだから。すべてを愛して、慈しむ…。その意識で、創り出して行くものだから。

すべての意識が、神の意識に変わるのだから…。

新しい地球…。愛と光の星……。

波動は上昇する…。アセンションする…。

今ここで、いつもいつも、愛と光で、素晴らしい今を体験しよう…。

『ね、昴くん』

『うん。ひかり』

自分の体に戻った。急に窮屈な感じがした。それは変わらない。

だけど、何かが違う…。そう、街を歩いてても、みんなが光を出し合っている。

笑顔がそこら中にあふれていて、空は輝き、太陽は光り…。木々は青々と茂り、小鳥たちがさえずる。

子どもたちが笑いながら走っていき、空の雲は悠々と流れていく。

私と昴くんは、腕を組んで、街中を歩いていた。時々、振り返る人がいる。

「あ、昴くんだ」

昴くんはにこって微笑む。そうすると相手の人も、微笑み返す。

「昴くん、すごく幸せそう…」

「うん、そりゃもう、いつでも幸せだよ。君は？」

まったく知らない人に、昴くんがそう聞いた。

「私も、すごく幸せ」

その人はそう言って、お辞儀をして、そのまま嬉しそうに歩いていった。

テレビのニュースががらりと変わった。笑顔があふれる画像ばかりだ。そして画面からいつでも、光が飛び出していた。

地球は、変わった。すべての人、すべての存在が今ここで、幸せで満たされていた。

今日は昴くんの車で、ドライブに行こう。江ノ島へ。最近マンションで飼っている、犬を連れて…。

昴くんは思い切り犬と走った。すごい速さで…。

「こんな夢、前に見たっけ」

昴くんは息を切らして私の方に、やってきた。

「でも、夢では息切れしてなかった気がする」

「ふふ…。夢だもん」

「ひかり…」

昴くんは、キスをしてきた。浜辺には、家族連れがいた。離れたところには、カップルもいた。だが、誰も私たちを見ることもなく、それぞれがその時を、楽しんでいる。

キスをしていても、誰にも見られることもなかった。ただ、私たちの足元で、犬がキャンキャン鳴いていた。

「ああ。うるさいよ、ミーちゃん。やきもち妬くなよ」

昴くんがそう言って、

「しょうがないな〜〜」

ってミーちゃんを抱き上げた。あ、ミーちゃんって言うのは、犬、ミニチュアダックスフンドの名前。昴くんが命名した。

昴くんが実家で飼っている猫は、にぼしで、にー坊。かつおぶしでかっちゃんという愛称だが、ミーちゃんは本当の名前は、「ミート」つまり、肉…。愛称が「ミーちゃん」

「え?そんなネーミングで、いいの?」

「いいの、いいの。呼び名がかわいけりゃ、それでいいの」

「……」

ちょっと呆れたけど…、ミーちゃんはやっぱり、お肉が好きな犬になった。

「さ。家に帰ろうか？」

昴くんはミーちゃんを片手で抱っこして、もう片方の手で私と手をつないだ。

ミーちゃんがいたとしても、やっぱり私と昴くんは、べったり、いつもいちゃついてる。これは、きっと、ずっと、一生変わらないんだろうな。

この高い波動に生まれ変わった地球で、もっともっと愛を育み、光を出して地球を包んでいくんだろうな…。

「だって、愛と光の存在だもん、俺らって…」

昴くんがすごい光を出しながら、そう笑った。

さあ…。これからも、愛と光の星で、よろしくね、昴くん。

いつかまた、一つの光になる瞬間（とき）まで…。

終わり～

～

エピローグ（後書き）

長い間、読んでいただき、ありがとうございました。
書き直しもようやく、最後まで出来ました。
番外編もありますので、そちらもお楽しみくださいね。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7660j/

２０１２年　愛と光へ

2011年8月11日08時49分発行